大妻コタカ著

袈裟和服裁縫全書

東京
女子教育社

大妻コタカ著

袵和服裁縫全書

東京
女子教育社

婦人子供服標準寸法表

（メートル尺）

年齢	胸圓	背丈	着丈	桁丈	スローズ丈
ベビー	42糎	20糎	90糎	32糎	
	1尺1寸	5寸3分	2尺4寸	8寸5分	———
2	45糎	23糎	43糎	38糎	20糎
	1尺2寸	6寸	1尺1寸	1尺	5寸5分
3	47糎	24糎	46糎5粍	40糎	23糎
	1尺2寸5分	6寸2分	1尺2寸	1尺0寸5分	6寸
4	49糎	25糎	50糎	42糎	26糎
	1尺3寸	6寸5分	1尺3寸	1尺1寸	7寸
5	51糎	26糎	53糎5粍	44糎	29糎
	1尺3寸5分	6寸8分	1尺4寸	1尺1寸5分	8寸
6	53糎	27糎	57糎	46糎	32糎
	1尺4寸	7寸1分	1尺5寸	1尺2寸	9寸
7	55糎	28糎	60糎5粍	48糎	35糎
	1尺4寸5分	7寸4分	1尺6寸	1尺2寸5分	9寸5分
8	57糎	29糎	64糎	50糎	37糎
	1尺5寸	7寸7分	1尺7寸	1尺3寸	1尺
9	59糎	30糎	67糎5粍	52糎	39糎
	1尺5寸5分	8寸	1尺8寸	1尺3寸5分	1尺0寸5分
10	61糎	31糎	71糎	54糎	41糎
	1尺6寸	8寸3分	1尺9寸	1尺4寸	1尺1寸
11	63糎	32糎	74糎5粍	56糎	43糎
	1尺6寸5分	8寸6分	2尺	1尺4寸5分	1尺1寸5分
12	65糎	33糎	78糎	58糎	45糎
	1尺7寸	8寸9分	2尺1寸	1尺5寸	1尺2寸
大人一号	76糎	34糎	81糎5粍	60糎	47糎
	2尺0寸1分	9寸2分	2尺2寸	1尺5寸5分	1尺2寸5分
大人二号	78糎	35糎	85糎	62糎	49糎
	2尺0寸6分	9寸5分	2尺3寸	1尺6寸	1尺3寸
大人三号	81糎	36糎	88糎5粍	64糎	51糎
	2尺1寸4分	9寸8分	2尺4寸	1尺6寸5分	1尺3寸5分
大人四号	84糎	37糎	92糎	66糎	53糎
	2尺2寸2分	1尺	2尺5寸	1尺7寸	1尺4寸

婦人子供服標準寸法表

（鯨尺）

年齢	胸圓	背丈	着丈	桁丈	スローズ丈
ベビー	42糎	20糎	90糎	32糎	
	1尺1寸	5寸3分	2尺4寸	8寸5分	———
2	45糎	23糎	43糎	38糎	20糎
	1尺2寸	6寸	1尺1寸	1尺	5寸5分
3	47糎	24糎	46糎5粍	40糎	23糎
	1尺2寸5分	6寸2分	1尺2寸	1尺0寸5分	6寸
4	49糎	25糎	50糎	42糎	26糎
	1尺3寸	6寸5分	1尺3寸	1尺1寸	7寸
5	51糎	26糎	53糎5粍	44糎	29糎
	1尺3寸5分	6寸8分	1尺4寸	1尺1寸5分	8寸
6	53糎	27糎	57糎	46糎	32糎
	1尺4寸	7寸1分	1尺5寸	1尺2寸	9寸
7	55糎	28糎	60糎5粍	48糎	35糎
	1尺4寸5分	7寸4分	1尺6寸	1尺2寸5分	9寸5分
8	57糎	29糎	64糎	50糎	37糎
	1尺5寸	7寸7分	1尺7寸	1尺3寸	1尺
9	59糎	30糎	67糎5粍	52糎	39糎
	1尺5寸5分	8寸	1尺8寸	1尺3寸5分	1尺0寸5分
10	61糎	31糎	71糎	54糎	41糎
	1尺6寸	8寸3分	1尺9寸	1尺4寸	1尺1寸
11	63糎	32糎	74糎5粍	56糎	43糎
	1尺6寸5分	8寸6分	2尺	1尺4寸5分	1尺1寸5分
12	65糎	33糎	78糎	58糎	45糎
	1尺7寸	8寸9分	2尺1寸	1尺5寸	1尺2寸
大人一号	76糎	34糎	81糎5粍	60糎	47糎
	2尺0寸1分	9寸2分	2尺2寸	1尺5寸5分	1尺2寸5分
大人二号	78糎	35糎	85糎	62糎	49糎
	2尺0寸6分	9寸5分	2尺3寸	1尺6寸	1尺3寸
大人三号	81糎	36糎	88糎5粍	64糎	51糎
	2尺1寸4分	9寸8分	2尺4寸	1尺6寸5分	1尺3寸5分
大人四号	84糎	37糎	92糎	66糎	53糎
	2尺2寸2分	1尺	2尺5寸	1尺7寸	1尺4寸

593.11
089-4

現代裁縫全書

大妻技藝學校長
大妻高等女學校長 大妻コタカ著

大妻女子大学図書館

東京 女子教育社

はしがき

裁縫に熟達すると云ふことは我が國では古くから婦徳の一つとして數へられて居りまして、「たとひ讀み書算盤の道には長ずるとも針仕事の出來ない人は嫁るな」と申されました位婦人にとつて裁縫は切り離すことの出來ない大切な技とされて居りました。時代はうつり、社會の狀態はだん〳〵と變つて文明文化の現代に於ても矢張り古人の言葉の通り、否それより一層裁縫の必要を痛感させられて參りました。

一、昔時に於ては型通りの和服裁縫一と通りを心得て居りさへすれば大方の役には立ちましたものゝ、今日では所謂裁縫だけでは充分な要求を充たすことは出來なくなりました。時代の流れは風俗の上にも種々の變化を及ぼして、洋裝を要求し、和洋折衷式の服裝を求め、或は運動の上から、衞生の上から、又容姿の美しさを保つ上から、裁縫の技術の上に種々樣々の要求をいたして居ります。これ等の要求を充たすためには、更に更に裁縫の研究が必要となりました。

大妻女子大学図書館
2005. 8.29
437165

一、本書はこれら現代社會の要求を充たす爲めに和服の部に於ては和服裁縫の基礎から、折衷式のもの、各種の新案改良もの等苟しくも現代服裝に必要な總てのものを網羅して置きました。

一、また和服裁縫に最も必要であるにも不拘従來忘られ勝ちでありました上手な繰廻しもの丶仕方、補綴法にも可成りの頁をさいて置きました。古い廢物を若返へらせて再び新らしいものとして役立たせる、所謂工夫もの丶場合の參考ともならうかと思ひます。

一、姿の美を保たせるためには、各人の體格にぴつたりと合つた衣服を作ることが必要です。其のために本書は各種の體格による着物の作り方の研究をも發表いたしました。痩せた人、肥つた人、その他いろ〳〵の體の人々も本書によつて着心地よい衣服を作ることが出來ます。

一、着物を仕立てるのみでなく、仕立てる前の注意並にその保存に必要な各種の常識及び着物の着方、各種儀式の禮裝等、衣服に關する全般的な常識を記載いたしました。

一、また洋裁の部に於ては各家庭で一番需要の多い兒童服を主として、各種の下着類及び簡單な婦人服等家庭で手のつけ易いものを選びました。

一、洋裁では專ら基礎的なものを說明いたし、各自の體に合せた原型の割り出し方、その作り方及びそれを應用して製圖した各種の裁ち方縫ひ方等を示しましたから、同一の製圖法によつて誰にも合ふ洋服を作ることが出來ます。

一、洋服の型の流行はその時々によつて隨分變化いたすものでありますから、本書はそれ等流行になづむことを避けて、基礎的方面に意を注ぎました。この基礎を充分會得いたしますれば、部分的に多少の變化を試みることも容易であり、從つて流行型を取り入れることも出來やうと思ひます。

一、洋裁の素養のあることは、大人ものを子供ものに直す時に、また流行おくれの和服を洋服として更生させる時に、非常に便利で、經濟的にも益するところが多いものであります。

一、今日の如く洋服が着物の一部として重要な位地を占むるやうになりました時代に於ては、その仕方に對する知識も亦婦人に缺くべからざる常識の一つでございます。

一、斯くの如く本書は和洋兩種の裁縫を合せて著者日常の實際的體驗から、全くの初學者にも充

分會得出來るやう、和服は運針の仕方から、洋服はミシンの使用法及び手縫の初歩から澤山の圖解をも挿入して叮嚀に、親切に、詳述いたしましたから如何なる初學者でも容易に了解することが出來ます。

一　本書はまた急所を公開し、時間を節約して手際のよい裁縫をすることに、全巻を通じて留意いたしました。

一、本書は初學者のみでなく、相當熟達されてゐる方々、及び教授上の參考資料にも供し度い考へから澤山の種類を集めて置きました。

一、それ故に仕方屋に任せる方でもまた既製品を求めて實際には自身で針を持つことの少ない方方にも是非一讀して裁縫全般の知識を深めておいて頂き度いと思ひます。

一、本書の尺度は和洋ともにメートル法を用ひました。メートル法の換算表をも附して置きました故、尺度と併せて使用せられんことを望みます。

著者識

現代和服裁縫全書

目次

一、基礎の部

基礎縫

基礎縫について……一
運針……二
糸の結び方……三
糸の留方……四
糸の継ぎ方……五
縫方の種類とその方法……六
襞のかけ方……十
紐方……三

仕立てる前の準備

布しらべ……二六
総丈を調べる……二六
積り方……二六
尺度のあて方……二七
縫代の見方……二七
裁ち方……二八
布の注意……二八
縞、柄による裁方の注意……二九
標の附け方……二九
標附の種類……三一
縫方ときせ……三三

仕上げ方の注意

針と糸の始末……三三
寸法あらため……三三
仕上げ……三三
圧のおき方……三四

一般の心得

布地の幅……三四
布地の丈……三五

二、襦袢の部

布地の大切な整理法……三五
用具について……三三

衣類の畳み方

着物の畳み方……三六
羽織の畳み方……三六
長着の夜具畳み……三七
長襦袢の畳み方……四〇
コート類の畳み方……四一
帯の畳み方……四三
袴の畳み方……四四
衣類の蔵ひ方……四五
肌襦袢について……四七
本裁女物肌襦袢……四七
小裁、一つ身襦袢の裁ち方積り方……四三
中裁、四つ身襦袢の裁ち方積り方……四四
本裁肌襦袢の裁ち方積り方……四五
大人物改良肌襦袢(その一)……四六
同　(その二)……四七
本裁女物単衣長襦袢……四九
本裁女物袷長襦袢……五九
本裁男物袷長襦袢……七三
四ツ身袷長襦袢……七四

振袖袷長襦袢……七
女物長襦袢の上手な仕立方急所……八
下着の上手な仕立方急所……八
改良長襦袢……八
美容袷（その一）……九
同（その二）……九

三、単衣の部

本裁女物単衣……九
本裁男物単衣……一〇
四つ身単衣……一一
三つ身単衣……一二
一つ身単衣……一三
薄物単衣……一三
セルの仕立方……一三
単衣重ね……一三
単衣半重ね下着……一四

四、袷の部

本裁女物袷……一四
本裁男物袷……一五
四つ身元縫袖袷……一五
三つ身袷……一五
一つ身綿入……一五
小袖……一六
小袖について……一六
横廻し附のもの……一七
紋附及裾模様附のもの……一七
重ね物……一七
下前寸法のつめ方……一八
無垢の裁ち方……一八
無地小物の裁ち方四種……一八
標附の注意……一九
振袖の標附け方……一九
掻廻し無垢の標附……一九
袖、振袖、身頃模様の縫ひ合せ方……一九
胴抜物……一九
掻廻し布の裁ち方……一九
胴抜の裁ち方……一九
標附……一九
縫ひ方……一九
口綿本比翼……一九
附比翼……一九
男物丹前……一九

五、羽織の部

羽織について……一九
本裁女物袷羽織……一九
本裁男物袷羽織……二〇
紋について……二〇
四つ身袖袷羽織……二一
四つ身元縫袖綿入羽織……二一
一つ身袖無羽織（綿入）……二一
改良袖無綿入（その一）……二一
同（その二）……二一
本裁男物単衣羽織……二一
本裁女物単衣羽織……二一

六、半纏の部

半纏について……二一
もぢり袖（饅頭）半纏……二一
角半纏……二一

七、被布の部

木裁女物綿入被布……二一
四つ身綿入被布……二一
小袖被布……二一

八、合羽、コートの部

女物単衣合羽……二一
女物道行袷袷半コート……二一
本裁長コート……二一
ヘチマ袷コート……二一

九、帯の部

帯について……二一
腹合帯……二一
昼夜帯（その一）……二一
（その二）……二一
同（その三）……二一
女物丸帯……二一
子供帯……二一
男帯……二一
伊達じめ……二一

一〇、袴の部

女袴……二一
男袴（大人物）……二一
男襦無袴……二一
中裁、小裁男袴……二一

一一、夜具の部

縮の種類……二一
布地……二一
夜具一組の仕立方……二一
掛蒲団及敷蒲団……二一
敷布及カバー……二一
錦型蒲団……二一
改良夜具……二一
座蒲団の仕立方……二一
折り畳み式蒲団……二一
陸蒲団（その一）……二一
同（その二）……二一
夜具の手入と保存法……二一

一二、赤ちゃん物の部

肌襦袢（その一）……二一
同（その二）……二一
長襦袢……二一
縮入胴着（その一）……二一
同（その二）……二一
縮入座蒲……二一
改良一つ身袷（その一）……二一
同（その二）……二一
涎掛……二一
掻巻並おくるみ……二一
釣鐘型おくるみ……二一
赤ちゃん夜具一組……二一
改良夜具……二一
おむつカバー……二一

一三、子供用小物の部

一二歳用寝冷え知らず……二一
一三歳用寝冷え知らず……二一
三四歳女見用寝冷え知らず……二一
四五歳用和洋両用のコンビネーション……二一
一二歳用夏蒲……二一

二三歳用エプロン(その一)……四七
同　(その二)……四九
三四歳用エプロン……四二
四五歳用エプロン……四四
六七歳用エプロン……四六
七八歳向男女兒の上被……四九
子供の食事用エプロン……四四

一四、雑の部

割烹前掛……四六
サロンエプロン……四八
婦人事務服……四二
防寒用下着(その一)……四六
同　(その二)……四八
同　(その三)……四九
真綿の防寒肌着……四二
袋真綿の襦袢の作り方……四二
角真綿の羽織下……四三
足袋下……四四
ベンツ……四六
防寒用長胴着……四六
汗よけ兼用のお乳おさへ……四八
襦袢猪除け引……四〇
股引……四三
単股引……四七
半股引……四七
江戸腹掛……四九
脚絆……四二
足袋……四六
琴の袋……四八
山田流の琴袋……四八
生田流の琴袋……四三
稽古琴の袋……四三
琵琶の袋……四四
三味線の袋……四五
籠掛……四六
暖簾……四八
水引暖簾……四八
日除暖簾……四九
蚊足暖簾……五〇
衝立……五一
網戸……五三
蚊帳……五三

一五、繰廻しの部

上手な繰廻しの仕方について……五四
羽織を長着に……五五
長着を羽織に……五七
古帯長の利用法……五九
羽織を袴に……五二
馬乗袴の布の取り方……五二
襦袢袴の布の取り方……五三
上手な布の継ぎ方、接ぎ方について……五三
片返し接ぎ……五四
割り接ぎ……五四
掛け接ぎ……五五
突合せ接ぎ……五六
色紙継ぎ……五七
刺繍継ぎ……五八
穴継ぎ……五八
国旗……五四
人形着物の寸法割り出し方……五五
紋帳……五八
改良裁ねまき……六〇

をり継ぎ……五〇
ふせ継ぎ……五〇
かがり継ぎ……五二

附、衣服仕立方の急所と秘訣

羽織について……五三
丈の定め方……五三
前身の襟の取り方……五四
衿の返りをよくする仕方……五四
着物について……五六
肥えた男物長着……五六
痩せた男物長着……五八
肥えた女物長着……五九
痩せた女物長着……六〇
袂丸味の上手な作り方……六一
表裏の色が極端に違ふ時の裾廻……六一
男襦袢の衽にも褄を……六二
襦袢をつける着物の衿肩明……六二
一つ身絹入の衿附を具合よくする仕方……六三
無双縫袴の仕立方……六三
上手な揚の仕方……六四
作法上から見た着物の着方……六六
汚点抜の仕方……六八

附録　作業用モンペの作り方（二種）……五二

上着附モンペ……五二
改良モンペ……五五
家庭改良服……五七
婦人標準服の型式……六〇
着用図二部式一号……六一
着用図二部式二号……六一
着用図一部式一号……六二
着用図一部式二号……六二
二部式出来上り図……六三
一部式出来上り図……六四
型紙の作り方及び裁ち方……六四
型紙の裁ち方甲型二部式一号……六五
型紙の裁ち方甲型二部式二号……六六
型紙の裁ち方一部式一号……六七
布の裁ち方二部式一号……六八
布の裁ち方一部式一号(和服更生の一例)……六九
袖の縫ひ方
縫ひ方(二部式一号)……七〇
縫ひ方(二部式二号)……七二
一部式一号(和服更生の一例)……七三
前身上下の接ぎ合せ方……七四
(新しい和服生地使用の一例)……七五
乙型二部式……七六
仕立上標準寸法……七七
裁ち方図……七八
乙型二部式(輪式)……七八
袷き合せ式……七九
上衣標付図……七九
上衣出来上り図……八一
乙型標準服……八二
縫ひ方図……八三
捲き合せ式(下衣)……八三
中穿出来上り図……八四

乙型中穿裁ち方及縫ひ方……五五
裁ち方……五五
縫ひ方……五六
乙型中穿裁ち方及縫ひ方図……五七
羽織出来上り図……五八
羽織仕立上寸法……五八
羽織裁ち方……五九
活動衣……五九
乙型活動衣裁ち方……五九
袖の縫ひ方……五九
下衣縫ひ合せ方……五九
出来上り下衣……五九
甲型活動衣……五九
型紙の裁ち方……五九
布の裁ち方……五九
帽子裁ち方及縫ひ方……五七
手甲裁ち方及縫ひ方……五八
婦人会服……五九
型紙のとり方……六〇
裁合せ方……六〇
長着の更生……六〇
襦袢のつけ方……六〇
縫ひ方……六〇
附
若き女性に送る……六〇
強く正しくにこやかに……六〇
焦るな休むな怠るな……六〇
仲よく働け笑つて暮せ……六〇
お饒舌り……六〇
人の悪口を聞く時……六一

現代裁縫全書

大妻コタカ著

一、基礎の部

基礎縫

基礎縫について

お裁縫の仕上げを綺麗にするのには、その基礎となるべき縫方の練習が充分出来てゐなければなりませぬ。昔の仕立屋さんはお弟子に教へるのに「付紐一年、袖一年」とか申して初めのうちは座着の付紐ばかり縫はせたりまた着物の袖ばかりを縫はせたりしたものです。これは要するに運針の稽古のためでありまして、紐や袖の練習によつて基礎縫をしつかりさせられたもので、丁度現今の運針用布を用ひて基礎縫の練習をするのと同様であります。どんな方法を用ひるにしても、基礎縫がしつかりと出來なければ綺麗な裁縫は出來ません。

運針

用布　練習用布は初め晒木綿一〇〇糎位を用意し、練習の進むにつれて三河木綿、紅絹等各種の材料を用ひ、どんな種類の材料でも容易に縫ふことの出來る準備が肝要です。

素縫と本縫　運針の練習順序として先づ素縫から初めます。

素縫と申しますのは、針孔に糸を通して二重になし、二〇糎位の長さとして糸の終りを結ばずに縫つてゆく方法です。

本縫は用布よりも一〇糎位糸を長くして糸の終りを結んで縫ふ仕方を申します。

縫方　まづ姿勢をよく正しく座つて下腹に力を入れ、眼から布までの距離は三〇糎、胸からは一五糎位を離し、兩手の開きは二五糎位にして縫ふのがよろしい。この態度がきちんとしてゐないと針目がゆがんで千鳥足のやうになります。

先づ右手の中指に指貫をはめて食指と拇指で（針は指先から三粍位出る程度の長さのものが適當でありますから指の長さによつて適當と思はれる長さの針を選ぶ）糸の通つた針を持ち、針のめどの方を指貫にあてゝ針の先を食指と拇指の間に挟み針の先を布の上へ下へと刺して用布を縫ひます。針目の大小、縫目の曲直等に注意しながら針を平に押します。この場合手は左右平均に動かし、針は用布に出來るだけ直角に刺す様に注意いたします。針が左の指まで來ましたらば糸をこいてまた前と同様の要領で縫ひます。縫ひ終つたら針を抜いて全體に亘り糸こきを充分にします。そして馴れるに從つて段々に早く縫ふ練習をいたします。高等女學校一年生を標準として一分間に一〇〇糎乃至一五〇糎位の早さ迄は縫へるものです。

第一圖

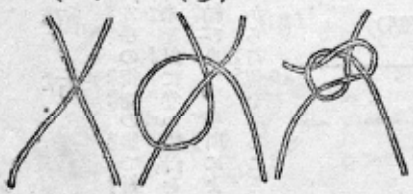
第二圖

糸の結び方

細結　糸の兩端を取つて圓のやうに結び合せる仕方で、これは袷、縫入等の袖口、八つ口、袖附などの留をする時、及び襞などの中途で糸を繋ぐのに用ひます。

留結　糸の端を食指の先に卷いて拇指の腹でその糸を擦り乍ら結ぶ仕方で、圓のやうに結ぶと玉になりますから玉結とも云ひます。これは縫ひ初めに使ひます。

機結　糸の兩端を取り、右を下に、左を上に交叉させて（い圖）、左の食指の上におき左拇指で押へ、右の糸を廻して左の糸の下から右端の糸の上に出し（ろ圖）、右端の糸を輪の中に入れます。（は圖）、そしてその先を左の拇指で押へ、右の糸を引き結びます。襞、不縫等中途で糸をつなぐ

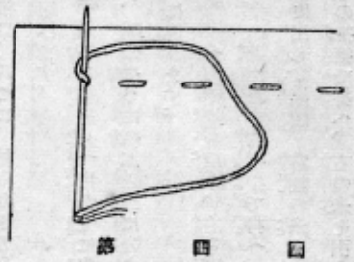


第三圖

時に用ひます。

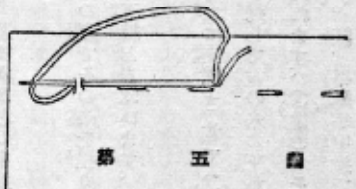
糸の留方

打留　圖のやうに左手の拇指の腹で針を布に押へつけ、右手で糸を針に卷いて針を引出し、左手で引締めて結びます。場所によつては一針縫ひかへしてから打留をすることもあります。抄留、返留以外の場所には全部この留方を用ひます。

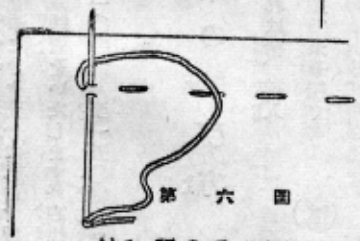


第四圖　打ちの留め

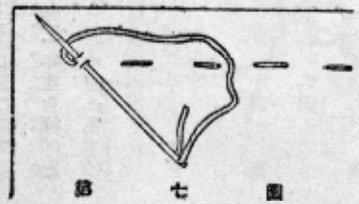
抄留　縫ひ終りで、縦か横か又は斜に布を極く僅か抄つてその針へ打留のやうに縫糸を針にからんで針を抜き出して三、四糎位縫ひかへしておく仕方を申します。單衣の袖口、袖附、衿先、身八つ口などにはこの留めかたを用ひます。第五圖は縦留のしかた、六圖は横留のしかた、七圖は斜留のしかたです。



第五圖　抄ひ留の圖（縦）



第六圖　抄ひ留の圖（横）

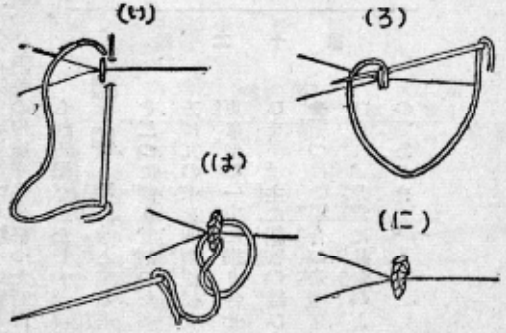


第七圖　抄ひ留の圖（斜）

返し留　縫ひ終りを一針返して三糎程縫ひ戻して留める仕方で、これは背縫、脇縫、衽附などの裾に用ひられます。

第八圖　返しの留め

門留　縫糸または少し太目の糸を兩方の布にまたがせて(い)圖のやうに糸を二回ほど抜き出し、(ろ)圖のやうに兩布に跨つた糸の幅だけになるまで糸をくゝらせては(は)圖のやうに最後の糸を裏に出してしつかりと留めるしかたで、(に)圖はその仕上りの圖であります。この方法は單衣やコートの身八つ口、袴の脇などの綻びを防ぐために用ひます。



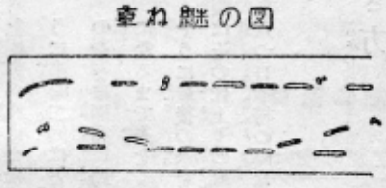
第九圖　門留の圖

糸の繼ぎ方

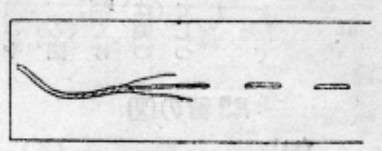
結繼　機結に繼ぐ仕方で、これは主に耳絎や襟の中途で糸を繼ぎ足す場合に用ふる方法であります。

重縫　縫ひ合せの中途で糸の無くなつた時その糸は折留として更に新らしい糸の端を留結びとし、六糎位戻つた處から前の糸に割り込んで縫ひ重ねる仕方です（第十一圖の上）。又同圖下のやうに縫ひ終りや、縫ひ初めの糸を縫代へ寄せて一目割にすることもあります。背縫、脇縫、衽附、衿附等の中途で糸の絶つた時に用ひられる繼ぎかたです。

第十圖　留結びの圖


第十一圖　重ね縫の圖

擦り縫　襞にうとする糸の端を二つに割り、割つた糸の一方に元の糸を四糎程擦り合せ、更に他の一方に擦り合せて用ひます。主に絹物の縫ひ合せや紐つけの場合の糸繼ぎに用ひられ、非常に具合のよいものであります。

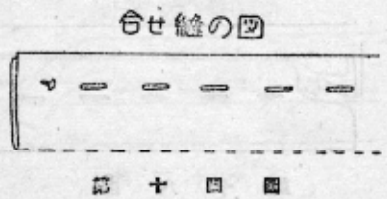

第十二圖　擦り縫の圖

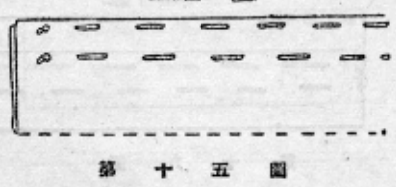
縫方の種類とその方法

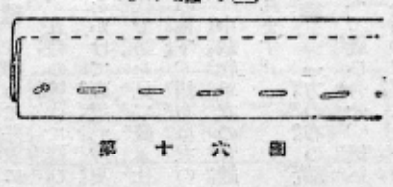
直線縫　布目に對して眞直ぐに縫ふ場合に用ふる縫ひ方で、衣類の大部分にこの方法が用ひられて居ります。文字の通りキチンと針目を揃へ、裏表同樣に縫ひ、針は出來るだけ直角に布に刺してゆきます。以下針の運びに對する注意はどの縫ひ方に對しても同樣です。

斜線縫　斜に縫ふ仕方で、着物の衽附、衿附、袖口、羽織の襠附等に用ひられます。衣服の大切な部分にはこの縫方が割合に多く用ひられて居るのであります。

第十三圖　直線縫・斜線縫の圖


第十四圖　合せ縫の圖


第十五圖　二重縫の圖

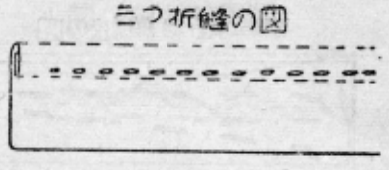

第十六圖　摘み縫の圖

合せ縫　布を中表に二枚合せて縫ふ縫方で、直線縫と同じやうに廣く應用されて居ります。

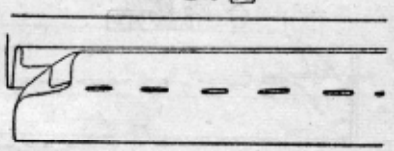
二重縫　合せ縫ののち縫目の開かないやうに本縫にならつて端の方を縫ひ合せる仕方で本裁裏衣の背縫などにはこの縫方が用ひられます。

摘み縫　布を切らずに摘んで縫ふ仕方で、四つ身の衽、大幅物の背縫などに用ひます。

三つ折縫　布の端を二度折つて裏折り代の端を普通に縫ふ仕方で、風呂敷の周圍などのやうな處を縫ふのに用ひます。

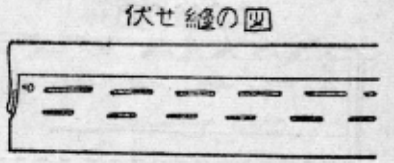


第十七圖　三つ折縫の図



第十八圖　袋縫の図

袋縫　初めに外表に布を合せて、五粍の縫代に縫ひ、淺くきせをかけて裏返し、更に普通の縫代で裏を見て縫ふ仕方で單衣物の袖下、絹布單衣の背縫、小裁、中裁物單衣の背縫等に應用されます。



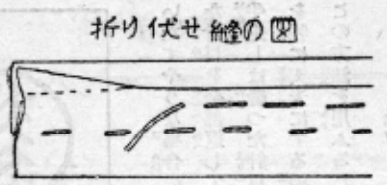
第十九圖　伏せ縫の図

伏せ縫　一方の布の端を三粍位捺へて縫ひ合せ、縫込みの狹い方へ折つて裏には一糎位の針目を出し、縫込みの端を伏せておく仕方で、風呂敷、幕などの接ぎ合せの耳等に用ひられます。

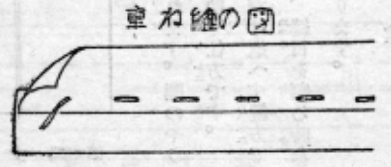
折伏せ縫　布の一方を五粍位捺へて縫合せ、縫込みの少ない方へ折を付け、長い上の布を折つて捺へた布杯にその上を仕縫の時と同樣に縫ひます。裏のつかないものゝ縫代を綺麗に見せる場合ことに布の裁目の場合

時などに用ひます。

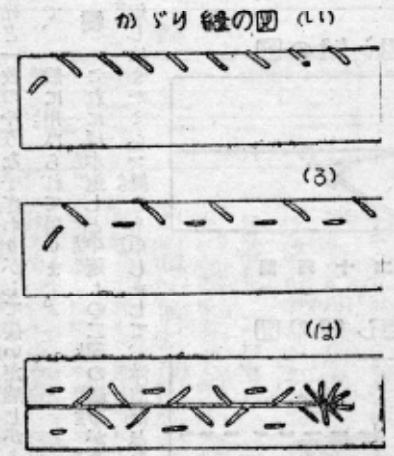
重ね縫　裏袖の幅の足りない時に袖口の布の下になる方へ足す時、又紐の芯が足りないやうな場合によく用ひられる縫ひ方で、裁目のまゝ縫代を一糎位重ねてブツ〳〵と平縫ひする仕方で、二度位ひ縫ひますと丈夫になります。見えない所のはぎ合せ目などに應用しますと、縫ぎ目が厚くならないでよいものです。



第二十圖　折伏せ縫の図



第二十一圖　重ね縫の図



第二十二圖　かぶり縫の図

かぶり縫　裁ち目のほつれを防ぐために、裁ちめを巻きながら縫つてゆく方法で、毛織物の縫ち目には必ず用ひられます。その他着物の衿肩明、鉤衽、などのやうに縫目のほつれ易い所に用ひられます。

突合せ縫の図

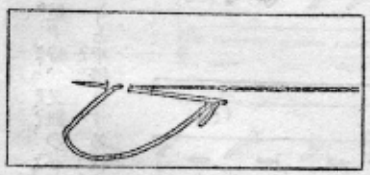
第二十三図

突合せ縫　裁ち目のまゝ布を双方から突合せて四粍の深さに針を交互に布の端にかけて縫ひ合せる方法で、帶芯や衿芯等短い時の接ぎ合せに用ふる仕方です。布地が重りませんから殆ど一枚のやうな手さわりがして接いだ感じがありませんので、一般に用ひられて居ります。

返縫　これには本返しと半返しの二種の縫方があります。本返しはまたミシン縫とも申しまして、洋服などを手縫ひでいたすやうな場合に用ひられます。圖のやうに縫つた針目を全部返して縫つてゆく仕方です。

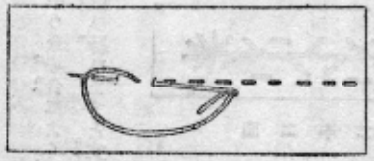
半返しは縫つた針目を半分だけ返へす縫方で、縫目を特に丈夫にする場合とか、縫目を割る時などに、この方法を用ふることがあります。

本返し縫の図



第二十四図

半返し縫の図

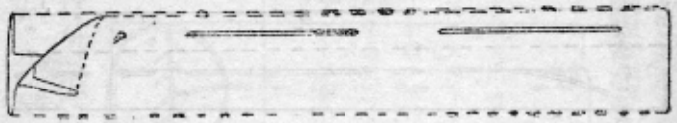


第二十五図

襞のかけ方

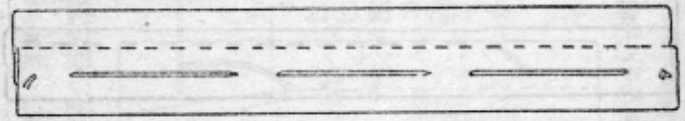
すべて襞をかけますのには、襞針又は絎臺を使用いたします。

平襞の図



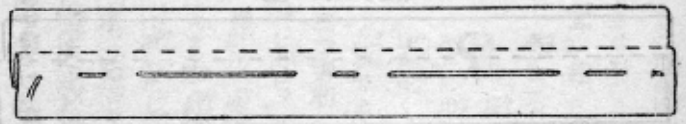
第二十六図

一の折目の図



第二十七図

二の折目の図



第二十八図

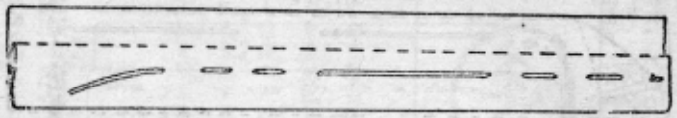
平襞　圖のやうに表裏とも三個位の針目で、かけた襞を申しますが場所によつては抄ふ方の針目を少し小さくすることもあります。羽織の衿などに用ひたり、帶の襞などはこれであります。

一目落し、二目落し、三目落し　小針の數によつて呼ばれて居ります。きせ山から凡そ五粍の處に、小針を五粍、大針を三粍位にします。

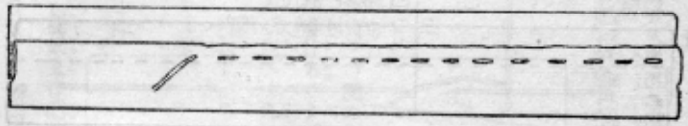
一目落しは地厚ものゝ時に用ふる掛け方で、裏へ出る針目は小さく、表へ出る方が大きくなります。

二目落しは主に木綿ものに掛け、三目落しは絹物や薄地ものなどに用ひます。

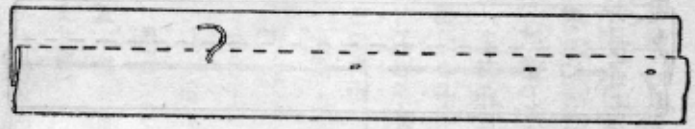
第二十九圖　落しの圖



第三十圖　縫ひ離しの圖



第三十一圖　隱し縫の圖



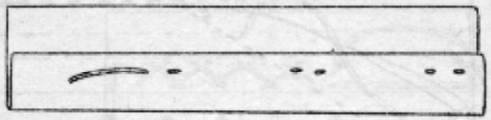
縫鋏　ぐし鋏とも申しますもので平縫の針目で鋏をかけます。これは縮緬ものやモスリン類の如き、折のきかないものに主にかけられ、ことにとら寸にそのまゝ着られるものですから、ぞべ糸などで叮嚀にいたします。

隱鋏　折が反對にならないやうにするために用ふるもので、仕上げて後も取り去りませんから、布地と共色の糸を用ひ、表にはなるべく針目を小さく出し、裏は二糎位にします。棲先、胴接ぎなどに使はれて居ります。

紺方

縫方に各種の方法がありましたやうに紺方にも亦、その用ひ場所によつていろ〳〵の方法があります。然しすべて類針又は紺臺を使用していたすことには相違ありません。

第三十二圖　耳紺の圖



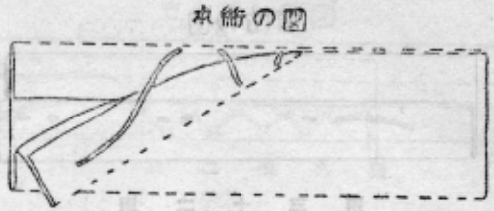
第三十三圖　三つ折紺の圖

耳紺　布の耳を紺けつける仕方で、小針に表に一つ、裏に二つづゝ出し、布と耳との間を通る針目は二糎位にして、耳から三粍位入つた處を紺ける仕方で、木綿單衣などに用ひられます。紺代の幅によつて、多い時には針目を荒く、少い時には細くと云つたやうに多少の手心が必要であります。

三つ折紺　布の端を二度折つて表には極く小さく針目を出し、裏の折山の中には一糎五粍位の針目を通して、紺けてゆく仕方で、單衣の袖口や衿下、裾紺等に使はれます。針目の大さは紺代の幅によつて又布地によつて加減いたします。

本紺　二枚の布の端を折り合せて針目を八粍位とし、折山から二粍内にはいつた處を手前と向ふとを同じ針目に針を運んで紺ける仕方であります。この紺方は綿入の袖口、八つ口、衿下、紐など應用の範圍が大層廣いものであります。

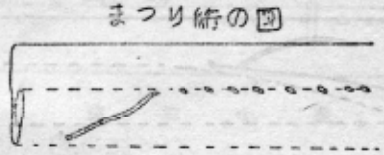
従つて針目などもその場所によつて適宜に加減しなければなりません。縮入れの袖口や身八つ口、裾下など隨分使用の範圍が多いものです。



第三十四圖　本絎の圖

まつり絎

これは、布を三つ折り絎の時のやうに折り、右の端から糸を掛け、きづ表の布を少し抄ひ、その針先を裏折代の端に通し、二粍位左の方へ斜に通め、前のやうに表を抄つて又裏へ通す、この方法を繰りかへし乍ら進めてゆきます。主に毛織物などの如き折目の自由になり難いものに用ひます。又ミシン仕立の絎ける場所などにも用ひます。



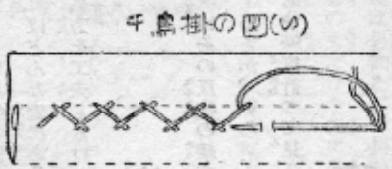
第三十五圖　まつり絎の圖

千鳥掛

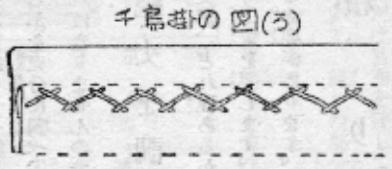
布の端を折つてその左の方から糸を掛け、きづ表の布を少し抄つて、次に五粍斜に裏折り代の端から五粍の處を抄ひ、再び前のやうに表地を抄ひ、交互にこれを繰り返して進みます。

その時斜にかゝる糸はあまり直立にならない方が山形の格恰がよろしいやうです。(い圖)

これは毛織物、又は地厚物の單衣で伏せ絎か耳絎又は三つ折絎をしなければならない處に應用されます。



(い)圖の掛鳥千



(ろ)圖の掛鳥千

第三十六圖

圖の絎り拔

第三十七圖

又地厚ものにはろ圖のやうに、表の地一枚にだけ針を通すのみでなく、三つ折にした處の極く端を表まで抄つて、裏の針は表に出さない事もあります。又大變地厚のものは二つ折にしてどの針も二枚を通して表には二列に針目を出すこともあります。場合場合によつて適當な縫方を適宜に應用いたします。

擽絎

布の耳を紙捻を擽るやうに擽つて右から小針にまつり絎をする仕方であります。ものによつては木綿糸を芯に入れることもあります。上仕立の薄物單衣の袖口、夏のコートの縫絎、又はコートの飾縫絎などこの方法を用ひます。

仕立てる前の準備

布しらべ

新らしい反物を裁つときに、先づ第一に布しらべをしなければなりません。反物に染斑や織斑がないか、もしあればどんな處にあるかを充分に調べ、これを帶の下とか、下前とか一見目にふれないやうな處に廻るやうに、裁ち方を工夫しなければなりませんので、どんな反物にしても、先づ第一に布檢べをいたします。

總丈を調べる

次はその反物の總丈が、どれ程あるかを調べます。その反物の長短によつて、袵を棒袵にするとか、又は釣袵にするとか、いろ〳〵工夫を要します。木綿物浴衣などには、往々非常に總丈の短いものなどがありますから、必らず一度計つて見る必要があります。

積り方

用布による積り方　普通の反物で、本裁長着を裁つ場合などには、用布を主とした積り方が用ひられます。まづ用布の丈を二つ折にして、端から袖を二丈とり、殘りを三つに折り、三つ目は丈を一九糎（袵下りの分）短くすると大體の身丈がわかります。その身丈が丁度背丈に合ふ位でしたらば本式に裁ち初めます。

體による積り方　前とは反對に、若い人達の着物などは、多少の無理をしても、袖丈を充分に欲しいとか、或は男物などで掛衿だけ替布を殘しておき度いといふ、特別な場合もあります。こんな場合には、先づその所要の丈だけを先に除いて、殘りの部分で其の他のものを工夫しなければなりません。

若い娘さんたちのものになりますと、袖丈だけでも可成の丈になりますので、袵を釣にしたり、衿を三つ折にしたりしなければならない事もありますので、場合々々によつて積り方も一樣にはゆきません。

尺度のあて方

實際に裁つ場合には、持尺で計ることは一番危險です。すべて置尺にいたします。

用布を裁板の上に平におき、その上に尺度をあて〳〵計つてゆきます。耳がたるんだり、縮まつたりしてゐる布は、巾の中程の平らな處で計るやうにすると狂ひが生じません。

縫代の見方

裁ちものには縫代を見ることが肝心です。今その標準を記しますと、

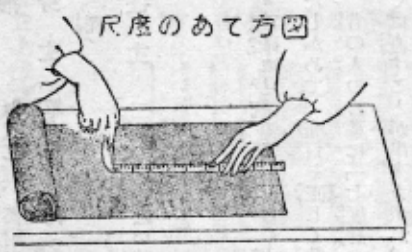


圖　方てあの度尺

袖　取衣二糎、裏附二糎乃至四糎

身丈　單衣三糎五粍（内褄紬二糎、衿附及びきせ一糎五粍）袷二糎五粍（裾合せ一糎、衿附及びきせ一糎五粍）

袵丈　三糎、丈のない時は二糎。

裁ち方

正確に見積つて、正しく寸法を定め、袖、身頃、衿、袵と寸法通りに正しく布を折り、誤りが無いかを叮嚀にたしかめて、布目を正しく裁ち始めます。

昔の人の言葉に「七度計つて一度裁て、」と申すことがあります。布を切り離さない間は、誤りを見出せばすぐに直すことが出來ますが、一度裁つたものは、假令誤りが發見されてもどうすることも出來ませんから、着物でしたら、「袖丈と縫代」のものが四枚、「身丈と縫代」四枚、「袵と縫代」が二枚といふ風に充分念入りに調べてから鋏を入れます。

布の注意

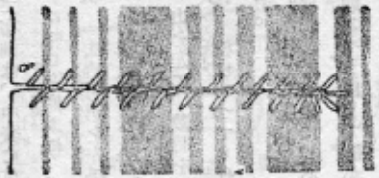
裁ち終つた布は袖は袖、身頃は身頃として重ね、山を八糎位ずらして中表にたゝんでおきます。中央の山で疊むと標附の時いやな折目が付いて標附がしにくゝなります。

裁目のかどり　又ほつれ易い地質の物は、衿肩明、その他の要所を裁つと直ぐにかどつておくことを忘れてはなりませぬ。

縞、柄による裁方の注意

縞に強弱のある物は、強い色合の縞の方を背にした方がよく、絣の模様物は右の肩から左下へ流れるやうに裁つた方が着た時に優美に見えます。然しまた柄によつて左右同じやうに釣合をとつたり、又模様を合せるやうにすることもあります。

大模様の友禪等で小裁物を裁つ時は、特に模様の配置、色の配合などに注意しなければなりません。



圖九十三部　方りかゞの明扇衿

又衿と衽は間違ひ易いので、衽は先に二つに切つておきます。着物の時は、あまりありませんが、羽織などの場合になりますと、衿丈と袖丈が同じやうですから、間違へて衿を袖のつもりで切つて終ふことなどよくあることです。故に衿はすぐに幅を二つ折にして、袖との區別をしておくといふ注意は必要です。

標の附け方

仕立上げ寸法　いくら縫方が上手でも、身體にぴつたりと合つた寸法でなければ折角の着物も大變見苦しくなければなりません。

見えます、と同時に着心地もよくはありません。それですから、着る人々の體格によつて、肥痩、長短をよく考へ、適度の寸法を工夫して仕立上りの寸法を定めます。

布の置き方　標附に際しては、先づ布の置き方を一定します。すべて布地は、中表に重ね、身體の上部になる方を左にし、裾の方を右に置いて標をつけます。そして、袖は袖口を向ふに、袖附を手前に置きます。

身頃　は衿肩明を左手前にして、前身頃を下に後身頃を上に重ねます。

衽　は裾を右に衿下の方を手前に置きます。この場合、新らしい布地ならば必ず裁目を衿下とします。

衿　山を左に、裁目を衿附にして手前におきます。

標附　標はいつでも仕立上げ寸法に、きせの分を加へた寸法をつけます。きせの多少は場所によつて適當にします。

標附は明瞭で正確に、あまり大きくせず、一糎内外を適度とします。尚標幅を出來るだけ細く、下の布まで よく通るやうにして置かないと、仕立の中途で消えるおそれがあります。と申しまして、布地が損むほど強くつけることは禁物です。初心のうちには、兎角一生懸命に附けて、表の布は損じてゐるのに、下に通らないやうなことがよくあるものですから、注意が肝要です。

篦　あとはいつまでも消えないものですから目標になるのを程度として、仕立上つて後に標の目立たないやうにと心掛けたいものであります。

篦標のつけにくいものには、糸標、チヤコ、鋏篦等で標を附けます。

標附の種類

チヤコ　これは多く毛織物のときに用ひますが、色がなか〳〵消えないことがあつて、縫直しの時など困ることもありますから、なるべく和服には用ひないやうにいたします。

糸標　厚地のものや、毛織物或は篦の見にくい布の場合に用ひます。布を二枚重ねたまゝ縫標をし、糸をゆるめて二枚の布の間を圓のやうに縫糸を切りますと、上下の布に同じやうにつきます。

ぽつ　初め上の布に標をしておき、その通り何枚でも布を重ねたまゝ一緒に針を通し、次に一枚々々離して、間の糸を結べる位の長さに切り、一寸結んでおく方法で、袖山や含標に便利なものです。

鋏　絹布類に多く用ひるもので、鋏を燒いて、先の丸みで標を附ける方法です。又とくに、絹布用の燒篦もあります。これは充分注意しないと、布を燒くことがありますが、上手に用ひますと、非常に正確にしつかりした標附が出來ます。

縫標の仕方

第四十圖

ぽつの仕方

第四十一圖

縫方ときせ

標と標とを合せて待針を打ち、針目を正しく縫ひ、充分に糸をしごきます。糸のこき方が悪いと、縫目が縮んで布に皺が出來、仕立榮えが悪い上に綻び易いものです。

よく「糸こきは三度」と申されます。それは初め縫目の上を拇指と食指の腹でしごき、次に同樣に下をしごき、最後に縫目をしごけと申す位で、つまり叮嚀に縫目と布地とが平になるまで糸こきをよくせよと敎へられたものであります。そして、縫ひ初めと、縫ひ終りとの糸留をしつかりしておく事を忘れてはなりません。これが充分でないと、留めの處が笑つてすぐに綻びがきれてしまひます。

また糸こきを充分にすると同時に、糸の引き殘しのないやうに注意することも必要です。

きせは、多過ぎると皺崩れを生じ易く、少過ぎると仕上げが見苦しくなりますから、普通の縫目には二耗、袖口、身八つ、褾合せ等には特に多く三耗位が適度であります。

仕上げ方の注意

針と糸の始末

衣服を仕立終りましたらば、先づ第一に針を注意しなければなりません。縫入れものや布團の中から針が出ることなどがあつて思はぬ怪我をすることがあります。殊に乳幼兒の衣類は特別に注意しないと、取りかへしのつかない事になります。針の本數に不足のない事が判りましたならば、糸屑や塵埃を拂ひます。

寸法あらため

次に仕立上りの寸法を一應しらべます。そして、更に左右の寸法が合つてゐるかどうかを見ます。つまり衿下を左右合せて見るとか身幅、衽幅、或は衿丈、袖丈、裄などあらゆる處を檢査いたします。裏附の場合には更に丈、幅共裏表が合つてゐるかをあらためることも必要です。

綿入とか、羽二重とかの裏附でしたらば、衣紋かけに掛けてふきの出を調べることも大切です。特に重ね等のときには一層叮嚀にいたさなければなりません。そして寸法の合はない箇所を見出しました時には、仕上げの前に直さなければなりません。

仕上げ

すべて具合よく上りましたらば、地質によつて（木綿物、毛織物の類）霧を吹き、火熨斗又はアイロンで仕上げます。火熨斗やアイロンを使用いたす時には直接布地にあてぬやう、布片を被せてその上から當て、初め裏からかけ後で表にかけます。但し木綿類は直接あてゝもよろしい。

また霧を澤山吹いたり、アイロンをきつくかけることはあまり巧な仕上法ではないのですから、縫ふ時から注

意して、餘り仕上に手數のかゝらないやう、叮嚀に取り扱つておきます。

たゝみ方は縫目を通して叮嚀に折り品物によつて適當な壓をいたします。

壓のおき方

帶のやうなものは、出來るだけ重い壓をおきます。萬力などがありますと一番よろしうございます。

綿入れの裾、袵、袖口はつぶさぬやうに、壓す場合にも壓板から出すやう注意いたします。疊んで壓ふ時にも崩れないやうに工夫いたします。

また、寢おし、座り壓なども物によつてよいものですが、たゞ疊みめが崩れないやうに注意いたさなければなりません。壓は仕上げの最後のものですから、一層入念にして出來上りを美しくするやうに注意いたします。

一般の心得

布地の幅

並幅物　三六糎を普通とし、地質によつて三二糎から三八糎位までであります。

中幅物　四五糎を普通として、地質によつては四一糎から五三糎位までであります。

大幅物　七五糎を普通として、地質によつては六〇糎から一〇〇糎位までであります。

この外に倚三幅物、四幅物等の種類がありますが和服には餘り使ひません。

布地の丈

並幅物　一反は凡そ一一〇〇糎で、二反を一疋と云ひます。地質によつては、一反が一〇六〇糎から一一四〇糎位あるものもあります。

中幅物　反物に切つてはありませんが、凡そ八五〇糎を一反といたします。

大幅物　着尺物は凡そ五五〇糎を一反とします。

布地の大切な整理法

新らしい布地は仕立てる前には、必らず布の整理といふことをしなければなりません。即ち伸びてゐる部分は縮ませ、吊れた耳は伸ばして平にするとか、また水分に遇つて縮むおそれのある布地は初めから水分を與へて、縮むだけ縮ませておくなど、その地質によつてそれ〴〵の手當が必要であります。かういふ仕事を總括して布地の整理と申します。

よく反物の中には、整理ずみといふ檢印のあるものを見かけますが、あれは只今申しましたやうな仕立てるための整理ではなくて、反物として市場に出すのに見苦しくないやうに手當を濟してあるといふ印でありまして、決して買つた人達がすぐにそのまゝ仕立てよいといふ印ではありませんから、整理濟とあるものでも仕立る前には

その布地に適當な手當をしなければなりません。

更にまた近頃は「湯通し濟」といふ印のあるものも見受けます、これはお客樣へおつとめとして呉服店などで特に「湯通」をしてあるものですから、そのまゝでもよろしいのです。

かうして整理してから仕立てますと糊氣のために硬ばつてゐるものは軟くなり、伸びちゞみもなく、體の濕みや、雨などのために狂ひの出ることもなく、一寸位では汚點などもつき難く、また布地に艶が出て、保ちもよくなつて來るものです。

以下地質による整理法について申述べませう。

木綿ものは水を通す　木綿ものは、そのまゝ仕立てることが多いやうですが、地質によつては（絣紬など）隨分、耳がたるんで中がちゞまつてゐるものがあります。それを引張つたりして平にしても、仕立てからすぐにまた伸び縮みが出來て來ますから、是非一度水を通すことが必要です。

まづ盥に、反物が充分浸るだけの水を入れ、その中へ反物を片端から順次に繰り入れて暫らくそのまゝにしておきますと、布地の灰汁や、不必要の糊氣もおちて、布がしなやかになり、伸び過ぎてゐた部分は自由に縮みますから引き上げます。

盥から出した布地は普通のお洗濯ものゝやうに捩り搾りをしますと皺になります、このとき出來た皺は何時までたつても容易に消えませんから、捩り搾りはいたしません。この場合は布を一方の端から第四十二圖のやうに、洗濯板の平の方に、疊み重ねて兩手でよく壓しながら水氣を切ります。即ち壓搾りにいたします。

第四十二圖

水氣がきれましたらば、風通しのよい所へ陰干にして、すつかり乾いた所で霧を吹き、布幅を適當に出しながら兩耳を揃へて棒に卷くとか、又はアイロンで布目を正しながら仕上をいたします。棒に卷く代りに叩棒にたゝんで壓をしてもよろしいのです。

これだけの整理をいたしますと、仕立も綺麗に上ります。よく紺絣などの新らしい着物ですと、顏や手足まで絣が落ちて青くなるのを見ることがありますが、そんなことはなくなります。

縮と薄地ものはアイロン　同じ木綿ものゝ中でも、縮やボイルのやうな薄物は前のやうな方法をとりますと一寸あとの始末が素人には困難になりますから、アイロンで疊み皺や布目の歪みをなほします。

尙縮ものには耳のひどく縮んだものがありますが、そんな時には水霧をその部分にだけ吹いて縮ませて置きます。またその反對に耳の非常につまつてゐるものは耳に鋏を入れておくことも必要です。

絞りは水を通す　絞りの浴衣などは、普通の木綿ものと同樣に、やはり水を通して蔭干にし、乾いた所で霧を吹いて叮嚀にたゝんで壓をいたします。

スフ人絹類はアイロン　近頃は人絹織物が非常に多く、また加工も上手になつて居りますので、隨分用ひられるやうになりました。然しこれはまた、非常に伸びて縮み難いものですから、最初によく整理しておくことが必要です。けれどもこれは水に弱いものもありますから、水には浸けずに、たゞアイロンで布目を正して伸びるだけ伸ばしておきます。

毛織ものは湯通しか霧吹き　毛織ものは特に縮みのはげしいもので、セルなどそのまゝに仕立てますと、一度雨に逢ひますと身丈がちゞむばかりでなく縦にも皺がよつて實に見苦しいものになります。毛織物も厚地、薄地によつて違いますが、ものによると一反で十數位も縮むものがありますからぬるま湯で湯通し、壓搾りして蔭干にし、すつかり乾いた所で、片端から霧を吹いて疊み、全體に湿りを與へて後裏表からアイロンを叮嚀にかけます。

絹織ものは湯通し　絹ものは出來るだけ專門家の手によつて、湯通しをするのがよろしい、糊氣のあるものをそのまゝ仕立てますと、一寸水が飛んでも直ぐに汚點になります。然し糊氣のないものでしたら、家庭で全體に火熨斗をあて、皺や折目をよく伸し、布目を直します。アイロンや火熨斗は必ず裏から當てることです。殊に黒羽二重などの場合には注意して、白金巾か手拭の上から當てます。直接に當てると、火熨斗のあとが光つて見苦しくなります。

縮緬、お召も同樣に　縮緬やお召は、どうしても素人には無理ですから專門家にまかせます。

銘仙類は糊抜き　銘仙類にはぜひ湯通しが必要です。專門家の手にかけますと、微温湯に通しますが、色合や品物によつてお湯の温度の加減がありますから、家庭では一寸無理かも知れませんので、水通しといたします。

先づ反物を解いたら、布の兩端を綴ひ合せて、輪にしておきます。これを盥の水の中に繰り入れて、暫らく水につけておいて、壓し搾りにすることは木綿ものと同樣です。そして水氣を切つたら輪になつてゐる兩端へ棒を通して、兩方へぴんと引張つて蔭干にします。丁度伸子張のやうにいたします。

乾いたなら輪をといて、布の兩耳を二十糎位の斜にもつて、引くやうにして幅を出し皺のある所へは霧を吹いて裏からアイロンをかけます。

アイロンは、敷縮緬の上にアイロン布團（なければ毛布二三枚）を敷いて、その上に布を置き、最初横にかけて幅を出し、次に縦にかけて丈を出すやう、交るがはるにかけます。

お召銘仙のやうに縮のあるものは、矢張り水につけると一寸素人の手には仕上げが困難ですから、家庭ではアイロンで布目を直す位にいたします。湯通しに出せば一番無難です。

その他、帶地、袴地、或は裏地にもせよ、最初は一度專門家の手にかけることが無難です。素人の生兵法で取りかへしのつかない事をすると、反つてあとの始末に困ります。

圖三十四第　蔭干の子簾

麻類は霧ふき　麻類はすべて霧を吹いて、掌で伸しながら暫らく棒にまいて置いて直します。澤山織のありますときは、アイロンをかけるのもよいでせうが、必らず霧をふいて濕りを與へた上でなくては火熨斗もアイロンも利きません。

麻は地伸しの場合のみでなく、仕立たものをたゝみますのにも掌で伸ばすやうにしてたゝみますと、よく皺がのびます。

第四十圖　アイロン掛の圖

特別に耳のつれたもの

耳のつれたものを、そのまゝ縫ひますと、いくら針目が揃つて、眞直ぐに、また糸ときがよくても、縫目が縮んで仕上りがきたなくなります。

前に申しました各種の方法でも耳のつれが直らないやうなひどいものには、特別な方法を講じなくてはなりません。

第一の方法　先づ布の右端を掛針か絎臺にかけて、左手で引張り、右手の指尖で耳をギューノ〳〵としごいて鏝をかけます。

第四十五圖　耳のしごき方の圖

第二の方法　それでも吊れて居ります時は、更に二三寸おきに耳に淺く斜に鋏を入れ、その上を鏝で伸します。

第四十六圖　耳に鋏を入れる圖

第四十七圖　耳の切り落し

大抵のものはこれで充分伸びます。

第三の方法　以上の方法でも、まだ充分でない場合、また布幅の廣いものゝときには、耳を切り落すこともあります。

図 霧を吹き掛ける耳

第四十八図

特別に耳の弱んだもの

これも昂れ過ぎたのと同様に始末の悪いものです。これは、前にも一寸申しましたやうに、耳にだけ刷毛か濕タオルで濕を與へ、その上からアイロンをかけます。また霧を吹きます時には、他の部分に水氣が附かないやうにするために、反物を巻いて耳だけを出し、その他の部分は紙かタオルですつかり包んで、霧をふきます。そして手早くひろげて、瞬々にアイロンをかけてゆきます。

用具について

どんな仕事に限らず、一つの仕事をきちんと仕上げるのにはそれに必要な道具を整へて置かなければなりませぬ。昔の人の諺にも、「よい仕事をする工人は必ず良い道具をもつてゐる」と申されて居ります。これは高價な贅澤な道具を揃へてゐるといふ意味ではなくて、仕事をするのに便ひよい道具が整つでゐるといふことでありまして、手頃なよく使ひならされた道具があればきつと思ふ存分な心地よい仕事が出來るに相違ありません。

それと同じやうに、お裁縫を上手に仕上げますのにも矢張りそれ相應の道具が一通り必要であります。今そのお道具の一通りについてお話いたしませう。

第四十九図

針箱　携帯を便利にする樣にといふ點から考案されて折疊み式のものや、小箱形のものやいろ〳〵の針箱がありますが、家庭用としては矢張り在來からある抽出し付の木製の針箱

が一番便利であります。三つ枠とか枠芯のやうな小切や糸類なども相當澤山に入れておくことも出來ますから調法です。

針　木綿、絹、紬の縫針、及び新針、メ針、待針などその用途によつて太さ長短を擇びます。大體に於ては各自の指を標準にして使ひ易い長さのものを撰ぶのが最もよいのですが、木綿の縫針でしたらば「三の二」「三の三」絹針ならば「四の二」「四の三」位が適當とされて居ります。新針は木綿物には「三の五」、絹物には「四の五」を用ひます。メ針は新針よりも稍短いものがよく、場合によつては新針を代用してもよろしいのです。待針は便宜上新針を用ひてもよろしいのですが、時に待針專用のものが便利であります。

すべてお裁縫をする時には初めに針の總數を數へ、最後に再び調べて見ることが必要です。針一本はお金に見積れば僅かな代價に過ぎませんが、その一本の針を粗末に扱つたために飛んだ間違ひを惹起すことが尠くはありません。幼兒のある家庭などでは格別この注意を忘れてはなりません。

以上の外に最近ではメリケン針と申しまして針孔（めど）の長い糸の通し易いものも隨分使用されて居ります。

糸　木綿糸、瓦斯糸、絹糸、小町糸、絹小町、カタン糸、メ糸、絹メ糸（ぞべ糸）、羽二重糸、縫ひ糸、繕ぎ糸などの種類があり、色合も用布に適當な色糸を用ひます。

糸巻　紙製、木製とあります。

鋏　大小及びその形狀もいろ〳〵ありますが、糸切り鋏としては普通の握鋏（日本鋏）、裁物用として西洋鋏の二種あれば充分です。

指貫　金屬製の物、布製、眞綿製などいろ〳〵ありますが、皮製のものが糸をいためないで一番よろしい。選びます。時によつては燒筥、チヤコ等を用ふることもあります。

筥　象牙、角、などありますが、いづれにしても布を損じないやうに正確に標附けをすることの出來るものを

尺度　竹製の兩面目盛のもので眞直ぐな薄手のもの、長さは五〇糎のが使用に便利です。

衿臺　折疊み式の衿臺の外に裁板に取りつけられるものや、掛針式のものもあります、いづれでも適當なものを選びます。衿臺に針山をつけて置けば一層便利です。

鏝　先きの細いさし鏝と、筥代りに用ひる三德鏝の二種類がありますが、普通の場合には先の細いさし鏝が使用に便利です。いづれも金性のよいものを選び、繞くときは直接火にあてずに、熱灰の中に深くさし込んで、鏝の背中から燒きます。繞け過ぎた時には冷たい灰の中で冷まして用ひます。水の中などに入れて冷ますと忽ちに鏝は惡くなつて使用に堪えなくなります。

鏝板　長さ五〇糎、幅二二糎位が手頃です。尙布張よりも日本紙張の方が鏝のすべりがよろしい。

アイロンと火熨斗　今迄は仕上げには必らず火熨斗を用ひたものですが、只今では大抵アイロンを用ひます。電氣アイロン、瓦斯アイロンなどがあります。家庭用としては三封度か四封度位が適度です。

火熨斗蒲團　白のキヤラコにどてら綿を一枚位を入れた長さ一五〇糎、幅キヤラコ幅一杯位のものが適當です。

霧吹　圖のやうなものが一般向で使ひよくまた安價ですが、口の取りかへられるものならなほよろしい。

襟型、袖型　金屬製のものか厚紙製のもの一揃をとゝのへておくと非常に便利です。

衣紋竹　普通のものより少々長目のものゝ方が仕上げを見るのに便利です。近頃は二つ折に出來る重寶なものもあります。

裁縫板　出來るならば膝の這入る位の高さの足付で長さ一五〇糎、幅四二糎位の一枚板のものがよろしうございます。近頃は家庭用として折疊むことの出來る便利な裁板もあります。然し輕便なのは折疊みの出來る厚いボール紙製であります。

衣類の疊み方

着物の疊み方

着物を長く保たせるのには、仕立方、着方等に注意することが必要なのは勿論でありますが、一つはその扱ひ方にもよります。どんな上仕立のものでも、疊み方が惡く、扱ひ方に無理があつたり、出す時に、下からひき出して、外の着物を皺くちやにしたまゝ置いたりいたしたのでは、どんな結構な品物でも忽ち惡くなつて終ひますから、着類の扱ひ方には充分の注意を要します。

本疊み　特別なものを除いて、本裁の長着は全部この疊み方を用ひますので、說明する迄もなく御存じとは思ひますが、肩の方を左に、裾を右に置いて平に伸し、臨、三つ衿、左右の袵と各々縫目を通して折り、上前と下前とがきつちりと重なるやうに背縫ひから折ります。袖は附の縫代できちんと折つて身頃をはさむ樣にたゝみますと、袖口の出だけが身頃から出ますので、袖口をつぶしません。そして裾口を少々出る樣に丈を二つに折り疊みます。男物の場合は袖附の縫目を二糎ほど袖の方へ寄せて折りたゝみます。袵を潰さないやうに、裾口を肩山から一寸出すやうに丈を

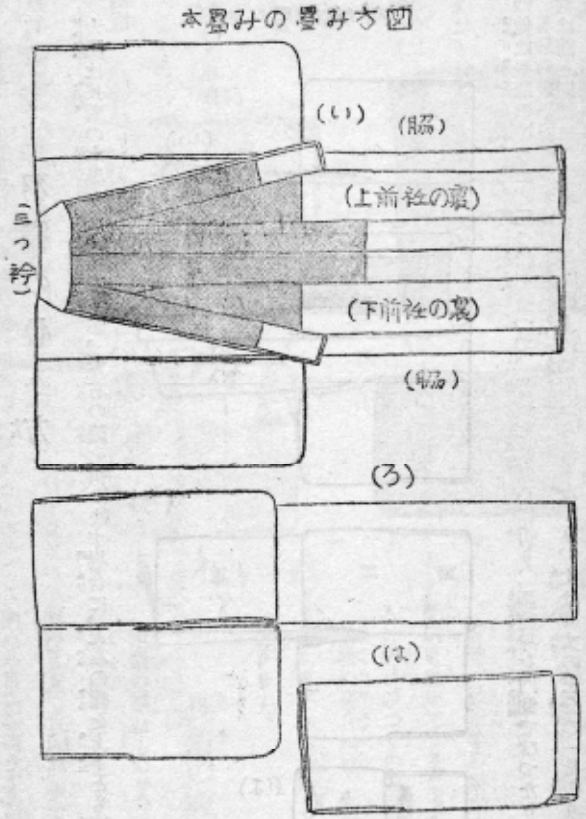


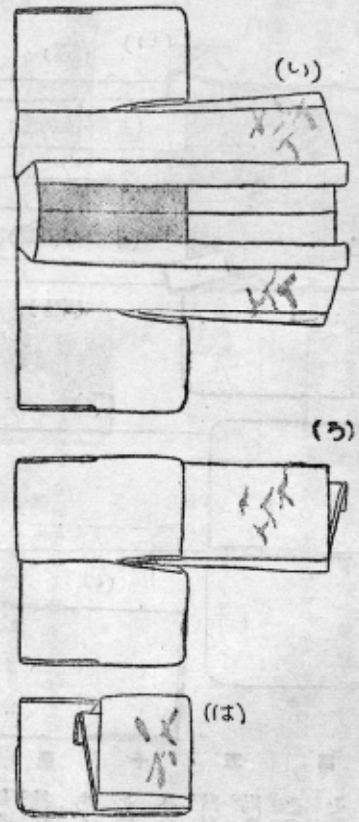
圖　本疊みの疊み方

折ることは前と同様です。（第五十圖參照）

羽織の疊み方

大體は長着の本疊みと同樣ですが、左右の脇を折ります場合に、左右の襠を上下とも幅を二つに折ります。

羽織の疊み方



第五十一圖

その他は長着のやうに、三つ衿を折つて、背縫を眞直ぐに折り、兩前身を內側でぴつたりと重ねます。

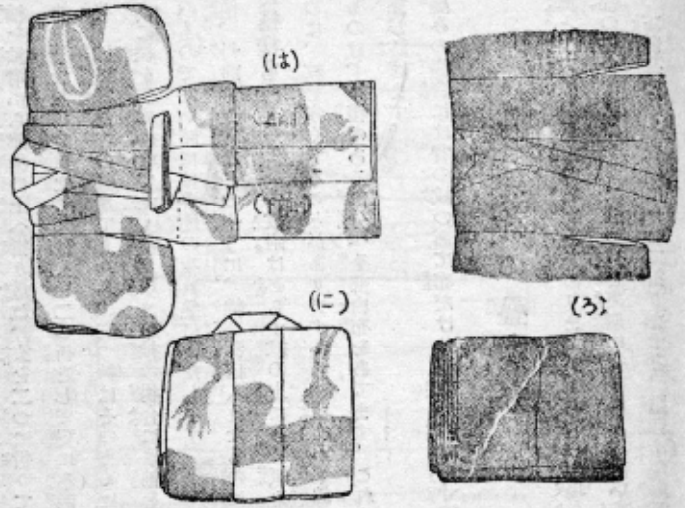
袖は前と同樣に、左右とも後身の上に袖附から折りたゝみ、丈は身丈の三分の一を折り返す位が、着たときの折目の工合がよろしい。然しこれは殘ふ入物をも考へて、丈の短いものに殘ふときには短く疊むことも必要ですが出來るだけ襠を折らないやう注意します。たとひ長い袖でも袖に折り目を附けることは避けたいものです。

圖二十五第

長着の夜具疊み

本裁の重ねものや、禮服などは重ねたまゝ夜具疊にいたします。これは中裁、小裁などの夜具だゝみと同樣ですが、本裁の場合は（い）圖のやうに三つ衿を縫目から裏の方に折りこみ、衿、褄下など上着、下着を叮嚀に合せて

圖方疊み夜具の長長



第五十二圖

振袖、紋附等の特別のものは、折り目に新聞紙を卷いて、その上を白い布で一卷きして入れ折目のつくのを防ぎます。

男物の場合には、背縫と袖口とを合せるやうにしますから袖附よりも、少々內側で袖幅を折ります。

左右の袖を袖附から前身の上へ折り重ね、丈を二つに折りて褄口を肩山から四糎ほど先に出し、もう一度二つ折りとします。また場合によつては丈を二つ折として更に(ろ)圖のやうに、三つ折の屏風だゝみに折り疊みます。

三つ身、四つ身などの長着でしたら、三つ衿はそのまゝにして(は)圖のやうに前を合せ、附け紐のあるものは、圖のやうに紐を二本合せてたゝみ、小さい袖の場合には袖をかさりに丈を三つ折の屏風だゝみにいたします。然し特別のものでない時には普通の夜具疊にいたします。

この他、丹前、夜着などのやうに、綿を澤山入れたものにはすべて夜具疊みを用ひます。

紋附と模様もの〻注意　紋附は必らず紋の上にあて紙をすることは在來行はれて居ることですが、紙の灰汁のために、紋を赤くすることがありますから、白布か眞綿を當てがふやうにいたします。

模様ものは、模様のある部分へ全部白布をあてます。これも紙よりは糊氣のない白布を當てた方が褶汚點や灰汁汚點が防げます。

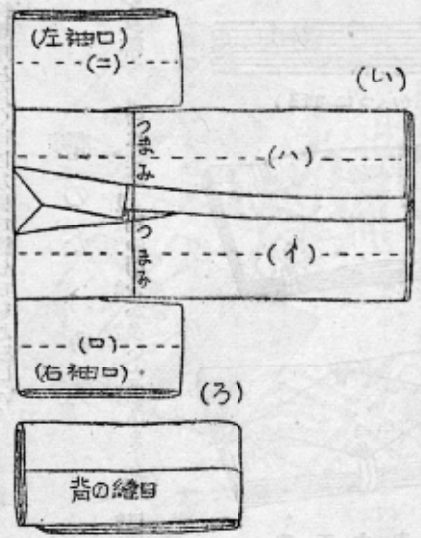
夜具疊みの場合には背の紋のあて布だけは、細い糸で一寸綴ぢつけて置きます。

長襦袢の疊み方

東京風と上方風の二種の仕立方がありますが、どちらの場合でも、(い)圖のやうに前身を合せて平らに置き、半衿が廣幅の場合は圖のやうに三つ衿を裏側に折り疊み、細い新衿のときは折らずにそのまゝ前だけを合せます。そして、下前身の脇を脊縫に合せて折りますと、點線(イ)の處が折山になります。その折山に右袖口を合せて折り返します。左も同様に折疊んで、(ろ)圖のやうに褄口を肩山から少々出して丈を二つ折にします。

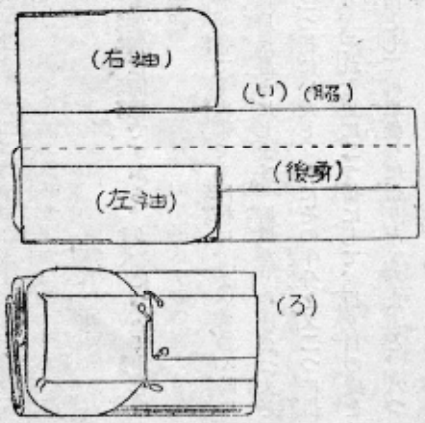
コート類の疊み方

第五十三圖



コート類の疊み方圖

第五十四圖



長襦袢の疊み方圖

半コート、長コート、合羽、被布等すべて、同様な疊み方といたします。

これ等のものは、今迄とは反對に、左に褄口を、肩を右手にして平に擬きます。そして前を普通に合せ、左手

で袷肩を持つて、右手で前を抛滅しながら、後身が上側になるやうに置き直します。そして、長襦袢と同じやうに、背の方で折りたゝみます。これを前に向けかへますと(ろ)のやうになります。

又、長襦袢と全く同じ方法で疊んでもよろしい。

帶のたゝみ方

普通の女帶　帶は主に女物の場合が多いと思ひますが、男帶でも要領は同様ですから、女物について申します。

合せ帶でも丸帶でも同様に、よいもの丶時には屏風疊みにします。屏風だゝみはまづ丈を二つ折にいたし、次にその半分を又二つに折り、それを更に二つ折にして、折り目の處を山として屏風疊みに折りだゝみますと、八つ折になります。これが大人もの丶たゝみ方です。

子供物でもこの要領で六つ折といたします。

合せ帶は地質の違い方を表側としてたゝみます。併し繻子と他のものとの合せの時には繻子地の方を中側にいたします。

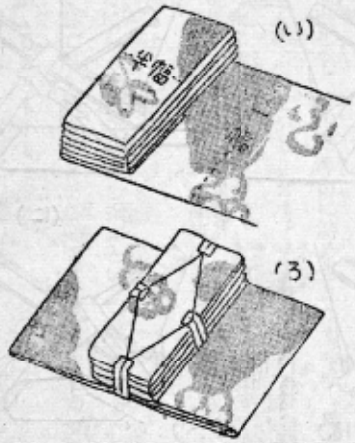
圖五十五第

飾りとぢのしかた　仕上げだゝみの場合でしたらば飾綴をいたします。その場合は、巾一糎五粍、丈六糎頭位の當紙を四枚用意します。そして大人物は圖のやうに、折山の角から一二糎位入つた處に、當紙を上下にまたがせて當て赤白の絹糸四本位でしつかりと綴ぢます。これは同じ寸法にして四ケ所へ綴ぢつけます。綴糸は結び目から四糎の長さを殘して切つて置きます。

また、八つ折の屏風疊みにして、幅の中央と丈の中央とを四糎づゝの深さにとぢ、その綴目に絹糸を菱形にかけておく仕方もあります。どちらを應用しても差支へありません。

飾糸は、普通は紅白二筋の糸を用ひますが、祝儀用には五色の色でするこどもあります。

名古屋帶　名古屋帶は半幅と一幅の處とがあつて、疊みにくいものですが、先づ半幅の處を廣い方の帶幅に合せて、(い)圖のやうに屏風だゝみとし、端が半端になりました時は、内側へ折り込みます。次にこれを中心として、一幅の方を屏風だゝみとし、(ろ)圖のやうにたゝみます。



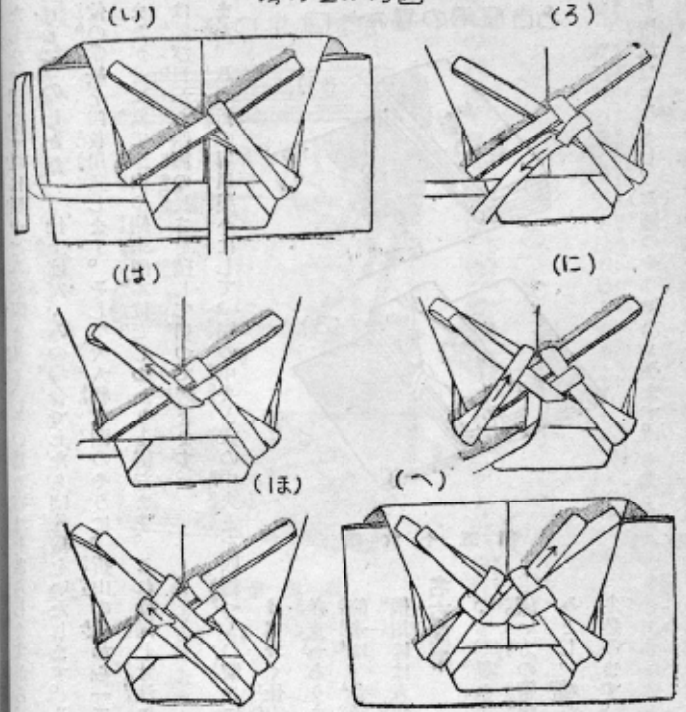
圖六十五第

飾紐は、前と同じやうにかけて仕上げをいたします。

袴の疊み方

男、女ともに後の襞からきつちりと折疊み、そして前にかへして、前の襞を折り、腰板が上になるやうに三つ折りだゝみとします。

紐の結び方　袴を(い)圖のやうに置き、先づ前紐を適當な長さに折つて、圖のやうに十文字に重ねましたらば、



第五十七圖　袴の疊み方

右の後紐を矢印のやうに、前紐の下を通して引きぬき、更に同じ紐を矢印の處へ卷いて引き出すと(ろ)圖のやうになります。その殘りの先を(は)圖のやうに左向に折り曲げて置き、左の紐も右と同樣に前紐を卷いて、終りを右向の前紐に重なるやうに、矢印から引きぬきますと(へ)圖のやうになります。男女とも同樣に疊みます。

衣類の藏ひ方

仕立ものを藏ひますには、箪笥でも行李でも、すべてぎつしりと詰らないやうに工夫いたします。箪笥の深い抽出しや、行李に澤山に詰められたものは、着ないうちに、藏ひくづれがして、折角のよい仕立も臺なしになつて終ふことがあります。平常着などは止むを得ないとしても、上等の衣類は、出來るならば一揃ひづゝの入れ物に藏ひ度いものです。近頃は紙製などで、濕氣や蟲を防ぐやうな便利なものも考案されてゐるやうです又、昔からの物ですが、疊紙は非常に重寶なものです、防蟲の疊紙などもありますから、そんなものを利用することもよいと思ひます。

とにかく適當な藏器を撰ぶといふことと、も一つには長く藏ひ放しにして置かないで、度々風を通したり、日に當てたりすることが必要です。そしてその度毎に疊みかへして、折山をかへておきますと保存もよく、蟲害にかゝることもありません。

毛織ものは、防蟲劑を布か紙に包んで、着物の間に二つ三つ入れ、ハトロン紙又は新聞紙にてその着物を石鹸包（石鹸が包んである紙の包み方）のやうな包み方にして二重位につゝみます。

その他藏器の中には、處々に防蟲防濕劑を入れておくことは必要ですが、金銀糸を用ひてある織物の藏器へだけは絶對に入れることはさけます。藥品のために、金糸が變色いたします。

着物を藏ふときには衿垢、その他の汚れを必らず落すこと、又アイロンをかけること（毛織ものなどは殊にその必要があります。）が肝要です。この注意を怠りますと、藏器の中で衣類を悪くしてしまひます。また着物を出す場合に下の方から引つぱり出さないやう注意しなければなりません。

二、襦袢の部

肌襦袢について

肌襦袢は、男女、大小の違によつて、寸法に多少の相違はありますが、仕立方は殆ど同一ですから、代表的な女物本裁について細かく説明し、あとは、要點だけを述べることにいたします。

地質

晒木綿・眞岡木綿・麻・縮・綿ネル等、季節によつて適當なものを用ひます。又近頃は、肌ざわりがよくて、衛生上、取扱ひ上の便利なために、ガーゼが非常に用ひられ、年々その需要が増して參りました。

本裁女物肌襦袢

用布

身丈によつて總用布の丈が定りますが、肌襦袢はあまり長くない方がよろしい、まづ五五糎から六五糎位で普通は充分です。袖は裁切二六糎として、總用布は並幅で四〇〇糎内外で出來ます。

仕立上げ寸法

	丈	二四、〇 糎
袖		

袖附　一九、〇
袖幅　半幅いっぱい
身丈　六五、〇
身八つ口　二二、〇
後幅　二八、〇
前幅　二六、〇
衿肩明　上着より二糎つめる
衿幅　五、〇
馬乗　二二、〇

裁方と積方

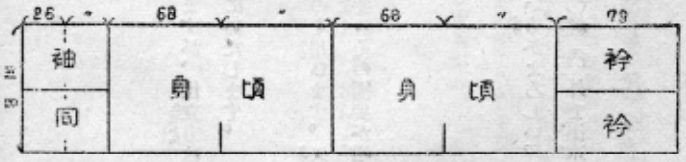
用布並幅四〇三糎

裁ち切り袖丈二六糎、同身丈六八糎

第一圖の寸法によつて、先づ用布の片端から第二圖のやうに折り疊みます。初めに、袖丈二六糎を二つ、次に身丈六八糎を四つ、次に衿丈七九糎を折り、右側の布の揃つてゐる方へ鋏を入れて、袖、身頃、衿とそれ

第一圖

本裁肌襦袢の裁ち方



公式　袖丈×2＋身丈×4＋衿丈＝總用布

26×2＋　68×4＋　79＝403

公式　（總用布－袖丈×2－衿肩明及衿先縫ひ代）÷5＝身丈

（403　－　26×2－　11　）÷5＝　63

公式　身丈＋衿肩明及び衿先縫ひ代＝衿丈

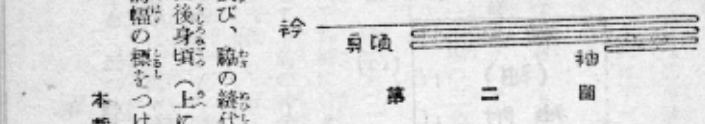
68　＋　11　　＝79

それ切り離します。

次に上の布から、衿は中表に布幅を縦に二つに切り、身頃も中表に二枚合せて、衿肩明を切ります。袖は布幅を直二つに折つて切り離し、中表に二つ折にして、兩袖を重ねて疊みます。

第二圖

裁ち切り折の布用方



標附け方

袖　二つ折して重ねてある袖を、袖山を左に、布の耳を向ふとして、これを袖口とします。耳を口にすることは、口を縫ける必要がなく具合がよいものですから、すべて肌着類はかういたします。

次に第三圖（いのやうに、袖丈、袖附、袖幅、と寸法通りに標を附けましたらば、袖山の兩端に小さく山標をします。

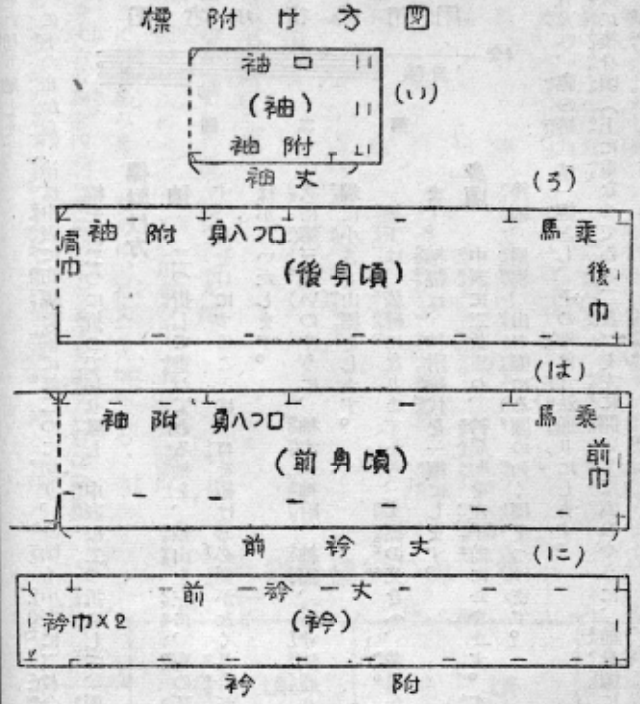
袖下は、袋縫になりますから、丈標の先きへ、裁目から八粍として、袋縫の濟縫標をします。袖幅は、袖附縫代を一粍にします。

身頃　中表に二枚重ね、衿肩明を左手前におきます。丈、背縫、袖附、身八つ口、馬乘、後幅、肩幅、山の順にろ圖の如く標をつけます。

背及び、脇の縫代は一粍とし、その他は寸法通りにします。

次に後身頃（上に重なつてゐる一枚）を左に開いては開のやうに、前身頃に後身頃の標をはつきりうつし、据に前幅の標をつけます。それから衿肩明まで斜に衿附の標をつけ、前の衿丈の寸法を計ります。

衿　二枚重ねたまゝ、裁ち目を手前に置きます。(に)図のやうに、左端から山接ぎ(縫代一糎)衿肩明(裁切り寸法から縫代、きせ代を引いた寸法)前衿丈と標を附け、次に手前へ縫代一糎として衿附の標をつけ、それから衿幅(衿幅の二倍の標)を標します。



第三図

縫ひ方

袖　外裏にして袖下の broken 縫を袖附の方の端を二糎程残して縫ひ、折をつけて裏返して、今度は兩端一ぱいに縫ひます。これ

を袋縫ひと申します。袖口は布の耳を用ひますからそのまゝにして置きます。

袖口にレースでも附けますのならばこの時につけます。

身頃　背は二重縫にします。初め標の通り待針して背縫をし、次にその先きを耳から三糎内をもう一度縫ふ方法で、これはすべて單衣の背縫に用ふる仕方であります。縫ひ終りましたらば、衿肩を右にして手前に折をつけます。

脇縫は左右ともに身八つ口から馬乗の標の間を縫ひ、上下共に抄留をして前身頃に折り、縫代を上下共斜に割つて襟をかけます。次にこの縫代を裾から袖附まで身頃に耳絡けに絡けつけます。

裾は一糎幅の三つ折絡とし、馬乗の下の角は三角に折つて絡けつけます。地質の厚いもの、時は、すべて千鳥掛にします。

衿附　衿は先づ二枚を細かく接ぎ合せて縫ひ目を割り、隠し襟をかけておきます。

衿山を背縫に合せて待針をし、これから下前の方へ衿肩廻りから順々に標を合せて片身だけに待針を打ちます。そして下前の衿先から衿布の方を見て縫ひ上げます。衿肩廻りは細かく縫ひ背の中央まで縫ひましたらば、針を一針返し、前と同様に標を合せて、上前へ縫ひ廻します。縫代は衿に折り返します。

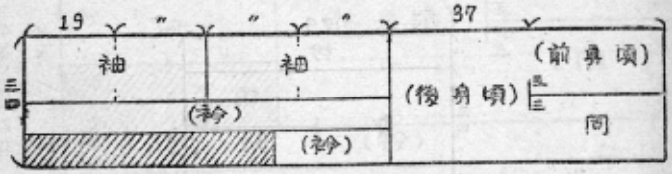
この場合身頃の縫ひ代は背の處で一糎、衿肩明の處で四粍とします。

肌着類は、度々洗濯するものですから、衿の中の縫ひ込みを丁寧に、但し目立たないやうに綴ぢつけ、三つ衿には布（三つ衿芯）を入れてこれも前綴込に綴ぢつけます。

小裁、一つ身襦袢の積方裁方

（一二歳乃至五六歳迄）

一つ身襦袢の裁ち積り方



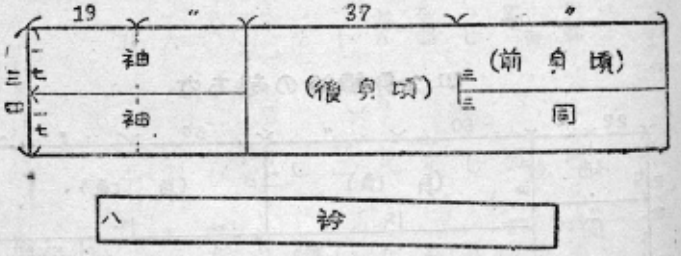
第五圖

用布　並巾一五〇糎

公式　袖丈×4＋身丈×2＝總用布

（總丈－袖丈×4）÷2＝身丈

一つ身襦袢別衿の裁ち方



第六圖

用布　並巾一一二糎、衿布として別に並巾四つ割八四糎

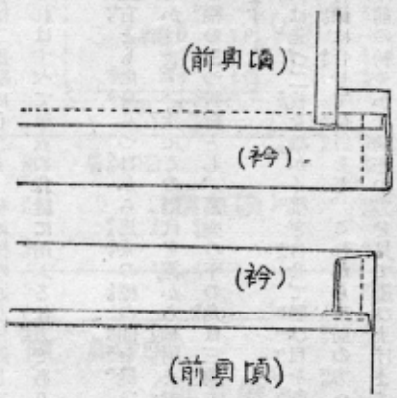
公式　袖丈×2＋身丈×2＝總用布

（總用布－袖丈×2）÷2＝身丈

衿先は、衿幅を二つ折にして標を合せ留から四糎先を縫ひ、折は留際からきちんと裏の方へ折り、縫込を衿附縫代にとぢつけ表に返します。左右共同様にいたします。

衿幅標の通りに折つて處々に待針をし、下前から縫けてゆきます。この時布を心なしに扱ひますと伸びて縫付けにくくなりますから布を伸ばさないやうに注意します。

衿先きの縫ひ方



第四圖

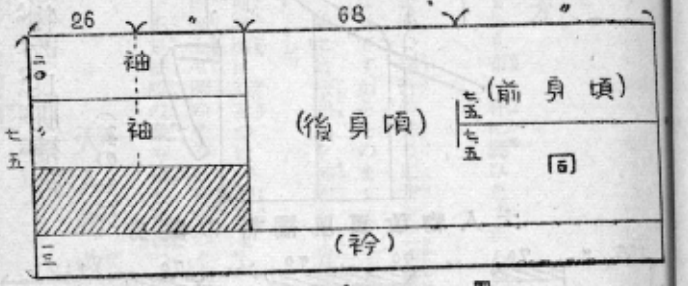
袖附　先づ袖山と肩山とを合せ、その他の標を合せて待針をし、袖の方を見て縫ひます。袖附の縫初めと終りとは抄ひ留をし、山で一針返し折は袖の方に折つて身八つ口と振八つ口を耳綴にします。

附　肌襦袢は男物も子供物も寸法に相異があるだけで仕立方は同様ですから、以下いろ〳〵の裁方と積方を示すことにします。

前にも申したやうに肌襦袢は度々洗濯する爲めに衿肩廻りが一番早くいたんで穴が明きますから、肩當をつけるのが宜しいです。然し夏季用の物は餘り大きくつけますと暑くるしくなりますから、ほんの衿肩廻りにだけつけます。

本裁肌襦袢の裁方積方

本裁肌襦袢の裁ち方



第九圖

公式　袖丈×2＋身丈×2＝總用布
(總用布－袖丈×2)÷2＝身丈

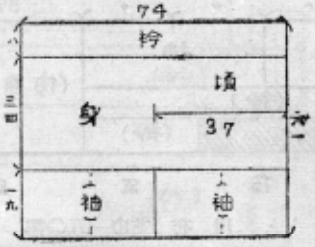
標準寸法

	男物	女物 中裁(大)	同(小)	小裁
袖丈	二六糎	二四糎	二二糎	一七糎
袖幅	一七	七	一五	一五
袖附	全部	九	一七	一三
身丈	七五	六五…六八	五五	五〇
身八つ口	一	一二	一〇	八
馬乗	一五	一二	一〇	八
衿肩明	上着より二耗つめる	上着より二耗つめる	七・五	三
後幅	三〇	二八	二八	一六
前幅	二五…二六	二六	二三	一五
衿幅	五	五	三・五	二・五

中裁、四つ身襦袢の裁方積方

(六七歳より十二三歳まで)

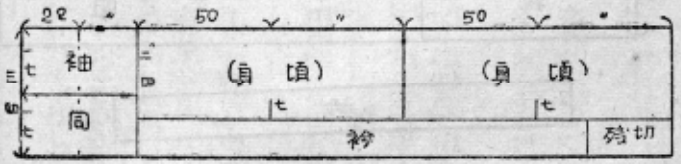
四つ身廣幅物の裁方



第七圖

用布　大幅七四糎

四つ身襦袢の裁ち方

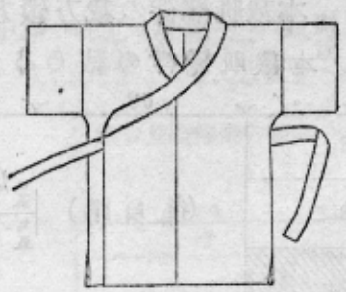


第八圖

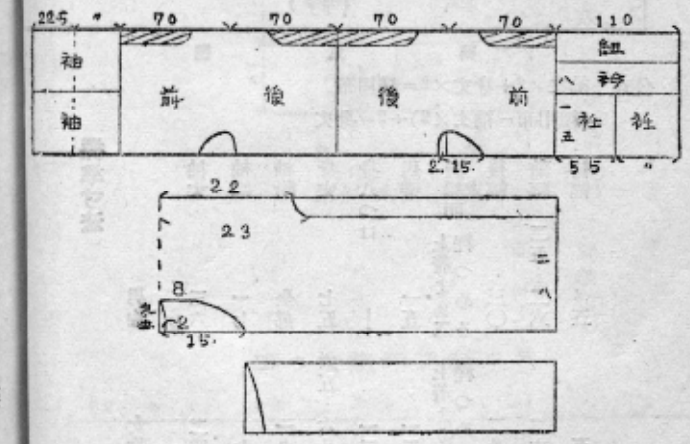
用布　並幅二四四糎

公式　袖丈×2＋身丈×4＝總丈
(總用布－袖丈×2)÷4＝身丈

大人物改良肌襦袢（其の一）



大人物改良肌襦袢の裁方



第十圖

用布　晒木綿　四二五糎

裁方　圖のやうに袖は半幅袖にして丈を二二糎五粍の二倍を取り、次に身頃の七〇糎の四倍をとり、殘りから衽と衿と紐を取ります。身頃は分部圖のやうに前刳は肩明を九糎五粍切り込んで肩山から前へ八糎の間は眞直ぐにそれから一五糎の所へ衿めの線を引いて中央で二糎ほと刳つて切り落し、後は二糎繰越を刳ります。脇は袖附を二二糎にし後幅を二六糎にして殘りをずつと刳り落します

裸附け方　どこもかも布一杯に縫ひますから別段裸附の必要はありません。

縫方

袖　普通の襦袢のやうに背を二重縫にして、それから兩袖をつけ、袖下からつゞいて脇を縫ひます。袖口は耳ですからそのまゝにしておきます。

身頃　脇には紐通しを袖附の下五糎位のところから一〇糎ほど明け、裾は馬乘を矢張り一〇糎位あけておきます。

次に前身頃に衽をつけ、裾縫をし、紐通しの始末をしてから衿をつけます。

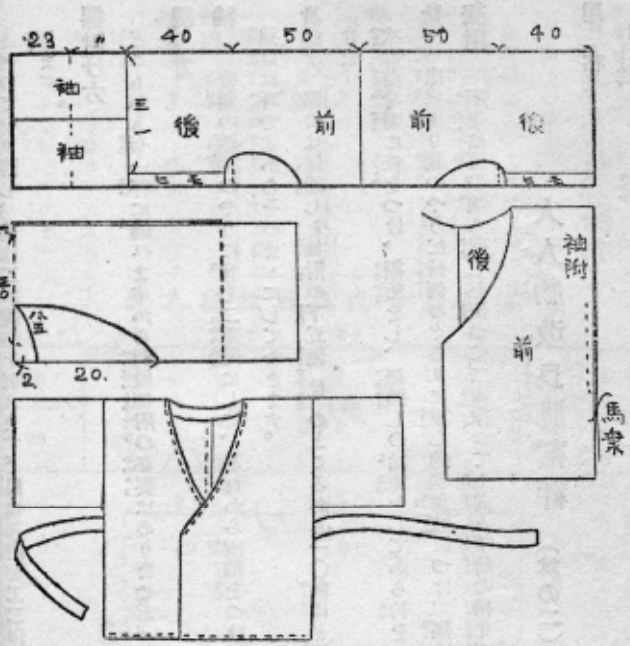
衿　出來上り圖のやうに衿刳のぐるりに少し釣り加減につけ、幅は出來上り三糎にして縫け上げます。

紐附　不足は脇の裁ち落しを使つて二本作つて上前と下前の衿先下につけて出來上りとします。

大人物改良肌襦袢（其の二）

用布

晒木綿　二二六糎



第十一圖

裁方

これは主に汗除けに着る襦袢ですから丈を短くして後に紐をつけて前で締めるやうにします。圖のやうに袖は半幅にして後身頃を四〇糎に前身頃を五〇糎丈に取ります。そして前衿刳は部分圖のやうに半幅を定めてそこから八糎五粍と樫して前へ刳ります、後は二糎の刳にします、そして背の縫代の深い分は裁ち落して紐布に使ひます。

縫方

袖　耳を袖口にして袖下は袋縫にしておきます。

身頃　背を袋縫にして脇を縫ひます脇は袖附のところは一糎の縫ひ代にしますが、馬乘の方は自然に縫ひ代が消えてなくなるやうに深く縫つておきます。さうしますと馬乘の耳紐をする必要がありません。

裾は三つ折縫にしておきます。

衿廻りにはバイヤスをつけて裏側できつり紐にしておきます。

袖附　普通の襦袢と同じやうに附けます。

紐附　後から裁ち落した布を二枚接ぎ合せて紐け、それを背の中央で袖附より少し下つた位置に一つ身の背紐のやうにかゞりつけておきます。

本裁女物單衣長襦袢

地質の種類

單衣の長襦袢は、初夏から初秋へかけて用ふるもので、從つて期間が長いので、用布の地質の種類も非常に多く、袷やセルの下着用として用ふるものと、極暑の薄物用とは自然と異らなければなりません、故にその用ふる季節によつて、地質柄合を撰ぶことが必要です。

地質としては縮緬、絽縮緬、錦紗、平絹、紋ハレス、ジョーゼット、麻、ボイル、メリンス等が用ひられます。

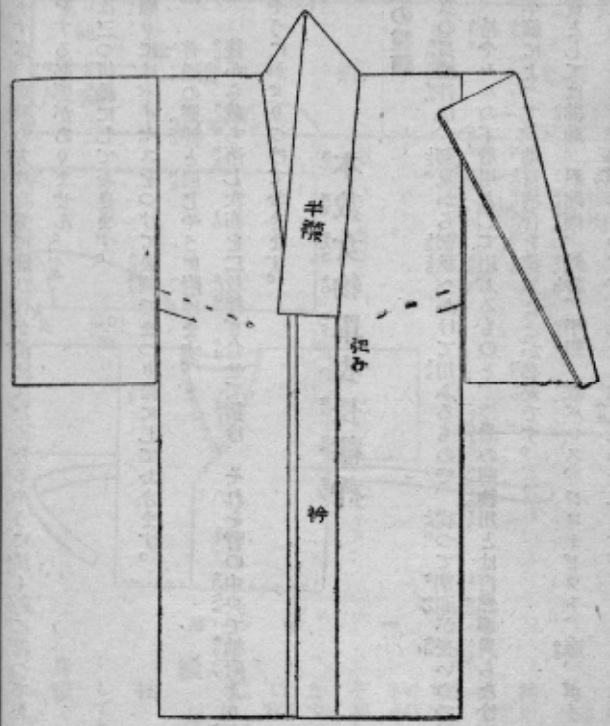
仕立るときには、地質によつて、それ〳〵地直しいたします。

また反物には型つき、染斑等がありがちですから、注意して、なるべく見えない所へ廻すやうにいたします。

仕立上げ寸法

袖　丈　着物より一糎つめる
袖　口　摺袖
袖　附　着物より一糎つめる
袖　幅　着物より四粍つめる
身　丈　着丈
後　幅　着物と同寸或は肩幅と同寸
前　幅　着物より四糎廣く
身八つ口、後一二糎
前一六糎

第十三圖　仕立上りの圖



つめる

衿　幅　廣衿　一一糎
　　紳衿　上五糎五粍、下七糎五粍

前の強み　四糎

裄　　着物より四粍つめるか又は同寸

以上は普通寸法を示しましたが、身丈を少し長目に裁つて内揚をして置きますと、裾の切れた時にそのまゝ切り下げることも出來ます。

又袖附を前後で二糎の附け違ひ、即ち後を普通の袖附より二糎少くしておきますと、着心地のよいものになりきす、然しこの附違ひは襦袢だけでなく、着物も羽織もすべて同様でなければ袖の振が合ひませんから反つて見苦しいものになります。

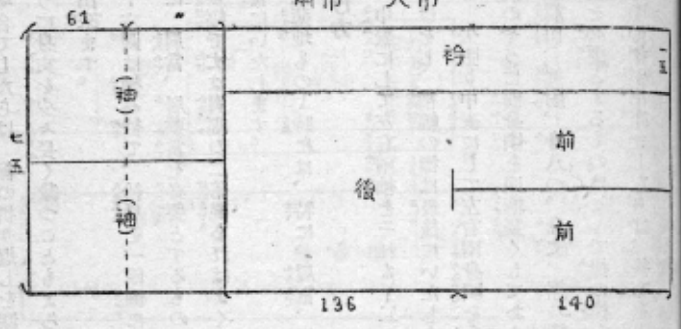
裁方と積方

總て用布は、公式の示す通り、袖丈の四倍と、身丈の四倍へ、衿の用布を加へたものが全體の用布になるものですが、長襦袢の衿は、着物と違つて、裾まで附けなければなりませんから用布も非常に澤山要します。故に衿の總丈を見ますには、身丈に衿先縫代と衿肩明、前の強みを加へたものの二倍が總丈となります。又山の接代を豫め見積つておきます。

第十三圖は別衿仕立で充分な用布をもつて仕立てる場合に用ひますが、用布の都合によつて、別衿に出來ない

綴じ開かず

用布　大巾

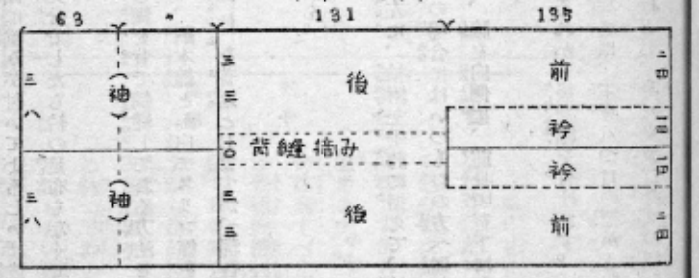


第十五圖

公式　袖丈×2＋後丈×2＋前の弛み＝總用布

{總用布－(袖丈×2＋前の弛み)}÷2＝後丈

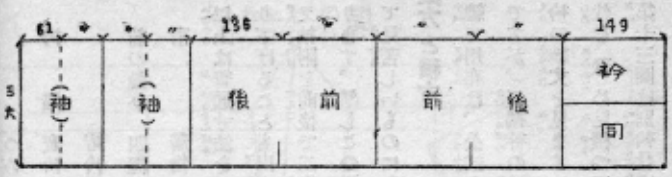
用布　大巾



第十六圖

公式　袖丈×2＋後丈×2＋前の弛み＝總用布

{總用布－(袖丈×2＋前の弛み)}÷2＝後丈

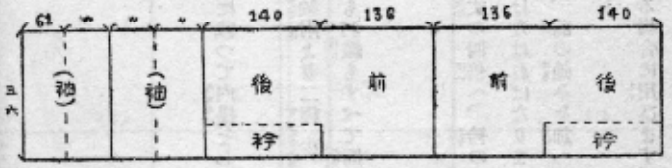


第十三圖

公式　袖丈×4＋身丈×5＋前の弛み×2＋衿肩明及び衿上下の縫代＋前の弛み＝總用布

{總用布－(袖丈×4＋前の弛み×2＋衿肩明＋上下の縫代＋前の弛み)}÷5＝後身丈

後身丈＋前の弛み＝前丈



第十四圖

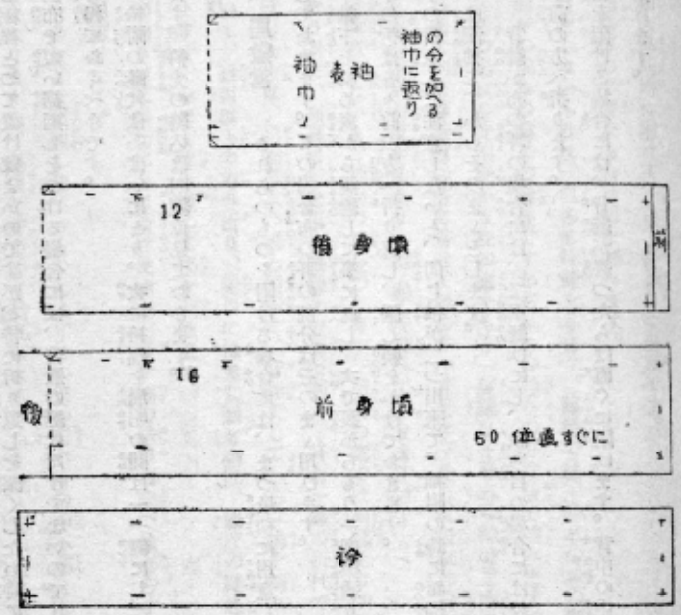
公式　袖丈×4後丈×4＋前の弛み×2＝總用布

(總用布－袖丈×4－前の弛み×2)÷4＝後丈

場合、或は痩せた體格の人には摘み衿を用ひます。用布も少く從つて輕い襦袢を作ることが出來ます。第十四圖はその裁方を示したものです。

以上並幅物の裁方二種によつて、廣幅に應用しますと次の第十五、第十六の兩圖となります。

第十五圖は後幅を肩幅に足りる丈け取つて、殘り幅を衿としたものです。然し衿丈がこのまゝでは不足しますから、半衿下に足し布をします。然し用布が充分あ



第十七圖　標附け方

標は肩山、袖附、身八つ、身丈、褄の綜代、背縫、と標し、それから後身幅を付けます。

内揚を必要とするものはこゝで揚の標をいたします。揚標の高さは、下身八つ口の標から四糎下に付けます。

後身頃の標が出來ましたらば、後布を左に取り除けて前身だけとし、身八ツ及び身丈の標を四糎下へつけ直し前幅の標をつけます。寸法は、據から五〇糎位眞直ぐに、それから上は衿肩から糸を張り、肩から一二糎の處に心持ち丸昧をもたせながら斜に衿附の標をします。その他の標は、先の後身の標づけと同樣ですから、標を明瞭につけて置きます。

倘注意すべきは、背縫の耳の場合は普通の縫代で間に合ひますが、斷ち目の場合には、袋縫になりますから幾分縫代を多く要します。

又場合によつては、背縫だけを殘め縫つておいて、後から標附をするのもよい方法です。

又褄を三つ折衿とする場合は綜代

標　衿　の　部

る場合でしたらば、褄の折り返しを深くするやうにすると據に重みが付いてよろしい。或は内揚げをして置くやうに身丈を少々長く裁つこともよろしい。從つて用布が充分でしたら衿の足布もなくてすむやうに裁つことも出來ます。

第十六圖は摘み衿で、衿肩を一四糎に切り、廣い部分の一〇糎を背で摘縫しておく方法です。

別に、肩當、居敷當を必要とするものには表の地質によつて、晒木綿とか白モスリン等を用意します。肩當布は並幅で丈は肩幅の二倍强あればよく、居敷當は並幅四〇糎位を普通としますが、都合によつては幅も丈も適當にいたします。

また薄地ものゝ時には、特に、肩當、居敷當などを用ひません。

標附け方

袖　中表にして左右兩袖をそれ〳〵二つ折にして重ね、輪を左に、袖附を手前に据えて、袖山、袖丈、袖附と標つけをし、袖幅の標は最後にいたします。但し布の耳は單の場合にはいつも口の方へ廻します。

身頃　矢張り中表にして左右兩身頃を合せ、衿肩を左手前に、脇を向側に、前身頃を下にして据えます。この時圖のやうに前身頃を四糎長くしておきます。

標は肩山、袖附、身八つ、身丈、褄の綜代、背縫、と標し、それから後身幅を付けます。

内揚を必要とするものはこゝで揚の標をいたします。揚標の高さは、下身八つ口の標から四糎下に付けます。

後身頃の標が出來ましたらば、後布を左に取り除けて前身だけとし、身八ツ及び身丈の標を四糎下へつけ直し

を二糎程とつて置けばよいのですが、特に折り返しを深くしたい時には、その分だけ餘計に見込んで置くこと又別布で短い裾廻しをつける場合には、普通の縫代だけでよいのですから、各々の場合によつて變化することを心得ておくべきです。

衿　衿附の縫代は一ぱいにとり、次に衿幅を肩明の間は一一糎にし、裾では十五糎の幅にしてその間に標をつけます。衿先の縫込は四糎位見ておきます。

褄　方

肩當、居敷當　これらのものを附ける場合には、まづ最初に用意して、周圍を裏側に伏せて一目落しに縫し縫しておきます。この場合布の耳の部分はそのまゝ用ひます。

袖　袖下を初め表から淺縫して裏に返し、次で裏からもう一度標通り縫つて袋縫とします。

袖下の折は各々前の方へ折り返し、縫し縫をかけておきます。

袖下の折返しに注意しないと、同じ袖が二つ出來て、袖附の時に面倒になりますから、この點に注意します。

袖口は潤袖ですからそのまゝとします。

身頃　背縫が布の耳の場合には、二重縫ひにし、裁ち目の場合には袋縫とします。折は衿肩を右に褄を左にして手前の方へ折ります。

肩當を附ける場合には、背縫が終つたらば直ぐに附けます。背中の中央を背縫に合せて、單衣物の肩當と同樣に附けます。

居敷當も亦同時に附けて了ふ方が扱ひに便利です。

次に內揚げの必要なものは揚を縫ひます。

內揚げをしないものは、直ちに脇縫をします。脇縫では、身八つ口の標が、後と前とでは四糎違ひますが、これは前身の摘みの爲めの弛みですから（この弛みの分は後で摘みます。）標通りに待針して縫合せます。そしてその脇縫の縫目の先四粍か五粍の處をもう一度縫ひ下身八つ際で二本の縫目が一緒になるやうに、四糎位の處から斜に初めの縫目の方に寄せて縫つてゆきます。そして最初の縫目を前の方に返し、二度目の縫目は割つて、二本の縫目の眞中あたりへ鐵鏃で押へておきます。

この時注意しないと、袖附の耳がつれます。肩山の處では肩幅より四粍廣く折をつけ、身八つ口まで耳のつれないやう斜に、布裏に折を返し脇縫まで平に割り、耳を一糎の折代で伏せ、身頃へぐるつと紐付けます。

內揚げの仕方は、男物單衣の揚と同樣に、背縫をしてから、揚を摘みます。この時脇幅より外の縫込は縫はずにおいて、縫目は下の方へ折り、縫目にはぐし鏃をかけ、揚げの縫込の峰を表へ細かく針目を出して身頃へ紐付けます。そして、脇を縫つて揚を開きます。

褄は標通りに三つ折にして紐けますが、背や脇の縫目の處では必ず表へ針を拔き出して一針返ししつかりと留めて紐けます。

メリンスなどで堅製しやすいものには、この三つ折ぐけの中へ芯としてメリンスの橫切れ或は薄地木綿の細い繻珍を入れますと、堅製を防ぐことが出來ます。

衿附　衿は、衿先を四糎位の縫込みと見てありますから、衿丈に接ぎを入れる必要のあるものは、その積りで衿丈を大體計つて接ぎあはせます。接ぎ目は出來るだけ小針に縫ひ、割鏝をかけて醒錵をしておきます。別に新モスの衿芯を表衿と同寸位用意して表衿の上につれないやうに重ねてぐし錵をかけておき、二枚一緒に衿附の標通りに合せて一糎の縫代で縫ひます。

縫代は衿の方へかへし、衿先を縫ひ、標の通り折をつけ、中が弛んだり、つれたりしないやう注意いたします。三つ衿はよく衿肩の切れ目をそろへて三つ衿布を綴ぢつけ、裾から紮けてゆきます。紮けをはりましたらば、紮目と峰へ平鏝をかけます。これは衿の中へ折込みを平らに落ちつかせるためでありますから丁寧にかけておきます。

衿先は衿幅を二つ折にして、衿幅標を合せ留から四粍先きを縫ひ、折は衿の縫留の處から折つて縫込を衿附にとぢつけ、表にかへして紮けつけることは、本裁肌襦袢と同様です。

袖附　先きに身頃を縫ひますときに、四粍だけ廣く脇伏せしてありますから、袖を着ける場合にはそのまゝ肩の山標と、袖の山標とを合せ、袖を手前にして中表に合せて縫ひます。折は袖の方に返します。

袖が着ましたらば、振を袖幅標から折つて、紮けつけます。その時袖附の縫込みも同様にくけ附けます。

最後に身八つ口の下際で、前の弛みの四糎長くなつて居る分を摘んで表身頃に針目を出してとぢつけておきます。

この仕立方は、前衿先きが後よりも長くなつて居りますから、着た時に前が吊り上がらずに大變着工合のよい襦袢であります。

これに半襟をかけて仕上りといたします。

半衿　同じ丈の芯と裏衿とを用意して三枚一所に一方の端を縫ひ、芯布は半衿に重ねて、普通掛衿のやうに本衿へ紮けつけ、裏衿も同様に衿の裏へ紮けつけます。

本裁女物袷長襦袢

大體は單衣長襦袢と同様ですから、異る部分だけを說明することにします。

袷物ですから、表用布の外に裏用布を用意して置きます。裏用布は胴裏と、裾廻し、袖裏ですが、袖は振袖にすることもあり、又裾廻しを引返しにすることもありますので、一様ではありませんが、一般に袖裏は表布につりあつた地質の色柄を用ひます。また、裾廻しは普通の着物よりは少なく二五糎位を普通とします。又平常着用のものには、並幅もの半幅の横切を用ふる場合もあります。

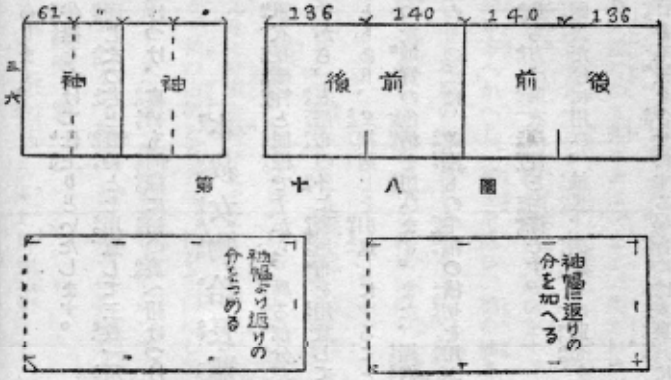
裁方

表布の裁ち方は單衣襦袢と同様です。

裏布は胴裏だけに用ひ、袖裏、裾廻しは別布を用ひます。

標附け方

袖　袖口を毛抜き合せにする場合には表裏共に同じ標附にします。又表布を裏の方に折り返した（大名袖）



第十八圖　第十九圖　第二十圖

袖には、表袖幅の縫代をいつぱいにして、その中から仕立上げの袖幅を引いて裏へ返す寸法を定めます。裏袖幅は仕立上りの袖幅から、表袖の返りを引いた殘りが裏袖幅となります。裏幅の縫込みは八つ口の方へ入れ、袖丈、袖附、山の標をつけることは、單衣と同樣です。

身頃　單衣と違ふ處は、裾が三つ折りでありませんから、裾の普通縫代だけをとつて置きます。

裏身頃　總丈は表身頃より袵の二倍だけを長くします。裾廻しは、着物の場合と同樣ですが、横布を用ふる時は、背から二つに折り、背の縫代、後幅、脇の縫代、前幅の標附の順序に標をつけます。又縫目を入れずに横布をそのまゝ用ひてもよろしい。

衿　單衣と同じであります。

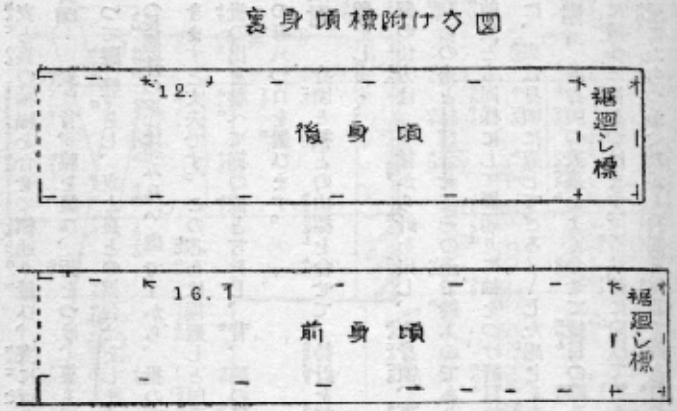
縫方

袖　表袖と裏袖との袖口を縫ひ合せ、裏袋の方へ折をかへして、きせ山から五粍の處に二綟五粍の針目で疊縫をかけます。

毛抜き合せのときは致しません。

次に袖下を縫ひ合せます。袷の袖下と同樣に四つ縫ひとしますから、袖口の折山から（大名袖のときには表布の方に、毛抜き合せたらば表裏の合せ目が折山となります。）二つに折つて表裏を合せ、すれないやうに待針を打つて縫ひます。このとき注意しないと、同じ袖ばかりが二つ出來ますから、一方は表を見て縫ひさしたら、片方は裏を見て縫ふといふやうに注意いたします。

袖下の四つ縫は、振の方一〇糎位手前迄縫ひさしたらば一と針返して、表、裏別々に縫ひます。折をつけて一旦表に返し、袖口の方を整へ、更に振の部分だけを裏返して



第二十圖

第二十一圖

表と裏の袖幅を合せて標通り縫ひ、表に返して襞をかけます。

身頃　表は背、脇を縫ひ、折をつけ、裏も同様に胴、裾廻しを縫つて胴接ぎします。接ぎ目は裾廻しの方へ折つて襞襞をし、表と裏との裾合せをします。表に返して四粍ほどきせをかけて襞をかけます。

（長襦袢の裾は痛み易い處ですから、袱の芯に細い四糎位の薄地の布を一枚通り縫代にとぢつけて入れて置きますと丈夫です。この芯布は裾廻しと同系の色合でしたら一番よろしい。）

袱の出を整へて裾の仮とぢをし、背、脇の縫目を裏表とぢ合せ、身八つ口の留を女物袷のやうにして、前後の身八つ口を縫ひます。

袖附　身頃と袖との山標を合せて、待針を打ち、表身頃の縫代を留の際から斜に折り出し、袖附の標を合せて留をします。

留の仕方は、表袖から針を出し、表身頃、裏袖へ出し、次に裏身頃を縦に抄つて、裏袖表身頃、表袖へ返つて初めの糸と結び合せてその糸で縫ふのであります。この留は前後とも同様です。

前後とも同様にして標通りに袖をつけ縫目は袖にかへします。あまり折目が厚くなるやうな場合には、表は袖に、裏は身頃に返してどろ〳〵した感じをなくします。

衽附　前身頃の表裏をよく合せて縫目の際を襞糸で仮とぢをし、衿と芯布を重ねて身頃の標を合せて三枚一所に縫つて衿をつけます。折は衿に向けて折り次に衿先を縫ひ、三つ衿を入れて衿の中がどろ〳〵しないやうに平におちつかせながら衿幅を定めて針を打つて搘けます。

褄とぢ　褄とぢは後身頃の裏に五針を、前身頃の裏には四針を出し表はその間々へも出します。

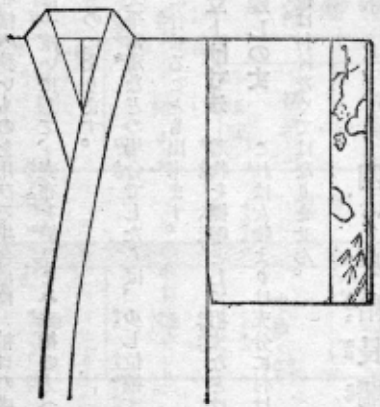
前の弛み　前身の身八つ口の處で四糎の弛みを作つておきましたから、これを摘みます。摘み方は、單衣と同様に、身八つ口の下で表身頃に針目を出してとぢて置きます。

本裁男物袷長襦袢

男物は、單衣長襦袢の項でも書きましたやうに、大體に女物と同樣ですからたゞ注意すべき點のみを掲げることにします。

前身頃の摘みのないこと、袖の振八つがなく人形をつけることなどで、その他は女物と同樣です。

袖　男物の袖で注意すべきは、多くの場合柄のある方が裏で、無地の方が表になります。これは、男物は袖口が廣いので、人目に見えやすい處は、表よりは反つて裏の方がよく見えるものです、從つて、表は無地でも裏には染抜きの模樣を用ふることが多いのです。ですから、別袖でなく有合せのものを附けますのにも、その心掛けで、裏の方へ却つてよいものを付けるやうにいたします。



第二十一圖

布幅の狭いものを用ひる場合には、袖口の處を毛抜き合せにいたしますが、幅の十分なものでしたらば、裏布は一ぱいにして、表布を縫ひこみ表袖の方へ裏布を引返して來ますと第二十一圖のやうに別袖のやうな感じのものになります。

又平常着などの場合でしたらば、少し位袖丈が短くても差支へありません。着物の袖附だけの丈があれば、間に合せることも出來ます。

仕立上げ寸法　着物を標準として裄丈などは女物と同じ割合位につめればよろしい。

裾廻しの丈　これは女物よりは充分に付けるやうに習慣づけられて居ります。平常着でも二八糎乃至三〇糎位は付けなくてはなりません。

四、ツ身袷長襦袢

今迄大人ものについて各種の仕立方を掲げましたが、子供ものも、裁方に多少の相異はありますが、大體は、大人ものと同樣ですから注意を要する點だけを說明することにします。

用布

表用布並幅七五七糎、裏用布六八二糎位を用意します。

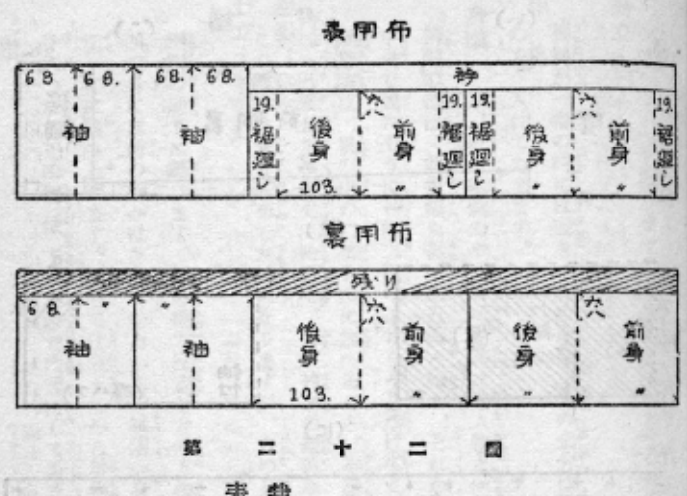
仕立上げ寸法

袖丈	六六・五	圖
袖幅	二八・五	附 一一・五
身丈	一〇〇	
後幅	二四・五	
前同	同	
衿幅	四・五	
身八つ口	一一・五	二十二圖
衽	五五	
衿肩	五・七	

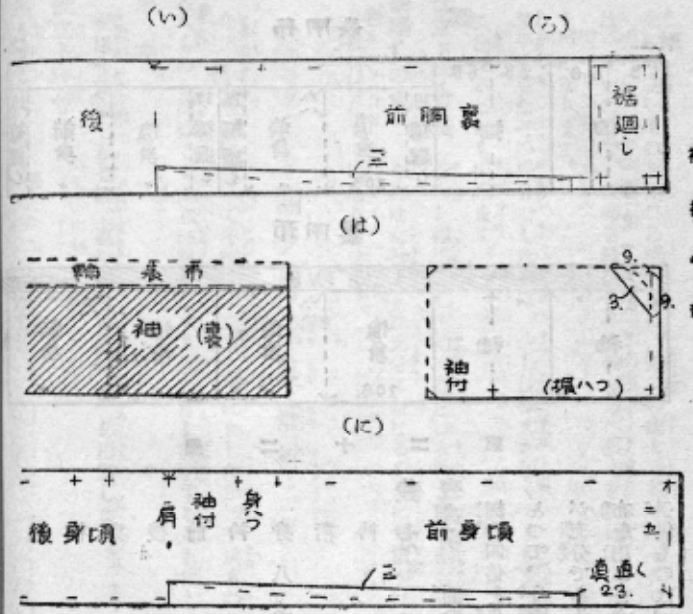
裁方

表身頃　圖のやうに、仕立上りの袖丈に縫代を加へた六八糎の四倍を先づとり、殘りの用布の幅から八糎の衿をかきとつて、身頃と裾廻しをとります。この裾廻しは身頃の丈が充分である時に取るのでありますから勿論短い時には別布を用ひます。

子供ものは、背丈がすぐに伸びますから、なるたけ身頃を



第二十二圖



第二十三圖

充分にとつておいて、揚をして置き、伸びるにつれて揚をおろすやうにしますから、寸法にも餘裕を見ておくことが必要です。

裏身頃　裏身頃は用布全幅から先づ六糎の衿をかき、袖と、身頃を圖のやうにとります。

袖を一幅でとらないのは、表袖を丈幅でとりましたから裏はなくてもよいからです。然し表衿も充分ある場合や、裏袖を切るのが惜しい場合には廣いまゝで用ひます。

褄附け方

袖　表布を裏へ見返す袖は第二十三圖(い)のやうに裏と表の幅を接ぎ合せ、縫代を裏側へ片返しにして疊み、

中表にして輪を眞二つに折り表袖を上にして(ろ)圖のやうに丈を二つに折つて掴えます。山褄、袖丈、附、袖幅などを標して袖下の丸味をつけます。

裏袖が一幅の時には表を一杯に用ひ、裏の余分は縫ひ込みます。この縫込は痛まない爲めに表幅との接ぎ合せの方へ入れておきます。

身頃　(は)、(に)の圖のやうに、大體は大人物と同樣な順序にいたします。

衿附の標は、前身幅を裾で二五糎と標し、それから二三糎位は眞直ぐに、こゝから肩へ斜に標を通しますが中央で圖のやうに一糎二糎のふくらみをつけてこの線を縫ふやうにします。胸が開かないで着よくなります。

裏身頃は、袖の出の二倍を丈に加へること、裾裏布をつけること以外は表と同樣です。

衿　出來上りの身丈に衿肩明、及び衿先の縫込みを加へたもの〳〵二倍が衿丈になります。

この襦袢は充分表布で丸衿になりますが、表の足りない時には裏の殘布を足します。

縫方

標附の通りに縫ひます、順序縫方注意など大人物と同樣です。

四つ身には前の摘みはありませんから、袖附、身八つ口等前後同樣に縫ひます。また身丈は着丈にかまはず裁切一杯に縫ひ上げます。そして仕立上てから着物に合せて腰揚げをします。腰揚げは着物と重ならないやうに身八つ口より四糎位下つた處で內揚にしておきます。

附

經濟的には、衿を身頃全體からかゝずに前布からだけとつて、後は背で縫ひ込んでおきます。この場合には衿は裏衿をつけます。また共襟でない時でしたらば衿肩へ外の切を入れて衿丈をのばします。

振袖袷長襦袢

振袖長襦袢は普通の長襦袢と略同樣ですが、たゞ袖丈が長く、袂に丸味をつけること、及び多くは無雙のものですから表布を多く要するといふ點に多少の相違はありますが、根本的な仕立方には大した違ひありません。

用布

振袖を用ひますことは一般には婚禮などの場合又は婚禮でなくても若い人が用ひますので、大抵は緋の紋縮緬を用ひます。表用布は一反半、裏用布は紅絹五三〇糎、半衿は白の羽二重或はそれに白、金、銀糸の刺繍などのあるのを用ひます。

仕立上げ寸法

着物に準じて左のやうに增減します。

袖丈	八糎つめる	袖幅	四糎つめる
袖附	四糎つめる	衿幅	着物と同寸
後幅	二糎增す	前幅	四糎增す
衿肩明	四糎つめる	身八つ口	着物と同寸

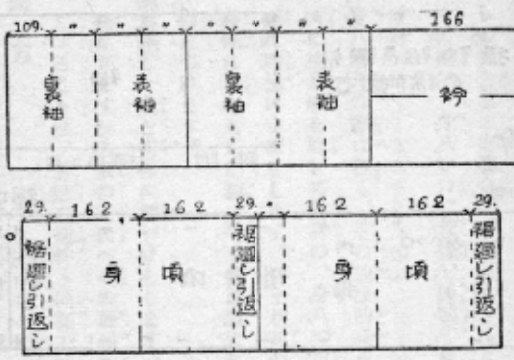


圖　四　四　十　二　二　節

前のつまみ　四糎
衿　衿肩の時上五糎五糎、下七糎五糎
　　廣衿の時は十一糎
袖　四糎

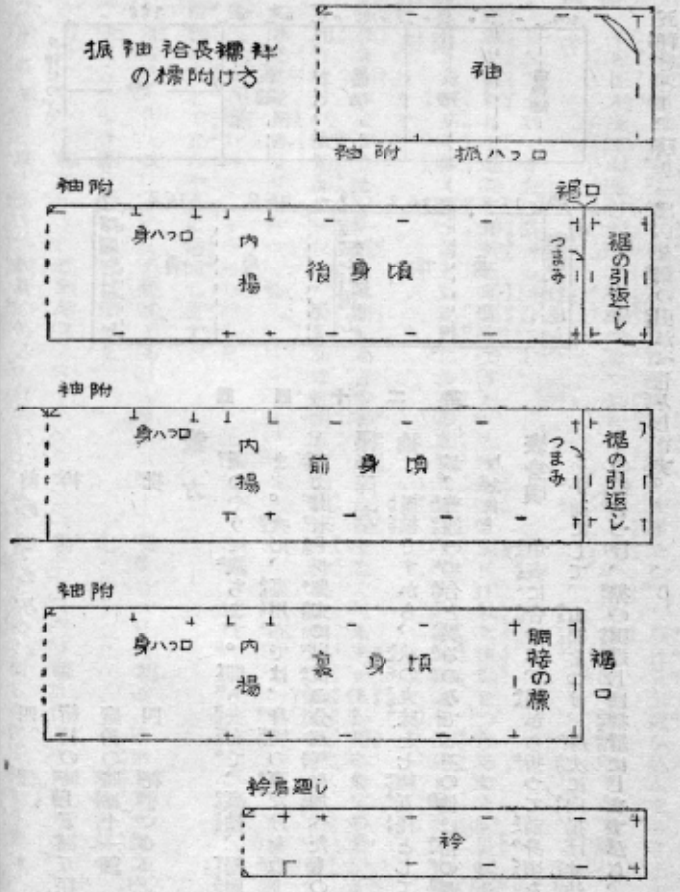
裁方

圖のやうに裁ちます。即ち表布で、裏袖、褄廻しも同時に取ります。次に、裏用布では、身頃の裏だけを取ります。裏身頃の丈は出來上り身丈に出袂の分八糎を加へたものになります。

標付け方

袖　振袖ですから、袂の丸味を七糎五糎として付けることだけが、普通の場合と異るのみで、その他は袷の長襦袢と同樣であります。

表身頃　中表に合せて、肩から折つて前身頃を下にし、衿肩明を手前にして、山標をつけ、身丈に內揚げ寸法を加へた丈だけの標をつけ、褄の引返しは摘縫にしますから、摘縫の縫代一糎五糎をとり、殘り一ぱいを褄の引かへしとします。



第二十五圖

（勿論縫め縮引返し布の寸法は定めておきますし、身丈も定つて居りますので、縫り全部は内揚となりますから、標つけの初めに凡の寸法を當つておかないとまごつきます。内揚げはなるべく多く取つておく方が縫ひ直しの場合など好都合です。）

次に袖付、身八つ口、背縫、後幅、肩幅と順次に標して、最後に身八つから四糎下つた處に内揚げの標をします。

身八つ口の標は輕く、その他は前身までよく通るやうに標をします。

次に後身頃を除いて前身の、身八つ口に四糎の摘みの分をも加へて身八つの標をし、これから更に四糎下つた處に内揚げの標をします。つまり前の内揚げは後よりも摘みの四糎だけ少くなることになります。

前幅は裾から五〇糎位まで眞直ぐに、衿肩明から一二糎までの處に心持ち丸味をもたせながら衿肩まで斜に標をつけます。

裏身頃　表と同樣に標づけをします。たゞ裏にも内揚げのある場合には、表と同一個所ですと、布が幾重にも重なりますから表の折山へ裏の縫目がゆくやうに裏の標を下げてつけます。身丈を表布より出袖の二倍だけ長くすることは、普通の袷衿と同樣です。

縫方

袖　袖は大名袖（表布を裏に見返へす）ですから、袂の丸味までは普通の袖のやうに縫ひ、丸味から標の通りに袂に縫ひます。袖下振り八つは普通袷衿の袖と同樣です。

裏袖は振の方では心持つらせ加減にし、幅も表布が心持裏の方へ見返る位がよろしい。縫ひ上りましたらば振り八つへぐし襞をかけます。

身頃　先づ表身頃の背縫をして、後身頃の内揚を縫ひ裾の方に折つてぐし襞をかけて置きます。前身も同様に内揚を縫ひましたらば、脇を縫ひ合せます。背、脇ともに裾の引返しの分は縫はずに置きます。前布は身八つ口に摘みの分だけ弛みがありますことに注意しないと裾が合ひません。裏身頃も表と同様に縫ひ上げます。そして継接き標の處へ、襦袢しの引返し布を付け、折は裾の方に折つてぐし襞をかけ、裏布と共に背、脇を縫ひ合せます。

裏、表の身頃が縫ひ上りましたらば、裾を摘縫ひして合せ四糎のきせで折目は表にかへして襞をかけ、出袱を四糎にして假とぢします。

以下普通長襦袢と同様な方法で縫ひ上げます。

衿　縮緬物でしたら新モスか金巾の衿芯が必要です。表と同じ色合のものを擇びます。また衿布が長い時には衿先に縫ひ込まずに、中央の割接きの方に多く縫ひ込んで置きますと、衿先の痛んだときに容易に直せますから必要以外の縫込みは衿先にはとりません。

割接きの中央を背にあてゝ、あとは前身頃の標通りに裾口から附けてゆきます。衿は三つ衿の處は普通五糎七糎に共れから下は七糎五糎幅に自然に幅を出しますが、肥つて頸の短い人は心持せまくして置きます。裾とぢ、前の摘み、その他仕上げ方法は普通の襦袢と同様です。

女物長襦袢の上手な仕立方急所

着丈を長目に　長襦袢の丈は多くの場合に、着丈寸法だけに仕立るものですが、着丈よりも少し長目に仕立てておいて、自由に長く着たり短く着たりすることの出來るやうに仕立ておくと、天氣の悪いとき、また室内だけの立居で、着物を長目に着る時など加減するのに好都合であります。又裾が汚れたり切れたりした時には他の部分はそのまゝにしておいて、痛んだ所だけを縫ひかへすことも出來ます。然しこの仕立は着付のときに腰紐をきちんと締め伊達巻をきいて置かないと着くづれがいたします。又、腰の處に身丈のゆとりがありますから、着物の衿より長襦袢の衿が引込むこともありません。

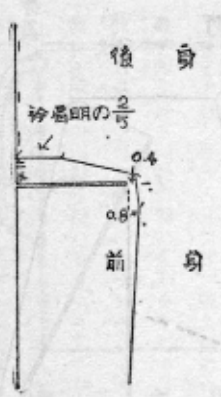


圖　六十二　縮

衿のつけ方　衿はすべて芯を入れて襟にならないやういたします。この芯は腰から下は衿巾だけ入れて餘り厚くならないやうにしないと、歩く度に裾が開いて見苦しいものです。

衿附は三つ衿縫代を二糎三粍にして、衿肩の五分の二は直ぐに衿肩まわりは四糎の縫代で衿布をゆるくします。肩から前に一糎下つて更に四粍縫代を多くします。

半襟は別に廣衿のやうに別衿をつくつてかけることにいたします。（第二十七圖參照）

肥つた人、鳩胸の人の仕立　前幅をゆつくりといたしますには、裾から七、八〇糎までは前身の幅を眞直ぐに、それから上を衿肩まで斜につけます。鳩胸のやうな人ならば前身の裾から七、八〇糎上つた所から衿肩までを一つ身の衿付のやうに丸く張らせて縫ひますと胸幅が廣くなります。また圖のやうに別衿をつけたものも着よいものです。

圖の通り上立仕

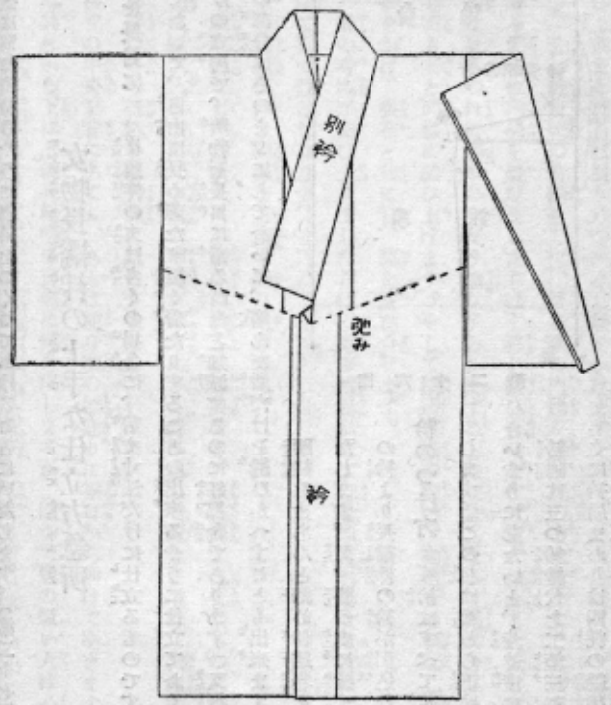


圖　七　十　二　節

半襟のかけ方　半襟芯には、帶芯用の三河木綿を三つ割にして半衿の長さより一九糎程長くしたものを用ひます。これは、襦袢の襟で半衿先がきちんと抑へられますので、着くづれがしないためです。

下着の上手な仕立方急所

肌襦袢　肌につくものは、皮膚の分泌物をよく吸收させるために、木綿類を用ひます。晒、ガーゼ、メンネル等の植物性纖維のものが適して居ります。近頃毛糸類の編物、メリヤスのやうなものを用ふる向もありますが、これらは皮膚を刺戟したり、皮膚の分泌を防ぎますから直接肌につけますことはなるべくさけたいものであります。

仕立方は、在來襦袢を三つ折にしましたが、この方法は裾だけが厚くなりますから、薄物單衣などの場合には、この折目の厚味が着物の上にまで現はれて着物に横段がつきますから、裾袢を袋し裁目をかゞつて糸のほつれないやうにして切ります。

衿肩明は長襦袢より四粍ぜまく、（着物よりは八粍ぜまく）繰越しは一糎に、衿幅は四糎以上にならないやうに、また衿の中に入る前身の繰込みは切りすてゝ衿を薄くいたします。衿附の注意は着物と同樣ですから省略いたします。

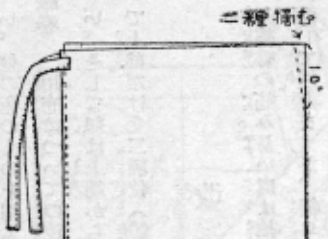


圖　八　十　二　節

掛衿は、外出用には白絹、又は富士絹、平常用にはキヤラコ、人絹の白、夏向には絹麻の白などがよろしい。他の色のものを用ふることは下品に見えます。

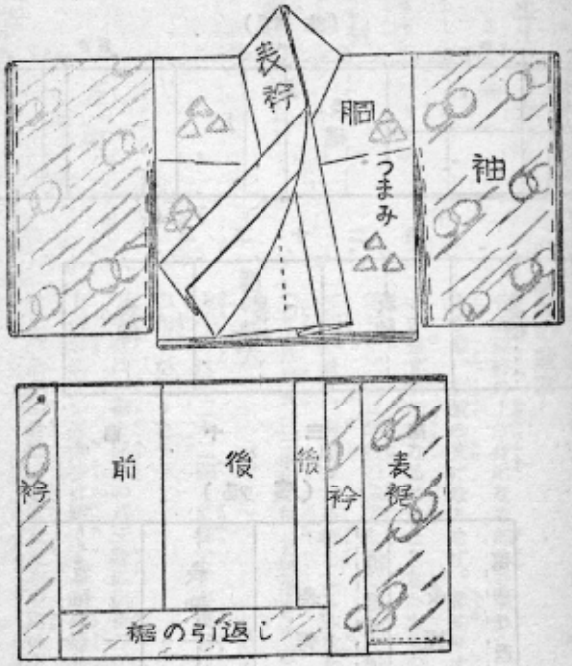
腰巻　用布についての注意は肌襦袢と同様です。兩端の裁目は三つ折縫にするよりは、三つ折縫の方がよろしい。そして縫は上端から四糎下つた所につけます。これは前が開くのを防ぐためです。又圖のやうに後の中央で上部だけを二糎位（體格によつて各々加減します）つまみますと、躰にぴつたりと合つて樂に着られます。

改良長襦袢

長襦袢の縮み易い處は袖口と裾口ですが、袖口の縮みは、レースなどを付けて裝飾をも兼ねて縮みを防ぐことに致して居りますが、裾口の縮みは手輕に防ぐ方法もなく、また縮みにも不便を感じますことが多いので、裾廻けを取りはづして縫ふ改良仕立を書きませう。これは平常着用の長襦袢には最も便利な經濟仕立であります。

材料　裾廻りと袖を無双として九四二糎、これは並幅ですが、袖を無双にする爲めには廣幅の方が便利のこともありますので、廣幅ものを用ふるときにはその約半分で充分です。胴抜分は三二八糎、裏地用布は六二五糎を用意します。

出來上り寸法　普通給長襦袢と同様ですから省略いたします。



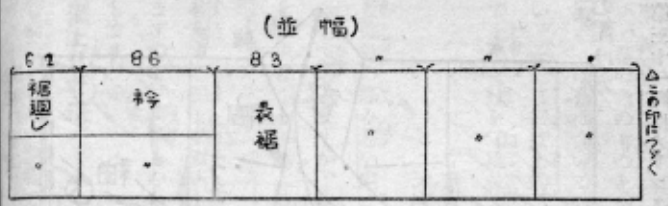
第三十一圖

裁方　並幅ものゝ場合は、第三十圖のやうに、袖と表裾から裁ち初めます。

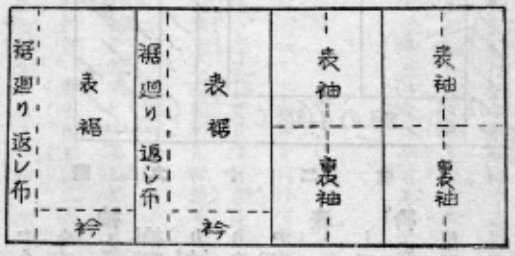
袖と表裾の裁方　袖丈に縫代を加へた寸法を裁切り寸法として六〇糎の八寸を切ります、これは裏表とも同じ布で作る無双の袖になります。

表裾　八三糎を表裾の丈として四枚分を切り取ります。

衿と裾廻し　八六糎を中央から眞二つに切つて衿とし、裾廻しも六一糎を二つ割にして横布の裾廻しとします。



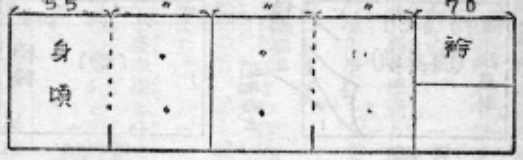
第三十一圖



第三十一圖

袖　袖は無双ですから袖口は輪になつてゐる方がよいので、切りはなしません。廣幅のまゝ袖丈の四倍を裁切ります。

表裾と裾廻し　並幅のときには各々切り離して取りましたが、これは表裾に裾廻し布を加へたものを丈として、二丈とります。そして縫ふときには摘み縫ひして置くといたします。



第三十二圖

胴抜の裁方

普通襦袢の上半身になる部分ですから、着丈から表裾丈を引いた殘りの寸法が上半身、胴抜の丈になります。裁切り丈はこの出來上り丈に縫代及び、下半身との接ぎ目の重なる寸法とを加へたものが實際に必要な裁切寸法となります。第三十二圖は胴抜の裁方を記しました、衿は七〇糎を幅二つ割として繼ぎ合せて用ひます。身頃は五五糎として四枚を取つて衿肩明を切ります。

（以上は身丈一三七糎位を標準といたしました。）

裏の裁方

上半身は第三十二圖と同樣ですが裏衿は要りません。但し掛衿の場合には裏衿の用布が要ります。

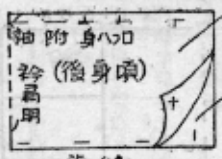
下半身は表裾と同寸の八三糎に出襠の二倍を加へたるのを用意いたします。然し部合によつて多少は短くても、裾廻し布の下になりますから差支へはありません。その場合は、適當な足布を用ひます。

標の附け方

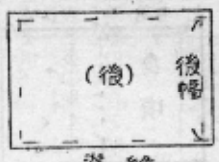
袖　普通袷長襦袢と同樣です。

裏身頃　先づ表裾布に第三十三圖のやうに布丈一ぱいに丈の標をつけます。次に胴抜き用布に圖の如く、仕立上りの身丈から表裾丈を引き縫代の三糎を加へた寸法を胴布の丈として、肩山から計つて標をします。このとき前布の方で胴接標の下に四糎出して前の胴接標をしておきます。これは前の摘みの寸法だけを長くするためです。以上のやうに兩方の接合せ標が附きましたらば、標と標とを合せて、普通の長襦袢と同様に、背縫ひ、袖附、身八つ口、肩幅と標をつけます。

（胴裏）



（仕廻裾裏）



第三十三圖

衿　表裏とも中表に重ね、縫代一糎とつて、接ぎの標をし、こゝを衿山として、衿肩明、前胴丈、衿肩廻りのゆるみ四粍を加へて丈の標をします。衿幅は一〇糎五粍として標をつけます。

裾衿は同様に二枚中表に合せて、表裾丈に出祇の分四粍を加へたものを衿丈として標をつけ、幅は、下の方は衿幅を七糎六粍、上は六糎八粍といたしますからその二倍の標をつけます。

裏身頃　表と同様ですが、たゞ裏裾の丈は出祇の二倍八粍丈け長くして、裾に引返し布をつける標をつけます。

裾廻し布は橫布を用ひましたから背接にして脇は縫つても縫はなくてもよろしい。後幅と前幅との關附をいたします。

袖　普通の袷長襦袢と同樣です。廣幅ものゝときには袖口の方は縫はないで輪にして置きます。

胴抜　身頃の上半身は、表身頃の背を縫つて左へ倒し、脇は身八つ口で前の摘みの分四糎を入れて脇縫をし、衿を附けます。

衿は背、肩等標通りに合せてつけますが、胴接ぎの縫込みは縫はずに丈標の處までにとめて置きます。裏も同樣に縫ひ上りましたらば、袷のやうに背、脇を綴ぢ、（これも縫込みはとぢ付けません）身八つ口を縫つて袖をつけます。

衿とぢは胴接ぎの縫込みの折返る分だけ殘して切ります。

裾　表裾の背、脇を縫ひます。裏裾も同樣に縫つて、裾廻しをつけます。縫目は裾の方へ折つてぐし縫をかけて置きます。

次に表と裏の裾を合せます。背、脇の縫目が裏表とも正しく合ふやうに待針して縫目の處では返し針をすることは着物の場合と同樣です。そして四粍の出祇として縫をかけ、裾とぢをいたします。裾とぢは前の袷襦袢と同樣です。

衿は左右の前身につけ、衿先きをとゝのへて、標通りに幅を折り、紳けつけます。そして、胴接ぎ標の上は縫目を揃へて縫をかけておきます。

胴接ぎ　最後に胴接ぎをします。これは上の胴抜き布で下の裾をはさみますので　先づ胴の表と裾二枚とを合

せて三枚一緒に縫ひ合せます。そして縫目は上に折りかへして、胴裏を細くくけ附けます。このとき胴の方の衿は開いたまゝにしておき、その他の部分は全部縫ひつけきます。

廣衿は普通の着物の衿のやうに、縫ひのこしてある部分で、衿先をつくり、三つ衿を平に入れて一糎五粍の幅に折つて縫けます。

又別法として、一層簡單化するために、胴と裾との接ぎ合せをスナップ附とすることもありきます。スナップにするには、胴の方の裾を丈標より一糎程伸して（スナップ附の重なり代）あとは裁目を中に折り込んで縫けつけておきます。廣衿もきちんと作つて置きます。裾の方も丈標の處から折つてきれいに縫けておきます。そして、背、腋、衿の縫目の上、及びその間々に數個のスナップをつけてこれで止めます。裾のとりはづしが容易に出來ますから、平常着や、外出勝ちの方々の長襦衿としては裾の縫ひが簡單で便利なものであります。

單衣に應用　同樣な方法を單衣の長襦衿に應用して、胴を晒木綿で作り、袖と裾を適當なものを用ふることもよい方法です。汗で汚れても取りはづして胴だけを自由にお洗濯することも出來、また、髪中など、肌着なしで用ひることも出來る便利なものです。

美容衿（其の一）

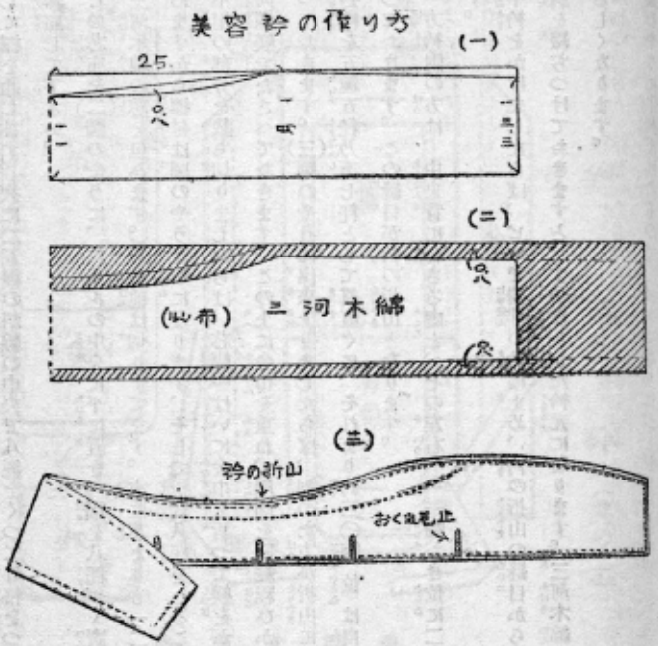
着物の色合と、半衿の色合とを、いつも調和させるために、近頃は美容衿を用ふることが多いやうです。これは圖のやうに衿縫ひけりものです、ピンで取りはづしが自由に出來るやうにもつて居りますから、どの襦袢にも直ぐに付けることが出來ます。これを用ひますと、一々半衿をかけかへる手數が省けます。四五本用意して置きますと、同じ襦袢でも衿元は色々變りますので、いつも着物との配合のいゝものを着ることが出來ます

用布其の他

金巾、白ネル各一五糎五粍幅のものを一四四糎、三河木綿一三糎五粍幅で一〇〇糎、おくれ毛止（長さ四糎位）五本。

作り方

三河木綿の丈を二つに折り、輪の方を衿山として幅一一糎に標をつけ、山から下へ二五糎下つた處へ幅一四糎、一番下を一三糎三粍と



第三圖　第四圖　十

して標を通します。次に二五糎の斜線の中央で八粍をくつて好格をつけて、周圍を落します。第三十四圖(一)を參照して下さい。

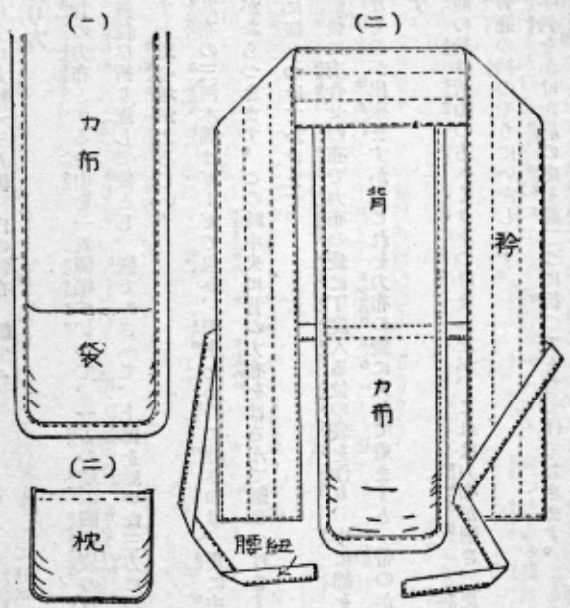
この芯布を(二)圖のやうに、白ネルの中央に平に置き、幅を八粍づゝ廣くして(これは折代になるもの、これで三河木綿の芯を包みます。)その他は切りすてます。丈は芯よりも一二糎長くなりますが、幅は八粍巾の方でつめますから標付は圖のやうな形になります。そして折代八粍をとることは他と同樣です。

不用の部分を裁ち切りましたらば、芯幅一ぱいに金巾を折つて襞をかけておき、芯のない處も標通りに折つて同樣襞でおさへておきます。この上に金巾を重ね、周圍を四粍程ひかへてぐるりとミシンをかけるか細かく縫つておきます。(三)圖のやうに出來上りましたらば、剩つた方が折山になりますから、中央で衿肩明の寸法だけ衿幅を五糎五粍乃至七粍として眞直ぐに、それより約三〇糎位は自然に斜になるやうに標をつけて細針で縫つておきます。この縫目が衿の折山となります。

一方衿附の方は、中央背に合さる處と、その左右へ一一糎おき位に二本づゝおくれ毛止めをさし込んでおきます。

半衿をかけましたらば、ピンで襦袢の衿に止め、衿の折山の縫目から折つて襦袢の衿にかぶせます。そして衿肩を綴ぢつけておきますと、すつきりした衿元になります。三河木綿の芯が長すぎると、胸元があつくるしく、重くるしくなります。

美容衿（其の二）



第三十五圖

長襦袢へのとりつけ衿として、前項のものは便利な衿ですが、暑い時分には、長襦袢を用ふることは容易ではありませんので、下は肌襦袢一枚だけで長襦袢を着たのと同樣な衿元に見えるやうに工夫したのがこの衿であります。

圖のやうに衿肩明に相當する位の力布を背につけて、それに前の美容衿と同樣なものをとりつけたもので、ことに、力布の下部に腰枕をつけておきますと、帶を結んだ恰好がよくなります。

用布其の他

ガーゼ衿布分として、一三六糎三河木綿幅一一糎、丈一三六糎背の力布

に金巾並幅一三五糎、白の斜布、綿少々。

作り方

背の力布とする金巾を一五糎幅に切つて、一方の端（圖中袋の口となる方へ）へ斜布で緣をとり、これを一一糎位ひ折り返して袋とし、襞でおさへて、上部を除いた三方に斜布で緣をとります。兩角に少々丸味をつけますと着心地がよろしい。

芯布の三河木綿はガーゼで包み、周圍を小針に縫ひつけ、更に中を二通り程細縫ひしておくと、ガーゼと芯とがおちつきます。この時中央に背の力布をはさんで縫ひつけます。衿つけから一六糎位下つた處へ圖のやうに紐をつけておきます。

最後に有合せの布で力布の袋に丁度入る位の袋を作り、中に綿を少々入れて口を縫ひますと、（二）圖の枕のやうなものが出來ますからこれを力布の袋に入れて着ますと、帶のかたちがくづれずにきちんと恰好よくしまります。

前の衿は折山の方へくりをつけましたが、これは力布が附き、更に後紐が長襦袢のやうにつきますから、芯は普通の衿のやうにいたします。

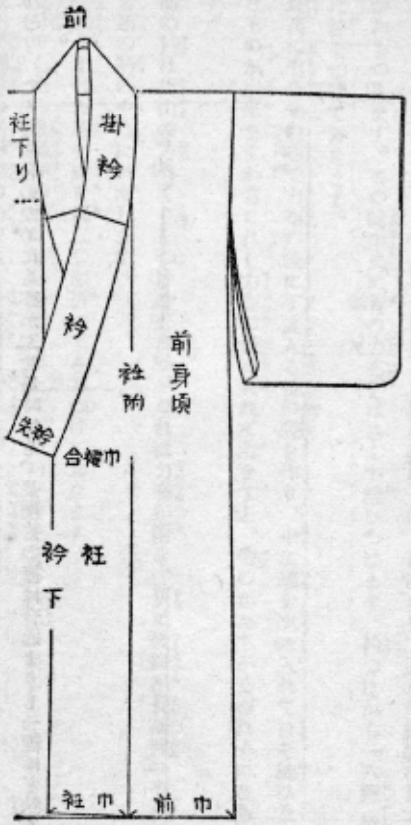
半衿をかけた肩の處を眞二つに折つてとぢつけておきます。

夏分でしたら肌襦袢の上に紐を締めその上にこの衿を着ますと衿元が美しくなります、また長襦袢を着た時には、長襦袢の衿をこの衿で包んで同樣に着ます。或はまた衿元を美しく何枚も重ねたやうに見せるために、長襦袢には無地の衿をかけておき、丁度下襦袢の衿のやうな感じに見せかけて、その上にこの衿を着ることもあります。こんな場合のためにも亦かぶせる時にも、長襦袢の襟は普通よりも一糎ほど狹く仕立ておく方が便利です。

三、單衣の部

本裁女物單衣

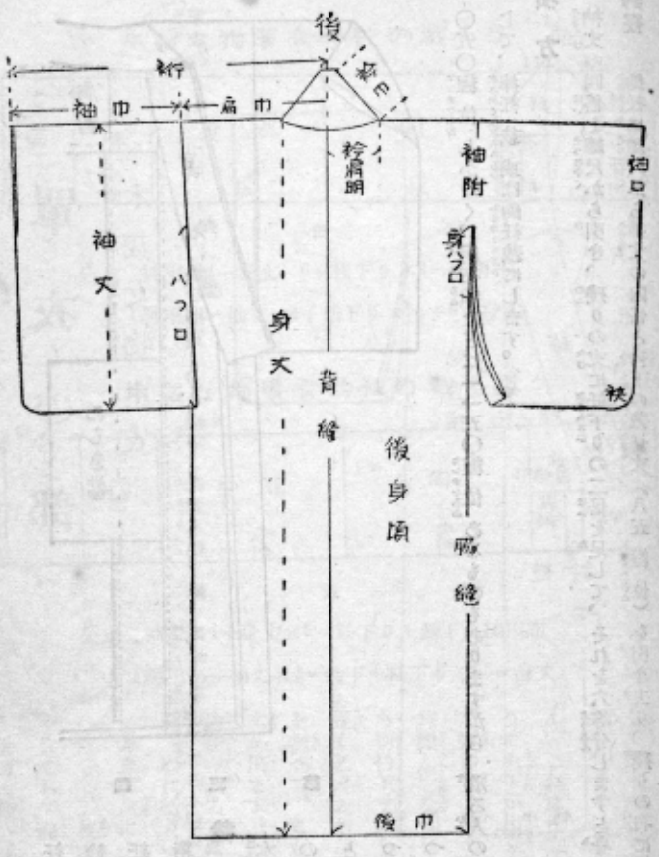
單衣物として用ひられる織物の地質は、木綿縞、眞岡木綿、縮、織紬、染紬、等の木綿物の他、絹織物、毛織物、麻織物の各種であります。



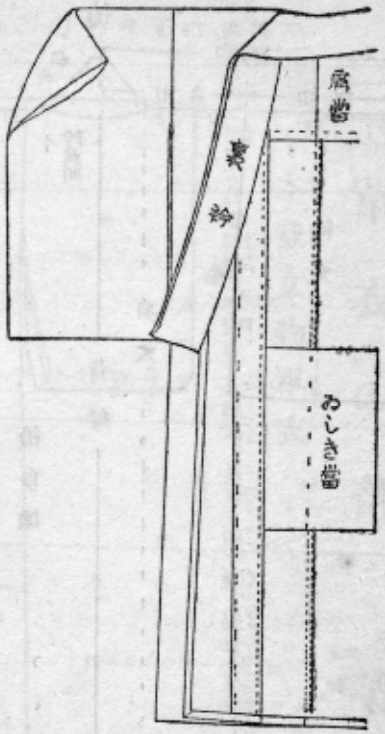
第一圖

仕立上げ寸法

袖丈	一尺六〇・	身八つ口	一二・
袖幅	三一・	合繪幅	一三・
袖口	二三・	後幅	二八・
袖附	二・	衿肩明	八・
身丈	二五〇・	前幅	二三・
		衿幅	九・
袖丸み			



第二圖　木綿女物單衣



第四圖

袵下り　二三・
衿　下　七〇―七五
袵　幅　一五・
衿　　六一・

三　裁方

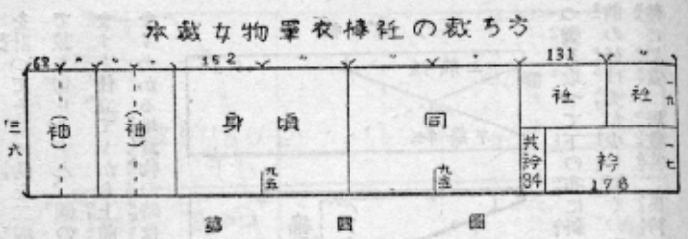
本裁は一反の布で裁つのでありますが、一反といひましても品によつて幾らかの長短があつて、浴衣地などは一〇五〇糎位しかなく、絹布類などは一一五〇糎位あるものもありますから、着る人の體格と布の長短に應じて、捧袵裁或は鉤袵裁にします。

積方

袖丈の四倍を總尺から引き、殘りの丈に袵下りの二倍を足して、それを六等分しますと身丈が出ます。

鉤袵

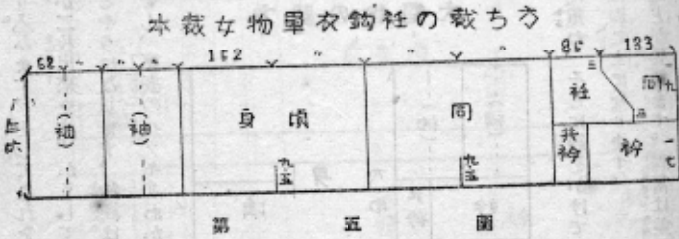
鉤袵は總尺から袖丈の四倍と衿下の裁切丈（八五糎位）を引き去り、殘りの布に袵下りの寸法



第四圖

公式　袖丈×4＋身丈×6－袵下り×2＝總用布

（總用布－袖丈×4＋袵下り×2）÷6＝身丈



第五圖

公式　袖丈×4＋身丈×5－袵下り＋鉤下＝總用布

身丈＝（總用布－袖丈×4－鉤下＋袵下り）÷5

（鉤袵の袵先の裁代は棒袵より少し長く取つておかなければなりません、これは仕立直しの時、棒袵のやうに上下が出來ないから裾のいたんだ時の切り捨てる分として普通七、八糎位長くしておきます。なほ裁ち切衿下寸法も同樣に普通寸法より長くしておかなければなりません。）を加へて、これを五等分しますと身丈が出ます。

鉤袵の裁ち方は、袵布の丈を中表に眞二つに折り、衿下を手前に裾を右におき、次に上側の一枚だけを一つねぢつて二枚とも布の表が上になるやうにして前と同じやうに手前の衿下をよく揃へ、裾から裁切衿下寸法

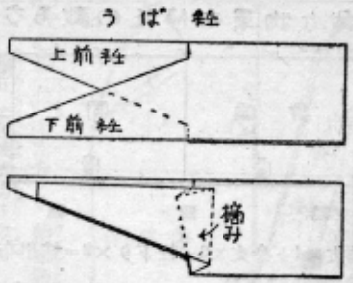
を計つてそこに鉤を二糎五粍だけ切り込みます、そしてこれを伸して切り込みから切り込みまで斜に標をつけて裁ち切りますと、圖のやうな鉤衽が二枚出來ます。かうして裁ちきした物は下になつてゐた方を上前衽にしますと仕立てゝから上前に布表が出るやうになります、鉤衽はどうしても一方は裏が出ますから、裏表のハツキリわかる地質物の時は用ひられません、裏表のハツキリわかる地質で然も總尺の短い時は止むを得ませんからうば衽といふ仕方にします。

うば衽　裁ち方は鉤衽と同じであります。前のやうにして裁つた衽を上前を下に、下前を上に中表にして第六圖上圖のやうに重ね、下圖のやうに鉤のところに一つ襞を取つて下の布に斜が揃ふやうに重ね、そこに鑚をかけてその折通りに摘み縫にしておきます。すると下前の衽は丈が少し短く、附の方が揃はぬことになります。

他に肩當、居敷當、裏衿、三つ衿芯などが要ります。肩當は並幅で一二〇糎位、居敷當は四〇糎位を普通とします。裏衿は半幅布で衿丈分だけ三つ衿は半幅布で二二糎位要ります。

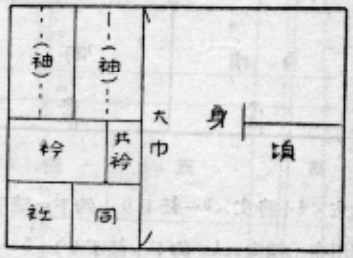
標附け方

袖　左右別々に、中表に二つ折にして兩袖を正しく重ねて袖山を左に袖口を向ふにおいて袖丈、袖口、袖附、袖幅、山の順序に標をつけます。袖口下の縫ひ代は八糎位とし、袖幅は



第六圖

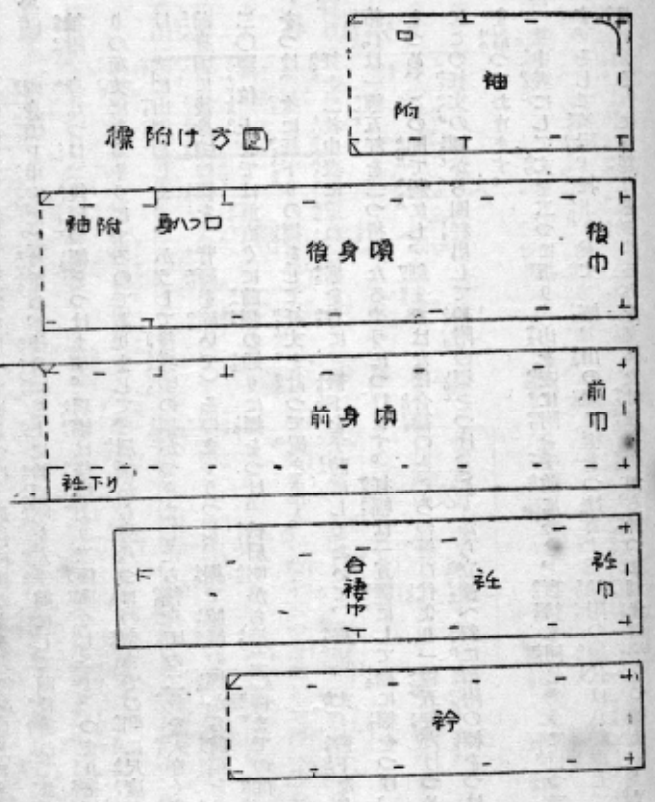
大幅物の裁方



第七圖

公式　袖丈×4＋身丈×2＝總用布

身丈＝(總用布－袖丈×4)÷2



第八圖

出來上り幅に二粍、袖丈も二粍を加へて標をつけ、最後に袂の丸みの標をします。

身頃　兩身頃を中表に二枚重ね、後身頃を上に衿肩明を左手前にして四枚重ねておきます。そして丈、背縫、袖附、身八つ口、後幅の標をつけます。肩幅は後幅より二糎廣くします。つまり袖幅と肩幅とを合せて出來上りの裄丈になるやうにするのでありまして、肩幅から身八つ口の留までの間に尺度をあてて斜に袖附の標をつけ、次に山標をします、かうして後身頃の標がつきましたら後身頃の二枚を大きく卷いて左の方に取り除け、前身頃に後身頃の標を（背縫を除いて）そのまゝうつし、裾で脇縫の標から前幅を計つて標をつけ、それから二〇糎位上までは眞直ぐに前幅の通りに標をつけ、衿肩明から裾二〇糎までの間へ糸を渡して斜に衽附の標をつけ、次に衽下りの標をして衽丈を計つて置きます。

衽　衽を二枚中表に重ね、裾を右に、衿下を手前にしておいて、裾縫、丈、衿下などの標附をします。衿下の縫代は一糎五粍を二つ折になるやうにつけます。衽幅は一五糎にして裾に標をつけ、合褄のところで一糎五粍をつめ、この間で斜にし、劍先ではなほ合褄のところの縫ひ代より一糎五粍だけつめて斜に標をつけます。次にこの衽丈の標から四粍出して衿附の標をつけ、こゝから立褄へ斜に衿附の標をつけまして、この衿附の寸法を計つておきます。

衿　中表にして丈を二つに折り、山を左に附を手前におき、裏衿も同じやうに折つて表衿の下に重ねておきます。そして衿附、衽下り、丈、幅、山の順に標をつけます。衿附の縫代は八粍にして、次に衿肩明に衽下りを足し、それに五粍ほどのゆるみを加へた寸法を山から計つて劍先の標をつけます。又念のため衿肩明、衽下りの寸法を標しても宜しくあります。それから先きに計つておいた衿附の寸法を衿先まで計つて標し、最後に幅の標をつけます。

縫方

袖　表を出して袖下を合せ、四粍位の縫ひ代で袖下の縫をします。但し丸みと幅の縫ひ代の二倍だけは縫はずにおきます。その時丸味の間は細かく縫つて糸を釣り加減にします。そしてその二粍外をもう一度細かく縫つて糸をしめて縮め小さく襞を作り、襞の動かないやうに留めておきます。

袖口は、袖口下のきせを通して折りをつけ、更に三つ折にして一糎五粍の針目で袖口明だけ縮けます。

身頃　肩當の背縫をし、衿肩を左にして手前に折をつけ、端を二つ折にして押へ縫をします。次に身頃の背縫をし、衿肩明を右にして手前に折りましたら、そのまゝ肩當を向ふ側に重ねて肩當の背と身頃の背とを一緒に縫ちつけます。背縫は肩當と居敷當のつく間を除いた他は耳いつぱいに二重縫をし。肩當は兩端を耳縮にして身頃に附ます。居敷當の下の方は折つて押へ縫をし、衿下の高さから五糎位上つたところに居敷當の上を合せて、背縫にとぢつけ二糎位の針目で下端を除いた三方を縮けつけます。

脇は、身八つ口の下を抄ひ留にして脇縫をし、折は前身頃に向けて脇縫後身頃の縫ひ込みは釣れない程度に斜に割つて、折り目を隱し蜈のやうに押へておいて、端は耳縮で身頃につけます。衽附は衽を手前にして縫ひますから一方は上の方から、一方は下から縫ひ、劍先は一針返して縫ひ込みの方へ斜に四糎縫ひ戻しておきます。

折は衽の方につけ、劍先に襞をかけ、前身頃の縫ひ代は耳絡にしておきます。

袵下絡と裾絡　まづ袵下は出來上り幅を八粍の三つ折にし、裾は出來上り一糎の三つ折りにします。衽の角のところは三角に折り、一糎五粍の針目で三つ折絡にしますが衽附や脇縫、背縫などの縫ひ目のところは折峯の際で表に一度針を拔き出し、小さく針を戻して裏へ針を返します、かうしますと裾絡がきちんと仕上ります。

袵附　袵の山標と背縫とを合せ、袵附の縫ひ代は八粍とし、身頃の縫ひ代は一糎にして針を打ち、背縫から左右三糎づゝ位の間は眞直ぐに、それからは次第に身頃の縫ひ代を少なくして、袵肩廻のところでは四粍位の縫ひ代で自然に丸味をもたせて待針を打ちます。この時袵の方を弛め加減にし、それから標通りに劍先のところまで平らな調子に針を打ち、次に袵先まで待針をします。袵先二〇糎の間は袵の方を釣り氣味に待針をします。それから裏袵を表袵にならつて兩方の袵で身頃を挾んで同じ調子に待針を打ちなほします。袵先に抄ひ留をして下前から表袵の方を見て縫ひはじめます。但し劍先のところの上下二糎位の間は細かい針目で縫ふか拔針にして劍先で一針返し、袵肩廻りは細かく縫ひ、背縫のところでも一針返します。上前も同じやうにつけて袵附が終つたら折りを袵の方につけ、兩方の袵先に留をし、袵先七粍のところを縫つて縫ひ込を裏袵の方にとぢつけ、衽下りと劍先の縫ひ込をもよく平らに整へて、三つ袵を入れ袵幅をきめ、裏袵の袵先のところを樓形のやうに作ります。裏袵の幅は表から五粍ほど控へて折り、襞をかけて本絡にします。

共袵掛　第九圖のやうに共袵は本袵より三粍控へるやうに幅を折つて共袵先は一糎裏へ折り更に丈を二つに折り、折り山を合せ、背の縫目にあて、縫目を合せて待針を打ちます。

第九圖

丈の方は一糎の處で本袵に糸標をつけ、その標から上へきせ代だけ上げて待針を打つて裏返し、表袵に下を縫ひつけ、縫を細かに絡けつけますが第九圖のやうに端の方は三粍控へます。

袵糸は撚り合せの二本糸を背と、兩肩の三ケ所につけます。まづ表袵の端から針を出し、裏袵附を五粍抄つて表袵の針穴のところを樓形のやうに作ります。裏袵の幅は表から五粍ほど控へて折り、襞をかけて本絡にします。

袖附　身頃の袖附の肩山で、五粍の縫ひ代にして留のところでは標通りにしてその間で自然に斜に身頃を折り出して裏に折ります、そして袖山と肩山とを合せて待針を打ちます。

はじめに抄ひ留をして袖の方を見て縫ひ、山のところ四糎位の間は極く細かに縫つて、縫ひ終りにも抄ひ留をして袖附を終ります。

兩袖ともつけましたら八つ口は袖縮の五糎上まで耳絡をし、脇の縫ひ込みも前後とも袖附の凡そ四糎上まで耳絡にします。

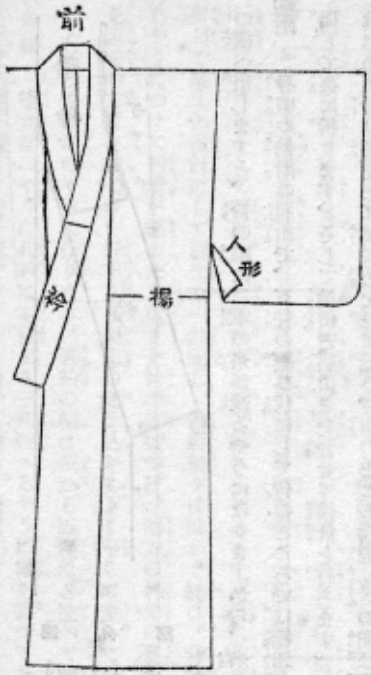
本裁男物單衣

男物單衣の材料は女物單衣の材料と殆んど同じであります。

仕立上げ寸法

袖丈	五三糎	袖口	二八糎
袖附	四四	袖幅	三四
衿丸み	二	人形	九
身丈	一三六内外	後揚	五一
		前揚	五五
後幅	三〇	前幅	二五

肩から



第十圖

衽下り	九
衽幅	一五
合褄幅	一三・五
衿肩明	八・五
衿幅	五・五
衿下	六六内外
裾	六六

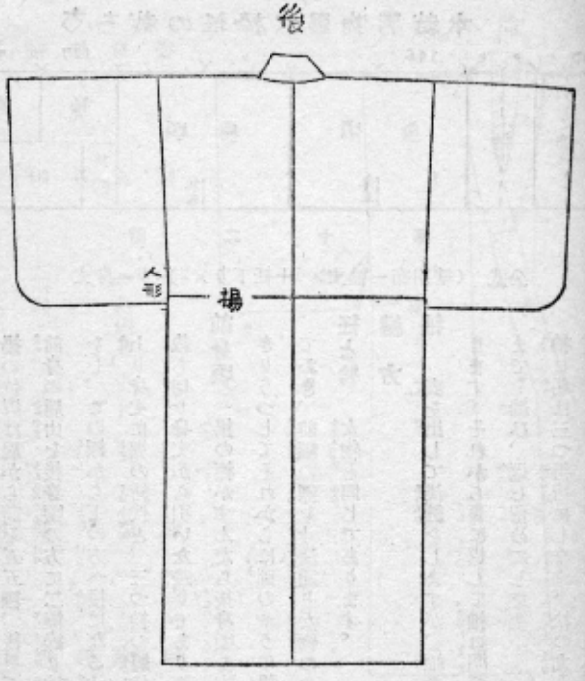
裁方と積方

女物のやうに仕立上げ身丈は長く裁りませんから揚をしておくやうにします。つまり揚の分として一二糎位を加へて裁ち切身丈としますが、まだ布が殘る時は居敷當にします。若し用布の短い時は女物のやうに衽裁にします。その他は女物と同じであります。

標附け方

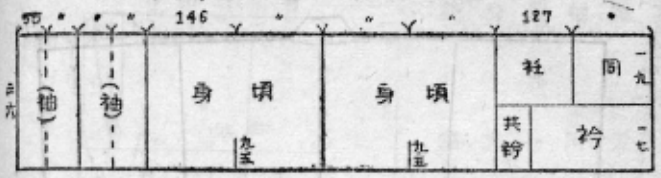
袖　布のおき方や標の附け方は、殆んど女物と同じでありますが寸法だけは違ひます。

身頃　女物と同じやうに兩身頃を中表に二枚重ね、後身頃を上に、前身頃を下に衿肩明を左手前にして四枚重ねます。そして丈、袖附、背縫、後幅、



第十一圖

さち裁の衽棒衣單物男裁本



第　二　十　圖

公式　（總用布－袖丈×4＋衽下り×2）÷6＝身丈－袖丈

肩幅、山などの標をつけてから、第十三圖（はのやうに揚の標をします。揚の位置は肩から前を五五麵、後を五一麵下にしますが、そのつけ方は、前身の肩山を後身頃の方に二糎繰り越して、肩山から五一麵のところに標をし、この標から下の方へ揚になる寸法を標します、揚になる寸法は出來上り身丈に裾の紐代と、三つ衿の縫代、それに揚のきせの分を足した丈を裁ち切り身丈から引いた殘りであります。

前身頃　揚の標がすんだら後身頃を左に取り除け、後からつけた標をはつきりうつしてそれからに圖のやうに揚の標通り布を折りたゝんで針で留めておき、前幅の標を寸法通り女物のやうにつけます。

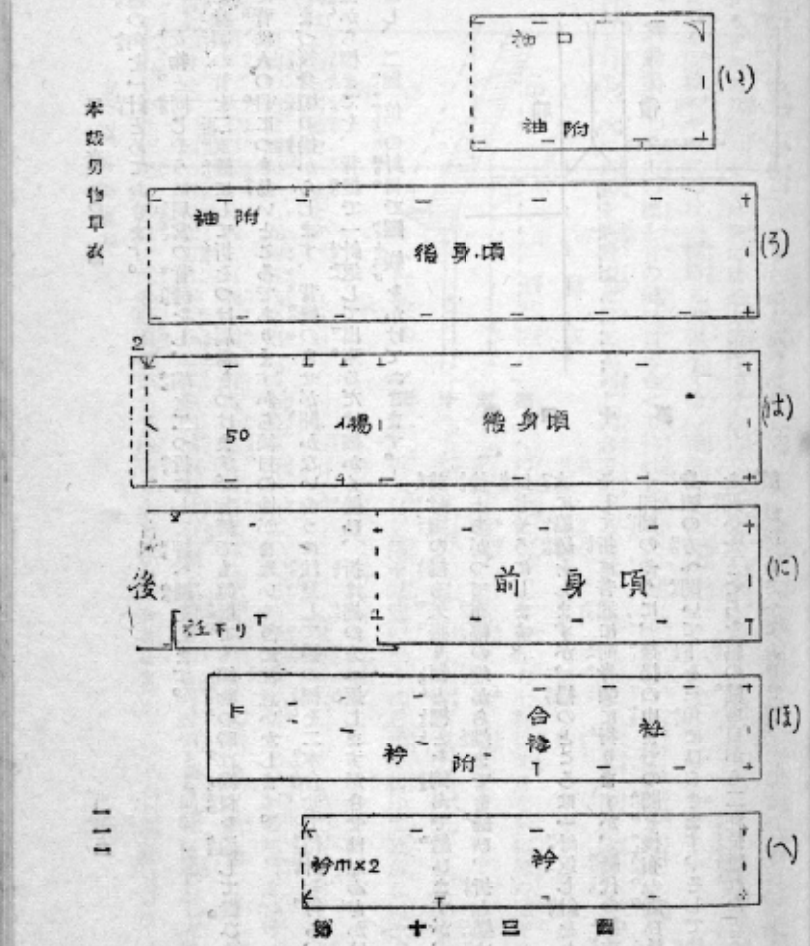
衽と衿　女物と同じであります。

縫方

袖　表を出して淺縫をしますが、幅の兩端二糎五粍程との間は縫はずにおきます。それから裏に返して袖口明の下に抄ひ留をして、袖口明から人形までを縫ひ、返し留めにします。

袖口明は三つ折絎にします。袂の丸みは女物と同じやうに二重縫をして縫目に襞を取つて移りを作ります。人形の折を先に折り、次に袖下を折つて縫

標附け方

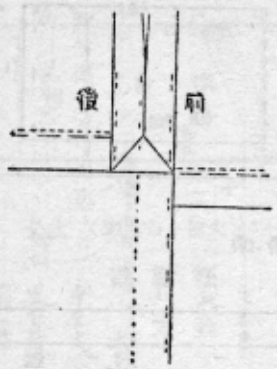


第　三　十　圖

ひ込の角を一針とめておきます。

身頃　女物と同じやうに肩當の背縫をし、端を二つ折にして押へ縫をします。次に身頃の背を二重縫にして折をつけ肩當をつけます。背縫でも脇縫でも縞物の時は縞目を通して縫ひます。殊に背は人の目につき易いところでありますから縞目のゆがまないやうに注意いたします。

揚　まづ後身頃の揚からします、背縫のきせが開かないやうに注意して揚の標を二本合せて待針を打ち、二後幅の標から標までを、背縫で一針返して出來るだけ細かく縫ひ、折は裾の方へ返しますがきせは殆んどかけない位にし、二縫位の針目で醫鞁をかけておきます。



圖四十第

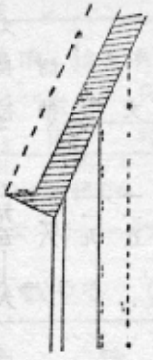
前身頃の揚も矢張り標と標とを摘んで縫ひますが、前は後とちがつて布幅の端から端までを縫ひ、折と鞁は後と同じやうにします。

次に脇縫をしますが、揚のところは一針返し針をします、そして折は普通に前身頃に折りますが、縫代の始末は第十四圖のやうに、後揚の山までの間を後布の縫ひ込を後身頃の方へ開いて下を三角にひらきます、そして縫ひ目を開いたところを脇の縫ひ目から二粍位離れたところを醫鞁でおさへておきます。

居敷當のつけ方は女物とかはりませんが、ただ上部に揚の縫代の下に入れて、揚と居敷當の布とをくけつけておきますから女物のやうに表には三方縮けつけないで兩標の二方だけくけつけます。

次に衽を女物のやうにつけ、裾縮も矢張り女物の時のやうに縫目縫目で針を返して縮け上げます。

衿附、共衿掛　衿山の標を背の縫ひ目に合せて待針を打ち、身頃と表衿との釣合は女物と同樣に合せて傘醫に待針を打ち、次に裏衿を裏身頃に當てゝ同じ釣合で針をうちかへます、そして衿先に抄ひ留をして下前の衿先から上前の衿先まで縫ひ、折をつけます。それから兩方の衿先に留をして留から七粍以先きを衿幅標の間だけ裏衿を釣り加減に縫ひ合せ、縫ひ込をとぢつけて表に返します。次に標通りに幅を決めて折をつけ、衿先のところで衿縮の折り目を第十五圖のやうに三角に折つて動かないやうに綴ぢておき、それから衿幅を二つに折つて縮けます。



圖五十第

袖附　身頃の方は肩幅から五粍縫代を出して布裏の方へ折り、人形の際で四つ留をして斜めに折をつけ標通り待針を打ち、人形の際から四、五粍の間は特に小さな針目で縫ひ、肩山は一針返して縫ひ終りましたら袖の方に折をつけます、四つ留の仕方は、人形の際の内袖から針を出し、前身頃と後身頃とを同時に通し、次に外袖の人形ぎわを小さく堅に抄ひ、元の針目に揃へて内袖で糸を結んでおきます。

共衿は女物と同樣にかけます。

四つ身單衣

四つ身はその名の通り身頃が四枚で出來てゐまして三、四歳から十二、三歳までの長い期間着られるものであります。元祿袖や筒袖ですと、一反から二枚とれます。

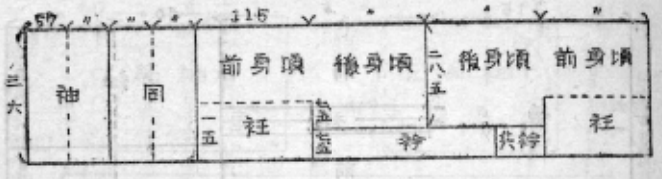
材料の地質は本裁物とあまり變りません、その外に大幅物が多く用はれます。

仕立上げ寸法

袖丈長袖	五五―六一	袖丈元祿袖	三八
同筒袖	二六	袖口	一八
袖附	一九	袖幅	三〇
身丈	一一五	身八つ口	一〇
後幅	二七	前幅	一八―いつぱい
衽幅	一三―いつぱい	合褄（幅	衽幅より八粍つめます
衿肩明	六・五―七	衽下り	一五
衿下	四五	衿幅	四・五

これは普通の仕立上寸法でありますから、實際には着る子供の年齢や發育の狀態によつて丈や幅など適當に加減しなければなりません。

四つ身の裁ち方（袖衿裁）(一)



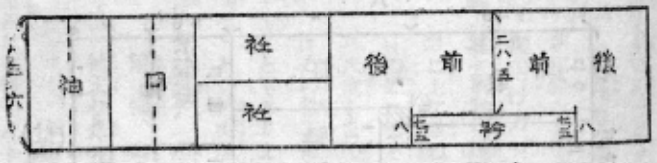
公式　布用總＝4×（丈身＋丈袖）

丈身＝4÷（4×丈袖－布用總）

四つ身の裁ち方（逆衽裁）(二)

上と同じ裁ち方

四つ身の裁ち方（衿裁前）(三)



公式　布用總＝2×（り下衽－丈×5＋身＋4×丈袖

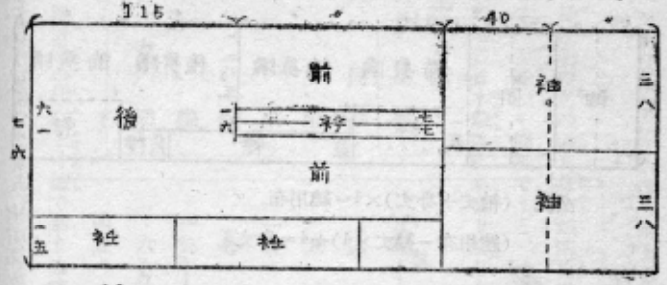
丈身＝5÷2×（り下衽＋4×丈袖－布用總）

第十六圖

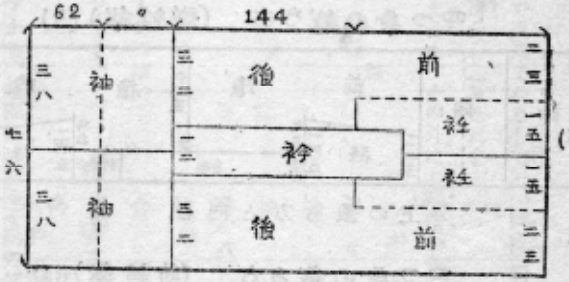
裁方と積方

四つ身の裁ち方は普通第十六圖（い）のやうに袖丈の四倍と身丈の四倍とが總丈になります。袖は並幅で取り、身頃は身丈の四倍を使つて裁ち、後身頃から衿を取り、前身

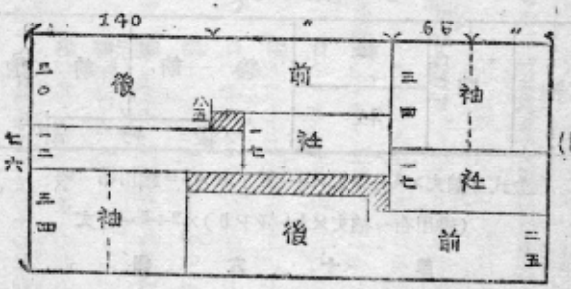
(い) (物面物)ちの身つ四物着廣



(ろ)

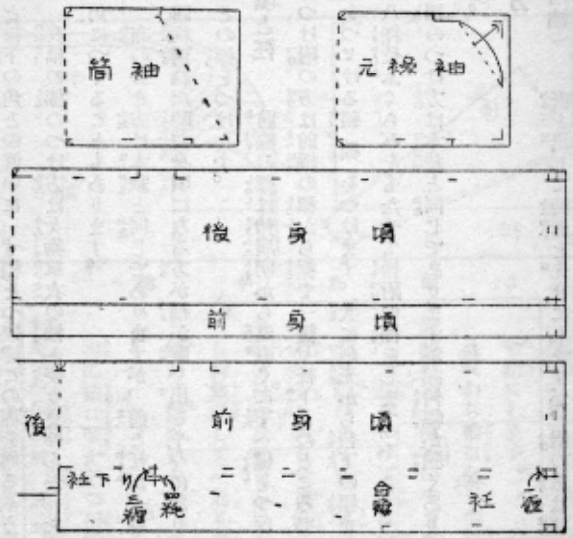


(は)



第十七圖

圖方付附標



第十八圖

と衽は一幅のまゝで、衽は摘み衽にするか、(ろ)圖のやうに前幅を細で廣くなるやうに裁ち切る仕方、所謂逆衽裁にします、その他前衿裁、車裁、大幅裁などいろ〳〵の裁ち方があります。

標附け方

袖(筒袖)　兩袖を別々に中表に二つ折にして重ね、丈、袖口、袖附、袖幅、山の順に標をつけます。口明から丈の標に尺度を當てゝその間にも標をつけます。この袖下に丸味をつけて船底形にすることもあります。又八つ口を明けることもあり袖丈全部をつけることもあります。

元祿袖　用布を重ねておいて、丈、口、附、幅、山の標をつけます。袖の丸みは袖丈の長い短いによつていく分か違ひますが、袖口の標から袖下へ四極位のところに標をつけ、この標と袖丈の標の間の寸法を計つて、その寸法に二極を足したものを袖下の角から手前の

方へ計つて袖下に標をつけ、この標と袖口下の四糎の標とに尺度を當てゝ、この斜めの線の中央に待針を打ち待針と袖下の角との眞中に一寸標をつけ、この標を通るやうにして袖の丸味をつけます。

長袖　長袖の標のつけ方は女物單衣の袖と變りませんが、たゞ袂の丸味を一〇糎以上の大きさにします、然し袂は角につくることもあります。

身頃　布のおき方は本裁と同じでありますが、前と衽が一幅になつて居つて、後身頃は幅をかいてありますから、四枚重ねた時前身頃になる方が幅が廣く出るやうになります。布が揃ひましたら丈、幅、袖附、身八つ口、山などの標をつけます。

前身頃と衽　前幅の標は衿肩明から眞直ぐに下へ標をつけ、次に衽の標にうつります、まづ衽下りと衿下の標をつけ附の方は前幅の標から裾で一糎、衽下りのところで三糎、合褄では衽幅より八粍つめて標し、この三ケ所をつなげる斜標をつけます。次に劍先から衿下の標まで斜に尺度を渡し、劍先から八糎下のあたりで衿附に八粍位ふくらみをもたせて衿附の標をします。

衿　標のつけ方は本裁と同じでありますが、衿幅が狹くありますから裏衿を先につけておいてから標をつけます。

縫方

袖（筒袖）　表を出して流縫をしますが、附の方は幅の縫代の二倍より少し多く縫ひ殘しておきます。それから裏に返して丈の標を合せて袖口明の標から幅の標までを縫ひ、内袖の方に折をつけて縫代は内袖に折つけておきます。この縫代は地厚のものゝ時は袋縫としないで内袖になる方の布を最初に五粍ほど控へて、袖下を縫つてから折り伏せ衿にします。

それから袖口を三つ折衿にします。

元祿袖　筒袖のやうに流縫をしますが丸みと幅縫代の二倍は縫ひ殘して、折をつけて裏に返し、袖口明に抄ひ留をして、袖口下から袖下までを縫ひますが、丸みの前後は一針返し、丸みの間は針目を細かに、糸はやゝ釣らせ加減にします。

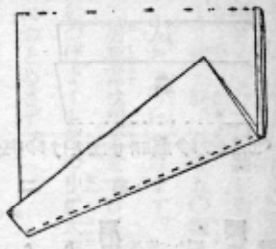
縫ひ目にきせをかけ、丸味の始末をします、丸みの作り方は縫ひ目から四糎離して一通り縫ひ、又四粍離してもう一通り縫ひ、この糸を引締めて縫ひ込を平らに縮めて、ゆるみのところは襞を取つてその襞のくづれないやうに留めておきます。

次に袖口明を三つ折衿にします。

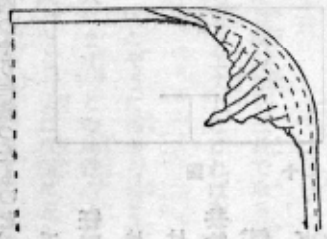
長袖　長袖は本裁女物單衣と同じであります。

身頃　背は裁ち目になつてゐますから袋縫にします。

肩當布は大抵横布を使ひますから並幅で出來上り身幅の二倍だけを用



四　筒の袖



四方の縮のみれ袖褄元

意して圖のやうに裁つたものを、背縫に當てゝ一目落しの針目でつけ、衿肩廻りと、袖附の部分は假とぢをしておきます。次に脇を普通に縫つて袵附にうつります。

袵附　前身頃を手前にして標通りに待針を打つて袵を摘み縫にします、その外は本裁の單衣と同じやうに衿下や裾廻をしてから衿をつけ、三つ衿を入れて袵を上げます。

共衿　共衿は表側の方は本裁と同じやうに袵をつけますが、衿の幅が狹くて裏側は全部まはりませんから表衿のところだけかけて裏側の方は裏衿との接ぎ目に袵をつけておくか、耳いつぱいに押へ縫のやうにしておきます。

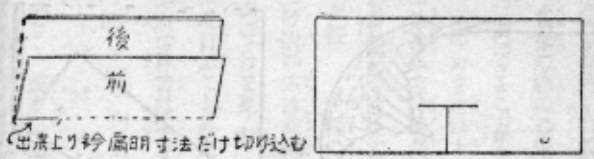
袖附　本裁とちがつて身頃の袖附が眞直ぐでありかつ縫代が少しでありますから、つけ始めと終りで身頃の縫ひ代を綺めに折つてつけ、八つ口は折り山の通りを眞直ぐに折つて耳袵にし、身八つ口も矢張り耳袵にしておきます。

肩揚　肩幅の中央を揚の山にして揚にする分だけの寸法を摘んで二本糸で二目落しの針目で縫ひます。長さは凡そ袖附の邊までにし、幅は、前の方は終りが肩の寸法の三分の二位にし、後の方は下の方で七、八粍淺くします。

腰揚　着丈の六割を衿附際から計つてそこを山にして揚になる分を摘んで二目落しの糸と同じ針目で裏から見て縫ひます。揚山の位置は揚の多い少ないにより、又着丈の長い短いによつて加減しなければなりません。又袵幅のところは下の方が細くて裾が廣くすから、小さく一つ二つ襞を取つて、衿の端の方を揃へます。

紐附　上り幅三糎、長さ五〇糎位の紐を一本紐け、肩から三〇糎位下つたところで、紐の上の端が身八つ口の中に入るやうにつけます。

居敷當　居敷當は肩當をつける時一緒につけても宜しいですが、小裁物中裁物は多く揚をしますから、先きに居敷當をつけますと揚の中に大部分が入つてしまひますから、揚をしてから居敷當をつけますと居敷當の役目を完全につとめます。



第　二　十　圖

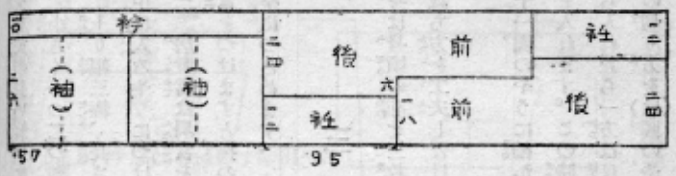
三つ身單衣

三つ身は身頃の布を三枚で取る裁ち方で、前身頃は裁ちちがひになりますから、裏表が出るため、片面物の揚合は裁ち方を工夫しなければなりません。

裁方

第二十一圖のやうに袖から衿を裁ちおとし、身頃の用布は丈を三つ折にして、輪になつてゐるところを半幅だけ鋏を入れます。この時鋏の入れ方に注意しませんと片方の身頃の肩を切り離すことになりますから、一方を右から入れたら一方は反對に左から入れ間違ひないやうに切ります、そして後身頃から袵を裁ち落します、この袵の切り方は圖のやうに斜にすることもあります。

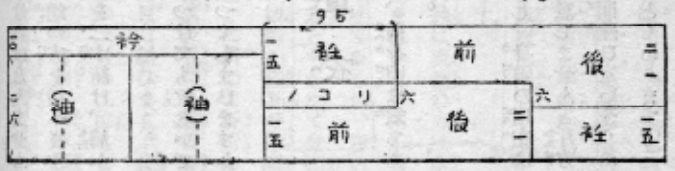
三つ身の裁ち方 (い)



公式　袖丈×4＋身丈×3＝總用布

(總用布－袖丈×4)÷3＝身丈

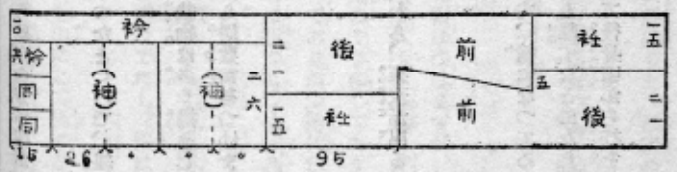
三つ身片面物の裁ち方 (ろ)



公式　袖丈×4＋身丈×3＝總用布

(總用布－袖丈×4)÷3＝身丈

三つ身の裁ち方 (は)



袖丈×4＋身丈×3＋衿足布＝總用布

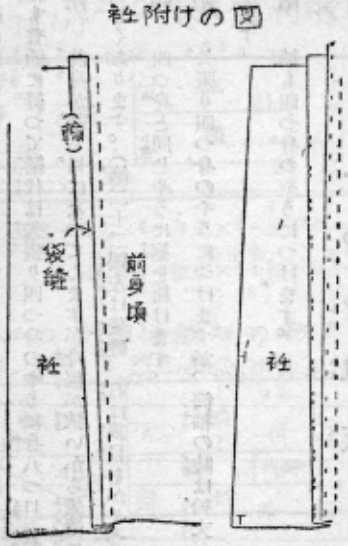
第二十一圖

(ろ)圖は片面物の場合の裁ち方でありますが、この裁ち方にしますとどうしても巾幅物では身幅が普通より狭くなりますが止むを得ません。

標附け方

袖　四つ身單衣とかはりませんたゞ寸法が少しつゝるだけであります。

身頃　兩身頃を中表に重ね前身頃を下に後身頃を上に重ねることは四つ身と同じでありますが、四つ身は前が廣いため下の二枚が手前の方に出ましたが三つ身は前幅が狹いため上の方が手前に出るやうになります。そして丈、袖附、背縫、後幅、山などの標をつけ、後身頃を左に除けて前身頃にうつります。衽附は衿肩明から眞直ぐにつけます。



第二十二圖

衽　中表に二枚重ね、丈、幅、附、衿下、衿附の標をします。

衿　四つ身と同じであります。

縫方

袖　四つ身と同じであります。

身頃　肩當は四つ身と同じく一幅物を横布につけます。

背縫　は裁ち目になつてゐますから四つ身のやうに袋縫にして肩當をつけます。

脇も普通に縫つて縫代は矢張り四つ身のやうに身八つ口の際は後を斜に折り開きます。

衽附　前身が裁ち目になつてゐますが身幅が狭いから袋縫にするよりも裁ち目を巻き縫して普通につける方が宜しくあります。（第二十二圖左は袋縫、右は裁目をかゞつて耳綴にする仕方）

裾廻　四つ身と同じやうに裾を縫ひます。

衿附　矢張り四つ身のやうにつけますが、筒袖の時は衿丈が不足しますから足し布を下前の方に接いでからつけます。

袖附　袖も四つ身のやうにつけます。

一つ身單衣

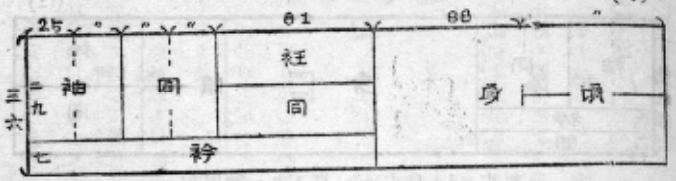
一つ身は初生兒から二、三歳位までの子供の着物で、大中小の差異はありますが、概して一反で三枚裁たれます。年齢や體格による身幅の加減は衽幅でします。半幅衽をつけますと殆んど三つ身と同じ廣さの身幅に仕立てられますから、この頃は三つ身の着物を省いて一つ身から四つ身にうつることが多くなつて來ました。

仕立上寸法

袖丈　調袖　二五糎―五〇糎　袖丈　元祿袖　二五糎

一つ身筒袖の裁ち方

(い)

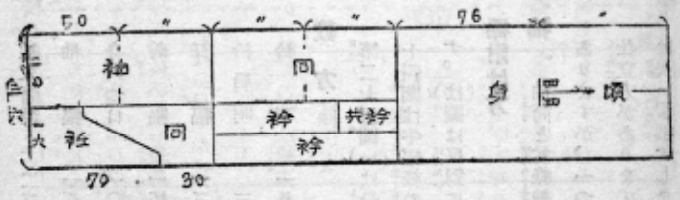


公式　袖丈×4＋身丈×3－衽下り＝總用布

(總用布－袖丈×4＋衽下り)÷3＝身丈

一つ身闊袖鮫衽の裁ち方(兩面物)

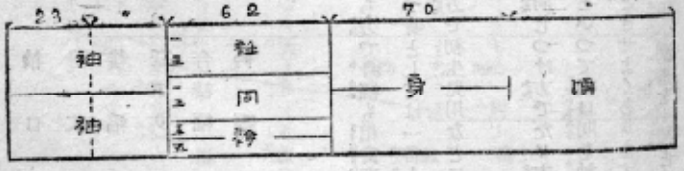
(ろ)



袖丈×4＋身丈×2＝總用布

(總用布－袖丈×4)÷2＝身丈

(は)



衽丈×2＋身丈×3－衽下り＝總用布

(總用布－袖丈×2＋衽下り)÷3＝身丈

袖丈隠袖 二三

袖幅	一八―二四	袖口	一三
身八つ口	一〇	身丈	七五―八五
前幅	一杯	後幅	一杯
衽幅	一三 いつぱい	衽下り	一〇 衽幅より五糎つめる
衿肩明	三―四	合褄幅	三・五
衿下	一八―二三	衿幅	

裁方

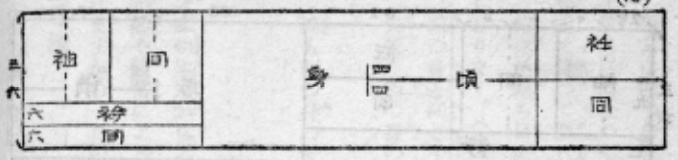
第二十三圖(い)は最も普通の裁ち方で身幅も相當廣く出來ます。第二十四圖は半幅衽の裁ち方で一つ身としては一番大きく仕立てられます。(は圖は反對に小さな裁ち方で初生兒用などに適して居ます。

標附け方

袖　袖筒と元禄袖は四つ身と同じつけ方でたゞ方法がつまるだけでありますが、一つ身には闊袖といつて袖口明を袖丈の全部をあける仕立方があります。初生兒などきせよくあります、又お宮參着などは長い闊袖にします。(袖丈の短い闊袖を平袖ともいひます)

第二十圖　一つ身袖別衽の裁方

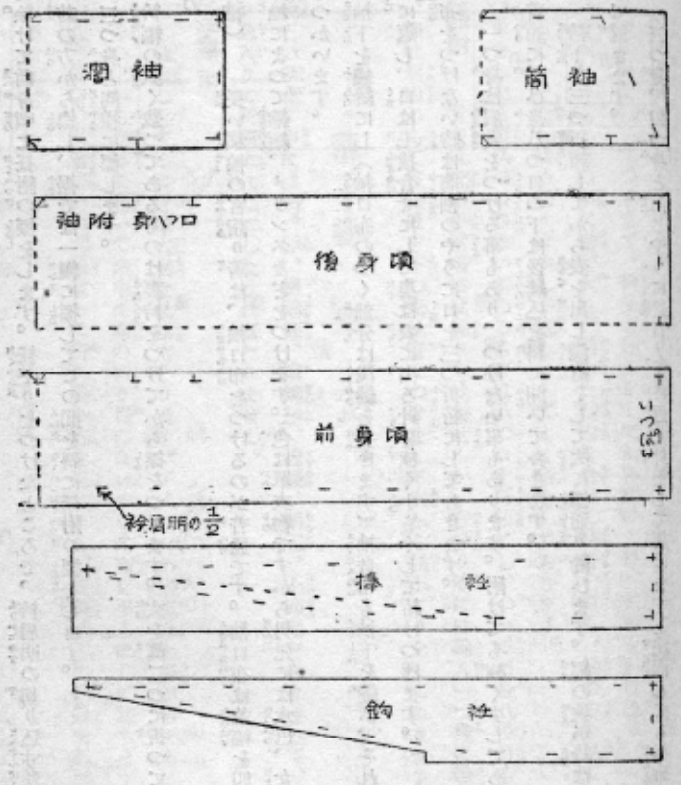
(ニ)



布用總＝衿下り衽－3×丈身＋4×丈袖

丈身＝2÷(衿下り衽＋4×丈袖－布用總)

第二十一圖　一つ身單衣の標附け方



標は圖のやうに袖下を眞直ぐにつけ、振八つ口をあけます。

身頃　身頃を中表に眞中から二つに折り、前身頃を下にして後身頃をその上に折り重ね背を手前に褄を右におきます。そして後身頃に丈、袖附、身八つ口、身幅、山の標をつけ、後身頃を

左に除けて前身頃に衽附の標をします。衽下りをつけたところで、衿肩明の切り込寸法の二分の一だけの寸法を手前の方から標し、裾では一糎に標してこの間を斜に衽附の標をします。

衽　三つ身と同様に標します。

衿　衿幅の狭く裁つてあるものは裏衿をつけてから標をつけます。丈を眞二つに折つて丈と幅の標をします。

縫方

袖(潤袖)　長い潤袖の宮詣り着は、袖口布をつけるのが普通です。袖口布は並幅を四つ割にしたもので、表の布地によつて縮緬、メリンスなどをつけます。色は單衣物ですから男兒には水色、女兒には薄い時色などを多くつかいます。

まづ袖下を袋縫にし（袖口布のつく部分は浅縫を省きます）袖口布も袖下を縫ひ、それから袖口明を縫ひ合せて表に返し、口は毛抜合せにして奥は表に出る針を極く小さくして綰けつけます。

袖口布をつけない時は筒袖のやうに口を三つ折綰にしておきます。

脇縫　一つ身は肩當をつける事もあり、つけない事もあります。附けても極く少しであります。

脇を普通に縫ひ身八つ口の下は後縫込を斜に開いておきます。

衽附　衿下を三つ折綰してから表を出し浅縫をして次に標通り縫ひます。幅の狭い時は前身頃の裁目をかぶり縫して置きます。

裾綰　三つ身、四つ身と同じやうに縫目〳〵に返し針をして綰けますと洗濯しても裾綰が狂ひません。

衿附　衿の山と衿肩明の眞中とを合せて待針を打ち、衿肩まはりは身頃の縫代を淺く丸くして暢に衽下りから衿先までに針を打つてつけます。衿先の始末をしてから綰けつけ、共衿をかけます。

袖附　身頃を裏返しその中に袖を入れ、肩山と袖山を合せて待針を打ち、袖の方を見て標から標までを縫ひますが、山で一針返し始め終りは少し半返しにしてよく留をしておきます。

袖がつきましたら振八つ口のあいてゐるものは八つ口を耳綰にし、ついでに身八つ口も耳綰にしておきます。

背守と紐附　背守は近頃平常着には餘りつけませんが、宮參り着には綿入一つ身に說明してあるやうにつけます。紐は肩山から二五糎ほど下つた位置につけまして表から紐かゞりをしておきます。

薄物單衣

薄地物といひます中には絽、紗、絽縮緬、絽繻珍、透綾、明石、上布などありまして、これ等は普通單衣の仕立より念入りに所謂上仕立にしなければなりません。

裁方の注意

裁つ前に地直しをすることは大切な仕事であります、アイロンか火熨斗を裏から平らにかけ（上布はかけません）一方の端から卷棒に卷いて途中に布の折り目のないやうに布を平らにして裁ちます、薄地物は布がすれ易く小法にくるひが出來易いから注意して折り疊み方を正しくし、要所〳〵に待針を打つて布の動かないやうにして置きます。

一般に絹布類は一反の丈が充分にありますから、殘り布から背の切り伏せにする布を二糎幅で取り丈は接ぎ合せて身丈になるだけにいたします。若し布幅の廣いものならば袵と袵の幅の間から取つて接ぎ目なしにします。

標附け方

普通に用ひます角筈は地質をいためるおそれがありますから、標附用の曉鑢を用ひます。この方が地質をいためないばかりでなく標が正確に、明瞭につきます。そしてつける時にはなる可く小さくつけます。

極く薄地物の時にはきせ揚を少なくしますから標附もその心算でつけなければなりません。又裁ち方めところでも注意しましたやうに布がずれ易くありますから布地の動かないやうに要所に待針を打つたり絲をかけたりしておきます。

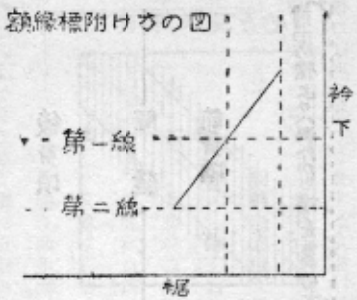
第二十六圖

各部分については次のやうな注意が要ります。

袖　袖下は後縫にせず、最初外表にして極く淺い縫ひ代で一度縫い、この縫い目を割つて鑢をかけ、第二十六圖のやうにこの縫ひ目の縫ひ代だけすらして裏に返して袖口、袖附、袖丈などの標附をします。

袖口は捲り絎にしますから絎け代は五粍位とします。耳のつれてゐる物や、耳の幅の廣い物は耳だけ或は耳の少しを裁ち切つても差支へありません。

身頃　肩の繰越をつける時は男物の内揚の仕方と同じやうにして後身頃の身八つ口から二糎下に揚の標をします。



第二十七圖　袖口の仕立仕附標線

袵と袴は普通の單衣のやうに標をつけますが袵の褄先は額縁仕立にしますから、その標をつけておきます。額縁の標は第二十七圖のやうに裾の裁目から絎代だけの寸法を取つて第一線を引き、これを二分して第二線を引きます。袴下の方は一糎五粍の絎代にして矢張り裾と同じやうに第一第二の線を引きます。次に縦第一線に横の第一線と第二線の間の寸法を標し、横第一線には縦の第一、第二の線の間の寸法を標し、この二點をつなぐ線を引き、これを縫合せの標とします。

第二十七圖　袴の仕附標線

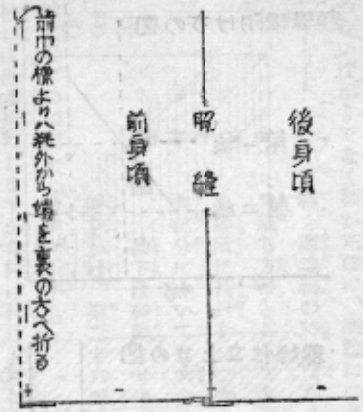
縫方

地が全體に薄い物でありますから、針目は極く細かく三粍位にしますが地質によつてはなほ細かく縫ふこともあります。糸はなる可く筵中で繼がないやうにはじめ縫ふべき箇所の寸法を凡そ計つて糸をつけますが、餘り長い所は繼ぐことも止むを得ません、その時は捲り繼ぎが最も宜しいのですが、重ね繼ぎにしても宜しい。

縫ひ目には必ず平鑢をあてますが折り鑢は當てない方が宜しくあります、特に明石縮のやうにしぼのあるものはしぼを伸してしまはないやうに注意しなければなりません。

袖　標附の時も申しましたやうに袖口は細い縫り絎とするか又は極く細かく三つ折絎にします、袖口布をつける物の時には單羽織と同にやうにします。

背縫　耳の變つてゐるものはそのまゝ袋縫にするか、耳を裁ち切つて袋縫にすることもありますが、地薄物は大低肩當や居敷當をつけませんから背縫は切り伏せにします。その仕方は共布か若し共布のない時は同じ色合の薄い布を一握五粍幅位に細長く裁つて、背の縫ひ目に（衿肩を右に持つて向ふ側にあてゝ三枚を一緒に縫ひ、裾口の裁ち目から一糎五粍上で背伏布を切り、縫ひ目に折をつけて背伏布で背縫ひ代を包み一方の端を絎けつけます。

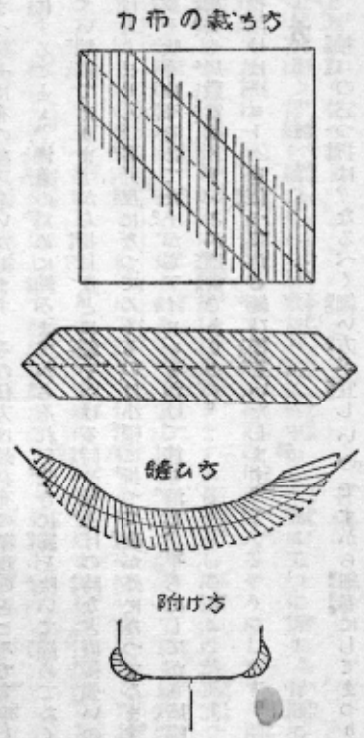


第二十八圖

脇縫　脇縫は寸法通りに一度縫つて、更にそれより八粍浅くもう一すじ縫ひ、前の縫ひ目に折をつけ、二度目の縫ひ目から縫ひ込を開いて耳は三つ折絎にします。

衽附　衽はつける前に被先の額縁を先きに縫つておきます。縫ひ方は、縦横の第二線から二線へ引いた裄の標を合せて極く細かく縫ひ、縫ひ目は割つて鏝をあて、裄下の絎け代と、裾の絎代に折りをつけて鏝をかけ、それから衽をつけます。第二十八圖のやうにきづ前身頃の衽附標より八粍外を裏の方に標にそつて上まで折り、衽の標と前身頃の標とを合せて三枚を縫ひ、折をつけ縫ひ込を絎けつけ次に裄下と裾を細かく絎けます。

裄附　普通の單衣とつけ方はおなじでありますが、地薄物は肩當をつけませんで力布をつけます。その力布は共布で第二十九圖のやうに五糎角に切つて、それを三角に二つ折にし、輪の方を充分丸く伸して三ケ月形のものを拵へます。この力布を兩方の衿肩廻りの裏衿附の際につけて、五粍か六粍位の幅に出して一緒に縫ひます。それから表に返して中の布を並へ平らにして絎け上げ、共衿をかけます。



第二十九圖

袖附　袖は折り附にせず開いたまゝつけ、この縫ひ代から五粍ほど離してもう一度縫ひますが、この時は縫ひ始めと終りは一糎五粍ほど標より上から縫ひます。そして袖の方に折をつけ、二度目の縫ひ目を剩つて身頃の縫ひ代は脇縫ひ代とつゞいて絎けつけ、袖の縫ひ代も振り八つにつゞいて絎けます。

セルの仕立方

毛織物の中でもモスリンは薄地でありますから絡仙類と同じ注意で普通に仕立てゝ差支へありませんが、セルやネルは厚地になりますから特別の注意をしなければなりません。

まづ第一に布の整理をいたします。その仕方は最初布の整理のところでも申しましたが、セルは布目を眞直ぐにすることゝ、濕氣の爲めに縮みますからそれを先きに霧を吹いて縮めておくこと、なほセルは非常に焦げやすい地質でありますから折目などに鏝をかける時や仕上げの時など直接強いのを掛けないやうに注意しなければなりません。普通反になつてゐるものは小幅に折つて裏が外になつてゐますから、そこを一旦擴げて一面に霧を吹き白布をあてた上からアイロンをかけて筋を消し、平らにしてから廣幅物の裁ち方を參照して裁ちます。

屑雪や居敷當はメリンスが適當であります。

標附けはチヨークを使つてから縫ひ標をいたします。

縫方

袖　袖口の三つ折は、なるべく細い方が宜しいのですから細卷にしてきつり綿にします、毛織物は大抵耳が廣く織つてありますから袖下の縫代は八粍から一糎位にして袖口はぐるり四粍ほど切り落してこれを卷きます。

居敷當　男物は普通につけますが、女物は全然つけない方が多くありますが、若しつけます時は腰紐の下になるあたりから裾まで凡そ九〇糎位、幅は後二幅一杯にして兩端が脇の縫ひ込の中に這入る位廣くつけます、さうしますと外から見た時居敷當がついてゐるかわないか判りませんで、然も背の縫ひ目が開かなくて具合がよくあります、布は白のメリンスが適當で大幅を用ひ後幅の二倍を取つて殘りは裁ち落して裏衿先に使用すると無駄なく使へます。

つけ方は、背縫を縫つてから居敷當を縦に眞中から中表に二つに折り、背縫にあてゝ普通の居敷當のやうにつけますが裾は一糎五粍位短くして、端が裾廻の中に這入るやうにします。兩脇はそのまゝにしておいて、脇縫をします。脇縫と袖附は全部縫ひ目を割りますから半返しに縫ふのが正式でありますが、極く小針に縫つて二、三糎おきに針を拔いて返し針をしても宜しくあります、そして脇を縫つてから縫ひ目を割り、縫ひ込を綴ぢつける時居敷當の端をその下に入れて一緒に綴ぢつけてしまいます。この縫ひ込は丁寧にする時には耳を切つてしまつて三つ折にしてまつりますが普通には耳をそのまゝ折つてまつり綿にします。

裾廻　裾は矢張り綾先を返し針で額緣に縫つてまつり綿にします。

衿　女物は綿つけ衿、廣衿いづれでも宜しいですが縫衿が着てからの具合が宜しいやうであります。衿附の折目はよくつきませんから衿をつける前に折目を鏝で折つておいて、それからつけます。

縫衿の衿幅は衿肩明の間は普通に五糎五粍にして衿先で七糎か八糎位にしてその間は自然の斜にして折つて綿けます。

用糸　セル地は着てゐる間に縫糸が弱つて綻び易いものでありますから成る可く糸質のよい物を選んで縫ひ

す、普通には質のよい絹糸を用ひます。

注意

お召セルや絹セルの類は大屑糸がゆるみ易い物でありますから紺けるところは皆まつり縮にいたします。

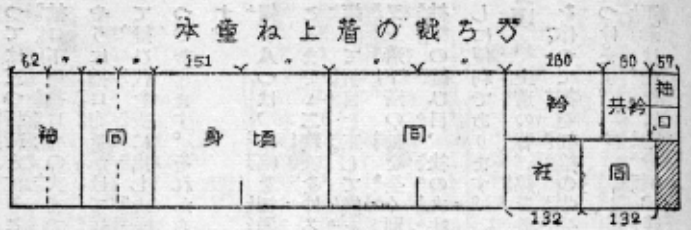
そしてセル地のものは皆袖口、身八つ口などの留に門留をいたします。

單衣重ね

單衣重ねは禮裝に使ふものでその種類には本重ね、半重ね、八掛附本重ねなどいろ〳〵あります。本重ねといひますのは上着は大抵縞模様で下着は白を一枚分重ねます。半重ねは本重ねと同じやうに見せて周圍にだけ下着を附けて、胴は上着の一枚に仕立てたもので丁度袷の附比翼と同じであります。八掛附本重ねといひますのは、本重ねの上着にも下着にも八掛を附けたもので、正式には上着も下着も八掛もみな同じ裾模様を附けるものでありますが、上着にだけ裾模様をつけることもあります。

この重ねといひますのはもと〳〵袷重ねや綿入重ねのやうに普通の單衣に仕立てたものを二枚重ねて、背や脇や衽の縫目を綴ぢて着るのを、近頃着るのに都合のよいやうに仕立方を工夫して、二枚を一緒に縫ひ合せて重ねたやうに見せるやうに仕立てたものでありますから、その地質や色合などによつては別々に仕立て〳〵着る時に綴ぢつけることもあります。

地質　上着には絽、絽縮緬、縮緬、羽二重、麻などを用ひ、下着には白か薄色で矢張り表に用ふやうな物或は紬絹を用ひます。



公式　身丈＝6÷（布巾袖口－2×（下衽切ちゃ寸法＋4×丈袖－布巾縫用布）

第十三圖

裁方

上着も下着も普通女物單衣と同じでありますがたゞ袖口布を共布で取りますからその分だけ布が多く要ります。

下着も矢張り同じに裁ちます。用布の特別長い時は裏衿を取ることもあります。

標附け方

上着は全部普通の單衣物と同じに標し、袖口布は單衣羽織のやうにつけます。

下着は大體上長に準じてつけますが、袖は袷の裏袖の標附と同じやうに八つ口の方で袖丈を三粍つめ、他は同じにつけます。

身頃の丈は地質によつて加減しなければなりませんが同じ地質の時で普通四粍つめます。

衿は上着より二粍丈をつめます。

縫方

袖　上着と下着の袖口布の下を、二つ折にして押へ縫ひをします。物に上

つては三つ折紩とすることもあります。そして上着の袖に袖口布を合せて袖口明を縫ひ、袷のやうに留をして袖口下を袖口布の丈まで四つ縫にし、表に返して袖口を毛抜合せにして躾をかけます、次に下着の袖にも同じやうに袖口布をかけて留をし袖口下をも縫ひ、袖口布の下に切り込みを入れるか縫ひ代を自然に斜に表に折つて縫ひ代を表に出し上着の縫ひ代に合せて、袖口下から袖下の半程まで四つ縫にして、それから先は別々に縫つておきます。それから袖口布の奥を袖に紩けつけ、丸味をこしらへ上着下着を一束にして袖下に躾をかけます。

振り八つは、袖幅を標通り折つて上着と下着の八つ口を中表に合せ、袖下の縫ひ目の兩側で二糎、袖附標のところまで〳〵二糎表をゆるめて要所に待針を打ち、標より凡そ一糎内を縫ひ袖下の縫ひ目で一針返します、表に返して折目を正して躾をかけます。

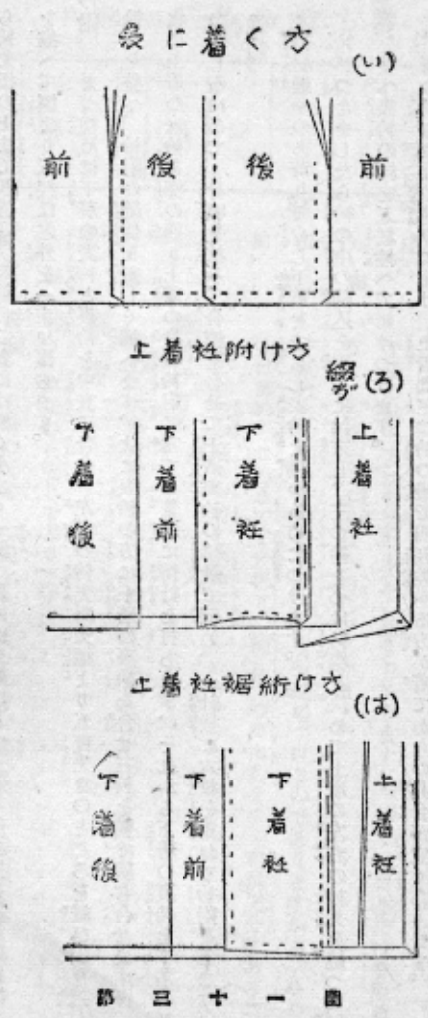
又上着下着の袖を全く別々に仕立てゝ、袖下、八つ口、袖口明下をそれ〴〵四糎位のところを留め、その他袖下の縫ひ目、袂の丸味、袖口下などの要所々々を綴ぢることもあります。かうして仕立てたものは取りはづしに便利であります。

身頃　上着の背、脇を普通單衣のやうに縫ひ、衽附の前に四裾を紩けて前幅を定めます。次に衽の褄先の額縁を作つて裾を衽幅の半分位まで紩け、衿下は三つ折紩にしてそれから前身頃の裾山と衽の裾山とを揃へて衽をつけます。

下着は先きに前身頃、後身頃の四裾を別々に裏の方に折つて三つ折紩をします、それから第三十圖のやうに背と脇を縫ひ、裾口のところは特に細かい針で縫ひ、返し留をして前幅を標します。

背縫は折を上着と反對に折り、背縫、脇縫とも縫込の下の端を第三十一圖(い)のやうに三角に折り込んで角をきれいに紩けつけます、次に下着の衽を出して褄先を上着と同じやうに額緣にして衿下を紩け、身頃と外表に衽を合せ裾口を揃へて衽附をします。

上着下着とも衽がつきましたら上着に丈を揃へて背縫、脇縫を綴ぢ、身八つ口を袷のやうに縫ひます。



第三十一圖

袖附　身八つ口に四つ留をして兩袖を袷のやうにつけ上着は折を袖の方につけ、下着は身頃の方につけます。

衽綴　上着下着の衽の裾口をよく揃へて第三十一圖(ろ)のやうに縫目を綴ぢ、(はのやうに上着の衽標で前身頃と衽の縫込を包んで三つ折して假縫をします。そして前に紐け殘してあるところを紐け、裾口より凡そ二糎上から衿先標の上まで四糎位の針目で表には極く小さく一針、裏には二針出して上着下着の衽を綴ぢ、衿附の標を揃へて標より五粍ほど外を一束に綴ぢます。

衿附　まづ初めに下着の表衿と裏衿を中表に合せ、左右の衿先を丈標より五粍先きのところを縫ひ引き返して衿先を整へ、衿附の縫代を正しく揃へます、次に表衿の方に上着の裏衿を合せ三枚を襞で綴ぢ合せます。次に上着の表衿を標の通り上着の身頃衿附に當てゝ普通に待針を打ちます、それから下着の裏衿を下着の衿附のところにあてゝ身頃を挟み、合標を合せて上着裏衿の待針で留め、一針抜に六枚を重ねて衿附をします。

注意

衿肩廻りのあたりで少し下着をすらし表衿を稍ゆるめにつけます。

衿がつきましたら衿の中の縫込を平らに始末し、三つ衿をつけ衿幅を決めて上着の左右の衿先を縫つて縫込を整へ裏衿の幅を五粍巾へて紐けつけます。

下着の衿幅は寸法通りに紐け、上着は三つ衿の邊で四粍巾へる方が着てからの具合が宜くあります。

共衿　上着は普通に、下着は衿附の縫目から五粍離してかけ、次に衿糸を附けます。

單衣半重ね下着

裁方

上着の裁ち方は普通の木裁の通りでありますが、たゞ袖口布だけを取るやうにすることは本重ねと同じであります。

下着は名の通り下半身と袖と衿を普通につけるのでありますから、その身頃は腰のところまでゝ大抵九〇糎位の丈にします、布が充分にある時でもこれ位の高さで着る時腰紐を締めるところに紐けつけるやうにします。

標附け方

重ねを省いた部分を除く外みな本重ねと同じやうにつけます。

縫方

袖　本重ねと同じであります。

身頃　上着の背縫、脇縫をして衽をつけ、脇の縫代は割つておきます。

衿下と裾紐　上着の衿下、裾紐を全部普通の單衣の通りにします。

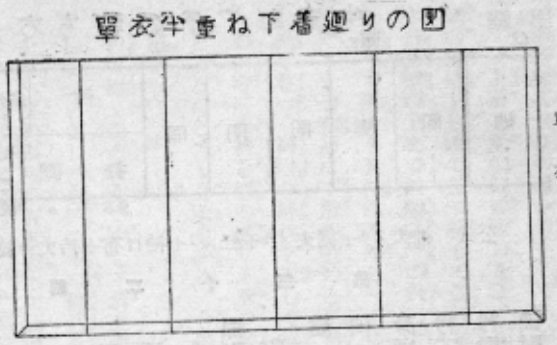
衿附　上着の衿附を矢張り普通につけます。

袖附　袖附の留をして上着の袖を先きにつけ、次に下着の袖を標附の通り

方ち裁の着下ね重半

布用總＝丈衿＋布口袖＋2×衽＋4×丈裾＋4×丈袖　公式

圖二十三第



に折つて上着の袖附の縫目に紐をつけます。

下着身頃　下着の背縫、脇縫をして衽をつけ、衿下と裾を三つ折紐にして第三十三圖のやうなものを作ります。

とぢ方　下着の紐代を折つて襞をかけ、上着との調子をよく整へて紐をつけます、上着の地質が弱いか、下着の地質の重くて垂れるもの、時は紐代は二つ折りにしてその上を耳紐のやうにして紐をつけます。

下着の衿附及紐付方　下着の表衿と裏衿で衽を挟んで衿をつけ衽のなくなつたところからは衿だけを表裏二枚合せて縫ひ、衿先をこしらへてこれを上着の衿の廻りにとぢつけ衿幅を定めて紐を上げます。

共衿　本重ねと同じやうに掛け、掛糸も同じやうにつけます。

四、袷の部

本裁女物袷

仕立上寸法

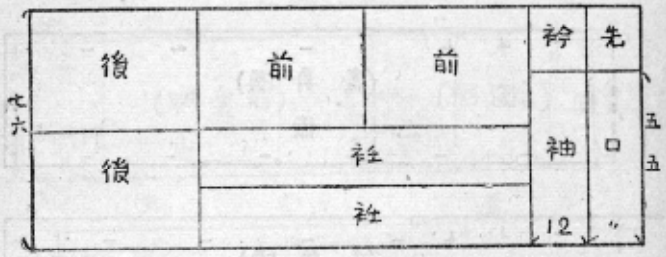
袖丈	六〇糎	袖口	二三糎	袖附	二五糎
袖幅	三二	身丈	二五〇	身八つ口	二三
後幅	二八	前幅	二三	衽下り	二三
衽幅	一五	合褄幅	一三・五	衿肩明	八・五
衿幅	一一	衿下	六五	衿	六二
裾祕	〇・四	袖口祕	〇・二		

裁方

表用布の裁ち方は本裁女物單衣と同じであります。

裏用布は通し裏のものもありますが、多くは裾廻し布と胴裏布とは別布を用ひます。裾廻しには凡そ三五〇糎をつけ、裾廻しの丈は凡そ身丈の三分の一位つけるのが普通であります。但し衽は三分の二位、衿先布は衿丈の四分の一位にします。

裾廻しの裁ち方



第三圖

すべて裏は表にならつて裁つものでありますが、裾のいたんだ時の用意に調接の所へ少なくも四、五糎の余裕を入れておきます。

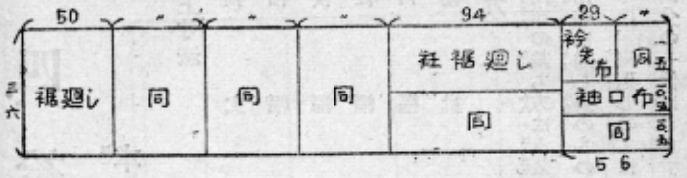
標附け方

表袖　中表にして兩袖を別々に二つに折つて重ね第四圖のやうに、丈、口、附、幅、山、丸味の順につけます。

裏袖　表袖と同じやうにして折り重ね、表袖より丈を二粍、袖口を二粍、袖幅も二粍つめ、袖口衿を出す爲め袖口縫代は衿の二倍だけ多くします。他は同じに標をつけ、次に袖口布を圖のやうに重ねて袖口幅と袖口丈の標をつけます。若し八つ口布をつける場合は袖口布と同じやうにします。但し袖幅を定めてから八つ口布を一杯の縫代にのせます。

表身頃　女物單衣と同じであります。但し衽は裏

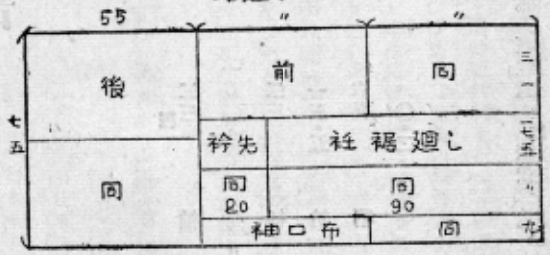
裾廻しの裁ち方



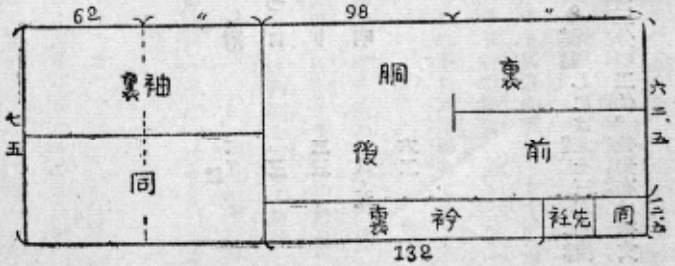
胴裏の裁ち方

第一圖

裾廻しの裁ち方



胴裏の裁ち方



第二圖

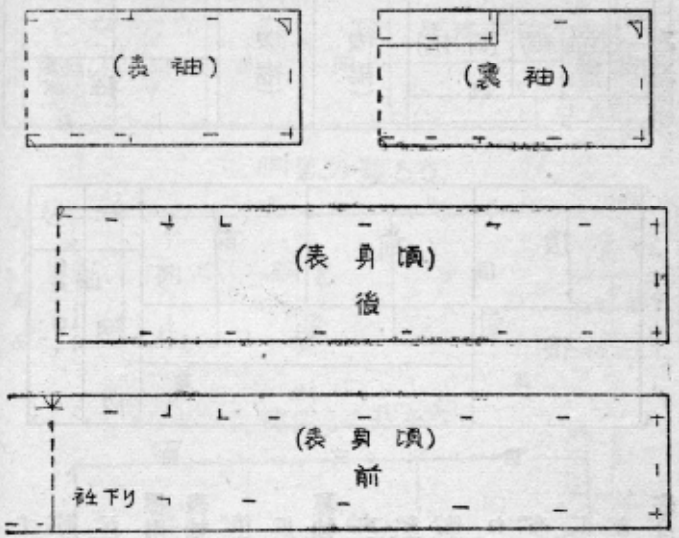
と重ねて標します。

胴裏と裾廻し　すべて表身頃にならつて標をつけます。布のおき方は第五圖のやうに裾廻し布四枚を重ね、裾口を右にして丈、幅の標をつけます。但し幅は表より二糎つめます。

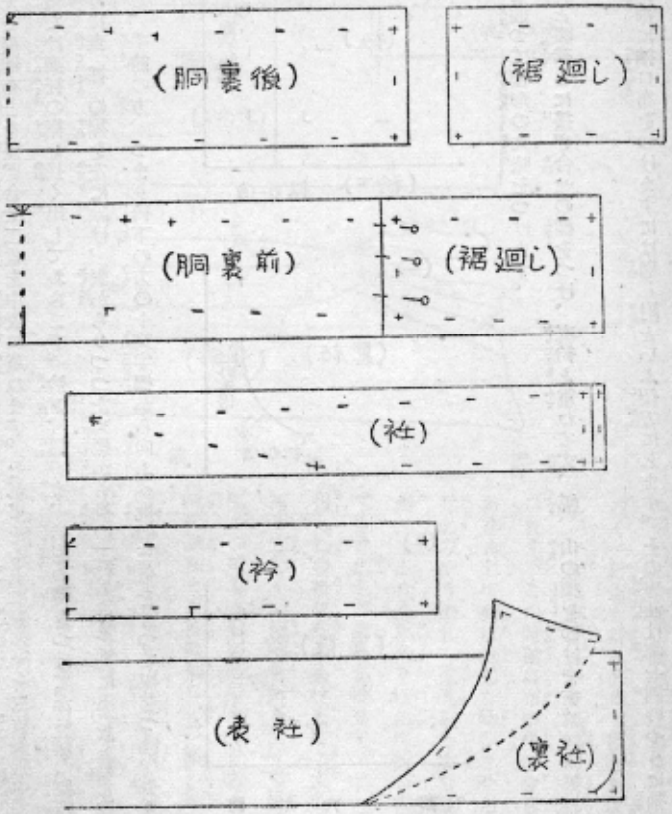
胴裏は表身頃と同じやうにおいて、袖附、身八つ口、背縫、後幅の標をします。丈は表丈より裾廻し丈を減じた寸法に褄の二倍を加へ、なほ胴接のきせ代として心持寸法をゆるくして標をつけます。

次に胴裏の後身頃を左に除けて前の裾廻しと、胴裏の前身頃との胴接の標を合せて待針で假りに丈をつないで前身頃の標附をします。

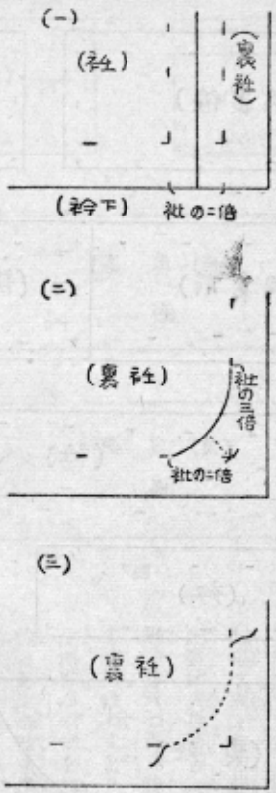
第四圖



第五圖



衽　衽先と裾廻布とを接ぎ合せ二枚を中表に重ねます。そしてその上に表衽を二枚矢張中表に揃へて重ね、袵の二倍だけ裏衽の裾を長く出しておきます。衿下、幅、丈、衿附の標をつけてから縫の標附をします。開のやうに表衽の裾を左に除け、表からうつつた丈標から袵の二倍だけを袵に出して標し、幅標を伸して十文字にし、手前の方、つまり衿下の方の十文字標から向ふへ袵の三倍を計つて標をつけ、先きに表からうつつた丈標の十文字とに尺度をあて、縫先の角から尺度の斜の中央へ向つて袵の寸法だけを計つて點を打ち、この三點を通つて褄形の丸味をつけます。



第六圖

衿　衿先と裏衿とに接ぎ合せの標をつけ、表衿と重ねて丈、幅、山の標をつけます。

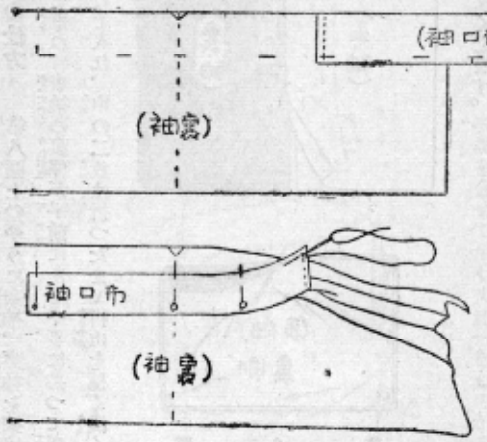
縫方

袖　裏袖に袖口布をつけますには廻し附といふ仕方にします。その方法は第七圖のやうに袖口布の丈標を裏の袖標に合せ、まづ丈標から縫ひ始めて角の所で小さく一針返し針にして、標通りに袖口布に折りを附て、今度は下圖のやうに幅に待針をして厥の方を縫ひます。この時袖口布の角を少し斜に抄つて弛めておきまして表に返した時のきせとします。左の端も始めのやうにして丈標を合せて縫ひます。ぐるりと縫へましたら兩角を四角に折つて袖口布へ折をつけて引き返して襞をかけます。

但しこの袖口布の掛け方は必ずこの仕方によらなくても宜しく、兩端を折り曲げて後で綴けつける仕方によつても宜しいのであります。

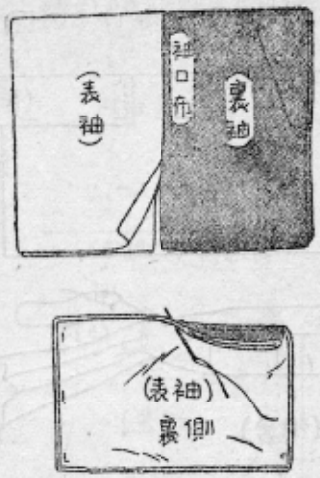
次に表袖と裏袖の袖口明の標を合せて待針を打ちます。この時裏袖の方が少し張り加減にならなければなりません。縫代は、表は直ぐで、裏は留の所は標通りにしますが留から二糎位の間で縫代を凡そ四粍程淺くして褄形に縫ひ出します。

第七圖　袖口布の掛け方の圖



きせを二枚かけて表布の方へ折り袖口の四つ留をします。

四つ留の仕方　第八圖(上)のやうに表袖、裏袖を擴げ丈を袖山から二つに折り、これを(下)圖のやうに折つて四枚を重ね、表袖の裏側が手前になるやうに持つて手前の一枚は縫代を開いて、口明の縫止りの折山に手前側から針を入れ、中の二枚は折つたまゝ折山を極く淺く抄つて向ふ側へ突抜き、布目二筋ほど下つて、手前側へ戻して前の糸と一緒に結んでしつかり留をします、留が出來ましたらばその糸で袖下を縫ひますが、袖口布のある間は半返し縫又は一針抜にして四つ縫にし、丸味の所は細かに、他は普通の針目に縫ひます。



第八圖

注意　四つ留の下の後袖の縫代は自然に長い間で折り出さないと袖口下に皺がついて見苦しくなります。又こゝにはきせを摑けなくて宜しいから縫代を他より少し深くします。

裏身頃　袖底は幅の三分の二位まで四つ縫にして、それから先は表袖、裏袖を別々に縫つて折をつけ丸味を作つて表に返し、更に振八つの所だけを裏返して八つ口を表裏縫ひ合せ、表に返して襞をかけます。

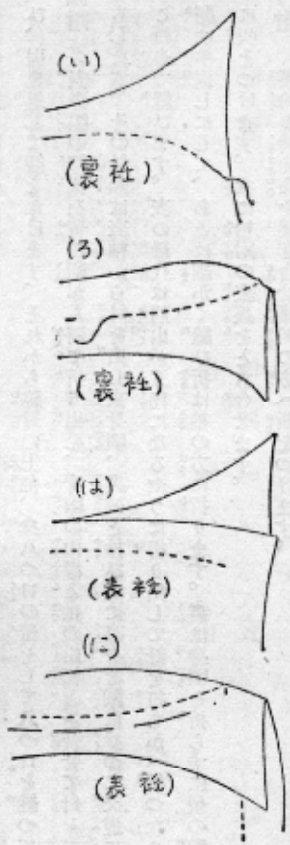
裏身頃　背と脇を縫つて折をつけます、脇の後の縫込を自然に開いて折り襞で押へておきます、若し縫代の大い時は端まで開いてしまひます。それから衽をつけることは單衣に同じであります。

裏身頃　きづ胴接ぎをして折は胴裏に折つて疊襞をします。

背と脇を縫つて衽をつけそれ〴〵折をつけます。但し背の折は表と反對に向けます。

裾合せ、縦綴　表裏を合せて吊し丈比べをしてから裾合せをし、褄をあげてから疊襞をします。

褄のあげ方及縦綴の仕方　第九圖のやうに裏衽の被形の標通りを極く小針に縫つて、糸は始め終りとも留め結にして四寸づゝ糸を殘しておきます。(この糸は裏褄を細くしたものを用ひますのが宜しくあります。)それから糸を引いて縫目をいせ、(中央にいせを多く兩端は自然に少なく)その縫目の際を左の指で押へ、右の拇指と食指とで引き伸します。大體いせが消えましたら(ろ)圖のやうに出袱の形に折つて形を見ます。次に(は)圖のやうに表衽と裏衽とを正ね



第九圖

て形を整へよく櫂を合せて待針を打ち、一針毎に表裏に氣をつけながら褄縫をします。そして褄先に二粍、その他に四粍のきせをかけ、きせ山から五粍離れた所に襟芯をかけます、褄先にはきせをくづれないやうに表から襟糸を通して縫つておいても宜しいのであります。

表裏の背縫、脇縫、衽附の縫目をとぢ、次に裏を出して褄先の縫終りから二粍離れた所を一針返して衿下を縫ひ、引き返して襟をかけます、それから脇縫の上部、身八つ口の留をして八つ口を縫つて襟をかけます。

袖附　表身頃の縫代を留の際から斜に折り出し、身頃の山標と袖の山標とを合せて針を打ち、袖附の四つ留をもします、その針數は表袖から針を出し裏身頃、裏袖と抄ひ次に裏身を縫に抄つて又逆に元に戻つて綴び合せこの糸で縫ひます。表の縫代は肩山が五粍になるやうに折り出して針を打ちかへ折つたまゝ始め縫りの少しの間は半返しにして、あとは細かく縫ひ折は袖の方に折ります。裏は身頃を折らずに留の際から縫ひ、身頃の方に折をつけます。次に衿附の表裏をとぢ合せます。

衿附　裏衿の衿先布を接ぎ合せ裏衿の方へ折をつけます。女物單衣のやうに表裏の衿で身頃を挟んでつけます。そして衿先を縫ひ衿幅をきめて綴けつけ、共衿をかけます。

裾とぢ　表裾の折山から五粍ほど上つた所に、（衽を除いて）前幅の裏に三針、後幅の裏に四針出し、表はその外になほその間にも針目を出して裾とぢをします。

本裁男物袷

仕立上寸法

袖丈	五二	袖口	二八	袖附	四二
袖幅	三四	身丈	一三六内外	後幅	三〇
前幅	二五	衽下り	一九	衽幅	一五
合褄幅	一三・五	衿肩明	八・五	衿幅	五・五
衿	六六	裾	〇・四		

裁方

表用布の裁ち方は本裁男物單衣と同じでありますが、居敷當を取る必要はありません。

裏用布の裁ち方は、裾廻し附のものは女物袷と同じであります。然し男物袷は通し裏のものが普通であります。

裏はすべて表にならつて裁つものでありまして、後身頃、前身頃、衽とも丈をそれ〳〵袱の二倍づゝ長くしておきますが、總尺の充分あるものは身丈を長く裁つて肩で揚をしておきますと、裾の切れた時に裾を切り取るのに都合が宜くあります。

この他に袖口布が要ります。袖口布の地質は黒八丈、瓦斯八、洋八、五日市等であります。

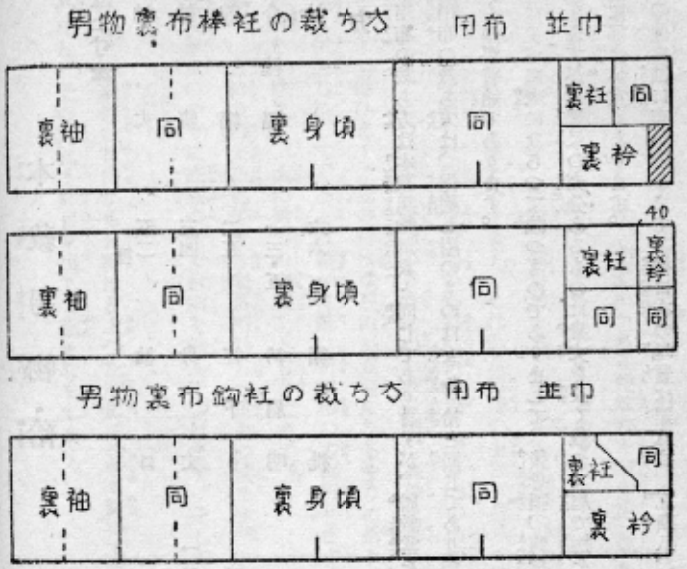
標附け方

表袖　中表に兩袖を別々に折り重ねておきます、そして女物袷のやうに袖丈、袖口、袖附、袖幅、山、丸味の順に標をつけます。

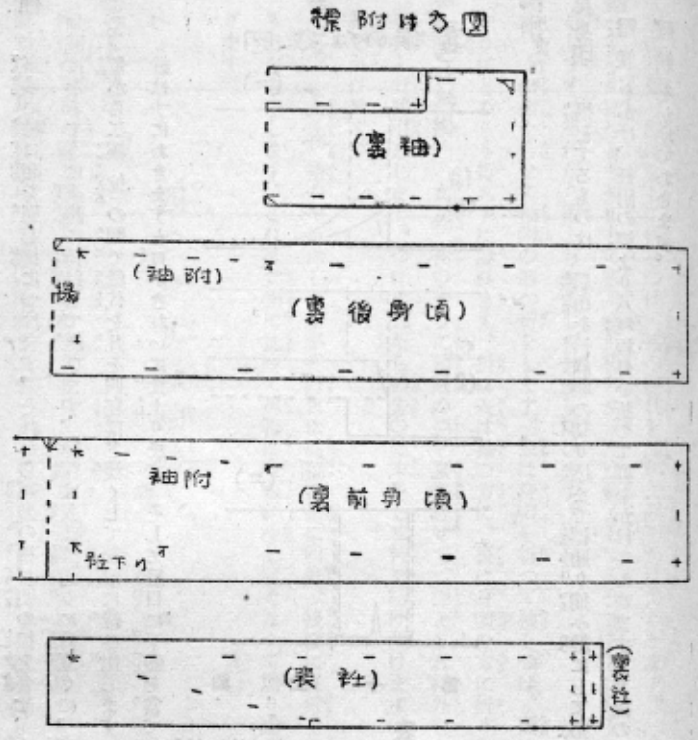
裏袖　表袖と同じやうに、表袖より丈と袖口明を二耗づゝつめ、袖幅は人形の部分だけ三耗つめて他は表袖と同じやうに標します。次に袖口布を重ねて袖口布掛の標をします。若し袖口布の地質の厚いものはその丈を、縫代だけすらして外袖の方を長くしておきます。

表身頃　本裁男物の單衣と全く同じであります。

裏身頃　すべて表身頃にならつて標をつけます、そして幅のつめ方は女物の袷と



第十圖



第十一圖

同じであります。

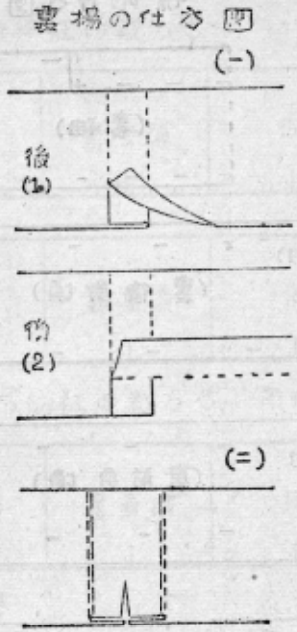
通し裏のものは身丈を表より袵の二倍だけ長くして肩に標をつけ、殘りは揚にします、そしてこの揚の標から計つて袖附、脇、山、衽下り、衽附の標をします。

裾廻し附のものは胴裏や裾廻し布を本裁女物袷と同じやうに扱ひます。

衽と衿　衽は女物袷と同じやうに標し、衿は裏衿を重ねて男物單衣と同じやうに標をつけます。

縫方

袖　裏袖に袖口布を廻し揃につけます、それから表裏の袖口明の標を合せ、山に待針を打つて裏袖が少し張り加減になるやうに全體に待針して縫ひます、縫代は表は標通りに眞直ぐに、裏は女物のやうに留の所は標通りに、留から二糎位の間で縫代を凡そ四粍ほど淺くして綾形に縫ひ出します、但し縫ひ始めと終りは五粍ほどづゝ縫はずにおきますと口がきれいに仕上ります。そして縫目に平鏝を當てゝ表に返し袖口褄を整へます。



第十二圖　裏揚の仕方

袖口の四つ留をして人形の五糎位手前まで四つ縫にし、それから先は表裏を別々に縫つて開いて鏝をかけ、丸味を作つて表に返します。

表身頃　背縫、揚、脇縫、衽附などを縫つて、折をつけ、揚の仕末をすることは男物單衣と同じであります。

裏身頃　揚をするものは、肩山を衿肩明の切り込まで標通り摘み縫にして第十二圖(一)のやうに後身頃に折つて鏝をかけ、衽附の標より八粍程外を折つて鏝をかけておきます。又揚の多い時は(二)のやうに縫目を割つて鏝をかけておきます。

裾合　丈比べをして正しく裏身頃を袵の二倍だけ長くして褄合せをし、裾をあげて女物袷のやうに裾の始末をします。それから綴とぢをもして衿下を縫ひます。

袖附　山標を合せて袖附の四つ留をします、表は身頃を折つて袖をつけ、裏は身頃と袖とを合せて女物の時のやうにどちらも折らずに縫ひます、折は表は袖の方に、裏は身頃の方に折ります。

衿附と共衿掛　女物袷のやうに衿附の標を裏表合せて、表の衿と裏衿とで身頃を挟んで衿附をします。つけましたら衿先の始末をして衿を綰けつけます。そして單衣物の時と同じやうに共衿をかけます。

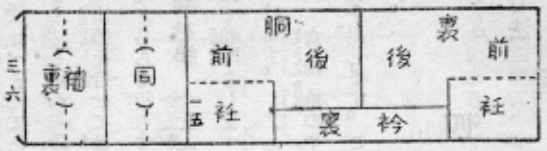
裾とぢ　女物袷のやうにしますが、針目は前幅の裏に四針、後幅に五針を出し、表はその余分に倘その間にも針目を出します。これは女物に比べて男物は身幅が少し廣くなつて居りますから針目の數を多くするのであります。

四つ身元祿袖袷

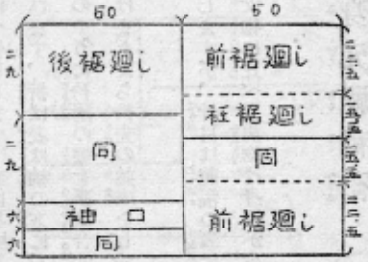
仕立上寸法

四つ身單衣と變りはありませんが袷でありますから、褄の袵を五粍位にし、袖口の袵を二粍位にします、時には袖口は毛拔合せにすることもあります。

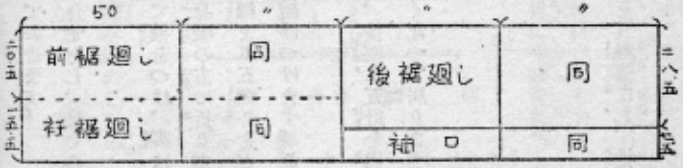
四つ身裏胴裁ち方



裾廻しの裁ち方



裾廻しの裁ち方図



第十三図

裁方

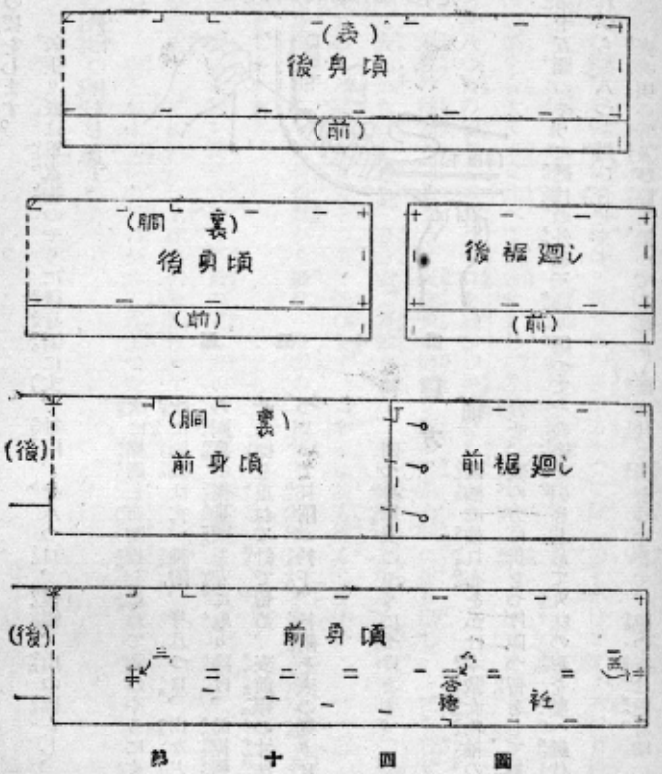
表布の裁ち方は四つ身単衣と同じであります。裏は矢張り本裁袷のやうに通し裏のものと裾廻しをつけるものとあります。裾廻しの丈は身丈の凡そ三分の一位つけるのが普通で、その用布は並幅で一八〇糎位から二一〇糎位要ります。

胴裏の用布は総用布から裾廻しの総尺を引いて、その残りに袖の八倍と衽ぎ代の四倍を加へただけの寸法であります、なほこれに裾の切れた時の用意として全体に二〇糎ほど縫込を加へておきます。

標附け方

袖　表袖は単衣物と同じであります。裏袖は表の標附寸法よりも丈と、袖口明と幅を二糎づゝつめるだけで他の標は同じにします。次に袖口布を本裁女物袷のやうに取せて口布

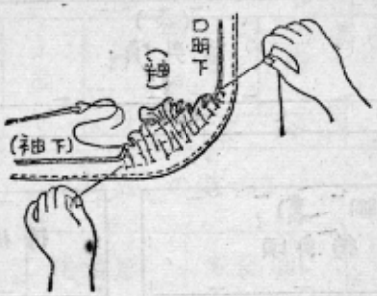
標附け方図



第十四図

附の標をします。

身頃　矢張り表は單衣物のやうに後身頃に丈、袖附、身八つ口、後幅、山の標をし、前身頃は前幅、衽附、衿下、衿附の標をします。



袖丸味の作り様

次に裾廻し布四枚を重ねて圖のやうに丈と幅の標をします。

次に胴裏は丈、袖附、身八つ口、山などの標をつけます。それから胴裏の後身頃を左に取り除け、前裾廻しと、前胴裏との接ぎ合せの標を重ねて針で留め、表前幅の寸法通りに前幅の標をつけ、つゞいて衽附、衿下、衿附を表の通りに標してから褄の標をします。

十五圖

衿　四つ身單衣のやうにつけます。

縫方

袖　裏袖に袖口布をかけ本裁女物袖のやうに袖口明を裏表縫ひ合せ、裏の方に折をつけ四つ留をして袖下を縫ひます、袖の丸味は第十五圖のやうに縫代の外を三通り縫ってその糸を引きしめて丈味の形を整へ縫代を平らに裁取りします。それから振八つを縫ひ合せます。

身頃　表身頃の背及び脇を縫ってそれ〳〵縫ひ代に折をつけます、脇の折は前身頃に倒して身八つ口下の縫込を後身頃の方に斜に開いてとぢつけます。それから衽を摘み縫にします。

裏身頃の胴接の標を合せて縫ひ、折りは胴裏の方へつけ衛敏をかけます、次に背縫、脇縫、衽の摘み縫をして表のやうに折をつけます、但し背縫の折だけは反對にします。

次に表裏を合せて丈を比べて裾合せをし、きせを四糎かけて褄をあげます、そして背、脇、衽の縫とぢをしてから身八つ口の留をして身八つ口を縫ひ、衿下をも縫ひます。

袖附　本裁の袖附と同じやうに表身頃の縫代を留の際から斜に折り出し、山標を合せ、留をします、留も同じやうに表袖から針を出し、表身頃、裏袖と抄ひ、次に裏身頃を小さく縦に抄つて、裏袖、表身頃、表袖へ返つて初めの糸と結び合せてその糸で縫ひます。この留は前も後もします。

裏は身頃を折らずに留の際から縫ひ、身頃の方に折をつけます、次に衿附標より五糎外と表裏合せて共糸でとぢ合せておきます。

衿附　表裏の衿を接ぎ合せて裏衿の方に折りをつけて隠襞をかけ、單衣のやうにつけます、つけましたら衿先の始末をして紳衿に仕上げ共衿をかけます。

褄とぢ　褄とぢは表褄の折目から五粍上つたところに後幅は裏に三つ、前幅は裏に二つ表はこの他に前後ともその間にも針目を出します。

三つ身袷

仕立上寸法

袖丈、長袖	五〇―五三	袖丈、元禄袖	二八
同　筒袖	二四	袖　口	一四
袖　附	一五	袖・幅	二五
身　丈	一〇〇内外	身八つ口	一〇
後　幅	いっぱい	前　幅	いっぱい
衽下り	一一	衽　幅	いっぱい
合褄幅	衽幅より八糎づめる	衿肩明	五
衿　幅	四	衿　下	三〇
袖口�míまち	・二	裾　衩	・六

裁方と積方

三つ身の總用布は袖丈の四倍と身丈の三倍とを加へたものでありますから、長袖と元禄や筒袖の場合とでは自然と總丈にも相異が生じますが、普通は五〇糎から五七〇糎位ですから一反で

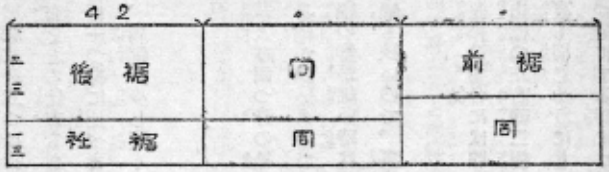
幅八五糎並布用

公式　袖丈×4＋身丈×3＝總用布

身丈＝(總用布－袖丈×4)÷3

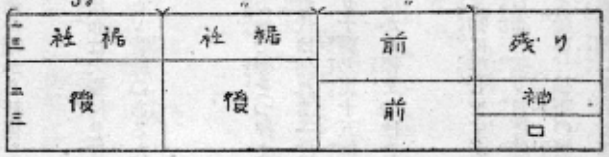
第十六圖

方ち裁のし廻裾



裏の積方

方ち裁のし廻裾



第十七圖

凡そ二枚裁たれます。

第十六圖の如くにまづ袖丈の四倍を切り、その一方の耳から衿布をとり、次に身頃を三枚に折つて輪の一方を向ふから他の一方を手前から布幅の半ば迄切り込み、次に中の布を半幅に裁切ります。次に、身頃を二枚合せて、衿肩をあけ、衽を裁ち離します。これが普通の三つ身の裁ち方ですから片身頃は布の裏が出るやうになりますので、兩面ものでないと具合が悪くあります。

胴裏の裁方　通し裏の時には、表用布に袵の出の六倍を加へたものが裏の總用布になるのであります。

裾廻し　別布でつけます時は、前の總用布から、裾廻し丈を引き去り、殘りの丈へ接ぎ代として多少の縫込みを加へたものが胴裏用布の總丈になります。

裏の裁方　通しの場合には表用布と同様ですから省きますが、裾廻しを附ける時には裾廻しは第十七圖上のやうに、總丈を三つに折つて、後裾の幅から衽裾をとり、前裾は二つ割にして半幅にいたします。下圖のやうに袖口布をとる仕方もあります。

三つ身は一つ身に比べますと、總用布は大體同じ位で、又出來上りの大きさも一つ身と大差がありませんが、けれども、肩幅が少し廣く出來ることゝ背縫のあるため體裁がよいので時には用ひますが、余り多くは作はれません。

標附け方

袖　本裁及び四つ身の袷等と同じ方法で標をつけます。

身頃　身幅が狹いものですから、縫代は何れも一ぱいに標をつけます。

衽　衽幅の形が細い時は、劍先より十糎乃至十五糎下つた處に約一糎のふくらみをつけます。

衿　衿幅も狹いので、裏衿をつけてから標をつけます。

縫方

袖　長袖の場合には四つ身及び女物に準じますが、筒袖の時には、裏袖に袖口布をかけ、次に表裏の袖口を合せ、山標の左右約二糎の間は袖口布を張り目に縫ひ、袖口際をかたく留め、その糸で表袖を袖幅一針先まで縫ひ、裏も同じやうにして八つ口を縫ひ、袖下の縫目を表裏とぢ合せて引きかへし、襟をかけます。

もし四つ縫にする時には、先づ表裏の袖口を合せて縫ひ、きせをかけて表に返し、縫目を合せて四つ留をします。この糸を切らずに袖下を三、四糎一針抜きに四つ縫とし、幅標の五糎位手前から標の一針先まで表裏別々に縫ひ、表を出して襟をかけ、袖の八つ口を縫ひ、次に袖下の縫ひ込みの端をあらく裏にとぢつけます。

身頃　表裏の背、脇を縫ひ衽をつけます。衽合せをして、裾に假とぢをします。

縦とぢ、身八つ口　背及び脇をとぢ、脇縫の上部に四つ留をし、身八つ口を袖附標まで縫ひ、襟をかけます。

袖附　四つ身の袷と同様であります。

衿附、共衿　衽の縦とぢをし、衿下を縫ひ、表裏の衿附の標から四糎外をとぢ合せ、衿附、衿廻をし、共衿をかけることは四つ身と同じであります。

裾とぢ　針目は後幅裏に三針、表に七針、前幅裏に二針、表に五針出してとぢます。

附紐、揚　肩から二十三糎位の處に紐をつけ、肩揚、腰揚を滑る子供の大さに合せて適當に一つ身單衣の時と同じ方法で揚げます。

一つ身綿入

一つ身は單衣物の頃で申しましたやうに嬰兒から二三歳位までの子供の着物で大中小があります。普通並幅一反で三枚裁つことが出來ますが、近來は改良型が種々出來まして、より少い布で作ることも出來るやうに考へられました。

地質は普通の着物地は殆んど皆用ひますが特に嬰兒用としては皮膚にやはらかく當る地質のもの又清潔の必要

袷の部

上から白地のガーゼ、さらし木綿、綿ネルなどを多く用ひます、そしてだん〳〵大きくなるに従つて色物、柄物を用ひます。

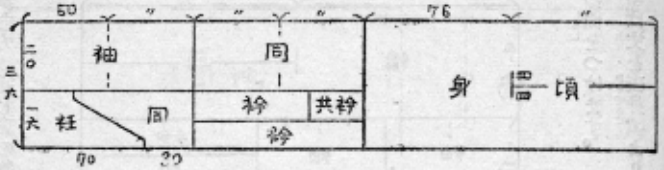
仕立上寸法

袖丈、褄袖	二五——五〇糎	袖丈、元禄袖	二七糎
袖丈、筒袖	二四	袖口	一三
袖附	一三	袖幅	一八——二四
身丈	七五——八七	身八つ口	一〇
後幅	いつぱい	前幅	いつぱい
衽下り	一〇	衽幅	いつぱい 一三糎位
合褄幅	衽幅より五粍つめます	衿肩明	三——四
衿幅	三——四	衿下	一八——二三
袖口袱	〇・五	裾袱	一

裁方

用布の都合で棒衽裁にする時と、鉤衽裁にする時とがあるが、一般に棒衽裁の方が多く使はれます。第十八圖の(い)は鉤衽でありますから兩面物でないと具合が悪く、(ろ)圖、(は)圖は何れにも使はれる裁ち方であります、又袖も筒袖、元禄袖褄袖とどの袖の裁ち方にも使はれます、(に)圖は大幅物の裁ち方であります。

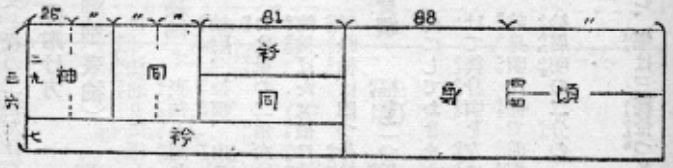
(い) 一つ身褄袖鉤衽の裁ち方(兩面物)



公式　袖丈×4+身丈×2=總用布

(總用布−袖丈×4)÷2=身袖

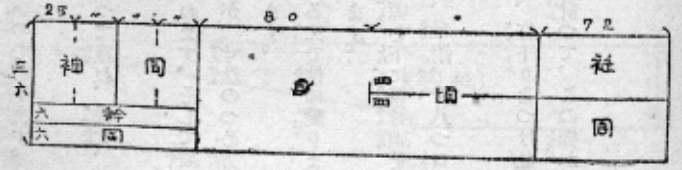
(ろ) 一つ身筒袖の裁ち方



公式　袖丈×4+身丈×3−衽下り=總用布

(總用布−袖丈×4+衽下り)÷3=身丈

(は) 一つ身筒袖別衽の裁ち方



公式　袖丈×4+身丈×3−衽下り=總用布

(總用布−袖丈×4+衽下り)÷3=身丈

第十八圖

裏の裁ち方は通し裏の物は、身丈と衽丈を裄の二倍だけ長く裁てば宜しいのであります。

標附け方

漏袖（表袖）　剛袖を中表に折つて重ね、袖丈、袖附、袖幅、山の順に寸法通りに標します。

裏袖　表袖と同じやうに折り重ねます、そして表袖にならつて袖丈、袖附、袖幅、山の標をつけますが、寸法のつめ方は丈を四粍つめ、袖口は裄の二倍だけ廣くしておきます。

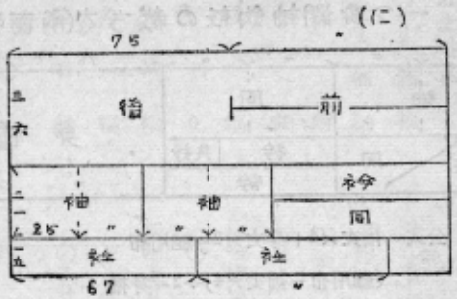
筒袖　はたゞ袖口寸法が小さくなる丈で他は變りません。

元禄袖　は四つ身袷と同様であります。

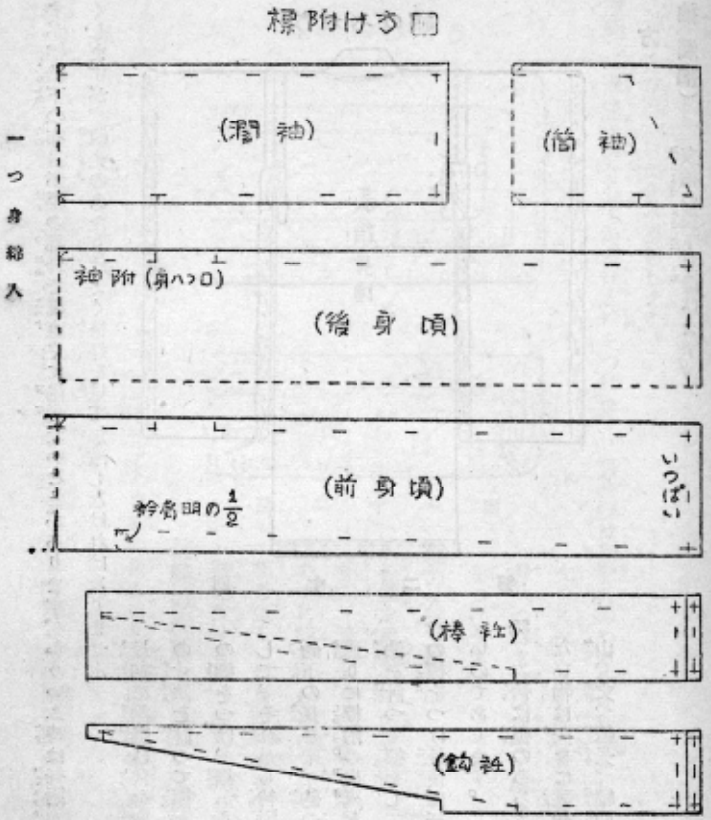
身頃　幅を二つ折にして、前身頃を下に後身頃を上に、衿肩明を左手前にしておきます。そして身丈、袖附、身八つ口、後幅、山の標をつけて後身頃を左に除けます。

前身頃は裾で前幅を一杯に標し、衽下りをつけ此所で裁ち目の方から衿肩明の二分の一だけの寸法を計つて、この標から斜に裾の標までに衿附の標をつけます。

裏身頃は丈を表身頃より裄の二倍長くし、幅は三粍位つめて標します。



第　十　八　圖



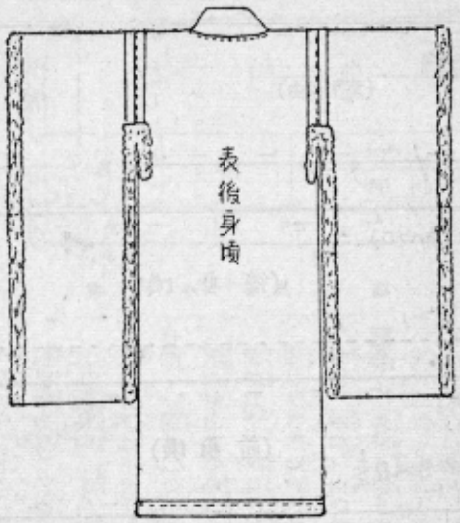
第　十　九　圖

衽　棒衽は本裁給のやうに、表衽と裏衽とを重ねて標します。

一つ身は衿下が短いので鋏先が余り細くなりすぎますから、衿附の標は鋏先から凡そ一〇粍位の所で斜線より八粍程の丸みをつけて格好をよくします。

鉤衽も大體棒衽と同じでありな

すが、衿下の布目が幅の都合で眞直ぐに出來ないことがあります、かういふ時は衽附の方の曲りをいく分少なくしますが、繰先のあたりはよく恰好を見て加減しなければなりません。



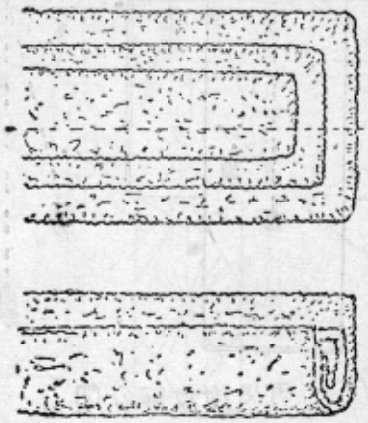
第十二圖　方れ入の綿

裁方

袖（濶袖）　表袖の袖下を縫ひます。

最初に裾縫ひ代を取りつゝいて衽丈、衿下の寸法を計つて標をつけ次に衽幅、合被幅の標をつけ、裾から繰先までの衽附の標をして、それから衿附の標をつけます、但し鉤下の長さや、鉤の切り込等によつてこの通りに標附の出來ない時は衽丈、衽下の寸法を計つて標をして次に衿附、衿下の縫代の標をつけ最後に衽附の標をつけても宜しいのであります。

衿　衿は幅のあるものはそのまゝに、足りない物は先きに裏衿をつけておいてから、山、丈、繰先、幅の標をつけます。



第十二圖　方り倣の綿被

裏袖に袖口布のつくべきものならば、はじめにつけてそれから袖下を縫ひ、つゞいて八つ口を表裏縫ひ合せて袖口及び八つ口に含み綿をします。

身頃　表の脇縫をしてから衽と衿をつけます。裏身頃は裾廻しのつく物は胴接をして表身頃と同じやうに縫ひ丈を比べてから裾合をして被を作ります、それから身八つ口も縫ひ合せて綿を含め、袷と同じやうに袖をつけます。

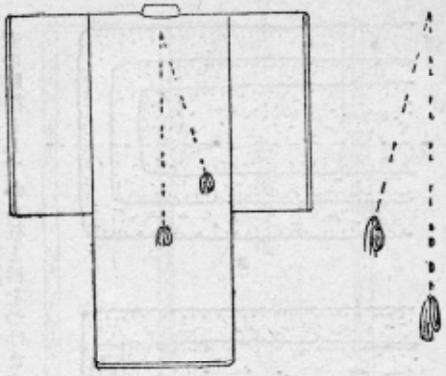
綿の入れ方　全體を裏返して前身頃を中に表の後身頃を上にして第二十圖のやうにおきます、そして眞綿を引いてその上に綿を入れ袖口、八つ口、裾の綿の整理をして引き返し、前身頃の裏を出して綿を入れ、前の表身頃を被せるやうにして表を出します。

裾綿の注意　裾綿は三枚位を程よく重ね裾幅よりも四糎位長く切つて二つ折にします、そしてこの袱綿の折り山を袱山にあて強く入れて次に胴から續いてゐる綿を折り返して被せます。

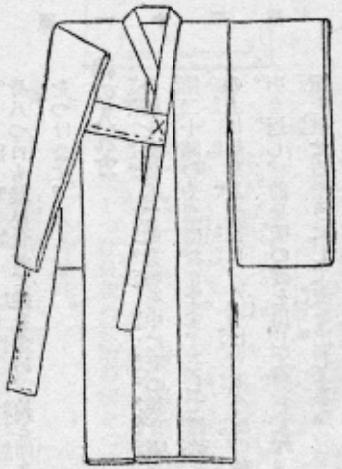
衽け上げ　まづ裾の假とぢをしてつゞいて衽の裏側を出して綿をその間に挟み、縫目から二糎ほど上を袷の

袷縫のやうに綿も一緒に縫ちます。次に褄先も裏返して袷のやうに先から四、五粍ほどを縫つて綿を含め、表に返し衿下全體に綿を含めて鏡で假とぢをします、それから綿を整へて衿附を表裏一緒に縫ち合せてから衿綿

四の守背児男　四の守背児女



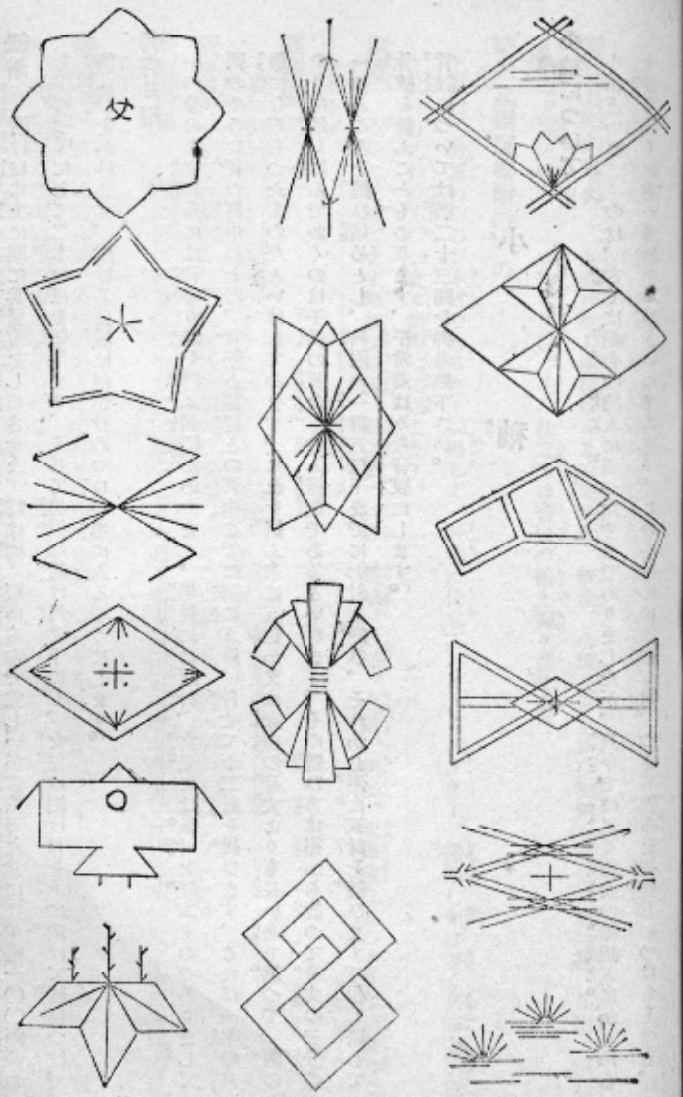
四の紐付附児男



第二十二圖

と袖口綿をします。

褄とちの針數は裏の後幅に五針、前幅に二針、表はその外にたほその間にも針目を出します。



第二十三圖

紐附　附け紐は上に別に兵児帯をしめさせます時は細く短いもので宜しいが宮詣着などには並幅一〇〇糎の布を半幅づゝにして二本の紐を結けます、そして男兒は結け目を下にし、女兒は結け目を上に向けて縫ひつけ、飾鋏をかけます、附ける位置は紐が身八つ口の中に入るやうにします。

背守り縫　一つ身のお宮詣着には背守り縫を縫ふ習慣があります。男兒には縫針、女兒には雄針を縫ふものでありまして圖のやうに背の眞中に七針、背筋と脇縫との眞中までに斜に五針、合せて十二針を縫ひます、これは一年の月數になぞらつたものだといはれてゐます。これを縫ふ糸は五色か又は赤白の身丈よりも長い糸で縫つて、圖のやうに端を結んでおくのは子供の長命を希ふ緣起であるといひます。その縫ひ方は裾から計つて身丈の三分の一のところを縫ひ始めとし、衿附の一糎五粍下までに七針を縫ひ、それから斜に五針を縫ひます。但し略して背紋を縫ふこともあります、平常着はみな背紋にします。

背紋については第二十三圖を御參照下さい。

小袖

小袖について　小袖といひますのは、古くは綿布の綿入に限つたやうでありましたが、只今では況く男女の袷綿入にかゝわらず表も裏も絹布の着物を小袖といつてゐます。この小袖には裾廻し附、つまり胴布を裾廻しにつけるものと、裾廻し布を共布で引返しにつける場合所謂無垢のものとがあります。

裾廻し附のもの　表布は紋も裾模様もなくて縞物、絣物、小紋などを用ひ裾廻し布には無地物、型附、模様物など表と調和のよい物を用ひ、その仕立方は普通の袷と變りません。

紋附及裾模様附のもの　これは二枚重ねるのが本式でありますが略して一枚物に仕立てることもあります。裾廻し布は多く共布を引返しにつける仕立方、つまり無垢に仕立てます。

地質　小袖に仕立てます地質は縮緬、羽二重、綸子、綾織、紋織、大島、銘仙、米澤織などのやうな絹織物であります。

模様物　小袖の模様物には大體次のやうないろ〳〵の種類があります。

總模様　全體に模様をつけた物で袖は多く振袖に仕立て、紋はつけない方が多くあります。

島原模様　裾の方は裾模様のやうで、胸の上部の邊りにも模様をつけた物で、袖は振袖で袖にも模様をつけます。

裾模様　紅から前身頃、後身頃へとだん〳〵に模様を低くつけたものであります。袖は振袖にも留袖にもしますが、振袖の時には袖にも模様をつけます。

江戸褄模様　紅から前身頃へかけて模様をつけて、その高さは人々のすき〳〵或は年齢によつて違ひますが

凡そ三五極位から七〇極位までにします。

裾模様　衽にだけ模様をつけるのをいひます。

片褄模様　下前の裏衽にだけ模様をつけたものをいひます。

裃模様　袖にだけ模様をつけた極く地味なものであります。

製斗目模様　腰のところと袖とに横に平らに模様をつけたものをいひます。

これ等の模様物には凡て三つ五つの紋をつけます。

重ね物

下着寸法のつめ方

	男物袷直	女物袷直
	（上着より）	（上着より）
袖丈	一極つめる	一極つめる
袖口	四糎つめる	同　上
袖附	六糎（人形で三糎）つめる	四糎つめる
袖幅	四糎つめる	同　上
身丈	二糎つめる	同　上
後幅	四糎つめる	同　上
前幅	八糎つめる	同　上
衿肩明	四糎つめる	同　上
衿丈	一極つめる	左右各一極つめる
肩幅	四糎増す	同　上

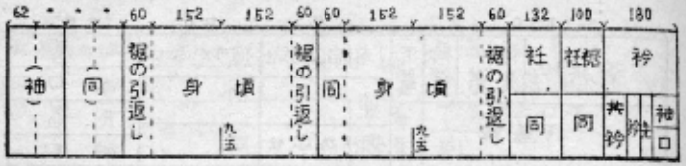
以上の外、裄、八つ口、衽幅、合褄幅、衿下、衿幅、衽下りなどは上着と同寸法にします。

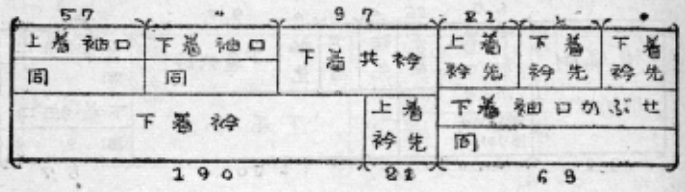
重ね物といひますと大抵二枚重ねでありますが、時には三枚重ねることもあります。その時には中の着物を普通寸法にして上着下着の寸法を右の割合で増減します。なほこの寸法は上着と下着が同じ地質の場合のつめ方でありますから、地質の違ふ物はその都度適當に加減しなければなりません。例へば上着を縮緬で下着を羽二重などで重ねる時などは、縮緬にもよりますが下着の身丈を上着より却つて長くしなければならないやうなこともあります、こんな場合は身丈だけでなく袖丈や裄などもそのつもりで加減しなければなりません。

裁方積方

裁ち切寸法は男物も女物も大體普通袷と同じでありますが、紋附や模様物を裁ちますには充分注意して紋や模様の位置を調べてよく合せるやうにしなければ

女小袖無垢一枚の裁ち方





第二十七圖

これは上着の表と、裾廻し、それに下着の裏表八掛とを取つた殘りが三五四糎あると假定した場合で、其の用布で振八つと袖口被布を三つ割幅で裁ちます。（第二十五圖）

留袖模樣二枚重（無地布三二八糎の場合）

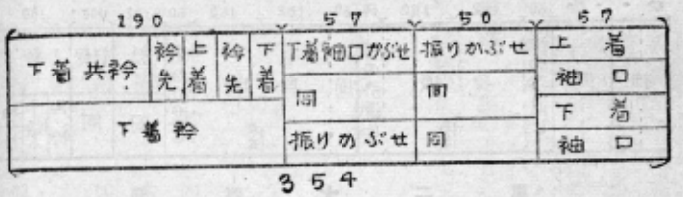
これは用布が前の場合より二五糎も短いので袖口被も振八つも皆幅を狹く裁ちます。（第二十六圖）

振袖二枚重ね小物の裁方

振袖は留袖と違つて袖にも模樣が附いてゐますから、二枚重ねでありますと下着の裾にも袖にも模樣がついてゐます、從つて下着の振被せは普通半幅になつて模樣が染めてあります。ですから無地のところからは留袖のやうに振八つ被を取る必要がありません。たゞ袖口被せと下着の衿と上着下着の裏衿先だけを取れば宜しいのであります。

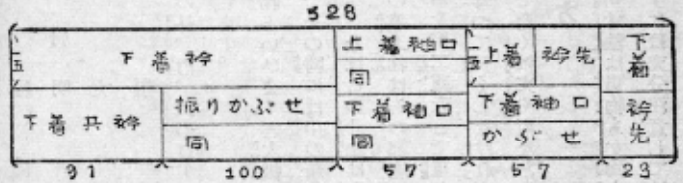
無地布二七四糎の場合　第二十七圖のやうに下着の衿を半幅で取りその半分から上着、下着の袖口、下着の共衿を取り、殘りから衿先と下着の袖口被せを取ります。

無地布四二九糎の場合　第二十八圖は振被せに模樣はついてゐましても振



第二十五圖

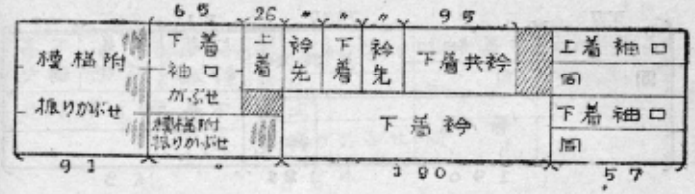
同　328糎の場合



第二十六圖

なりません。模樣物はすべて寸法よりも一厘模樣を合せることが大切でありますから、模樣の具合によつては多少寸法を加減しなければならいこともあります。しかし模樣物は染め上げる前にそれ〳〵寸法を決め積りがしてありますから、模樣や紋の具合と裁ち切の糸印とに注意して鋏を入れれば宜しいのであります。然し二枚重ねになりますと下着の振八つ被せや、袖口被せや衿などを模樣のところを取つた殘りの無地のところから取らなければなりませんから、その裁ち合せが少し工夫を要します。この無地の部分は用布の長短や、袖丈の違などで一定しませんから裁ち方も場合〳〵で變へなければなりません。次にその二三の例を擧げて見ます。

留袖模樣二枚重ね（無地布三五四糎の場合）



第二十八圖

被せを三つ割で取ります爲め、振被せの横から小物を取ります。

標附け方

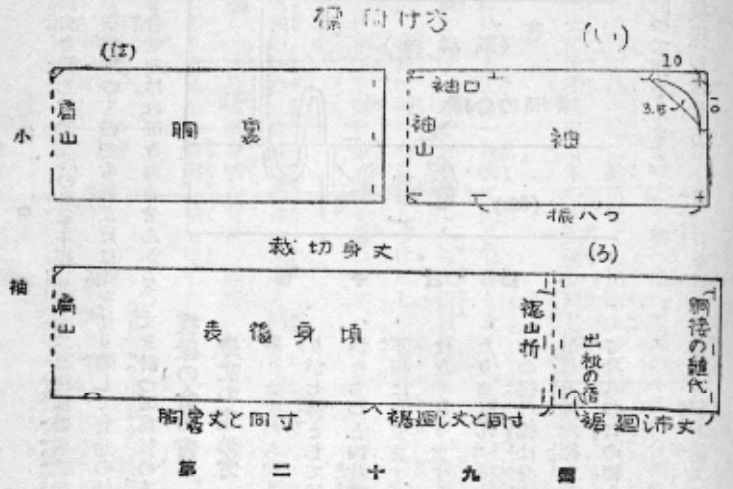
標附の注意　大體一枚物と同じでありますが、裏の結め方は木綿物より少しづゝ少なくします。模様物は裁ち方の時にも模様を合せる事に注意しますが標附の時には一層注意してよく模様の合ふやうにし、縫め模様を合せ糸標をつけてからします。又地質によつて重ねて標のつけにくいやうな物は針でよくとめて、物によつては一枚づゝすることもあります、標附に角筈は地質を傷けるおそれがありますから絹布標附用の鍼を使用するのが安全であります。

標附はなるべく上着、下着、表裏とも一度についてするのが宜しくあります。上着を作つてから下着にうつるやうな事をしますとどうしてもいく分の寸法のちがいが出來易いものであります。

振袖の標附け方　左右の表袖を中表に合せて紋の位置を動かぬやうに周りを鉄糸でおさへておきます。紋は向き合せになるやうに兩袖を重ね第二十九圖(い)のやうに袖丈、袖口、袖附を標し袂の丸味は一〇糎位にして斜線の眞中で三糎五粍の丸味に標します。袖幅は袖山から袖附の間では眞直ぐにし、袖下では一糎廣くして振八つの間で斜に標します。これは袖丈が長く、且つ丸味がつきますので袖下の方の幅がいく分狹く見えますので寸法を廣くするのであります。他は普通袖と同じであります。なほ袖口下の模様を合せる必要のある物は一枚づゝ別々に標付をします。

裾廻し無垢の標附　表身頃の背紋を中表に合せて鉄糸でおさへ、ろ圖のやうに裾廻しを擧げたまゝ前身頃二枚の上へ後身頃二枚を肩から折り重ね、表身頃、裁切寸法の裾山を中心にして裾廻し布と身頃の方とへ八粍づゝの縫代で裾合せの標をつけます。裾廻しの方は出袱の二倍を取つてそれから裾廻し丈を決めて胴接ぎの標をつけます。そしてろ圖のやうに身頃の方では裾廻し丈と同寸に裾から計つて、それから上の胴裏丈を計つておきます。

次には圖のやうに胴裏布を四枚揃へて先きに計つた胴



第二十九圖

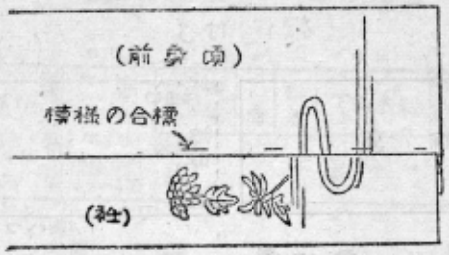
裏丈を標し、（きせの分を二耗加へます）後は普通袷のやうに標附します。

衽　無垢のものでも衽だけは裾を切り離して普通の衽と同じやうに裏表を重ねて標します。どちらも衽先を接き合せなければなりませんから、丈を計つて裏衽の方を出来の二倍だけ長くして重ねて置きます。

模様の合せ方

身丈の定め方　模様物は前にも申したやうに大抵裁上りに糸標がしてありますから、それを目標に裁ち切れば宜しいのですが、裁ち上げて紋下りが七糎として衿肩を明け、四枚を折つて平らに重ねました時袖口の裁切がきちつと四枚揃ふこともありますが多くの場合いく分づゝ違つて四枚が不揃になります。かうなつた場合これを裁ち切つてしまひますと模様が合はなくなりますから、このやうな時には是非とも揚をして加減しなければなりません。

この揚の標は身丈と、模様との關係で四枚一度につけることが出來ませんから上部の標をしてから男物の内揚の仕方と同じやうに肩山を二種づらせて身八つ口の標より二糎下へ各布別々に模様の加減を見て揚になる寸法を計つて標をします。



第三十圖

衽模様の合せ方　普通背を縫ひさしたら脇を縫ふのですが、模様物は第三十圖のやうに先に衽布を衽附の標通りに折目をつけて、この折目を前身頃の布表の上に、模様をよく合せて重ねます、そして前身頃と衽の模様の細かいところまでよく繰へ揃へて圖のやうに合標を附け、この合標から前幅を計つて標します。縫ふ時にはきせ代だけ内輪に縫ひますと出來上つてから模様がよく合ひます。

裾廻に模様の出るものも矢張り同じ要領でいたします。

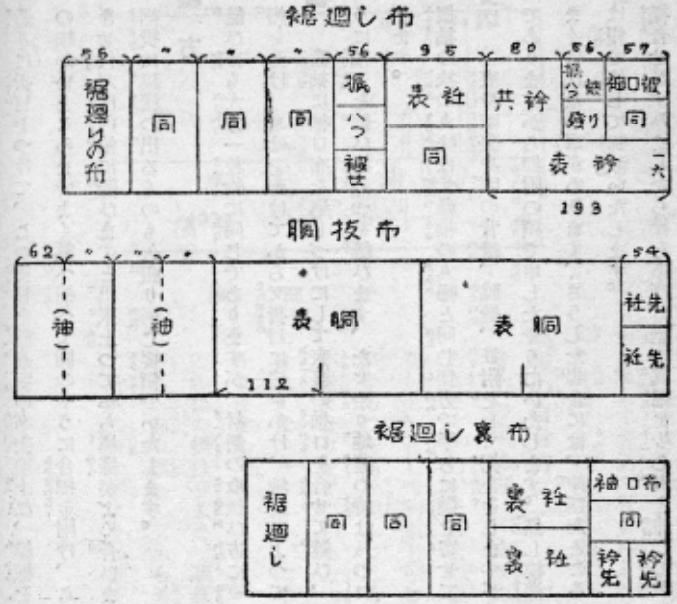
縫方

縫ひ方も大方一枚物に同じでありますが、材料の取扱ひ方に水分注意しなければなりません、全部縫目には平鏝をかけ、きせをかけてから又折目に鏝をかけ、地質によつては縫喰をかけます。

袖　裏袖に袖口布を廻しづけにして表裏の袖口を合せて縫ひ、引き伸した眞綿か、青梅綿を入れて普通袷のやうに袖下を縫ひ振八つを縫ひます、たゞ余り地薄の時は八つ口に裏布と同じ色の薄い心を入れて縫ふこともあります。

身頃　表身頃裏身頃の背縫、脇縫、衽附をして裾合をしますが、模様物は模様を合せることが一番大切なことでありますから標附の項で申したやうにいたします。然し模様の細かい部分は伸び縮みがあつてどうしてもうまく合はない事があります、さうした場合には、伸びたところは過布を軽くあてゝ縮ませ、縮んでゐるところは鏝で伸して加減いたします。

裾合せがすみましたら褄をあげ、裾に眞綿を少し引き伸してゆるく入れ、表に返してよく綿を袖に含めて裾を



第一図　第二図　第三図

かけます。次に縦どぢをして身八つ口を縫ひ、袖をつけてから衿下を縫ひ衿をつけ、共衿をかけ最後に裾縫をして仕上げをします。胸、衿にかけて模様のある場合は矢張り模様を合せることを主として衿附をいたします。

下着

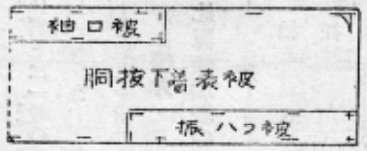
通し物と胴抜物とあります。通し物は寸法をつめるだけで上着と同じやうに仕立てます。

胴抜物

裾廻り布と胴抜布とで作り、胴抜布は柔かい薄い絹地を用ひ、裾廻り布は半反物で第三十一圖のやうに裁ちます。

まづ表衿の分に丈一九三糎を裁ち切つて幅から一六糎を取りその殘りの布で共衿を八〇糎とり、次に袖口被布を五七糎取つて幅を二つに割り殘り五六糎の振八つ被布をこゝから一枚取りまして幅は少し殘布にします。

表衽布は丈九五糎に取つて幅を二つ割にし振り八つ被布は矢張り五六糎丈を三つ割にします、そしてあと二二八糎の丈を四つに切つて五六糎づつの裾廻り布とします。



第二十三圖

胴布　袖は上着と同じやうに裁ち、衽先は五四糎の丈を裁つて幅を二つ割にし、殘り布を兩身頃にしますから一一二糎の寸丈になります。

標附　上着と下着とがぴつたり重なるやうに寸法を詰めて縫すほかすべて上着と同じでありますが、たゞ一布を通しませんから胴の接ぎ合せの標附が要ります。

まづ表袖へは袖口の被布と振八つ被布とを第三十二圖のやうに重ねて標しますが、振り八つ布は袖幅と袖丈とを先に當つて見て縫代が一ぱいになるやうに被せ布を重ね、あとは上着と同じやうに全體の標をつけます。

身頃　裏袖も寸法が詰るだけで仕方は同じであります。

矢張り寸法を詰めることゝ、表身頃も裏身頃のやうに胴接ぎをすることゝが異ふだけであります。

縫方

大體普通の長着と同じやうに縫ひ上げますが、表袖には袖口被、振八つ被をかけ、裏袖には袖口布をかけて普

通の袖のやうに縫ひます、表裏とも身頃は胴布と裾廻し布とを接ぎ合せて胴接の方へ折をつけて襞襞をかけます、そして後は背縫、脇縫、衽附、衿附、裾合、袖附と普通の袷と同様に仕立てます。

口綿本比翼

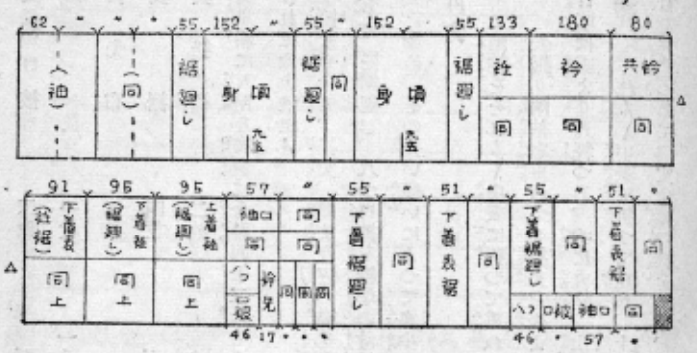
比翼とは一枚の着物で、袖口、八つ口、裾廻しなど廻りを二枚重ねのやうに仕立てたもので本比翼と附比翼とがあります。本比翼は上着を仕立てる時に下着を一緒に縫ひつけたもので、附比翼は普通の着物の下にたゞ下着廻しを附けたものであります、この比翼は袷にも綿入にも仕立てますが多くは口綿にします。

裁方と積方

比翼無垢表の布數と裁切寸法

上着	袖	二枚	一二四	身頃	二枚 三〇四
	衽	二枚	一三三	衿	一枚 一八〇
	共衿	一枚	八〇	裾廻し	四枚 五五
	衽裾廻し	二枚	九五	衿先布	二枚 一七
	袖口布	二枚	五七		
下着					

比翼無垢表の裁方 (一)



公式　袖丈×4+(身丈+裾廻し)×4+衽丈+衿丈+共衿丈下着衽裾+上下衽裾廻し×2+袖口布×2+(下着表裾+下着裏裾廻し)×4=總用布

比翼裏胴の裁方 (二)

公式　袖丈×4+胴裏丈×4+八つ口布+衽先+衿裏+繰越=裏總用布

袷の部

表袖口被	二枚	五七	袖口布	二枚	五七
衿	一枚	一八〇	共衿	一枚	八〇
衿先布	二枚	一七	表振り八つ被	四枚	四六
表裾	四枚	五一	裾廻し	四枚	五五
表衽裾	二枚	九一	裏衽裾廻し	二枚	九九

比翼無垢に入用な布數は合計四十二枚であります。このやうに布數を澤山要しますから積り方には余程工夫しなければなりません。

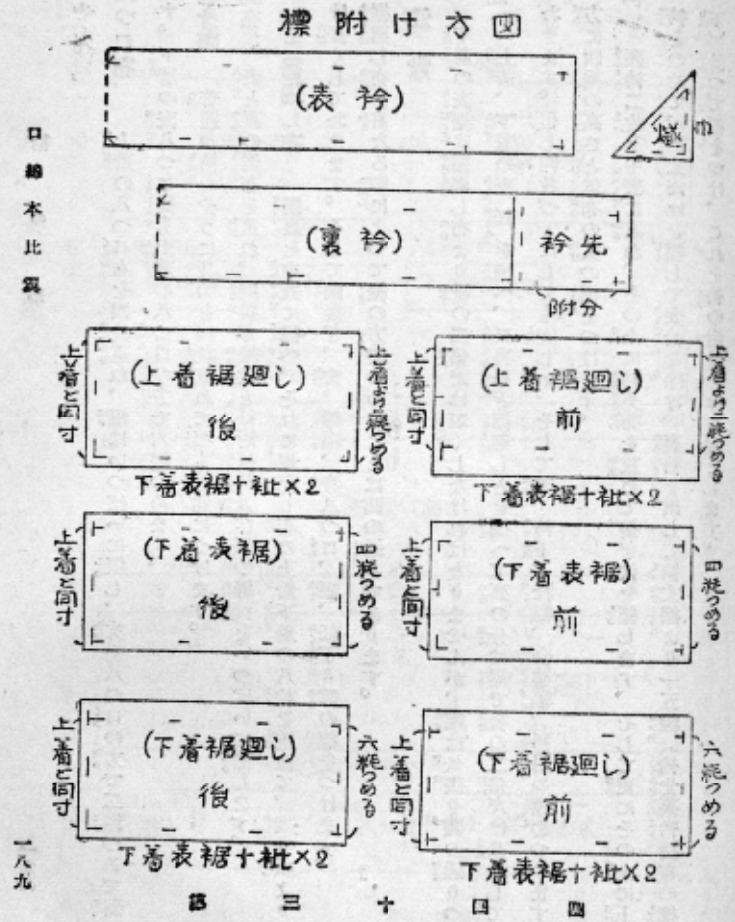
つづ袖丈や身丈、衽丈、衿丈などの裁ち切り寸法は、仕立上寸法によつて定めます。そしてから袖口布、共衿、衿先布、衽裾廻し、八つ口被を標準の寸法に從つてこれ等を總用布から引いて殘りを調べて、それから裾廻しの丈をきめ、その長い短いによつて多少他の寸法を加減したり又裁ち合せる工夫もしなければなりません。

標附け方

表袖　兩袖をそれ〴〵中表に折つて重ね、袖丈、袖口、袖附、山、丸みの標をつけます。

裏袖　矢張り兩袖を重ねて、袖丈を表より二粍つめ、八つ口の方は一〇糎位の間で斜に八粍つめて標をつけ袖口明は表より五粍つめ、次に丸味、山などの標をつけ、最後に袖口布をのせて袖口布掛の標をつけます。

袖口布　それ〴〵中表に折つて重ね、上着の袖口を二粍つめ、幅、丈をいつぱいに標します。下着の袖口被は袖口を三粍つめて、丈は幅の標をつけ、そして上着袖口布より袖枇の二倍だけ幅をつめておかなければなり



圖方け附標

せん。

八つ口布　上着の八つ口布を四枚重ね、幅はいつぱいに標し、丈を八つ口の方で二粍つめて斜に標をつけます。下着の表八つ口被も上着の八つ口の方で六粍つめます。

表身頃　普通の袷のやうに身頃を四枚重ねて標も普通につけます。

繻布　表と裏の繻布を重ね、胴接ぎ繻代と衽附繻代及び斜の繻代をいつぱいに標します。

胴裏と裾廻し布　胴裏を中表に揃へ、それに裾廻し布の上着下着の八枚を重ねて、表身頃よりも裾の二倍丈け長くしておきます。そして胴接ぎ、丈、繻幅、身八つ口、幅、衽下り等の標をつけます。裾廻し布を重なる順によつて裾の方でつめることは圖の通りであります。

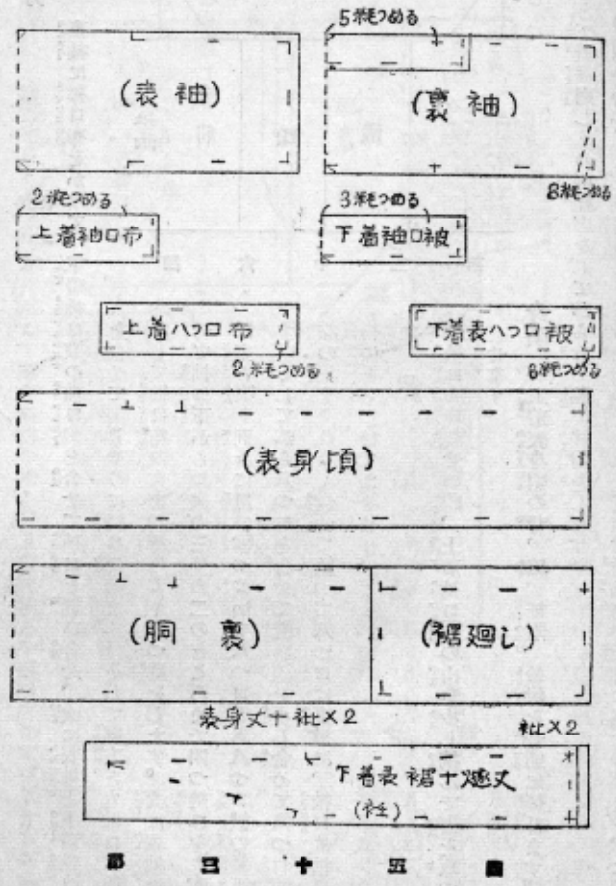
注意

下着の表裾は裾廻し布より裾の二倍だけ短くしなければなりませんが、幅は矢張り圖の通りつめて標します。

衽　上着、下着の表衽を揃へ、又裏衽と裾廻しとを揃へて裏の分は裾で裾の二倍だけ長くして八枚を重ねておきます。但し四枚づゝにしても宜しい。そして丈、衿下、衽幅、合褄幅、衿附の標をつけます。なほ衽附の方に四裾の高さと繻布の丈の標をつけます。

衿　裏衿二枚を中表に重ね、その上に衿先布を重ねて接ぎ代を標します、そして更にその上に上着、下着の表衿をのせて、衿丈だけを標して表衿を除け、裏衿を出して衿丈標より一五糎（衿先裏衿接ぎの標より四糎位下）計つて標をつけ、これを衿の附け分付の標とします。

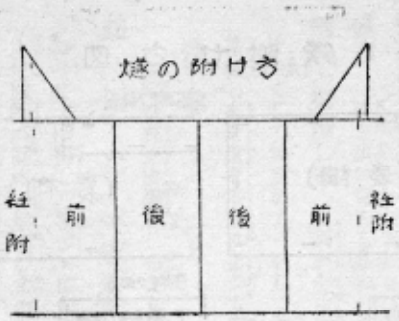
圖六十五第　標附け方圖



なほ他に合標をつけます。

縫方

袖　裏袖に袖口布をかけて、下着袖口被の袖口明と合せて袖口を縫ひ合せ、次に表袖と上着袖口布の袖口明を合せて同じやうに縫ひ合せます。そして兩方とも袖口に綿を含めて留をして袖口布の丈までそれ〴〵四つ縫をします。次に表袖と裏袖とを合せて袖口下から袖底の三分の二のところまで四つ縫ひをし、それから先は表と裏を別々に縫ひ、つゞいて八つ口布と八つ口被の袖下をも縫ひます。そしてから八つ口を合せて縫ひ綿を少し含めて八つ口布の奥と袖口布の奥をそれ〴〵合せて縫つて八つ口は裏袖に、袖口は袖口かけの縫ひ目にとぢつけておきます。



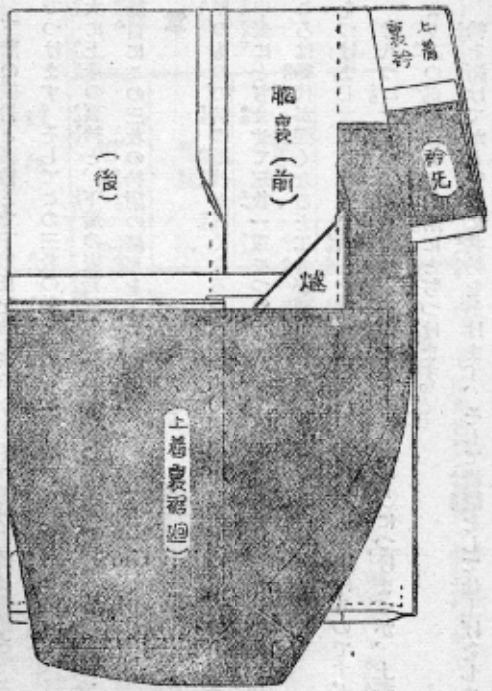
第十三圖　六

注意　袖口布奥合せの時、上着袖口布の山を少し摘んで襞を取つて丈標を合せます。

身頃　上着表身ばの背、脇、衽附、衿附を普通に縫ひます。

胴裏と下着裾廻しとの胴接ぎをしてから背、脇、衽附をします。

裾廻りの縫ひ合せ　上着裾廻しと下着表裾の背と脇を縫ひ、前裾布の上部に燧をつけます、この時燧布の斜のところを伸さないやうに又燧布にならないやうに注意して縫ひ、扨は燧布の方につけて下着の表裾と、上着の裾廻しにそれ〴〵衽をつけます。



第十三圖　七

裾合せ　上着の表と上着裾廻し、下着の表裾と下着裾廻しとをそれ〴〵別に裾合せをして襞を揚げ、裾に綿を入れて假とぢをして衿下を縫ひ、背と脇の縫ひ目をとぢます。

次に上着裾廻しと下着表裾の上部を燧布の端から端まで縫ひ合せて胴接ぎの縫ひ目にとぢつけて表から襞襞をします。それから下着の表裾の衽と、上着衽裾とを縫ひ合せて下着の裏衽附にとぢつけます。

附

地質の重いものは胴接ぎを四枚一緒にして、折り目には表から縫糸をかけておきます。

衿附　下着の表衿と裏衿とで下着衽を挟んで、衿の附け分けの標まで縫ひ、それから上着の裏衿を附け分けの標までつけます。そしてこの三枚の衿を重ねて、重なりの順序に針を通してしっかりと附け分けのところを留め、次に上着の裏衿と、下着の表衿と、下着の裏衿の三枚で裏の身頃を挟んで衿附をし、折をつけてから表衿附の縫目にこの三枚の衿附の縫目をとぢつけます。

注意

地厚のもので衿の縫代が高くなるやうな時には、下着の裏衿は裏の身頃にあてて、下着の表衿と上着の裏衿は中表にとぢ合せて三枚一束につけます。この時二枚の衿の縫代は身頃の中に這入りますから、衿肩廻しのところは縫代が深くなると工合が悪いから注意しなければなりません。

衿をつけましたらそれ〳〵衿先を整へて三つ衿を入れて袷け上げるのですが、その前に袖をつけます。

袖附　身八つ口を縫つて綿を含め、袖附を女物袷のやうにつけますが、上着の八つ口布と下着の八つ口布の袖附より上の部分は裏の袖附にとぢつけます。

共衿　衿を袷けてから普通に共衿をかけます、そして枇縦をして仕上げをします。

附比翼

附比翼は上着を普通の小袖に仕立て、別に下着の裾廻り、袖口、振り八つ口を縫つて上着に袷けつけて本比翼のやうに見せるもので襠布をつけません。

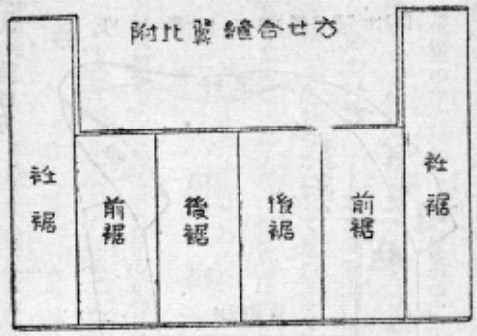


圖　八　十　三　節

ですから胴は上着一枚で裾や袖口、振八つが二枚着になります。

標附け方

本比翼の標附け方と同じやうにいたします。

縫方

袖口　袖口を合せて四つ留をし、袖口下と奥の二方を裏表袷け合せますが、裏の方を二粍だけ出して合せます。若し口綿の時は口合せをして含み綿をすることは上着と同じであります。

振八つ口　袖底を縫ひ合せ、振り口を表裏合せて縫ひ、表に返して上と奥とを矢張り裏布の方を二粍出して袷け合せておきます。

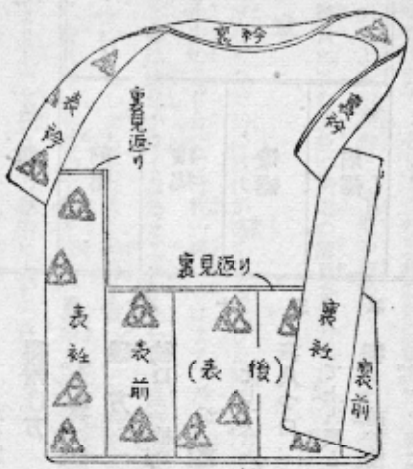
裾　前、後、衽附と表裏別々に縫ひまして裾合せをします。上着と同じやうに裾を上げ枇の假襞をし衿下を縫つておきます。そして第三十八圖のやうに上部は裏布の方を四粍、衽の幅のところは二粍出して躾をかけて袷けておきます。

衿　身頃は胴がありませんから衿は衿下の標から衽の高さまでの間へ附くことになり、それから上、衿先、衿

眉廻りなどは身頃なしで衿の裏表だけ縫ひ合せ第三十九圖上のやうに普通に衿幅を決めて紐け上げます。

共衿　共衿も矢張り普通にかけます。

比翼の附け方



第三十九圖

第四十圖

第四十一圖

比翼の附け方　出來上つてゐる袖口を、上着の袖の中に入れ、上着、下着の袖口を揃へて加減を見て袖口下に待針を打ちます。それから上着の袖を引き返して裏袖を上へ出し、上着袖口布のすぐ際へ比翼の袖口を八糎位の針目で平らにぐるりつと紐けつけておきます。

振八つ口のつけ方　袖口と同様に比翼の振八つを上着の袖の中に入れ、袖下で振の方を八糎ほど短くして袖附のところに待針を打ち、振八つの奥の方は上着の袖下にきちんと合せて袖下の縫目に待針を打ちます。そして比翼の振八つを上着の振八つによく揃へて袖裏へ返し、袖附の上から下着振八つの頭へ廻り、つぶいて奥をぐるつと紐けつけておきます。

身頃のつけ方　上着の裏を上へ出し、裾の方を左手にしておき、その上へ下着の裾廻しを袋口で下着の方が四糎引き込むやうにして重ねます。そして上部の各縫目々々へ針を打つて一度釣り下げて釣り合を見てそれから上部を順々に上着に紐けつけて行くのですが、この時角や縫目々々で必ず一針づゝ抄留をしておきます。

男物丹前

丹前は地方によつて名前がちがつて關東ではどてらといひ關西では丹前といひます。形は大體男物縮入と同じでありますが、たゞ袖が廣袖で人形なしで袖丈全部を附け、掛衿に共布を使はないで黒の別布を用ひます。

用布

表も裏も一反づゝ使ひ、表地質は銘仙、八端、お召、紬などで裏は表に應じて附けます。

仕立上寸法

	丈	袖丈	幅
男物丹前	五尺	二尺	三四糎

身丈　一三五（着物より二糎位短くする）　後幅　三〇
前幅　二七（着物より二糎廣くする）　衽幅　一五
衽下り　二二　衿下　六六
衿肩明　八・五　合褄幅　二三・五
衿幅　六

綿の分量

全體に眞綿だけを入れる時は凡そ百五十グラム位、寄梅綿ならば三袋（九枚）位入れます。又どてら綿としてつてありますのは一枚通り入れます。

裁方、標附け方

裁ち方は男物袷と全く同じであります。標の附け方も殆んど同じでありますが、袖を濶袖にして附は袖丈全部を附けます。

縫ひ方

縫ひ方も袖が違ふだけであります。袖は袂が少し多くなり八糎位だしますから時には裏の袖幅が足りない事があります。その時には袖口布で廣くするか、裏袖に持ち出しをします。

綿の入れ方

綿入長着と同じであります。

五、羽織の部

羽織について

羽織は長着の上に着るもので用ひる時期によつて袷、綿入、單衣などの區別があります。上に着るものですから色合や絣柄などについて着物との調和をはからなければなりません。

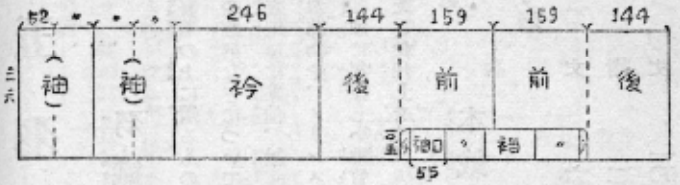
地質　表地には銘仙、紬、羽二重、縮緬、錦紗、お召、大島などのやうな絹物から、瓦斯、紡績、織絣、染絣などの木綿物や、メリンス、セルなどの毛織物、その他レイヨン物や交織などいろ〳〵の物を使ひます。裏地は表地に相應しい地質を選びます。瓦斯、甲斐絹、更紗、羽二重、八つ橋、綸子、平絹、メリンス、レイヨン物など使用します。

本裁女物袷羽織

仕立上寸法

袖	丈	六〇糎	着物と同寸	袖口	二三糎 着物と同寸
袖	附	二五	五粍か一糎多く	袖幅	三二 着物と同寸
身	丈	一〇〇內外	着丈の四分の三に四糎を加へる		

女物羽織表の裁ち方



第一圖

公式　{總用布－(袖丈×4＋衿用布＋前後の差×2}÷4＝後丈

後丈＋前後の差＝前丈

(身丈＋28糎)×2＝衿用布

身八つ口　一〇糎

後幅　着物と同寸

二八　着物と同寸

前幅　一八　繻絆代は後身頃と同じにして、衿附の方は一幅の縫代にする。

衿幅　六・五

褄幅　二

下上　六・五―七

衿肩明　八・五　着物より七糎位廣くする

前下り　三・五

乳下り　四四　背から

着丈　六二　着物と同寸

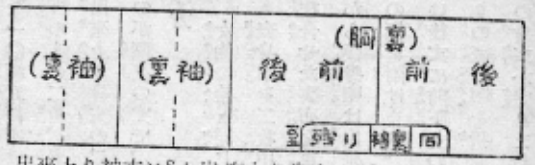
繰越　一以上

裁ち方と積り方

表　全體の用布からまづ袖丈の四倍と衿布を取り、その殘りを全部身頃にします。

この衿布は衿肩明と前下りと肩の繰越の二倍分とそれに衿先の縫代とを合計した寸法の凡二三糎を出來上り身丈に加へて、これを二倍したものがつまり衿布の長さであります。

羽織裏の裁ち方



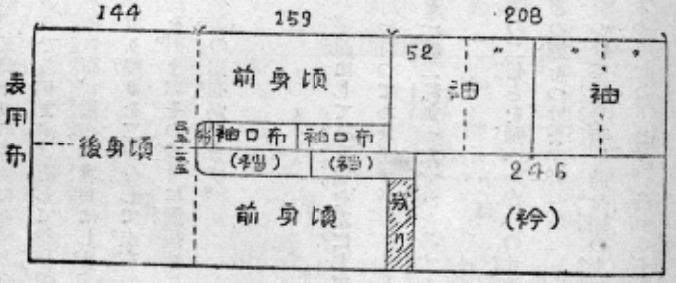
公式　出來上り袖丈×8＋出來上り身丈×10＋縫縮代－表用布－裏用布

縫縮代
- 袖縫代……12
- 胴接縫代……12
- 前下り……16
- 三つ衿縫ひ込代…4
- 繰越……16
- 衿肩明及衿縫代…38

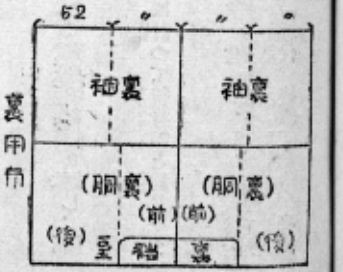
93

第二圖

本裁女物袷羽織の裁方（大巾）



第三圖



身頃は前後の差として三二糎だけ前身頃を長く裁つか、又前下りの仕立に必要な分と、繰越の二倍だけ前身頃を長く裁つて、胴裏を前後同じ長さに裁つても宜しいのであります。そして前身頃になる分は衿肩明から眞直に幅を一〇糎五粍だけかき落してその裁ち落した分を袖口布、襠布、乳布にします。その長さは袖口布として五五糎のもの二枚、乳布として一糎五粍のもの二枚を取り殘りを二等分して左右の襠布とします。

裏　出來上り身丈の二倍から表の裁ち切後身丈の寸法を引き、その殘りに胴接ぎに入用な縫代を加へて四倍したものが胴裏の丈で、これに袖の用布を足せば裏の全體の用布が出ます。

標附け方

袖　女物の袷と同じであります。

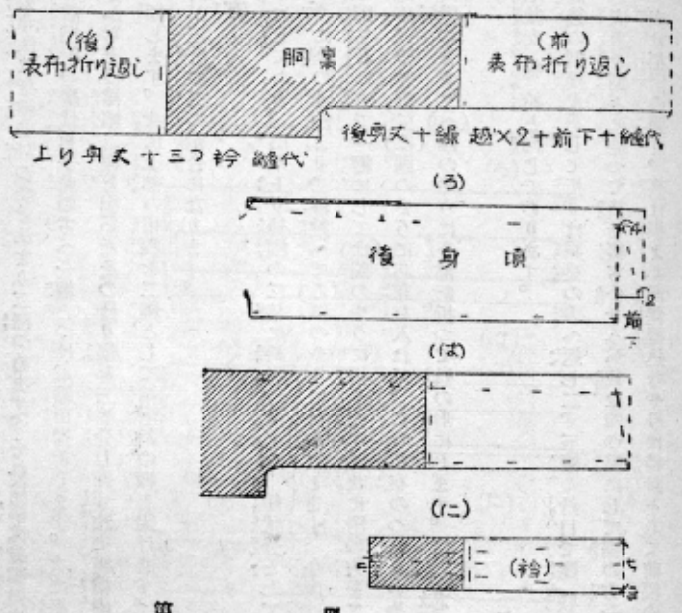
身頃　表身頃を二枚中表に合せ、衿肩明を摑へて肩を手前にして後身頃を左にしておき、その上に矢張り中表に二枚合せた裏布を重ねて肩山に鋏をかけ所々に待針を打つておきます。

それから後身頃は出來上りの身丈に三つ衿の縫代分を一糎二粍加へた寸法を身丈として表身頃を折り返し、胴接ぎの標を附けます。

前丈は後丈に前下りの分とその縫代、それに肩の繰越の二倍とを加へただけの寸法に計つて後身頃と同じやうに殘りの表身頃を折り返して第四圖(い)のやうに胴接ぎの標をつけます。

前後の身丈が定りましたら今度は(ろ)圖のやうに繰越をつけて後身頃を前身頃の上に折り重ねます。すると右端の方で前身頃の方が前下りとその縫代分だけ長く出るやうになります。それから背の縫代、後幅、袖附、身八口、肩幅、裾山、前下りの標をつけます。つぎいて襠の丈を計つて後の身頃を左に取り除けます。

(い) 四方ヤ附ノ標



第四圖

前下りの標は、後襠附標の所で後身丈より四粍睡して標をつけ衿附の方は裾を二粍にしてその間で斜の標をつけます。

襠　(に)圖のやうに表襠布二枚と裏襠布二枚をそれ〳〵中表に合せ、表襠を下にその上に裏布を重ねて襠上つまり左の端の方を摑へます。そして襠上縫代を一糎取つてそれから襠丈寸法だけ計つて表襠を裏襠の上に折り返して四枚一緒に標をつけます。

袷縫の部

（この裾丈寸法は身頃で計つた寸法より二糎つめます。それは裾は身頃の中につくからであります。）

裾は裾で前裾附の縫代を手前の方へ一糎とつけ、裾山標をします。次に裾裾幅の標をつけます。それから裾裾幅（七糎）から上の裾幅二糎を引いたその殘り幅を三等分した寸法に後裾附の縫代を加へた寸法を後裾上部の縫代として標します。次に上部の裾幅を二糎として裾附斜の標を附けます。さうしますと裾附標の斜は後が三分の一、前が三分の二の割合になります。

衿の折り方

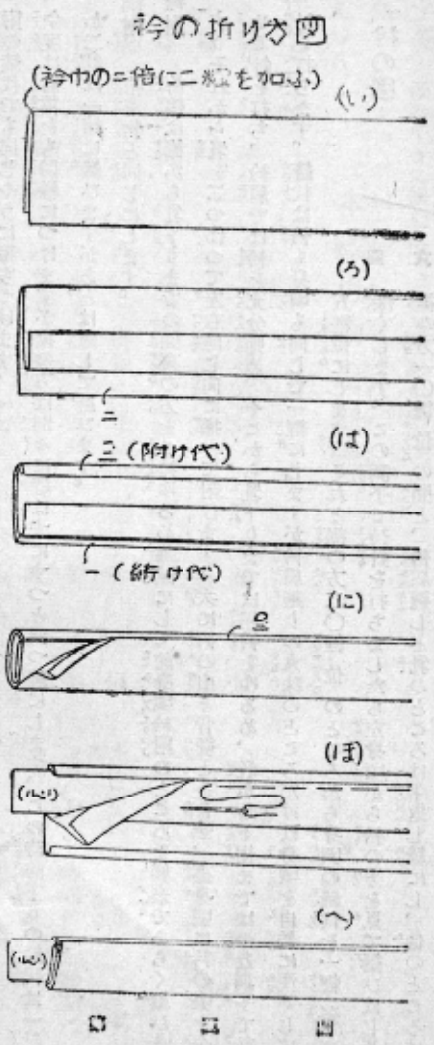
表側を下にしておき、出來上り衿幅の二倍に衿附の縫代と、綿代分として二糎を加へた寸法で第五圖(い)のやうに折り、次に今の寸法より二糎控へて(ろ)圖のやうに折り返します。今度は附け代を輪の方で一糎二糎、綿代を一枚の方即ち耳の方で一糎にして(は)圖のやうに折ります。次に附の方を二糎出して(に)圖のやうに二つに折つて衿幅を定め、つぎいて(ほ)圖のやうに芯布を入れて、この芯布のつれないやうに躾糸で綴ぢ（この糸は表に出ないやうに綴ぢます）(へ)圖のやうに全部を折つて衿の形にします。（この芯布には三河木綿を普通に使ひます）

縫ひ方

袖　本裁女物袷と同じであります。

身頃　前後の胴接ぎをして折りは胴裏の方へ返し二、三糎の針目で躾糸をしておきます。それから背縫をしますが、表裏を別々に縫つて後で綴ぢ合せるか或は四つ縫にして裾の方一二、三糎だけ別々に縫ふかします。

前下り　表は標附の通り、裏は標より四糎縫込むやうに待針をして前幅の標の間だけを縫ひます。この時裏側の方を少しゆるみ加減に縫つておきますと衿の返り具合がよくなります。きせは二糎で裏の方に折り返して二、三糎の針目で躾糸をします。すると表が二糎だけ裏の方に見返へるやうになります。



図

裾附　まづ胴接ぎをして折りは身頃と同じやうに裏の方に折つて躾糸をします。それから裾の上部の標を合せ標より二糎上を裏表縫ひ合せて毛抜合せにし、裾幅の中央をあらく躾で綴ぢます。附けは斜の多い方が前身頃につきますから斜の少い方を後身頃の表裏で挟んで四枚一緒に縫ひます。但し裾の

方一二、三糎は二枚づゝ縫ひます。身八つ口は襠附糸でそのまゝ褄よりきせ代だけ外を縫つておきます。左右とも後幅がつきましたら裾に心布を入れます。メリンスか何か軟かい地質のもので七、八糎、長さ身幅のものを、幅を少しづらして二つに折り裾に入れて最初に背縫の縫代へ綴ぢつけ、それから左右の身頃へ伸して後襠附の縫代でも同じやうに綴ぢつけます。

今度は前褄をも同様につけますが裾の方は別々に縫はずにすつと四つ縫にします、この時前下りの縫代は一針か二針は一緒に縫ひますがあとは離して縫ひます。

袖附　袷着物と同じにします。

衿附　前幅は褄から乳下りまでの間裏の方を心持ゆるめ加減にして前身頃衿附のところを絎糸であらく縫ひます。それから乳を二つ作つて左右同じ向に揃へて附けます。次に衿の山と背縫とを合せ、裏身頃に衿の表を合せて針を打ち、衿肩では衿を充分弛め、そこから乳下りまでは稍衿をゆるめ、乳から下裾までは平な調子で待針を打ちます。縫代は衿も身頃も同じで一糎にしますが衿肩廻りの丸味のところだけは身頃を自然に浅くして五粍位にします。それと裾の方二〇糎位のところから身頃の縫代を一糎斜に深くします。この調子で待針を打ちましたら左身頃から衿の方を見て縫ひはじめ裾の方一〇糎位の間と、衿肩廻しと乳のところは半返し縫にし、他のところは一針抜か物によつては抄針で全體に衿をつけます。そして縫目に鍛をかけてきせをかけます。

衿の図

第六圖

それから衿先は幅を二つに折つて、裏になる方を心持つり加減にして一糎先を縫ひます、但し衿附際七、八粍逆して衿先の縫代を表の方へ折つて綴ぢつけ表に返して紳けつけます。それから表衿が二粍内見るやうに整へて第六圖のやうに褄をかけ、仕上げをします。

本裁男物袷羽織

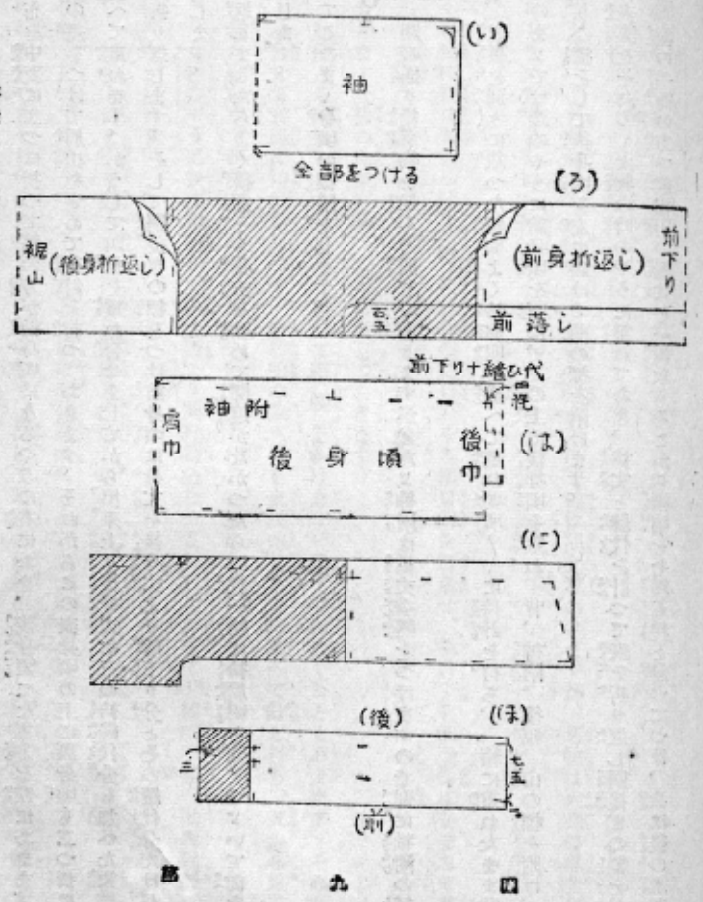
仕立上寸法

袖	丈	五三糎	着物と同寸	袖	口	二八糎	着物と同寸
袖	附	五三	全部つける	袖	幅	三四	着物と同寸
身	丈	一〇六内外	着丈の四分の三に四糎を加へる				
後	幅	三〇	着物と同寸	前	幅	二九	
衿	幅	七・五		襠	幅	七・五	普通衿幅と同寸
衿	肩	明	九・五 着物より一糎増	前	下り	三・五	
乳	下り	四五内外	背より計る	衿		六六	着物と同寸
繰	越	〇・五―一糎					

裁方

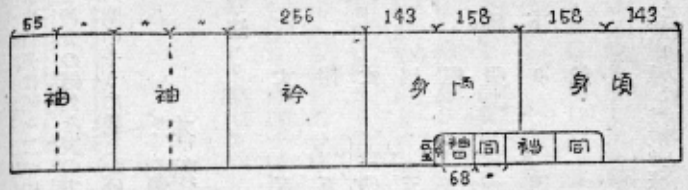
裁ち方と積り方は女物と大體同じでありますが、袖丈が短く、又肩の繰越が女物より一厘に少ないから衿丈を

裁ち方図



第九図

男物袷羽織の裁ち方



羽織の部

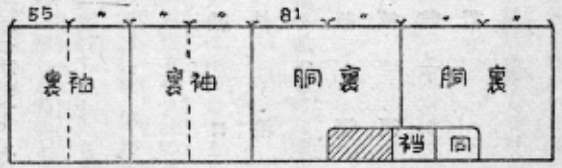
公式 {總用布−(袖丈×4+衿用布+前後の差×2)}÷4=後丈

後丈+前後の差=前丈

(出來上り身丈+衿肩明+前下り+衿先縫ひ代+繰廻×2)×2=衿用布

第七圖

羽織裏の裁ち方



公式 出來上り袖丈×8+出來上り身丈×10+總縫代(95極位)−表用布=裏用布

第八圖

積ります時はそのつもりにします。

裏布もその割合で少なくなるわけでありますが、余り胴裏の少いのは格好がよくありませんから大低乳下りの下四糎位までつけます。それから身頃の前幅から袖口布や襠布を裁ち落すのに表は表、裏は裏と別々に裁ち落しても宜しいのでありますが、第九圖(ろ)のやうにまづ表身頃

の用布を中表に二つに折つて輪の方が前身頃になるやうに右におき、後身頃になる方を左におきます。そして前後の差をつけて肩山を定めて待針を打つておきます。それからこの表身頃の上に裏身頃も二つ折にして肩山を揃へて重ねます。かうして四枚を重ね合せましてから出來上り後身丈に三つ衿縫代分を加へた丈に表の後身頃を折り返します。そして胴接ぎの標をつけ前身頃は身丈を後身丈より前下り分とその縫代分だけ長くして折り返します。

折り返しましたらよく後前とも身丈を改めて間違がなかつたら四枚一緒に衿肩明を切りつゞいて前を眞直にかき落します。

そしてこのまゝ身頃の標附をします。

標附け方

袖　圖の通り袷着物と殆んど同じでありますが、たゞ袖附は袖丈全體をつけますので別に袖附の標をつけません。

身頃　表裏を別々に裁つた物はよく衿肩明を揃へて重ね要所〳〵に待針を打ち、一緒に重ねたまゝ裁つたものはそのまゝでは圖のやうに前身頃を下に、その上に後身頃を重ね、背、袖附、後幅、山の標を附け、つゞいて前下りの標をして後身頃を左に除けて前の標を附けます。

襠　表裏をそれ〳〵女物の時のやうに重ねておき、縮丈と縫代を計つて表を折り返し胴接ぎの標をします。それから裾の手前の方で前襠附の縫代を一襲取りそこから襠幅を七縫五粍と計つてつけ、次に後の上部の標は、下の襠幅の三分の一に後襠附の縫代を加へた寸法だけに標し、その標から手前へきせ代として三粍に標します。そして前後共上下の標の間に斜の標をします。

衿の折り方　衿の折り方は出來上り衿幅が違ふだけで他は同じでありますが、男物は大抵の場合袋附といふ仕方にしますが、この時は所々に合標をしておきます。

縫　方

袖　裏袖に袖口布をつけ男物袷着物の袖口のやうに口明を縫合せ、袖口下を四つ留にしまして其の糸で袖口下から袖底へと縫ひ袖幅の凡そ半分位まで四つ縫にします。それから先きの方は表も裏もバラ〳〵に縫ひ殘してきます。袂の丸味を整へて表に返しておきます。

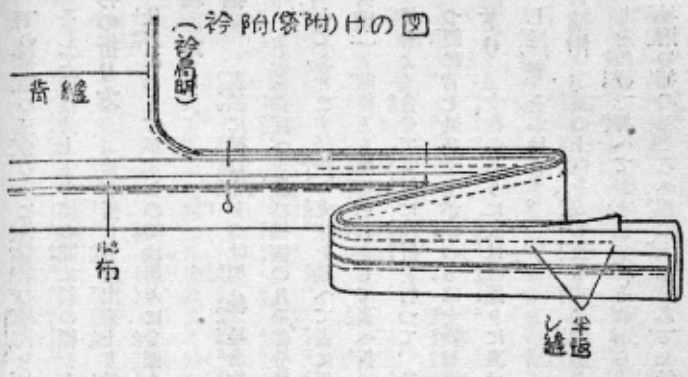
身頃　前後とも胴接をしまして裏へ折つて醫簗をかけます。（醫簗は省くこともあります）それから後の胴接をよく合せて背縫に待針を打つて、衿肩明の裁ち目を表裏四枚をよく揃へて針を打ち、表から見て標通り四つ縫に背を縫ひますが裾の方は女物羽織と同じやうに二枚縫にして裾に芯布を入れます。

前下り　女物のやうに表は標通りに裏は標より四粍縫込むやうに針を打つて、前幅の標の間だけ縫つて裏に返し醫簗をかけます。

後襠附　襠の上部を表も裏も丈の標から縫込を内側へ折つて重ね、標をよく揃へて待針を打ち、襠幅の眞中通りを假縫で押へておきます。それから後襠附を後身頃に挟んでまづ裾のところに針を打ちます。そして今度は袖附の標のところへ襠の上部をあて〳〵針を打ち、間にも適當に待針を打つて一針拔に縫つて平縫をあて〳〵表に

返します。左右とも同じやうに後襠をつけます。

衿附　衿の附け方は繊硬附、又は袋附といひまして衿で前身頃を包んで一度に四つ縫にして裏で締けない仕方にします。その縫方は第十圖のやうにきづ衿肩廻りから前身頃の衿先まで表と裏の裁ち目をよく揃へて、衿附の廻りを八粍の深さに荒く縫をかけてから左右とも乳をつけ、それから身頃の衿附の標と衿の縫代とを合せまして、女物の時のやうに衿肩廻りの部分で充分に衿をゆるめ、それから乳の間までも幾分衿の方がゆるみ加減に待針を打ち、そこから下、裾までは平らにして標通り合せて至極に待針を打ち、次に左身の衿先の方から順に前身頃を衿の中に疊み込むやうにして衿で身頃を包み合標を合せて針を打ちます。そして衿先の方からなる可く一針抜にして糸がつれないやうに縫ひますが乳のところと衿先一〇糎位の間は半返し縫にいたします。かうして衿の附代、身頃、衿の縮代の三枚を一緒に縫ひますが衿肩廻りのところだけは衿の裏側、つまり締け代の方を一枚離して衿の表と身頃だけで縫つて、ここから左右



第十圖

の衿を引き返すやうにいたします。

それから又つゞいて右身頃の衿を四つ縫にしていきます。

全部縫へましたら縫目に平鏝を當て、表衿の方に折りをつけ、それから左右の衿先を縫ひ、縫込を折つて少し上げ加減にして表衿附に綴ぢつけます。これが出來ましたら衿肩明のところから鋏の出來ないやうに前身頃を引出して衿を表に返して三つ縫にした衿肩廻りを細かく締け上げ正しく襞をかけます。

袖附　袖附は前襠をつけない前に表裏共つけてしまひます。まづ表袖を普通につけますが、たゞ附け始めと附け終りを標より二粍づつ縫ひ殘しておきます。

裏袖は折りが表と反對になるやうに身頃に縫ひ折をつけます。そして前袖附の方は附け始めから八糎だけ縫ひきしたら二三糎ほど明けて又そこから後袖附の終りまで縫ひます。矢張り裏袖も表と同じやうに始め終りは二粍づつ殘しておきます。

袖附の八つ留の仕方

裏表の袖がつきましたら留をいたします。まづ袖附の縮の際を待つて表の後袖附の所へ表の前袖附を中表にして重ね、次に裏の後袖附のところに裏の前袖附を重ね合せますと表前袖附、表後袖附、裏後袖附、裏前袖附といふ順序で二本糸で重ねたまゝの順序で、表前袖附を手前にして次の順に針を通します。

表前身頃、表内袖、表外袖、表後身頃、裏外袖、裏後身頃、裏前身頃、裏内袖。この順序にして身頃は襠上の極く際を、袖は二粍の妬みをとつて折り山の際をとり、縫りは袖四枚だけを取つてしつかりと留をします。か

うして堅く結んだ糸の、針についてゐる一本を残して三本を撚り合せ、一本の糸で袖底の縫ひ残してある部分を縫ひます。この時裏袖の縫ひ込を三角に折つて袖附の折り合のよくなるやうにします。

前褄附　前褄は前身頃で挟んで四つ縫にしてつけます。縫ひ終りましたら裏の前袖附の附け紐してあるところから引き返してあとでこゝを結けてしまひます。

紋について

紋所の位置と寸法

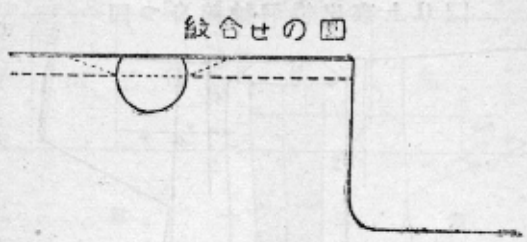
	背紋下り	袖紋下り	抱紋下り
本裁男物	背裁ち切り 六・五寸	袖山から 八寸	肩山から 二五寸
同　女物	七	八	二五
四つ身	六	七	二三
三つ身	五・五	六	二一・五
一つ身	五	五・五	一〇

背紋は背縫の中央に、袖紋は袖幅の中央か、少し袖附の方へ寄つた方になるやうに、又抱紋は衿肩明を除けた前幅の中央にいたします。

紋の縫方

背縫をする前に紋の部分だけ表から兩身頃揃へて出來上りの形に合せて折りをつけます。そして折山の極く際を紋合せのくづれないやうに鏡で押へておき、一針抜きに極く細かく縫ひます。紋の白い部分は白糸で、黒い部分は黒糸で、どちらも羽二重糸をつかい、縫目にはきせのかゝらないやうに注意します。

袷や綿入など裏のつく物は紋の上下四糎位づつ圓のやうに斜に背縫の外へ縫ひ出しておきますが、單衣の時は縫つた糸が透いて見えないやうに紋の部分で白い糸はとめます。



四つ身筒袖袷羽織

筒袖の四つ身は丁度半反で出來ますから、一反で着物と羽織をお對に仕立てますと見たところも宜しく、又後になつて二枚を一緒にして大きく仕立てる事も出來ますから大變便利であります。

仕立上寸法

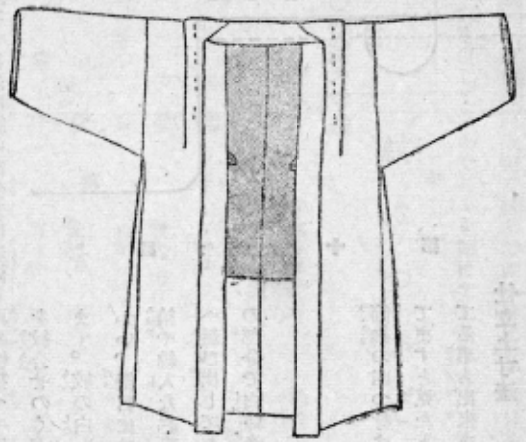
長着の寸法によつて加減します。

	丈	袖口
袷	二六糎	二八糎
筒袖	二五	二二

初級の巻

袖　幅　三〇
袖　階　一九
後　幅　二七
身　丈　九五

四つ身筒袖羽織出來上り圖



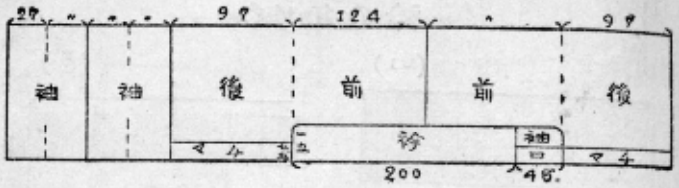
第十二圖

袖　幅	三〇
袖　階	一九
後　幅	二七
身　丈	九五
衿　肩　明	七
前　下　り	二・五
袵　上	〇・三　身八つ口を明ける時は二糎
同　下	五
衿　幅	五・五
紐	附肩より二五

裁方

第十三圖のやうにまづ總丈から袖丈の四倍を取り殘りを眞二つに折り、輪になつてゐる方を八糎長くして又二つに折り、長い方を前身頃とし短い方を後身頃とします。そして前身頃から衿の十五糎と、後身頃から褄の七糎五粍を標しまして衿肩明の丸味をつけて裁ち落します。

標附け方



第十三圖

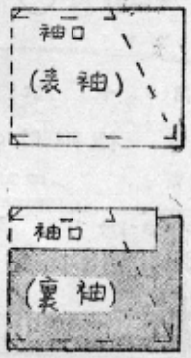
袖　第十四圖のやうに表裏を別々に揃へて標します。袖口の巾は袷でありますから二粍位にして表袵幅より裏の幅を四粍廣く標します、袖口は裏の方を二粍ほどつめ、丈も二粍ほどつめます。

身頃　布のおき方、標附けの順序など本裁物と同じでたゞ寸法が違ふだけであります。

衿の折り方

衿幅が狹くなりますから木綿のしつかりした芯布を入れます。芯布の幅は表衿と同じにして第十五圖(いのやうにまづ裁目の方を揃へて外表に重ね、躾で端の方を荒く縫つておきます。それから裁ち目から衿幅の二倍だけの寸法を計つてそこから心布を折り、次に(ろ)圖のやうに二枚重ね合せた端、つまり附の方を一糎に折り、この端に芯の折山を突き合せに折つて芯布を躾であらく押へます。次に表布を附の折山より二粍控へるやうに折つては圖のやうにしますと出來上ります。

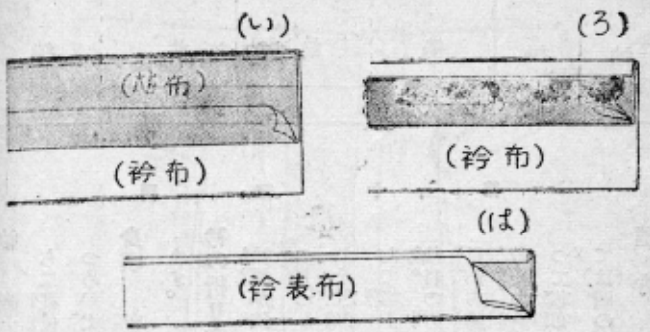
標の附け方



第十四圖

縫方

衿の折り方

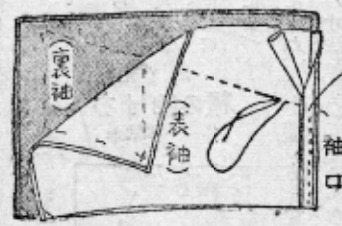


第十五圖

まづ標通り袖口布を裏袖につけますが、袖口下は縫込になりますからそのまゝ縫はずにおきます。

次に第十六圖のやうに袖口を裏表合せて縫ひ、四つ留をして

袖の縫ひ方

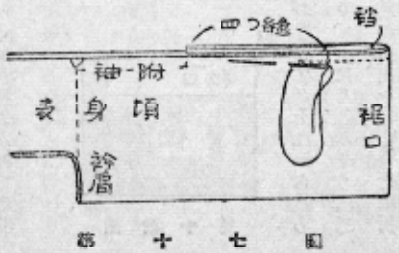


第十六圖

四枚一緒に縫ひ、端の方五、六糎は別々に縫ひ表へ折つて縫込を平らに落ちつかせて表にかへします。

身頃　開接をしましたら鎧襟をかけ、背を四つ縫します。

衿の附け方



第十七圖

衿附　襟の上を標通り内側に折つて襟をかけ、表裏の身頃で挟んで第十七圖のやうに縫ひます。

袖附　後前共標がつきましたら、表袖の山と身頃の山と標を合せ、袖下でしつかり留をして表裏共標通り袖をつけ、表は袖の方へ、裏は身頃の方へ折りをつけて返します。

衿附　前身の衿附のところで少し裏身頃の幅をゆるみ加減に襟をかけ、左右共乳をつけます。次に衿の附を裏身頃に合せて、本裁羽織の衿附の要領で針を打ち、掛針にかけて引張りながら一針返に一二、三糎縫ひ、あとは普通に縫ひます。それから衿先を縫つて表に返し細かに綿けつけます。

四つ身元禄袖綿入羽織（九、十歳用）

仕立上寸法

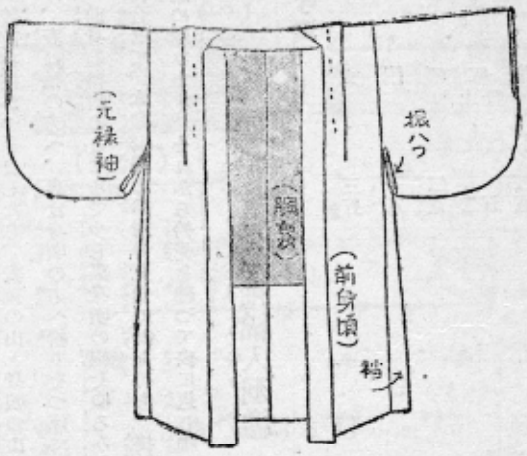
袖	丈	三五糎	袖	口	二六糎
袖	附	一八	袖	幅	三〇
後	幅	二五	身	八つ口	九
襟	幅下上	二五	衿	幅	五
紐	附肩より	二五	身	丈	八〇内外

裁方

大幅物、並幅物、又袖の具合、身丈の長短によつて圖のやうに種々裁方も變りますが第十九圖は大幅物の場合

で表用布二七六糎から袖丈七二糎を裁つて幅を二つにして兩袖とし、殘りの二〇四糎を身頃にとります。布幅の眞中で一五糎幅にすつとかき落して衿と袖口布とにします。殘りを身頃の分にして二枚重ね前後の差を八糎（前下りの分）つけて肩山を標しますと後身丈が九八糎、前身丈が一〇六糎になります。それから肩山で衿肩明七糎五粍の中一糎を廻して前身からすつと七糎五粍幅に裁ち落してこれを襟にします。裏用布は袖丈を表用布と同じやうに七二糎とつて兩袖とし、殘りの一四四糎を圖のやうに裁ちますが、裏は前下りをつけませんから前後とも同寸にします。並幅布で裁つ時は下の圖のやうにいたします。

出來上り圖



第八十圖

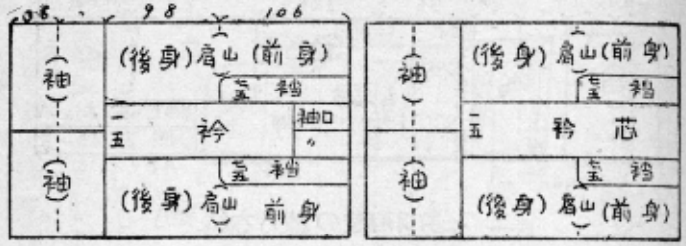
標附け方

袖　表裏共別々に中表にして兩袖を重ね、丈、口、附、幅、山の標をつけます。袖の丸味は、袖口の標から袖下へ四糎位の處に標をつけ、この標と袖口下の四糎の標とに尺度を當てゝこの斜線の眞中に待針を打ち、待針と袖下の角との中間を見て、この中間を通るやうに袖の丸味をつけます。

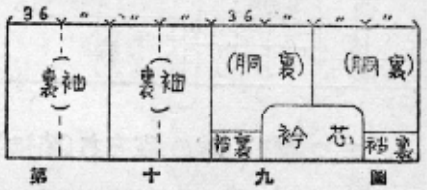
裏袖は口布の幅を四粍出して重ね、口布の丈と幅は一ぱいに標し、袖丈と袖幅は表袖より四粍つめ、口明と附は二粍つめます。

身頃　身頃の裏表を各々中表にして衿肩明を揃へて本裁羽織のやうに四枚重ねておき、布が狂はぬやうに肩に待針を打ち、肩山は七粍の繰越をつけて、先きに後身頃の身丈を計つて折り返し縫代いつぱいに胴接の標をつけ、次に背の縫代を標します。前身は後身丈より出來上り前下り寸法に縫代四粍を加へた寸法に丈を折つて矢張り胴接の標をつけます。前後とも胴接標が出來ましたら前身の上に後

（巾大）方ち裁の織羽綿入綿袖禄元裏つ四



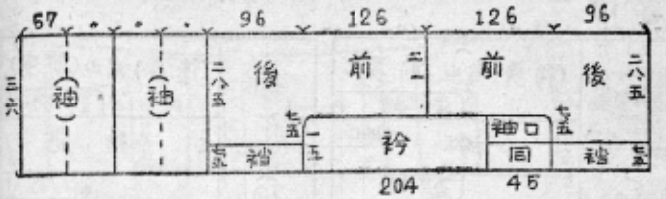
方ち裁の布裏



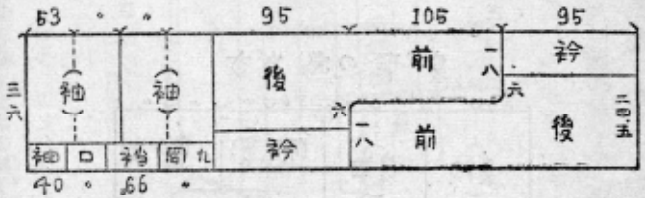
第九十圖

裏と袖丈の標の圖の寸法を計り、その寸法に二糎を加へたものを袖下の角から手前へ計つて袖下に標をつけ、

四つ身羽織の裁ち方（長袖）



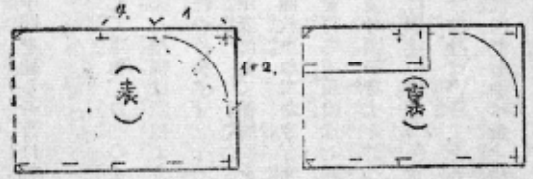
三つ身羽織の裁ち方（長袖）



三つ身羽織の裁ち方（筒袖）

第二十図

標附け方



第二十一図

身を重ね、袖附、身八つ口、後縫を縫し、それから後身頃を左に開いて前身に前下り、乳下の標をつけます。

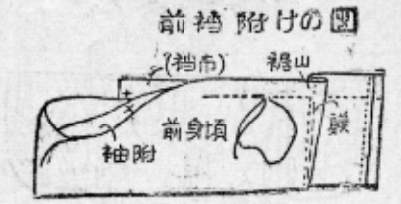
裾　身頃と同じやうに丈を定めて胴接の標をつけ、幅は下は裏中で裾幅を定め、上方は裏中より後へ二糎だけ寄せて標をつけ、前後の弁標をつけます。

衿の折り方

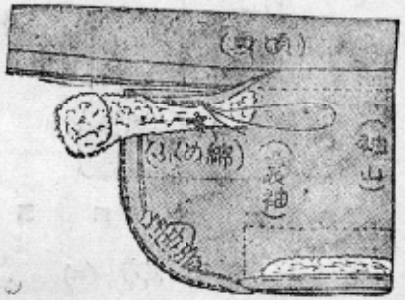
筒袖羽織と同じであります。

縫方

袖　両袖共裏袖に袖口布を標通りつけます。筒袖とちがつて口布の端は縫込に入りませんから廻し附にします。そして表袖、裏袖を別々に縫ひ袂の丸味は一つ身元禄袖と同じやうに整へて全體に糸をかけておきます。



第二十二図



第二十三図

身頃　前後とも胴接をして襠（まち）をかけ、背を表身頃から裏身頃へとつづけて縫ひ、（裾の山三糎ほどの間は返し針にします）折をつけます。次に裾裏を接ぎ襠をかけて、裾上を縫ひ後裾をつけます。

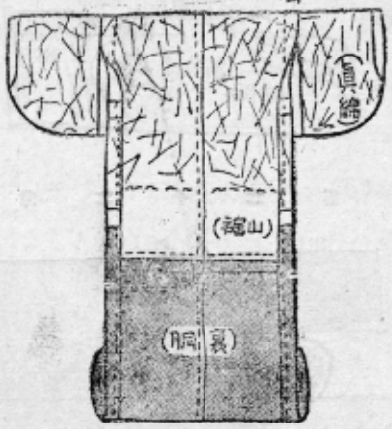
前下り　本裁と同じやうに表は標通り、裏は四糎標より縫ひ込んで幅標の間だけを縫ひ、裏の方へ折つて襠

をかけておきます。

次に第二十二圖のやうに前襠附をします。

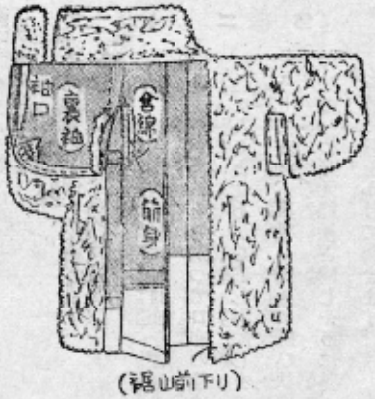
袖附　袖をそれ〳〵別々につけて、表袖は袖の方へ、裏袖は身頃へ折つておきます。

(一) 方れ入の綿



第二十四圖

(二) 方れ入の綿



第二十五圖

綿の入れ方

まづ綿を入れる前に第二十三圖のやうに袖口、振八つ、身八つへ含み綿をします。それから全體を裏返して第二十四圖のやうに兩袖を擧げ前身頃を下側にして全體に薄く眞綿を引き、その上に綿をのせて裾の方は二三

三糎綿を長くして裾口に七、八糎幅の芯綿を入れ丈のゆるみを二糎ほど見て裾山から折り返します。この時裏身頃に眞綿を引きながら裁せてゆきます。それから第二十五圖のやうに裏袖もひろげて後身からつゞいてゐる綿を前身頃、袖の上にひろげて全體に入れます。そして眞綿を引いて袖を引き返し、身頃も引き返し、綿をよく落ちつかせ、裾廻り、衿附廻りを縫でおさへます。

とめ方　袖口、袖附、身八つ口をいづれも四つ留にして細針に綴けます。

衿附　給羽織の衿のつけ方と同じ要領でつけて仕上げとします。

綿入の仕立方に、一つ身綿入のやうにはじめ袖口、振八つ、身八つ口など表裏を縫ひ合せて含み綿を入れ、全體に綿を入れる仕方もあります。

一つ身袖無羽織（綿入）

嬰兒から二、三歳位までの子供に用ふるもので男女の別はたゞ柄合のちがひで仕立方は同じにします。最近衿の型が種々工夫されて緣取りにした被布形のやうな衿をつけたりいろ〳〵の型に仕立られます。

仕立上寸法

身丈	五五	糎	身幅	いつぱい	
衿肩明	四		脇明	二三	糎
裾幅上	四		衿幅	四	
裾幅下	五・五				

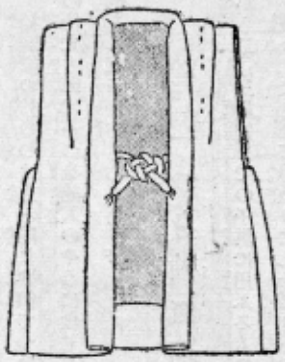
一つ身袖無羽織

紐　幅　三種裁ち切りのものを一杯に縫ふ

紐　附　二〇

前　下　なし　或は五糎位つける事もある

裁方及積方



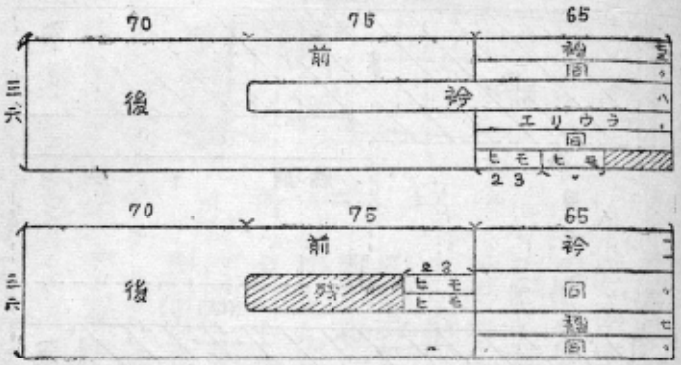
第十二圖　上り來出

用布は表布として二一〇糎位、裏用布として一四〇糎位要ります。そして第二十七圖のやうに衿をすつとつゞけて取る裁ち方と、三つ衿の所で接ぐやうに取る裁ち方があります。

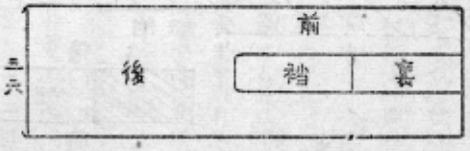
標附け方

身頃　表布も裏布も幅を二つ折にして表を下に、裏をその上に重ね動かないやうに所々に針を打つて留めておきます。肩山の通りは襞で綴ぢておきます。それから前も後も身丈を計つて殘りの表用布は折り返して裏の上に重ねます但し繰越の分だけ前は長くしておきます。そして前にも後にも胴接ぎの標をつけ、後身頃を肩山から折つて前身頃の上に重ね、第二十八圖のやうにして臨明、身幅、山の標をつけます。それから後身頃を左に除けて前幅に紐附の標をします。

襠　表と裏をそれ〳〵中表に合せ、表襠を下にその上に裏襠を左端を揃へて重ねます。そして襠丈を計つて殘りの長い分を折つて裏に重ね、胴接の標をつけ、つゞいて丈の標、幅の標をします、後の襠附標は眞直に、前襠附は一糎五粍上が狹くなるやうに斜に標します。



裏の裁ち方



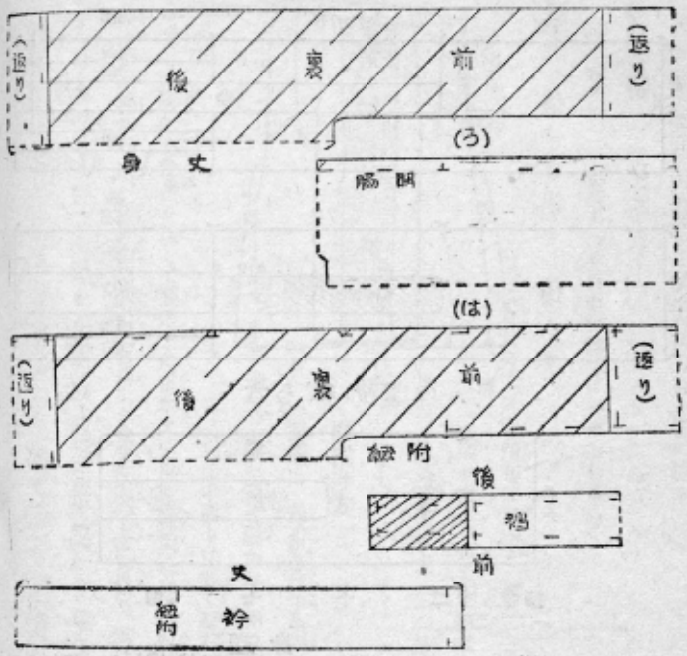
第十七圖

縫　方

身頃　前身頃、後身頃、襠の胴接をしてどちらも裏の方に折をつけて際を縫をかけます。

次に標通りに後身頃の表裏をつゞけて襠をつけます。襠をつけます時はいつも身頃を手前に襠を向ふにして針を打つて縫ひ、折は身頃に折ります。次に襠の斜になつてゐる方を上の身頃につけ折は同じやうに身頃に折り、縫ひ目には全部縫をかけます。

（い）　図をけ附標

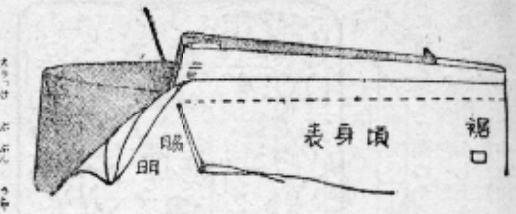


第二十八図

左右とも前後の褄がつきましたら褄の上部を裏に折り返して裏から四つ留をし、上部を丈標より四粍外側を縫つて含み綿をします。

脇明は、表は標より四粍外を、裏は標より四粍内を合せて縫ふのですが、留から三糎位の間は自然に斜になるやうに縫ひます。折は裏の方につけて隠し縫をします。かうして表に返しますと出來上りの褄には皺がなくて、留の所で棱形が出來ます。

綿の入れ方



第二十九図

糸屑や塵をきれいに拂つて第三十圖のやうに裏に返し後身頃を外に前身頃を中にして褄幅の眞中から正しく折つて、表布の裏側を出して廣げます。

最初に眞綿をよく延してつれないやうに全體に引き、その上に小袖綿を三枚位の厚さに入れます。第三十一圖のやうに肩や裾は一〇糎位づゝ脇脇は前幅だけ長く綿を出して切ります。次に第三十二圖のやうに裾は一二、三糎幅位に切つて一枚芯を入れ脇明には五、六糎幅位の芯を入れてから折り返しその上に眞綿を引いて、前にまはる分は第三十三圖のやうに褄表裏の間から中へ入れ衿肩明のところから中へ手を入れて引返します。

前身頃も後身頃と同じやうにして左右とも眞綿をひき綿を入れ表に返します。

そしてよく綿を落ちつかせ裏表の釣合を見ながら脇明や裾口に綿をよく含めて假とぢをし、つ

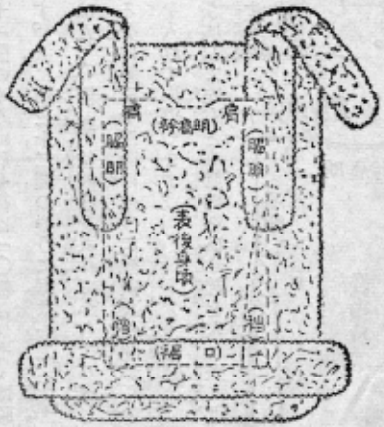
第三十三図

いて衿附の部分で裏の幅を少しゆるめ加減にしてとぢます。

紐附　幅三糎長さ二三糎位の布の中に綿を入れて紐けるか、又は縫つて表返して眞綿を入れるかして二本作り、肩から二〇糎下つたところの裏身頃に綿も一緒に縫ひつけます。

衿附　前身頃の裏に衿の表を合せ、まづ背から衿肩廻しつゝいて紐附までは衿を弛め加減にし、それから下は平らな調子に待針を打つて、褄の五糎位の間は半返しに縫ひ、他は全體一針抜きに縫ひます。縫へましたら縫目に平鏝をかけ、身頃に三粍、衿に四粍のきせのかゝるやうに折り、次に衿先の線より五粍先を縫つて衿の

第三十一圖

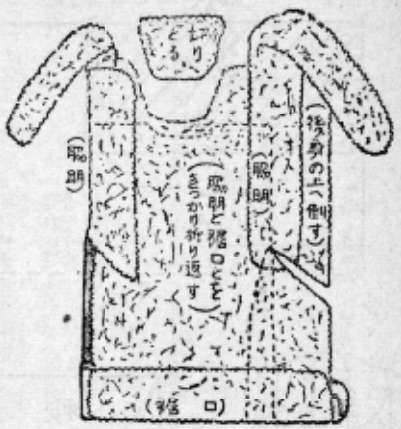


第三十二圖

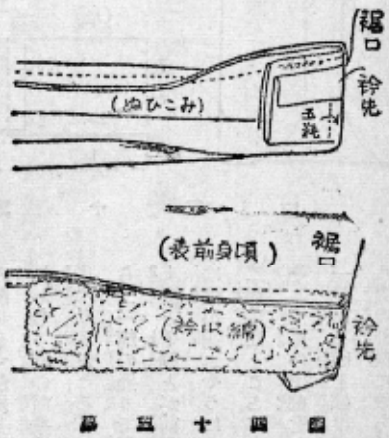
裏に折り返して圖のやうに留めて芯綿を入れ、表に返して綴け上げます。

それから紐附の少し上まで衿の中央に飾襞をかけ、兩方の後褄附を縫とおしします。

肩揚　肩幅の眞中を山にして三糎の深さに山から一七糎位、丁度脇明の三分の二位の所まで縫をします。深さは前の方は下へ行くほど次第に浅く、下では凡そ一糎位にします。後は終りの一針を五粍位浅くします。



第三十三圖



第三十四圖

改良袖無綿入（其の一）

用布　大幅　四角（風呂敷などを利用します）

表裏共同寸法

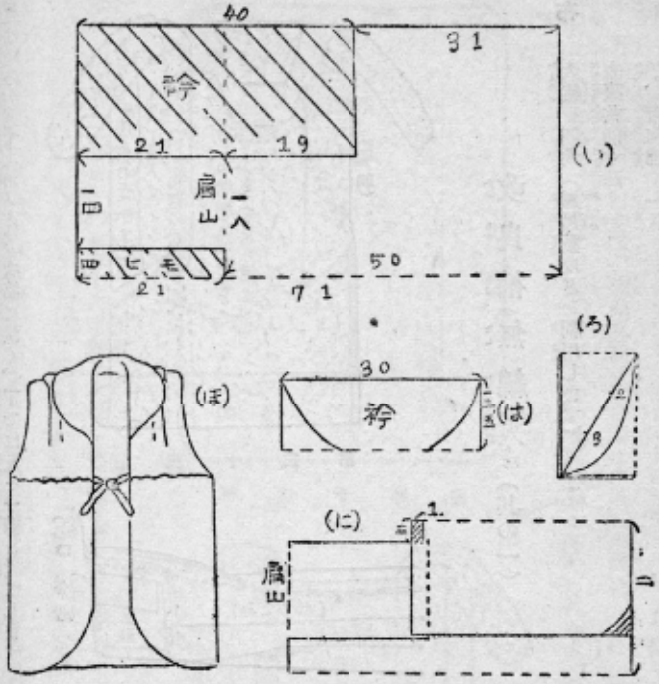
綿、青梅綿　一枚

改良袖無綿入

裁方

はじめ第三十五圖（い）のやうに幅を廣二つに折つて脇と前明を寸法通り裁ち落します。次に（い）圖のやうに肩山から上胴の前身を寸法通りに折り、それから下胴の前身は褄幅の中央になるところ、つまり背から二一糎の通りで折りますと上胴と下胴とが前明の通りでは幅が揃ふやうになり、丈は二糎重なることになります。そこで褄の上部を一糎繰り、一旦前身頃を擡げて前褄角を八糎の丸味に裁ち切ります。

衿　脇から裁ち落した布の一



第三十五圖

裁を長さ三〇糎に切り、それを幅二つに折り更に丈を折りろ圖のやうに標をしては圖のやうに月形に裁ちます。

縫方

先づさきに表裏共前身頃の接ぎ合せをします。縫ひ目は割つて鎚をかけておきます。

次に表裏の褄を丸味から丸味まで縫ひ合せ（裏の方を四、五粍控へて）折は裏の方へ折つて隠襞をかけておきます。そして次は兩方の脇明をそれ〳〵表裏合せて縫ひ、折は裏の方へ折つて隠襞をいたします。

綿の入れ方

綿は羽織衿の袖無の入れ方と同じ仕方であります。全體に綿が平らに入りましたら脇明、褄口、前明などを假綴いたします。

衿　被布の衿と同じやうに芯布を入れて衿を作り、衿の表を身頃の裏に合せ、表身頃だけを殘して三枚を一緒に縫ひつけ、その上へ表身頃をまつりします。つゐいて兩方の前身頃を小針に絎け合せますが、その前に前から裁ち落した布で紐を二本絎けて前の胴接の通りへしっかりとつけておきます。（ほ）圖は出來上り圖であります。

改良袖無綿入（其の二）

材料

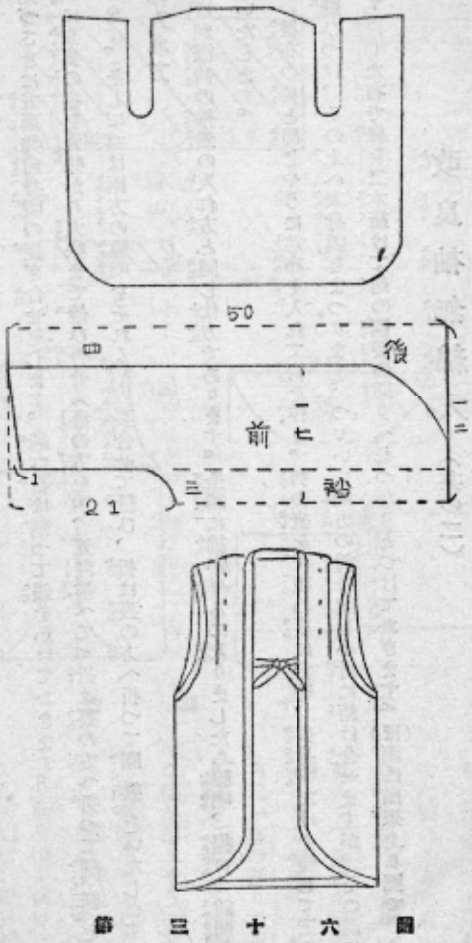
大幅　五〇糎　表裏共同じ

バイヤス　三〇〇糎

青絲綿　一枚

裁方

表裏とも裁ち方は同じてありますから重ねて一度に裁ちます。まづ幅を眞二つに折り、次に輪の方を二一糎に耳の方を一七糎にして二つに折ります。すると幅に四糎のちがひが出來ますが、この四糎が衿肩明になるのです



第三十六圖

ります。それから二枚になつてゐる端の方で脇明を三糎幅に二一糎だけ裁ち落し、次に前裾の下を八糎位の丸味に裁ち切ります。最後に肩を脇の方へ向けて一糎斜に切り下げます。

縫方

縫合せるところは肩だけでありますから表裏共前後の肩を愛き合せて縫ひ目は割つておきます。

綿の入れ方

裏身頃の裏側を出してそれに布の形なりに適當な厚味に綿を平らに載せます。次にこの綿の上へ表身頃を被せて裏表の身頃で綿を挟みます。そしてよく全體の綿を落ちつかせて脇刺、裾口、前明などのぐるりに襷をかけます。

綿が落ちつきましたら周圍の緣取をします。バイヤスを表側にあて小針に縫つて裏側できつり綿にしておきます。

紐附　脇明から裁ち落しの布で長さ二〇糎位の紐を二本拵へて脇明の下端の通りの位置にしつかりとつけます。

肩揚は普通の袖無と同じやうにします。

男物單衣羽織

單衣羽織は春の末から秋にかけて着るものでありますから從つてその地質は一體に薄地のものが用ひられまして、

男物には紹、紗、透綾、麻などを用ひます。然し春の終り頃、又秋のはじめ頃セル地の着物を着ます頃には羽織もセル地を使ふこともあります。又女物には紹ちりめん、紗、壁お召など用ひます。セル等のやうな地厚の物には甲斐絹、羽二重等を肩の滑りをよくする爲めに肩當につけますが、地薄物には肩當は使ひません。しかし肩廻りのいたみを避ける爲めに斜布を少し肩廻りだけにつけます。

仕立上寸法

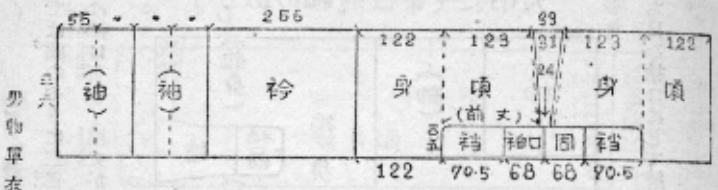
袖	丈	五三	着物と同寸	袖口	一二八 着物と同寸
袖	附	五三	繰附にする	袖	幅 三四 着物と同寸
身	丈	一五〇内外	着丈の四分の三に四糎加へる	後	幅 三〇 着物と四寸
前	幅	いつぱい		衿	幅 七・五
襠	幅	七・五		衿肩明	九 着物より五糎少く
前下り		三・五		乳下り	背より四五内外
綿		六六	着物と同寸	繰越し	〇・五
裾の折り返し		一〇内外			

裁方積方

單衣羽織地は普通一〇米内外で一反になつて居ります。用布の短い物は襠を綿敷にしますが充分ある物は襠に裁ちます。單衣羽織は袷羽織と違つて、裾の折り返しを三つ折の綿にしますから、身丈の出來上りに三つ衿の縫代と、裾の折り返しの二倍とを加へたものを後身丈の裁ち切りにします。

前丈は後身丈になほ繰越の二倍と、前下りの分と更に凡そ一七糎を加へたものであります。この一七糎を加へますのを襠の綿ひといひまして前身

單衣羽織の裁ち方



男物單衣羽織

公式　出來上り身丈＋折ひ代＋縫ひ山つ三つ＝後丈

後丈＝し返り＋前下り＋繰越×2＝前丈

後丈－繰越＝脇丈

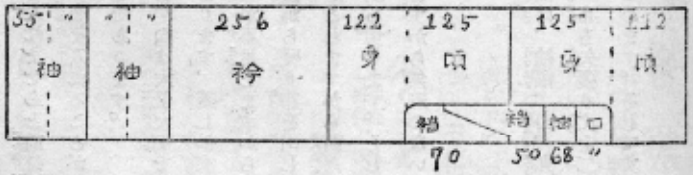
脇丈－袖附＋襠上紐け代＝襠丈

（裁ち切袖口丈－袖附寸法＋繰越－し＋襠上紐け代）×2－襠の補ひ寸法

袖丈×4＋衿丈＋後丈×4＋襠の補ひ寸法－總用布＝法

第三十七圖

（袖切）裁ち方の單衣羽織



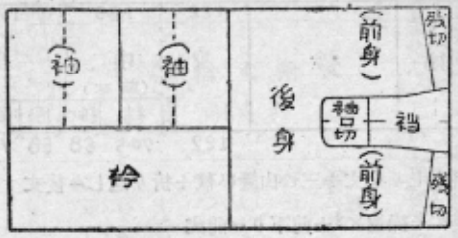
第三十八圖

頃では圖のやうに二倍の寸法を加へることになります。この袖ひを入れませんと前身頃から裁ち落した布だけでは袖口布と、襟丈が少し不足します。それで用布が短くてこの袖布を入れることが出來ません時は第三十八圖のやうに襟を鉤裁にするのであります。

セル地等で單衣羽織を裁ちますのは大低大幅でありますから第三十九圖のやうに袖の半分から衿をとります、若し袖丈が短くて身丈の長いやうな時は袖の半分だけでは衿布が不足しますから、その時は衿布を充分足りるやうに取りまして袖の横から殘り布を出します。

身頃は背縫をしないのを普通としますから前落しをそのつもりで背縫の縫代分だけ少なく衿肩明を裁ち切ります。そして襟の幅は裾綺の裏にかへるところで幅が廣く要りますから無理のない程度で圖のやうに末廣に裁ち切ります。

方ち裁の織羽衣單てにㇰ巾大



第三十九圖

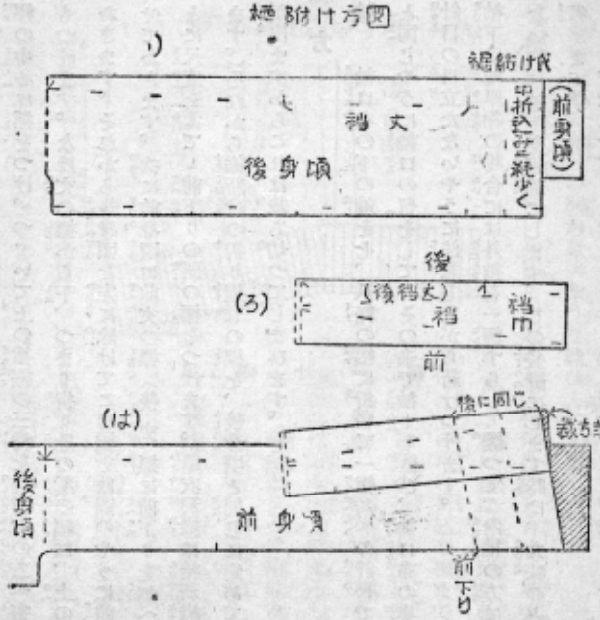
裁ち目を袖口にして縫代は一糎とし、袖口明の標は表よりも二粍つめます。そして丈、幅をいつぱいに標します。

標附け方

袖　常の如く置き袖丈、袖口、袖幅、山、丸みの標をつけ、つぎいで袖口布の標をつけます。袖口布も矢張り丈を二つに折つて二つを重ね、次に裾の折り返しを計つて、その寸法の半分より二粍ほど短い寸法を中の折り込にして標をつけます。

そして後襟附の丈を計つておきます。

襟　最初襟衿の上部を五粍の幅の三つ折り綺にして、左右の襟を中表に重ね、襟の上を左にしておきます。それから襟の上から後襟丈だけを計



第四十圖

身頃　左右の身頃を中表に二枚合せ衿肩明と前落しの裁ち目は特に動かないやうによく揃へて針を打ち、肩には假縫をかけて正しく重ね、前身頃を下に、後身頃を上に、背を左手前にして繰越をつけて第四十圖(い)のやうにおきます。それから身丈、背の縫代、袖附、肩幅、後幅の標をつけ、次に裾の折り返しを計つて、その寸法の半分より二粍ほど短い寸法を中の折り込にして標をつけます。

そして後襟附の丈を計つておきます。

襟　最初襟衿の上部を五粍の幅の三つ折り綺にして、左右の襟を中表に重ね、襟の上を左にしておきます。それから襟の上から後襟丈だけを計

つて向ふ側に丈の標をつけます。次に裾布の幅の眞中を中心にして出來上り裾幅の標を續につけ、裾の上は裾幅の中心に標をつけ、つゞいて上の裾幅の三毛を後褄附の方へ寄せて後褄附の標をつけ、次いで前褄附の標をもつけます。なほ丈の標から下、つまり折り込の所の幅は、上の幅の斜めの線を引延して廣くなるまゝにしておきます。それから後身頃を左に除けてこの褄をは圖のやうに前身頃の脇の標の上に、褄の前身頃附の標を合せておきます。次に前身頃に前丈の標（後丈標に前下りを加へた丈）をつけ、褄の後丈の標と、前下りの標とに尺度を當てゝ前下りの斜の標をつけます。（單衣羽織は袷羽織とちがつて褄と前身頃とで前下りの斜がつきます。）それから裾紬代の折り返しの標を、後身頃と同じに定めて標をつけますと、前布と褄布とに斜の無駄布が出ますからこれは裁ち切つてしまひます。

縫方

袖　袖口布の下の端を七、八粍の幅に折つて一糎位の針目で押へ縫にし、表袖の袖口と縫ひ合せ、袷羽織と同じやうに袖口の留をして、その糸で袖下を縫ひ、袖口布の奥を折つて二糎位の針目にして、表には極く針目の目立たないやうに注意しながら綴けつけます。

袖下は地厚物の場合には外袖を一糎ずらして縫つて、内袖の方に綴けつけます。地薄物の時や、又縫ひ込の少ない物は袖下を袋縫にします。この袋縫にします時は、丸味のところと振八つの方で縫込の二倍だけは濾縫を留きます。

身頃　背縫は普通二重縫にしますが耳に鉄を入れた場合や、耳の糸の色の異つてゐる物の時は袋縫にします。又極く薄地の物の時は濾縫を普通の針目で縫はずに、二枚の布の間に少し太針に針を流して兩方へ小さく交互に針を出して縫目の開かないやうな縫ひ方にします。

前褄附　前褄を向ふに、身頃を手前にして褄附の標を合せ、身頃の方を見て褄の出來上りだけを縫ひつけます。次に裾は一旦形を整へ、標を正して糸標をつけてから又開いて裾の中の折込の標までを縫ひます。そしてきせをかけて表に返し裾を三つ折にして出來上りと同じ形に整へて鏡で押へておきます。

衿附　衿の折り方や芯の入れ方は袷羽織と同じであります。又附け方も同じでよろしいのでありますが、たゞ地薄の物の時は三つ衿のところで綴けないで衿肩を廻し縫にします。なほ地薄物の時は芯地の色や縫糸の色に注意して表地と同色のものを用ひます。

後褄附　衿を表に返してよく整へてから裾の偏襟を取つて後の褄附をします。

身頃を手前にして後褄と後身頃との丈の標を合せ、身頃は眞直ぐに、褄は標通りに合せて裾紬代の中折り込のところまで待針を打つて縫ひます。そしてきせかけをして表に返し、裾紬代を前身頃にならつて折り、一糎五粍の針目で表に目立たないやうに注意しながら綴けます。

袖附　袖附の留は袖下の折り山に、表袖の裏から針を出して、褄の上で身頃の後前のきせ山を突き合せて布を

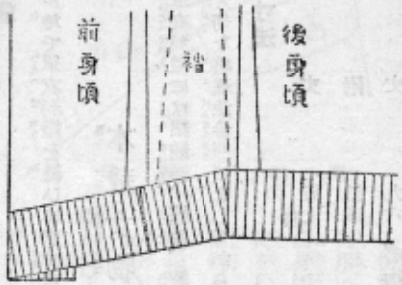


圖　十四

機に抄ひ、(裾の布は抄ひません)最初の針にならべて表袖の折り山の際に表から針を入れて糸を結び、その糸で袖附をします。袖をつけ終りましたら裾の縫代を脇の縫代に綰けつけ、更に脇縫代の耳を折つて身頃に綰けつけます。身頃の縫代の少ない物は裾の縫代を身頃に綰けつけ、それから八つ口を綰けます。

注意

セル地で單衣羽織を縫ひます時は袖附の縫目は半返縫にして割り、その他の要所も半返し縫にします。

本裁女物單衣羽織

女物單衣羽織には紹巾縮、紋紗、縮しぼなどが主になつて居ります。地質によつて適當な地伸し(二五頁、布地の大切な整理法參照)をしてから圖のやうに裁ちます。

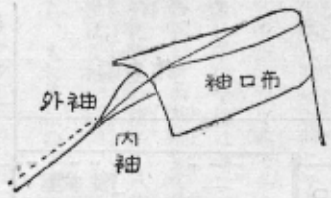
仕立上寸法

裄	丈	五七種	袖	口	二三種
袖	附	二四	袖	幅	三〇・五
身	丈	九六	裄物より三八糎位短く	繰	越 二
衿	幅	二八	身	八つ口	一〇
前下り		四	褄	返り	一〇
衿	幅	六・五	衿	幅上	一・五
				幅下	六・五

裁方

近ごろ單衣羽織地は丈が充分になつて來ましたが身丈は余り充分に折り返す要もなく多くすると却つて重苦しく恰好も悪くなりますから必要な寸法だけに裁つてなほ余分の布のある時は他に利用いたします。

前身頃から褄と袖口布を裁ち落しますのに褄の方は折り返りの間位斜に褄布を廣くします。これは衿先へ不用な縫代が入らなくてきれいに仕立てられますのと、褄幅を裾で廣くしても宜いやうにするためであります。



第四十二圖

衿の折り方

給羽織と同じであります。

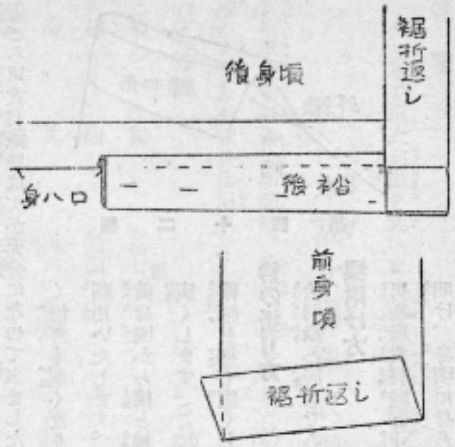
標附け方

男物單衣羽織と寸法が違ふだけで附け方は同じでありますがたゞ袖に振り八つを明け、身頃に身八つ口を明けますので從つて褄上の幅を一糎五粍にします。

縫方

袖　袖口布は袖布より口明の寸法がつまつてゐますから袖口山で割合に余計ゆるませて待針を打つて縫ひ、袖の方へ折をつけておきます。それから袖口下の四つ留をして袖口下は後袖口が釣れないやうに注意し後の縫

ひ代を割り、袖口布は別にしておいて袖口布のつくところだけ返し針で他は普通に縫ひます。袖口布は第四十二圖のやうに袖口下を縫ひ、縫ひ目は割つて端を折り裏へ綴ぢつけます。袖下は袋縫にして丸味を整へ、袖口を毛抜合せにして襞をかけ、袖口布の裏を折つて袖布に衿つけます、次に振り八つ口を三つ折にして袖附の二糎ほど手前まで紺けておきます。



第四十三圖

身頃　背は一縫にして折をつけ、後褄をつけます、褄は上を三つ折紺にして後身頃に合せて縫ひ、褄の縫込は端を一糎ほど折つて身頃の縫込へ綴ぢつけ、縫ひ目は身頃に折つて綴をかけます。次に前下りの折りをつけ衿附の方で淺く襞をかけておきます。そして乳をつけます。

衿附　男物袷羽織と同様衿は先に合掛をして袋附にします。衿附はこの線に袋附にする方が早くもあり出來上りも宜しいのですが、紺け衿にしても宜しいのです。

前褄附　褄を合せて後褄と同様に褄の縫ひ込を身頃の縫込に綴ぢ附け、褄の縫ひ込と褄の縫込を綴ぢて仕上げをします。

袖附　單衣長着のやうにして附け、褄の縫ひ込と褄の縫込を綴ぢて仕上げをします。

六、半纏の部

半纏について

半纏は羽織と同じやうに長着の上に羽織るものでありますが、羽織とちがふところは褄をつけない事と、衿を折り返さない事であります、一體に着丈は羽織より三、四糎短かめに仕立ます。なほこの半纏は改まつた外出着としては用ひませんから地質は多く太絣物で作ります、然し紋向には紬、銘仙お召などの絹布類で作ることもあります。

衿には黒の繻子、八丈、毛繻子などの掛衿を掛けて着用します。

袖は長袖、筒袖、もぢり袖などいろ〳〵に仕立てますが、長袖、筒袖は前の大人物、小供物の袖と同じですから、もぢり袖の半纏について説明します。

もぢり袖（鯉口）半纏

もぢり袖は仕事着として大層便利なものであります。

仕立上寸法

袖口	一五糎
袖幅	羽織に同じ

袖　附　四〇内外　身　丈　羽織より三、四糎短く
後　幅　羽織に同じ　前　幅　一ばい
衿　幅　五・

第一圖　裁り上り出來

裁方

普通の一反で仕立ます時は布が殘ります、裏の折り返る分の多少によつてちがいますが表用布の長さとしては六五〇糎位あれば出來ます。

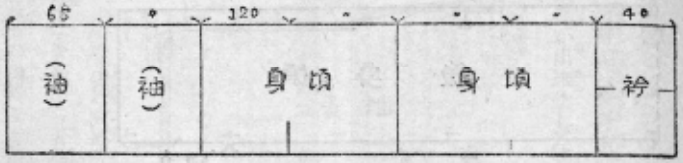
第二圖のやうにまづ袖の二倍と衿布を取り揃りを四つに折り着物と同じやうに肩明を切ります。羽織の時は前身は肩明の通りからかき落しましたが、半纏はこの分を衿の心にいたしますからそのまゝおきます。

衿布は掛衿の下に出るところだけ凡そ四〇糎表と共布にし、掛衿の下になるところは多くは別布を用ひます。

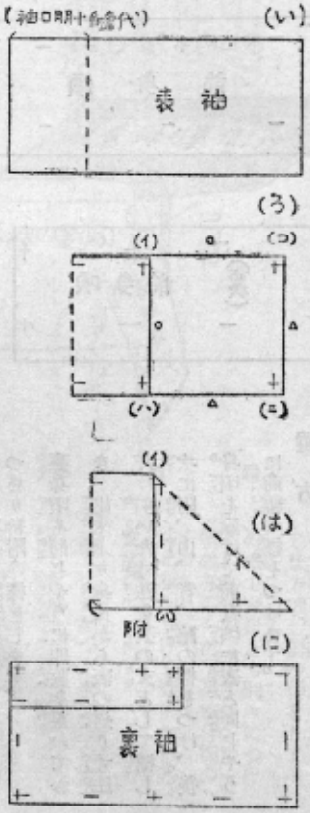
標附け方

袖　表袖を中表に二枚重ね、第三圖(い)のやうに左端から袖口明の寸法に縫代の一糎を加へた寸法だけ折り曲げてろのやうにおきます、そして向ふ側に袖口明及び縫代の標をつけ、次に幅の標をつけます、それから口明の標から右の方へ袖幅と同寸法に標し、そこから又手前の方へも同じ寸法に標します、次には圖のやうにロの十文字をハの十文字に重ねてイハを通して標をつけます。この折つたまゝで附の標をつけ、附から下の端は眞直ぐに縫込みます。

第二圖



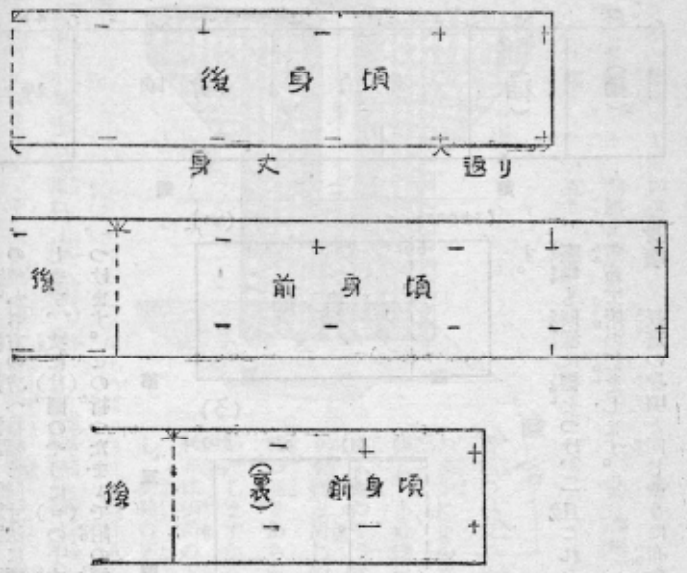
第三圖



身頃　裏袖も同樣に標をつけ、一旦これを元の位置にひろげて(に圖のやうに袖口布を重ねて附の標をします。

長着の身頃と同じやうに布を揃へ、まづ出來上り身丈の標をし、そこか

方け附標



第　圖

ら右に返りの丈を計つて標します。次に附、山、背縫、後幅の標をつけて後身頃を左に除けます、そして今度は衿肩明から眞直ぐに前幅の標、つまり衿附の標をします。

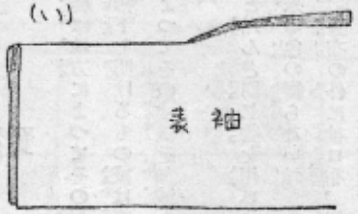
裏身頃も同じやうに四枚を重ねておき、出來上り身丈から表の返り寸法だけ引いた寸法を裏の丈として標し次に附、山、背、脇の標をつけ、後身頃を除けて前身頃に表と同じやうに前幅の標をつけます。

縫方

袖　裏袖に袖口布をつけ（外袖の端は殘し附にします）て、それから第五圖(い)のやうに口明の表裏を縫ひ合せて表に返し、(ろ)圖のやうにして

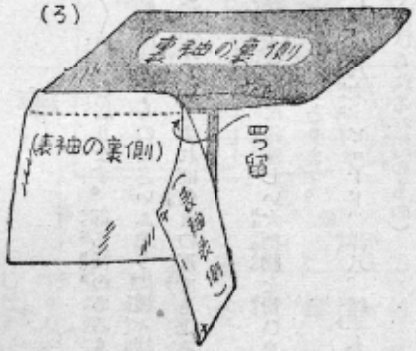
方せ合ひ縫の明口袖

(い)



方仕の留口袖

(ろ)



第　五　圖

口の四つ留をしてその糸でつゝいて内袖の縫目を四つ縫します、但し附の方一〇糎程に表裏別々に縫ひます。

身頃　表身頃、裏身頃別々に背及び脇を縫ひ、身頃全體をつけ調接をします、折は裏に折り縫代をかけます、調接が出來ましたら長着袷のやうに背及び脇の縫目を綴ぢます。

袖附　筒袖羽織の仕方と同じ仕方で、附の留をしてその糸で表裏とも別々につけ表は袖の方に、裏は身頃の方に折をつけて表にかへします。

衿附　袖がつきましたら衿附の部分をあらく襞で綴ぢておき、次に衿布に丈の不足だけ別布で下衿を接ぎ合せます、この下衿の部分は後に掛衿でかくれてしまいます。

衿布が接げましたら着物と同じやうに身頃の表側につけて、裏側で綴つけます。

掛衿　長着の掛衿の要領でかけます。

附　半纏は用布の都合で衿布を別に取らないで前身頃で摘み衿にすることもあります。其の時には三つ衿の部分にだけ別布をつけ、背を少し深目に縫つて衿幅が普通に出来るやうに縫代を浅くします。

負半纏

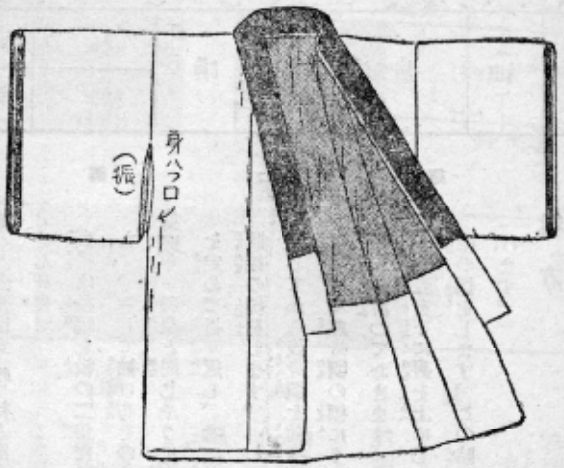
負半纏は地方によつてその形がいろ〳〵異つと居ります。即ち衽のあるもの無いもの、襠のあるもの、ないもの、衿下を明けるもの或は裾まで衿をつけ下すものなどいふやうに種々様々でありますが、子供の大きい小さいによつてその寸法を加減し、繰越を充分つけきすれば何れの形でもよろしいのであります。

地質　着物と殆んど同じ物を用ひますが、表地は子供に相應しい大柄物を用ひます。又汚れ易いもの故なる可く洗張の出来る色の變らない地質を選ぶことが必要であります。

表布、裏布の外に袖口布、掛衿布として黒八丈、ビロード、洋八、繻子などを使ひます。

仕立上寸法　（東京地方で最も多く用ひられる衽附のもの）

袖丈	五五	袖幅	三四
袖附	三四	身八つ口	一五
身丈	一〇六―一一〇	後幅	三二



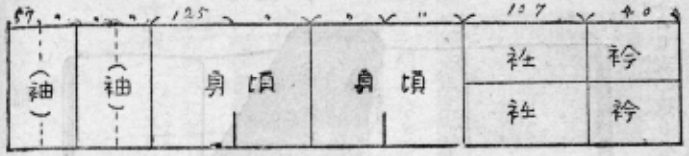
第六圖　出來上り

衽幅	一五
衽下り	二〇
衿下	三二
衿幅	七
衿肩明	一一・五
繰越	五―七
綿	どてら綿　三枚位

裁方　第七圖のやうにまづ袖丈の四倍を取つて別袖とし次に身頃を裁ち切り一二五糎として四丈分の五〇〇糎を取り殘りから衽を身丈より衽下りだけ短い一〇七糎を取りその殘りを衿にします、繰越だけ前身頃を長く身頃は四つ折にして衿肩明を一一糎五粍切ります。

裏用布は袖を表と同様に裁ち、身頃は出來上り身丈より表の返り分を引いた殘りに縫代を加へた寸法に裁ち切ります。

方ち裁の圖半身



第七圖

標附け方

袖　表袖は女物袷と同じでありますが、袵袖にしますから口明の標をつけません。

裏袖は袖幅を袖の二倍だけ廣くします、若し布幅の足りません時は持出しをします、そして袖口布をのせて表と同じやうに標します。

身頃　羽織と同じやうに表身頃を下に、裏身頃をその上に重ねておき、後身丈を定めて折り返し、次に前身丈を後身丈より繰越の二倍だけ長くして折り返し胴接の標をします。

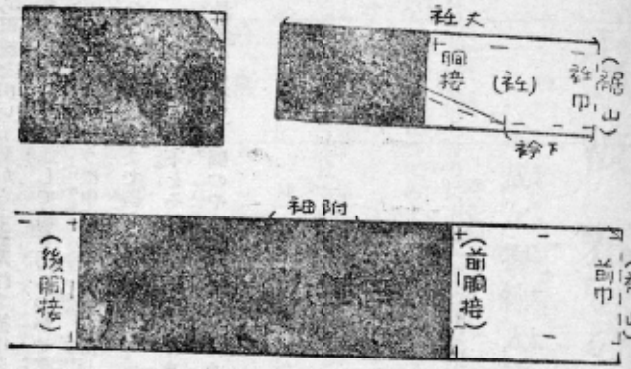
そしてから後身頃を前身頃に重ねて脇、幅、背、山の標をつけ、又後身頃を左に除けて前身頃の標にうつります。前身頃には衽下り、前幅、衽附の標をして衽丈を計つておきます。

衽　表を下に裏を上にして丈をきめて裾を折り返し、衿下、褄幅、袷縫幅、衿附の標をします、この時衿附では第八圖のやうに中央で二糎ほどふくらみをつけます。

縫方

袖　裏袖に袖口布をかけてから表袖、裏袖の袖底を別々に縫ひ、振八つを縫ひ合せて含み綿をしておきます。

標附の方



第八圖

身頃　表裏の背を縫ひ、前後の胴接をして襟をかけ、次に脇を縫ひ、衽も胴接をしてそれから衽附をします。次に身八つ口の留をして身八つを縫つて含み綿をしておきます。

衿附　表身頃に標を合せて衿をつけますが衿肩廻りは衿をゆるめ加減に且針目を細かくします。

袖附　袷の袖附と同じやうに表袖、裏袖を別々に附けます。

綿の入れ方

全部裏返して前身頃を中に表の後身頃が上になるやうにおきます、袖も自然裏袖が表袖の下になります。そして眞綿を引きその上に綿を入れますが、身八つ、振八つのところは含み綿がしてありますから、そこだけ切り取つて綿の厚くならないやうに且つ歸れないやうに兩方から伸し合つて重ねてつないでおきます。

それから糸綿を引いて肩から手を入れ、褄山を持つて引き返し、前身頃にも入れます。よく入りましたら表に返して綿を落ちつかせ褄、衿下、衿附に假襟をかけておきます。

綴　表に針の出ないやうに中綴（表と裏の縫目を抄つて綴ぢる仕方）を、衽附は裾から八〇糎位上まで、脇は身八つ口まで背は上まで綴ちます。

絎け附　衿、袖口、衿下をそれ〳〵絎けつけます、但し衿には芯綿を平らに入れます。

掛衿　最後に出來上り圖のやうに掛衿をかけます。

七、被布の部

本裁女物綿入被布

用布　被布は袷羽織と同じやうに表が一反に裏が四五、六〇糎要ります。仕立方も大體羽織と同じでありますが、衿が小衿と竪衿とになつてゐますだけが異つてゐます。

仕立上寸法　羽織と異つてゐる寸法は次の通りであります。

竪衿下り	衽下りと同寸か或は一、二糎多く		
竪衿幅 上	一四糎	同 下	一五糎
小衿丈	五三	小衿幅	一三

裁方　圖のやうに袖丈の四倍を取つた次から小衿布一枚と、竪衿布二枚を取りその殘りを二つに折り、更に前後の差（前下の二倍）と繰越をつけて二つに折つて衿肩明を明けます。そして羽織と同じやうに前身頃は衿肩明の通りから裁ち落して、褄布、袖口布を取ります。

裏布は袖と胴裏だけで小衿や竪衿は要りません。

標附け方

袖　袖は袷羽織と殆んど同じでたゞ綿入ですから寸法を幾分加減します。

身頃　身頃も羽織と同じで表身頃の丈をきめてその上に裏布を重ね、胴接ぎの標をつけて、それから繰越をつけて前身頃の上に後身頃を重ねて附、身八つ口、背、後幅の標をつけます、次に前身頃に前下りの標と竪衿附の標をつけます。

襠　矢張り羽織と同じやうに標します。

竪衿　左右の竪衿をそれ〳〵中表に幅を二つに折つて二枚を重ね、輪の方を手前に、裾を右にしておきます、そして上部の縫代を一糎とし、次に丈の標をし、つゞいて裾幅を一五糎二粍、上の幅を一四糎二粍に標し、この二つの標をつなぐ斜の標をします。

縫ひ方

袖　裏袖に袖口布をかけ、表袖裏袖を別々に縫つて八つ口の表裏を合せて縫ひ含みをしておきます。

身頃　全部の胴接ぎをして背を縫ひ、襠をつけることは綿入羽織と同じであります。

竪衿　裾の表は標より二粍外を、裏は標より二粍内を縫ひ、折は裏へ返して隠鉄を掛けておきます。次に表前身頃の竪衿附の標に合せて身頃の方を手前に竪衿を向ふ側にして縫ひます。

裏の方は裾から八糎ほど表からつゞけて縫ひ廻しておきます、そして綾りは綿を入れてから前身頃に続けつけるのであります。

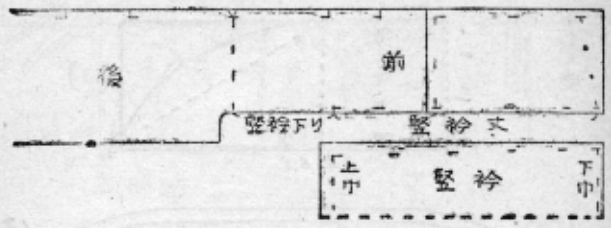
綿入被布でもこの竪衿には綿よりも布芯を入れる方が宜しいので芯布を入れることがあります。その時は、着物の三つ衿芯を入れる要領で入れ芯幅は出来上り竪衿幅より二粍せまく裁ち切ります。

袖附　襠の上を表裏縫ひ合せ留をして身八つ口を綴ひ、含み綿をして袖を表裏別々につけます。

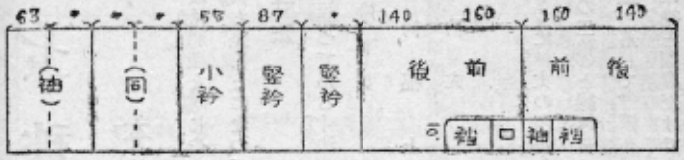
綿の入れ方

全部裏返し表の後身頃を上にして平らに綿を入れます。竪衿にも綿を入れます時はこの部分の綿がにげて引き返し難いですから、衿先二、三ケ

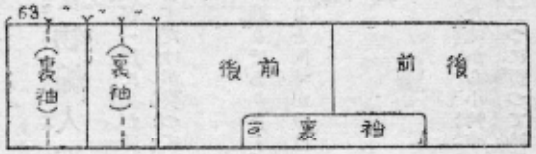
衿附標布被入綿



裁ち方被布裏入綿



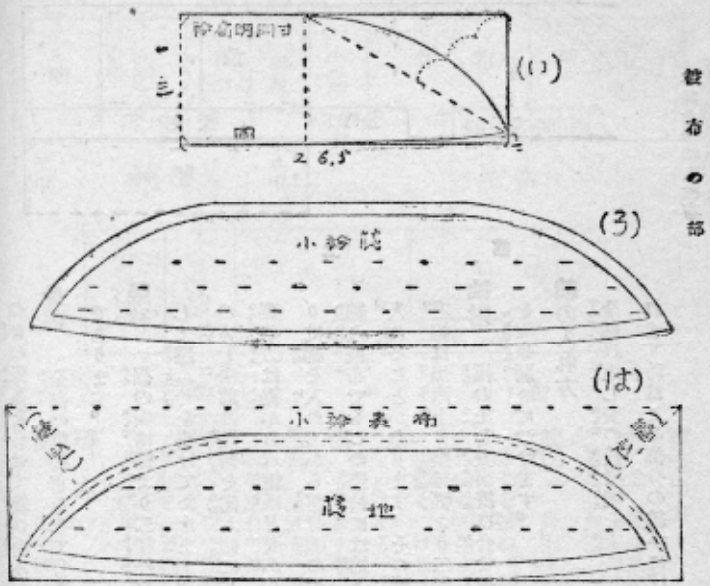
裁ち方の裏布



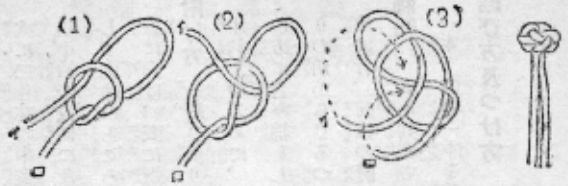
圖一　圖二

所に引糸をつけて返します。全部綿が這入りましたら表返して裾に假綴をし緊持附の縫目を中から綴ぢつけ緊持山を綴ひます。

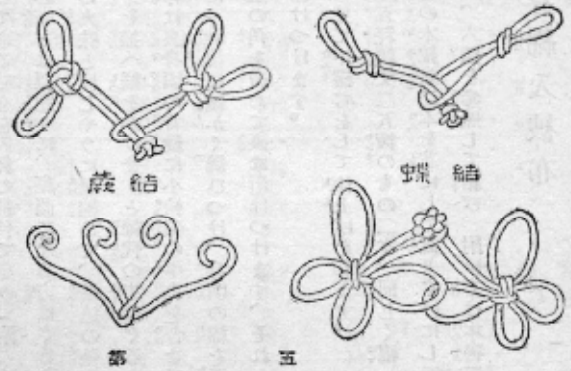
小鈴　先づ表布を第三圖(い)の寸法に二枚裁ち、その中一枚は周りを一分だけ小さく裁ち落しこの二枚を重ねて(ろ)圖のやうに假綴をします、次に小鈴布の裏側を上にしてその上に表布を耳の際を揃へて重ね、表布と表布とを平らに假とおして、それから表布の幅を中表に二つに折つて耳を揃へます、表幅の廣い分は鈴山の方で綴ひ込むや



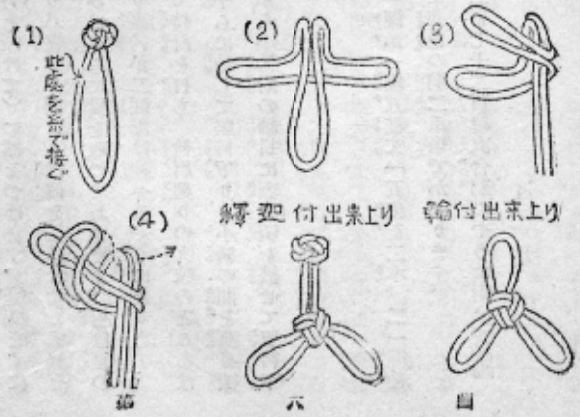
第三圖



第四圖



第五圖



第六圖　第七圖　第八圖

うにします。附の方は芯布と揃へ一杯にします。

次に二枚芯の中廻く裁ち切つてある芯布を四粍の縫代で廻り（附の方を除けて）に標をつけます、縫ひますには小衿の表側になる方と、芯布とは標通りに、裏側になる方はぐるり八粍づゝ標より内側を縫ひ合せます、そして丸味のところは元禄袖の丸味と同じやうに縫縮めて、縫込の弛みは平らに成を取つておきます。折は裏の方に向け、表に返して附の方を揃へ鏡をかけますと縫代の方はぐるり裏衿が二粍だけ捻へるやうになります。

附け方　縫ひ上りました小衿は裏身頃の背縫に小衿表の中央を合せて待針を打ち、衿肩廻りの丸味のところは小衿をゆるめに、他は平らに一針抜に細かく縫ひつけ、身頃の綿を平らに伸して竪衿下りと小衿の間を裏身頃の方に含み綿をして竪衿の上の角を留めて裏は紐けつけます、それから小衿附の縫目に表身頃を被せて竪衿下りの角からぐるつと廻つて紐けつけます。

次に背、前幅の縫目を裏から見て中綴ぢをして仕上げをします。

飾紐　表と共布で一糎か一糎五粍幅丈二五糎のもの二本、同じく幅一糎か一糎五粍丈一五糎を二本、二二糎を一本、六糎一本を裁ち、似寄の木綿糸二本を芯にして撚りぐけにして共色の羽二重糸でかゞります。

結び方及つけ方　第四、五、六圖を參照して結び、附け方は本書二百七十二頁單衣合羽のやうに附けます。

四つ身綿入被布

仕立上寸法

袖丈	長袖	六〇糎	袖丈	元禄	三五——四〇
袖	口	一七	袖	附	一九
袖	幅	三〇	身	丈	九〇
後	幅	二七	竪衿	幅	一二
竪衿下り		一五	衿肩	明	七
褄	上	二・五	小衿	幅	八——九
褄	下	六	竪衿と小衿の間		三
前下り		三			

裁方　第七圖のやうに表は前身頃から下前竪衿と小衿を取り、後から褄と袖口を取ります。

標附け方　四つ身袷と同じであります。

袖　布のおき方も、標附の順序も木綿綿入被布と同じやうにしますが、たゞ寸法をつめます。

身頃　羽織と同じやうにいたします。

竪衿　上前下前とも幅で取つた時はそれ〳〵幅を二つ折にして重ね丈、幅の標をつけますが圖のやうな裁ち方の時は上前竪衿は普通につけ下前竪衿は裏衿を接ぎ合せ、丈を二つ折にして輪の方を褄にして、丈幅の標をつけます。

褄　羽織と同じやうにいたします。

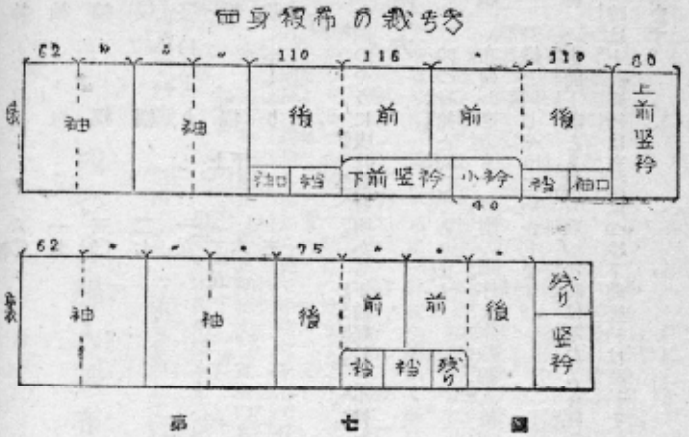
縫方

袖　綿入羽織と同じであります。

身頃　胴接ぎの仕方、背の縫ひ方、襠のつけ方、前下りの縫ひ方、袖附など皆羽織と同じであります。

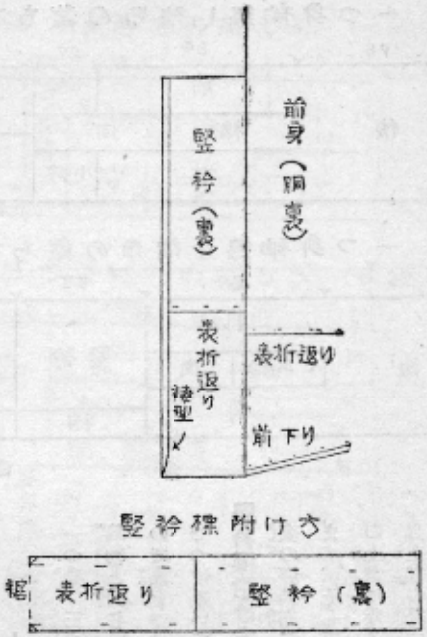
竪衿附　竪衿の丈を標通り縫ひ合せ、裏の方に折りて襞をかけます、そして上前身頃の竪衿附の標に合せて縫ひます、裏側は全部を縫はずに裾から一〇糎位のところまで〳〵縫ひ留めておきます。この明きは綿を入れてからの返し口になるのであります。

下前は裾が輪になつてゐますからこゝを前下りの山に合せるのでありますが第八圖のやうに先きに竪衿幅の山を表裏縫ひ合せておきます、この時表は標より四粍浅く、裏は四粍深く縫ひ裾の方一寸五粍の間で丁度本裁女物の廣衿の先のやうに襖形にしておきます、かうしますと、裾の方は襖形になつてそこから上は裏衿が表衿より八粍だけ見返へることになります、かうしてから丈を縫ひ合せ上前竪衿と同



七圖

じやうにつけます。次に身八つ口、振八つ口に含み綿をしておきます。



八圖

九圖

綿の入れ方

身頃の布裏を外に出し、表身頃の後と裏身頃の後との間へ前身頃を重み込み、表の後身頃を上にして平らにおきます。

入方は本裁と同じ要領で入ます。

紐け方と仕上げ

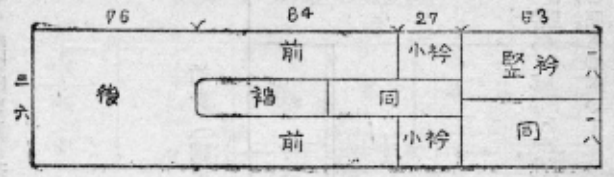
本體に綿が入りましたら平らに綿を落ちつかせ裾を荒く假綴しておきます、それから、背と、前褄の竪綴ぢをし、次に裏竪衿の縫ひ殘しを縫ひます。

次に竪衿の上部を着物の衿先を縫ふ要領で縫ひ表に返して竪衿附の際を四ツ留して小衿下を紐けつけます。

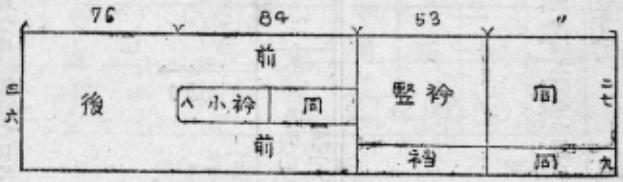
袖口明もつゞいて紐けつけます。

小衿附　寸法が小さくなるだけで小衿の縫ひ方、附け方は本裁と同じ方法で縫ひ上げます。

一つ身袖無し被布の裁ち方



一つ身袖無し被布の裁ち方



第九圖

飾　上前は竪衿先の端と、竪衿附の端口につけ、下前は附の端のところに輪を一つ、幅の端に蝶蝶結を一つつけ、上前竪衿附の端の裏へ輪を一つ附けます。

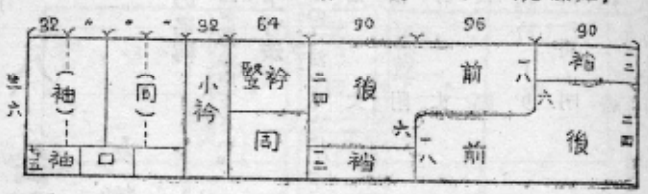
小裁被布

一つ身、三つ身などの小裁被布はその仕立方は大體本裁物と同じでありますが、竪衿を一幅布を用ひませんので裏をつけることゝ、上下の幅の違ひの斜を附の方でつけないで紐けの方でつけるのが異つて居ります。

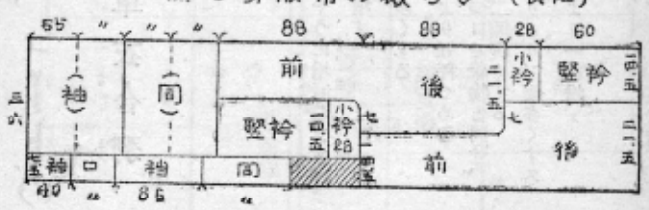
竪衿標附け方

表の竪衿布二枚を中表に揃へ裾を右に附を向ふにおきます、そしてその上に裏衿布二枚を矢張中表にして衿の上部になる左端の方を揃へて四枚重ねます、それから上部の縫代を一緒に標し、竪衿丈を計つて余分に折り返して裏に重ね間接のやうに接ぎの標をつけます、次に幅標は附になる方は眞直ぐに一度の縫代をつけ、

三つ身被布の裁ち方（元線袖）



三つ身被布の裁ち方（長袖）



第十圖

縮の方で裾幅と上の幅との差をつけて斜に標します。

竪衿縫ひ方

表裏の接ぎをして、表の竪衿下りから裏の竪衿下りまですつとつゞけ、ぐるつと縫ひつけ、折は竪衿の方に折り、全體の綿入がすんでから竪衿下りを衿先の留と同じやうに留めて、表布を出來上り幅の標通り裏へ折り返し、裏布は標より四粍控へて折り、竪衿の上を裏布の幅の折まで縫つて表に返し、竪衿の裾の方は裏幅を控へただけ褄形にして丁度女物廣衿衿先のやうに紐け上げます。

八、合羽、コートの部

女物單衣合羽

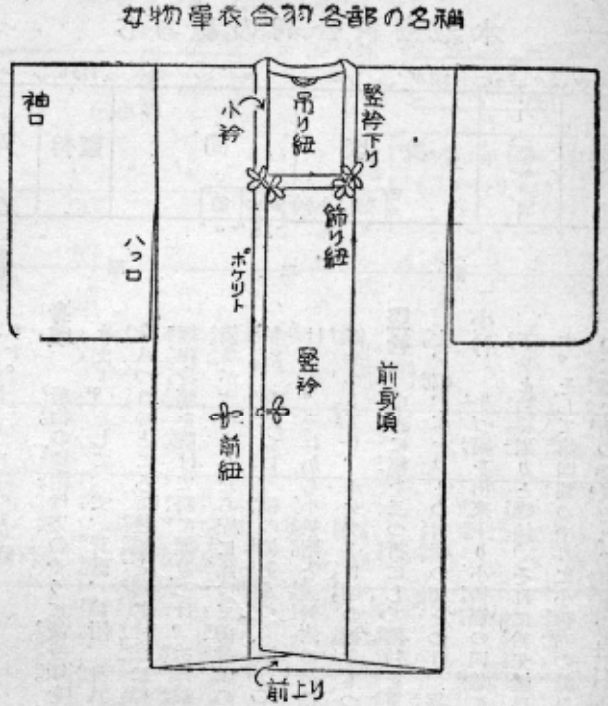
各部の名稱

第一圖を御參照下さい。

仕立上寸法

長着の寸法をもとにして次のやうに增減します。

袖	丈	五粍增す
袖	附	一糎多くする
身	丈	着丈より五粍つめる
後	幅	身八つ口で着物と同寸、褄は二糎廣くする
竪衿下り		衽下りより二糎多くする
衿	肩明	着物より一糎增ず
繰	越	一糎
ポケツト下り		竪衿下りより一〇糎下へ
袖	口	五粍增す
袖	幅	四粍廣く
身八つ口		丸糎五粍
竪衿		衽幅と同寸で一五糎
		上下一六糎
小衿幅		二糎
衿		長着より四粍廣くする
前上り		二糎
ポケツト口明		一四糎



第一圖 女物單衣合羽各部の名稱

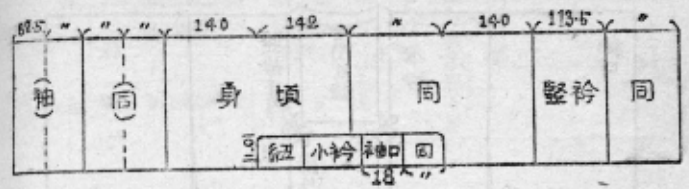
裁方

第二圖のやうに羽織の裁ち方とよく似てゐて、衿を二つ取つて兩前の竪衿とします。

標附け方

袖 袖下を袋縫にしますが、地厚物の時は折縮にしますから、袋縫の時は普通の單物の袖と同じに、折り縮の時は袖を五粍づらして中表に折つて兩袖を向ひ合せに重ねておきます。そして寸法通りに袖丈、袖口、袖附、袖幅、山、丸味の標をつけます。

方ち合の羽合衣単裁本



第二圖

合羽、コートの部

袖口布は袖と重ねないで別にしておいて、丈、袖口明、幅、山等の標をつけます。

身頃　着物の標附け方のやうに後身頃を上に衿肩明を左手前にして重ねておきます。そして、丈、背縫、裾附、身八つ口等の標をつけ、つぎに幅の標は、身八つ口のところで後幅と同じ寸法に標し、それから裾までの間で自然に二糎程身幅を減げて斜に標をつけ、次に肩幅、裾紐の標をつけます。

後身がすみましたら左に除けて前身頃の標付にうつります。

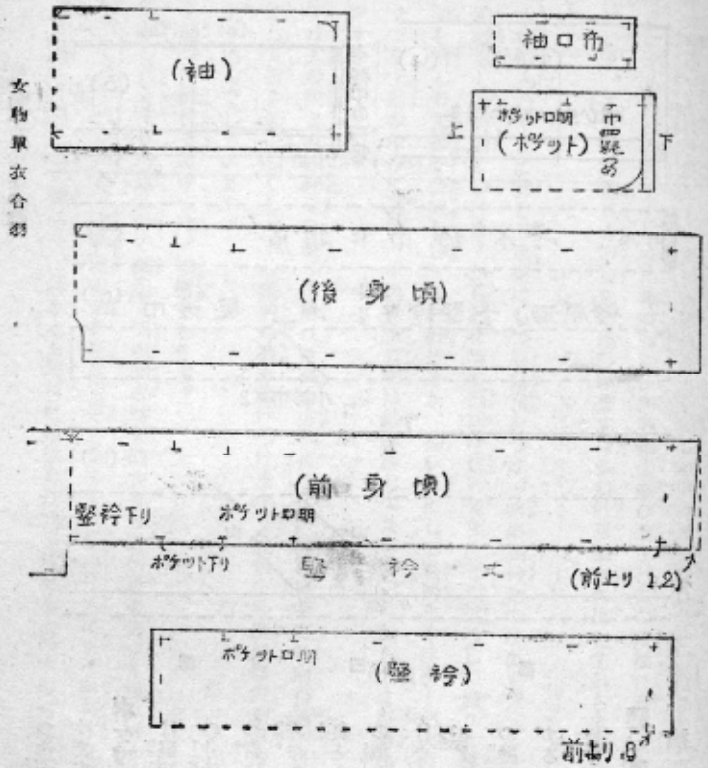
袖附、身八つ口、幅の標をうつし取つて裾に一糎二粍の前上りの標を斜につけます。それから小衿附と竪衿附の縫ひ代を一糎に標し、つゞいて竪衿下りポケット下り、ポケット口明の標をもつけます。

竪衿　中表に幅を二つ折にして兩衿を重ね輪の方を手前におきます。そして丈、幅、ポケットの口明の標をつけ、裾に八粍の前上りの標をつけます。

小衿　先づ幅を出來上り小衿幅の四倍に正しく裁ち切り、丈は竪衿幅に竪衿下りと衿肩廻りと縫越、それに衿先縫ひ代とを足して二倍した寸法に切り出します。そして第四圖のやうに小衿布の縫ひつける方を一糎に折り、次に小衿幅の二倍に折つて又それを眞中から二つ折にして出來上りの小衿幅にたゝみます。かうして疊みました物の丈を二つに折つて(にのやうに山、丈、裾緣の標をつけます。

裾緣の標は山から衿肩廻りと竪衿下りの寸法だけを計つて中央に假に標をつけその標から左右へ小衿の幅だけを計つて斜に標をつけます。若し下の方に標の

四　方ち附け標



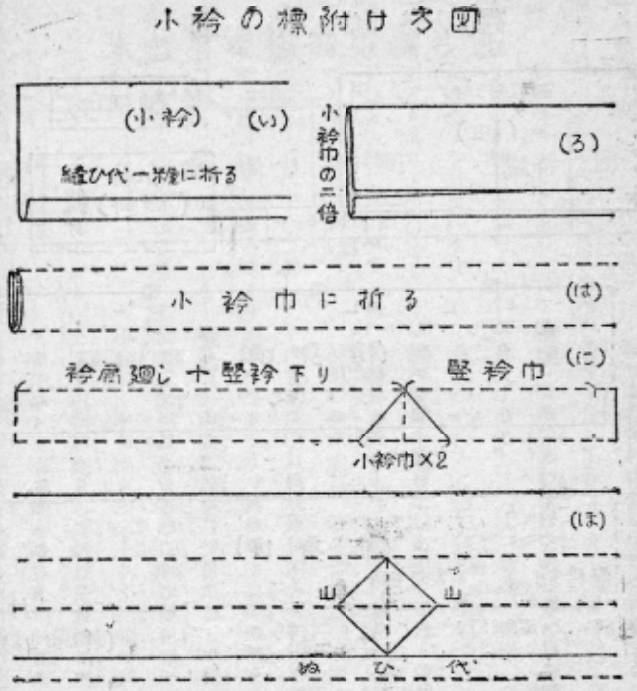
第三圖

つき苦い時は左右を別々につけます。

ポケット　長さ三〇糎、幅は竪衿幅に縫代を加へたがけの寸法に裁ち切つて、幅を二つ折にして輪を手前に上部を左におきます。上の縫代は八粍として、次にポケット下りの標とポケット口明の標をつけます。幅は竪衿幅の出來上りより四粍狭く標します。下の縫代は八粍の深さに平らにするか或は丸味をつけるかします。

縫方

袖　單衣彩縞の袖と同じやうに袖口布の下を伏せ縫にし、表袖と袖口布とを袖口の明きだけ縫ひ合せ、袷袖のやうに袖口の留をして、袖下を袋縫にする時は淺縫をして次に袖口留の下から袖を縫ひます。この時袖口布の丈までは四つ縫にして縫代は自然に折り、それから袖口布の奥を綴けつけます。この針目は表に出ますから出來るだけ小さく出すやうに注意します。



身頃　本裁單衣のやうに背を二重縫にして肩當布をつけ、次に竪衿をつけます。

竪衿は脇縫をしない前につけますから前身頃の裾綴け代を先きに三つ折にして捻りに躾で押へておいて、竪衿で前身頃を挟んで丈標や合標を合せて一針抜きか、抄ひ針にして竪衿をつけます。次に下前は褄からポケットの口明までを上前のやうに縫ひ、ポケット口明は縫ひ殘しておいて、口から上は竪衿の表と身頃と二枚を縫つてポケットをつけます。

竪衿の下は丈の標より四粍先を縫つて縫代は裏の方へ折つて、縫ひ込を竪衿附の縫ひ目にとぢつけます。そして引き返して折りを正しくし、下前竪衿の裏を綴けつけます。竪衿上の縫代は表裏とも竪衿下りの標から三角に内へ折り込んでしまいます。

次に脇を縫つて縫代を綴けつけ、裾綴をします。

小衿　額縁の角を先きに返し針で細かく標の間次けを縫つて、縫ひ目は割つて銀をかけておきます。それから縫代を折つて、小衿の角と、竪衿附の角を合せて留をします。留の仕方はまづ竪衿下りの角から針を出し、小衿の額縁を極く小さく布の繊糸一、二本とも思はれる位を抄つて針をもとの穴の直ぐ近くへ出して裏で結んで

切ります。額縁のところは中から縫ふことは困難ですから額縁のきわ二糎ほどの間は掛け接ぎの仕方のやうに接ぎ縫にします。(然し普通木綿の合羽地などの場合は額縁を先きに作らないで小衿を全體縫ひつけて、後から角を作る仕方にもします。)衿臺に待針を打ち、衿肩の丸味のところは羽織衿附と反對に小衿の方を釣加減にして、下前竪衿先から縫ひ初め、地質によつては一針拔か又半返しに縫ひます。

折は小衿の方へつけて吊紐をつけ、小衿の裏を絎けつけます。

次に袖附の始め終りに抄ひ留をして袖を附け、つづいて身八つ口を絎け、終つてから各留のところに閂留をしておきます。

飾紐の附け方

上前の左小衿角に玉附の飾紐を下にしてつけ額縁を中心にしてそのまわりは表に針の見えないやうに絎けつけます。

下前も上前と同じやうにします。內側は下前竪衿角に玉ばかりついた紐をつけ、上前小衿裏に向ひ合せてこれをかける輪をつけます。

腰紐は上前竪衿丈の二分の一よりも四糎上つたところに玉附の飾紐をつけ、下前身頃に之れと同じ高さの竪衿附から四糎離れたところに輪の紐をつけます。

裏紐は下前の竪衿端と上前脇の縫ひ込とに腰紐よりもまた四糎上つたところに幅二糎、丈三〇糎ほどの絎紐をつけます。

女物道行衿袷半コート

半コートは近來殆ど年中着られるやうになりまして、時期により、着用の場合によつて袷にも、單衣にもし、又地質も色々用ひられます。銘仙、お召、紬、錦紗、紋ハレス、金波など羽織地として用ひられますものは大方便用します。

裏用布としては羽二重の紋、友禪物、甲斐絹、八つ端などを選びます。

仕立上寸法

着物の寸法を元として次の通り増減します。

袖	丈	一糎長く	袖　附　一糎多く
袖	口	着物と同寸法	後　幅　身八つ口の所では着物と同寸にし裾で二糎廣くする
袖	幅	四粍廣く	肩　幅　着物と同寸
前	幅	一ぱい(脇縫の方は裾で二糎廣くなる)	
身	丈	着丈より二〇糎位短目にし、羽織よりは七糎位長く。普通一一〇糎位	
身八つ口		一〇糎	小衿幅　二糎
繰	越	二糎	衿肩明　着物より一糎增す
前下り		三糎	竪衿幅　一五糎

袖下りと同寸

ポケット　竪衿下りより一二糎下

ポケット口明　一四糎

第五圖　裁ち方

第五圖　半コート裏の裁ち方

裁方

表布の裁方は大體羽織の裁ち方と同じで、羽織の衿が竪衿にかはつたと見てよろしいのであります。けれども羽織のやうに襠布は要りませんから、前身頃から裁ち落した物は小衿、袖口布、ポケット口布等にして、濕地物などの時はその殘りから飾紐を作ります。

第五圖のやうに袖丈の四倍を取つて次から竪衿を出來上り身丈より二〇糎ほど長く二枚取り殘りを二つに折り前後の差を一〇糎位つけて又二つに折ります。

胴裏の用布は普通羽織より三〇糎位長く要ります。しかしポケット布は別布でも宜しいのであります。

標附け方

袖　本裁女物袷と同じでありますが、地質によつて

第六圖　標附け方

幅の增減をいく分加減しなければなりません。

身頃　表用布を中表に二つに折つて羽織のやうにおき、胴裏をこれに重ねて肩の通りに假縫をかけ、丈を計つて表身頃を胴裏に折り重ねます。そして矢張り假縫をして第六圖(ろ)のやうに後身頃を前身頃に重ねます。それから背、袖附、身八つ口、後幅の標をします。このコートの後幅は寸法の所に記しましたやうに裾で二糎廣くなりますから、身八つ口から裾の間は斜めに脇縫の標をつけます。

前身頃に前下り、竪衿下り、ポケット附の標をつけます。

竪衿　両方の竪衿をそれ〳〵中表に幅を二つに折つて重ね、輪の方を手前に褄を右にしておきます。そして幅は出來上り寸法に二耗のきせ代を加へて標し、丈標は上で一糎の縫代を取り竪衿丈を標して長い分は裾で縫ひ込んでおきます、下前竪衿にはポケツト口を標します。

小衿　合羽と同じであります。

ポケツト　矢張り合羽と同じでありますが、地厚物の時は口布を同じ幅、同じ丈に切らずに少し差をつけますと平らにおちつきよく仕上ります。

縫方

袖以外は全部割縫にしますから、出來るだけ細かい針目に縫ひます。なほ糸がつれてゐると縫目が結み、ゆるい時は穴があき何れも見苦しいものですから充分注意して縫はなければなりません。

袖　女物袷と同じであります。

身頃　前身頃後身頃とも胴接をして縫代をかけ、前下りを縫ふことは羽織と同じであります、次に背縫を細かく縫つて縫目を割ります。

次に脇を縫ひます。

竪衿　上前の身頃に竪衿をつけ、矢張り縫目は割ります。下前の方は身頃と竪衿とを合せポケツト口を明けて縫ひ、口明のところは前身頃とポケツト布とを合せて縫ひ、口明に留をしてポケツトの底を縫つて縫目を縫ちつけます。

裾とち　背と脇の縫目をとぢて、脇の上に四つ留をして身八つ口を縫ひます。

袖附　袷のやうに表裏の袖をつけ、縫目は割つておきます。

次に竪衿の下を縫つて、地質によつては芯を入れ竪衿幅を身頃の縫代にとぢつけ、裏身頃をその上に細かく綿でつけつけます。

小衿附　角の額縁を作つてから身頃に合せてつけ、角は返し針にして裏角になるやうに縫ひ、縫目を割つて着し角の落付の具合の悪い時は角に切込を入れて正しく整へ、裏の竪衿上部と、裏身頃をくけつけます。

紐附　前身裁ち落し布で幅二糎、丈三〇糎位の紐を二本綿けて、竪衿丈の中央から四糎上つた位置で裏の方に紐の縫目を下向にして一本をつけ、もう一本は上前の前幅三分の一だけ脇によつたところで、高さは下前と同寸につけます。

飾紐は共色の打紐か表地の殘り布を細く撚り綿にして好みの形に結んで合羽のやうにつけます。

撚り綿は一糎か一糎五耗幅位に切つた布を、紙撚のやうに撚りながらまつり綿にするのであります。

本裁長コート

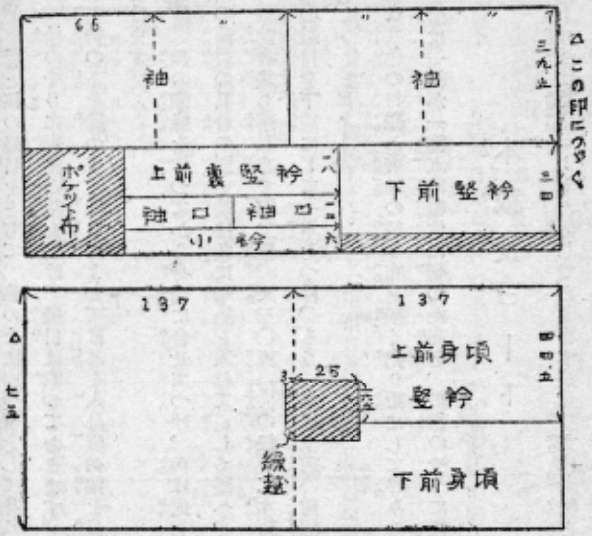
仕立上寸法は袷半コートと同じでありますが、身丈は着物と同寸か或は四糎位まで短くします。

裁方

コート地は普通二幅物が多くありますが、ラシャ、サージの類になりますと四幅物などで裁つこともあります。

合羽、コートの部

二幅物の時は袖丈の四倍と出來上り身丈の二倍と裾の折り返し分を用意いたしますが、四幅物になりますと出來上り身丈と裾の折り返し分の二倍あれば足りることになります。



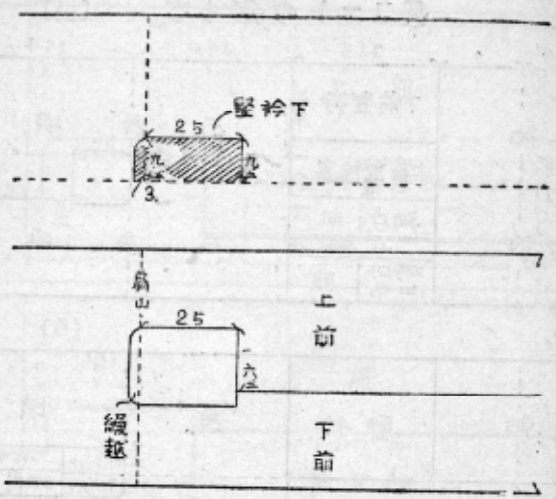
第七圖

第八圖

第七圖のやうに二幅物の時は布の端から袖丈の四倍をとり幾りを身頃にします。

身頃はまづ幅を二つに折り更に丈を二つに折つて肩山のところに一寸印をつけ、一旦これを伸して（幅だけ二つ折のまゝ）第八圖上のやうに衿肩を九糎五粍と印し次に前身頃に竪衿下りを二五糎と標し、後身の方に縫越を三糎と標し肩の丸味を刳つて胸明だけを裁ち落します。羽織ですとこゝから眞直ぐに裾まで前を裁ち落しますが、毛織地のコートは上前の前幅と竪衿とはつゞけておきますから胸明だけを刃り落しておきます。

次に二つ折にしてある幅を第八圖下のやうに擴げて上前の表竪衿の一六糎五粍を前幅につけて、それだけに胸明から裾まで眞直ぐに裁ち分けます。すると上前の幅は四四糎五粍になり、下前は三〇糎五粍になります。但しこの寸法は布地によつて多少のちがひがありますが、竪衿幅だけはこれよりつめることは出來ません。



第八圖

次に第七圖上のやうに袖を取つた殘りから下前竪衿、上前竪衿裏、袖口、小衿、ポケット布などを取ります。第九圖(い)(ろ)は大幅物の裁ち方で、(は)は四幅物の裁ち方であります。

肩當布　普通の羽織裏と同じ裁ち方にして、六〇糎位つけますから並幅物で二四〇糎位用意します。

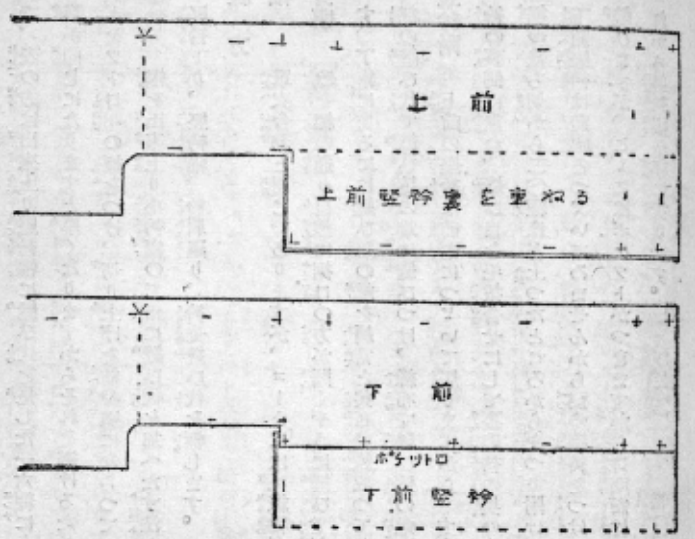
なほ袖に裏をつけることもあります。

袖

中表にして裁ち目を袖口になるやうに、外袖を一糎長くしてそれ〳〵折り重ね、單衣合羽と同じやうに標

標附け方

本裁長コート



本裁長コート

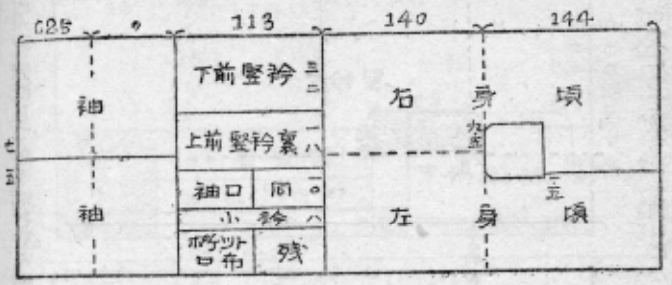
第十圖

をつけます。

身頃　着物の標附のやうに後身頃と上に裾を右手において正しく重ね、山、丈、袖附、身八つ口、後幅などの標をつけます。脇の標は身八つ口のところから裾（丈の標）までの間で自然に二糎程身幅を膨げて斜につけます。次に裾の折込み標をします。それから後身頃を左に取り除けて前身頃に袖附、身八つ口、脇の標をうつし取ります。次に第十圖上のやうに上前竪衿に上前竪衿裏を重ねて竪衿幅と上の縫ひ代の標をつけ裾の標にうつります。裾は脇から二握の切り上げをしますから、その標をつけます。

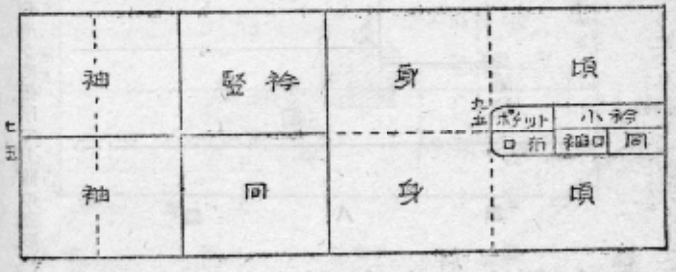
今度は下圖のやうに上前を除けて下前に下前竪衿附の標をつけますが下前竪衿は三四糎幅に裁つてありますから幅を真二つに折らない

長コートの裁ち方　(い)

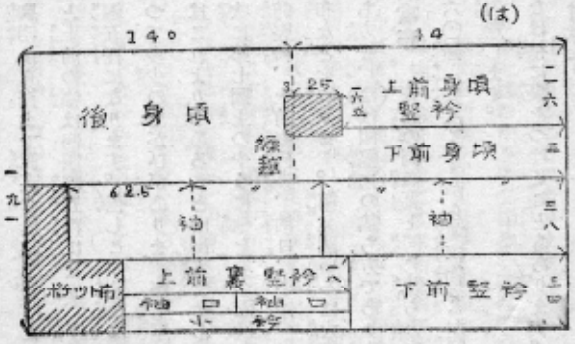


合羽、コートの部

(ろ)



(は)



第九圖

で、表の方は出來上り竪衿幅に縫ひ代を足した一六糎にし、裏になる方を一八糎にします。これは竪衿の縫ひ目が同じになりますとそれを避けるために少し幅を違へるのであります。さうして幅、丈、ポケツト口明の標をつけ、切り上げを前身頃にならつてつけます。

小衿　幅を出來上り小衿幅の二倍に縫ひ代を加へた寸法か、又は小衿幅の四倍として標し、丈は二つ折にして竪衿下り、竪衿幅、衿肩廻り、衿先縫ひ代を標します。

縫方

袖　單衣合羽と同じでありますが、コートには毛織物が多い故ゆるめに仕立てます。

身頃　脇を標の通り自然に裾口の方が開くやうに縫ひ、割鍛をかけて縫ひ込を身頃にまつり紐に伏せておきます、丁寧にするには縫ひ込の端を肩當と共布で縁取つておきます。その仕方は縁布を幅二糎に裁つてこれを四糎の縫ひ代で縫ひ込の端に縫ひつけ、縁布で縫ひ込の端を包むやうにしてまつり附けるのであります。

竪衿附　上前の竪衿は前幅につゞいて居りますから、すぐに裏の竪衿を縫ひつけます。そして裏の竪衿を表竪衿の裏側に重ね、縫ひ目を毛抜合せにして裏竪衿の奥の方の端を身頃の布裏へ細かくまつり附けます。こゝは襯の裁ち切から二〇糎ほど上つたところからまつり附けます。

下前竪衿は前幅とつゞいてゐませんから別の竪衿をつけるので、まづ前幅と竪衿布とを合せて一糎の縫ひ代で縫ひますが、こゝにはポケツトがつきますから口明だけ殘して附けます。そして縫ひ目を割つて鍛をかけ、それから竪衿幅一杯に折ります。

ポケツト附　ポケツト布の口明だけを殘して他を縫つて袋にし、口の一方を前身頃に、一方を竪衿に合せて縫ひつけ、竪衿の方の縫ひ目は毛抜合せに、身頃の方は割つておきます。そして口の上と下を内側から縫ひ目の通り縁に一針抄つて結んで留めます。それから袋の縫ひ目を竪衿の縫ひ代に綴ぢつけ、上と下は表に針目が出ますから表と同じ色の糸で見えないやうに綴ぢつけておきます。

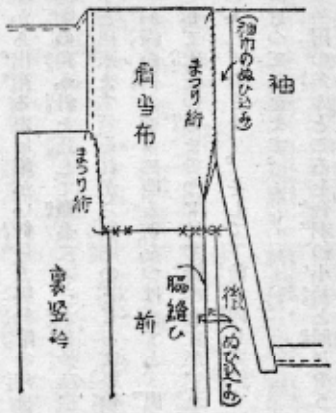
小衿附　下前の表竪衿の端から附け始めます、要所〳〵に待針を打つて縫ひ始めますが、小衿附は縫ひ目を割りますから出來るだけ細かい針目で竪衿附の角まで縫ひましたら針を抜いてよく糸をこき、小衿の方から竪衿と前身頃の角へ針を通して繊糸二、三本を抄ひ、又小衿の方へ針を返して一針抄ひ留をしますとこゝの角がきつちりと出來ます。それから胸明のところは竪衿附の眞直を通して割縫にし、衿肩の丸味は縫ひ代を淺くしますが、羽織の衿のやうにゆるみをつけますと、出來上つてから小衿がゆるくなりますから平らに合せて縫ひます、そして上前の方までつゞけて縫ひますが、上前の竪衿は前身頃とつゞいてゐますから角のところに斜の切り込を入れておきます。そして下前と同じ要領で縫ひ、縫ひ目を割つて鍛をかけ、裏竪衿の縫ひ込を折り角は三角に折つておきます。

次に竪衿附の角のところを合羽の小衿と同じやうに三角に縫ひます。

次に小衿を縫けるのは後にして袖をつけ、肩當をつけます。

袖附　普通の着物のやうに折り附にせずに開いて割り縫にし、袖の方は、振八つから袖附の縫ひ込までをすつかりまつり伏にしておきますが、身頃の方は肩當布の下になりますから別に伏せる要はありません。

肩當　背脇を縫つて縫ひ代は割つて褊は細く三つ折紳にしておきます。それから兩脇の縫ひ代を綴ち合せ、身八つ口を縫ひます、次に袖肩から胸明のところを表裏よく平らに揃へて小衿の縫ひ込の上に假綴をし、胸明から下の肩當布前幅の裁ち切は竪衿附の縫ひ目の上にとぢておきます。それから袖附の廻りを袋にならないやうに平らにして綴ぢつけ、丈を揃へて脇縫、背縫の下を千鳥にかゞつておきます。



裾紳　身丈を寸法通りに折つてまつり紳にします裾紳は表竪衿の幅一杯まで紳け、裏竪衿の先は裏竪衿を紳ける時つゞけて紳けます。下前の裏竪衿は表竪衿より幅が二糎だけ廣くなつてゐますから紳け目がそれだけ身頃の方へ寄ることになり、自然竪衿の縫ひ目が隱れることになります。

吊紐　肩當の共布を斜布で三糎幅に取り、これを四つに折つてまつり、七、八糎位の細い紐を拵へます。まつりながら三日月形に伸して、これを輪にしてきつつた方を内側にして小衿の縫ひ込で肩當、背縫の上へ縫ひつけ、上から小衿を紳けつけます。仕上げをして飾紐をつけて出來上りとします。

ヘチマ衿コート

裁方

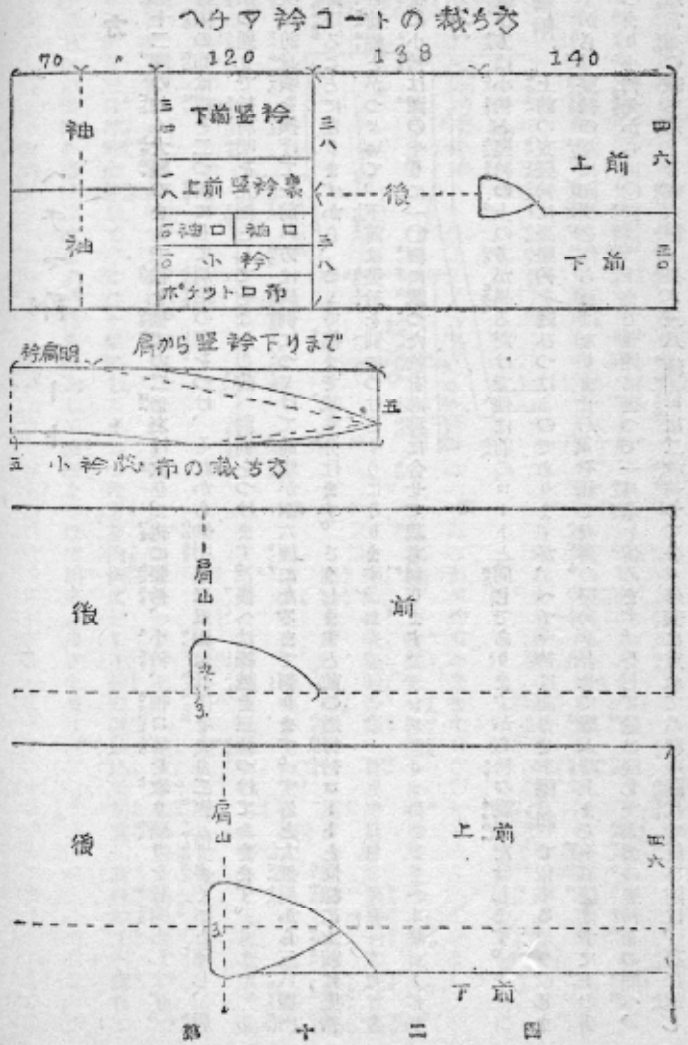
第十二圖の如く大幅のまゝで袖を袖丈の二倍だけ取り、次に竪衿、小衿、袖口等を取り殘りを身頃とします。身頃の布は幅を二つ折にして肩山の印をつけ、それから胸明を二五糎（挂下りより二糎位多く）と印し、肩山の通りで衿肩明を九糎としてそこから前へ胸刳をつけます。後へは繰越を三糎つけておきます。次に前身頃を擴げて上前の方は胸刳につゞけて前幅が四六糎になるまで割ります。すると大抵肩から三八糎内外下ることになりますから、こゝで裾まで裁ち分けます。さうしますと前の逼行衿コートと同樣に上前は竪衿と前幅とがつゞいて、下前は竪衿を別につけるやうになります。

次に小衿は圖のやうに一〇糎に裁つた物を芯型に合せて裁ち切ります。

縫方

縫ひ方は小衿と竪衿の上の方が異るだけで他は前のコートと同じでありますから衿の說明だけします。

竪衿附　上前の表竪衿に裏竪衿を縫ひつけるのでありますが、ヘチマ衿は前合せを饅頭で留めるやうにしますから、竪衿の端に飾衿を作らねばなりません。それで表裏の竪衿を合せて縫ふ時上まで全部縫はずに上の方つまり小衿先から四〇糎位下まで普通に縫つて一旦糸を留めます。そして縫ひ遖した表裏の竪衿布の間へ、肩當布の裁ち落しを幅六糎、長さ三八糎位に二枚切つて各々外表に重ねて八糎の縫代で縫ひ附け、裏に返し



て挟み、別々に竪衿布とAの中布とを縫ひ合せ、竪衿布の方を四粍見返へるやうに中布の方に折をつけて返し平縫をかけます、そして中布の奥の縫ひ代の出ないやうに竪衿布に綴ぢつけ、釦穴は裏竪衿の方へ明けるのでありますから、小衿先の直ぐ下に一つ明け、それから下前のポケット口の下に見合ふところに一つ、それから一五糎下づつ一つ都合三つ明けて穴かゞりをし、穴と穴との間は一寸綴ぢ合せておきます。

第十三図 釦かけの図

下前の竪衿は表裏つゞいた別布がつくのでありますから表竪衿になる方を前身頃につけて道行衿と同じやうにポケット口を明けておきます。

小衿 先づ小衿芯を一枚裁つて、これを幅二つ折にした小衿布の上にのせて標をつけ、表は標通りに、裏は八粍内側を縫ひ、芯は縫ひ目の上を四粍裁ち落し縫ひ目は裏衿の方へ返して表に引き返します、すると表の衿が四粍裏の方へ見返へるやうになりますから、上からよく平らに鏝をかけてしつかりと衿を据へておきます。

衿附 まづ身頃の表布の上に小衿裏が重なるやうにし、小衿の先は竪衿の折山端に合せて針を打ちます、そして小衿表、小衿芯、小衿裏、表身頃の四枚を一緒に縫ひます、この衿附の加減は三つ衿の両脇八粍ほどは出来るだけ衿をぴんと張り、衿廻りでは衿を心持ゆるみ加減に、胸明から小衿先へかけては平らにつけます、そして縫ひ込みは身頃の方へ返して鏝をかけ、肩當布を縫ひ目の上におきます。

九、帶の部

帶について

帶には丸帶、腹合帶、袋帶、輕裝帶、單帶などいろ〳〵の種類があります。

地質　木綿物では綿絣多、小倉、更紗、綿繻珍、紙布等があり、絹物では羽二重、縮緬、繻子、博多、厚板、絲錦、綴織、緞子、鹽瀨、琥珀、絽、紗などあります。この他各種の交織、メリンスなども使用します。芯地としては三河木綿が一番多く使はれ、その他眞岡木綿、ゴム芯なども使ひます。

腹合帶

仕立上寸法

幅　二八糎——三二糎

丈　三四二糎——四九二糎

幅丈とも體格、年齢によつて加減いたします。

仕立方

地直し　帶の仕立て方の中一番大切なことはこの地直しで、これがよく出來て居りませんと折角よく縫つた帶も縮狂ひが出て見苦しいものになります。その仕方は地質によつていく分づゝ相違がありますが裏は布目を正しく、全體を平らにすれば宜しいのであります。

繻子、博多などのやうに耳の吊れて居るものは裏側から鏝を當てゝ引伸しますが、尙ほ吊れて居る場合は耳へ第一圖のやうに一〇糎おき位に斜に淺く鉗を入れることもあり、時には耳だけを全部切り落すこともあります。又羽二重などによくある布目の弓なりに曲つて居るやうな時は、曲りと反對の向に幅を引張つて直し、又緞織模樣の織糸が裏にういてゐる糸は眞中で糸を切り裏からアイロンをかけてよく平均させておきます。絞りの物は絞りの感じを失はないやうに注意して裏側から輕くアイロンをかけて幅を伸し、しばらくして絞りの戻りかけたところで布地全體に裏打をします。裏打布は表地と同色、或は同色に近い色の新モスを用ひます。その仕方は第二圖のやうにまづ絞筋の上へ絞の布裏を上にしておき、その上に裏打布を重ねて、表地と同色の羽二重糸で極く小針に、殆んど表に出ないやうに糸目を抄つて綴ぢます。

第一圖　鉗の入れ方

この綴ぢ糸はつぎけずに幅の兩端で結び切にし、絞によつて四種——六種おき位に斜に綴ぢて參ります。

假綴　地直しが出來きしたら先づ重の方を右にして地質の堅い物を下に、軟かい物を稍張り加減にして中表に合せ（機様や縞のある物は其の位置に注意する）て重ね、第三圖のやうに織出しの位置をよく調べて凡そ一種位先きの所を横の布目を通して假綴ぢをします。

次に二枚の釣合を調べて中央に四〇種おき位に待針を打ちます。この釣合にならつて耳の方へも針を打ちながら縫ひ代より淺い所を綴ぢ附けます。

芯地　三河木綿は丈の詰り易いものでありますから最初に充分地伸しをしておきます。

まづ布を擴げて一方の端から充分霧を吹きかけて、棒にくる〳〵と卷き、暫くそのまゝおきますと濕りが全體に廻りますから、そこへ强いアイロンをかけると縮むだけ縮んでしまいます。

第二圖　絞の仕方の打裏の帶

第三圖　假綴ぢの仕方

標の附け方

出來上り幅より二粍廣くして輕く通し筥をします。兩端の角のところは縦横共に三種程の間で二粍づゝ縫代を斜に廣げて標をつけます。（これは出來上りのきせ揚を角だけ多くきれいにする爲めであります。）

第四圖　(い) 方け附の標

注意

片側の特別長い時は織出や模様の如何によつて、手の方七〇種位の所で適當の縫揚をするのも宜しくあります。

縫方

丈の兩端は全部布目を通して返し針に、幅の兩側端の方は三〇種位の間を細かく半返しに縫ひ、他は右端を掛針にかけて抄ひ縫か、地質によつては丁寧に普通縫にしても宜しくあります。一方を丈の中央で引返しロの分に帶幅だけ縫ひ殘して他は全部縫ひます。

絞の帶側などは裏打がしてありますが、尚ほ丈の兩端はしつかりするやうに薄い日本紙を揉んで四種幅位に切つたものを當て、一緒に縫ひ込みますと締めてゐて、絞が伸び出して見苦しくなるやうなことがありません。

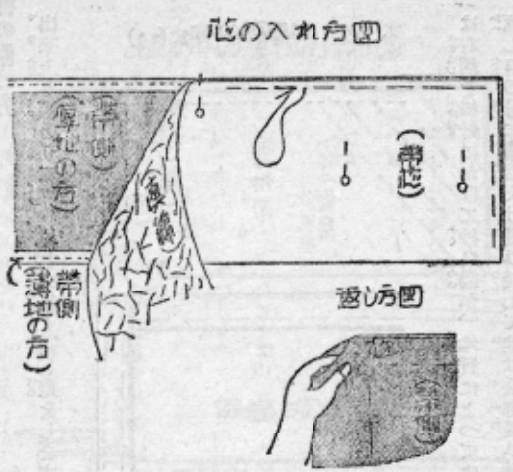
縫ひ終りましたら縫目が詰らぬやうにひんと張つて平烙鏝をかけ、兩端は四糎、幅の方は一糎づゝのきせで地厚の方へ折を掛け、角は幅を先に折り、次に丈の縫込をその上に折り返し、兩方の縫代をしつかりと綴ぢます。この時丈の折込を幅より心持内見るやうにします。

芯の入れ方

完全に地直しの出來ました芯地の一方の耳を眞直ぐに裁ち落し、それから出來上り幅と同寸に幅標をして又裁ち切ります。

芯の弛め加減は帶丈四〇糎に對して四糎位の割合に加へておきます。

帶の縫込の折り返つた方を上にして長く伸し、その上に裁ち切つた芯地を載せて一方の端に芯を待針で止め他の端から帶地だけを靜かに引張つて見て芯地のゆるみを定め、三〇糎おき位に待針を打つて芯を平等に綴ぢつけます。白の木綿糸で上を二糎、下を一、二糎位にいたします。芯に眞綿を入れる時には芯の一方に平らに眞綿を引き、アイロンで落ちつかせておいて、芯のぐるりを綴ぢつけ、又上側にも眞綿を引いて矢張りアイロンで落ちつかせて引き返します。そしてぐるりをつけましたらよく引合を見てからすつかり待針を抜き、糸屑などをもきれいにとり除けて引き返します。角々の所は第五圖下のやうに三、四糎位指尖で押込んでおいて、それから返し口から手を入れて押込んである兩角を一緒に摘んで幅を二つに折るやうな恰好で引返します。返しましたらまづ幅を引張つて芯を落ちつかせ、ぐるりに襞をかけ、前に縫ひ殘してある返し口の縫代へ芯地を綴ぢつけ、細かに紙けそれから飾襞として三糎位の針目に平襞を掛けます。



第五圖

仕上の仕方

縫ひ上げました帶の上に紙か布をのせ、その上から縫ひ目、角のところをよく引張つて火熨斗かアイロンを掛け、壓をおいて仕上げをいたします。

それから六つ折の屏風疊みか、二つ折りにして後三つ折にして紅白の糸で菱形に綴ぢます。

二枚芯の拵へ方

地薄の帶側の場合にはしつかりさせる爲めに芯を二枚入れます。つまり二枚芯を使ふのであります。この芯は一枚を上り帶幅に合せて裁ち、一枚は縫ひ代だけ狹く裁つて中央で綴ぢて、それを普通の芯のやうに入れます。

なほ薄地物で絽とか紗のやうに芯のすいて見えるやうな時には、二枚共同じ幅に裁つて中央を綴ぢておき、芯と芯の間に縫代を挾んで表に針目の出ないやうに注意して綴ぢます。

輕裝帶（その一）

名古屋帶又は文化帶などといつて大層輕便であり、且つ用布が經濟的でありますから日常用には適當な帶であります。

用布　並幅　四三五糎、芯布　三河木綿　一本分、ポケット布　並幅　三八糎。

普通の片側帶一本では少し短くありますからお太鼓の裏側に別布を五〇糎程足して作りますが、最近は名古屋帶地として普通の帶側より少し長尺で四三五糎位のものも出來て居ります。

仕立上寸法

胴廻りの部分　丈　二〇〇糎内外（胴の二廻りに五〇糎位加へた寸法）
　　胴　一五糎
お太鼓の部分　丈　一〇〇糎位（丈お太鼓の結び方によつて違ひます）
　　幅　三〇糎

地伸し

帶側も芯布も前の腹合帶の方法と同じであります。

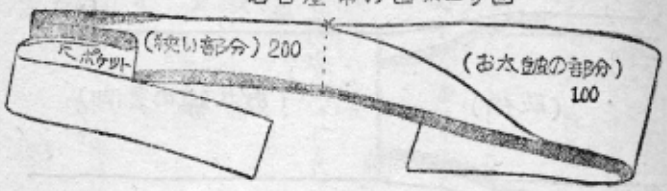
縫方

用布の裏側を上にして出來上り幅よりも四粍廣く全體に薄く通し篦をします。それから揚（手ともいひます）の方から二二五糎を計つて胴廻りの分とし、殘りをお太鼓の分としますてこのお太鼓の分を丈を二つに折つて綿になつてゐる方を垂として一糎の縫代で摘み縫にし、次に幅を標通りに腹合せ帶のやうに縫ひ、折は裏側（短い布の方）に折ります。角の所の縫代を淺くすることも腹合せ帶と同じであります。若しお太鼓を二重太鼓にする場合は垂の端を折り返さずに別布を裏にして普通の腹合せと全く同じにします。

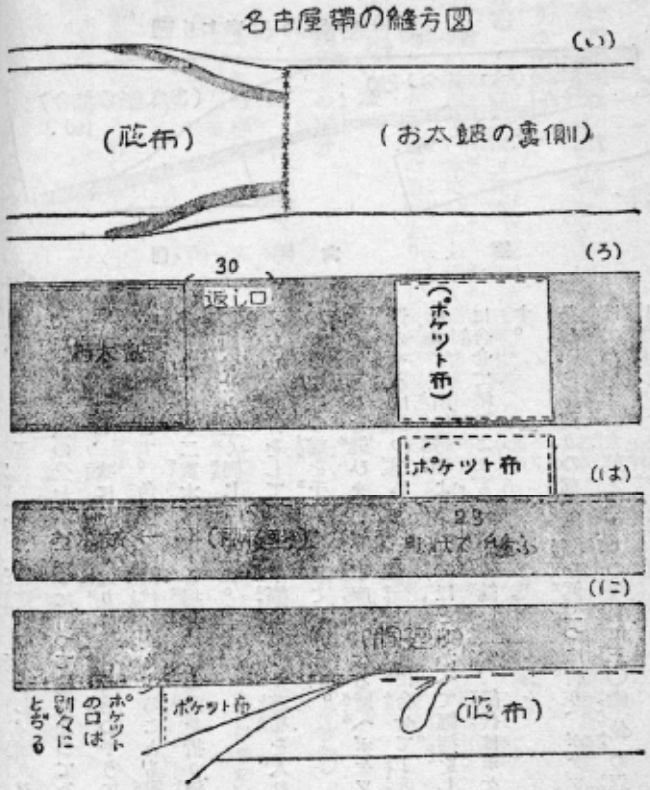
それから地伸をして出來上り幅に裁つた芯布を入れて裏に引き返し、第七圖（い）のやうに布の端を千鳥掛にしておきます。

次に胴廻りを縫ひますが、丁度前になる所へポケットをつけますから、まづ（ろ）圖のやうに掛の端から八三糎位（體に合せて丁度前に來る寸法を計つてきめます）の所に帶幅よりも八粍ほどひかへて幅標をしたポケット布を合せ、内表に合せて幅標よりも二粍淺く縫ひ合せ、縫代はポケット布の方へ折つておきます。

それから胴廻りの部分の幅を眞二つに折り、ポケット布は（は）圖のやうに上に上げておいてお太鼓と胴廻りの境目に三〇糎位の返し口を殘して他は端まで縫ひ、（但しポケット口は二三糎位明けておきます）次にポケット布の兩端を圖



第六圖　名古屋帶の出來上り圖



第七図

耗位の縫代に縫つて袋にします。

それから全體へきせをかけて（捩を右にして手前に折ります）おきます。

芯の入れ方

お太鼓の方からついて居る芯をよごれないやうに注意しながら幅を二つに折り、芯布で胴廻りの縫代を挟み、よく釣合を見ながら四枚を一束に綴ぢます。

（ポケット口は別々に綴ぢます。）

それから芯を平らに重ねて端からぐる〳〵巻いておいて、引返し口から引出しよく芯を落ちつかせ角を整へて假縫をかけ、次にポケットの兩端に止めをし、引返し口を細かに縮け合せます。

仕上

以上で出來上りでありますから兩側からアイロンをかけて、お太鼓と胴廻りの境を三角に折つて半幅の方を帶幅丈に折り疊んでお太鼓の方で包むやうに疊んで綴ぢをします。

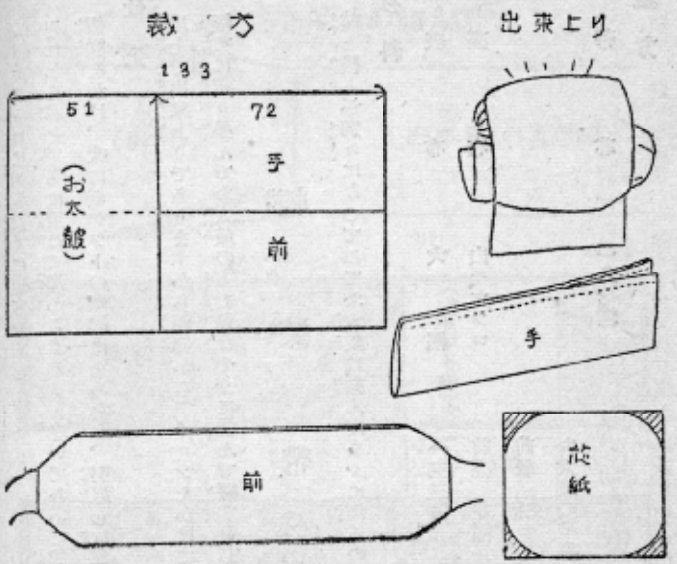
輕裝帶（その二）

前と後とが別々になつてゐてお太鼓は結んだまゝに作るのであります。

材料

表布	大幅	一三三糎
裏布	白キヤラコ	前裏 並幅 七二糎
		前紐 幅 一五糎
		丈 六八糎 二本
		お太鼓の裏 三〇糎角
帶芯		一八七糎

裁方



第八圖

圖は大幅物でありますから、お太鼓のところが丸帯のやうになりますが、並幅の時は腹合の帯と同じやうになります。

縫方

お太鼓　一方の端だけをあけて他を普通の丸帯のやうに縫つて、芯布も普通に入れて表に返します。

前　前の表布と裏布とを合せ兩端をあけて腹合帯のやうに縫ひ合せます。但し出來上つてから幅を二つに折りますから裏布の方を少し釣り加減にいたします。芯を普通に入れて表に返し、芯を落ちつかせてから裏布の方を内側にして幅を二つに折り、兩端を三角に折つて圓のやうに紐をつけます。

手　一方の端を一七糎だけ中表に折り返し全體を半幅に折つて圓のやうに折返しのところも半幅のところも一ぱいに縫ひます、これにも帯芯を入れます、その入れ方は半幅になつてゐる方に芯を先にとぢつけ、折返しになつてゐる部分から表に返しますと折り返してあるところへ芯が開くやうになりますから、そこへ芯をとぢつけて表に返し、全體に芯が動かないやうに綴ぢつけておきます。

芯紙　二八糎角の厚紙を四隅落し、次にキャラコの型裏用の布のぐるりを縫つてその中へ厚紙を包み糸をしめておきます。

まとめ方　手の端を裁目のまゝ芯紙にとぢつけて結んだ時の格好に作ります。次にお太鼓の裁目の方を結び上げた上の方にしますから少し丸く形よくして端を芯紙の裏側にとぢつけ、表の方は揚との格好を見て結び上げてしつかり芯に綴ぢつけて動かないやうにします。

輕裝帶（その三）

これは名古屋帯と殆んど同じでありますが丈を少し短く胴を一重廻りにして途中に細い紐をつけて仕上げます。

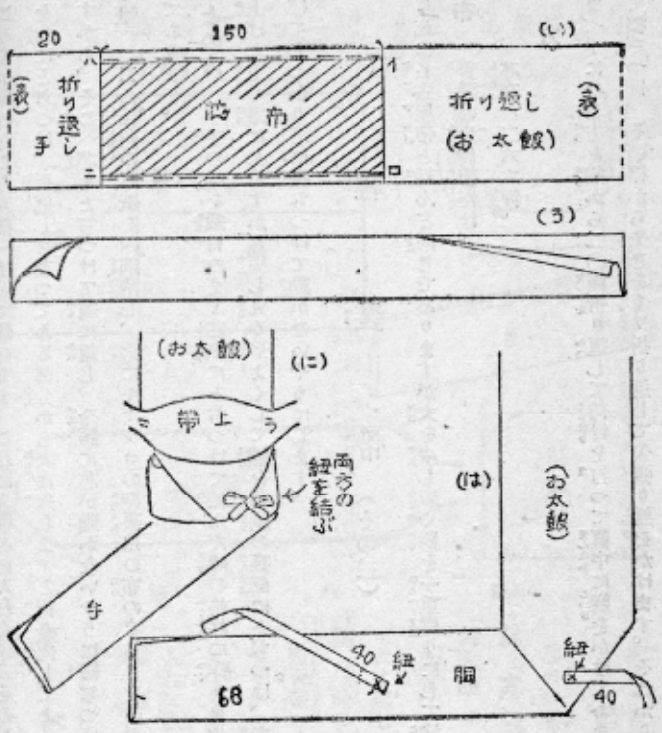
用布　普通の片側帯だけ。
芯布　二六六糎。

縫方

まづ手になる方を端から二〇糎折り返して待針を打つて眞中に鉄をかけておきます、そこから一五〇糎を計つて標をつけ、その標から先きをも又折り返して矢張り鉄をかけます。それから腹合帯のやうに全體に幅の標を

つけ、初めと終りを半返しにして普通の帯のやうに締ひ（但し端は輪になつてゐますから縫はなく、てもよろしい）折をつけて（胴廻りのところも折ります）芯布を入れて綴ぢつけ表に返し（胴廻りのところも芯を表側の縫代に綴ぢつけ）ます。両端の折り返しの端は芯布にとぢ附けておきます。次に第九圖（い）のイとロ、ハとニを合せてしつかり四つ留をしてこの間を縫け合せます。次には圖のやうにお太鼓の下の三角のところと手の端から六八糎入づたところに、四糎幅四〇糎の長さに紐けた紐をつけて出來上りとします。

第九圖



結方

（に）圖のやうに帯上で先きに後に背負揚をして、それから胴廻りの部分を胴に一まわり巻いて後で脇方の紐を結んでしつかりしめ、それからお太鼓を格好よく結び上げます。

女物丸帯

材料

丸帯の材料には綴織、唐織、錦、厚板、繪子、羽二重、繻子、縮緬、絽などが主なものでありますが、この他なほ澤山の種類があります。

仕立上寸法

	幅	丈
大人物	二六糎——三二糎	三八〇糎——四二〇糎
小供物	幅	丈
十二、三歳用	二六糎	四〇〇糎内外
十歳用	二二糎	三五〇糎

七歳用　一八糎　二九〇糎

地直し

耳の余り厚くない物は腹合帶と同じやうにして差支ありませんが、耳の糸が特に硬くて厚く、然も釣れてゐる物はその部分だけ切り取ります。

又幅が廣いために品切によつては片側分だけが伸びてゐる様な事もあります、そんな時には裏から濕つた布を當てゝアイロンをかけ、又模様のうき糸は其中で切つて平らに裏からかけて布を縮ませる事もあります。

假縫

垂と掛の繰出しは眞直になるやうに充分手で直し、幅を二つに折り、繰出をよく揃へて假縫をします。この時地質の特別硬いものはすれ易いですから縫ち始めに二針三針返し針にして襞をかけます。

繰出は普通一つだけ出しますが、然し好みによつて二つ出し、更にその先の無地の處をも三糎位出して仕立てることもあります。

又文字を織り出した物例へば繻子のやうなものは文字の隠れないやうに、且つ文字が帶幅の中央に格好よく出るやうに注意します。

掛の方は垂と同じやうに繰出を普通は一つ出しますが、垂の方に無地のところを出した時は矢張り同じやうに垂に揃へて出す方が宜しくあります。

標の附け方

全體に假縫がすみましたら出來上り幅より二粍廣く幅の標を輕く通し置にします。

縫　方

標通りにきづ丈から縫ひ始めますが、端の方四〇糎位の間は半返しに縫ひ他は一針抜に極く細かく、然も縫目の縮さないやうに縫ひます。

掛や垂の端は横の繰糸を通して眞直に半返し縫にします。

そして縫目に平鏝を當てゝ幅に二粍のきせを掛けて一方へ折り、次に兩端を揃つて角を縫ちます、特別地厚の物は一方の耳だけを裁ち落すこともあり又、角の縫代だけが特に厚くなるやうな時には一枚だけを四角に切り落すこともあります。

芯の入れ方

芯は出來上り幅に裁ち切つて縫込の折れてゐる方に芯を重ねます。芯のゆるみは四〇糎に對して五粍位にします。重ねましたまゝ帶側だけを引張つて芯の落ちつきを見て待針を打ち、芯の丈を切つて兩端と一方の縫を浚ひつけます。そして芯に眞綿を引きます。

丸帶は幅の縫目が一方ですから厚地のものでしたら輪の方へしのび綴を入れることもあります。その仕方は、輪の端から三、四粍ほど中へ入つた所で芯の上から、帶地と同じ色の羽二重糸で針目が表へ出ないやうに縫目の上側だけを抄つて五、六糎の針目に綴ぢてゆきます。

それから表に返し角を整へて縫ひ殘してある引返し口を細かに縮けます。

仕上

平らに芯を落ちつかせ、假縫をかけ角を整へてアイロンをかけ歪をしましてから六つ又は八つの屏風折に疊んで紅白の組糸で菱形に飾糸をかけます。

子供帶

仕立上げ寸法

幅一九糎位、丈二四七糎位より幅二三糎、丈三八〇糎位、その年齢によつて定めます。

布の整理

大人物と同じやうにいたします。

標の附方

帶地の幅を中表に二つ折りにして、正しく平らに置き、つり合をよく調べます。

端から五糎位入つた處に假縫をかけ、次に幅の標附をします。標つけは輕く通し篤をするか、或はチョークの端を尖らせて輕く通し標にします。幅の標は仕立上寸法に二粍を加へた寸法にいたします。

次に丈も布目を通して正しく標をつけます。そして標のすもないやうに、篤臺に置いたまゝ標の少々奥を縫ひしておきます。

縫方

地厚のものは綿壁にかけて、小針に一針ぬきとし、地質の軟かいものは、抄ひ縫ひにします。中央を帶幅だけ殘して全體を縫ひ、兩端は半返し縫にいたします。縫ひ上りましたらば、前の縫を全部取り去つて、丈に四粍幅に二粍のきせをかけ、裏眞中の縫ひ殘した處にも折をつけておきます。

芯は芯地の耳を眞直ぐに裁ち落し、次に仕立上げ帶幅から二粍減した寸法に他の一方を裁ちきつて、丈は凡そ帶丈四十糎につき四粍の割合に芯の丈を長くしておきます。

芯のこしらへが出來ましたらば、帶地を長く平らにのばし、その上に芯地を正しくおき、下の帶地ばかりを都かに引きのばしますと、その帶地に對して適當の弛みができますから、待針をして芯丈を裁ち切り、縫ひ目の方にとぢつけます。

帶地によつて眞綿を引く場合には、平らにとぢてある芯地をおこして眞綿を引き、芯をもとの位置に返し、その上にも眞綿を引きます。そして、火熨斗でその眞綿を芯地につけ、帶地の輪の方に引糸を三〇糎位おきにつけ、一角を先に少し返しておき、次にゆるく帶を卷いて芯のねじれないやうにして表にかへします。

次に正しく全部に鏝をかけ、それから中央の縫ひ殘しておいた部分を細かく本紐にくけます。

仕立上りましたらば火熨斗をかけ、二三時間壓をしておき、六つ折りの屏風だゝみにして飾り糸をかけます。

飾り糸は普通は紅白二筋の糸でしますが、記儀用には五色の色ですることは大人帶と同樣であります。

男帯

材料

絹布には博多織、節糸織、綾織、紹博多等があり、綿布には小倉、瓦斯小倉、紋布等があります。

仕立上寸法

第十図

	幅	丈
大人用	二〇糎―一一糎	三八〇糎―四一〇糎
子供物	七糎――八糎	二五〇糎――三〇〇糎

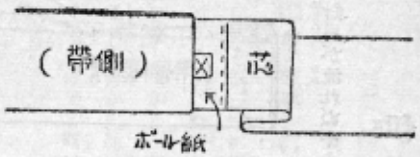
地伸

女物と同じやうに耳を伸します。男物帯地は横の布目がハツキリして居る物が多いですから、布目が正しくなるやうに裏からアイロンをかけて平らにし、巻棒に巻いて充分地伸しをします。

標の附け方

無地のものならば幅を真二つに、片側づゝ違ふものならばその境目を折山にし、獨鈷入りのものは帯幅の真中へ行くやうに二つに折り、縫代の邊を假縫します。但し地質によつてはこの縫を省きます。それから幅の標を出來上寸法より一糎位寛くして輕く通し筥をつけます。

第十一図　芯方れ入の芯



縫方（縫ひ仕立）

兩端一五糎位づゝ殘して幅標の通り半返しに縫ひます。縫目に平鏝をかけ、輕く折をつけて尺度で表へ引返し、表から縫目の折を正して芯を入れます。

芯の入れ方

芯は物によつて一枚芯或は二枚芯にします。幅は出來上り幅より二糎狹く裁ち芯の片端に厚紙を圖のやうにつけ、その先に紐をつけ、紐の先に尺度をつけて一方から入れて靜かに引出し、芯が正しく幅一杯に含まるやうに整へながら入れます。

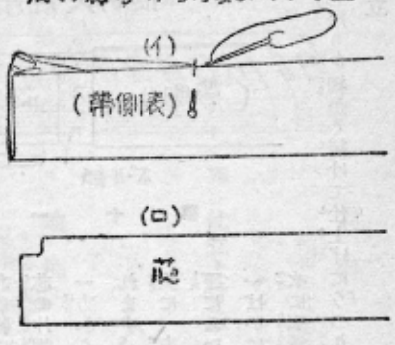
次に一方で帯側と芯とを持ち、他の一方で帯側だけ引張つて引合せ、それから下において兩手で帯側と芯との三枚を撫でながらよく釣合をならし、芯布を丈一ぱいに裁ち切ります。

次に兩端を縫殘してある處から裏返して、半返しに縫ひ、芯を綴ぢつけて表に返し疵りを細かく紩けて仕上げにうつります。

紩仕立

男帯は縫仕立の他に紩仕立といふ仕立方があります。それは幅の標を出來上り寸法につかりにつけ、標通りに

折をつけ、折山を鎧でおさへておきます。



第十二図　芯の裁ち方及び折り方

次に帯芯の幅を出來上り幅より二粍狭く、丈を二糎位長めに裁ち切ります。それから二つ折にして帯側を平らに開いて向側になる方の片側へ芯を心持ゆるみ加減にして抱かせ、待針で細かくとめておき、帯の兩端を裏返して合せ、布目を通して一針抜に細かく帯幅だけ縫ひ、きせを一粍ほどかけて折り、縫代は一糎五粍位殘して後は切り落し、芯布も角の縫代の折重なる分だけ切り落してしまいます。そして丈の兩端だけ芯をとぢつけ又表に返して角をよく整へておきます。

綿け方

芯を折山いつぱいにきつちりと折り込み、布目がよごれぬやうに且つ針目が流れぬやうに二粍位の針目で綿けます。

伊達じめ

伊達巻はぐる〳〵と巻いて端を挟みますが、この伊達じめは兩端を結びますので經長合よく使はれます。

材料

表布には羽二重、綿紗ちりめん、絽、メリンスなどを使ひ、芯布として三河木綿（一一〇糎位）とシンモスを入れます。ポケットをつける時はその用布として並幅四〇糎ほどを別に用意します。

仕立上寸法

丈　二二〇糎前後　　幅　一〇糎——一五糎

縫方

はじめ用布の裏側に薄い芯布をあてゝ、この芯布がつれないやうに加減しながら鎖でとぢておきます。それから中表に幅を眞二つに折つて幅の標をつけ、丸帯のやうに全部標通り細かい針目で縫ひますが、引き返し口を一方の端から五〇糎ほどのところに一二、三糎明けておきます。

全部縫ひましてから折りをつけ角を整へ、出來上り幅に裁つた芯布を入れ、普通の帯のやうに綴ぢつけ表に返し、返し口を細かに綿けておきます。

ポケットをつけます時は、名古屋帯のやうに帯布とポケット布とを中表に合せてポケットの口明一七糎ほどにしてつけます。

十、袴の部

女袴

女袴の材料は綾木綿、メリンス、セル、サージ、カシミヤ、縮緬、精巧織などいろ〳〵ありますが、主に毛織物が多く用ひられます。中でもサージが割合に丈夫で色もしつかりしにゐますので一般向には一番多く用はれます。

裁ち方は布の廣い狹いにより、又大中小によつて種々の方法があります。特に紐下の丈は着用者の年齢、體格又は好みによつて長短のあるものでありますから、各自適當な寸法を用ひます。裁ち切の丈は褄紐と紐附の縫代を少くとも十糎を見積つて裁ちます。

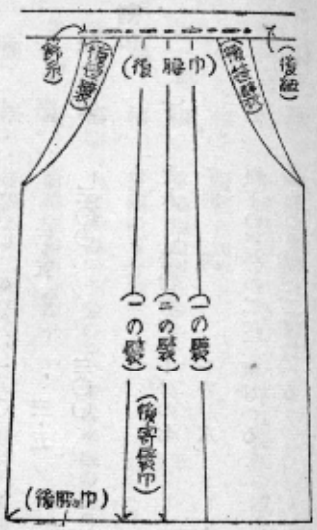
躾縫し丈は後は後幅の四倍とし、前は五倍を普通の寸法とします。つまり後幅の九倍が總躾縫しになるのであります。

紐丈は後は紐下の二倍、前は紐下の三倍とします。然し着用者の體格によつていく分の相異は止むを得ませんから、それ〳〵工夫することが肝要であります。

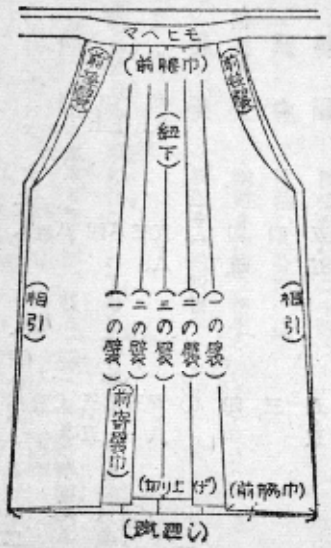
各部の名稱

第一圖を御參照下さい。

女袴名の部各(後)



女袴名の部各(前)



第一圖

仕立上寸法

	大人	十四・五歳	十二・三歳	八・九歳	五・六歳
紐下	八七糎	七八糎	七六糎	六二糎	五三糎
相引	六二	五六	五〇	四六	四〇
後幅	三〇	二八	二三	二一	一八
後脇幅	二三	二二	二一	一七	一六
後腰幅	三〇	二八	二八	二五	二三
後重ね	四	四	三	三	三
後袵襞幅	六	五	五	四	四

	大人	十四・五歳	十二・三歳	八・九歳	五・六歳
前脇幅	一八糎	一七糎	一七糎	一四糎	一二糎
後寄襞幅上	四八	三七・五	三六	三六	二五
後寄襞幅下	八三	三三	二二・八	二二・五	二二・五
前寄襞幅上	五・八	五・八	五・八	四・五	四・五
前寄襞幅下	三二	三〇	二八	二六・五	二五
前腰幅	四・五	四	四	三・五	三・五
前笹襞幅	四	三	三	三	二・五
前重ね	五・五	五・五	五	四・五	四・五
後紐幅	一九〇	一八〇	一七〇	一五〇	一三〇
後紐丈	三・五	三・五	三	三	三
前紐幅	三〇〇	三〇〇	二八五	二六五	二三〇
前紐丈					

寸法の割出

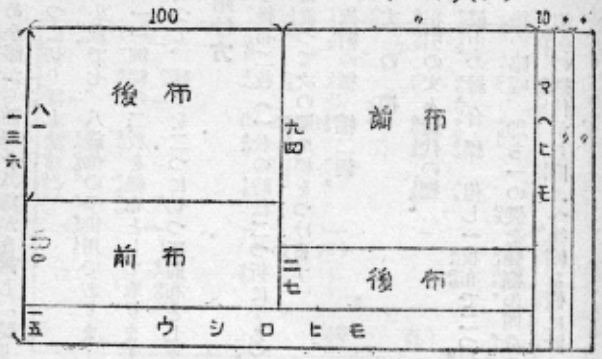
紐下　大人　着物着丈の十分の七
　　子供　同　十分の六
相引　紐下の三分の二に三糎加へる
後幅　着物の後幅に二糎加へる
後脇幅　後幅の四分の三
後寄襞幅　上は後幅の八分の一、下は後幅の四分の一
後腰幅　後幅と同寸
後笹襞幅　後脇幅の四分の一
前脇幅　後幅の五分の三
前寄襞幅　上は後幅の十分の一、下は後幅の五分の一より二糎減じる
前笹襞幅　前脇幅の四分の一
前腰幅　後幅より二糎廣くするか、或は同寸
後紐幅　後幅の五分の一弱
前紐幅　後幅の八分の一位
後紐丈　胴廻りの約二倍半
前紐丈　胴廻りの約四倍

裁方

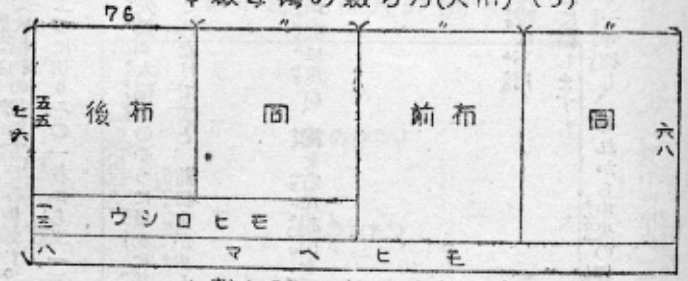
第二圖の(い)は最も一般に用ひられてゐる裁ち方で、まづ繻尺から一〇糎幅の前紐を横に四本取り、殘りを四等して前後共二布づゝに取りますが、後布二枚つゞきの時幅から一五糎落して後紐にします。

(ろ)は三幅物の場合で、まづ繻尺から九糎かき落して前紐とし、殘りを三分して、その二つ分から又一四糎をか

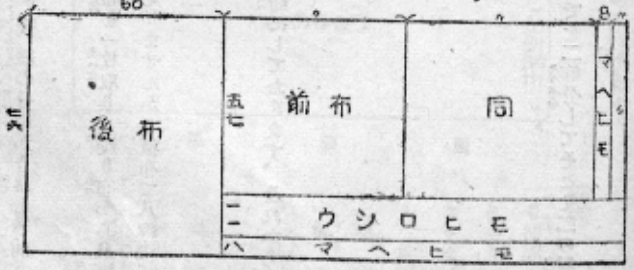
大人女袴の裁ち方(四巾)(い)



中裁女袴の裁ち方(大巾)(ろ)

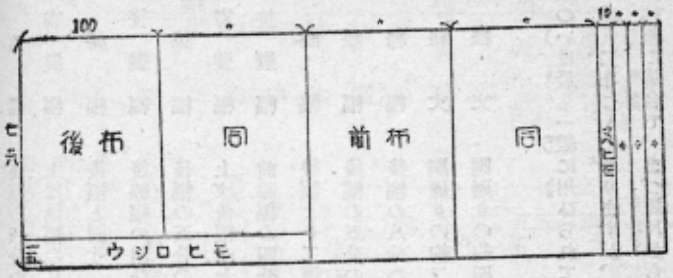


小裁女袴の裁ち方(大巾)(は)



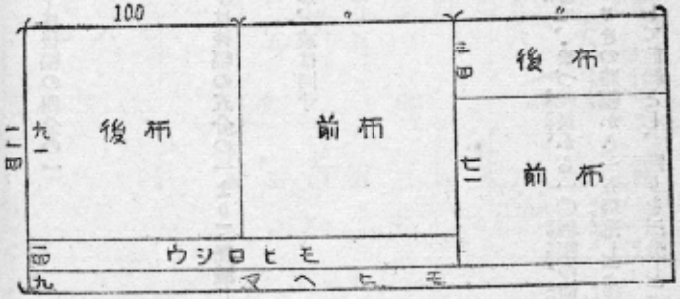
第三図

大人女袴の裁ち方(大巾)(い)



公式　後布丈×4＋前紐幅×4＝總用布

大人女袴の裁ち方(三巾)(ろ)



公式　後布丈×3＝總用布

第四図　第二図　第一図

三一四

き落して前紐とします。そして殘りを後布、前布とし、別の一枚は幅を圖の寸法に裁つて廣い方を前に、狹い方を後布に接ぎます。

第三圖(い)は四幅物の裁ち方で最初に一〇糎幅に三本續に前紐を取り、殘りの布から後紐を二五糎かき落します。そして圖のやうに裁ち合せて後布が廣くなるやうにします。

（ろ）は中裁即ち十歳から十一、二歳位の子供用で大幅物の裁ち方であります。紐の取り方は第二圖の（ろ）と同じではじめ全體から前紐を八糎かき落し、殘りを二つに切りその一枚から又一三糎後紐の分にかき落し後前共二枚づつに切り離します。

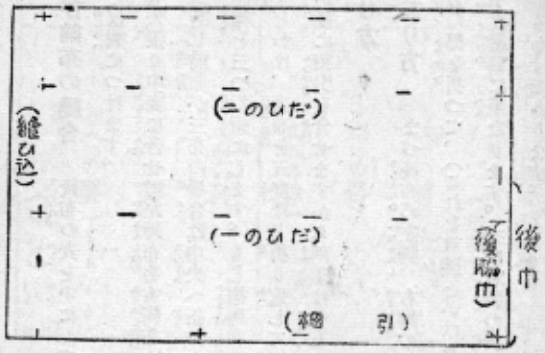
（は）は小裁で七、八歳位の子供用であります。矢張り大幅物のやうに最初に後布を一枚取り、殘り布から八糎幅と、一一糎幅の二枚を紐布として取ります。これだけですと、前紐丈が少し足りませんから横布で八糎幅に二本取つて、殘りを二つに切つて前布とします。

標の附け方

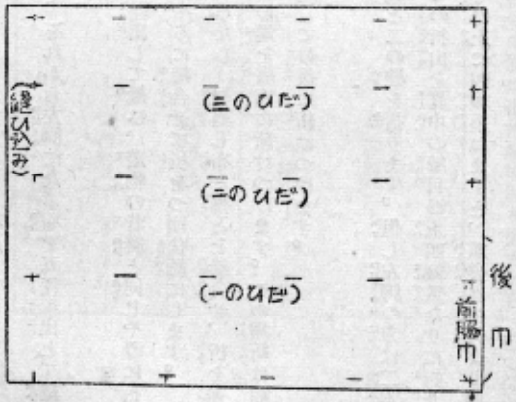
まづ後布二枚（一枚の時は二つ折にする）を中表に重ね、裾を右に相引を手前にしておきます、それから各寸法に從つて次の順に標をつけます。

1、裾紐の標、幅二糎
2、丈の標
3、相引の丈と縫代の標
4、眞中の縫合標　但し一枚布で二つ折の時は不用
5、後の脇幅、即ち一の襞を後幅の四分の三に標します
6、相引の縫代から向ふへ後幅を假に計つて一寸標し、それから中央の標までを二等分してそこを二の襞とします。

（い）圖の方け附標布後



（ろ）圖の方け附標布前



前布　矢張り後布と同じやうにおきます。

1、袵の標　幅二糎
2、丈の標
3、相引の丈と縫代の標
4、眞中の縫合標
5、一の襞を後幅の五分の三に標します。
6、後と同じやうに相引の縫代から假に後幅を計り、それから中央の縫合せの標までを三等分して、中央から

7、上の袵一枚を取り除けて、重ね襞の標を後幅の十分の一だけを中央へ寄せてつけます。

その三分の一の寸法の處を三の襞とします。

7、三の襞と一の襞の中央を二の襞とします。

縫方

後布及び前布の縫合　後布の表を中にして合せ、それから左脚になる布を五粍程出して縫合せ、折は着物の背縫と反對につけます。

前布も矢張り中表に合せ、左脚布を右脚布より五粍出して縫ひ、着物の背縫と同じやうに折りをつけ伏縫をします。若し前布が三布の場合は中央へ折のかゝるやうに縫合せて折をつけ伏縫にします。

裾絎　裾を三つ折絎にします。もし裾廻布をつけるならば裾廻し布と裾とを縫合せ、折を裾廻布の方へつけて隠襞をかけ、表布を五粍ほど折り返して裾廻布の端を表布に絎けつけます。この裾絎は前布後布を別々にしますが後に相引を合せますから兩端は少しづゝ殘して最後に絎けつけます。

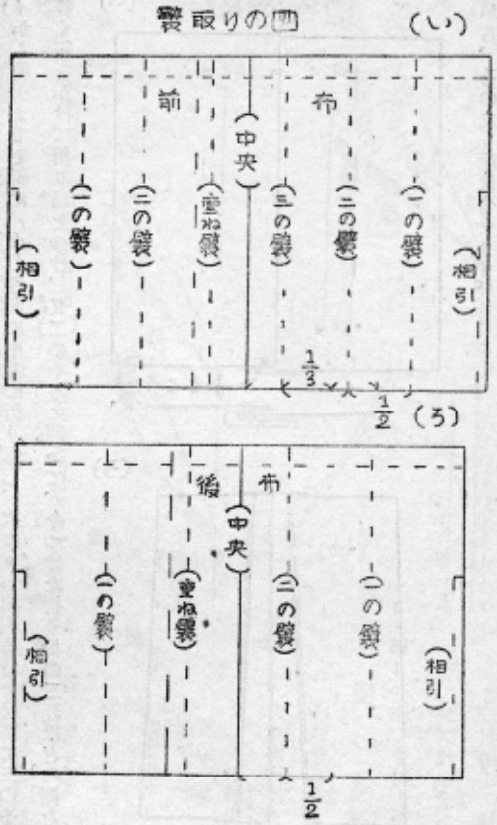
襞の取り方

後襞の取り方　まづ後布の左脚、右脚の一の襞と二の襞を折ります。但し左脚の方は二本の標の中の中央に近い方の標を折つて、（これを重襞といひます）この折山を眞中の縫目の上四糎重なりに折り重ねると二の襞の標が丁度縫目に重なります。次に右脚の折山をその上に四糎重ねますと、重襞は中央より四糎右脚の方へ寄せて重ねるわけであります。

次に寄襞幅を上下共決めて一の襞を重ね、襞の上に飾紐を上、中、下の三ケ所に千鳥に掛けます。

前襞の取り方

一の襞、二の襞、三の襞を折ります。但し右脚の三の襞は重ね襞になりますから、二つの標の内中央に近い方を折ります。



次に右脚布の重ね襞を四糎中央より左脚布の方へ出して重ね、それから左脚布の三の襞の重なりを四糎にして襞をかけます。

次の二の襞と一の襞は後と同じやうに寄襞幅を上下共きめて襞を取ります。この寄襞幅は上は後幅の十分の一、下は後幅の五分の一とありますが二粍位づゝ減しても差支ありません。それから襞の上に飾紐を上、中、下の三ケ所に後と同じやうに千鳥に掛けます。

袴襞の取り方

後袴襞　後腰幅の二分の一より八粍少ない寸法を中央の襞山から計つて丈標の上に標して、第七圖(二)のやうに(イ)から相引までを斜に、少し弓形に申表に折り返し、次に(ロ)が相引までを反対に(三)のやうに折り返し、こゝで軽く鏝をかけて折り目をつけ、又(二)のやうに開いて、今つけた折り目の二粍ほど内側を二糎五粍の針目で、外に出る針は極く小さくして綴ぢつけ（布を伸さないやうに）そして(ハ)を裏側へ折りますと(四)のやうに二粍ほど見返つて(イ)の折山と重なります

第六圖

(い)

(ろ)

後袴襞の仕方

から、そのまゝ続け合せます。

前袴襞　前の腰幅は後腰幅より二糎廣いこと、襞幅が少し狭いだけで其の方法は同じであります。

相引、門留及襞　相引を重合せ、始め終りとも十糎返し縫にして折は前布につけ、前に残してある襞綴を続けます。

門留　相引の上の端に四粍位の大きさに門留をします。その仕方は第八圖のやうに、門留の幅に糸を二、三度渡して針をその糸の下をくゞらせて針の先に糸を掛けては針を抜く仕方を繰り返します。

第七圖

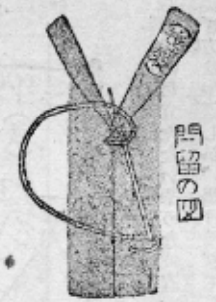
後腰

襞　三つに折疊んで襞をおきます。その襞み方は、はじめ裾を相引の留より四糎上まで掃つて来て二つに折り、次に襞山から更に四糎上へつまり相引の留から八糎上のところから上部を裾の上に重ねるやうにするのであります。

紐の続け方

紐を接ぐものはなる可く薄用してから接目の目立たないやうな位置で接ぐやうにします。

接ぎ方は半返しか、掛け接ぎにして鋤鏝をあてます。



第八圖　腰板の図

紐芯を裁つには前紐も後紐も紐幅の二倍に裁つて、若し接がなければならない物は突き合せ接ぎか、重ね縫にします。

芯の用意が出來ましたら紐丈を二つに折つて眞中に糸標をつけ、紐の一方の端に芯布を揃へて、芯布を心持伸め加減にして入れ、紐の端を縫ひ、綿代を折り、襞をかけて本綿にします。但し眞中で三七、八編あけておきます

前紐の附け方

前紐の綿附け殘した處へ美濃紙を紐幅の二倍に折つて綴ぢつけ、前幅の眞中と、腰幅の中央とを合せてよく釣合を見て待針を打ち半返しに縫ひます。この時三の襞から端までの間で六粍ほど綿附を上げてつけ、又紐の厚さを一樣にするために小布を入れます。

後紐の附け方

腰板紙を、幅は後紐幅の二倍、丈は腰幅より三糎位長く裁つて、第九圖(い)のやうに縫代を一側にして通し置をつけ、次は紐地を計つて又通し置をして(ろ)のやうに折り目をつけて兩端を一糎位丸く裁ち落し、(は)のやうに少し丈を短く裁ち切ります。

第九圖　腰板裁ち方

(腰幅より三糎位長く)

紐巾の二倍

紐巾

(い)

縫代

(ろ)

(は)

そして後幅の中央と厚紙の中央とを合せて後紐にとぢつけて飾糸を通します。

飾糸は太白の捻り糸の左捻右捻二本を下の角から一糎上つた處に第十圖のやうに雄針雌針に通します。(この飾糸は現今では殆んどつけずにそのまゝ芯紙だけを入れてつけて居ります)後紐の中央と腰紙の中央とを合せ、管襞の強まないやうに注意して待針を打ち、腰板の縫代の折より五粍上つた所をあらく半返しに縫ひつけ、縫込をよく綴ぢつけて紐附殘した處を綿附けます。

第十圖　飾り糸の図

第十一圖　仕立上りの図

仕上

以上出來上りましたらアイロンをかけ、歷をおいた時のやうに三つに折り疊み、第十一圖のやうに紐を組み合せて飾紐をし、前紐の兩端には半紙を二糎幅に切つて卷きつけます。

注意

中裁小裁の袴は紐下を長く仕立てて着用者の寸法によつて揚をしておきます。

男袴（大人物）

普通に男袴といへば襠の有る袴（馬乘袴）でありますが、近頃は殆んど儀式用だけに襠の有る袴を用ひまして一般には襠の無い袴、所謂行燈袴を用ひるやうになりました。

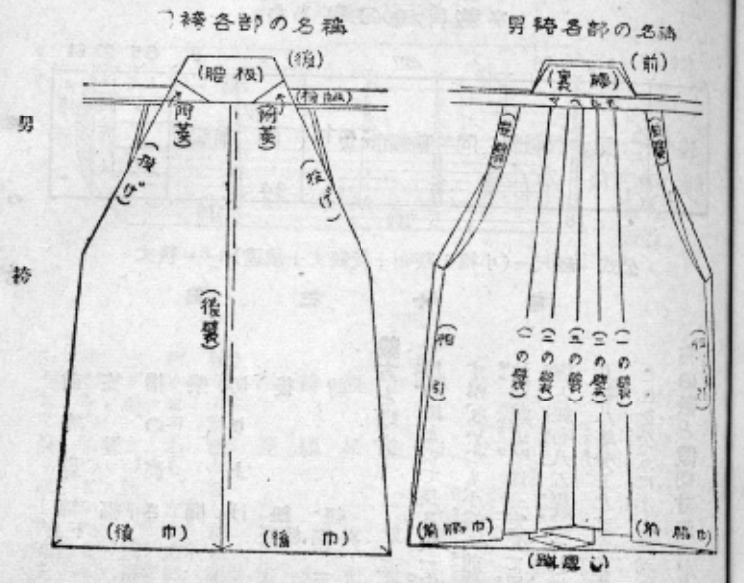
地質

小倉、仙臺平、五泉平、嘉平次平、博多平、精巧、セル、アルパカなど絹、毛、木綿各種とも使ひます。近頃無双織といつて裏が縞子目になつてゐる袴地が出來ましたが裏が縞子地になつて居るのではき具合が大變宜しいやうであります。

各部の名種

第十二圖を御參照下さい。

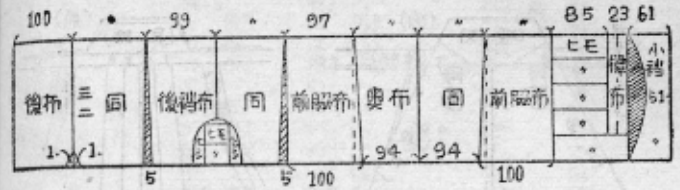
仕立上寸法と割出し方



第十二圖

紐下	八七	着丈の十分の六に四加へる
相引	六〇	紐下の三分の二に二糎加へる
後幅	三〇	着物の後幅と同じ
後腰幅	二四・五	後幅の四分の三に二糎加へる
後重ね襞下	三	後幅の十分の一
上	一・五	後幅の二十分の一
腰板幅下	一六・三	後腰幅の六分の四
上	二四・五	後腰幅に同じ
腰板高さ	八・五	腰板幅の三分の一に四糎加へる
附菱高さ	五	腰板の斜線の二分の一に八糎を加へる
前脇幅	一八	後幅の五分の三
前紐附幅	三〇	後幅と同寸か、又は二糎廣く

本裁男袴の裁ち方



公式　総尺（袴丈＋腰布＋後褶）－（襠＋丈紐＋後褶）＝丈

前寄襞幅	上 三	後幅の十分の一
	下 五・八	後幅の五分の一より四糎狭く
笹襞幅	四・五	前脇幅の四分の一
襠の高さ	四八	相引の高さより凡そ六糎を減じる
乗間	三六	後幅に凡そ六糎を加へる
切り上げ	六	後幅の五分の一
後紐長	八五	
紐幅	三	
前紐幅	三五〇	
	三	

第十三圖

裁方と積方

第十四圖

用布によつて長さが一定して居りませんから自然裁切寸法も違つて来ますが、いつも小襠（前襠ともいひます）と腰布と、紐の長さと切り上寸法（裁違）は一定して居りますから、總尺から小襠の六一糎と腰布二三糎と紐布八五糎、それに裁違の分一四糎を加へた寸法を引き去つて、殘りを八等分した丈が後布丈になります。

これを公式に示しますと圖の下のやうな式になります。

布の數と裁切寸法

後布　二枚　丈一〇〇糎（裾で幅の三二糎のところから、切り上を一糎つけます）

後襠　二枚　丈　九九糎（切り上を五糎つけ、襠の高さは五一糎）

前脇布　二枚　丈一〇〇糎（切り上三糎）

前奥布　二枚　丈　九七糎（切り上三糎）

腰布　一枚　丈　二三糎（但し二つに切つて使ひます）

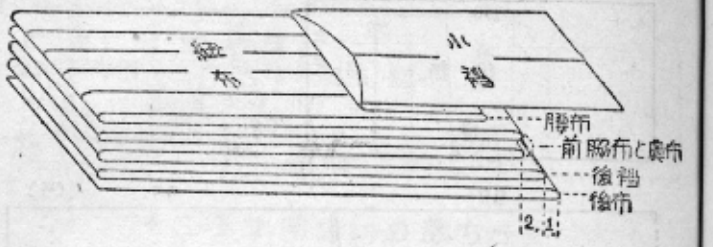
小襠　二枚　丈　六一糎（襠の高さ五一糎）

後紐　二枚　丈　八五糎

前紐　丈三五〇糎内外

附菱　二枚　丈　八糎　幅　一二糎

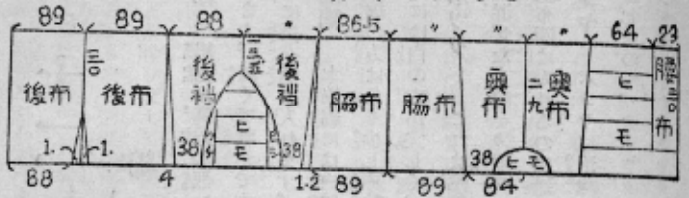
圖　布の折り方



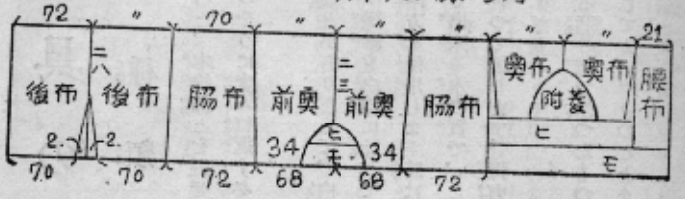
第十四圖

積り方が終りましたら第十四圖のやうに折り疊みますと、右の方が裾でありますから、左の方に鉄を入れて、前の布の數の通りに切るのでありますが、まづ後布、後襠を二枚づゝをつゞけて裁ち切り、次に前脇布と奥布を四枚つゞいたまゝ取り、それから紐、腰布、小襠を切り離します。かうして切り離した布をそれ〴〵次のやうに又鉄を入れます。

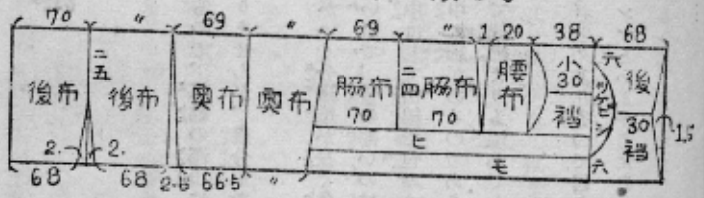
十五・六才用男袴の裁ち方



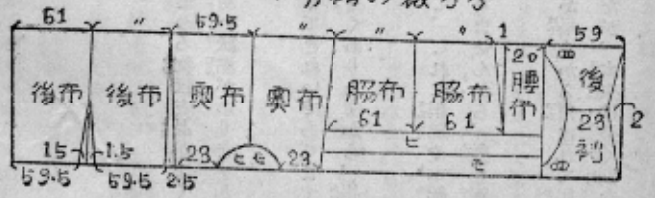
十二・三才用男袴の裁ち方



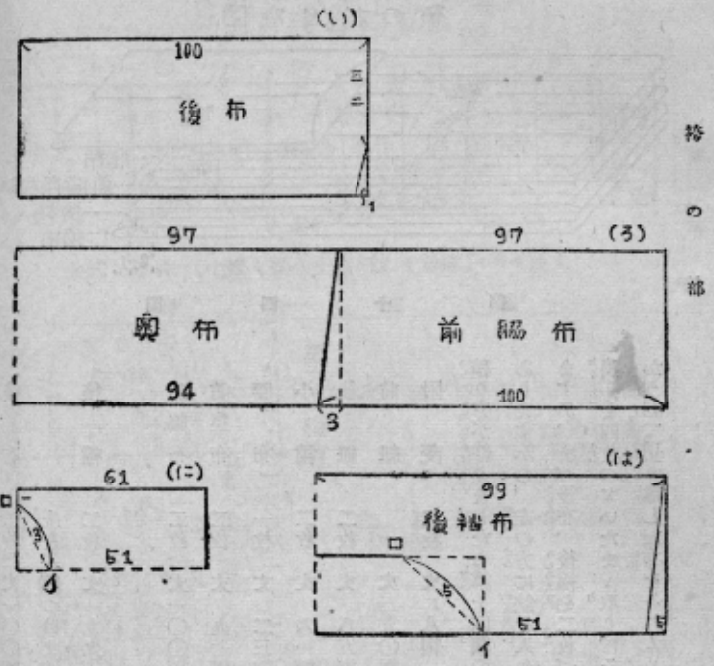
八九才用男袴の裁ち方



五・六才用男袴の裁ち方



第二十九図



第十五図

後布　裾は真直に裁ち、幅三十二糎の所から襠附の方へ一糎の切り上を附けます。

前脇布と奥布　四丈分つゞけて切り取つてある分を、第十五圖(ろ)のやうに丈を二つに折り、更に二つに折つて眞中に筋をつけて又元の二枚に返し、眞中の筋から奥布の方へ三糎切り上をつけますと、前脇丈は一〇〇糎で切り上が三糎つき、奥布丈は九七糎で切り上は三糎つきます。

後襠布　(は圖のやうに二枚を折り重ねて、裾に五糎の切り上をつけ、そこから襠の高さを五一糎と測し、次に襠刺の襠をつけ

落丁あり

十一、夜具の部

綿の種類

絹綿　絹綿は眞綿の悪いところと、木綿綿とを混ぜ合せたもので、眞綿の澤山はいつてゐる物ほど品がよくなります。輕くて軟かで木綿綿のやうに度々打返す必要はありませんが、幾分かたまり易い缺點がありますから主に掛布團に入れます。

木綿綿　木綿綿には白綿と赤綿とがありまして、白綿の方がいく分纖維が長く色も白くてきれいであります。赤綿の方は色も少し赤味を帶び纖維も白綿に比べて少し短いので、質の悪いのは切れ易くありますから、掛布團には白の方が宜しく、若し兩方を使用します時は赤綿を中にして白綿で包みます。

カポツク　これは熱帶地方で出來る木の實で、この實の中に綿があるのでありまして、これに絹綿や木綿綿を混ぜたものをカポツク綿といつて居ります。彈力があつて絹綿よりも溫かでかたまりませんから、敷布團や座布團に入れるのに適しております。

パンヤ　パンヤは沼地に生へる蒲の穗で作つたもので、カポツクより劣つて居りますが早くから使はれて居りましたので、カポツクと混同してカポツクのことまでもパンヤといふやうになりましたが、本來は全く別なものであります。

近頃普通にはカポツク綿と綿綿とを混ぜたものをカポツクといひ、カポツクと木綿綿とを混ぜたものをパンヤといつて居ります。

羽根　これは一番上等のもので溫さからいつてもかたまらない點からいつても一番よい品でありますが、上等の品は寒國に住む水鳥の胸毛を使ひますので非常に高價で一般用としては不向であります。然し極く最近鶏などの毛の硬い骨の樣な芯の部分を拔いて軟かい毛だけを集めて精製したものが出來ました。この方は從來の羽根に比べて價も非常に安く得られます。

藁　元は病人用の布團にのみ用ひられましたが、最近は病人に限らず一般にも敷蒲團用として用ひられるやうになりました。秋の天氣のよい日によく實つた稻を刈り取つて干したものが一番品がよく、これを根元の汚いところは拔ひ除けて凡そ三分程度に木の槌で打つていく分軟か目になりましたものを使用いたします。

布地

蒲團用の布地としてはいろ〳〵な地質が使はれますが木綿物で表用布としては瓦斯、紡績、新銘仙、新モス、などを使ひまして、裏用布には、眞岡木綿、金巾、新モスなどの無地物を使ひますが、色は何れも表との配合のよいものを選ばなければなりません。

絹物では、銘仙、八端、紬、郡内、羽二重、縮緬等を用ひます。裏地は矢張り無地物で銘仙や八端には本瓦斯、絹紬、銘仙などを選びます。羽二重や縮緬物などの上等のものには羽二重か上等の銘仙の無地物を使ひます。

この他メリンス、レイヨン物なども多く使用されます、羽根蒲團には更紗模様の縞子地が使はれ、又物には麻地の模様物や縞物が使はれます。

夜着類の肩當　夜着には皆肩當を當てますが、大抵の場合表地よりも柄もうつりのよい大柄の物を選びます。

掛衿　普通には黒か紺のビロードをかけますが、カバーを用ひます時は掛ける必要はありません。

夜具一組の仕立方

夜具は形の定つた物のやうでありますが地方によつて其の型にも大きさにも又仕立方にもいろ〳〵と異つた點があります。

普通の夜具一組といへば敷蒲團二枚、夜着一枚、掛蒲團一枚の都合四枚を申しまして、大きさは敷蒲團は三布に、夜具は中夜着、掛蒲團は五布に仕立てるのを普通とします。

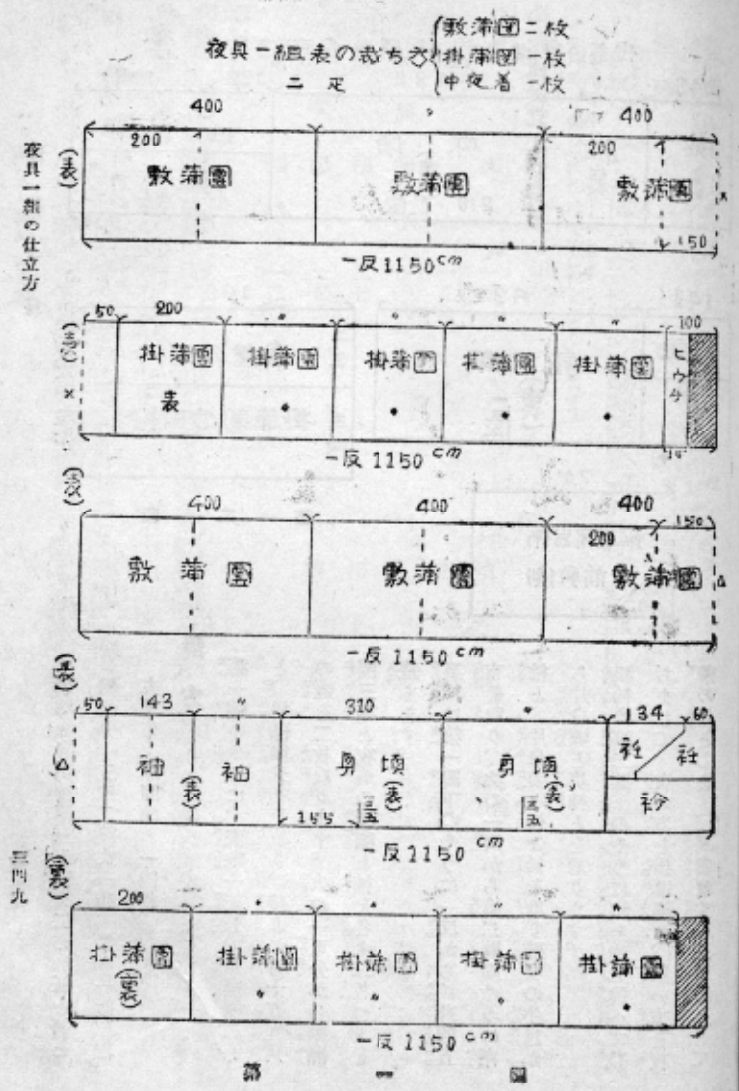
材料　一組の用布としましては並幅物で表用布四反、裏用布二反半、夜着の肩當布一四〇糎、掛蒲團の掛衿布一四〇糎を要し、綿は蒲團綿を七十枚ほど入れます。

これを各別に分けて見ますと、

敷蒲團二枚　四〇〇糎（引返し）の丈六布　蒲團綿　四〇枚

掛蒲團一枚　二〇〇糎の丈に五布　裏地も同寸　蒲團綿一六枚

中夜着一枚　表地　身頃　三一〇糎丈二布　衽と衿と袖　一九四糎丈一布　袖　一四三糎丈二布



第　一　圖

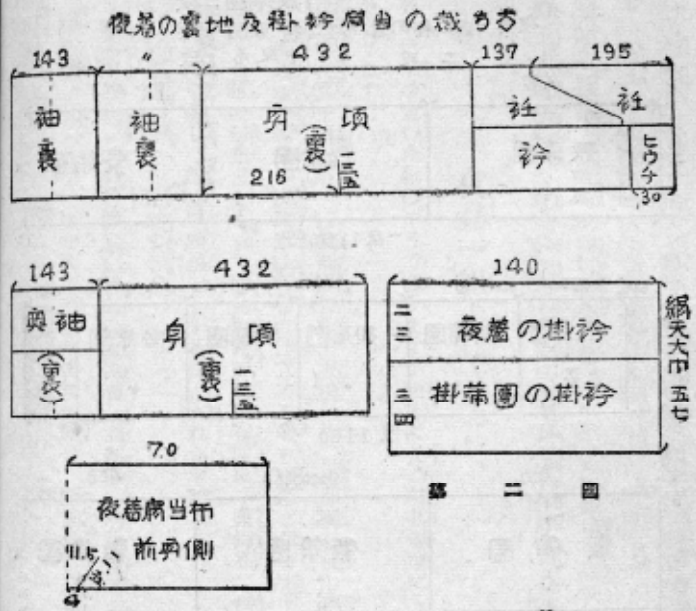
裏地　身頃　四三二糎丈二布　衽と衿と
襠の分　三二二糎丈一布　袖　一四三糎
丈三布　蒲團綿　一四枚

裁方

第一圖のやうに、表地一疋分で敷蒲團三布と、掛蒲團五布を取り、殘りから十五糎角の襠を二枚取ります。次の一疋分から敷蒲團三布と夜着の身頃と袖を各々二枚づゝを裁ちます。

裏地は第一圖下のやうに一反から掛蒲團五布を取り、次の一反から第二圖のやうに兩袖と、片身頃と衽と衿を取り殘りの半反から片身頃と奥袖とを取ります。

掛衿は第二圖下のやうに幅を少し遖へて裁ちまして、廣い方を掛蒲團に、狹い方を夜着の衿とします、肩當は丈を二つ打にして



第二圖

輪の方を衿肩として圖のやうに衿肩明を縫に明けます。

注意

反物によつて一反の長さに多少の相違がありますから、丈の足りない場合は袖丈身丈共少し位づゝ詰め、裏用布を餘分につけて裾廻を多くします。

中夜着仕立上げ寸法

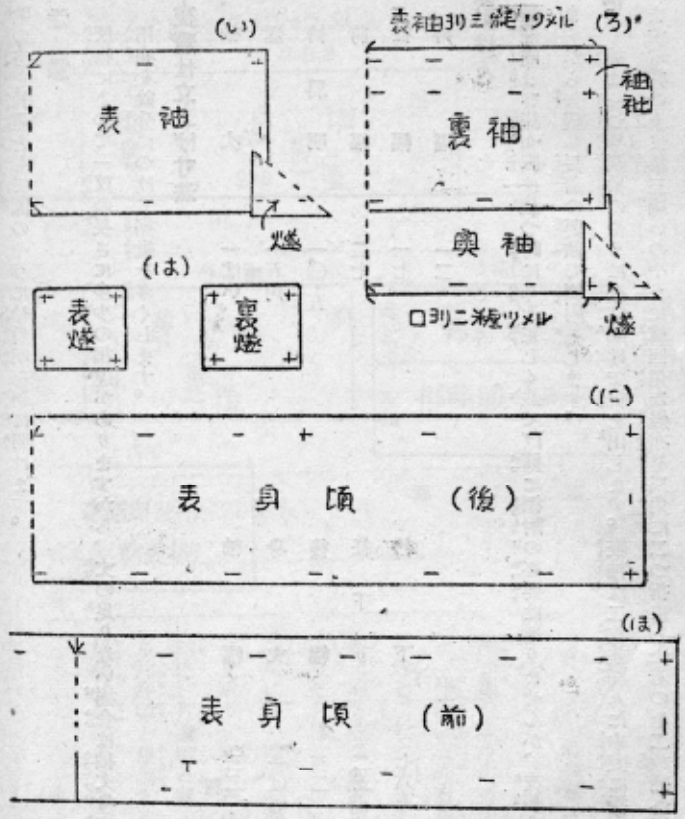
袖	丈	一ばい	袖　幅　三二糎
襠		一五角	身　丈　一ばい
衿	肩明	一〇・五	後　幅　三二
前	幅	二七	衽下り　二三
衽	幅	一七	衿下　七六
衿	幅	一二	

標附け方

敷蒲團及び掛布團は裁つ時に布を正しく裁てば別に標附の必要はありませんが、夜着は着物に近いものでありますから矢張り長着の要領で標附をします。

袖　袖は一つ身潤袖のやうに全部明けて裁を出します。表袖は二枚共別々に中表に折り重ねて丈、幅の標をします、共の上に第三圖(いのやうに眞四角な襠布を三角に二つ折にしたものを二枚揃へて縫代分だけ重ねて、袖

附と袖下側の標をします。裏袖は、奥袖を六、七糎の縫代だけ重ねてろ圖のやうに丈、幅の標をします。丈は附の方で口より二糎つめて袖下が斜になるやうに標します。それから表と同じやうに燈布を重ねて附及び袖下の標もします。

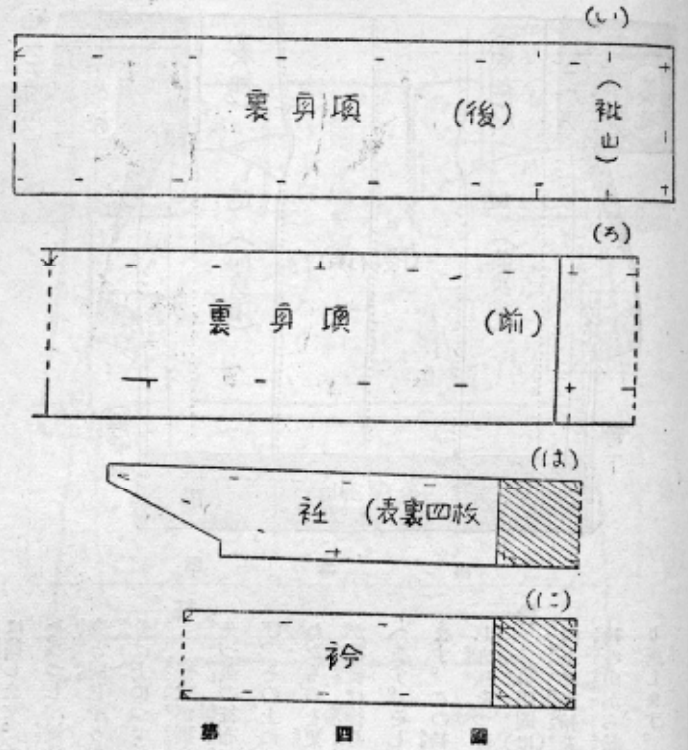


第三圖

表身頃（にのやうに二枚の身頃を中表に着物と同様に揃へて重ね、丈、幅、袖附、背縫の標をします。次に後身を左にはねておいて丈、附、脇縫の標をうつし、それから前幅の標と衽下りの標をつけて衽附の標をします。

裏身頃　表身頃と同様に重ね、身丈は表身丈と同寸に標し、それから下の方は裾祝の二倍を布一杯に取り裾山を定めて祝の長さを計つておきます。

袖附は裏袖の附寸法と同じに標し身幅は表と同じ寸法



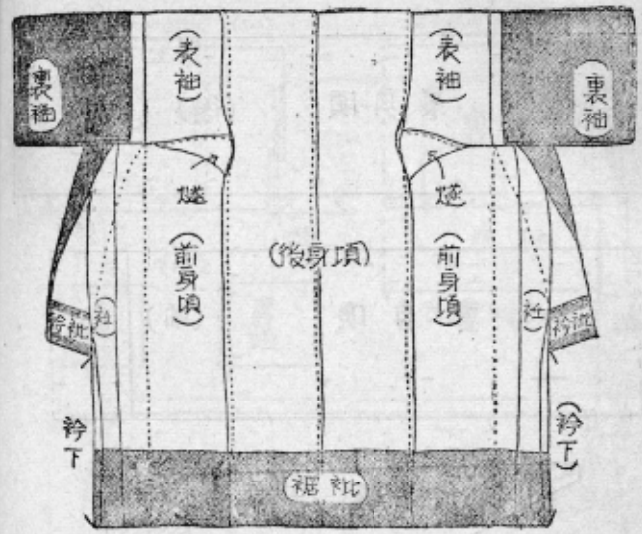
第四圖

うつし、それから前幅の標と衽下りの標をつけて衽附の標をします。

裏身頃　表身頃と同様に重ね、身丈は表身丈と同寸に標し、それから下の方は裾祝の二倍を布一杯に取り裾山を定めて祝の長さを計つておきます。

袖附は裏袖の附寸法と同じに標し身幅は表と同じ寸法

袖下を三つ折に

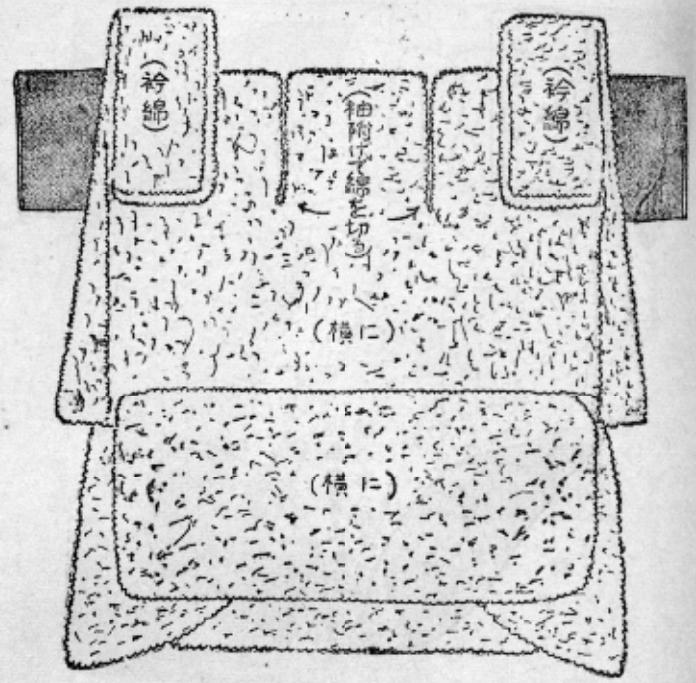


第五圖

に標します。次に後身頃を除けて脇の方の標をうつし、裾は裾山から左の方へ折り重ねて表と同じやうに衽附の標をしまして裾祝の部分は上につゐて自然に斜に標します。

衽　衽丈が裏身頃の衽附寸法に合ふやうに、先づ裏の衽布二枚を中表に重ねて裾を折り曲げ、その上に表衽布二枚を矢張り中表に重ねたものを更に重ねて四枚にして標をしますが裾祝は後身頃、前身頃、衽とも皆寸法を描へます。そして丈、衿下、幅、衿附の標をします。この衿附は一つ身の衿附標のやうに少し丸味をつけますと恰好がよくなります。

衿　第四圖のやうに裏衿を二つに折り、その上に表衿を二つ折にし衿山を揃へて重ね、衿の山から衿丈を計つて衿先から裾の分を折り返します。それから山、幅、及び必要所の



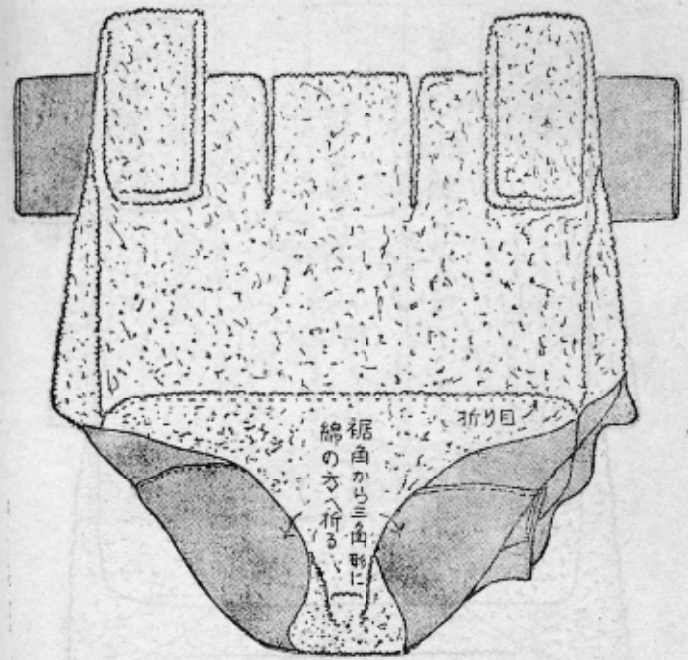
第六圖

標をして標附を終ります。

縫方

袖　最初に表袖の下に襠をつけます。綿物ならば成る可く綿を合せて縫ひ、袖の方へ折つておきます。裏袖は奥袖に襠を同じやうにつけておきます。次に表裏の袖口を合せて縫ひ表袖の方へ折つて隠縫をかけ、今度は袖下を裏袖の方から縫ひ合せ、折は前袖の方へ折つて全部隠縫をかけます。

表身頃　長着と同じやうに背縫、脇縫、衽附をし、次に袖をつけ何れも隠縫をしてお



第七圖

きます。

衿は先に裏衿と表衿の丈を揃へ合せてからつけます。

裏身頃　表と同じやうに背、脇、衽附、袖附の順に縫ひ合せ、何れも表と同じやうに隠し縫をします。

注意

裏袖と裏の裏袖とは綿を入れてから接ぎ合せますから殘しておきます。

かうして表裏全部が縫へましたら裾を合せて隠し縫をかけ、それから裏衿を裏の身頃の衿附に合せてつけ、つゞいて衿下まで縫ひ、折りは表の方に

第八圖

返して矢張り隠し縫をします。

次に衿先の褄の部分だけを表裏縫ひ合せ、他は其のまゝにして置きます。

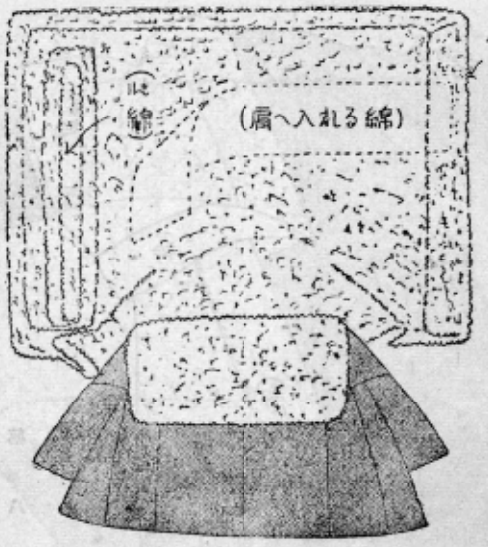
綿の入れ方

先づ第五圖のやうに中表にして裾山からきちつと折つて裏身頃の上に表身頃を重ね、袖附のところまでは鍛のよらぬやうにし、袖は中程までは下側へ折り疊んでおきます。

次に第六圖のやうに綿を縦横交互に重ね、裾口と衿下の側は二五糎位づゝ出して一枚通り入れ、なほ順に重ねて二枚、三枚と入れ、裾及び衿下、衿先の所に芯綿を入れ

て形を整へてから、更にその上に重ねて見ると綿が丸枚位と入りましたら第七圖のやうに兩裾角を綿と一緒に三角に折り、又衿先のあたりの通りで上へ折り返し、布のづれないやうに注意しながら表に返します、そして周圍をよくたゝいて隅々まで綿が落ちつかせましたら直ちに第八圖のやうに衿下のところを一針綴ぢておきます。

（細社の折山から折り返す）

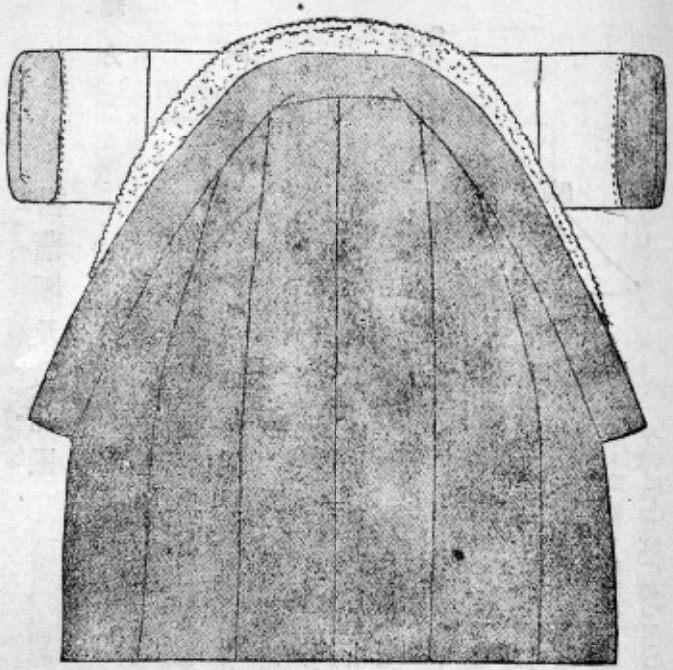


第九圖

裾がすみましたら今度は第九圖のやうに後身頃の裏布と綿を下の方へはねておいて、表身頃の裏を平らにひろげ、袖は口枇のところから折り返して綿を肩から四〇糎位、袖口と袖下側は二〇糎位出して綿を入れます。處の部分は綿のつれないやうに注意して、先きに入れた身頃の綿とを平らに重ね合せます、袖口枇にも裾山と同じやうに袋綿を入れて、つゞいて全體に平均に入れましたら裏身頃を綿の上に重ね、衿肩の中央に切り込みを入れます。

こゝで裏袖と奥袖とを接ぎ合せ、奥袖の方へ折つて、それから袖と前身頃へつゞけて綿を入れます。入れましたら裾口と同じ要領で袖の山と裾を三角に折つて前身の方から手を入れて返します。

次に上前の方から衿を折つて縮けます。



第十圖

縮ぢ方

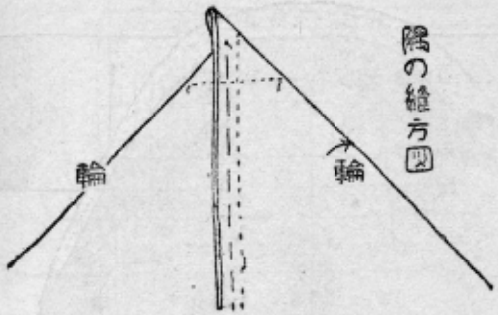
衿を縮け終りましたらすぐ三つ衿の部分へ五ヶ所、つゞいて袵附、襟と順に縮ぢます。

肩當と掛衿

肩當布は左右の端を折り伏せ、肩明を合せ前側と後側は縮けつけ、衿肩明の部分の布は衿に被せたまゝ掛衿をかけます。

掛蒲團及敷蒲團

縫方



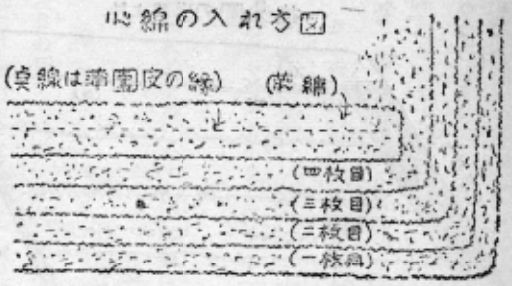
第十一圖

掛蒲團　正しく裁ちました物は標をつける必要はなく布目を揃へて表裏共五布を順に縫ひ合せ（縫代は表裏を比べて狹い方を標準にして一杯に縫ひます）折りは一方に向つて折る時と中央から兩方へ向つて居る時とがありますが多くは片返しにします。折りましたら一糎五粍位の針目で疊〻鞣をかけます、裏も同じやうに縫ひ疊〻鞣をかけます。但し裏布は返し口として中央の縫ひ目を一一五糎位縫ひ殘しておきます。そして疊〻鞣の際この部分は一枚の方を伏せ縫してしておきます。表裏共縫へましたら中表に合せて隅圍を毛抜合せに縫ひ表布の方へ折をつけて全部疊〻鞣をしておきます。

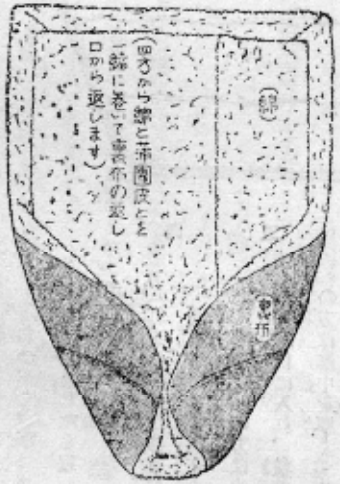
敷蒲團　三枚の布を幅一杯に縫ひ合せますが、裏になる方の眞中で返し口を一一五糎ほどあけますことは掛蒲團と同樣であります。折りも疊〻鞣も掛蒲團と同じやうにいたします、そして中表に丈を二つ折にして綸になつてゐる以外の三方を一杯に縫ひ合せ表裏になる方へ折つて矢張り疊〻鞣をしておきます。尙ほこの敷蒲團は四隅を第十一圖のやうに三角形に折つて細かく半返し縫で一糎五粍ほど縫ふこともあります。

綿の入れ方

掛蒲團、敷蒲團共縫ひ合せたものは、裏を出したまゝ表地の方を上に平らにひろげておきまして、その上に綿を一枚づゝ順に入れます。綿はいつも必ず縱橫交互に入れませんと中で切れる恐れがあります。そして積げます時は布の大きさよりぐるりを二、三〇糎位出して順に重ねまして、それから蒲團皮の大きさだけにぐるりを折つて上に又平らに一枚重ねてから第十三圖のやうに綱を



第十二圖



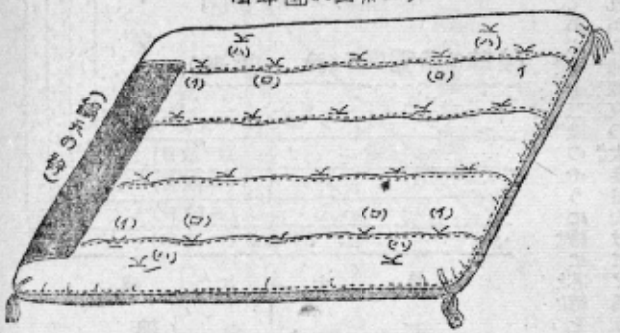
第十三圖

丸めるやうにして裏の返し口から引き返します。返しましたら隅々によく綿の入りますやうに引くたいて綿を落ちつかせ、隅々までゆき届きましたら返し口を綴けます。

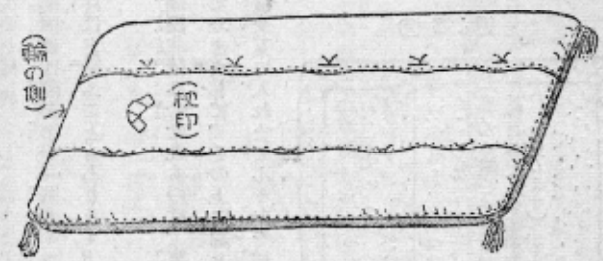
入れ方の要領は敷蒲團も掛蒲團も同じであります。いく分掛蒲團の方はぐるりを厚目に入れ、敷蒲團の方は真中を厚くするやうな心持で入れます。

綴ぢ方

綴ぢ糸にはネリグリ、絹糸、絹小町などいろ〳〵ありますが適當な糸を二本或は四本にして綴ぢます、上等のお蒲團は數個所に



第十四圖　掛蒲團の出來上り



第十五圖　敷蒲團の出來上り

的に澤山の糸を使ふこともあります。

綴ぢ目は各縫目へ五針又は七針を（等分して）並行に綴ぢ、後は四隅を綴ぢます、針目は三種か三種五粍位にいたします。

注意

この綴は白綿や絹綿などを入れました時は前記しました位の針數にしますが、赤綿や打返しの綿を入れました場合はなほこの外に縫ひ目と縫ひ目の中間、つまり布幅の中央にも綴を入れます、但し縫ひ目の綴と平行せぬやうに各中間を針足は一糎位斜に綴ぢます。

紐

最後に紐をかけますが、表側は裏を見て粗く縫ひつけ、裏側で紐けます。

敷布及カバー

夜具の類はすべて仕立直しが容易でありませんから成る可く汚れを防ぐやうにいたさなければなりません、それには敷蒲團には敷布を、掛蒲團には被ひを用ひまして、これ等を屢々洗濯する事によつて清潔を保たせます。用布には洗濯がよくきゝ且つ汚れが目立ち易いキヤラコなど適當であります。

敷布は出來て居る物を用ひますのも宜しいのですが、いつも體の當る所が同じでありますと上下は丈夫であつても中央だけが切れるやうな事がありますから、蒲團全體を包む長さに用意した布を輪に縫つて時々ぐる〳〵

と剪しますと一部分の破れるやうなことがなくて長く使用されます。

又被ひはぐるり表に少しづゝ返る位に裏のやうに縫つて第十六圖のやうに處々釦で留めておきますと洗濯の際取りはづしが容易で重寶であります。

夜具は裏の方に縫な一重物のやうなものを縫つて當てゝおきますと便利であります。

鏡型蒲團

鏡型の蒲團は略して鏡蒲團といひ、又額緣型とも申しまして主に關西地方で用ひます型であります。然し關西に限りません他の地方でも使つて居りまして、裏布が表側へ折り返つて袖が出て居りますから、表布と裏布との色の調和によつてやさしく、又大きくも見えます。

大きさは布地の都合で大きくも小さくも作りますが、表布四布、裏布六布で丁度普通にいふ五布蒲團と同じ大きさになる布團で次のやうな材料が要ります。

材料

表布　並幅　一六二糎丈　四布
裏布　　一三八糎丈　六布
ピロード衿　一五五糎丈　一枚
綿　白綿　一七枚

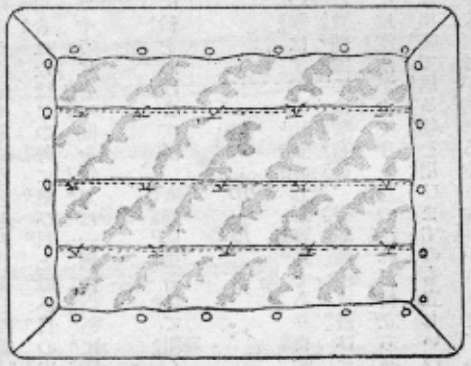
仕立上寸法

丈　約二〇〇糎　幅　約一六〇糎

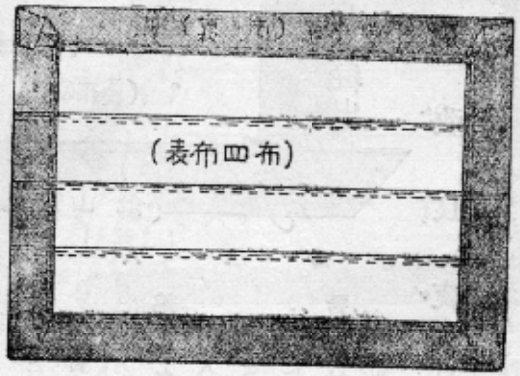
縫方

標附をしませんで、布目を出來るだけ揃へて表布四枚、裏布六枚をそれ〳〵縫ひ合せます、但し裏布は三布づゝ縫ひ合せ最後に眞中を縫合せて、その時中央で返し口を一〇〇糎ほど明けておきます、そして折は一方に向けるか或は眞中から兩側へ向けるかして折り、縫目全部に一糎五粍位の針目で疋鋏をかけます。

かうして表も裏も布の接ぎ合せが出來ましたら第十七圖のやうに表布裏布の周圍を縫ひ合せ、一方を縫ふ毎に疋鋏をかけます。次に四隅を斜に縫合せますが、その前に



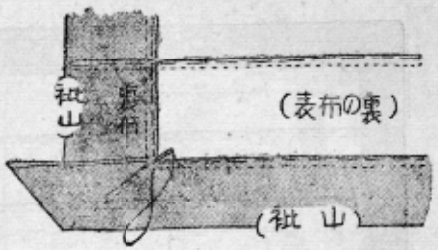
第十六圖　方掛のカバー



第十七圖　方縫の團蒲掛型鏡

裏布を下側にして平らにおいて、袱の寸法を正しくきめ、折山と斜の縫代とを決めます。そして隅の斜を細かく第十八圖のやうに縫ひ、この縫目は剪つて第十七圖のやうに擧げて疊んでも宜し又第十八圖のやうに片返しにすることもあります。

第十八圖



綿の入れ方

綿の入れ方は普通の掛蒲團と全く同じでありますが、絲を幾分厚目に入れました方が出來上つた恰好がよろしいやうです。綿を入れましたら表に返し綿を落ちつかせて返し口を綴け、各縫目に綴を入れます。

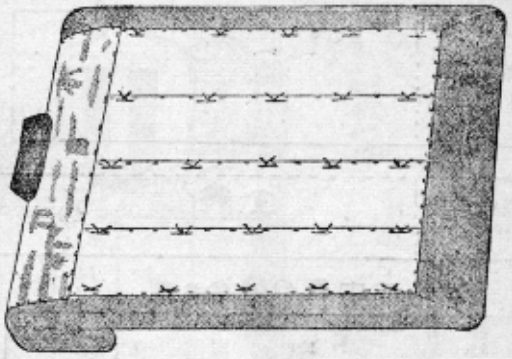
紐の掛け方

掛紐布は表布に少しかゝる位にかけます。

改良夜具

普通の夜具は寢む時肩を包むやうに着られますので暖かに寢まれますが、仕立が面倒である爲め儉約がられます。この改良夜具はそれを改良して大體は蒲團の形にしてたゞ前を五〇糎か六〇糎折り返し、袢肩明をあけて袢を夜着風につけたものでありますから、着具合は夜着のやうに暖かで仕立は蒲團のやうに容易で且つ材料も夜着より少なくて出來ます。

用布及綿



第十九圖

表地	並幅	八三二糎（二〇八糎四布）
裏地	同	一三五㊀糎（二七〇糎五布）
肩當布	同	一六六糎
袢布	半幅	九〇糎
綿		白綿 十二枚位

裁方

表布　總用布を四つに切り、中二枚だけは一方の端から五七糎取つたところに袢肩明を一一糎切ります。

裏用布は全體を五つに等分して眞中になる一枚の幅を二つに折つて矢張り端から五七糎入つた所の輪の方に一一糎の袢肩明をきります。

縫方

第二十圖のやうに表布を縫代一糎に四布接ぎ合せ、大幅の時は二布を接ぎ、折は中央を背縫と見なして左右兩側の方へ返して一糎五粍位の針目で隱縫をかけます。

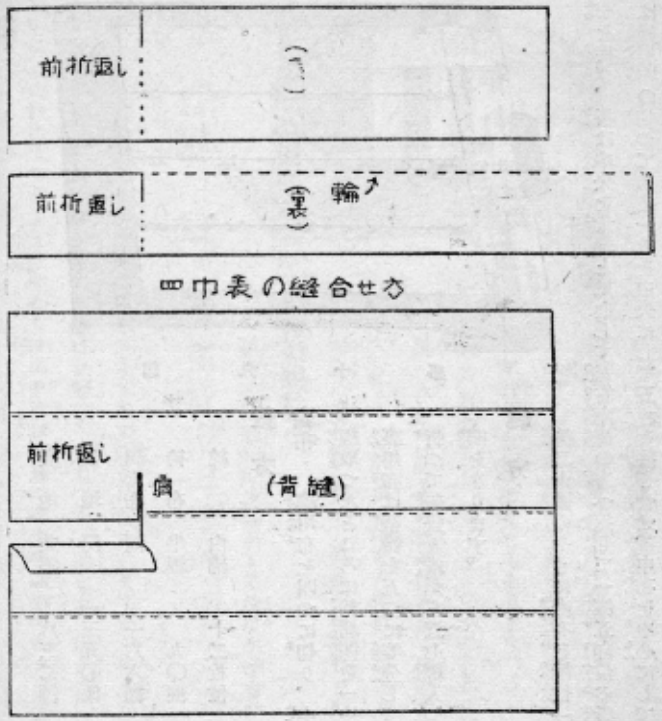
裏布は袢肩明の切つてある一枚を中央にして五枚を接ぎ合せ、中布を中心にしてその兩側端の方へ片返しに折

り矢張り襟襞をかけます。

次に裏布表布を中表に合せ、左右兩端の前折り返りの布丈を揃へて表布一杯に縫ひ合せ（裏布丈の長い分は裾紙になります）表布側に折つて襟襞をかけます。

それから全體を平らにおいて左右の端の袖と衿肩明とをよく揃へ兩方の前折り返り分の裁目の端を縫ひ合せ表布の方に折

裁方



第二十圖

りします。

最後に裾を合せます。こゝは鏡型蒲團の縫ひ方と同じ仕方で裏表の幅の中央を合せて縫ひ、表布の方へ返して襟襞をかけます、そして隅を鏡型に縫ひます。

衿附の部分だけを返し口として縫ひ殘しておきます。

綿の入れ方

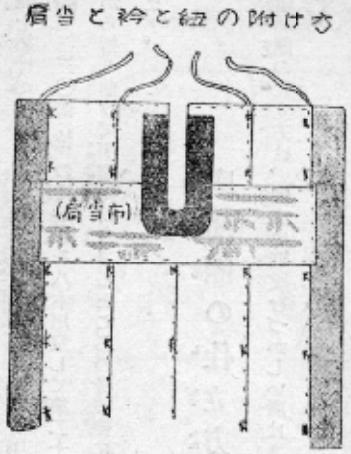
裏返しのまゝ表布を上にしておき、綿を縦横交互に重ねて掛蒲團の綿の入れ方の要領で入れます、そして四隅を巻くやうにして前側の返し口から表へ返します、返したらよくたゝいて綿を一面におちつかせ、返し口の兩側（衿肩明の部分だけ殘して）を裏表くけ合せます。

それから三つ衿の部には、着物の三つ衿へ衿芯を入れる仕方で衿肩明の足りない部分へ裏表引返しにつけ、芯綿を平らに入れて裏側で紐でつけます。

綴ぢ方

三つ衿をつけましたらすぐ三つ衿の部分を五ケ所綴ぢ後は出來上り圖のやうに全體を綴ぢます。

肩當と掛紐



第一十二圖

肩當布の衿肩明を切つて兩端を折り伏せ縫にしておきます。それを第二十一圖のやうに表から當てゝ前側と後側を紐けつけます。そして肩當布の三つ衿は身頃の三つ衿に重なつたまゝで衿をかけます。

紐附　三〇糎位の細い紐を八本用意して第二十一圖のやうに兩方の前側の端に二本づゝと、この前身側を肩から折り曲げて丁度紐が合さるところの身頃側に四本つけてこれを結び合せますと丁度袖のやうな格好になります。

座蒲團の仕立方

座蒲團の仕立方は、縫方に別段むづかしい所はありません、たゞ綿の入れ方一つで上手に仕上るものであります。

材料

地質は夜具の類に用ひます布地と殆んど同じでありますが、座蒲團用の布地は中幅物（五七糎位）大幅物（六八糎位）等が多く使はれます。

この座蒲團は大抵五枚又は十枚を一組として仕立まして綿は一枚につき白綿を凡次の割合位に入れます。

中判（五八糎幅位）	三枚
大判（六〇糎幅位）	四枚半
別大判（六八糎幅位）	六枚——八枚

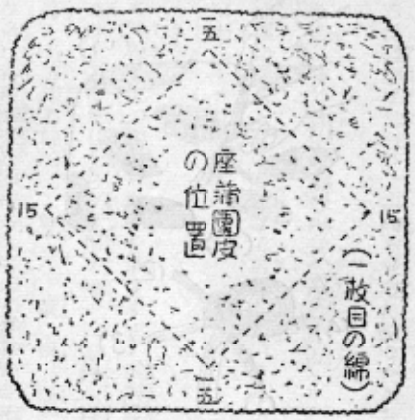
裁方

組の物を作るには用布を枚數丈けに等分し丈の方が三、四糎長くなる位に裁ちますと出來上りの恰好が宜いのであります。然し模樣の定つた物、例へば定紋入などの場合は模樣が中心になる樣に裁たなければなりません。

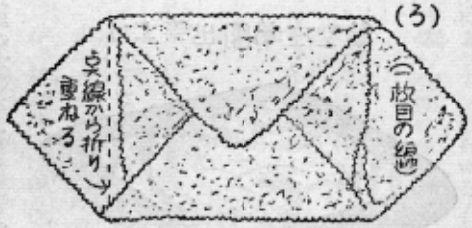
縫方

まづ中表に布を二つに折り、一方の耳の方で返し口を四〇糎ほどあけて縫ひ、表皮の方に折つて一糎五粍位の針目で醫縫をかけます。

（い）方れ入の綿の圖蒲座



（ろ）



第二十二圖

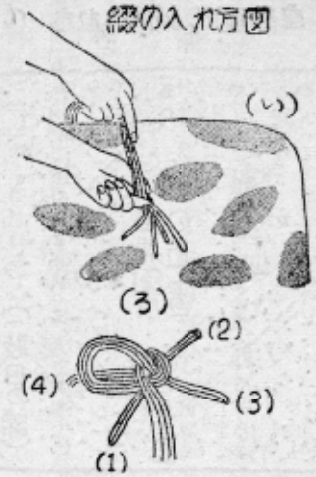
綿の入れ方

それから四隅を三角に疊んで（兩側の縫目をよく合せて摘む）一糎五粍ほど縫ひます。

表皮の布裏を上にして擴げ、まづ一枚目は第二十二圖(い)のやうに座蒲團皮より四隅で一五糎位づゝ出る大きさとして、綿を斜に擴げます。次からは順に三、四糎づゝ小さくして縦横交互に入れてしまいます。それから最初の一枚だけを殘して二枚目の綿から(ろ)圖のやうに表皮の大きさより大きくならないやうに上下左右を順に疊んで、隅や緣に注意して最後に又殘した一枚でくるんでしまいます。丁度風呂しきに包むやうな具合にします。

かうしてすつかり出來ましたら返し口に注意して綿を二つ折にして表へ返します。そして綿を隅々までよく入れましたら返し口を細かく縮け合せます。

綴ぢ方



第二十三圖　綿の入れ方

第二十四圖　座蒲團型鏡上り出來

綴は出來上り第二十三圖のやうに中央に一ケ所と四隅にいたします、この綴糸は綿の厚味よりもきゆうと締める位にしませんと、使用してゐる間に綴糸が弛んで見苦しくなります。

以上の他座蒲團は用布の都合や好み、或は用ひます場所によつて、形をいろ〳〵に作ります、例へば第二十四圖のやうに鏡型にしたり、四隅を丸型に縫つたりします。然し全體の要領としては變りません。

折り疊み式藁蒲團

この藁蒲團の中に入れる藁はよく乾燥した、きれいたものを、少し軟かくなる程度に木槌で打つて用ひ、目方は凡そ二十二キロ位入れます。

用布

木綿物で地厚のしつかりした物を選びます、雲斎織など最も宜しく生天竺などをも用ひます。

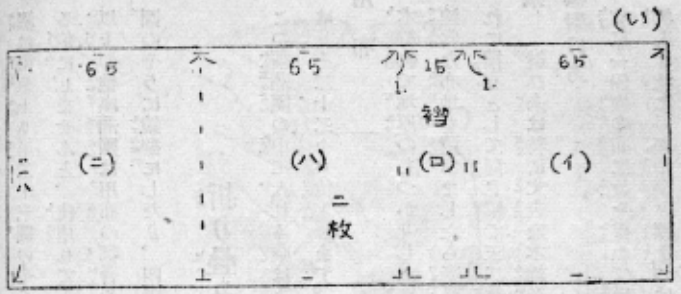
適當な布地を選びましたら表裏用布幅一二〇糎(幅の足りない時は適當に接ぎ合せます)丈二一四糎二枚、それに補布として同じ幅で三二糎二枚、横の補、幅一七糎、丈六七糎のもの六枚要ります。

糸

縫ひ糸は特に丈夫な木綿糸を選び、綴糸には麻糸を用ひ、綴針は二〇糎位の長さのものを用ひます。

標附け方

丈二一四糎の布二枚を重ねて周圍の縫ひ代を一糎と標し、それより第二十五圖(い)のやうに(イ)の長さを六五糎に標し、次に一糎の摘み標をつけて(ロ)の襠を一五糎取り、又一糎の摘みをとつて殘りの一三〇糎の中央に折り目



第二十五圖

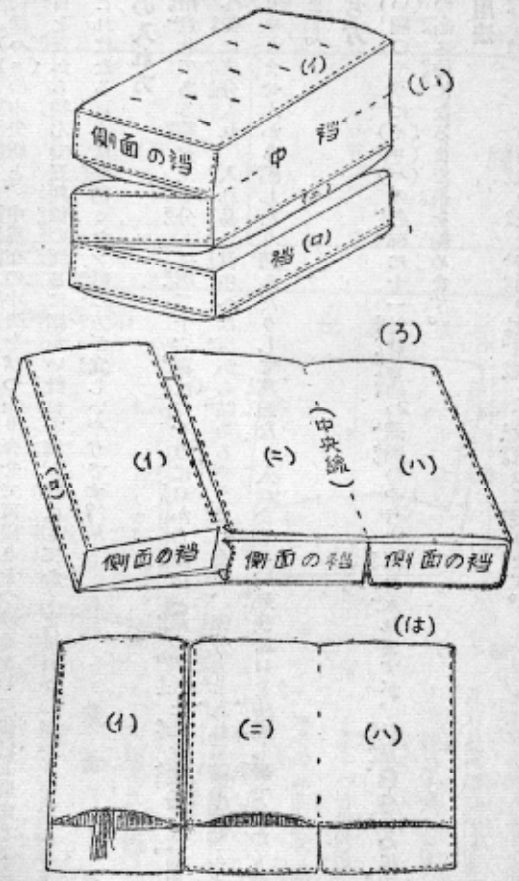
の襠をつけて(ハ)(ニ)とします。

中襠　二枚の襠布を重ねて幅は一一八糎に標し丈を三二糎にして中央へ折り目の標をつけておきます。

側襠　六枚の側面襠を正しく重ねて、幅を一五糎、丈を六五糎として標します。

縫方

第二十五圖(い)のイロハニ)のついてある二枚の浦團皮を別々にして、ロ襠の兩側一糎の摘みを表から標通りに摘んで細かい針目で半返し縫にします。折は皆襠の方へ片返しに折り、次に第二十六圖(ろ)のやうに一枚は上側の左にイを出しロを厚味としハニを下側へ廻し他の一枚は反對にニハを上側としロを厚味にしてイを下側へ廻します。そして側面の襠布を片側に三枚づゝ圖のやうに辻ひ合せます。



第二十六圖

この襠をつけるには角を正確に接いで、折はどちらへもつけません。次に中襠布の一一八糎の側を上側も下側も同じやうに二枚の(イ)と(ニ)の間へ第二十六圖(い)のやうに接いで、兩端三二糎の方を側面の襠二枚分へつゞけて接ぎ合せます。

折り疊み式蒲團

かうして兩側面とも接ぎ合せますが、(は)圖のやうに上面の一方で檜の兩端六、七糎位づゝ縫ひ合せて中央で藥を入れる口を明けておきます。

尙ほ(ハニ)の中央線と、中檜布の中央をぴつたり合せて區限りをつけるために半返し縫にしておき、又全體の縫目を表から摘んで五粍位の深さに細かい針目で摘み縫にしておくと縫目がしつかりいたします。

これはなる可くは全部ミシン縫の方が宜しいやうです。

藥の入れ方

用意してある藥を三等分して第二十六圖(はのやうに口から綴に(藥の根元と先を交互に)詰め込み、口の左右へ先に充分入れ、入れ易い眞中へは後から詰めるやうにします、充分力を入れて詰めませんと全部の藥が這入りきりませんから壓したり踏んだりして萬遍なく入れまして、最後に口を半返し縫で細かく縫ひ合せてしまひます。

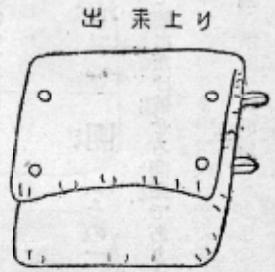
綴ぢ方

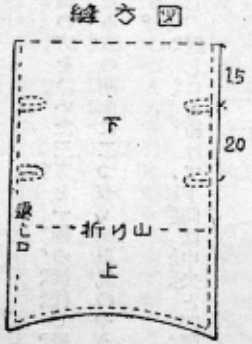
(い)圖のやうに(イロハ)の各部に十一針位普通の蒲團のやうに綴を入れますが、針足のところに力布をあてゝ、褞の高さ位になるまで糸を締めます。

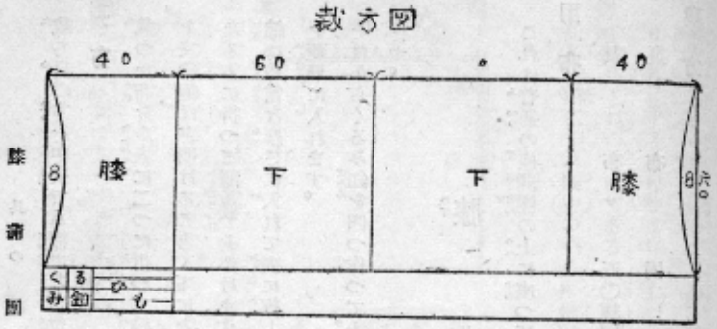
使用法

使ふ時にはこの蒲團の上に普通の敷蒲團を一枚重ねて寢みます。

第二十七圖







膝蒲團（その一）

此の膝蒲團は普通の座蒲團だけで膝のあたりに寒さを感ずる時や、洋裝の婦人を日本座敷へ通して靴下一つで脚の冷える時などに用ひるのに相應しいものであります。

用布

普通座蒲團に使ひます地質なら何でも適當であります。

幅　六〇糎　丈　二〇〇糎

裁方

第二十七圖のやうに大幅から六〇糎幅だけを取つて殘り布から縫と釦布とを取ります。

六〇糎幅の布は丈を二つに折つて

裁ち目の方を中央で八糎になる位の程度に丸く刳ります。

縫方

裁つた布を中表に二つに折つて輪の方を除いた三方を一糎の縫代で縫ひますが、兩側どちらかの一方で返し口を三〇糎ほど明けることゝ下になる方の兩側に二つづゝ紐を乳のやうにつけることであります。折りは上側になる方に折つて隱襞をかけます。

綿は適當な厚さに入れて表に返し、返し口を綴けて下側は中央と四隅に綴ぢを入れ、上側にも中央にかさり綴を菱形に入れます。

それからくるみ釦を四つ作つて上側の左右兩側に二つづゝつけて、前に下側につけた紐をかけて使ふのであります。

膝蒲團（その二）

これは普通の座蒲團の上に座つて膝にだけ被せる蒲團であります。

用布

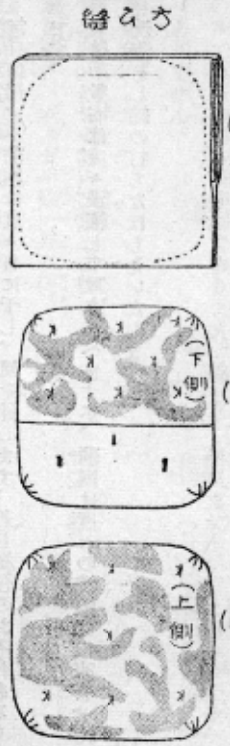
表布　五〇糎幅　九〇糎

裏布　同　同

縫方

表裏の布を中表に合せて兩端の裁ち目を合せ（裏布の方を一糎づゝ兩端へ出します）て縫ひ、表の方に折りとつけ隱襞をかけます。但し一方は返し口として四〇糎ほどあけておきます。

次に返し口のあけてある一方の端の兩角を五糎位丸味をつけて端から一八糎縫ひました所で一寸針を返して止め、第二十八圖(い)のやうに他の一方の端を中に狹むやうに持つて來てこゝから四枚一緒に縫ひます。輪の方の端から一〇糎手前に來ましたら一〇糎の丸、味をつけてこゝから表裏を別々に縫ひます。同じやうに片方も縫ひます。



第二十八圖

綿の入れ方

綿は先きに大體出來上る寸法より少しづゝ大き目に形を作つておき、丈の短い時の下になる方、つまり縫ふ時中に狹んだ部分に先きに入れて、それから長い方に入れて返し口から表に返し、綿をおちつかせて返し口を細かに綴けます。

綴ぢ方

綿がおちつきましたらろ)(は圖のやうに上も下も綴ぢをします。

夜具の手入と保存法

夜具を藏めるには必ず濕氣のない所へなる可く積み重ねないやうに藏め、時々風通しの宜いところへ出して風を通します。押入に藏める時そのまゝ入れますと戸を閉めて置きましても長い間には埃がつきますから、大きな風呂敷に包んで入れるか或は上から風呂敷を被せておきます。

毎日使用する蒲團は度々日に干し、風を通します、若し褪色のおそれあるものは布を上に被せて干すと宜しいです。

上被や敷布は度々洗濯して取りかへますが、蒲團は度々の洗濯は出來ませんけれども、二年に一回位は皮の洗濯をし綿の打ちなほしをいたします。

二二、赤ちやん物の部

肌襦袢（その一）

嬰兒の着物、殊に肌につく物は度々お洗濯をしなければなりませんので、洗濯に自由な冬でも暖かい白の綿ネルで作るのが一番便利であります。綿を多く用ひませんが、上からおくるみで包みますから決して寒いことはありません。

用布

表用布　白綿ネル大幅五二糎

裏用布　ガーゼ小幅一五六糎

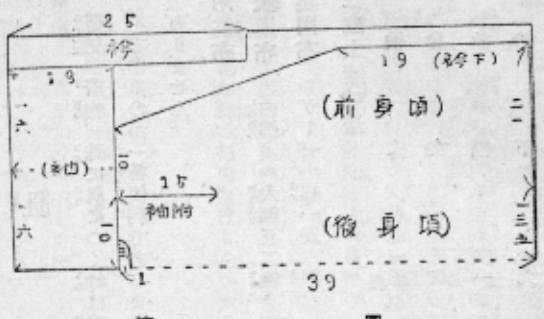
仕立上げ寸法

袖	丈	一五糎	袖幅　一三糎
身	丈	三八	後幅　一二・五
前	幅	一二	衿　三
衿	下	一九	衽　いつぱい

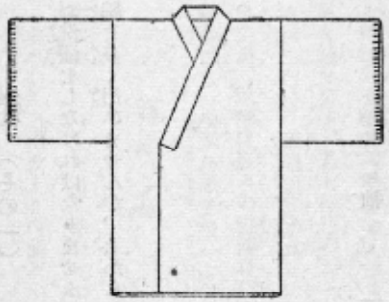
裁方

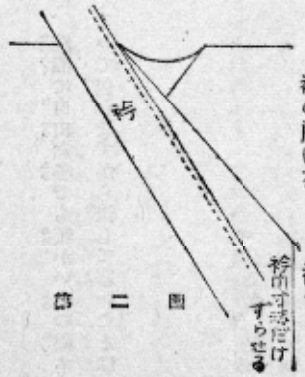
肌襦袢

表用布を縦二つ折にして第一圖のやうに身頃と袖をとります。袖と身頃の殘り布から衿をとります。衿の總丈は四八糎を要しますから衿山で接ぎます。裏用布は小幅ものですから、背縫をいたします。從つて背縫代を八粍程とつておきます。その他は表身頃と同寸にいたします。袖には裏はつけません。



第一圖





衿の附け方

第二圖

縫方

袖　袖口の裁目に縁かがりをし、袖下は眞直ぐに八粍位の縫代で小針に縫ひ、縫代をきつゝておきます。

身頃　裏身頃は背縫をし、表裏ともに兩肩を接ぎ合せ、表裏を中表に合せて衿下から裾を續けて縫ひ、褄先をきちんと折つて表に返します。

次に袖をつけ、折は身頃の方に折つて、その縫目に裏身頃を紐けつけて縫目をかくします。

衿附　衿は山で接ぎ合せ衿下○標から前身の方へ出來上り衿幅だけに標をつけ、そこから衿肩へ斜めに衿附の標をつけ、衿を縫ひつけます。（表、裏の身頃と衿と三枚一所に）衿先きを縫つて、裏身頃へ紐けつけます。

肌襦袢（その二）

材料　白メンネル或はガーゼ、又は糊氣のない綿木綿等並幅一六〇糎。

裁方

身丈を裁ち切り三八糎にして殘りから衿と紐を七糎幅に二本取り、その殘りから三つ衿布に四糎だけ取つて後を二つに切つて袖にします。

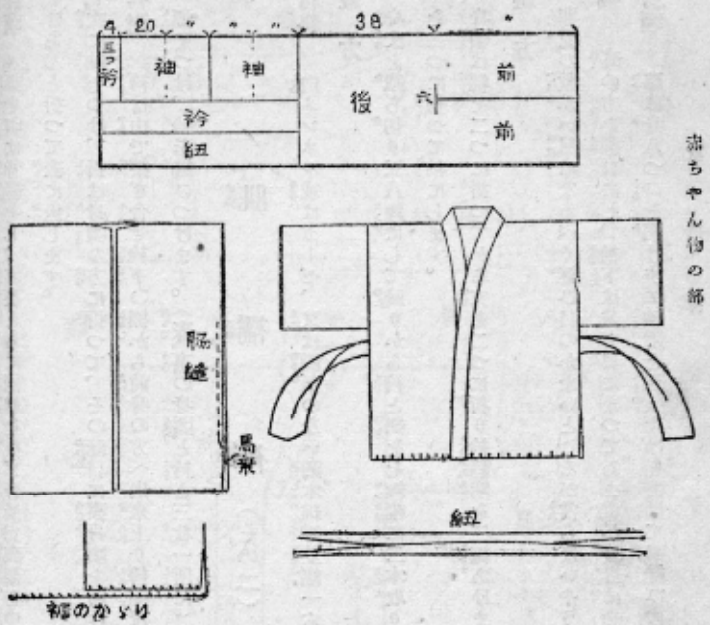
身頃は幅を二つに折つてから丈を二つに折り衿肩明を三糎あけます。

縫方

嬰兒の軟かい肌になるべく縫ひ目のかたいところが當らないやうに注意します。

袖　耳の方を袖口にし、袖下は裁ち目になつてゐますが袋縫にせず端はまつり縫にしておきます。

身頃　脇は身八つ口を明けずに袖附と馬乘だけをあけて、縫ひ代は附の下では一糎にしますが、馬乘の所は幅



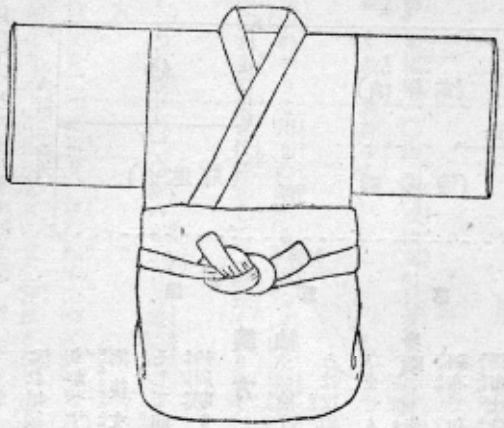
第三圖

一杯になるやうに斜に縫つて馬乗の耳紐の要のないやうにします。（袖は三つ折縫の代りに裁ち目のまゝでかゞり縫をしておきます）衿は山で接いで下前の裾からつけますが、凡そ丈の三分の二位までは一糎の縫ひ代につけ、そこから上で出來上り圖のやうにふくらみをつけて衿肩明の切り込まで斜につけ、三つ衿芯を入れて出來上り幅二糎五粍に紐けあげます。

袖附　身八つ口も振り八つ口も明けないで全部普通につけます。

紐附　丈の中程で幅を突き合せに折つてそのまゝを後身頃の袖附の下のところにあてゝ中央一二、三糎位をとぢつけておき、他はそのまゝ縫はずにおきます。

長襦袢



第四圖　出來上り圖

長襦袢

用布

白繻子大幅九二糎、衿用布晒木綿八糎幅六〇糎（衿布は身頃のつゞきから横布に八糎幅に取つても宜しいのです）三糎幅テープ一六〇糎、後紐布及び斜布少々。

仕方上り寸法

袖丈	一七糎	袖口	一七糎
袖幅	二〇	袖附	いつぱい
身丈	五四	後身頃の前のかへり	三六
前幅	二二	後幅	一五
衿下	三八	衿幅	三
裾	いつぱい		

裁方

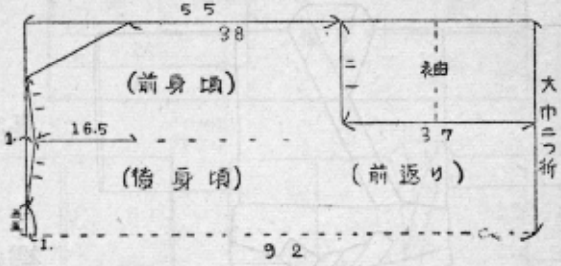
用布を縦に二つ折にして輪を手前にして、第五圖のやうに裁ちます。

これは後身頃を長く伸しておいて、おむつを包むために裾から折りかへすことの出來るやうにいたしますから、前身頃の丈より三七糎後丈を伸しておきます。

そして前身頃のかき落しから袖をとります。

衿肩明を一糎くり、肩で一糎づゝ前後とも下げておきます。

第五圖　裁ち方圖



縫ひ方

袖　袖は布の耳を口としますから綴けません。そして、普通の着物とは反對に、輪の方を袖下とし、裁目の方を肩にしますから袖は縫ひません。

身頃　先づ袖を據げたまゝ裁目の方を身頃の袖附明につけ、縫代を斜布で包み、折は袖に返してまつり付けます。

斜布は身頃の方へ一所に重ねて縫ひますと簡單であります。

次に袖山から肩山を縫合せます、やはり斜布を前側にあてゝ縫ひ、折を後に返して裏でまつります。

衿下は布の耳ですからそのまゝとして、肌襦袢と同樣に衿を附けます。

前身頃の裾から後身頃の裁目全部にテープで見返しをつけます。最後に後身頃へ紐をつけて仕上げといたします。

綿入胴着（その一）

材料

黄木綿　並幅四一〇糎（無双仕立にしますから裏表つゞきにします）
青梅綿　二枚、眞綿少し。

裁方

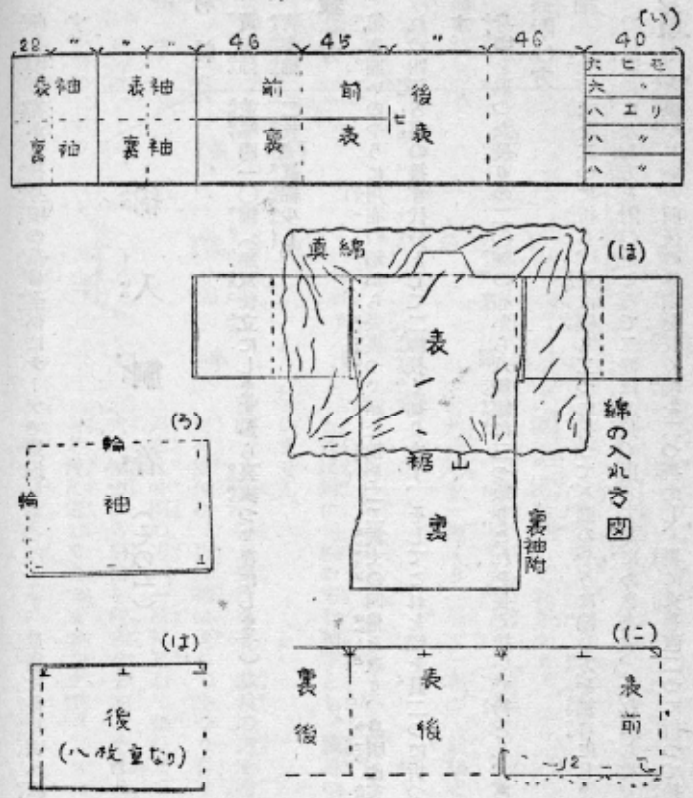
第六圖（いのやうに用布の輪から表裏つゞいた袖を二二糎丈の四倍を取り、身頃は丈を四五糎にしますから、それの四倍と裏の接ぎ代分として二糎長く切ります、そしてこれを幅を眞二つに折つて衿肩明を三糎五毛だけ切ります。

身頃を取つた殘りの二〇糎の布から八糎幅に三つ取りこれを長く接いで衿とし、あとの二本は紐布にします。

標附け方

袖　先づ丈を二つに折り、更に幅も二つに折つてろ圖のやうに輪の方を袖口にしますから向側におき、山の方では表袖になる方を附のところで二粍ほど長く出して左におきます、それから丈、幅の標を一枚につけます。

身頃　表裏つゞいた前後の身頃を長く幅を二つ折にし、更に丈を直二つに折つて衿肩明を三糎五毛だけ切り込



第六圖

みます。次に裏身頃の肩で接ぎ合せる接ぎ代を一糎取つて更に丈を二つに折つては)圖のやうに重ねて揃へます。

かうして八枚重ねたまゝで袖附、後幅、山の標をつけ次に肩接ぎの標をつけます。

それからに)圖のやうに一番下に重なつてゐる裏後身頃と一番上になつてゐる表後身頃を左に除けて前身頃の標にうつります。

衿附の標は裾で一糎にし丈を三分して下から三分の二の邊で縫ひ代を二糎とし、その間を斜に標します、衿肩明から丈の三分の一のところまでの斜の間で一糎ほどのふくらみを持たせてつけます。

縫方

袖　表裏つゞいたまゝ袖下を縫ひ、内袖の方へ折をつけて鏝をかけておきます。

身頃　まづ裏身頃の肩山を接ぎ合せ縫ひ目は割つておきます。それから表裏共衿山から裾二つに折つて脇を縫ひ合せ矢張り縫ひ目には鏝をかけておきます。

袖附　表袖だけを附け裏袖は綿を入れてから綴けつけます、先づ袖下の四つ留をしつかりして針目を細かく縫ひ上げ縫ひ目は割つておきます。

衿　衿布は三枚を長く接ぎ合せ、表身頃だけにつけます。

綿の入れ方

(ほ)圖のやうに後身頃の裏側を上に、袖は左右にひろげて平らにおき、表身頃の後から先きに肩と脇へ一三、四糎位出るやうに眞綿をひき、その上へ青梅綿を一枚通り入れます、この時は袖口や裾へも一〇糎位餘分に出します。そしてその上へもう一枚重ねますが、二枚目は少しぐるりを控へて小さくします。その上に眞綿をひき、それから裾山の折り目に尺度をあてゝ裏身頃を綿の上へ、つまり表身頃の上へ重ねます、すると裏の前身頃が上に出ることになります、同時に裏袖も日明から折つて表袖の上へ折り返し、それから袖下の留へ斜に綿

を切り込み、後身頃からつゞきの綿をこの上に引きのばし、眞綿を引いてから後身と同じ厚さに左右の前身頃と袖に綿を入れます。足りないところは別の綿を足して平らに入れ眞綿を引いて表の前身頃をかへします。全部綿が入りましたら輕くたゝいて綿をよく落ちつかせまづ袖口、裾口にもよく綿を合せて假綴をしておき次に衿附をも綴ぢて衿先を縫ひ、衿にも輕く綿を入れて衿幅二種五粍上り位に細かに綿け上げます。裏褙の附は袖下をしつかり留めて細かく綿けます。

經附　二本の紐布を割り接ぎにして幅一杯に縫つて、背の中央で褙下の高さに當て、中央一三種位を綴ぢておきます。

綿入胴着（その二）

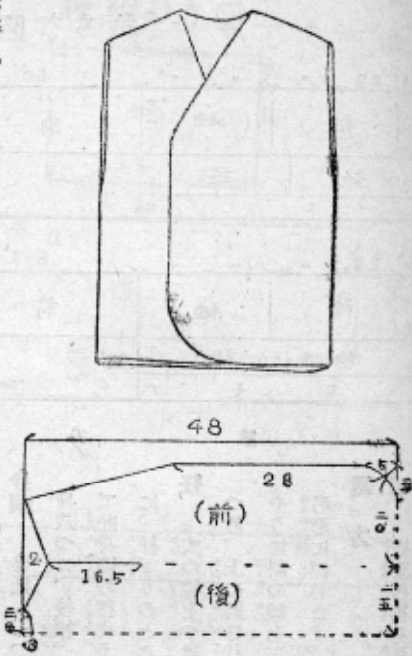
用布

白新モス大幅　一〇〇種
青梅綿　一枚

仕立上り寸法

身丈　四八種
前幅　一九
後幅　二五種

裁方



圖七第

用布を縦二つ折とし、それを横に二つ折として、圖のやうに輪を手前と右とに置き裁切り身丈を四八種とし、肩の切下げは二種、裾先きは五種の丸味として、第七圖の通りに裁ち切ります。

縫方

表裏の兩肩を別々に縫ひ、表裏の脇明を縫ひ、褄先の丸味から衿下を縫つて、綿を入れ衿を綴けて仕上りといたします。

綿入産着

用布

表用布　麻の葉形新モス或は無地木綿　並幅　二二五種。
裏用布　表用布とうつりのよい色無地。

裁ち方図

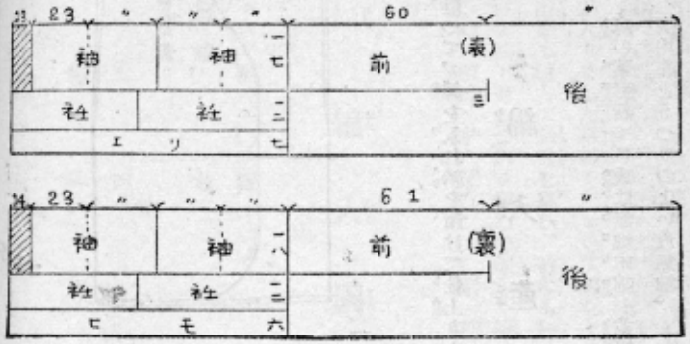


図　八

裁方

第八圖のやうに表裏とも同じに裁ち方でありますが、たゞ裏用布は衽の分を長くすることゝ、裏衿が要りませんから衿になる分を紐布にいたします。

標附け方

袖　幅も丈も一杯にして襠附は一三糎五粍にします。

身頃　普通の一つ身と同じやうに揃へて重ね、丈、袖附、身八つ口、後幅、山の標をつけてから、後身頃を左に除けて前身頃の標にうつります、衽下りをつけ、幅は裾で一杯に、衽下りのところで二糎として斜の標をつけます。

衽　丈の標をつけ、幅は裾で一杯にし、合褄は裾より四粍つめ、上の縫ひ代は二糎にして斜の標をつけ、衿附は圖のやうに斜の線を三分して八粍――一糎とふくらみをつけて弓形に標します。

縫方

袖　表裏の袖を各別々に縫つて裏袖口には含み綿をして綴ちておきます。次に振八つ口を裏表合せて縫ひます。

身頃　表も裏もそれ〳〵脇、衽附を縫つて表身頃にだけ衿をつけます。それから裾を合せて身八つ口を縫ひ合せてから裾をつけます。

綿の入れ方

まづ綿を入れる前に身八つ口の縫ひ代の裏側へ薄く含み綿をして裏の縫ひ糸でおさへておき、全體を裏返して前を合せ、その上に袖を重ね、裏身頃はくる〳〵と巻いて表の後身頃の布裏を上にして綿を入れます。調着と同じ要領で襟綿、木綿綿、眞綿の順に入れます、裾は裾の分に七、八糎幅の綿を入れて裾口か

標附け方図

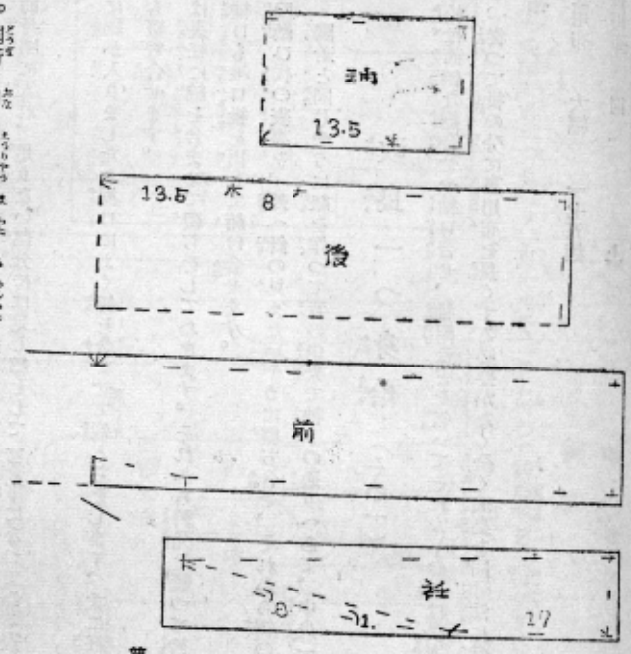


図　九

ら裏身頃を折り返して綿の上に重ねます。さうしますと裏の前身頃が上になりますから後からつぎの綿をのばし前身頃に入れ、足りない部分には足し綿をして一番下になつてゐる表前身頃を返して綿をすつかりくるみます。

全體に綿が入りましたら裾口によく綿を含ませて假とぢをします、次に衽附の縫ひ目を裏から綴ぢつぶいて衿附をも綴ぢ合せます。

衿下は裏衽に綿を含ませて綴ぢをしておきます。それから衿先を縫つて衿を二糎五耗幅に細かく紳上げます。

次に袖口も端口衩を出して紳け合せます。

綴　脇縫ひ代の表裏を、外へ針の見えないやうに綴ぢ合せ、それから裾の衩綴をいたします。

紐附　胴着と同じやうに紐を作つて背の中央で袖下の通りへあて、中央一三糎ほどをかゞつておきます。

改良一つ身袷（その一）

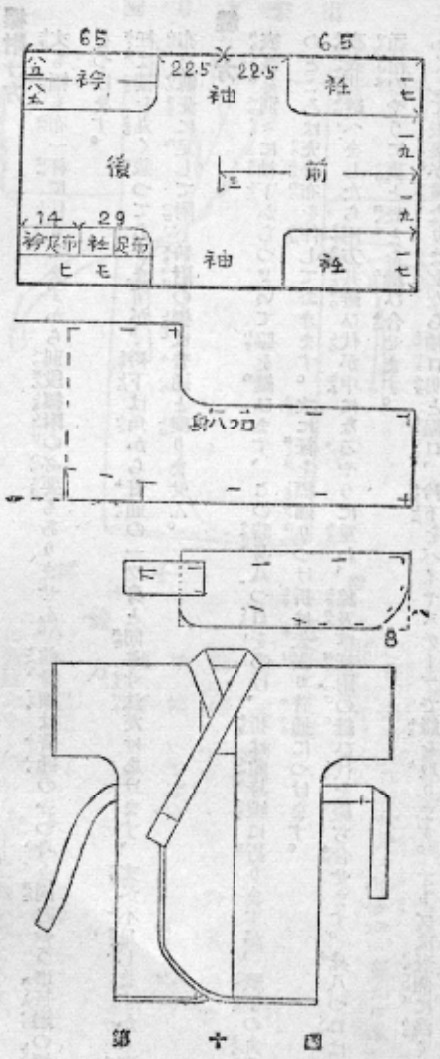
この袷は面倒な裾合せや袖口合せ、袖附などを省いてそれ〳〵の口は裏表を揃へてテープで縁取りをして作ります、從つて裾の分に裏用布を長くする必要がなく全く表裏を同寸法に裁ち切ります。

用布

表用布　大幅　一七五糎
裏用布　同　上

裁方

表用布の幅を員二つに折り、更に丈を二つに折つて衿肩明を三糎切り込み、次に身幅を一九糎に標し、袖丈を二二糎五耗に標してこの二つの標の出會ふところ、つまり腋下は二糎位の丸味をつけて脇を裁ち落します。この裁ち落した脇の布の二枚を衽に、一枚を衿に、殘りの一枚は衽と衿の足し布とします。なほその殘りを紐



第十圖

布に使ひます。それから衽の裾は八糎の丸みに裁ち切ります。裏用布も全く同じでありますが、紐布だけは要りません。

標附け方

丈も幅も布一杯に仕立てますから別段標附の必要もありません。前身頃は普通の一つ身と同じやうに衽附の標をつけます。

衽は褄を丸く裁つてありますが、衿下は角から普通の一つ身と同じ寸法だけあけます、丈が不足しますから別布を襯先に足して附、衿附の標は普通と變りません。

縫方

表裏を別々に袖下からつゞいて脇を縫ひます、この時身八つ口をあけ、折は前身頃に折りますが、脇下の丸味のところは充分布を伸しておきます。次に衽を標通りつけ折は矢張り普通につけます。

裏表共縫へましたら兩方共縫ひ代が中になるやうに重ね、脇及び衽附の縫ひ代を綴ち合せます。身八つ口は普通裁のやうに裏と表とを縫ひ合せます。

かくして表裏が重なりましたら袖口明と裾口、衿下をバイヤステープで緣を取ります。テープは表側に淺く縫ひ合せ、裏側でまつり綴にしておきます。

ぐるりが緣取れましたら衿をつけます、衿は普通の袷と全く同じで衿幅は三糎上りに綴けつけます。

紐附　嬰兒には後紐にしますが少し大きくなりましたら前紐につけかへます。

改良一つ身袷（その二）

用布

白綿ネル大幅一一七糎、七糎幅の紐布一五〇糎、緣布及び折伏用々布少々、緣かゞり用刺繍糸少々。

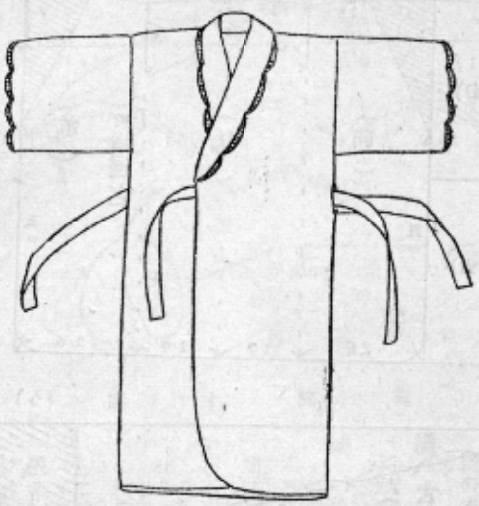
仕立上寸法

身丈	用布いつぱい	後幅	三四糎
前幅	二六糎	衿下	四二
袖幅	いつぱい	袖丈	一八
袖附	一八		

裁方

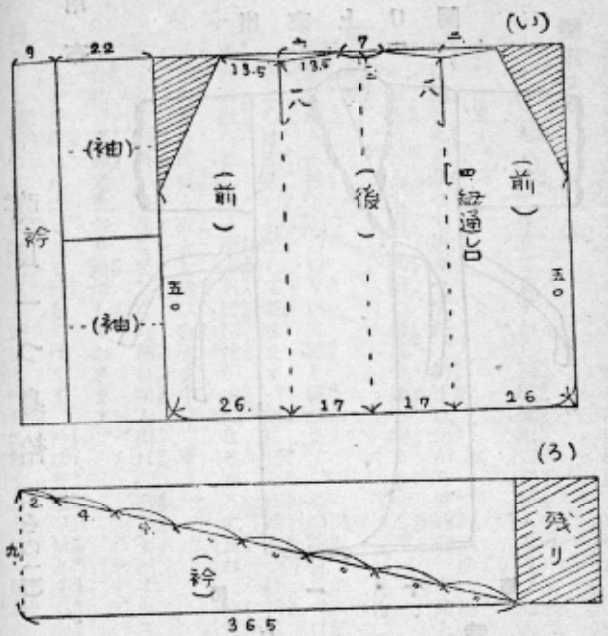
身頃は横布で作りますから大幅の用布を横に廣げたまゝ端から第十二圖（いのやうに、衿、袖、身頃と取つてゆきます。

衿　九糎幅にとります。これを（ろ）圖のやうに、端から三六糎五糎を計つて輪とし、左の上と、右の下とを斜線



出來上り圖　第十一圖

でつなぎ、この線を四糎位ゾヽに割つて適當の丸味の曲線をつけ、縁かゞりをしてその曲線の通りに裁切ります。



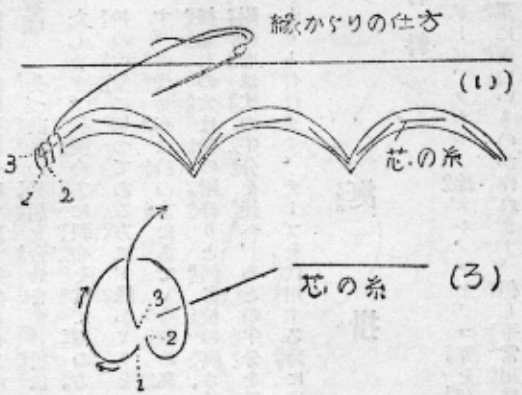
第十二圖

袖　二三糎をとり、縦に二つ折にして切つておきます。そして袖口も衿のやうに縁かゞりの曲線をつけておきます。

身頃　残りの布を真二つに丈を折り輪を手前にし、輪の方から後幅を一七糎、前幅を二六糎五粍として標をつけます。

衿肩明は左端手前で、背の中心へ一糎二粍の刳りをとり、衿肩は三糎五粍あけます。次に肩山の端で肩下り粍あけます。次に肩山の端で肩下りを二糎とり、衿肩明から斜線を引きます。前身頃の肩線も同様に致します。布の両側で右から衿下五〇糎を

とりこの標から、前の肩線まで斜めの線を引いて衿附の標をつけます。次に肩山から一八糎の袖附の切込みを脇線に入れ、前裾に五糎の丸味をつけます。



第十三圖

縫方

寸法通りに裁つてありますから直ぐに縫ひます。

袖　袖口の曲線の標通りに縁かゞりを致します。第十三圖(い)のやうに曲線の下へもう一本同様の曲線を標し、線と線との間は三粍乃至四粍位といたします。次に刺繍針に刺繍糸を通して、曲線の中間に芯ぬひを致します、大針に三四針、上に出る目を大きく、抄ふ目は小さく、そして、最後の針を(ろ)圖の内側の曲線1に出し、圓い輪を書くやうな氣持に糸をまわして、針を内側の曲線2へ入れて外側の線3へ出し糸を引きしめ、また同様にこれをくりかへしてゆきます。終りまで出來上りましたらば、糸をかゞり目の中の方で留めて、かゞり目から先きの不要な布を切りとります。

凸凹のない眞直ぐの裁目をかゞるときには、先きを切る必要がありませんから、内側の針目だけを揃へて外側

には針をかけずに糸の輪へ針を抜いて同様にかゞります。

縁かゞりが出來ましたら袖下を縫ひます。地薄な二糎幅位の折伏せ布を外袖側にあてゝ三枚一所に袖下を縫ひ、前に折をつけて裏で折伏せ布をかゞります。或は折伏せ布を用ひずに縫目をかゞり付けてもよろしい。

身頃　先づ前後の衿肩を合せます。折伏せ布は後身の方にあて、前に折つてかゞつて置きます。次に袖附をいたします。身頃の方に斜布を當て袖の方へ折り返して裏へまつります。

衿の山型に切つてある方に、縁かゞりをいたします。衿布の眞中と背の中心とを合せて、小針で身頃につけます。折伏せ布は衿の方にあてゝ身頃の裏にまつり附けます。衿下及び裾にも斜布をつけます。

紐通しの穴は衿の附終りと同じ位の高さに左袖附の下にあけ、斜布で周圍を包みます。

附紐布は丈の半分を後へ、あとの半分を二つに切りて、左右の衿の下に付けますから、各々適當に縫けてしつかりと付けます。テープを代用する時には三糎幅位のものを用ひます。

涎掛け

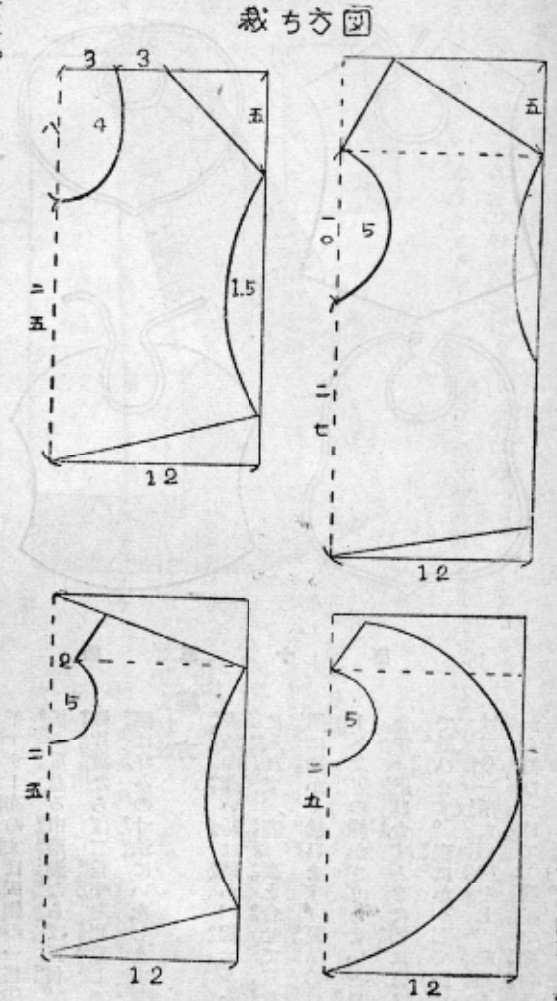
材料

ガーゼ、タオル、綿ネル、キヤラコ等を初め、富士絹、羽二重など小布を利用して、型も自由に工夫したら簡單に面白いものが作れます。但し平常用は度々洗濯をするものですから、白無地の木綿物が適します。

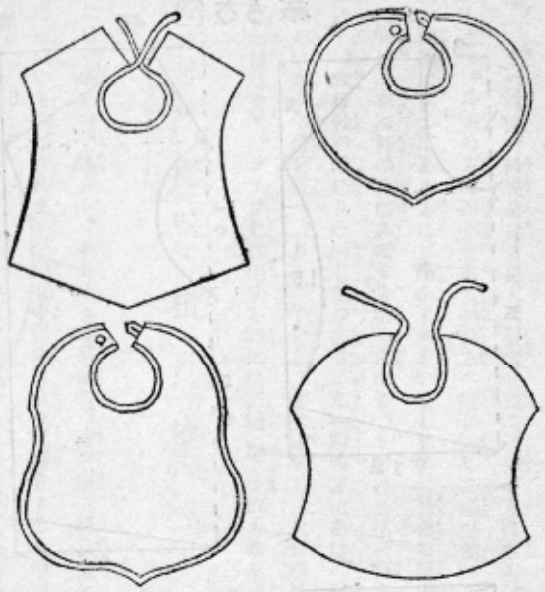
裁方

第十四圖のやうな色々な形を作つて見てそのうちから撰ぶのも面白いものです。このうち二三の裁方を擧げて見ます。

圖のやうに幅二十三、四糎、丈二十五糎乃至八糎の布を縦に二つ折して、先づ眼ぐりの線を縦横圖のすん法位の



圓形を作り、周圍はそれぞれ、好みの恰好に裾をつけて裁ちます。



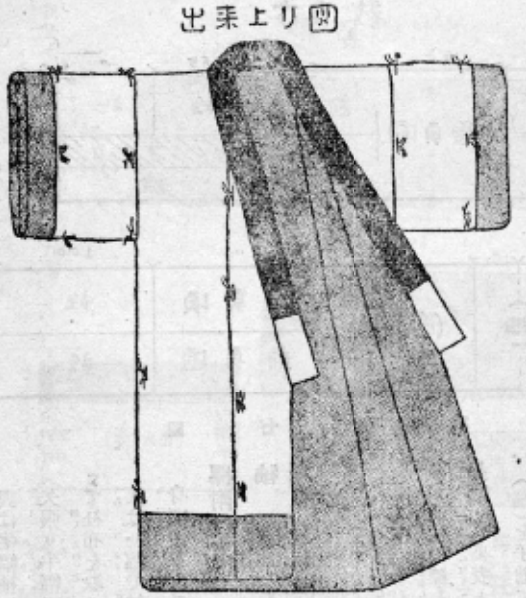
第十圖

五　縫方

表地の薄い時は晒か、綿ネルを芯に入れて、表、裏と合せて三枚一所に細かく縫ひます。夏ものはレースなどの緣かざりもよいと思ひます。縫ひ合すときに間にはさんで縫ひます。表にかへして廻ぐりは二枚一所に假縫をし、紐布を表から縫ひつけて、裏側で結付るか又はテープで包み縫ひにします。

周圍へギヤザーをつける場合は、ギヤザー布の丈は周圍の一倍半、折り重ねる巾着變ならば三倍。同樣片變ならば二倍半を用意します幅は好みの寸法にいたします。

地厚のものは一重で、周圍をテープ、バイヤスでくるんでミシンをかけておきます。裝飾として、花や小鳥などの型を模樣もの、小布で切つて、前にかざりつけたり、又は簡單な刺繍を入れたりするのも可愛らしいものです。たゞあまり縫めたり、色の散るやうなものはさけます。



第十一圖　四リ上来出

掻巻型おくるみ

用布及綿

表布　並幅三四〇糎、裏布四四〇糎、掛衿一二糎幅九五糎、どてら綿三枚、眞綿少々。

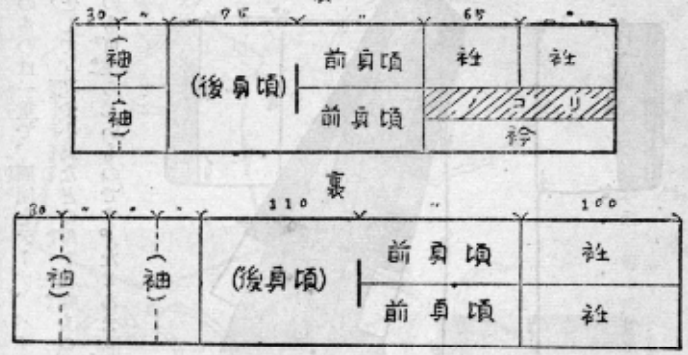
仕立上寸法

袖丈	二八糎	袖幅	二四糎
裄	四二	身丈	九一
衿肩明	四	衿下り	一一
衽幅	一七	衿幅	四
褾袧	一五		

裁方

掻巻型おくるみ

裁ち方



第十七圖

表は半幅袖にしますから袖丈の二倍を取つて、其の後から矢張り半幅で衽丈の二倍を取り殘りを身頃にします、そして衽布を取つた殘りの半幅から衿を取ります。

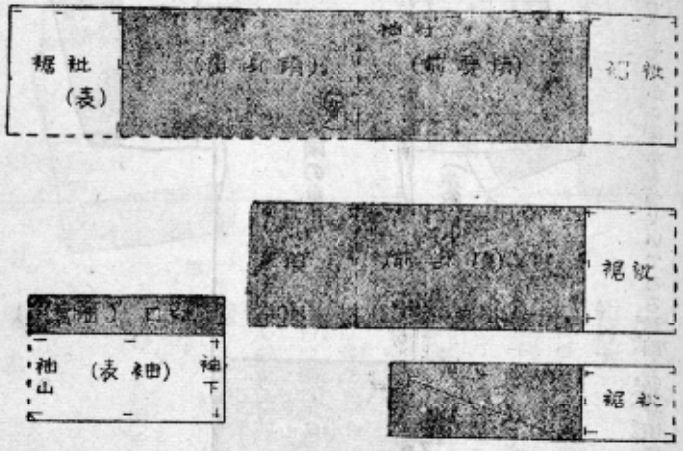
裏は一幅で袖を取りますから袖丈の四倍を取り、次に衽と身頃とを圖の通り取ります。

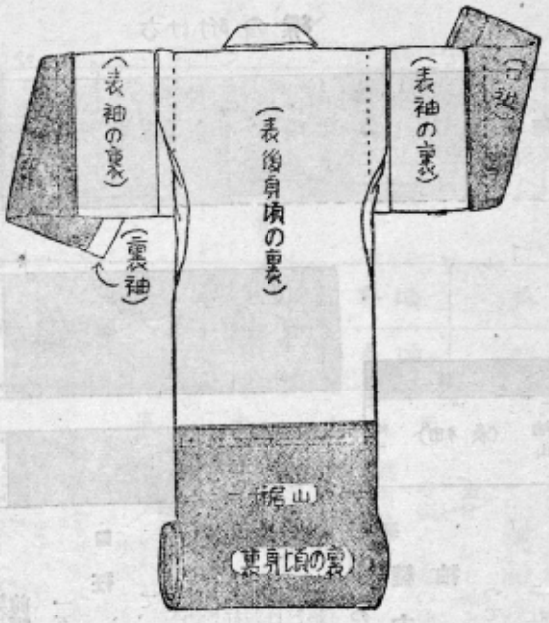
標附け方

袖　表裏とも左右各二枚づゝを中表に折つて、第十八圖のやうに附の方をよく揃へて裏袖を下に、表袖を上に重ねます、それから裏袖の幅の殘い分は袖口枇にしますから折り返して重ね代を二分にして待針を打つて、丈、幅、重ね代の縫代の標をつけます。

身頃　裏表とも中表に幅を二つ折りにして肩明を合せ、背（輪）を手前に前身頃を右に表布を下、其の上に裏を重ねておきます、そして羽織の標と同じ仕方で丈を定めて表布の折り返りを裏布に重ね、裾捌の寸法を定めて接ぎの標をします、それから肩から裏一つに丈を折つて前身頃の上に後

方け附の標


袖口
袖
（表）
裾
（表）
袖山
（袖）
（表）
袖下
裾
裾
裾



第十九圖

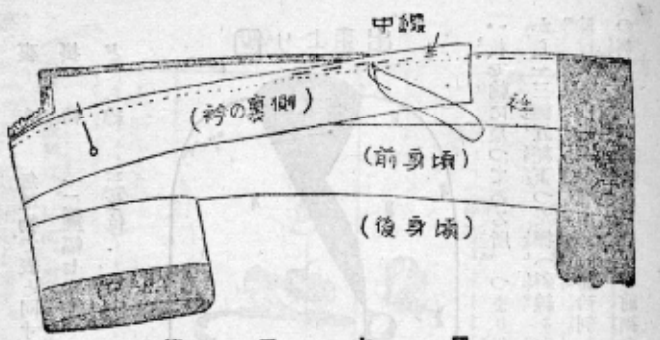
で曲げるやうにします。

身頃　胴接を全部しさしてから脇を縫ひ、衽をつけ、衿もつけます。

袖附　袖下をしつかり四ツ留して表袖だけをつけます。それから袖口袵及び裾枇の山に縫標を小さく所々につけておきます。

綿の入れ方

全體を裏返してきつちりと前を合せて第十九圖のやうに疊み、まづ眞綿をひいてその上にどてら綿を周圍より十二三糎出して適當の厚さに入れ、衿肩明と袖下へ斜に切り込を入れてから裏身頃に眞綿を引きながら折り返して、表身頃、綿、裏身頃の順に三枚正しく重ねます、それから後からつじいてある眞綿を前身頃に引いて又綿をも入れ眞綿を引いて引き返します、兩方共同樣に返して綿を落ちつかせます。



第二十二圖

紐付け方

まづ身頃を裏返して衿附側の裏身頃を綿からはなして布の裏を出し袖下の奥で身頃で袖を挾んで四枚の折山を極く淺く抄つて四つ留をしその糸は切らないで裏袖附の標を合せて紐けつけます。

裏表の脇や衽の縫目をきつちりと合せて、綿を觜の山によく入れ、衿下のところは裏に綿を含ませて裾でおさへておき、それから細かく紐け合せます。

衿は縫目の際を中綴して衿先を縫ひ、折は表の方へ返してとぢつけ、心綿を入れて紐けつけます。

綴　二糎位の針目で第十六圖出來上り圖のやうに各縫目を綴綴します。

掛衿　長着の共衿と同じ仕方で絹天の衿をかけます。

釣鐘型おくるみ

用布

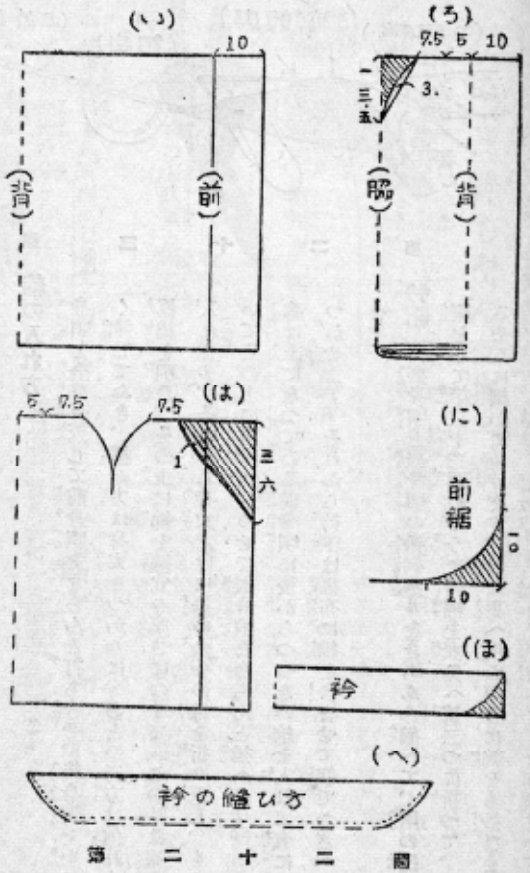
表布　大幅（七六糎）一三六糎
裏布　無地物で表と同寸
掛衿　一二糎幅七六糎、下衿（新モス）同寸
とてら綿　三枚位

図リ上来出

第一十二図

裁方

表裏とも同じ裁ち方であります。まづ一三六糎の布の丈を二つに折りますが、その時一方の端（上前になる方）を第二十二図（いのやうに一〇糎だけ長くしておきます、次に又これを二つに折るのでありますが、今度は下前の短い方に揃へて折りなす、すると一枚だけ長くて後の三枚は同じ長さになる筈であります。さうしましたら（ろ）図のやうに一枚で輪になつてゐる所、つまり背から左へ衿肩明を五糎と標し、そこから肩幅を七糎五粍取り、脇の上の方から一三糎五粍下つた標へ斜線を引き、肩の丸味を三糎つけて裁ち落します、次には（は）図のやうに後身頃を左に除けて、前身頃の肩山から前衿刳を三六糎下げたところまで斜に標し、途中肩山から七糎ほどの所で一糎ほどの刳をつけて裁ち落します、前裾の角は（に）図のやうに一〇糎位の丸味をつけます。

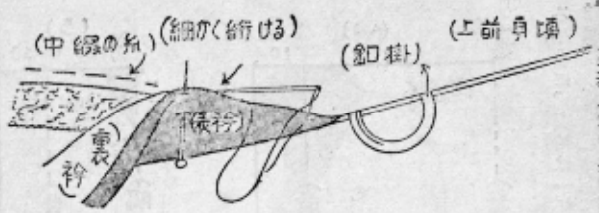


第二十二図

最初に表と表、肩を接ぎ合せ縫代は後身頃へ倒して縫目をします。

衿附　衿を（ほ）図のやうに端を丸く裁ち落して直ぐな方を附側として他のくるりを縫ひ合せ（表衿が四糎内見るやうに、表衿は一杯に、裏衿は八粍標より縫ひ込む）薄く綿を入れて表に返し、附側をあらく裸で仮縫をし裏身頃一枚だけに衿附をします。

掛　裏表二枚の身頃の裾口をきつちりと中表に縫合せて縫代は裏の方へ折つて襞をかけ、次に斜布で細かく鉤掛を二本作つてそれを裏身頃の上前の衿先止りと、裾口の丸味の上とに一つづつしつかりととぢつけておきます。



綿の入れ方　身頃を全部裏返して前身頃をきちんと打ち合せ、後身頃を上にして表、裏を長く伸しておき、裾の方は身丈きつかりに、あとの三方は何れも一〇糎位出して眞綿を引き、その上に綿を適宜の厚さにのせて（この時は裾口にも出します）入れます、それから身丈だけに裾の余分の綿を折り返し、もう一度眞綿を引いてその上に裏身頃をのせて表身頃ときちんと揃へます。

次は上になつてゐる前身頃に後からつづきの綿を入れて表に返し綿をよく落ちつかせます。それから衿下は裏布に綿を含ませて襞でおさへ、細かく絎け合せます。

衿絎　裏身頃と表身頃の衿刳廻りをきちんと揃へて、附の縫目の際を抄つて申縫をして第二十三圖のやうに衿幅を表側へ眞二つに折つて、中綴の糸のかくれるやうに細かに絎けます、針は裏へ出ぬやうに綿をも抄ひます。

鉤附　表の裁ち落し布で飾鉤を二ケ作り上前の鉤掛とよく合せて下前へよくとぢつけます。

赤ちやん夜具一揃

子供夜具は敷布團を一枚にしてそれに夜着と掛布團の三枚で一組にします。

子供物は多く大幅物の柄物を用ひます。

用布　表用布　五六〇糎、裏用布　四七〇糎。

裁方

敷布團　表裏引返しにしますから大幅で丈の二倍の二〇〇糎取ります。

夜具及掛　掛の表は敷と同じ長さに一幅取り鏡仕立にしますから、裏は一幅半で丈も二〇糎宛長く取ります。

夜具は表身丈を八五糎にし袖丈を四五糎にします、そして身頃から衽と衿を取ります。

裏は身頃を裾捌の分として三〇糎長くし、袖は袖口捌の分に一五糎廣く取ります。

綿　敷に布團綿五枚、掛と夜具に六枚。

縫方

敷布團　中表に丈を二つ折にして縁の三方を一糎の縫ひ代で縫ひます、但し返し口として耳の一方で六〇糎ほ

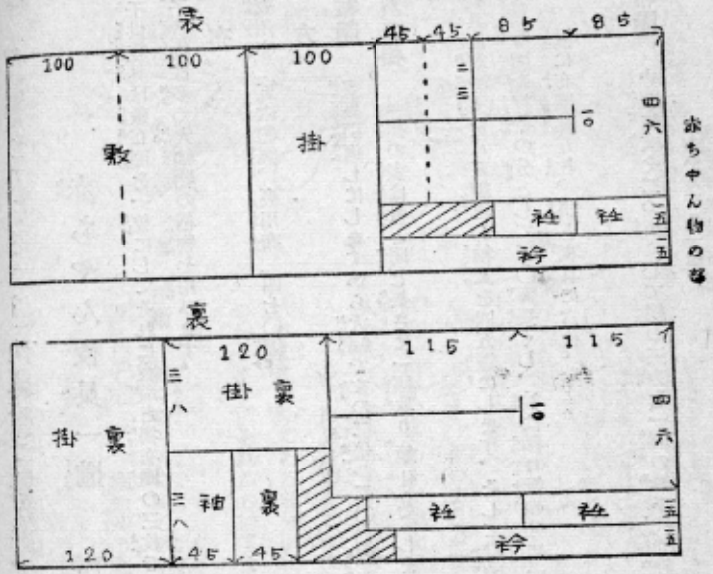
裁　表の縫糸を二本にして一二、三糎の間隔で一糎五粍位の針目で縫縫をします。

とあけておき、表になる方の側へ折をつけて隠鉄をかけ、それから紐を入れて返し、綴を入れることは大人物と同じであります。

掛布團　これも鏡型掛布團の仕立方と同じにいたします、裏が一幅半で表が一幅でありますから、この半幅の分が縁になるのであります。

夜着　矢張り大人物と同じ要領で仕立てますが、綿の量が大人物より少なくなりますから、裏袖のつめる寸法を一糎位にします、なほ袖がありませんから裏の袖附を縫ひ合せずにおいて紐を入れてから縫ひ合せます。

改良夜具



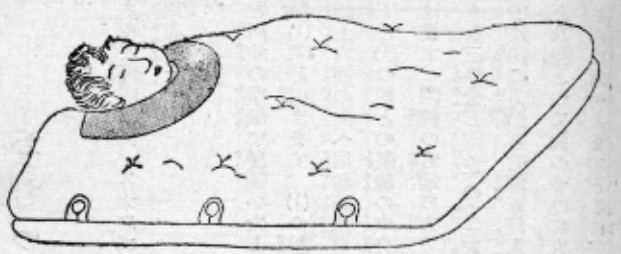
第二十二圖

寒い時には前のやうに二枚を掛けますが暖かい折は掛布團一枚だけにします、そんな場合にはこの改良夜具は夜具と掛とを兼ねて具合のよいものであります。

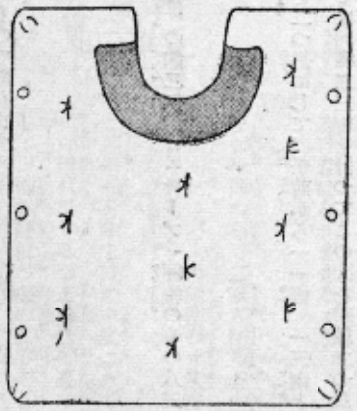
用布　大幅物一幅ならば鏡型に、毛抜合せの時は三布にします。丈は一二〇糎位。

縫方　第二十六圖のやうにたゞ裾の方を少し剏つて仕立てるだけで他は普通の布團と同じにいたします。

なほこの掛布團の左右兩端に釦をつけ、敷布團に釦掛の紐をつけておいて子供を寢させてから第二十五圖のやうに紐を釦



第二十五圖



第二十六圖

にかけて止めると子供が動いても布圖が脫れなくて具合が宜いものであります。

おむつカバー

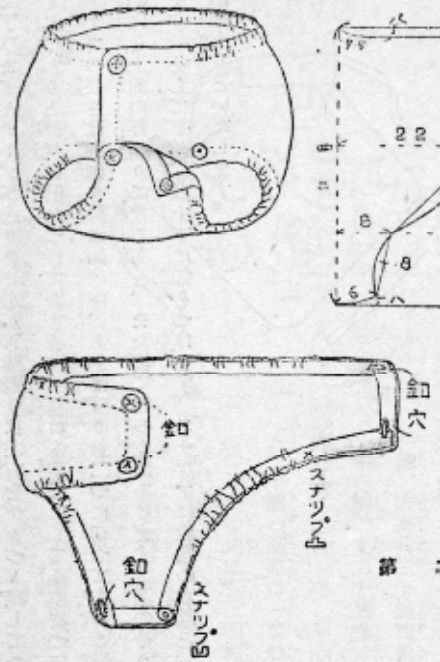
用布

白本ネル大幅四二糎、スナツプ大型一組、一糎五粍乃至二糎位の釦二個、ゴムテープ一糎幅のもの八五糎、斜布用布少々。

裁方

用布と同寸の型紙に製圖いたします。第二十七圖のやうに幅を二つ折にして、手前から一一糎、一三糎と計つて線點(1)(2)を引きます、(1)の線では輪の方から八糎、(2)の線では同樣二三糎を計つてこの間を斜線でつなぎ、下の線上六糎の處へ同樣斜線を引きます。

次に下と(1)の線との斜線の中央で、輪の方へ八粍の丸みをつけ、(1)と(2)との中央では反對側へ二糎五粍の丸みをつけます、(2)線の右端の方で、上へ八粍上つた處と(1)(2)間の斜線の端とへ斜線を引き、右の端から八粍とつて殘りを三等分し、左の方三分の一の中央で內側の方へ一糎丸みをとりあとは圖のやうに自然に消します。上部では輪の方から七糎五粍入つた處で八粍の深さになるやう自然に刻つてそのまゝ右端まで通します。そして角を八粍とつて圖のやうに丸味をつけます。この曲線にならつて八糎入つた處に點線のやうな線を引きます。これは裁切りますときに、片方だけはこの點線で裁ち下前とし一方は實線の通りにたつて上前とします。



第二十七圖

下の端も六糎の處で、八糎の丸味をとります。

以上のやうにして型紙を作りましたらば用布を裁ちます。

このおむつカバーは一丈半の用布がありますと、裁ちちがひにすれば二つ取れます、但し一つは中央で接がなければなりません。

縫方

まづ地厚の布で二糎五粍乃至三粍位の斜布をカバーの周圍の寸法だけ作つておきます。

この斜布を裁ち目に中表にあて五粍位の縫代でぐるつとつけ、裏にかへして、糎五粍位の幅になるやう折り伏せてまつるのですが、全部まつつ

て了ひますとテープが通りませんから腰廻りは左右を少々づゝ殘しておいてゴムテープを通し、テープの兩端をしつかりと縫代に縫ひつけておきます。裾口も同樣にして全部まつておきます。

テープの長さは腰廻り分は四〇糎、あとは殘りを二つに切つて左右の裾口にいたします。

釦穴を上前の腰廻りになる布と、また當て布の左にあけます。圖のやうに上は横に、下と股當布とは縱にあけます。そして下前には上下に釦をつけます。スナップは股當の右端と、それが合ふ部分の腰廻り布とへつけて出來上りといたします。

一三、子供用小物の部

一、二歳用寢冷え知らず

タオルのハンカチーフ、メリンスの殘り布、ガーゼ、綿ネル、晒木綿など有合せのもので作ることが出來ます。

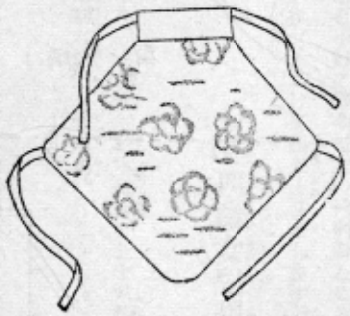
材料

胴、表裏共三十糎四角、胸布、幅十糎、丈八糎、紐布（紐、幅三糎、丈二十三糎、二本、脇紐、幅四糎、丈五十糎、二本）

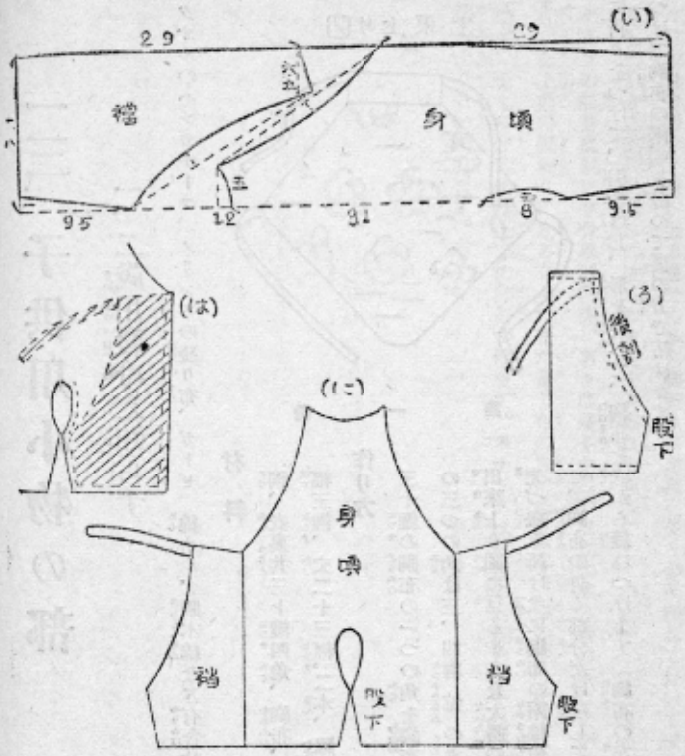
作り方

三十糎の胴布の一つの角を胸布の寸法だけに切り落して、他の三つの角は三、四糎位の丸味をつけて裁ちおとしますと出來上り圖に見るやうな大體の形が作れます。

先づ紐を紐付け次に胴布の兩端角に紐を挾んで、表裏の布を合せ、胸布の付く部分だけ殘して、三方を縫ひ廻し、表布の方に折りをつけて、引き返し、形を整へて、胸布を表から縫ひつけます。胸布の左右の上角には二十三糎の紐をつけて胸布の兩端を縫つて裏の方で結けます。



第一圖　出來上り圖



第二圖

二、三歳用寝冷え知らず

用布

表裏共並幅六五糎
外に紐布四糎幅四五糎
丈二本
テープ四五糎丈一本

裁方

用布の幅を眞二つに折つて第二圖(いのやうに標附して裁ち切ります。と身頃一枚、襠二枚が出來ますから、裏布も表布と同じやうに裁ち切ります。

縫方

襠 襠布の表裏を重ねて(左右向き合になるやうに注意)合せ、後刳の上部に紐を挟んで待針を打ち、(ろ)圖のやうに上部と下部と後刳の三方を縫つて表に返します。左右とも同樣に襠に紐をつけます。

身頃 表裏の身頃を合せて裾口を縫つてから、(は)圖のやうに身頃の脇で襠の脇を挟んで四つ縫にします。次に身頃の股下で襠の股下を挟んで四つ縫にし、つゞいて前刳の部分を小針に縫ひます。それから脇の左右の刳のところを小針に縫つて上の衿刳のところから表に引返しますと(に)圖のやうになりますから表裏を平らにして衿刳にテープをつけて出來上りとします。

三、四歳女兒用寝冷え知らず

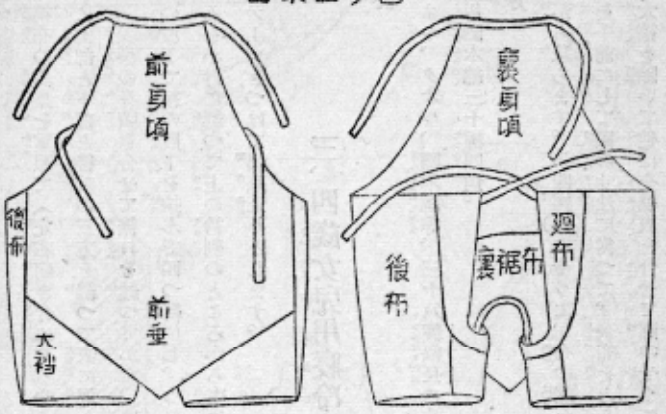
材料

メンネル、タオル、晒木綿等、三十八糎幅長さ八十五糎の表布
裏裾用晒木綿三十糎四角

裁方

表布から裁ちます。第四圖(いのやうに、布の端から幅を三十糎と標して、これを眞二つに折ります そして(の方を手前にして圖の寸法に從つて、表布をとります。
裏は大襠を除いて他は全部表と合せて圖のやうに裁ち切ります。

出来上り図



第三図

縫方

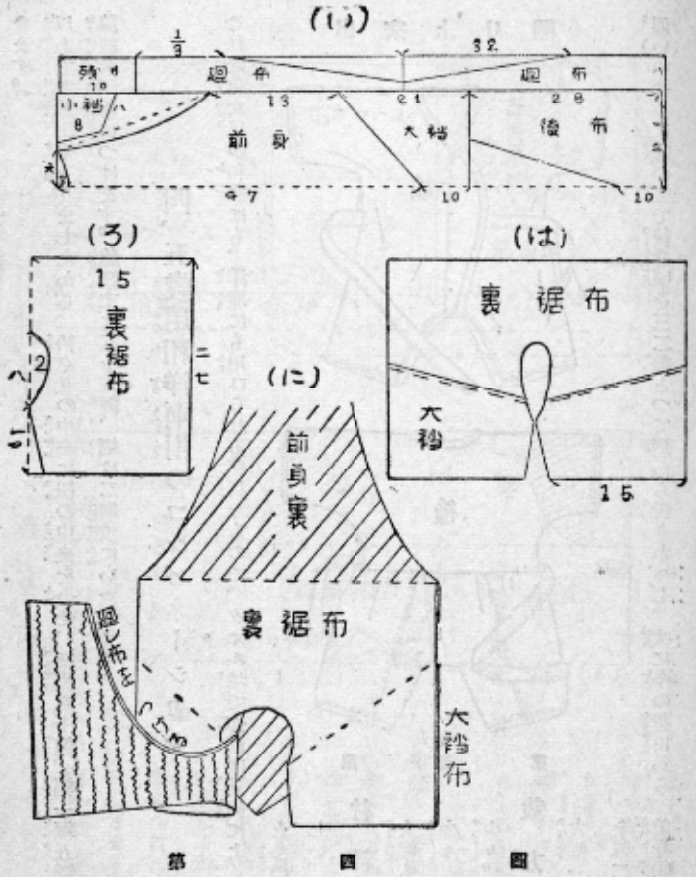
大褡の裾十五糎幅の所を裏裾布の裾と合せて縫ひ合せ毛抜き合せにして襞をかけておきます。次には(は)図のやうに、裏裾布の上に、大褡布の斜の部分を折り曲げて綴ぢておきます。

身頃布は表裏を中表に重ねて裾の方、即ち垂れの部分と両脇じりの部分とを縫ひます、いづれも毛抜合せにして襞をかけます。

大褡をつけた裏裾布は身頃の裏側の方へ(に)図の如くにのせて、脇丈が二十七糎位になるやうに描へて綴ぢつけて置きます。

小褡の裾は表裏を縫ひ合せ、これも毛抜き合せにしてこの小褡の八掛丈の廣で挟んで四つ縫にして表に返しておきます。

小褡の十糎のところを後布の襠の部分の十糎の所にはさんで、四つ縫にします。次に後布の眞直ぐ二十八糎



第四図

の又で身頃、脇をはさんで四つ縫にします。

廻し布は斜に裁つた方で、幅の狭い方を前股ぐりの處へ、幅の廣い方を後布の上端の處へ描へて、四つ縫ひにして引き返し、廻し布の裏を三粍程巻へて紐けてお

きます。

以上で大體出來上りましたから、衿ぐりの中央に紐の中央を合せ、紐丈五十糎、幅一糎五粍の紐をつけ、次に脇紐を兩脇につけます。脇紐丈は五十五糎、幅は二糎位にいたします。

四、五歳用和洋兩用のコンビネーション

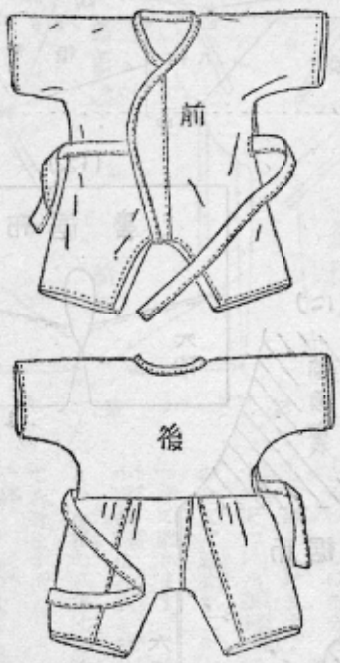
これは男女兒の和服にも、洋服にも用ひられる便利なもので、タオル地で作れば夏向によく、ネルを用ひますと冬の下着や寢衣によろしい。

材料

大幅もの一三三糎、斜布少々と脇紐用のキヤラコ少々。

裁方

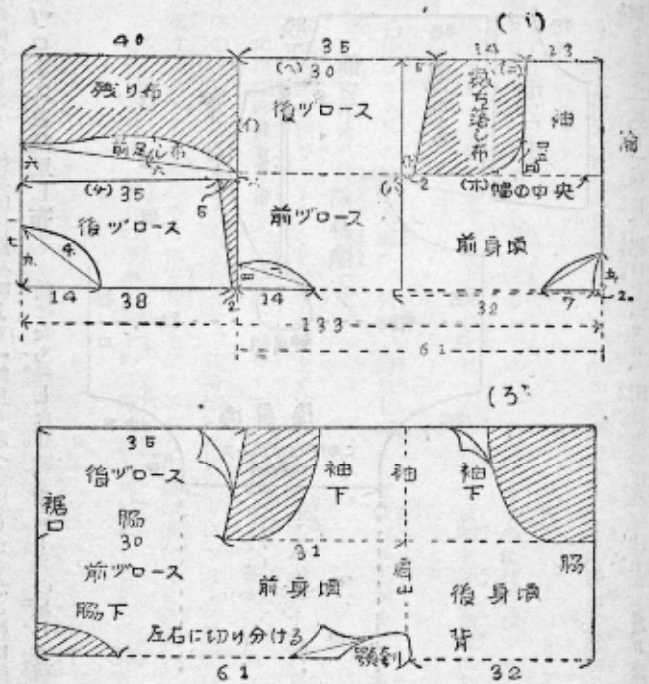
大幅一四二糎の用布の幅を圖二つに折つて、第六圖(い)のやうに右の方で後身頃を三二糎とつて肩から折りかへし、次に今の折山から、前身頃の丈六一糎をとります。つまり、身頃の上半分の分だけ布が四枚になつて居ります。



第五圖　出來上り圖

圖中のイの線から左は後のツロースの足し布となりますから、こゝで布を切り離します。

身頃　手前の端の側で衿肩明を圖の寸法通りに刻り、袖口は一三糎として、布幅の中央(ロ)で四糎五粍の丸味をつけて(ニ)、(ロ)、(ホ)に標を通します。かうして順次殺方圖の通りに標をつけ、太い線だけを切つて開きますと、(ろ)圖のやうに後身頃、袖、前身頃、前ツロース、後ツロースと續いたも



第六圖

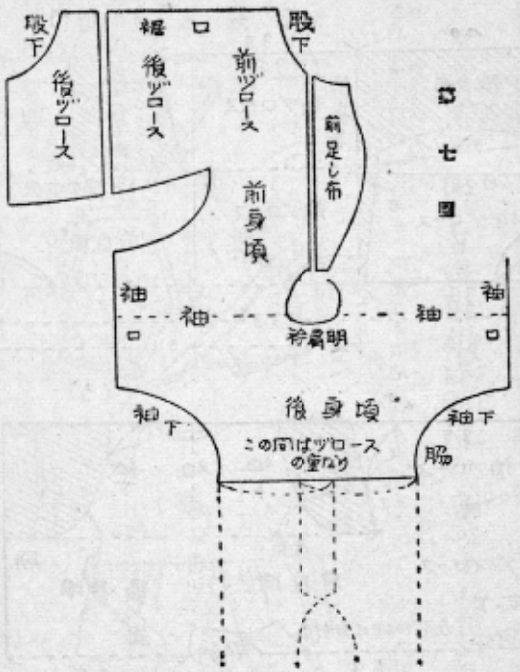
のになります。後身頃は前身頃より一糎長くなつて居りますがこれは縫代になります。

後ヅロースと前足し布　前にたち残した布で、ヅロースの足しと前布の足し布を裁ちます。

初め輪の方から一七糎と幅を標して、後ヅロースを(い)圖のやうにとり、その殘りから前の足し布をとります。

全部の裁斷がすみましたらば顎刳から股下までを左右に切りはなします。後ヅロースも備のところから、二枚に切つておきます。

第七圖



縫方

まづ前身に足し布をつけて、次に後ヅロースの足し布を接ぎ合せ、股下を縫合せ、前足し布と後ヅロースとを續けて緣をとりながら衿ぐりまで一周して袖口、裾口をかがり、附紐をつければ仕上りとなります。

すべて縫代はいつぱいに、伏せ縫又は折伏ぬひにすればお洗濯にもたえて丈夫です。

前足し布は第七圖に見えますやうに、幅の廣い方を下に左右前身の顎刳の下につけ、縫代は前足し布の方へ折りかへします。

次に後のヅロースに足し布(後ヅロースの)をつけますのには、後ヅロースの(へ)と(チ)とを合せ、縫代は脇の方へ片返しにして伏せます。後前の股下は、刳の部分では布を伸し加減にして縫ひ合せ、縫代は前身側へ折り伏せにします。

次に後ヅロースの端から前へ、衿刳、前足し布として後ヅロースきでの布の裁ち目を、續けてバイヤスで包みます。緣の幅は八粍位が適當です。

次に後身頃と後ヅロースとを接ぎ合せます。このとき左右のヅロースの重なりを十一糎位と見て、その二分の一に後幅の半分を加へた寸法に、ヅロースを左右共に縫ひ縮め、平らに鍍でおさへておきます。そしてヅロースの左右を脇からきちんと折つて、後身頃へ曲線通りにヅロースを縫ひ合せます。(第七圖點線)、前の合せが男女兒ともに和服のやうに左身を上にするやう、後の縫合せを注意いたします。縫代は上に折り返します。

次に脇を合せます、袖口の下から脇下の丸味(伸し加減にしながら)脇と縫ひ合せます。縫代は後へかへします。

左身の脇(第六圖(い圖中の(ハ點參照))の處から二糎下つた處へ六糎の附紐を通す穴をあけ、裏にとぢつけておきます。

袖口、裾口は三つ折にして細かく縫け、附紐は上前用のものは、一糎乃至一糎五粍幅で二十糎位の丈に、下前紐は五十糎内外に作つて各紐の裏側に紐通し孔と並行の處へつけます。

一、二歳用の夏着

材料

タオル手拭　一筋
パイヤス　三〇糎
テープ　二〇糎

裁方

手拭の幅を二つに折り、更に丈を二つに折つて肩山を決め、そこで衿肩明を四糎にして後身頃に一糎五粍繰り越し前は八糎位刳ります。これだけでは着るのに窮屈でありますから背を開けます。この衿刳はいつでも頭廻りを計つて、それに少しのゆるみを入れた寸法だけ明けます。

第八圖　裁り上り出來

縫方

最初に前衿刳廻りの表側にパイヤスをつけ、裏側へまつり縫けます、それから後明に持ち出しと見返しをつけてスナップ留にします。次に肩山から二〇糎下つた左右の前後（腋下になる處）で耳から一〇糎程どを縫ひ縮めてギヤザーを取ります。そしてこゝに長さ三〇糎のテープをつけて脇紐としします。これで出來上りでありますから着せますには脇紐を解いておいて頭から被せ、着せてから脇紐をしめてやります。脇が全部明いてゐますから着易くて涼しい着物であります。

第九圖

二、三歳用エプロン（その一）

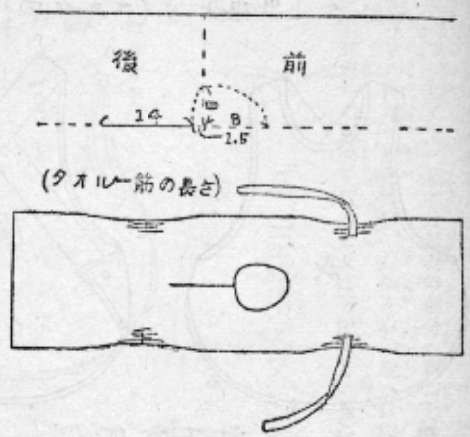
材料

丈四十一糎、幅四十糎、即にたすき布ヲ三十二糎、幅四糎五粍程のキヤラコ地。

裁方

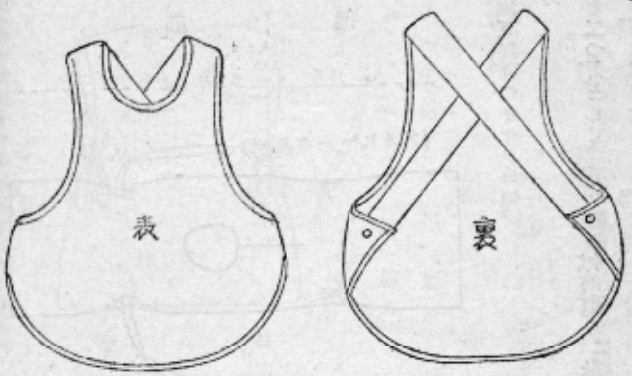
用布を二つ折として、第十圖の寸法通りに標をつけて裁ち切ります。

たすき布は圖のやうに一方の端を三角に恰好よく裁つておきます。

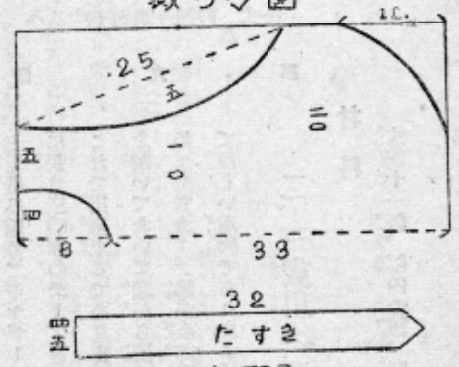


みるゆ＋廻頭＝剳衿　式公

（用布二二ヶ）出来上り



裁ち方図

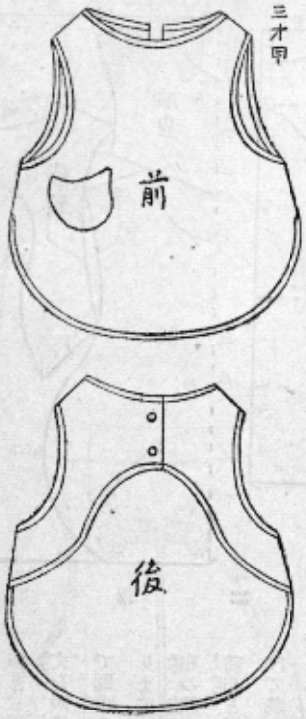


第十一圖

先づたすきの先へ三糎位の力布を付けて、釦又はホックを附けます。

次に肩を合せます。身頃の肩布を五粍出し、たすき布の方へ五粍ひかへて、身頃の肩と縫ひ合せ、縫目はたすき布の方へ寄して折伏せ縫にします。

出来上り図



第十一圖

二、三歳用エプロン（その二）

材料

幅四十七糎、丈五十五糎（型紙三十八糎一枚を用意します）

裁方

第十二圖によつて、先づ型紙を作り、それを用布にあてゝ型通り裁ち切ることにします。

折ぐり、腰ぐり、裾等は裁目の部分へ斜布を縁につけます。

たすきの兩端へ釦をつけ、身頃左右の端へは釦穴をあけてかゞつておきます。釦の代りにホックでもよろしいこれに好みの裝飾をほどこせば可愛らしいものになります。

型紙を縦に二つ折にして圖のやうにおき、聰ぐりを六糎と繪し、殘りの丈を四等分に點線を引き、各線の部で圖中の寸法通りの標をして裁ちきります。この型紙を用布の上に當て布の裁方圖のやうに、後布、胸當布、前布と、順次に各々一糎の縫代をつけて裁ちきります。

第二圖　裁ち方圖

第十圖　裁ち殘りの布の取り方圖

縫方

胸當布　下部を細い三つ折縫にして聰ぐり、肩明を前布に合せて、假縫をかけておきます。

後布　裁ち殘りの布で脊に力布をつけます。

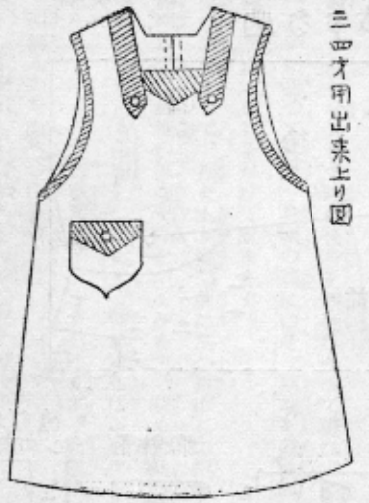
前布　前布の肩と、胸當の肩とで後布の肩をはさんで三つ縫にし、脇は後布の方を五粍先へ出して前布と縫合せ、折を前に返して折伏せ縫にします。次に衿肩、縫明、裾の廻り等には全部綿布で緣をとります。

三、四歳用エプロン

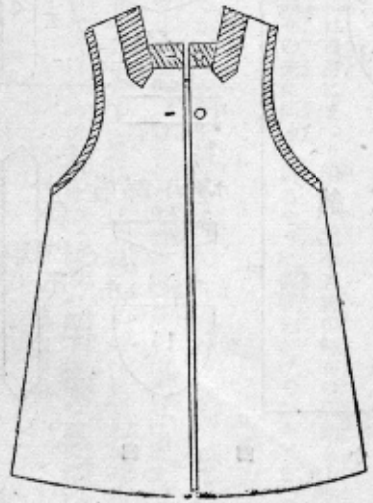
材料

七十六糎幅、五十五糎の丈、別に綿或は縫様の飾布。

三四才用出来上り圖



裁方



第十一圖

第十四圖裁方圖に示しますやうな寸法で、身頃、ポケット、飾布等を裁ちます。

縫ひ方

背裏に釦掛の力布を三糎幅、十五糎丈位に付けて置きます。次に後衿肩の角を斜に八糎ほど切りこみ、背に飾布をつけます。幅三糎、丈十糎を横に裏から縫ひつけ、表に返して飾布の下の端を深く紐けるか、ミシンをかけておきます。

前胸にも七糎の飾布を後の飾布のやうにつけて表に折り返し、上り幅を一ぱいに折つてまつり縫又はミシンをかけます。

前後の肩を合せます時は後身を四糎ひかへて縫ひ、縫代は後身にまつり附け、二十五糎の飾布の周圍を上り幅一ぱいに折つて置き、身頃の肩にのせ、兩端を前後の飾布の先に同寸に出るやうに假縫をかけておき、まつり縫ひ又はミシンをかけて置きます。

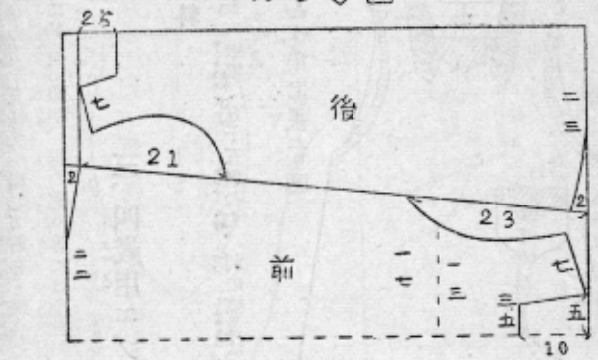
脇は袋縫として、裾を上り幅二糎に三つ折にして紐けるか、ミシンを掛けます。

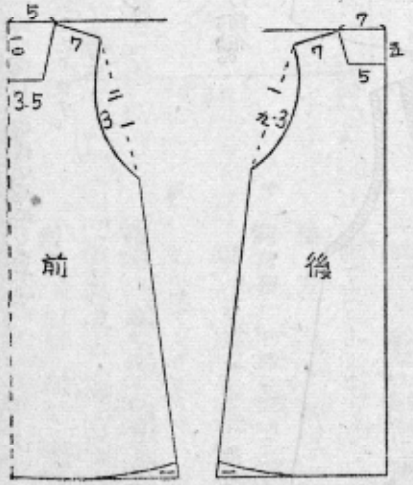
脇明は、二糎幅の飾布で縁をつゝみます。初め六糎の縫代で縫ひ、縁を包んで裏の縫目にまつり附けます。

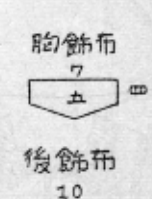
ポケット口にも飾布をつけます。初め飾布はポケット布の裏に當てゝ縫ひつけ、表に折りかへして上り幅を一ぱいにしてまつり縫ひ又はミシンをかけます。周圍は折代一ぱいに折をつけて、身頃の脇下四糎の處で脇縫より四糎入つた處へつけます。

最後に出來上りの後圖のやうに上前に釦穴をあけてかゞり、下前に釦をつけて仕上げます。

裁ち方圖







第十四圖　裁方圖

四、五歳用エプロン

材料

キヤラコ六十糎。

裁方

第十五圖裁方圖のやうに裁ちきります。

縫方

胸と背の十一糎折返し布の端に飾りレースの幅の狭いものをつけてミシンをかけます。

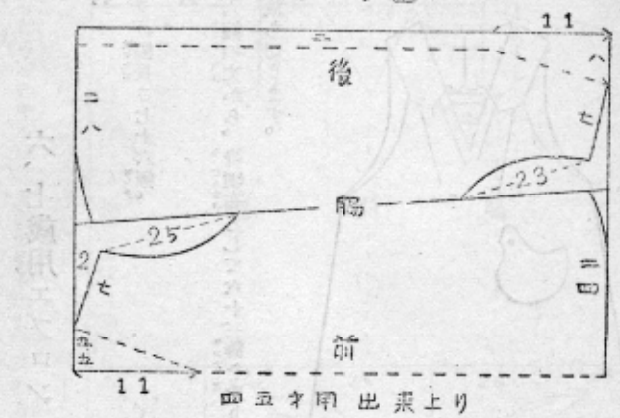
次に肩を接ぎ合せ後を四粍ひかへて折伏縫にします。

脇は後布を四粍ひかへて縫ひ合せ、後布の方へ折り伏せて綴けつけます。裾縫をして脇明に袋布の身返しを用けるか、又はテープでくるんでミシンをかけます。

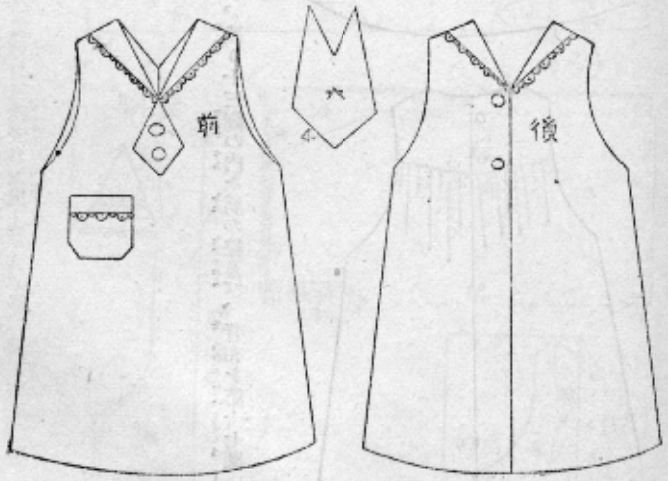
この型は胸に共布を折返しましたので、下部の角に少々無理が出來てゐますから胸に飾布をつけます。なほ圖のやうに裁つた力布を折返した角の折山に合せて裏側につけます。

最後に釦及びポケットを付けて出來上りといたします。

裁方圖



出來上り圖



第十三圖

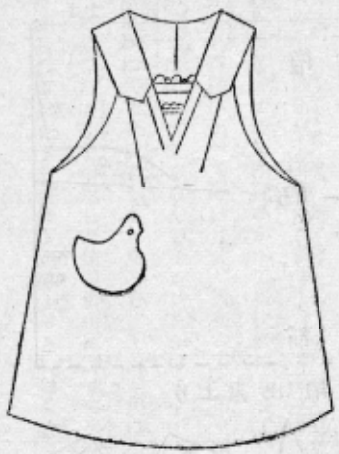
六、七歳用エプロン

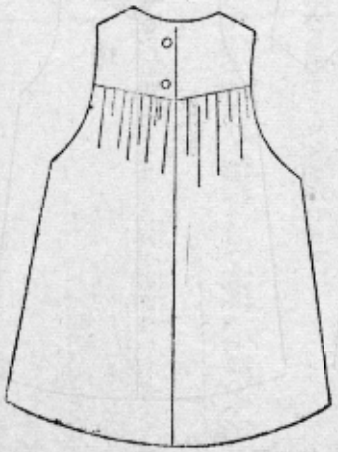
材料

キャラコ幅廣さ七十六糎。

裁方

七十六糎の丈から、身頃布として六十三糎を取り、殘り十三糎の內を后の襷及び、背布を第十七圖(い)の寸法通りに裁ち切ります。

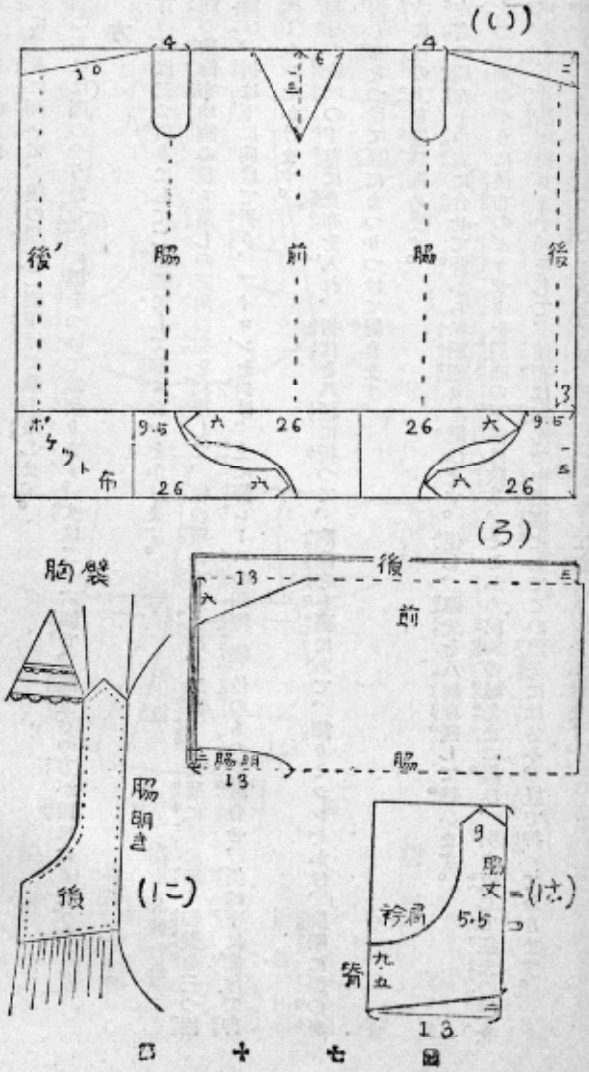




六七才用出來上り

第十六圖

身頃布は(ろ)圖のやうに布を四つ折りにし、耳の方の二枚は三糎先きに出してたゝみ、脇明は十三糎、幅は二糎



第十七圖

だけ刻る標をつけます。

胸ぐりは、幅六糎、丈十三糎に標をします。

次に二枚に開いて、後の肩を二糎下げて裁ち落します。

肩の布は(圖のやうな寸法に標をつけて裁切ります。丈は二十六糎で、眞直ぐの方が脇になります。

縫方

背の耳は二つ折りにして二糎幅にして飾ミシンをかけます。

前の胸飾布は胸の裁ち落しの三角の布を利用して、幅の廣い方を上に、二糎下つた所に横に細く飾襞を三つ程ぬひ、折は下に向けて折り、アイロンを掛け、上に飾レースの四糎幅位のものを縫合せ、折は下に向けて押へミシンをかけます。

前身の胸明の下部に止布を入れ、折代を八糎に折つて、胸飾布を裏にあて、飾りミシンをかけ、胸明に斜の見返し布をつけて裏にまつりつけて置きます。

次に後の上を縫ひ縮めます。

左右の肩布を中表に合せて背から衿肩廻りを縫ひます。但し、袖先を八糎程殘して縫ひます。

次に(圖のやうに後布のギヤザーを肩布の下部に狹み、そこから前胸の袖先まで縫ひ、引き返して袖先の緒を出來上り寸法に折ります。そして、前布は摘んで巾着襞にしてこの袖先にはさみ、襞で押へておきます。

出來ましたらば全體に飾ミシンをかけ、裾を三つ折にして飾ミシンをかけます。

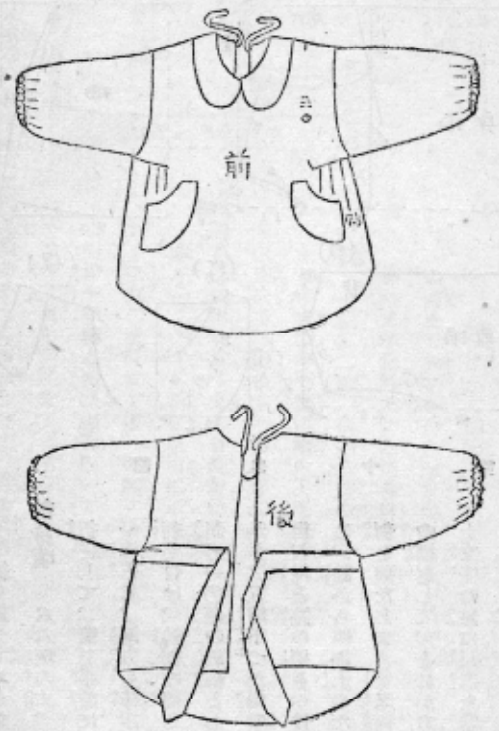
ポケットは圖のやうに小鳥型や、その他の變つた型に切つてつけるのも面白いと思ひます。後に穴かがりをしてボタンをつけるか、又はスナップを附けて出來上りとします。

七、八歳向男女兒用の上被

圖　八　十　第

七八歳向男女兒用の上被

圖り上來出



材料

ギンガム一四〇糎巾

ゴムテープ一糎幅

三八糎、飾衿用布として適當の色絣布を少々。

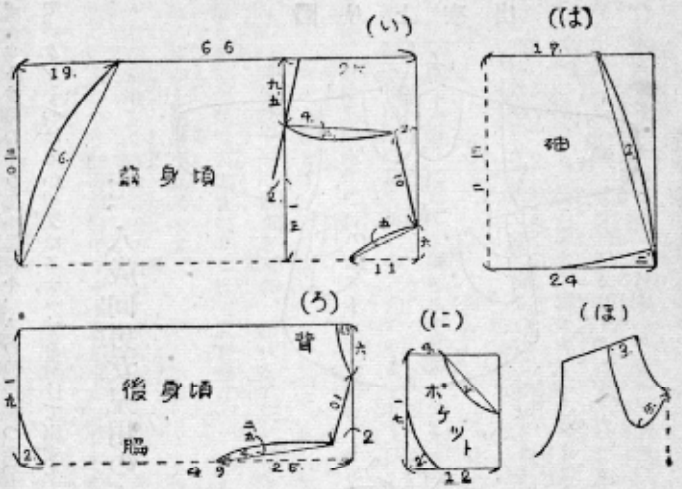
出來上り寸法

身丈　六四糎

前巾　四五糎

裁方

第十九圖(いのやうな寸法によつて先

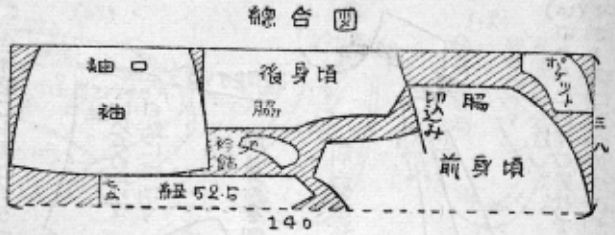


第十九圖

ブ型紙を裁つておきます。

前身頃　六六糎の丈、六〇糎の幅の紙をたて二つ折として、輪を手前にして衿明を五糎、頸刳を十一糎とし、兩方を結びつけた斜線の中央で五糎の刳を付け、衿刳の線を引きます。肩は二糎下りの斜め一〇糎の肩幅とします。次に裁目の方で右端から二五糎下つた處で縦線を引き、その線上へ九糎五粍と脇の標をつけ、その標から肩へ斜線を引き、脇から四糎上つた處へ二糎の刳りをつけて脇刳をいたします。又同じ線上に輪の方から十三糎の標をして、それから左に二糎寄つた點から脇の十文字の點に尺度を當てゝ斜に裁目までの線を引きこれを脇の切り込みとします。左端の裁目から十九糎を計つて下の輪の左端へ斜線を引き、中央で六糎の丸味をつけて襟口の丸味といたします。

（第十九圖參照）



第二十圖

後身頃　三八糎幅、四九糎丈の紙を縦二つ折として、(ろ)圖のやうにおき、裁目の方で右端から横に一糎五粍をとり、衿肩明六糎として、圖のやうに丸味をつけて刳ります。肩幅及び肩下りは前身頃と同寸にいたします。袖刳は輪の方で、右端から二五糎の處に標をつけ、これと幅肩標へ斜線を引き、脇の方から四糎上つた處で斜線の内側へ二糎五粍の刳をつけ、自然に肩の方まで丸味を持たせながら曲線を引きます。裾脇では二糎を上げて、裾の方へ丸味を持たせながら自然に消してゆきます。

袖　縦三二糎、横四八糎の紙を(は)圖のやうに縦二つ折とし、輪を左にして袖口の方で一七糎、附の方で二四糎を採り、此の二點を斜線でつなぎ、斜線の中央で二糎のふくらみをつけます。次に、附の方で斜線を二糎切り上げて自然に附の方へ丸味を持たせながら曲線を引きます。

ポケット　型を自由に工夫すると變化がありますが、第十八圖のものは、(に)圖のやうに、縦一七糎、横一二糎とし、左上で四糎と右の方で縦線の二分の一の處とへ斜線を引いて、中央で二糎を刳ります、底の方は、左角で二糎の丸味をつけます。左右二個をとります。

袷

前身頃の衿刳に合せて、(ほ)圖のやうに衿刳をつけ、肩は肩線に合せて下りをつけ、幅を三糎とし、前の方

は二糎廣くして、恰好よく丸味をつけて裁ちます。
裁ち合は第二十圖のやうにするのが便利です。裏布から圖のやうに紐を取ります。

縫方

縫代はいづれも幅いつぱいにいたします。ミシン縫ならば全部縫代を折り伏せ、表から飾ミシンをかけますが、手縫ひでしたらば小針の袋縫といたします。

一　身頃　前身頃の左右の脇の切込みの處を第二十一圖のやうに襞又はギヤダで縫ひちゞめます。つまり前の弛みを脇幅と同寸になるやうに縮めてしまふのです。そして脇の切込みと合せて縫ひます。手縫の時には襞の切口が解けないやうにかゞるか、バイヤスで包んでおきます。縫ひ合せましたらば折目は上に折つて縫ひ綴をかけます。

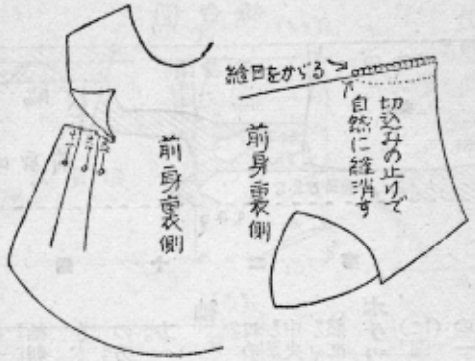


圖　二十一節

次に飾衿をつけます。初めに飾布の周圍に額刺の處だけ殘して緣に二糎布の斜布をつけます。バイヤスのつけ方は第二十二圖(い)のやうに四糎の縫代で、小針にぬひ、表にかへしてろ)のやうに二糎周圍に持ち出して、緣をとり、鏝でおさへて、裏にまつりつけます。丸味の處は、(は)のやうに、縫ひちゞめておいてまつります。これを額刺の下で、

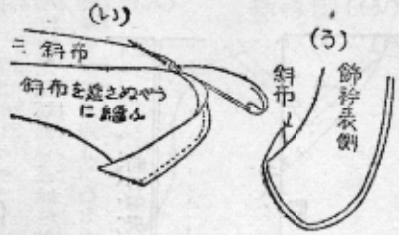


圖　二十二節

圖のやうに左右の衿先で突き合せになるやうに縫ひつけますときは、身頃の裏側に飾衿の表をあてゝ、小針でぬひ、折をつけて前身の方に衿をかへし、縫目に縫綴をし、周圍は身頃にまつり縫します。

後身頃には、緣布で、幅四糎、丈二十糎位の布二枚で肩紐を作り、別に三糎幅の見返しを後衿肩明の裏側へつけます。紐は表布と見返しではさむやうにすると奇麗に出來ます。左右の肩は袋縫とし、前に倒します。

袖附も同樣袋縫にして袖側へ倒し、脇縫は袖下から、脇へ通して袋縫をし、折を前身に倒して、裾廻りを三つ折にしてまつります。

袖口はゴムですからそのまゝゴムテープの通るやう一糎五粍位裏側に折りふせて小針で縫ひ、テープを通すのに都合のいゝ丈穴をあけてテープを通しておきます。

胴紐は一方の山形に裁つてある方を三つ折にしてまつり、平の方は三糎位の幅に折つて、後の衿肩から、二十五糎下つた處に、表側からしつかりと附けます。別に幅四糎五粍、丈二十三糎の布を三糎幅に折つて、胴紐の附目を覆ふやうにしながら、後身頃へ平らにまつり付けます。（第十八圖の後參照）

ポケツト

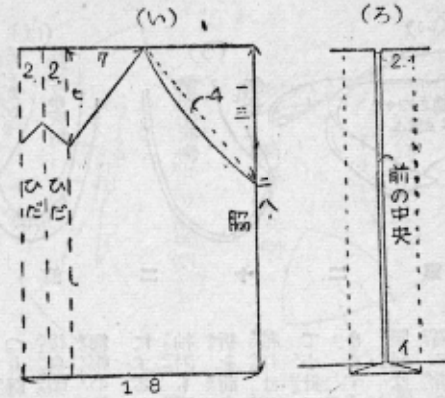
口を三つ折にくけて、出來上り圖のやうに、肩から三十糎、脇から七糎五粍位の處につけます。

子供の食事用エプロン

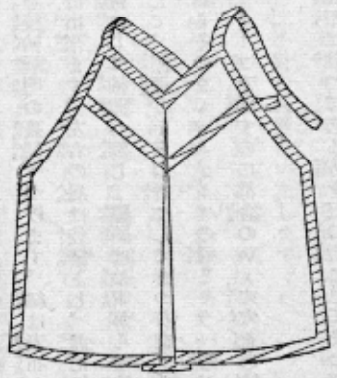
クオル、手拭、ハンカチ、その他の小布を利用して、小さい食事用のエプロンを作ります。

材料　並幅二八糎丈の小布、淺黄色のテープ少々。

裁方　第二十三圖(い)のやうな寸法に標をつけて截ちます。下の恰好はこれにとらはれずに自由にいたします。

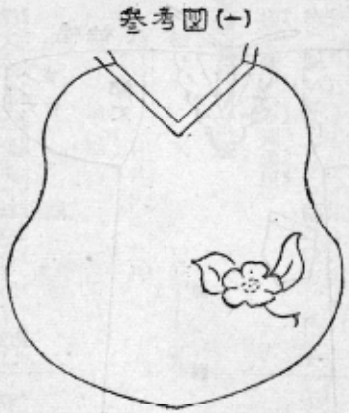


出來上り圖

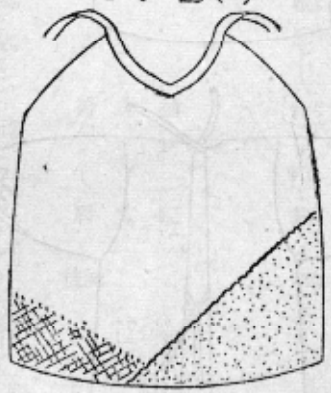


第二十三圖

縫方　まづ額刳の下五糎位の處に用意してある淺黄色テープを圖のやうに入れて、腕のかざりといたします。テープの兩側をミシン又は細針で縫つてから額の刳を除いた他の三方をも同じ色のテープで表に緣をとります。前の袋襠は(ろ)圖のやうに、前の中央から右へ二糎の標を折山として、二種の襞(イ)を作り、これを中央の標に重ね、左も同樣にして平らに落ちつかせ、額刳の所は、襞で押へておき、キヤラコの裁落し布で三糎位の斜布をつくり、額刳の後を見返しにつけます。見返しは衿刳に合せて中表に重ね、細かく縫つて後でまつります。終りに左右の紐を裏から衿刳りの端にしつかりと附けて仕上げます。



(一)圖參考



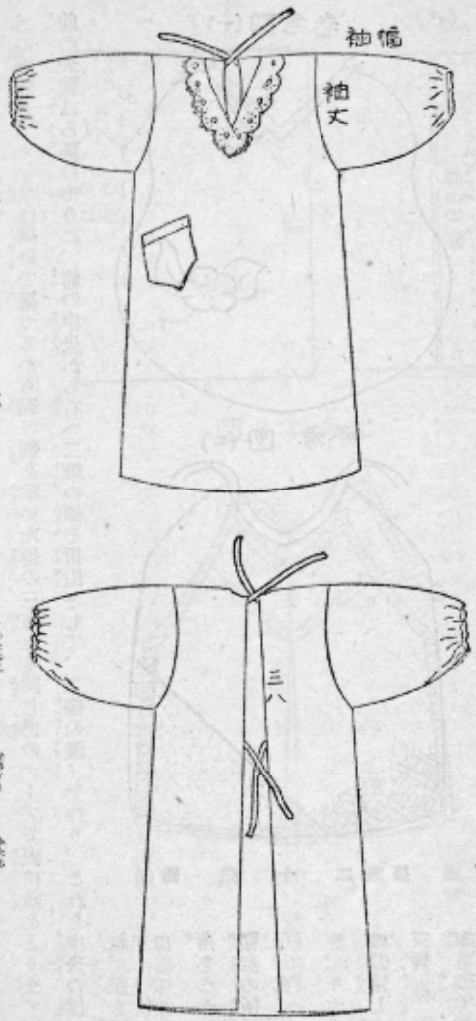
(二)圖參考

第二十四圖

附　型を一寸かへますといろ〳〵面白いものになります。一二參考圖を附しておきましたから御參照下さい。第二十四圖(一)は簡單な刺繍を入れ、(二)は小布を接ぎ合せたものであります。

一四、雑の部

割烹前掛



第一四圖

最も基本となる普通のかたちのものを記しましたから、これを標準として、少々づゝ形をかへるやうにいたします。

材料　キヤラコ幅（九一糎幅）丈二二二糎。

裁方　第二圖（いはキヤラコ幅の裁方、（は）は天竺木綿幅（七十六糎）もの〻裁方を示しました。兩方とも袖の裁方は同樣です。（ろ）圖參照）

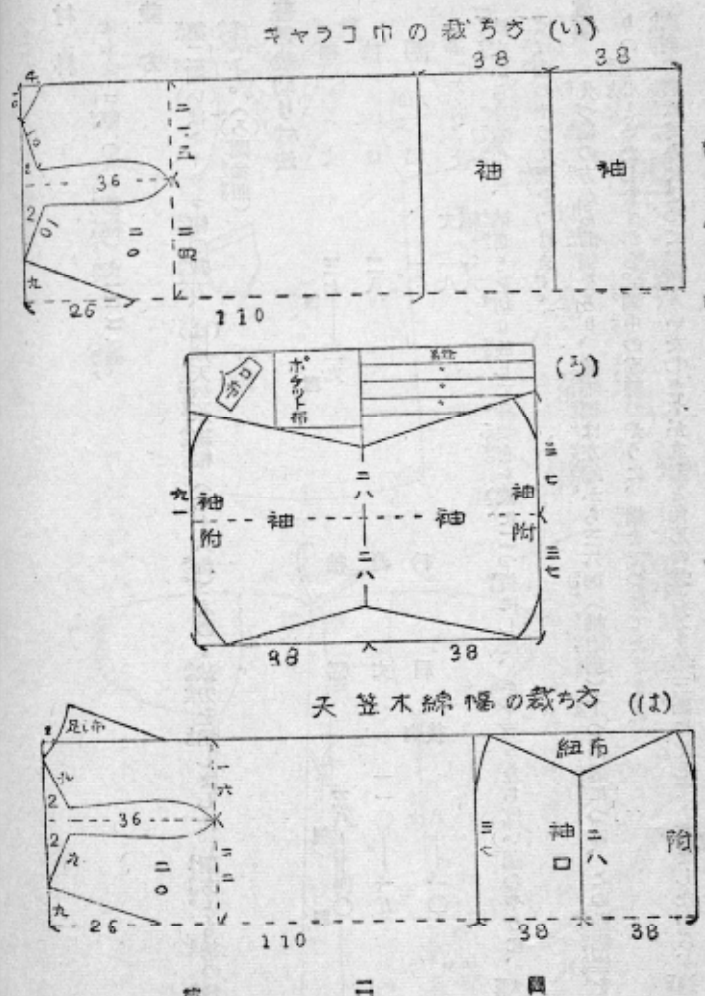
普通裁切り寸法

袖丈	三七―三九糎	袖幅	三八―四〇糎
袖口	二八	身丈	一一〇―一五
肩幅	一〇	衿肩後胸	九八―一〇
ポケット丈幅	一八一六		

總丈から身頃布と、袖布とを切り放して身頃布を縱に二つ折にして、キヤラコならば（い）圖のやうに、天竺ならば（は）圖のやうに標をつけます。

身頃　先づ輪の方から前幅をとり、前幅標は左端から三六糎（袖附刳）下つた處につけ、この前幅標を袖附刳りの中心といたしますから、圖中の點線のやうに、端までつけておきます。

胸刳の形は好みによつて、色々いたしますが丸形と角形の裁ち方を第三圖に記しておきましたから、適宜にと



第三圖

りします。そして、肩幅は一〇糎として下りを二糎として圖のやうに標をつけ、肩幅標から脇明標までの三分の二は肩から眞直ぐに、それから下へ丸味をもたせて、前幅標の處まで曲線を引きます。これが脇刳になります。後も同樣にいたします。後衿刳はキヤラコならば刳は四糎に、明一〇糎といたしますが、天竺は幅がせまいので足し布をいたします。足布幅は四、五糎でよろしい。そして、衿刳に合せて圖のやうに刳つておきます。

袖　第二圖(ろ)のやうに袖布から袖をとり、殘り布から紐、ポケット布をとります。

袖縫方　袖口先の外袖五糎の處に、五粍の切込みをつけ、この五糎の間を細くまつり紐にします。

次に袖口先五糎を殘して袖下を縫ひます。縫目は内袖の方に折つて、内袖の縫代を四粍に切り落して外袖の縫代で包んでまつりぐけにします。そして縫ひ殘してある處をまつり、袖口には一糎幅のゴムテープを通して一糎五粍位の幅に折つてまつります。

身頃　後肩を五粍程ひかへて肩を縫ひ合せ、折は後に折り伏せてまつります。

胸廻りには見返し布をつけるか、又はレースを付けます。いづれも斜布を用ひます。衿刳りに衿紐を付けます。

裾ぐけは出來上り幅二糎の三つ折りぐけにします。

袖附　身頃の絞代四粍をひかへて袖の山と肩の山とを縫合せ、折りを身頃の方に返して袖の方で包んでまつりぐけにします。

ポケット　好みの型に形を作り、位置は右袖附から五糎下げて、脇から六糎ほど前に寄せてつけます。

紐　衿紐は出來上り幅一糎位、後紐は二糎位にします。後紐の位置は肩から三八糎下つた處で丈は二七糎、衿紐は三〇糎位が適當です。

サロンエプロン

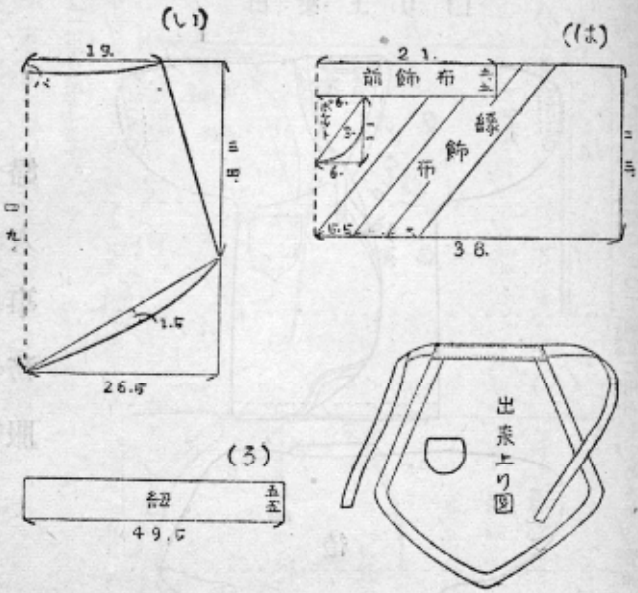
材料

白キヤラコ（九〇糎幅）五三糎、縁用の綿或は模様もの（地質はギンガムなどがよろしい）二三糎。

裁方

第四圖(い)のやうに、用布を縦に眞二つに折つて、寸法通りに標をつけます。そして殘り布から(ろ)圖の寸法の紐布をとります。長さが足りない時には接ぎ合せます。

次に綿布も(は)圖のやうに、縦に眞二つに折つて輪の方で前の飾布とポケットを取り、あとは綿布に寸法通り斜に三本切つておきます。



第四圖

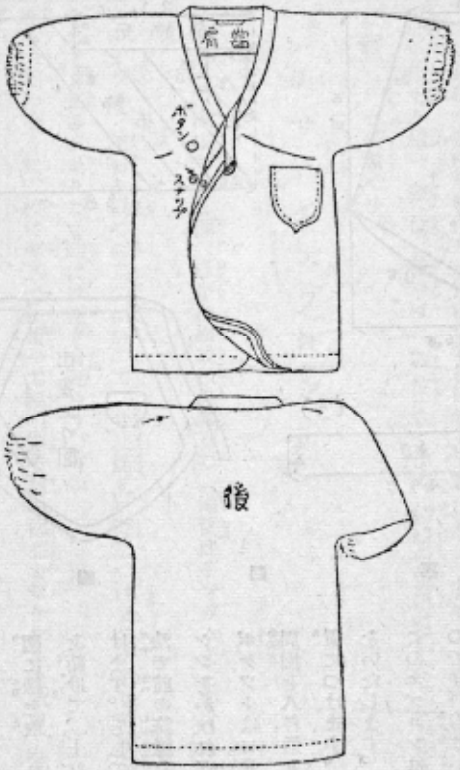
出來上り圖のやうな簡單なものですから、まづ三本の斜布を接ぎ合せて、周圍に綿を取ります。次にキヤラコの紐を結けて、上部の兩端に確つかりとつけます。そして斜布のつけ方と同じ方法で前の飾縁をつけます。縁には飾ミシンをかければ更によろしい。

ポケットは口元を三つ折にして縫ひ、周圍を八粍通りに折り伏せて適當の位置につけます。これでアイロン仕上げをいたします。

このエプロンは給仕用の氣のきいたものです。形はいろ〳〵に工夫すると面白いものになります。

婦人事務服

出來上り圖



第五圖

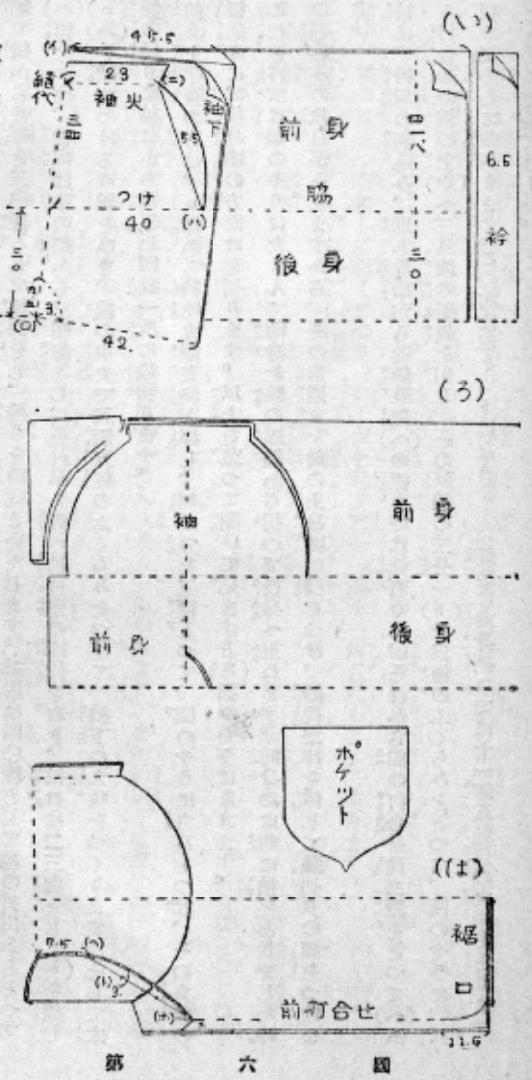
材料

ラシヤ幅（一六六糎）一五五糎、肩當布、スナップ二組、二糎五粍の飾釦一個。

この事務服はラシヤ幅もので裁つ時には身丈と、袖丈とを加へた寸法があればよいのですから骨丈の長短によつて適宜に用布を定めます。普通大幅ものでしたら身丈と袖丈とを加へたもの

裁方

用布を第六圖（いのやうに縦に眞二つに折り、輪を手前にして平らにおきます



第六圖

1 二倍を要します。

先づ右の端から六糎五粍幅に衿をとります。

次に左端から耳の方で袖丈の分として図五糎五粍(イ)と標し、輪の方では、四二糎ロを標して、二つの標を通して折り返しますと、布端が少々斜になつて、(い)図のやうに、後前の身頃の上に重なるやうになります。次に右端で輪から後幅を三〇糎として脇標をし、殘りを前幅といたします。袖附は四〇糎として袖の折山からとつて(ハ)標をつけ、袖幅は脇の標から三四糎とし、それから先へ袖口先の縫代を取り、袖口は二三糎として(ニ)を標し(ニ)(ハ)を結びつける直線をひき、線の中央で五糎五粍のふくらみをつけて、袖下の丸味をつくります。そして太線の通りに袖口から袖下を四枚一所に裁切ります。

前身上半身の方は、ロ標から衿明九糎五粍と標し、刳の分を三糎とつて、図のやうに丸みをつけ、その丸味の標通りに、後身頃の方だけを切ります。以上を裁つて開いて見ますとろ図のやうになります。

これを再び(は)図のやうにたゝんで前身を脇の點線から折つて後身へ重ねます。前身には前に袖をとりました時の刳込みの裁目がありますから、その形通りを前の上身頃に標をつけ、縫代だけを伸して裁切りの標をつけます。

衿は、衿肩の切込み、即ち肩山から七糎五粍(ヘ)の標までは眞直ぐに、それから前の打合せ代二糎をとつて(ヘ)から打合せの線の上ホへ三八糎の斜線をひき、その斜線の三分一(ト)で三糎のふくらみをとつて、図のやうに、衿刳の標をして裁切ります。この布はポケットになります。最後に前身裾口では十一糎五粍位の丸味をとります。

これで全部裁てました。

縫方

この事務服は殆ど縫目がありませんから、袖下と前を合せて衿をつけ、周圍の始末を付ければ仕上ります。

前身　前の上下を合せ、縫代は割つてまつります。

袖　袖口下から縫ひはじめて脇下に縫ひ廻し、脇の輪になつてゐる處で縫目を消し、縫目は前へ折つてまつります。袖口は三つ折にして細くまつり、テープを通す穴を一糎か一糎五粍もあけておきます。

裾と打合せ　前身の左右の端(打合せ)と、裾口は二糎の折返しをつけて、ぴつたりと裏へ折つておき、なるべく同じやうな色合のモスリンか新モスで四糎位の衿布を作り、これを見返しにつけます。裾先の丸みはさきに、細針に縫ちぢめておいて見返しをつけます。そして見返し布も亦伺様にちゞませ、折目は見返しの方に折り、見返しの幅は一ぱいに折つて細かくまつり縫にいたします。

肩當　肩當は有合せの布で普通コートの肩當のやうに大きくとるのもよく、また衿廻りにだけつけることもありますので各自の好みにいたします。

衿　先にたつてある衿を中表に身頃と合せ、縫代は八粍にして衿先から肩山まで平につけ、肩廻りでは衿をゆるめに、背の兩側四糎位の處は思ひ切つて衿をつらせて付けます。縫目は衿の方へぴつたりと片返しにして端布で品を作つて背の中央へしつかりとまつります。衿幅は二糎にして餘分を折り伏せますと、衿に一枚芯が這入つたやうになつて、しつかりとします。

兩方の衿先は打合せの線山を並行するやうに縫つて衿をまつります。このとき、上前の方に釦掛をつけておき

ます。

釦かけは、共布で細い撚りぐけとし、衿先を縫ふときに、しつかりと縫ひつけます。

ポケット　衿剥の布で好みの恰好を切り、口元は細い三つ折のまつりぐけとし、他の三方は八釘に折つて上前の左、都合のよい位置へ口元のほころびないやうに半返しに縫ひつけます。

釦とスナップ　以上で大體仕上りましたから、アイロン仕上をして上前の衿先から十七糎ほど下つた處の打合せと、これと丁度打合ふ下前にスナップをつけます。次に下前の衿先きと上前の脇、これも前を合せて出合ふ處にスナップをつけます。或はコートのやうに細い紐をつけてもよろしい。次に、釦は、先につけた釦かけと出合ふやうにしつかりとつけます。釦及びスナップをつけますとき、布の一重の處に付くものは、小切を二枚位合せて、力布をつけておかないと、丈夫になりませんから、裁出しの小布を小さく丸く切つて當てゝおきます。

防寒用下着（その一）

材料

表用布　並幅　二三五糎
裏用布　同　一二五糎
絹布　八糎幅　一四〇糎

仕立上寸法　第四圖

身丈　七〇糎
前幅　褄で一杯
衿幅　五糎五糎

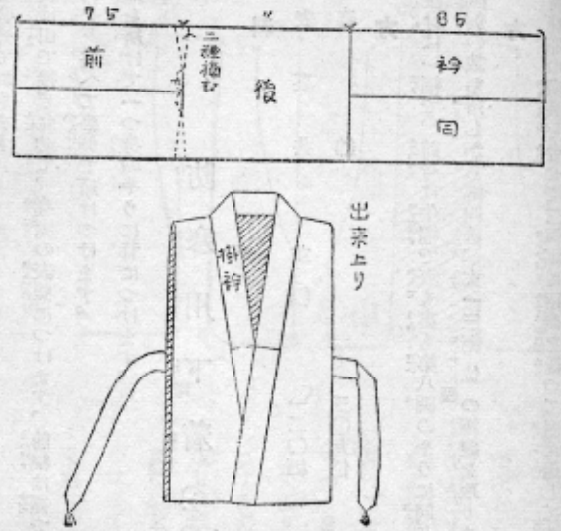
裁方　第七圖

表は第七圖のやうに一つ身の身頃のやうに裁つて衿肩明は丸縫切ります。裏は衿布がないだけで身頃は表と同じやうに裁ちます。

縫方

最初に表裏の肩下りを縫つて折は前に折り隠鉄をかけ、次に前後の脇接ぎをして矢張り裏の方に折つて隠鉄をかけます、今度は衿肩明をよく揃へ褄で表の長い分だけ裏に返らせて、兩脇を縫ひます。この脇は前後の身頃を合せるのでなく表と裏を合せるのです。

裁ち裁



脇が縫へましたら裏返し裏身頃を上にして全體を長く平らに、伸して綿を入れます。
眞綿はよく伸して平らに入れ、アイロンでおちつかせ、前身から手を入れて表に返し、衿附のところを襞でとち合せておきます。
衿は山で接ぎ合せて、身頃の表側につけます、前幅は裾で一衿にして肩から自然に斜につけ三つ衿心を入れ、衿先を整へて裏側で綴けつけます。
紐を綴けて一つ身のやうに背につけます。

防寒用下着（その二）

材料

表裏共　並幅　一二〇糎
眞綿　三〇瓦位

裁方

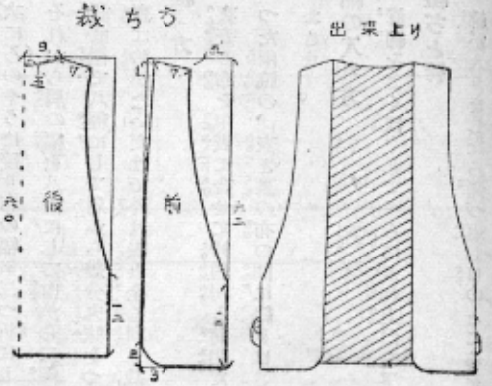
後身は一幅で、前身は半幅で表も裏も第八圖のやうに同じ形に裁ちます。
脇刳の裁ち落しから幅四糎、丈一三糎位の縮紐を取ります。

縫方

縮紐布の表裏を合せて二糎幅に兩側を縫つて表に返しておきます。

防寒用下着（その三）

材料



身頃　前身裏表の布を中表に合せ、脇の裾から一〇糎ほど上つたところへ縮の紐を挟んで、周圍を縫ひ合せます、但し返し口として前脇で一五、六糎ほどあけておきます。
裏に折をつけて全體に眞綿を入れ表に返し、返し口を細かく綴けておきます。左右とも同じやうに縫ひましてから後身にうつります。後身も中表に二枚を合せて周圍を縫ひ合せますが矢張り脇裾から一〇糎上つたところに前身につけた縮紐をつけますから兩方の前身頃が中に這入るやうになります。
返し口は裾で二〇糎ほどをあけておいて、前身と同じやうに裏に折をつけ、眞綿を入れて表に返し、返し口を細かに綴けつけます。
それから前後の肩は絹糸を四本位撚り合せた太目の糸で千鳥にかどつてつなぎ合せます。

袖の部

表用布　並幅　二六〇糎　裏用布　同　九五糎
眞綿　二〇瓦　紐布　半幅　五〇糎

裁方

第九圖(い)のやうに全體の用布から衿布を六五糎だけ取り、これは半幅にして二枚接ぎ合せて使ひます。次に(ろ)のやうに殘り布の幅を二つ折にして後丈を七五糎にして丈を折り、そこで衿肩明を八糎五粍切り込み、それから肩の幅を八糎にして山から二糎落します。褄の角も八糎位丸く落します。

前は褄で八糎にして肩から幾分丸味をつけた斜に裁ち切ります。

裏は衿がないだけで外は表と全く同じ裁ち方にいたします。

縫方

裏表の布を中表に合せて衿肩明と前明だけを殘して他をぐるりと縫ひ合せます、この時肩山から三五糎ほど下つた兩脇の、表と裏の布の間に紐をはさんでしつかりと附けます、折は裏の方に折つて全體に隱縫をかけておきます。

綿の入れ方

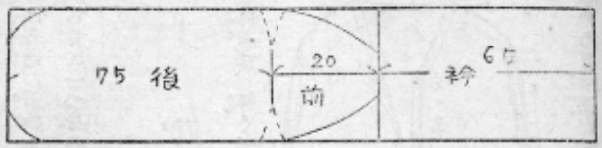
眞綿をよくほぐして平らに入れ上からアイロンをかけて綿を落ちつかせて表に返します。

綴ぢと衿

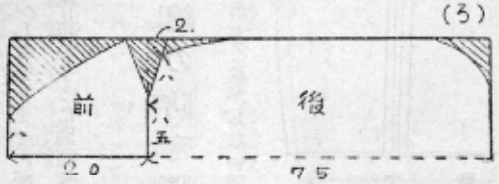
綿が入りましたら先づ返し口のところを裏表綴ぢ合せ、それから胴に出來上り圖のやうにところ〴〵紐綴を入れて綿の動かぬやうにしてから衿附にうつります。

裁ち方

(い)



(ろ)



出來上り

第九圖

衿は廻衿でも、ベチ衿でも宜しいのでありますが、衿の下の方は胴がなくて衿だけになりますから衿が細いと胸の合さりの具合が悪くありますから下の方はいくらか廣くしておきます。

つけ方は普通の着物と少しも變りませんが下の方は衿だけになります。

それから背に一つ身の背縫のやうに別布で紐を縫けてつけ、前で締めるやうにすると一層着具合が宜くなります。

眞綿の防寒肌着

眞綿の肌着は、輕くて着ぶくれがしないで大變温かいものであります。

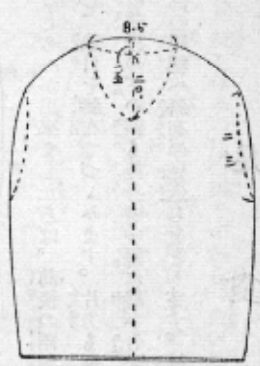
袋眞綿の襦袢の作り方

材料

袋眞綿一枚、緣布幅二糎五粍、丈一五〇糎位、スナップ三個

作り方

ひめ糊又は生麩糊を薄く水にとき、袋眞綿の兩面から霧吹きで吹いて乾かしておきます。次に、眞綿の袋の方を肩にして第十一圖のやうな寸法に衿刳をし、前身頃を中央から切り開きます。後衿刳を一寸五粍深くしたのは、衿がのぞかない爲めで、これは着物の繰越しに合せて刳りますと更によろしい。前の衿刳も好みによつて適當にいたします。

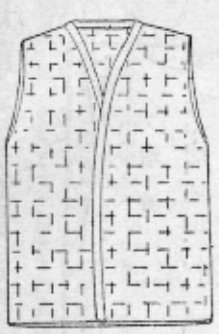


第十一圖

脇は兩手が樂に通る位に袖刳をいたします。凡そ二三糎位で間に合ひます。

裁目は糸でかゞつてもよいのですが、細い緣布でくるんで置ぎますと、仕上りが美しく見えます。斜布か緣布は有り合せの布を接ぎ合せて用ひて結構です。そして前にスナップをつけて出來上りといたします。

また第十二圖のやうに衿をつけて肌襦袢の型にいたします。衿幅は下に着るものですから矢張り狹めにいたします。袖ぐりは緣布をつけるか或はかゞつておきます。そして圖のやうに身頃の全體を縱橫に刳しておきますと、眞綿の伸びちゞみを防ぐことが出來ます。



第十二圖

材料

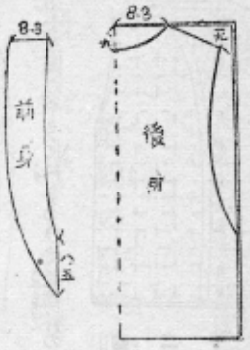
角眞綿　三〇瓦、斜布　三五〇糎位

角眞綿の羽織下

作り方

角晒綿を後身頃の分として幅三四糎、丈五〇糎位の（この丈は各自の寸法に合せて適當に致します）長方形に伸し、前身頃として第十三圖のやうな形に丈四四糎位に作り、糊を吹いてアイロンをかけて乾かし、十文字又は菱形に剪しておきます。（ミシンをかければ尚よろしい）

裁ち方



第十三圖

下ごしらへが出來ましたらば、前後の兩肩を合せ、前身の肩に斜布をあてゝ一所に縫ひ合せ、折目は後身にかへし、裁目を斜布でつゝみます。片方も同樣にします。

次に前身の下の斜も後身頃の脇に縫ひ合せます。それから、一方の裾の角から前明、衿肩明を通つて、裾まで全部の周圍へ斜布の見返しをとります。袖刳も同樣にいたします。

足袋下

材料

晒綿　一枚、斜布少々。

作り方

足袋型紙を作るのは面倒ですから、古い足袋をといてそれを原型にいたします。然し、全部といて型を作りますと、縫目が多くなつて嚴心地がよくありませんから、第十四圖のやうに、甲の中央と爪先麺をはなして、あとはそのまゝつけておき、こはぜかけ、と足袋の足首の方を切りとります。この深さは好みによつて定めます。

裁ち方

第十四圖

原型が定まりましたらば、周圍五粍位の縫代をとつて晒綿をたちます。

袋晒綿は先に開いて糊を吹き、乾かしてミシン、（又は剌ぬひ）をかけておき、それから型に合せて縫代を加へ（左右兩足をたちます。（注意しないと同じ足ばかりになりますから、片方は型紙を裏かへして裁つことを忘れないやういたします）

初め内甲と外甲との眞中を中表に合せて縫ひ、縫目を割つておき、裁目はまつつておきます。次に、甲の後を縫ひ合せ、底と合せます。爪先きの縫ひ合せは指の先の方へ甲布のゆるみを寄せるやうにして縫ひ合せます。縫目は全部まつつて置きます。足首のところは斜布で包みます。

パンツ

材料

袋眞綿一枚、ゴムテープ腰廻り及び脚足廻り、（但しゴムテープを伸して計る、）それにテープの重り代二、三糎を加へた丈。

作り方

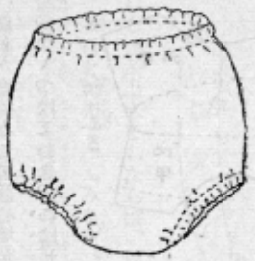


圖　五　十　第

袋眞綿に糊を引き、型紙に刺し縫ひ又はミシンをかけ、袋の方を下にして兩側に足口をあけます。この寸法は體格によつて適宜にいたします。

次に、ゴムテープを足口に入れ、眞綿で包んでぐるりとミシンをかけ、腰も同樣テープを通してミシンをかけます。手籠のときには斜布の見返しをつけるとしつかりいたします。

袋眞綿の丈の長すぎるやうなときには適當に丈を切つて身體に合ふやうにいたします。

防寒用長胴着

材料

表用布　五八〇糎位

裏用布　同

眞綿及び紐布

裁方

身丈は長繻袢より三、四糎短く、袖は半幅の筒袖といたしますから袖丈は二〇糎位、（袖付寸法によつて定めます、袖を全部つけますから長繻袢の袖付よりはやゝ小さくいたします。）衿は別衿でもよくまた第十六圖のやうに摘み衿としてもよろしい。

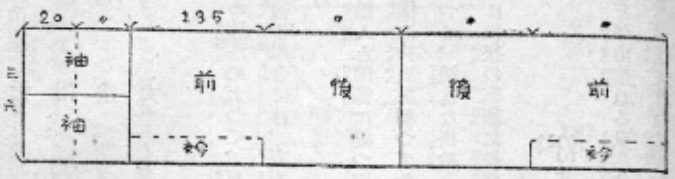
裏も同樣に裁ちます。

標附け方

長繻袢を標準として

身幅　同寸

裁ち方



防寒用長胴着

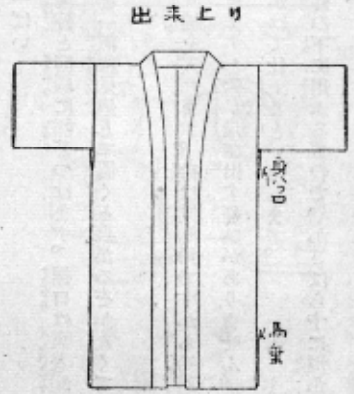


圖　六　十　第

出來上り

身丈　三、四糎つめる　袖丈　袖付と同寸乃至二糎つめる
袖附　全部つける　身八つ口　一二、三糎
馬乗　二〇糎乃至二五糎　衿幅　肌着衿と同寸
袖丈　一ぱい　袖幅　一ぱい
綿　一ぱい

以上の寸法によつて、長襦袢と同様に裾をつけます。裾口は裏表絹の場合には毛抜き合せでもよいのですが、その他の場合には、表布を一糎程見返して置くと裏がのぞかなくてよいものです。袖口も同様にいたします。

縫方

普通綿入と同様に縫つて綿を入れます。衿は摘み衿ですから衿肩の處に足し布を入れます、また着物や襦袢と同様に衿肩を剝つておきますと衿が飛び出す憂ひがありません。出來上りましたらば、後に長襦袢と同様に紐をつけ、適當な掛衿をかけて仕上りといたします。

これは極寒の季節に長襦袢の下に用ふるもので、かさばらずに暖かいものであります。

汗よけ兼用のお乳おさへ

着物を澤山重ねる秋冬には、その必要を感ずることも少いでせうが、初夏から盛夏にかけては肥つた人はお乳おさへ、汗よけの必要を感じ、痩せた人は、背中や胸部の痩せた骨格をそのまゝに見られるやうな感じがするものです。その兩者のいづれにも用ひられる汗よけと乳おさへを記します。

材料

ガーゼ並幅一八〇糎、たすき用木綿テープ、斜布及び紐用布少々、スナップ二組。

裁方

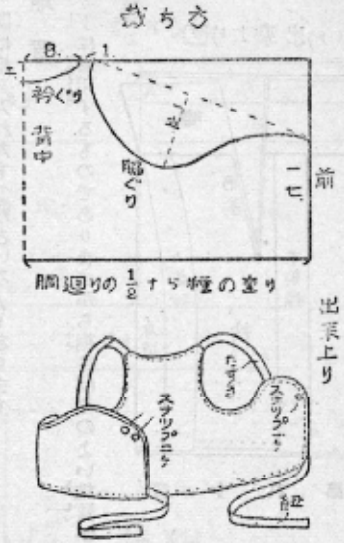
出來上り圖のやうに、背中から前にかけて全體をおほふやうな形のものですから體格によつて多少の相違はありませうが表裏とも第十七圖のやうに裁ちます。

縫方

表裏を合せて、斜布で周圍にぐるりと緣をとり、肩から前に體に合せてたすきを付けます。次は左右の前の上部にスナップをつけます。この乳おさへは前で合せ目が重なる筈ですから下前の方は重なりだけ奥につけます。但しスナップは二個並べてつけておきます。これは、用ふる時の氣分で弛くりしたり、つめたりすることが出來て重寶です。

倘下端には背中を一と廻りして前で結べる長さの紐をつけます。

以上で出來上りましたが用布は晒、メンネル等季節によつて用ふることもよろしい。夏は汗よけとなり冬は肌



第十七圖

普代用となつて温かなものであります。

襦附裾除け

裾除けには洋服のスカート式にぐるつと輪に仕立てたもの、長襦袢の裾のやうに衿をつけたもの、上前下前の間に襠を入れたものなどいろ〳〵ありきす。

地質

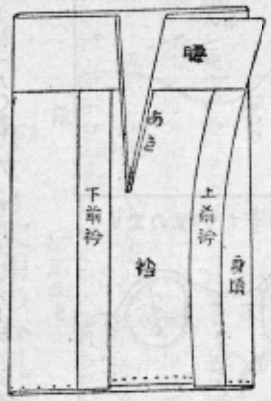
下に着用するものでありますから裾さばきのよい地質が適當でありますが、冬向などには防寒の點をも考へて地質を選擇します。メリンス、モンパレス等適當であります。

表用布　ヤール幅一五〇糎（共襠の時はこの他に二〇糎位要ります）

普通の大幅物（七二糎幅）一七〇糎と外に並幅七二糎）

裏用布　七二糎幅　一五二糎

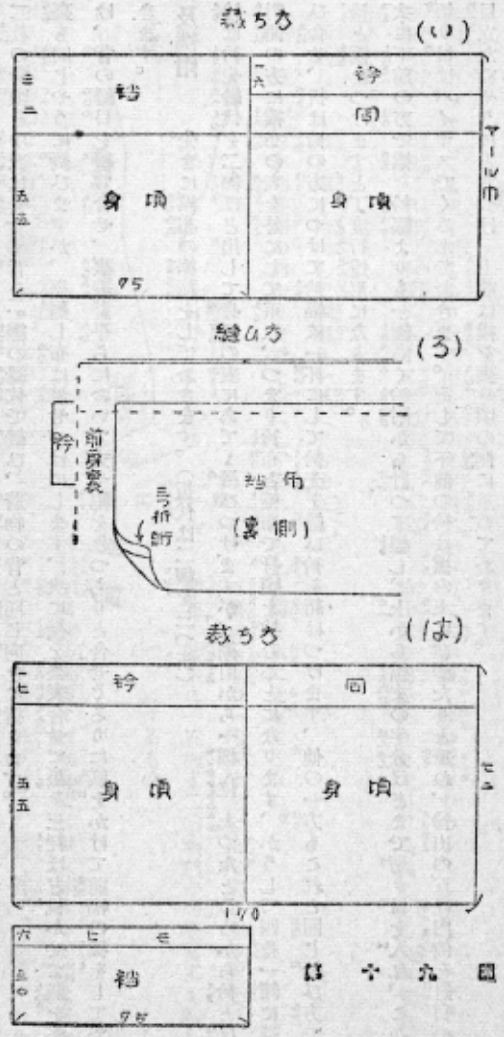
第十八圖（切り來出）



腰廻り布　並幅　一三三糎

仕立上寸法

丈　踵廻し　一三〇糎位



第十九圖（は）

裁方

第十九圖（い）のやうにヤール幅の時は一身頃から襠を取り他の一身頃から衿を取ります、普通の大幅の時は（は）圖

のやうに兩身頃から衿を一つづゝ取り、襦は別布を並幅から三〇糎丈だけ使ひ殘りの細い布は紐にします。

縫方

二枚の身頃を中表に合せて背を一糎の縫代で縫ひ、着物の背と同じ向きに折ります。裏も同じやうに縫ひますが、裾廻し布は被せづけにします、次に裾を裏表合せて裏を三粍ほど出かせて躾をかけ、背の縫目を綴ち合せ、裏表を平らにおいて丈や幅をきつちりと合せぐるりに躾をかけて前幅の標をしておきます。

衿及襦附　先きに襦布の裾綿をしておきます。（折代は二糎を三つ折）

衿は衿先縫代を二糎ほど出して身頃の表にあてゝ縫ひつけますが、褄山から一糎位上つたところから衿と反對側の方に襦布の表を外にして重ね、つまり衿布と襦布で身頃を挟むことになります、かうして四枚一緒に縫ひ合せ、折は衿の方につけて衿幅は一杯にして衿先を縫ひ衿を着けつけます、他の一方もこれと同じ縫ひ方で衿と襦をつけますと丁度行燈形になります。

次に下前の方で襦を衿幅よりも一糎廣く衿附から計つて標し、上から襦丈の半分ほどまで切り目を入れ、この切り目はバイヤスでくるんでおきます。そして下前の衿は襦の上にぴつたりと重ね、衿山の五粍内側を針目の目立たぬやうにとぢつけ、上前は襦を裏身頃の側に重ねておきます。

腰廻り　腰廻り布の幅を二つに折つて、身頃の幅に合せて兩端を縫ひ、身頃と中表に合せて縫ひつけますが、下前の方は衿と襦とを重ね、上前は襦を裏身頃に重ねたまゝつけます、そして裏側で着けつけます。

裾綴　普通の長襦袢と同じやうに裾綴をして仕上げをします。

股引

股引といひましても男子用もあり女子用もあり又半股引といつて丈が短く膝の所までのものなどあります。その裁ち方にも本裁、中裁、小裁があり又仕立方にも單仕立、給仕立の別がありますが、これを更に次のやうに分けます。

前通し　身頃と襠を給にして胴廻りを單にする仕立方。

筒裏　裾口から膝頭のあたりまでを給にし、それから上と襠を單に仕立てるもの。

第十二圖

口裏　裾口の一〇糎ほどを給にするもの。

膝裏　膝裏に一五糎―二〇糎角の布を當てゝ刺しつぎにするもの。

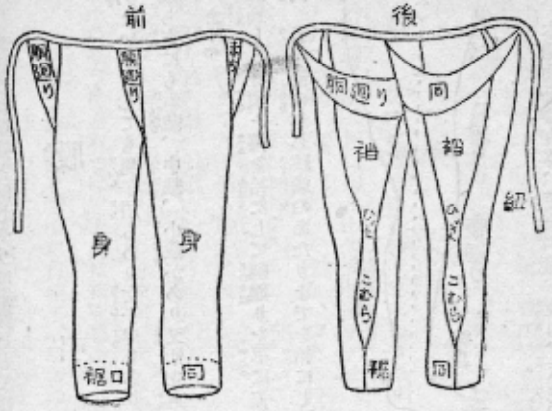
地質

股引にする地質には絹布では秩父絹、甲斐絹などを用ひ、木綿物では晒縞、藍色木綿、金巾、天竺、綿物、カスリなどでも作ります。その他毛糸子、フランネル等をも用ひます。

各部の名稱

第二十一圖を御參照下さい。

裁切寸法と割り出し方



第二十一圖　仕立て上りと各部の名稱

丈　九五糎　腰骨の上から踝まで

跨上　三〇　股の附根から腹部まで
（凡そ丈の三分の一）

跨下　六五　脚の附根から内踝まで
（凡そ丈の三分の二）

膝　三六　跨下の中央から四―八糎上つたところ

股廻り　五五　股の廻りに凡八糎を加へた寸法

膝廻り　四〇　膝廻りに約八糎を加へた寸法

裾廻り　三二　裾廻りを計つた寸法に一糎五粍―二糎を加へた寸法

腓廻り　四一・五　腓の廻りを計つた寸法に凡八糎を加へる

身

上幅　二三―二四糎

股、膝、腓　三六

裾　三二

股　一九―二〇　股廻りから
膝　四　膝廻りから　身幅を引いた寸法
腓　六　腓廻りから
裾　一・五―二

胴廻し丈　七六　跨上の二倍に一五糎――二〇糎を加へる

胴廻し後幅　三〇　跨廻りを二倍した寸法の凡そ三分の一

胴廻し前幅　一二　胴廻し後幅の三分の一

紐

丈　二〇八

幅　並幅五つ割

裁方

裁つ時には中表に丈を二つ折にして袷の時は裏布を下にして輪を右にして左の方の裁ち目を縫へて第二十二圖のやうに標をつけて各用布を順に裁ち切ります。

縫方

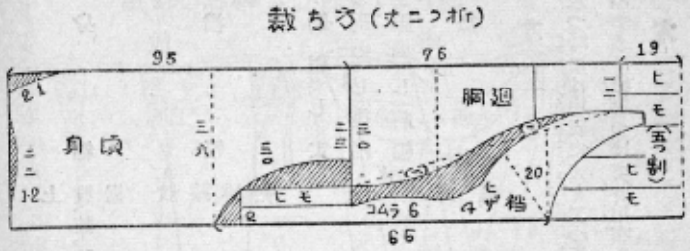
縫ひ方は縮べて二本の撚糸を用ひて一針抜に縫ひます。（撚糸は針に糸を通して糸の撚通り（右撚或は左撚）一本づゝ撚を強くくれ、次にそれを二本一緒にして反對に撚ると一本の太い撚糸になります）

裾合　裏を四粍多く縫ひ込んで折は裏の方に返し、表を二粍被かせます。身頃の裾の割りのところは布のつれないやうに適當に切り込を入れておきます。

内股　第二十三圖（は）の内股は表裏の身で裾の内側の方つまり直ぐな方を挟んで四つ縫にし表に引き返して折を正しくします。

外股　（い）に示したやうな釣合で裾口から四つ縫にし、引き返して折をよくつけ、次に前股上の表と裏を合せて假縫をしておきます。

胴廻し附　（ろ）の胴廻りの裏表布で身から裾の上部を挟んで四つ縫にしますが、胴廻し布の幅の狭い方を身に當て、廣い方を裾に當てゝ跨上を縫ひます。次に胴廻し布



公式　（表身丈＋胴廻丈＋縁）×2＝縫丈

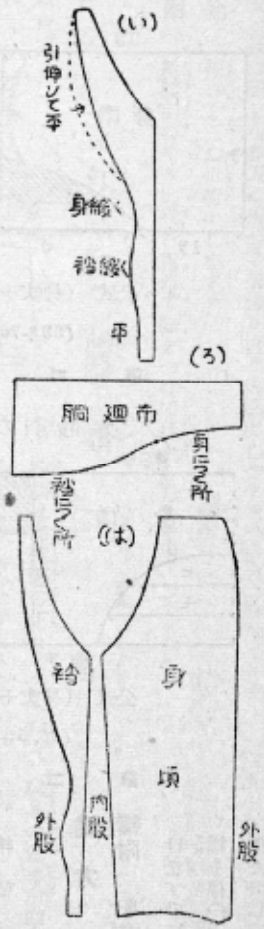
(95+76+19)×2＝380

（裏身丈＋胴廻丈）×2＝縫丈

(95+76)×2＝342

第二十二圖

の上の眞直ぐなところを裏表合せて縫ひますが、裏がふかないやうに裏の方を二粍深く縫ひ込みます。



第二十三圖

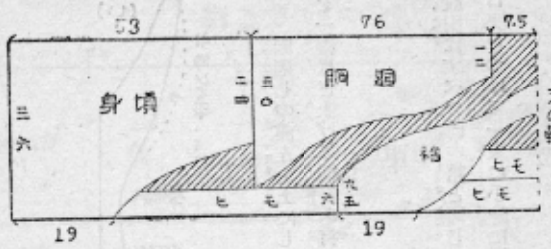
縫附　胴廻しの前左を上にして、一五糎乃至一九糎重ねて假縫をし、左脚の方に三〇糎ほど紐を出し身頃の兩端を一糎ほど上げて待針を打ち、紐を縫ひつけ、紐幅を二糎にして結け上げます。

單股引

單股引はすべて前の袷と同じでありますが、縫代を凡そ四粍ほどづらして伏縫にし、裾口には凡そ七、八糎幅の口裏をつけて一束に小針に縫ひます。

半股引

半股引の裁ち方（一）

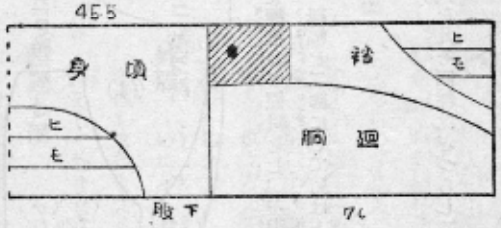


公式（身丈＋胴廻＋補布）×2＝總丈

(53+76+7.5)×=273

第二十四圖

半股引の裁ち方（二）



公式（身丈＋胴廻丈）×2＝總丈

(45.5+70)×2=231

第二十五圖

裁切寸法

丈		五三	糎
股上		三〇	
身幅	下	二四	
	上	三六	
胴廻丈		七六	
胴廻幅	後	三〇	
	前	一二	
紐丈		二〇	尺
襠幅	上	一五	四
	股下	一九五	一九

縫方

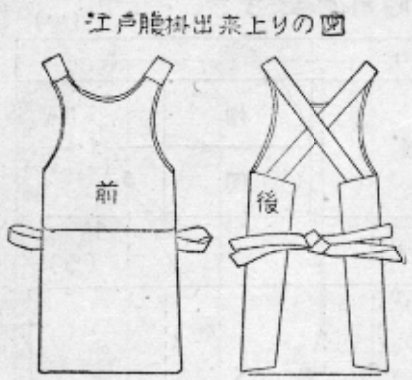
襠附　身頃に襠をつけますのに外襠も內襠も襠の方を四糎先きに出して縫ひ合せ折を身の方に遣して折り伏縫をします。

胴廻し布附　胴廻し布の狹の方で幅の廣い方を後に、狹い方を前に、そして廻し布の方を四糎控へて縫ひ合せ、折は廻し布の方に折つて矢張り折り伏縫にします。

裾術　裾口を三つ折縮にします。

紐附　袷股引のやうに前を重ねて紐をつけて仕上とします。

江戸腹掛

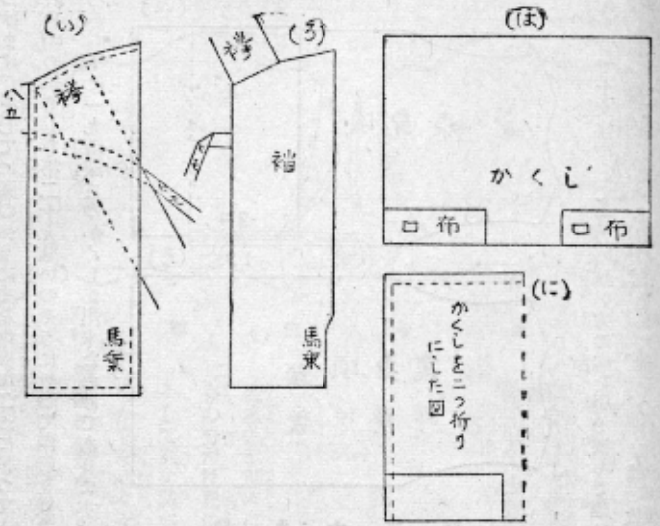


第二十六圖　江戸腹掛出來上りの圖

腹掛は印袢纏の下へ着るもので、職人の仕事着の一つで單に仕立てることもありますが多くは袷に仕立てます。用布は表を紺木綿にして裏は淺黄木綿を用ひ、表は並幅で二〇〇糎內外、裏は並幅一七〇糎內外を用します。

裁方

第二十七圖(い)のやうに並幅から先に紐布を九糎かき落し、殘り二七糎の幅で一〇二糎だけ身頃に取り、(ろ)圖のやうに衿、脇、肩を剩り、かくしの標をつけます。その後から四七糎丈に襠と襷を取り、どちらも幅を二つにして一三糎五粍幅にします。そして襠と襷は(は)(に)圖の樣に上部を斜に裁落します。



第二十八図

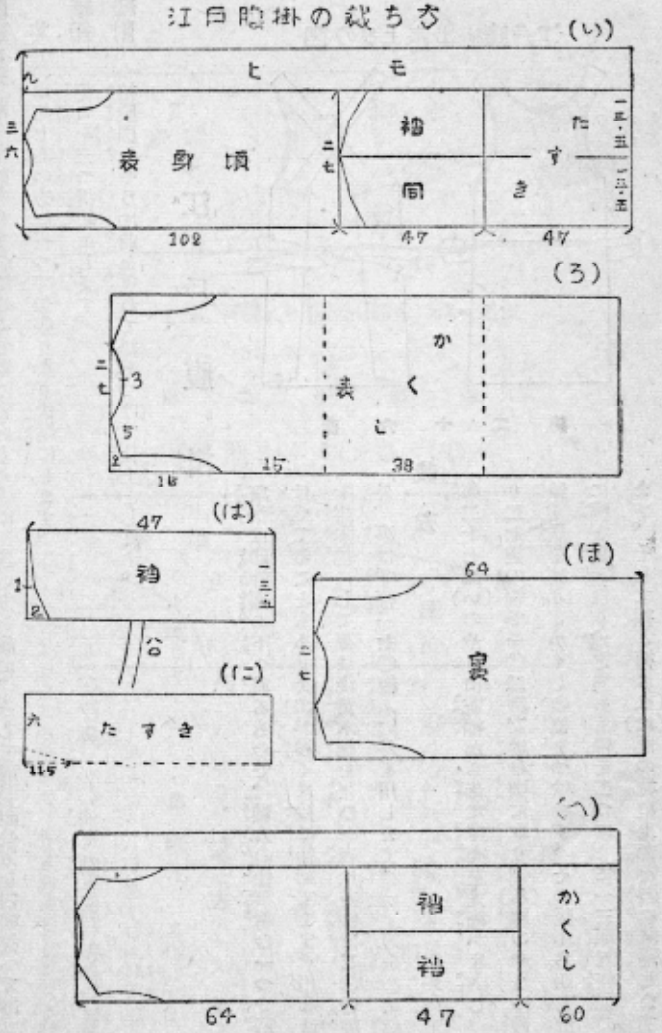
裏は并をつけませんから(ほ)のやうに身頃の丈は六四糎で足り、襟も紐も要りませんが腰布を六〇糎取り、外は表と同じやうに裁ちます。

縫方

紐に芯を入れて紮けておきます。次に襟も芯を入れ輪の方を摘み縫して一方は紮けておきます。但し両方の端はそのまゝにしておきます。次に第二十八圖(い)のやうに表裏の襠布の間に紐と襟とを挟んで(襟は上の斜めに幅の廣い方をはさみ、紐は上角から八糎五粍下つたところにはさみます)三方と馬乗とをつゞけて縫ひ、表に返しますと(ろ)圖のやうになります。これを左右向き合になるやうに二つの襠に紐をつけておきます。

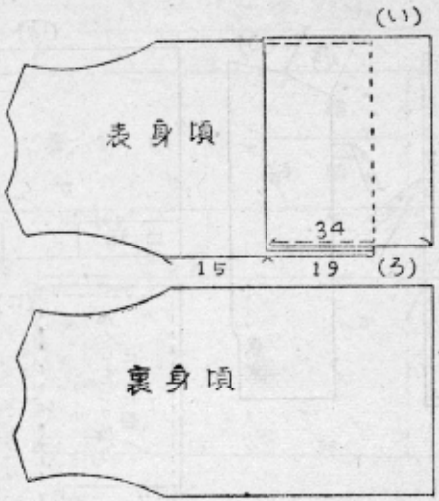
それから隠し布には(ち)圖のやうに表布で口布を

江戸腹掛の裁ち方



第二十七図

つけます。そして(い)圖のやうに丈を中表に二つに折つて上部を縫ひ合せておきます。表身頃のかくしを第二十九圖(い)のやうに折つて兩端を糸でとめておきます、つまり脇刳から一五糎下つたところから下に一九糎深さのかくしが出來たわけであります。



第二十九圖

そして今度は日布のついた襠布の口と、表身頃の右脇の刳から八糎下つたところとを合せて、そこから襠の口明一五糎を縫ひ合せて表に返します、次に襠を表裏の身頃で挟んで上から八糎のところまで縫ひ、一針しつかり返してそれからは襠布と裏身頃で襠を挟んで縫ひますと口が出來ますから一五糎のところで又針を返し、つづいて馬乘まで縫ひます。

左脇は襠口を明けませんからずつと表裏の身頃で襠を挟んで縫ひ、馬乘にうつるところで針を返して身頃だけで馬のりを縫ひ合せます。次に裾が背で十文字にして一方の狭い方の端を肩で挟んで縫ひ、枠刳もつけて縫ひ縫してそこから表に返すのであります、襠の上を表に縫ひつけて表に返し、返し口を綴け、枠刳と袖刳に細く縁をとります。

脚絆

脚絆には大津脚絆、山廚脚絆、鳥足脚絆などありまして、麻糸仕立、綿、甲斐絹などを用ひます。

用布

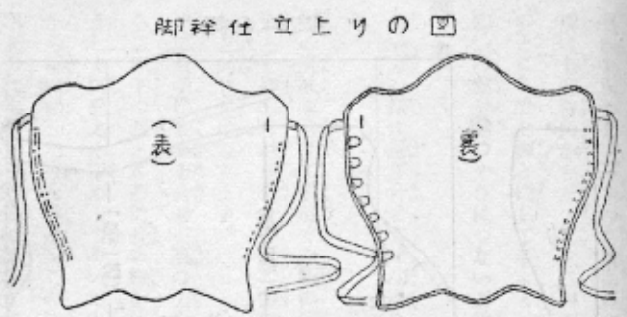
表　並幅　二一〇糎
裏　同　七五糎
コハゼ　一四ケ

裁方

表裏とも別々に丈を二つ折にして輪の方を左において表布の方は縫布の分だけ左に出し右の方の裁ち目を四枚揃へて重ねておきます、そして別に裁つた型紙に合せて襠、身を四枚一度に裁ち、殘りの表布から紐布を七つ割に裁つて七五糎二本と二〇糎二本とを取ります。

型紙の裁方

第三十一圖のやうに並幅三六糎の紙を用意して、はじめ右の下角から左へ八糎五粍に標し、左の角からは六糎五粍、次に九糎と二つを測し、この三つの標から眞直ぐに線を上



圖の通り上立仕袴脚

に伸します。それから打合せの分を下から三糎の所へ標し、この打合せの標と、第一線の交叉點から二四糎を標し、その二四糎の中央に圖の通り眞直ぐに第四線を横に引きます、次に第二線と第三線を二八糎に切つてこの三線をつなぐ線を引き、つゞいて右端へ眞直ぐにこの線を伸します。そして第二線と第一線の間で四糎外へ丸味をつけてふくらませ、右端では一糎上へ出して斜に線を引きます。

袖口の方は第四線を中心にして向ふと手前へ一糎づゝ取り、それから又三糎づゝを標し、この標の通りで左の方へ又三糎を標し兩端二糎だけは眞直ぐにして各標を日當に圖のやうな形に線を引きます。

次に上部(左)の方は第四線のところで矢張り袖口のやうに向ふ手前へ一糎づゝ眞直ぐにし、それから第三線を四分した點を通つて圖のやうに

圖一　袷の裁斷

圖二　袖

圖三　十

曲線を引き直します。上の角は圖のやうに一糎斜に裁ち落しておきます。

褄は上の右角から左へ丈を二四糎と標し、そこで幅を一糎五糎に標し右の角から褄を六糎五糎と標し、第一線のところで七糎と標してこゝと一糎五糎の標へ尺度を渡してその中央で四糎入つたところに又標をつけ、この四つの點を圖のやうにつないで線を引きますと全部出來上りですから線に添つて型紙を裁ち切ります。

縫方

長い方の紐は接ぎ合せて寸法通りに二本、短い方も矢張り二本、それ〴〵一方の端を殘して外を綰けておきます。

褄の裏表を合せて眞直ぐな幅の廣い方に、上から二糎下つたところへ短い紐を挾んでよく留め、斜の方と下の方とを殘して縫ひ合せ、裏の方に折つて表に返します。左足右足は向ひ合せになるやうに注意して紐をつけないと同じ足になります。

次に身頃の表裏を合せ、裏の方を二糎出して褄を縫ひ、それから身頃の外側となる方、つまり曲つた方の上から二糎下つたところに長い紐を挾んで、下の方から縫ひ始めます。縫ひ方は三針毎に一針返して縫ひます。かうして紐をよく留め、つゞいて山の方を縫ひ、次に身頃の內側、つまり眞直ぐな方で裾から七糎上つたところから褄の曲つた方を挾み(この時褄の斜がゆるくて附け難い時は少し縫ひ縮めても宜しいが皺にならぬやうに氣をつけます)一針拔に縫ひます、この時返し口として九糎ほどの間裏を一枚あけて縫ひます、そしてそこから表に返して返し口を綴け合せます、次に紐附と同じ位置に外側から六糎入つたところからコハゼを一糎づゝ

離して七枚つけ、襠の方に内側三糎のところに二本の撚糸で掛糸を附けます。次に緯通しの穴をあけます、その位置は長い緯をつけたところと同じ高さで、七糎入つたところに緯に凡そ三糎位あけ穴かがりをして円留をしておきます。

足袋

第三十二圖

足袋には給と單とがあつて文數は普通六文から十三文までであります。足袋の寸法を計るには文尺を使ひますが、文尺といふのは文錢の直徑で一文は約二糎五粍であります。最近は何糎の足袋といふ樣になつて來ました。

地質

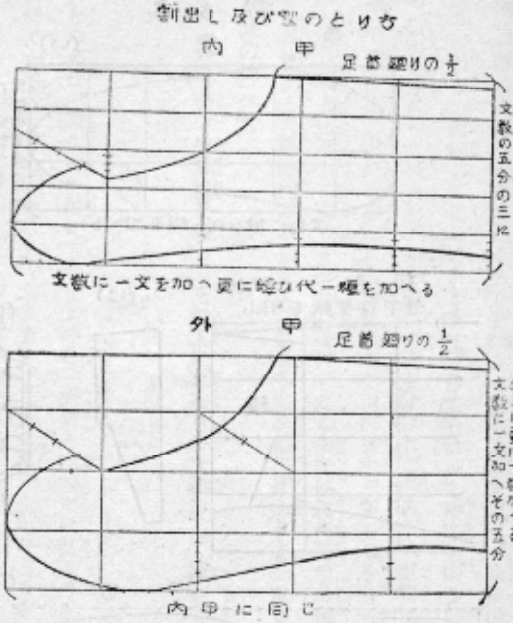
表地には木綿、キヤラコ、毛繻子、コール天、ビロード、縮、羽二重などを用ひ、裏地には木綿、綿ネル、紋羽などを用ひ、底には雲斑か石底を用ひます。

各部の名稱

第三十二圖を御參照下さい。

裁方と割り出し方

第三十三、三十四圖のやうにして型紙を作りますが面倒ですから擧め錦々の足に合ふ足袋がありましたら、それに依て型を取つておいて數つのが便利であります。



第三十三圖

コハゼ附

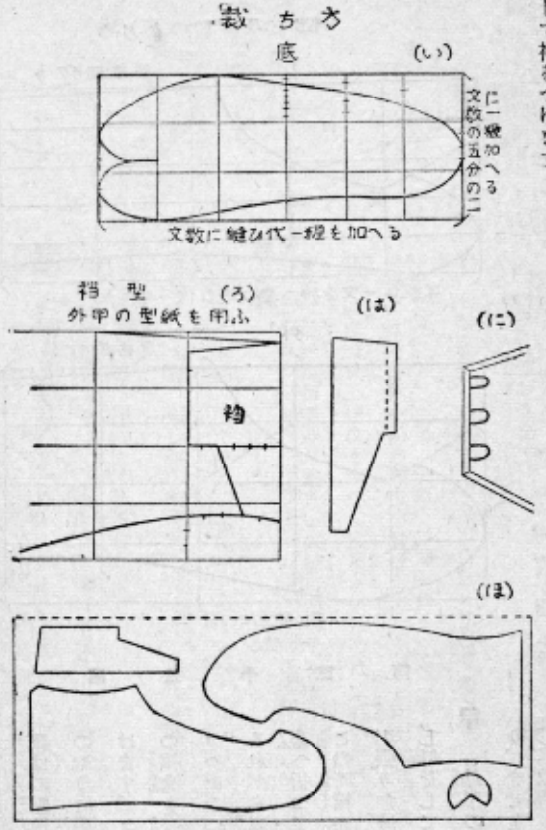
裏の襠布を三十四圖（に）のやうに裏地の表側にコハゼをつけます。コハゼを中にして表と裏の襠布を合せて二本糸で一針拔にそれから表を見返りの折り山から裏へ折つて襠布の上下を縫ひますこの時襠布の下斜の部分は縫糸を引張り加減にして四、五針毎に返し針をして縫ひます。

甲

外甲の筒の上を縫つて裏に折り、きせをかけて表に返します。次に内甲の筒の上と襠附のところとをつゞけて縫ひます。但し下の方から三糎位縫ひ殘しておきます。そして裏の方にきせをかけて表に返します。

裏表の筒口を縫ひ合せた外甲で内甲を挟んで四枚一緒に一針抜で甲から鈎型のところまでつゞけて縫ひ表に返して襠をつけます。

裁ち方



第四十三圖

外の襠附のところに襠金具を挟んで下の方三糎半程残して縫ひ、これに（襠の裏と外甲の裏との間）内甲の縫ひ残した三糎をも挟んで六枚一緒に縫ひます。この時は襠布を少し控めて外甲の襠附の部分を張り加減にします。外甲と襠布とをつゞけて一枚に裁つことがあります、その時は底附をする前に内甲外甲をよく重ねてその厚を竪に二糎ほどと四枚一緒に返し針で縫つておきます。

底附　甲の底につく部分のぐるりを糸で押へておきます。次に底地に甲布を合せて踵と爪先きの内外の切り込みの所を一針通して止めておきます。踵の方は少し甲布を張り目にし、爪先きの方は甲布を縫ひ縮ませながら一針抜きに甲と底とを撚糸で縫ひ合せます。この時五、六針毎にその針で縁を巻きながら縫つて参ります。

掛糸　表に返して形を整へ（木型や木型を用ひますときちんと出来ます）足首に合せてヒロハゼの掛糸をつけます。掛糸は少し太目の撚糸をつかいます。この糸で所に内側の爪先きにも渡渡して乾かす時の用意に縫をつけておきますと大変便利であります。かうして全部出来上りましたら内甲を折り左右を重ねて密封をします。

足袋底の拵へ方

底布の裏へ薄い生麩糊を塗つてその上に裏布をおき重をして乾いてから型紙の通りに裁ち切ります。

琴の袋

お琴の袋は、琴全部を被せてしまふのと、表面と爪端だけ被ふのと、袋のやうに仕立てるのと、聞いたきいで飾紐でかけ合せるのといろ〳〵あります。また山田、生田などゝその流儀によつて多少異る點もありますのでこゝでは普通に用ひられてゐる兩流の仕立方を記します。

用布は大幅物がよく、繻珍、緞子、羽二重、縮緬、富士絹、モスリンなどお琴の種類によつて用布を撰びますが、本格的に申しますと、羽二重や塩瀬に定紋を染抜いたものを用ひます。

裏用布は表布に應じて絹物、モスリン、金巾など適當なものを選びます。

圖 山田流の琴袋

材料

表布、大幅二九二糎、裏も同樣用意しますが、もし小幅ものゝ時は倍を要します。

五 裁方

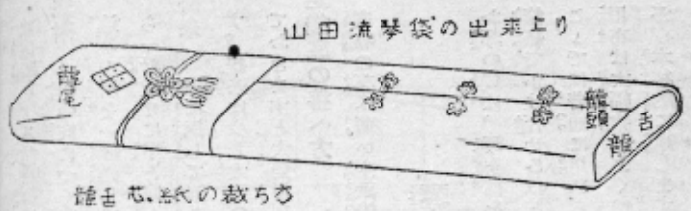
表用布から横布で十一寸かきます。これは圖中に示します、龍舌用布になります。裏用布からも同樣のものをとります。但し小幅ものゝときは、小幅で十一寸をとつておけば間にあひます。

十 縫方

龍舌の芯に入れる厚紙を第三十五圖の寸法に裁ちます。

この厚紙へ用布を貼りつけ、裏側へは青梅縞一枚を當てゝ、裏布と合せ、周圍を表と綴ち合せておきます。

表用布と裏用布とを合せます。但し裏布が小幅ものゝ時には、丈を二つに切つて幅を接ぎ合せて物ごてを當てゝおきます。そして表と合せて、一方の耳を縫ひ、裏に折り、表へかへして、表布が二粍出るやうに折つておきます。次に幅を一杯に合せます。然しこれも亦表の方が裏へ二粍ほど見かへるやうに縫上げますから、裏布をそれだけ多く縫込んでおきます。幅が縫へましたらば他方の縫も同樣に縫ひます。縫縫のとき、出來上つた右側、即ち上前になる方を縫ひますときには、中途で十九糎程縫ひ縫しておきます。



第三圖

圖六十三第

龍舌の處は、先きに厚紙を芯にして作つておいた龍舌布を表裏で挟みづけにします。この時表布の幅の中央と龍舌の平らの處の中央とを合せ、周圍を全部縫ひ合せます。龍舌の周圍よりは、胴布の幅の方が廣めになつて居りますから、餘分の分は龍舌の方から見て右が上になるやうに重ね　一針ぬきで縫ひ縫代の餘分は揃へて切ります。そして表へかへし、縫殘しておいた處を綴けます。

紐のつけ方

表、又は裏用布の縫り布で幅二糎、丈三〇糎位の紐二本を作り、琴に合せて龍尾から十二糎程入つた處の合せ目へ第三十六圖のやうに結んで綴ちつけます。

飾紐は八拾丸位の絹の打紐で梅結びと釋迦結びを三組作り、別に一糎五粍丸の紐で大きい梅結びを結び、外にこれと同じ太さの紐で第三十七圖のやうに房をつけたものを梅結びの下につけます。

との紐も、一方は輪に、一方は釋迦結びにしておきます。紐の長さは、お琴の寸法によつて多少異りますから正確には、各々の琴に合せて定めますが普通は三十八糎位づゝの長さで充分です。

第五十四圖

飾り紐は大きいのを出來上り圖のやうに、袋の端から十九糎の處で、梅結びをその中央につけますが、先づ初めに房のついた紐を縫ひつけ、その上へ梅結びをつけます。

小さい方の飾は龍頭から二十六糎のところへ一つ、あとは三十四糎おきに二つ付けておきます。

最後に龍頭の重ね目は下から四糎程まつりつけて閉ぢめをしておきます。

生田流の琴袋

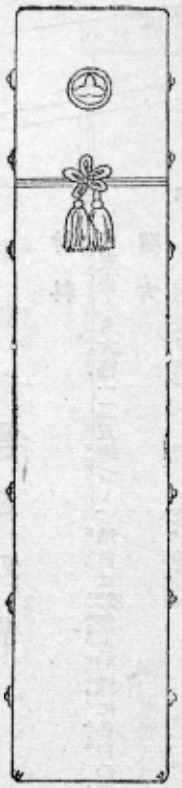
材料

表、裏とも並巾三四〇糎、芯用金巾同上。

縫方

初めに八糎丸の絹打紐で釋迦結び十二個、それに合ふ輪十二個、山田流と同樣の梅結びに房つきのもの一個を作ります。

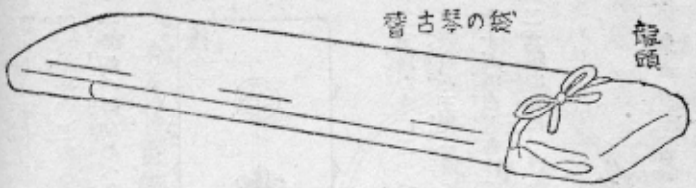
裏用布に芯布をあて、表と裏を中表に合せて端を縫ひ合せます。他方の端も同樣に心持裏をつらせ氣味にして縫ひ合せ、どちらも裏へ折ります。次に輪の兩側を合せます。これも裏をつり加減に待針をうちます。そして一番端の縫初めへ先に結んでおいた釋迦結びを一つ付け、次に二五糎おきに二つ付け、三〇糎おいて輪を一つ、二五糎おきに輪を二つ、つけながら縫ひ合せてゆきます。縫終りの方では一番終りへ釋迦を一つ、それから二三糎おきに二つづゝ、三〇糎おいて輪を一つ、二三糎おいて輪を二つつけます、かうして紐をつけながら芯と表裏と三枚一所に縫ひ合せ、紐の處ではしつかりと返し針しながら兩側を縫ひます。縫終りの方では一番終りへ釋迦を一つ、それから二三糎おきに二つづゝ、三〇糎おいて輪を一つ、二三糎おいて輪を二つつけます、かうして紐をつけながら芯と表裏と三枚一所に縫ひ合せ、紐の處ではしつかりと返し針しながら兩側を縫ひます。たゞ一方の側で返す口を十五糎ほどあけておき、縫目をとゝのへて表へかへし返し口を綴けつけます。飾り紐は出來上り圖の樣に、二五糎おきにつけた上から二番目の輪と輪の中間に綴ぢつけます。



第五十三圖

稽古琴の袋

材料



第四十九圖

裏表とも並幅二六五糎づゝ、外に紐用布六糎幅四二糎丈二枚。

縫方

第三十九圖のやうに、極簡單なものですが、表裏を合せ、兩方の端を縫ひ、龍尾の折返しは三〇糎位として表面に出る方の表裏で挟んで、折返し口を少々あけて他は兩側とも裏布をつらせ氣味にしてぬひます。折返しの角は琴の厚みだけ角を三角につまんで縫ひ、折目は中央に向けて折り返し、表にかへして開きを紐けます。頭の方の布の兩端には紐をつけ、紐の飾留は⊠型にしておきます。

十　琵琶の袋

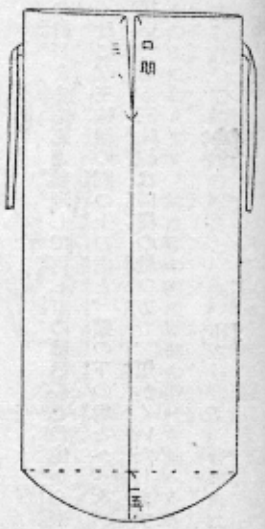
材料

表裏とも大幅一二五糎づゝ、地質は琴袋と同樣に各自の好みに應じます。

縫方

一二五糎の用布を、幅六七糎に裁ちきります。そして圖のやうに、口明三八糎、下の丸味は一五糎の間で丸める樣をつけます。

先づ口明を合せて兩方を縫ひ、一方の縫終りの處で着物の袖口下のやうに、一方を挟んで四枚を束にぬひます。そして下の丸味を縫ひ、縫代の餘分は切りとつて、丸味の格好を調へ表にかへします。返し口を細く、表布が少々見返るやうに紐けて表側に打紐か新紐をつけて出來上りといたします。出來上りは後丈は一一四糎、幅三三糎となります。



第四十圖　切り上未出

三味線の袋

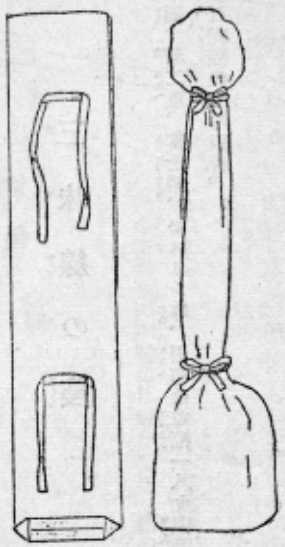
材料

友禪縮緬、羽二重、富士絹、モスリン等、用布は並幅一八九糎乃至一〇〇糎、表裏とも同寸、別に紐布を適宜で四糎五粍幅のもの四枚。

縫方

これは長棹のまゝ入れる袋ですから、表裏共に丈を二つ折にして山をそろへ、丈標は布一杯に標をつけ、一方の端にだけ、その標から六一糎に標をつけます。次にこれを中表に表布と裏布とを合せて、別々に兩端で六一糎を縫ひ合せ、裏布を四粍ひかへて裏に折り、四枚合せて、袖口下のやうに眞直ぐに下まで普通の縫代で縫ひ、

次に底から、他の一方の横へと縫ひ廻します。その時、横の裏布を二三、三糎縫ひのこして、返し口といたします。次に底の厚みを出しますために、底の山と横の縫目とを合せて、第四十一圖のやうに、底の幅を二一糎、奥行を一一糎位として點線のやうに圓端を縫ひますと三味線の厚味と同様な角形の底が出來ます。



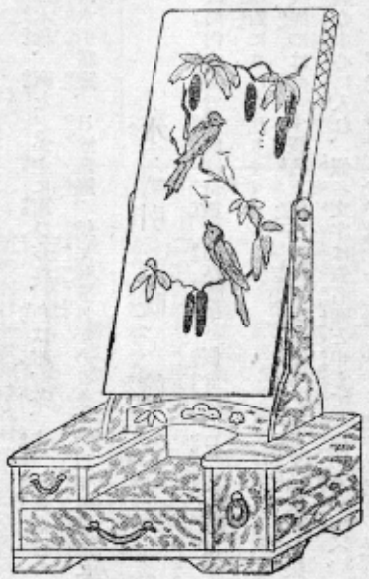
圖一十四第

各々の縫目をきちんと整理して返し口の縫ひ殘しの處から表にかへします。そして、その口を紐けておきます。紐はくけて、三味線の胴の上の處と、頸の下の處とへ、七、八糎だけ中央を縫ひつけておきます。棹の接いである三味線は同樣の縫ひ方で、短かくいたします。

鏡掛

用布の積り方

鏡の丈を計つて鏡の緣の厚さと、後の折返し寸法（普通には一三糎位）に上下の縫代一糎づゝを加つた寸法が用布の丈になります。幅は鏡の幅に兩側の縫代を加へた寸法であります。



圖二十四第

縫方

表裏を中表に合せ、ぐるりを一糎の縫代で縫ひます。但し返し口を一方の端で一五糎ほどあけておきます、折は裏に折り角を整へて表に返し、返し口を紐けておきます。次に第四十二圖のやうに折り返しの分を後に折り、鏡の厚さだけの間をあけて調和のよい色の細い打紐で千鳥掛にかゞります。

このかゞりは千鳥掛に限らず、リボンで蝶結びしても宜しく、又紐を入れる仕立方もあります。

暖簾

暖簾は、昔から商店で、家號、町名、商品名などを染め出して、店頭に掲げたもので、商賣の繁盛を祈る心からいろ〳〵の緣起を祝へたものであります。

材料

地質は木綿、麻などが主に用ひられ、色は紺、茶、赤、淺黄などの色無地ものを多く用ひます。

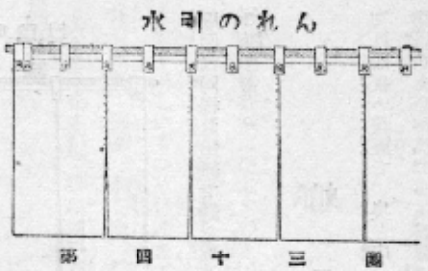
種類は水引暖簾、日除暖簾、蜻蛉暖簾等があります。以下各暖簾について作り方を述べます。

水引暖簾

地質は河内木綿で布數は奇數を用ひます。假令ば間口二間なれば十二布でよいものを十三布とするやうに、偶數は絕對にさけて居ります。

水引暖簾には必ら字假名と漢字で屋號或は苗字、家印又は家紋を染めぬきます。それ等の位置は、家印又は紋は暖簾の中心に入れ、假名文字は假名頭と申して暖簾の右の方へ、漢字は左の方へ入れます。若し屋號と苗字を入れます場合は屋號を假名書として右へ入れ、苗字を漢字で左へ入れることになります。

布接ぎが十三布の時には、中央の三布に家印をそめ、この三布に別に二布を加へた五布を全部の布數から引くと八布殘ります、これを四に割りますと二布づゝになりますから、右から無地二布、次に假名文字、次に無地二布、次に家印、また無地二布、次に漢字、次に無地二布といふことになります。



萬一布數の丁度に割りきれない場合には、殘りの一布を掛け終りにつゞり左の方へ入れておき、尚あまりますときには右の端へ入れることにします。結局左右が三布づゝになることになります。

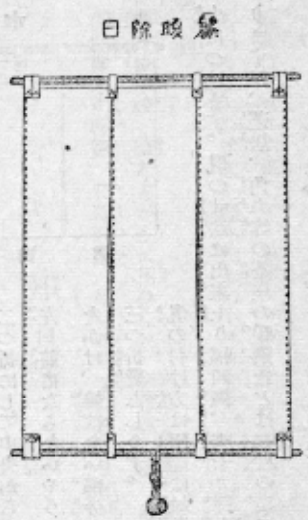
文字、家印が上位置になることはよろしいのですが、下に下りますのは厭ひますから、裁ちます時に注意して下らないやう、眞中になるやうにいたします。

この暖簾は丈五七糎乃至七六糎を通常として丈の半分を縫ひます。即ち布丈を二つ折にして中央から上を二枚づゝ合せて縫ひ、縫目は手前にかへしますと、左り前にならないやうになります。縫ひ初めは念入りに留め、縫目には隱し鉤をかけ、縫はない部分の兩端の耳は二つ折にして耳からげをし、下端の切目は三つ折縫とします。

乳の付け方は兩端は竪乳と云つて二つづゝ並べてつけ、中は、縫目と布幅の中央につけます。乳の寸法は出來上り幅四糎、丈十九糎を普通とします。乳かゞりは、商家のものは☒にかゞりますが、芝居、角力等の茶屋の暖簾などは☓の型にかゞります。（第四十三圖參照）

日除暖簾

第四十四圖のやうなもので、一名太鼓暖簾とも申します。地質、色合は水引暖簾と同樣で、布遣ひは三布、五布、七布などを用ひます。丈は大體一間にしますから二〇〇種ばかりになります。これにも町名、屋號、苗字及び商品名を染出されてゐます。



第四十四圖

縫方は、全部縫つて、縫目の上を更に伏縫いたします。次に眞田紐を十文字に縫付けます。右の肩から左の裾へ、左の肩から右の裾へと斜めに縫ひます。

周圍は同樣眞田紐で緣を取ります。乳は上部は水引暖簾と同樣にして、下部は兩端の紐乳と、縫目にだけつけて置きます。

蛸足暖簾

これは長い暖簾で、奥と店の境や、店と臺所口の境につるものであります。地質は中形木綿晒などで一定しては居りませんが、一一五種以上一五〇種位が適度であります。布數も一定いたしませんので、掛ける場所によつて適宜にいたします。

仕立方は水引暖簾と同樣でゝが、丈の三分の一だけを縫ひます。乳は上にだけつけておきます。浴場の入口にかけます蛸足には縫分けた股に黒天鷺絨又は紅綿縮の八寸幅位の文結びをつける習慣があります。

袱紗

袱紗には祝儀に使ふものと凶事に使ふものとありまして、昔はむづかしい形がありましたが、現在は大幅、中幅、並幅などの袷であります。模樣も色も祝儀用には華かなものを使ひますが、凶事用には淺黄とか白で模樣も絞も淋しいものを付けます。

地質は縮緬、盛潮、羽二重、綿縮などを用ひまして、寸法は普通幅寸法に比べて丈寸法を一割長くするのがきまりでありますが、染模樣の都合では少し位の相違の出來ますのは止むを得ません。

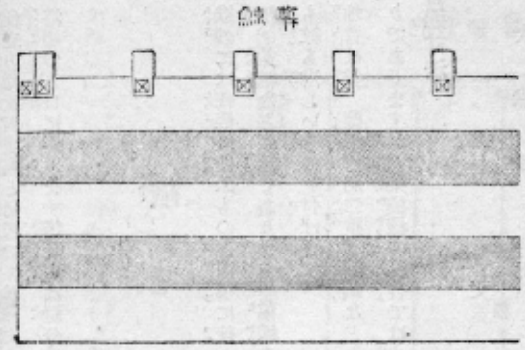
普通寸法

	丈	幅
大袱紗	七六寸	六八寸
中袱紗	四六寸	四二寸
小袱紗	三八寸	三四寸
茶袱紗	二七・五寸	

縫方

染めの物は染め分けのところから二つに折つて、帶の仕立のやうに襞をかけて一方の中央で返し口だけ殘して

ぐるりを縫ひます。（正しくは全部を縫つて糸を留めずにおいて返し口の糸をゆるめて、そこから返し後に糸を引きしめます）折は表布の方に折り角を整へて表に返し、返し口を細かに綴け、周圍に運針雌針で鍼をかけます。隅のところに半端な針の出來ないやうに注意してかけます。それから鍼をかけて仕上げとします。絞り物の時は共色の裏打をして絞りの伸びないやうに裏から目立たない針目で刺しておきます。



第四十五圖

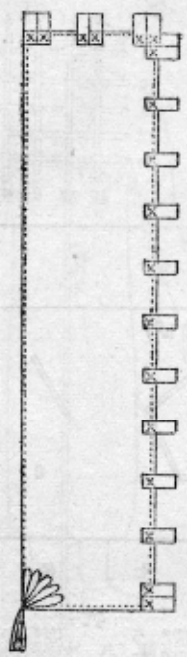
鯨幕

昔は葬用のものでなか〳〵むづかしく物見穴などにもきまりがありましたが、今はたゞ縫つて乳をつけるだけであります。丈は五布で幅は五間が並でありますが隙ける間口によつて多少相違があります。

色をかへて紅と白、黒と白など接ぐものがありますが紅と白は祝儀用、黒と白は寺院などに用ひます。又白無地に紋所を染めることもあります。五布の中白の段を多くするのが雌幕であります。

縫ひ方は各縫目を普通に縫つて折は雄幕は下に雌幕は上に折つて伏せ縫にいたします。

乳の丈は三八糎で幅は並幅を四つ割にして、これに芯を入れ紐付目が乳幅の裏中央になるやうに紐け、兩端を折つてつけます。附け方は圖のやうに兩端と間につけ⊠のやうにかゞつておきます。數は正しくは雄幕雌幕によつて違ひまして雄幕には二十八、雌幕には三十六つけます。



第四十六圖

幟

幟には外幟と内幟とがありまして、地質は木綿、メリンス、金巾、綸絨などをつかひます。大きさもいろ〳〵ありますが、普通には並幅で丈が三〇〇糎から三八〇糎位であります。

乳は上り幅が四糎位で長さは棹の太さによりますが二三糎位にします。

乳は第四十六圖のやうに上に二つづゝならべて三所に、横は上下に二つならべて、間は三〇糎おき位につけます。

縫方

上は四糎、下は一糎の三つ折にして細かく縫ひます、それから兩方の耳は平に二通り縫ひますが針目はたがひ

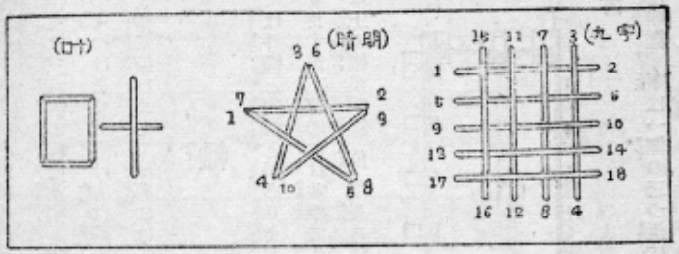


圖　七　十　四　節

縫ひに出るやうにします。次に下の乳をつけない方の端は圖のやうに二本糸で縫ひ、糸の端を二〇糎位殘して一度結び玉のやうにしておきます。

乳　乳は裏側の中央に紐け目がくるやうに紐けて第四十七圖のやうに九字、晴明、叶を先の方の裏表へ縫ひつけるのが正しい仕方でありますが、たゞ止めておくこともあります。

附け方は字の染めてある時は試みはじめの方へつけます。

國旗の縫ひ方

國旗の寸法は縦二に對して横は三の割合でありまして、日の丸の直徑は縦の五分の三の割合であります。

大きくても小さくても右の割合に出來るやうに兩横の縫代だけ長く裁ち切ります。普通の國旗は一方を八ヶ所の縁に三つ折縫にし、竿につける方は下折を一遍に、次を四遍幅に折つて細かに縫ひ、上下を丈夫に留めて袋乳にします。これへ打紐を通して上下に三〇糎ほど出して端をよく留めておきます。

大きな國旗は綿布かを接ぎ合せて寸法の割合通りに裁ち、接ぎ目の折は上に返して折り伏縫にし、兩面から見て表裏のわからないやうに縫ひます。竿につかない三方には強い糸を入れて風にあふられても切れないやうに端縫してあります。

日の丸も矢張り寸法通りに仕上るやうに裁つて折り伏縫にして表裏のないやうにつけます。

人形着物の寸法割出し方

圖　八　十　四　節

人形着物の寸法割出し方

人形は普通の人と比べまして大分備の割合が違つて居りますのと、生きた人のやうに上手に着こなすといふことが出來ませんから、着物の寸法を餘程上手にしつくりと縫ひ上げませんと恰好のよい着附が

出來ません、それで人形の着物は次の諸點で寸法を決めてそれから割り出して參ります。

(一)身丈、(二)首の廻り、(三)胴の廻りであります。

身丈	背中心から足底まで	衿肩明	首廻りの八分の一
繰越	衿肩明より四粍少なくします	後幅	胴廻りの四分の一
前幅	後幅と同寸にして衽下りすつと斜にします	衽幅	前幅の三分の二より一糎廣くします
衽下り	首廻りの三分の一	衿下	着丈の三分の一
袖丈	着丈の三分の二	袖附	首廻りの三分の一
袖口	袖附より八粍多くします	袖幅	後幅より二糎廣くします
衿幅	首廻りの十分の一		

縫方

普通の着物と同じでありますが人形は胸が張つて居りますから胸幅を餘程廣くしませんと、前の合さりがよくいきませんから衽下りの間の斜を多くして衽附は殆んど眞直に近い位にし、なほ衿附の時衽を充分にふくらませて置きます。それから袖は袖口も裾も普通の着物に比べて割合に大きく八粍から一糎位にします。腰揚が餘り少ないと貧弱に見えますから充分揚の出來るやうに身丈の裁ち切りを長くしておきます、そして揚の位置は丈を四と六の割合にして上から四のところへ縫ひ糸がいく位の位置にいたします。

蚊帳

蚊帳に用ひます布は、紗、絽、麻織、木綿、麻と木綿の交織などで、緣布には繻子、紅絹、緞子、麻織、金巾、更紗などを使ひます。

大いさ

室の大きさ	蚊帳の布數	蚊帳の丈
三疊	五、六	一九〇糎
四疊半	六、七	一九〇
六疊	七、八	二一〇
八疊	八、十	二二七
十疊	十、十	二二七

名稱

第四十九圖を御參照下さい。

裁ち方積り方

例へば五、六の蚊帳を作るとしますれば、丈を一九〇糎として、標布五布に緣布六布を加へて之れを二

第四十九圖　蚊帳名部各及び取り上げ出來

倍した數を丈の一九〇糎に掛けますれば廻り即ち垂れの用布が出ます。天井は五倍にしてその丈は竪布幅から縫代を引いた殘りの寸法を六倍して、更にこれを五倍しますと出ます。これと垂れの用布とを足せば全體の用布が出ます。これを公式にしますと、次のやうになります。

丈×{(縫合數＋脇合數)×2}＝總の用布

190　5　6　4180

(吊數－縫代)×脇合數×縫合數＋天井の用布

36　2　6　5　1020

總布＋天井布＝總用布

4180　1020　5200

附屬の積り方

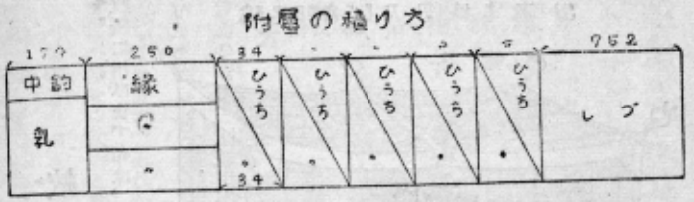
緣は三つ割(上仕立は半幅)、中釣は四つ割、總は一幅か、半幅を斜に三角に切ります、鐶は一幅にします。

(吊數－縫代)×上り布幅＋縫代＝緣

36－2　×　22　＋　4　＝752

上り布幅×5＝總

84　×5＝170



緣＋總＋中釣＋緣

752　170　174　250＝1346

縫方

(蚊帳の縫ひ方は判し方といひます)

乳　中釣の殘り布から、上り幅四糎、丈一七糎―二〇糎の乳を四つ拵けておきます。

垂　垂の布を裾から縫ひ合せ、折は一方に返して、四隅のところには下から四糎ほど上つた所に乳(摘み)布を挟んでつけます、この乳布の縫目は下向にして丈を二つ折にします。

天井　五布を縫ひ合せ折は何れか一方に返し、四隅に斜に切つた總を共色の紙か布で裏打をしてつけます。

總及び中釣のつけ方　天井につけたと同じやうに總に裏打をして垂の四隅と六布の中央とに縫ちつけます。

垂と天井　それから天井の幅の中央に中釣を一文字につけます、一方は縫ひつけ他の一方は拵けつけるのでありません。

垂布と天井布との裏と裏とを合せ、つまり外表に合せてよく釣合をとつて表から假縫をしておきます。

緣布の附け方

まづ先きに緣布を接ぎ合せて裏打をし、緣幅の三分の一を天井の方に當てゝ縫ひ圓の所は襞をとります、そしてこの縫込の端に三つ捻の細い麻糸を大針にまといつけ、緣布を垂れの方へ折り返し、緣幅をきめて天井の四隅の緣布を除けて他は天井布と一緒に拵けつけます。

鐶のつけ方

裾口に鐶を凡そ八糎ほど捻へて縫ひつけ、折を鐶の方へ返して縫ひ込を包んで拵けつけます、

第五十一圖

釣手　四隅と六箇の方の中央に釣手をつけます、まづ釣手留布を紐のやうに紡けて丈凡そ三〇糎位の打紐(釣手)を鑢に通し、紐端を合せて綴す、これを釣手留の中程にするて、緣の角の麻糸にかけてしつかりと留め、それから釣手留を第五十一圖のやうに折り合せて篠糸をかけます。

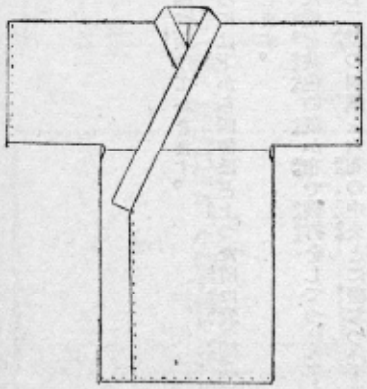
改良裁ねまき

タオル、綿ネル等の大幅物は次のやうに仕立てますと、縫ふ手數も省け、用布の節約にもなつて大層經濟的な仕立方であります。

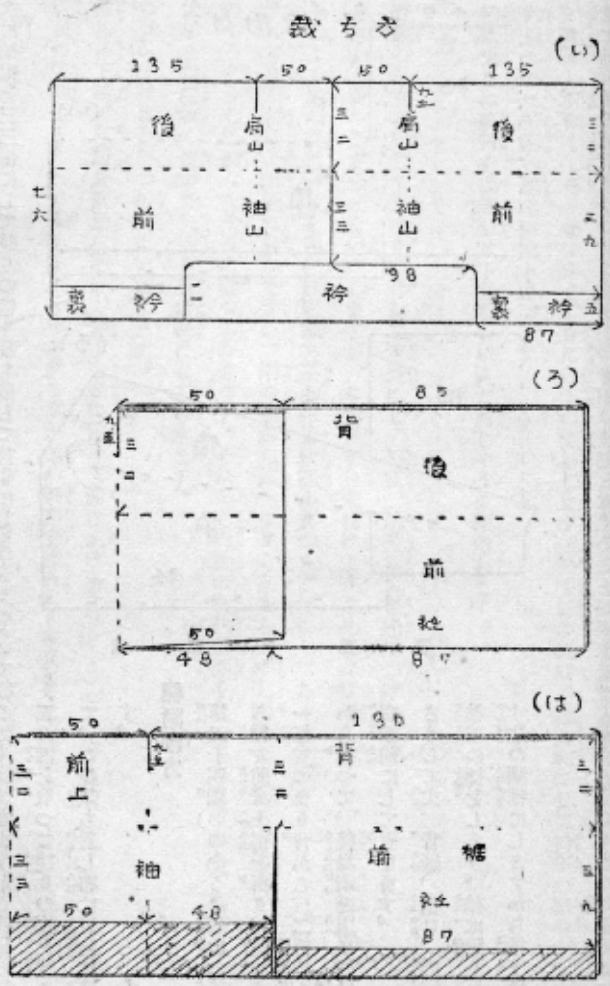
裁方

先づ大幅のまゝ用布の丈を二つに折り、第五十三圖(ろのやうに輪の方を更に五〇糎だけ折り返します。そして輪の二枚重なつてゐる一方の耳から衿肩明を九糎五粍切り込み、又は(圖のやうにひろげて前身頃の接ぎ合せになるところ、つまり袖と前身頃との切離しをします。後幅は肩から裾まで同寸にしますから背幅を三二糎にしてそこまでの深さに、袖丈は肩の折山から四八糎(一方の袖は五〇糎に

第五十二圖



第五十三圖

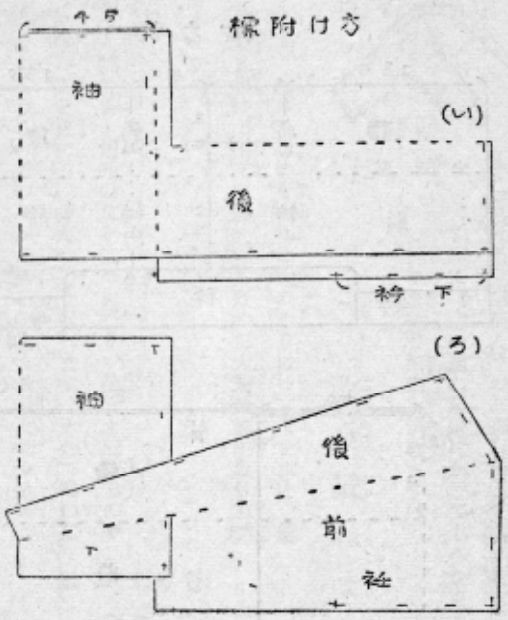


しますが、これは前の接ぎ代が含まれてゐます）のところに鉄を入れて二枚一緒に切ります。次に袖幅を三三糎にして矮りの幅を裁ち落して衿布にします。つゞいて衽の幅も廣すぎますから前身と衽とで三九糎を取つて矮りの幅を裁ち落して、この裁ち落し布は裏衿に使ひます。

標附け方

第五十四圖(い)のやうに肩山の通りから袖と前身上部を折り、前裾も後幅一杯、つまり背から三二糎のところから折つて、後身頃を上に、衿肩を右手前にして置きます。

さうして丈、背縫、袖口、袖幅及び袖下の標をします。袖は附も口も同寸法の裾袖にしますから袖下は眞直



標附け方

第五十四圖

に標します。

次に前身頃の標附にうつりますが、後身頃は全部をはぐることが出來ませんから(ろ)圖のやうに衽を向ふにおこして、先づ脇の接ぎ標をし、次に衽下りをつけ、それから衽で前幅と衽幅とを合せた幅を標すのですが、裁つ時幅は一杯にしてありますから、先に衿下の標をします。衿下綺の幅は一寸五糎にして衿下の標の十文字から衿肩へ斜に衿附の標をいたします。

衿は先きに裏衿を接ぎ合せて普通の單衣と同じやうに標附します。

縫方

普通の單衣と同じやうに先づ背を二重縫にし、肩當、居敷當も普通につけます。

それから前の接ぎ合せをいたしますが、この接ぎ合せは標よりきせ代だけ淺く縫つて、折は上前に返します、そして上前の縫代一枚を四糎ほど裁ち落して折伏縫かまつりぐけにしておきます。

次に袖下を標通り普通に縫ひますが、附の奥から脇へつゞくところが少し明きますから、第五十三圖(い)の點線のやうに少し脇刳したやうに縫つておきます、それから内袖の縫代が深くなつてゐますから、これを外袖の縫代より四糎短く切つて矢張り折伏縫にしておきます。

つゞいて袖口を三つ折綺にいたします。

次に衿下綺、裾綺を普通に綺け、衿も普通に附けて綺け上げます。

最後に脇刳のところに表からバイヤステープか共の斜布で緣取をしておきます。

一五、繰廻しの部

上手な繰廻しの仕方について

和服は繰廻しが自由に出來て、最も經濟的であります。例へば羽織としては柄が派手になつて着られないとか、肩が焼けてそのまゝでは着られないといふ時着物に仕立換へて又しばらく着るといふことや、又反對に着物で長く着たら膝がいたんでそのまゝでは用ひられない物を、傷んだ箇所を裏に廻して羽織に仕立てなほすとか、或は大人物を子供物にしたり、揃ひの子供物を一緒にして本裁にしたりなど餘分工夫すればいろ〳〵と變化させて役立たせることが出來ます。

又衣類はどんな地質のものでも着用の間にだん〳〵と汚れたりいたんだりすることは止むを得ない事でありますが、これもその間の手入の仕方で餘程地質のいたみを防ぐことが出來て、同じ物でも長く使用することが出來ます。

又一面衣類の手入を忘づて汚れたりいたんだりした物をそのまゝ着用するといふことはその人の品性にも關係しますから衣類の手入は手まめにすると同時に上手な繰り廻し方を工夫して出來る丈よく利用することが大切であります。

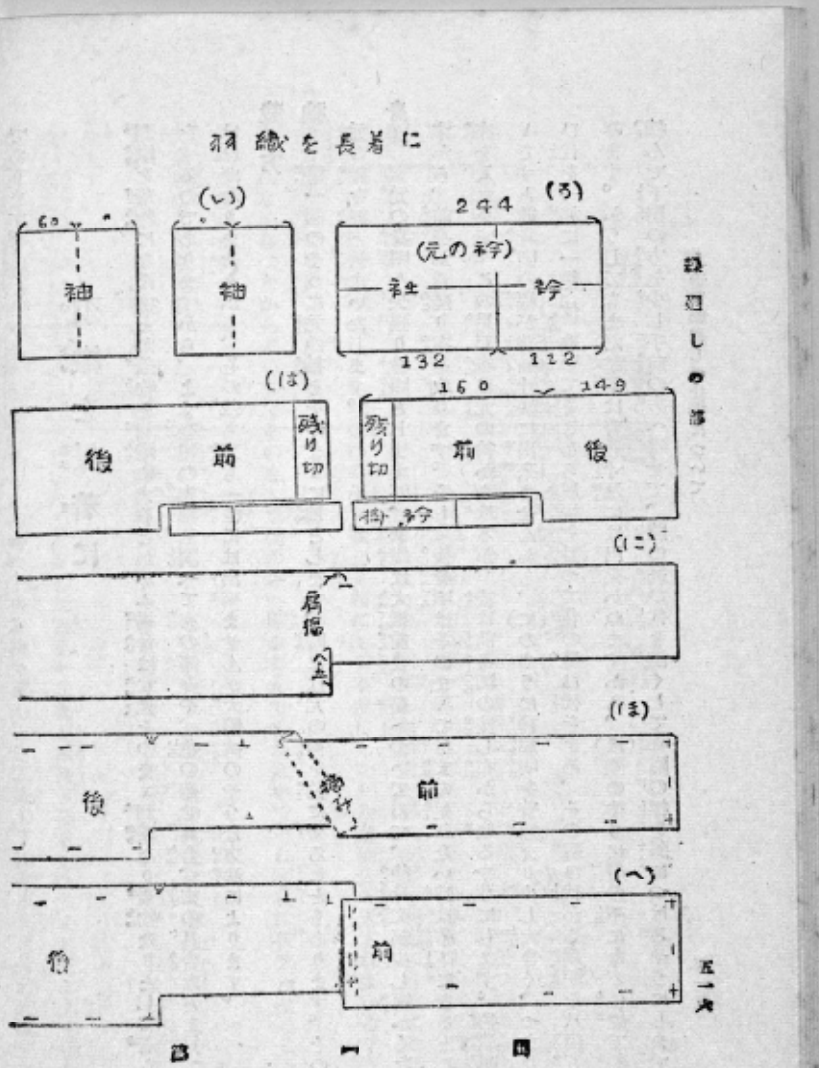
羽織を長着に

羽織を着物になほすとか着物を羽織にするとかいふ場合は大抵そのまゝ羽織なり着物なりとして着られない物をするのでありますから、よく全體の布地を調べて布の痛みや、色の褪せ具合、丈の具合などを見て工夫しなければなりませんから、その裁ち方も一樣には出來ませんが大體次のやうな方法によります。

裁方

袖　第一圖のやうに元の袖をそのまゝに袖とします、時には元の衿を袖にすることもあります。その場合には元の袖を衽と衿にいたします。

身頃　元の身頃を矢張り身頃としますが、羽織は大抵前後の差がついてゐて、後身丈が少し短かくなつて居ますから、前身から殘り布を取ります。そして後身頃はそのまゝで身丈の足りない時は裾下になるところへ足し布を入れます、この足し布は元の衿から取るか、或は前身頃の殘し布から取るやうにします。衿肩明は元のまゝですと前身頃の幅が普通寸法に出來ませんから、(に)のやうに衿肩明を普通より少し大きく、つまり肩幅の縫ひ代を一杯に一糎位取つてそこから肩幅を計つて背の縫ひ代をきめ、その縫ひ代から肩明を八厘五毛切り込みます。かうしてもまだ前幅は普通寸法には出來かねますから、(ほ)圖のやうに帶の下になる位置で斜めに布を摘んで下胴の方を少し手前の方へ寄せて、脇の縫ひ代を淺くして衽附の標を斜につけるやうにします。また(へ)



部二第

圖のやうに前身を一旦切り離して襠を少しづらして接ぎ合せる仕方もあります、又これとは違つて第二圖ろのやうに前袖附の斜を、後袖附の斜より少なくして脇の縫ひ代を淺くする仕方もあります。

衽　元の衿から必要な丈だけを取ります、若し褄を衽にするやうな場合には丈が不足しますから、その時は帶の下にかくれる位置で足し布をいたします。この足し布は幅が狹くても足りますから、元の襦布或は袖口布から取ります。

衿　衽を取つた殘りを衿にして衿山で接ぐやうにします。若し丈の短い時は襦布を足します。

掛衿　元の襦布を掛衿として用ひます。

以上のやうな繰り廻しが出來ましたら普通の長着のやうに仕立てます。

長着を羽織に

長着を羽織にする時は多くは誰かがいたんだり身丈が短くなつたりした場合であります、身丈の短くなつた物は裏を多くつける丈けで別

段工夫は要りませんが縮んだ所のある物はいたみの場所を目立たないやうにしなければなりません。

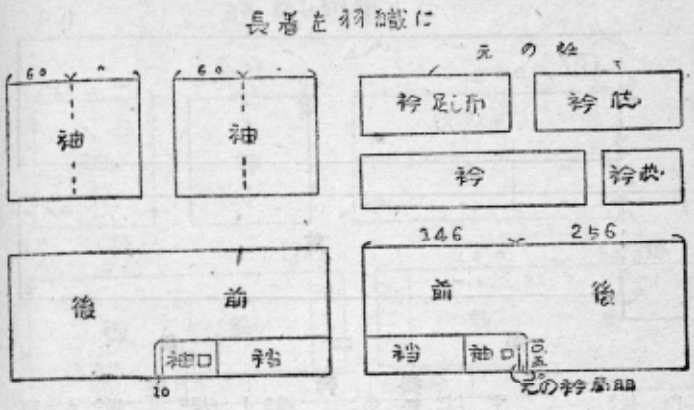
裁方

袖　元の袖をそのまゝ袖にします。

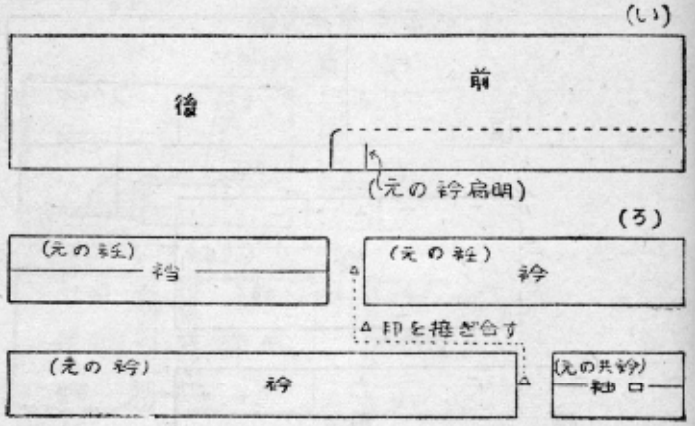
身頃　元の身頃を身頃にしますが前後の丈が同じでありますから差をつけるためと、肩の位置をかへる爲めに一〇糎ほど後へ繰り越しますと具合が宜しくあります。そして衿肩明を一〇糎五粍切りこんで前を裁ち落し、それから襠布と袖口布を取ります。

時には第四圖のやうに前の裁ち落しをしないで、そのまゝ襠ひ込みとして衿肩明だけを少し深く丸味をつけて切り込むこともあります、この場合には襠布や袖口布は（ろのやうに元の袖や裾衿から取つて、芯布には別布を使ひます。この裁ち方にいたしますと又後に他の物に仕立てかへるのに便利であります。

衿　元の衿を衿としますが丈が少し足りませんから衽布から不足分を取つて接ぎ合せます、接ぐ位置は紐附の少し下のあたりになるやうにして、殘りの布は芯にいたします。



第三圖



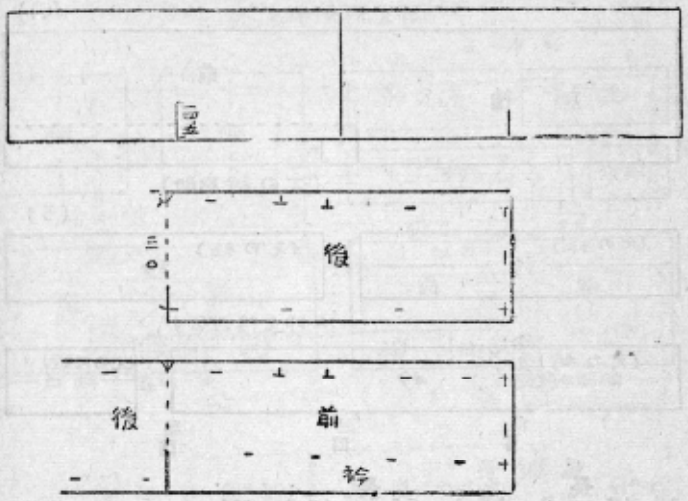
第四圖

古帶皮の利用法

派手になつてしめられなくなつた帶皮、又は色が褪せたり耳がいたんだりした爲めに締められなくなつた帶皮は次のやうに利用すれば又役立たせることが出來ます。

長襦袢の裾に　全體を四つに切つて割合にきれいな部分を前に使ひます、後幅は三〇糎にして脇縫ひ代は前布と不揃でもかまいませんから前布は脇の縫ひ代を一杯にして幅を二五糎とし衿は摘み縫にします、若し衿幅の狹い時は裏衿を少しつけます。

長襦袢の胴に　第五圖のやうに衿肩明を普通寸法より大きく切ります。これは前幅を廣く使ふためであります から肩幅を一杯にしてそこから後幅を計つて背の縫ひ目



第三十五圖

を決めて衿肩明を切り込みます。かうしますと背の縫ひ代が深くなりますから白縮前身頃の布を廣く使ふことが出來ます。

又メリンスや羽二重などの丸帶は胴抜の長襦袢にもなります。

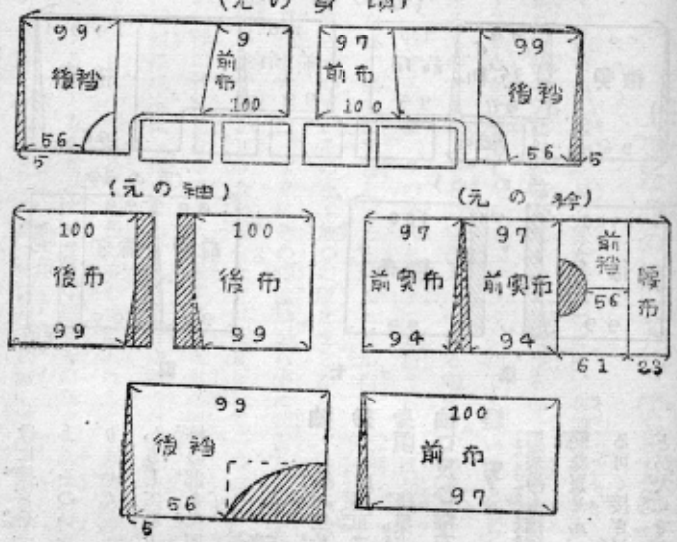
羽織裏に　羽二重の帶地は羽織の裏として用ひられます。羽織裏として一番目立つ前裏のところは肩から眞直ぐにかき落しますので、きれいな感が出るやうになつて立派に羽織裏として役立たせることが出來ます。

身丈によつて長さが足りない樣な場合は一番目立たない袖の山に別布を接ぎます。

改良帶に　又地のいたんだところや、色の褪せたところを上手に工夫して、先きに帶の部で說明しました樣な改良帶に仕立てますと、又一代新らしい帶として締められます。

馬乘袴に羽織を

（元の身頃）



第三十六圖

羽織を袴に

羽織を袴に仕立てかへますにはそのきゝでも適當な縞物などはそのまゝに、色燒けした物などは袴に相應しい色に染め上げてから次の方法で裁ち換へますと立派な袴として役立たせることが出來ます。

馬乘袴の布の取り方

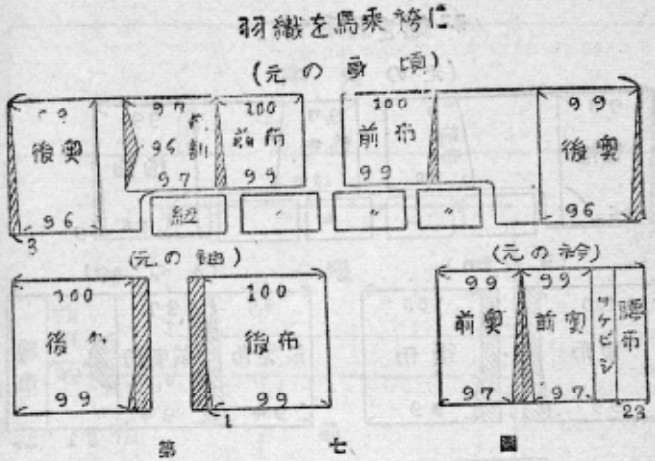
兩袖　後布二枚。

袴　前奥布二枚、前襠二枚、腰布一枚。

身頃　前布二枚、後襠二枚。

袖口及び襠布　紐布。

この外附紐は殘り布から取り紐の不足分も殘り布から取つて必要寸法だ



第七圖

けに接ぎ合せます、若し布にいたみの有るやうな場合はよくそのいたみの箇所を除ぞくやうに工夫しなければなりません。

かうして取りました各布の切り上や、襠の剝り方は前の袴の部を參照して裁つて下さい。

襠無袴の布の取り方

袖　後布二枚。

衿　前奥布二枚、附菱、腰布。

身頃　後奥二枚、前布二枚、前割布一枚。

袖口及び襠布　紐布。

縫方　馬乗袴も襠無袴もその仕立方は何れも前に説明した袴と變りません、たゞ紐の接ぎが少し多くなりますから、なる可く接ぎ目を目立たない位置に入れる樣に工夫することが大切であります。

上手な布の繼ぎ方、接ぎ方について

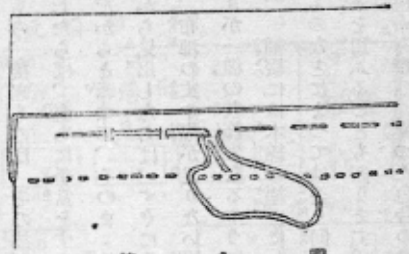
和服でも洋服でも、着物を長く保たせるのには、布地の繕ひ方が上手でなければなりません。着物の膝がぬけたり、袖口、袂の先などが痛んだり、大抵損づる部分は定つて居りますが、それを體裁よく繕つたり、繰り廻したりすることが上手でしたらば、一枚の着物でも、いつも新らしい物と同じやうに、若返へらせて□ふることが出來るものです。以下その場合々々による繼ぎ方、接ぎ方をお話いたしませう。

繼ぎもの、接ぎものは、その技巧を上手に練習することは勿論大切でありますが、それと同時に損じた箇所を見出したらば、直ちに手當をするといふことが尚更ら大切のことであります。小さい穴だから、一寸した鉤さきだからと云つて、そのまゝ放つて置きましたらば、いつか知らない間に、大きな孔となつてしまひます。ですから見出したらば、すぐにその時機を失がらずに適當な手當をすることが必要です。

また、布地の丈や幅が足りない場合などに接ぎをして一つの役に立たせるとか、また物によつては、その接ぎや繼ぎが一種の裝飾となるやうに工夫することも必要でせう。

糸と針　補綴には木綿と絹とにかゝわらず針は細目の針を用ひ、糸は地色と同色の極く細い糸を用ひます。然し色ものなどによつては全く同色の糸を手に入れることが困難の場合もありますので、そんなときにはその布の繊糸を用ふることもあります。また、模様ものなどで各種の色が用ひてある場合には、一番多く用ひられてゐる色糸を撰び、異つた色合の處へは針目を加減して多く出さないやうに注意しながら繼いでゆきます。

片返



第八圖　片返しの図

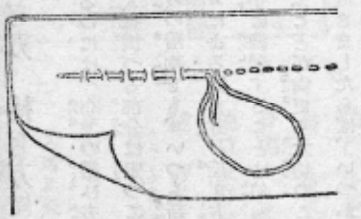
接ぎ合せやうとする二布の布の縞目、布目をよく合せ、縫代一糎位として、極く細かい針目で縫ひ、平縫をあてます。そして縫ひ込みを適宜な一方へ折り返し、上から隠し縫をいたします。

これは極簡單な接ぎ方ですが、木綿ものにも、絹物にも、非常に多く利用される仕方であります。

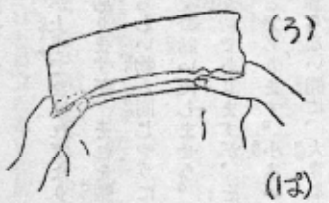
割り接

接ぎ合せる布の縞目、布目をよく合せ、出來るだけ小針に縫ひ平縫をあて、縫ひ目を兩方へ割り、兩端に隠し縫をします。この縫代は矢張り一糎位にいたします。

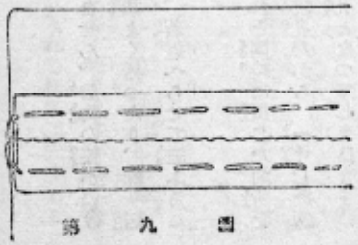
この仕方はどんな地質のものでも接ぐ場合には用ひられます。



(い)



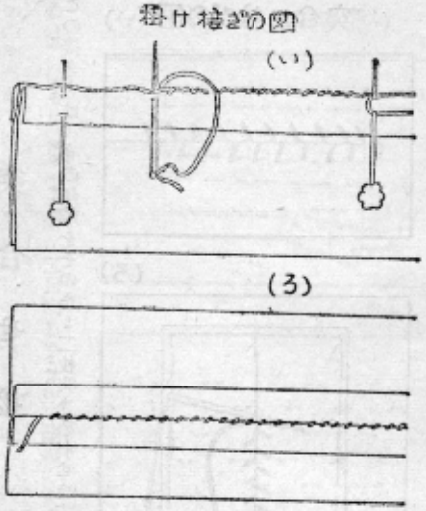
(ろ)



(は)

第九圖　割り接ぎの図

掛け接



第十圖　掛け接ぎの図

接ぎ合せる布を、各七粍位の縫代として各々裏側へ折り、布目を通して折山を揃へて縞柄を叮嚀に合せ、共色の糸で山から糸目二本ぐらゐの深さに、手前から向ふへと眞直ぐに針をぬきます。この接ぎ方は、針を決して斜にならないやうに、出來るだけ細くすれば、手際よくゆきます。

縫ひ終りましたらば、縫目を開いて鏝をかけます。これは表面に接ぎの見える場合にするもので、羽織の衿とか、着物の袖とか、表になる處に用ひます。

用ひます糸も、その布の横糸を抜いて見て丈夫でしたらば、それを使ふのが一番です、上手に接ぎますと、一

寸位見たのでは接ぎ目を見出すことが出來ない位の程度に接ぐことが出來るものです。

突合せ接

この接ぎ方は、布の切端をそのまゝ二枚突きあわせますので、端に凹凸があると、奇麗に出來ませんから、布の端を正しく裁ちきり、四耗位の深さで、約四耗の距りで第十一圖のやうに接ぎ合せます。針は、一方の布端の裏から表へ出して、これを向側の布の裏から再び表へ出します。これを交互にしてゆきます。

これは厚地の芯などの接合せに用ひられるものです。また、洋服地などのかぎさきの應急手當として用ひられることもあります。その場合には(ろ)圖のやうに、縫所の後へ厚紙（端書でもよろしい）をあてゝ、破れ目を平らにし、周圍を紙にぶつ〳〵と縫ひつけます。そして、共糸で前のやうに突合せて細かくかゞつて置きます。接ぎ終りましたらば、端書は除いておきます。勿論本式の方法ではなく、臨時の手當法として用ひることもあります。

(い)圖のぎ接せ合突

(ろ)

第十一圖

色紙繼

和服の繼ぎ當には一番多く利用される方法です。地質の擬した處、自然に薄くなつた處に、共布の布目や、縞目を合せて、それよりは稍大き目の布を當て、周圍を鋏でおさへ、共色の細い糸で刺してゆきます。

針目は木綿もの(い)のやうに上の段の大きい針目の處へは次の段の小針がゆくやう段違に交互に織ぐのを普通としますが、品物により、また傷みの程度によつて、二目、三目の落し方は適宜に用ひます。傷みのひどい處は(ろ)圖のやうに細かく、間も狭くさしますが、さほどでない處は荒くても差しつかへありません。然し表へ出る針目はいづれ

(い)圖のぎ繼紙色

(ろ)

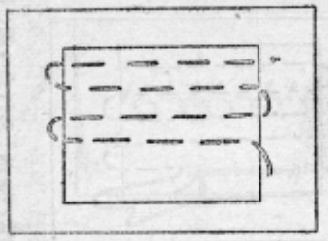
(は)

第十二圖

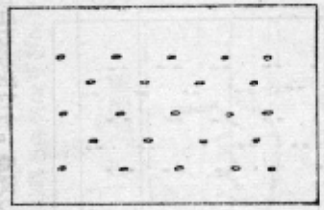
の場合でも叮嚀に目立たないやう細くいたします。綺や模様の上へ、針目が出ると、どうしても繼ぎが目立ちますから、出來るだけ地色の處へ針目が出るやうに工夫することも必要です。尚糸はつれないやうに注意し、兩端に幾分の弛みを見て置きます。絹物は共糸か羽二重糸、木綿のときは二子糸を用ひます。

刺繼

(い)圖の如き繼刺



(ろ)



第十三圖

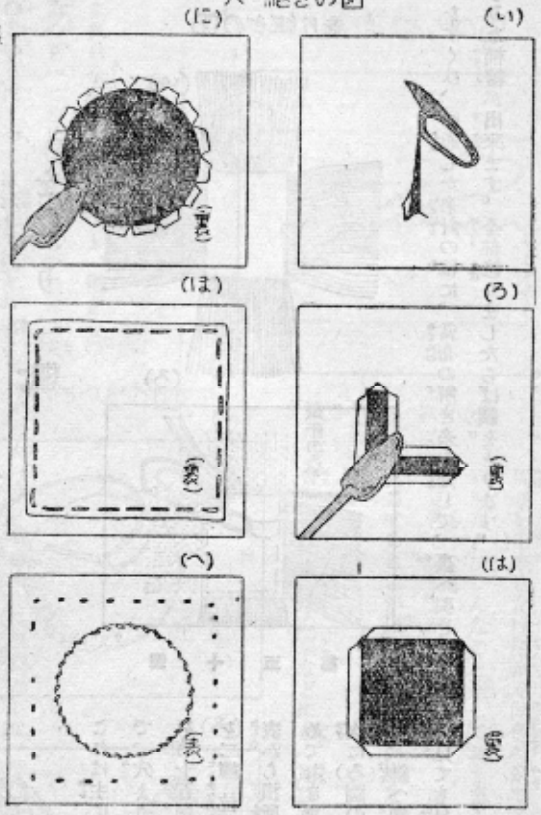
これも前と同じやうな處に用ふるもので、その繼ぎ方も殆ど同樣ですが、たゞ第十三圖のやうに一日おとしで刺します。

穴繼ぎ

布に燒穴、鉤ざき、などの出來たのを上手につぐことは一寸六つかしい事ですが、また非常に必要な技術です。

(い)圖のやうに、穴の周圍に五糎か六糎おきに切込みを入れ、伏代も四糎位とまたろ)圖のやうに、木當の鉤裂の場合には、矢張り角々へ前のやうに斜に切り込みを入れて各々鋏で伏代を折つておきます。

穴繼ぎの圖



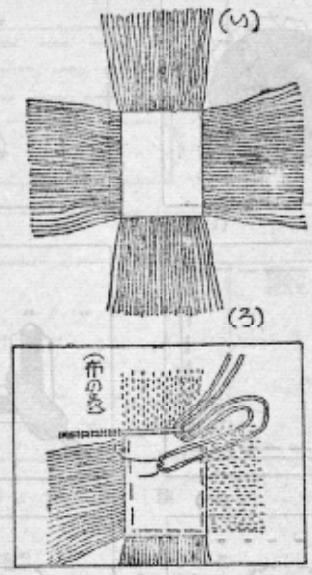
第十四圖

また四角の場合は(は)圖の如く、四角に切り込みを入れて四方に折り伏せ、丸い時には(に)圖のやうに、穴の周圍に五糎おきに切込みを入れ、伏代も四糎位とかうして、穴よりも周圍一糎位大きめの共布をあてゝ、綺目、布目をよく合せて、(ほ)圖のやうに周圍を鏤で

止め、表にかへして、穴の周りを出來るだけ目立たないやうにまつりつけます。(へ)圖は說明を解り易くするために、針目も大きくなつて居りますが、實際は針目の分らないやうに細かく、叮寧に注意を要します。

をり織

圖十五　をり織の部

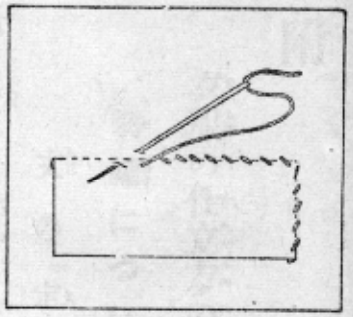


これは主に毛織ものに用ひるもので、穴よりも三糎位大きく裁布を第十五圖(い)のやうに、四方の緣を二糎位解きましたら、これを表から損所へあてゝ周りを鉸で止めておきます。

次に(ろ)圖のやうに別な糸を針にして、針へ通し、これで地布の織目をすくひ、に通した糸針の輪に、當布の解き糸を通して、裏へ引きますと一寸見ても見分けの付かない位の巧みな補綴が出來ます。全部終りましたらば鉸をとります。

ふせ織

圖十六　ふせ織の部



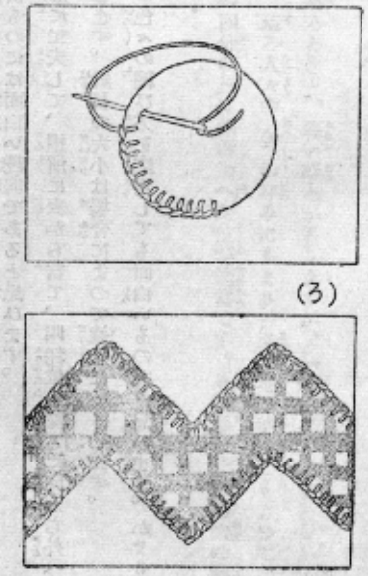
これは一名被せ織ぎとも申しまして、傷んだ上から布を當て周りを出來るだけ細かく同色の糸でかがる仕方であります。和服などにこんなことをしておきますと、いかにもぞんざいな見苦しい感じがいたしますが、これも應用のしかたで模樣化させることが出來ます。子供服などに試みますと面白いものです。

普通には、洋服の裏などに多く用ひられて居ります。

かゞり織

これは全面へ別布をあてゝ、織ぎそのものを一つの裝飾としたもので、工夫のしやうによつては決して織ぎの感じなどはなく、苦心してつけた切筒半襟のやうに見えるものであります。子供

圖十七　かゞりつぎの部



上手な布の織ぎ方、接ぎ方について

の洋服とかエプロン、袖無しなど、すべて子供ものには面白い趣向であると思ひます。第十七圖のやうに適當な色合の布を、色々の形に工夫して、損所に表から當て、四粍位の深さに內から外へと掬ひ、二粍位に左方から右方へとかゞつてゆきます。針目の大小は場合によつて適宜にいたします。

このかゞり方は、一色のみでなく、刺繍などの色々の縫ひ方を應用しても面白いものだと思ひます。かゞり糸も地の色合によつて調和をとります。

附

衣服の仕立方の急所と秘訣

羽織について

丈の定め方

羽織の丈のきめ方は、その時の流行で、長く着るときと、短い時とがありますが、一般に長すぎると背が短かく見えますし、短かすぎると下品に見えます。着る人々の各〻の好みにもより、又布地の地質にもよつて多少の相異はありますが、大體に於て着物の着丈の四分の三に四糎加へた位が適當です。その他の寸法も次の標準にいたします。

袖	丈	着物より二糎つめる。
同	附	同　一糎多く着ける。
同	幅	同　同　寸。

前身の襞のとり方

羽織の前身の襞は非常に見苦しく目立つものです。襞の寄り方にも種々ありますが、第一圖(い)のやうに、乳から下へかけて大きな襞の出るのは繰越しが少ない爲めですから、着物に繰越を付けない人でも一糎乃至二糎（體格によつて定める）の繰越しを必要としします。特に肥滿した體格でしたらば四糎位にします。又後幅は着物と同寸に、襟幅の上部を痩せた人は心持狭く、肥えた人は少し廣目にします。身八つ口は十糎位が適當です。身八つがあまり多くあき過ぎると(ろ)圖のやうに、身八つの處がたぶついて嫌やな襞が出ます。

身八つ口が多い時　(ろ)

繰越の少い時　(い)

第一圖

衿のぬひ方

羽織の衿はやゝもすると、剩み衿になつたり、そり衿になりたがるものですから左の諸點に注意いたします。

衿附縫代は三つ衿の所を一糎とし、衿肩廻りの所は八粍、それから裾上三十糎までは八粍、裾では身頃縫代二

衿の返へりをよくする仕方

羽織の衿はやゝもすると、剩み衿になつたり、そり衿になりたがるものですから左の諸點に注意いたします。

衿附縫代は三つ衿の所を一糎とし、衿肩廻りの所は八粍、それから裾上三十糎までは八粍、裾では身頃縫代二糎にして裾から三十糎の間で斜にします。

この三つ衿から衿肩廻りの間で衿のゆるみが足りないと第二圖(い)の如く衿幅が眞二つに折れないで、(ろ)の如くに衿付が見えて來ます。それから乳の上四糎迄は心持ち衿をゆるめにします。餘しあまり剩み過ぎると、第三圖(い)のやうに肩から衿幅が廣くなつて、衿付が見えて恰好が惡くなります。剩みが不足すると衿肩廻りから前身へかけて變な襞が出たり、衿が三つ衿の處で二つに折れません。

衿の上下八糎の間は、衿を釣鉤狀にし、乳から下は裾から二十糎乃至二十二三糎までは平に附け、裾から二十

衿廻りで衿のゆるみの足りない場合　(ろ)

三つ衿縫代が正しく衿巾が眞二つに折れてゐる所　(い)

第二圖

乳下の衿がゆるみすぎた時　(ろ)

衿廻で衿のゆるみが多い場合　(い)

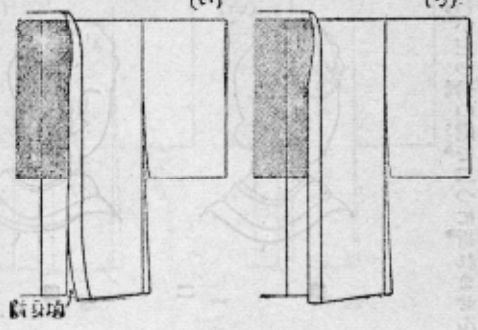
第三圖

二三糎までの間は二粍位衿を弛ませて附けます。乳の下で衿の方が弛みすぎると(ろ)のやうに衿先が起きて來ます。また身頃が弛み過ぎると第四圖(い)のやうに身頃が出て來ます。

前下り　また、衿は前下りの縫ひ方にもよることが多いので衿付から四糎位の間で、裏身頃を充分弛めておきます。

糊附け　糊附でも衿の具合は非常に異ります。糊の方でも裏身頃を弛めて置きませんと裏がり込んで表の返りが多くなりますから裏身頃を弛めかげんに糊をつけます。

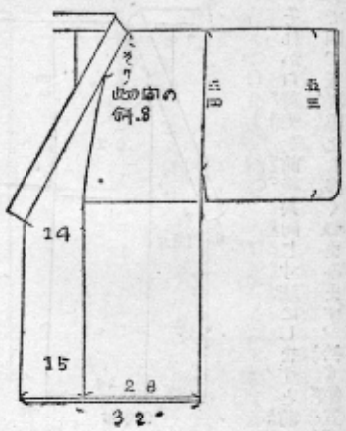
針目は大き目に　針目は心持ち大きめに縫ひ、糸のつれないやうに充分に注意します。ことに袷羽織の衿附は四つ縫ですから、あまり細針だと平縫をかけてもきれいに仕上りません。



第四圖

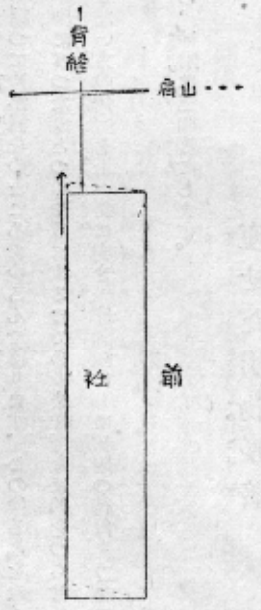
着物について

肥えた男物長着



第五圖

肥つて首の短いお腹の大きい人の寸法は第五圖のやうに後幅を三二糎、前幅を二八糎にして、裾口から七〇糎位まで前幅を眞直ぐにします、そして衿肩明から衽下りの標までの間で前幅の斜を八粍にして、下から七〇糎眞直ぐにした所から衽下りの標までの間で前幅の斜をゆつくりと少し外側に丸味をもたせてつけます。かうしますと圖のやうにお腹の出てゐる所で斜がゆつたりとつきますので前の合さりが宜くなります。



第六圖

な性衽下り寸法も衿の合さりがよくなるやうに普通より少しつめて一九糎にします、そして衿肩明は普通より四粍大きく裁ち切り、三つ山縫ひ代は一糎二粍にし、衿肩廻りで衿をゆるめ加減に、袖先から八糎位下つた所と衿先から六糎位上つた所との間、つまり帶の下になる所で一糎位衿をつらせてつけます、これは前幅を裾から七〇糎上まで

眞直ぐにした爲に上部が急に曲りますので、隨つて衿が鋏先のところでゆるんで餘ります、このゆるみをなくする爲めに一糎つらせて前を合せた時に衿が胸にぴつたりとつくやうにするのであります。なほ衿をつらせる時は第六圖のやうに衽布上部の角（衽の附でない方の角）を上へ斜に引き上げ加減にして衿附の待針をうちますと釣らせることが出來ます。

衿幅は出來上り五糎五粍を少しつめ加減にし、袖附は三四糎にします。

痩せた男物長着

第七圖　痩せた男物の人の寸法

痩せて背が高く、自然前かゞみの人の着物は第七圖のやうに後幅で標準寸法より五粍つめて二九糎五粍に前幅を二四糎にします、このやうに前幅の寸法をつめます時によくあることですが、鋏先から裾まで眞直ぐに曲りのない前幅になることがあります、それで脇縫を後の縫込より前の縫込を八粍多くして縫ひますと前幅も曲つて格好よくなります、それから着丈を前後共同じ寸法にしますと前かゞみの爲めに前の方が下つて來ますので、揚の深さを衽附の方で四、五粍脇より多くつきみます、衿も第五圖の時のやうにつらせ加減にします、衽幅、合襟幅は普通で宜しく、袖附は痩せた人は胸がうすく、すつべりとしてゐます爲め胸のところがだぶつきますから胸巾を狹くきつちりとさせる爲めに衽をつける時に袖附の所で抱幅をはかつてせまくすると同後に袖附寸法を普通より二糎少なくつけます、隨つて人形が長くなりますから袖丈を短くします。

第八圖　肥えた男物の人の寸法

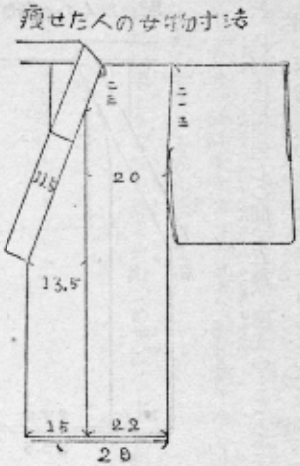
肥えた女物長着

肥えて肩の厚い體格の女の人の着物の仕立方は、衿肩明を普通寸法より少し多く一〇糎五粍の裁ち切りにし、後幅は二九糎五粍に、肩で繰越を三糎にします、前幅は肥えた男物の時のやうに衲口から衿下寸法の所まで眞直ぐにし、衿肩明から衽下の標までの斜を六粍にして、その點と下から八〇糎上つた所の前幅の標との間で矢張り男物の時のやうに、ゆつくりするやうに少し丸味をつけて標をつけます、衿附も男物と同じ方法で、三つ衿山の縫ひ代は二糎にし、衿幅は衿肩廻しの間で五糎、鋏先のところで五糎五粍、衿先の所で一杯になるやうに澁衿にします。肥えて肩の厚い體格の人には廣衿よりもこの方が胸がすつきりと形よく見えます、なほ衽下りは肩の繰越の山から

二一糎にし袖附は後より前を二糎ほど多くつけます。

痩せた女物長着

痩せてすつきりと首の長いなで肩の人の着物は身幅を普通よりつめて、後幅を二八糎にし、肩幅は普通より四糎つめその分を袖幅で出して前は普通にします、そして前幅は二二糎にし胸をきつちりさせる爲め抱幅を計つて二〇糎にして抱幅から裾口までを自然の斜にします、袖附も普通の體格の人よりは少しつめ加減にします。



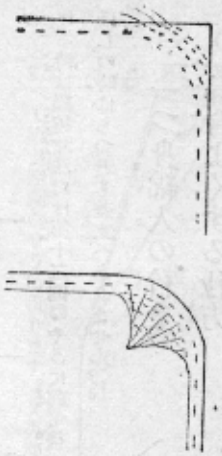
第九圖

衿幅は衿と胸にやはらかみの出るやうに廣衿にし、繰越は別につけ寸に三つ衿山で三糎縫ひ込むやうにします。なほ三つ衿山で二糎以上縫ひ込む場合には縫ひ込が中でつれますから第十圖のやうに縫ひ代より四、五粍上まで背縫をし、その上は縫はずにおきます。衿附の時は背縫から左右四糎位づゝ位は眞直ぐに縫ひ、そこから肩明の角までは自然に丸味をつけて衿をつけます。

第十圖

袂の丸味の上手な作り方

袂の丸味を上手に作るには丸味の間は他より針目を少し小さく、糸は少し釣り加減に縫ひます。そして縫目から四、五粍離れた外で丸味の間だけを一回縫ひ、今度はそれに三粍位づゝ離してもう一、二度縫つてその糸をひきしめて折目が角ばらないやうに襞をよせて鎧をかけます。この縫ひ縮めの針目は第十一圖のやうに必ず針目を揃へることが秘訣であります。針目がよく揃ひますと襞が正しく取れて出來上りがきつと角ばりません。元禄袖の丸味もこの要領でいたします。



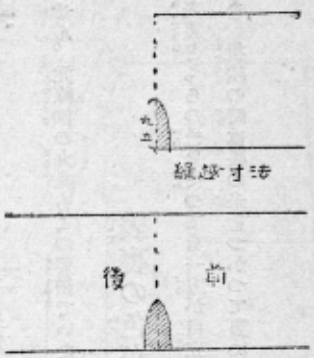
第十一圖

表裏の色が極端に違ふ時の縫綴の仕方

表裏どちらの色を使つても一方が目立つて見苦しいやうな場合には、はじめ表の糸で表にだけ隱縫をしておき、縫綴の時は裏の糸をつかつて裏にだけ針を出し、表は中の縫込だけを抄つて綴ぢます。

男長着の衽にも揚を

普通には男物は身頃には内揚をしますが、衽は身頃の場をした丈に合せて裁ちます。これを衽にも揚をするやうに丈を長く裁ちますと仕立直しの時都合が宜しい。



第十二圖

繰越をつける着物の衿肩明

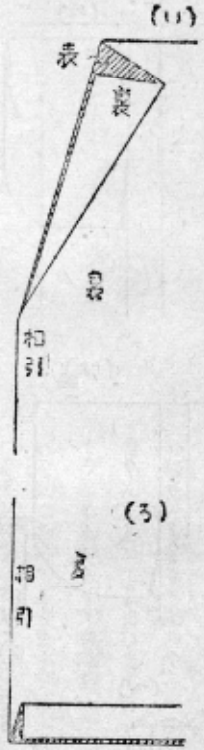
普通には衿肩明は眞直ぐに九糎五粍許を入れますが、繰越をつける時は繰越寸法だけ第十二圖のやうに前も後も（四枚一緒に）刳り落してしまひます、かうしても仕立てなほしの時はちつとも差支へありません。

一つ身綿入の衿を具合よくする仕方

一つ身の綿入で衿衽の時はどうしても衿が厚くなつて仕末が仕苦いですが、その時は第十三圖のやうに衽の縫込を前身の方へ折り返しておきますと幾分衿を薄く仕立てることが出來ます。

第十三圖

無双織袵の仕立方



第十四圖

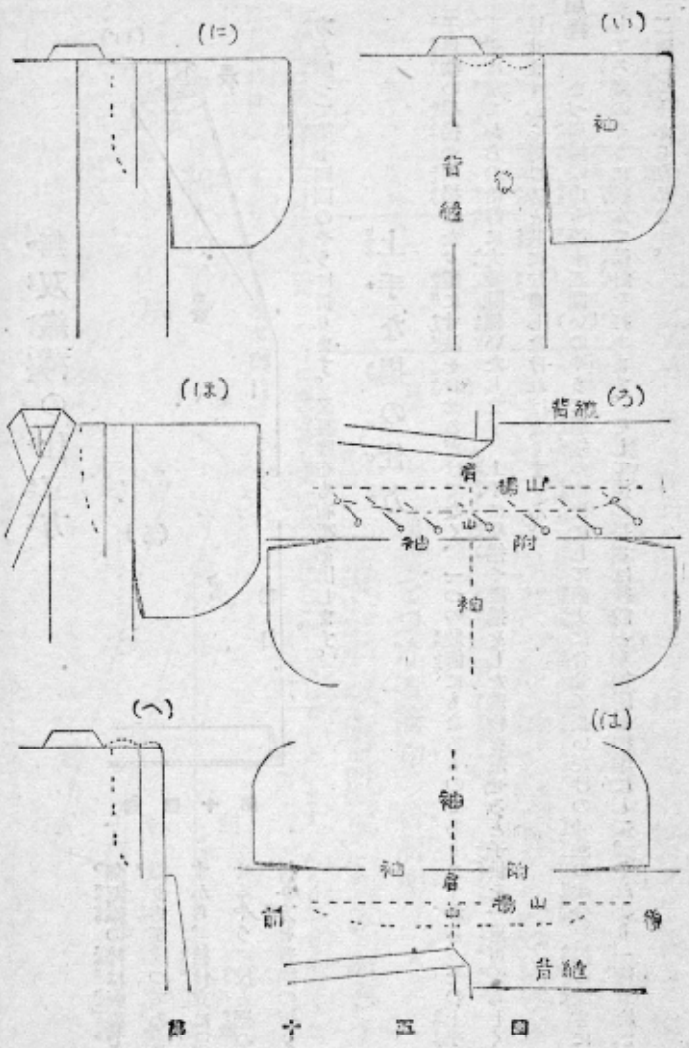
方と變つて第十四圖のやうに折ります。又裏腰布も布裏を出します。

無双織の袵は表裏で織り方が違つてゐますから、格仕立に見せるやうに投と揚の折り方を普通の折り

上手な揚の仕方

子供物の肩揚や腰揚はたゞ體に寸法を合せるだけでなく、一つの裝飾にもなるものでありますから、その上手下手は着てからの恰好に大變關係いたします。上手に肩揚や腰揚をした着物を着せると子供を一層可愛らしく見せますから縫ひ方と共に注意しなければなりません。

肩揚　まづ肩揚の山を第十五圖（いのやうに肩幅の中央にして着丈に合せて長いだけの寸法の半分を揚の深さにしてろ圖のやうに摘んで待針を打ちます。そして揚の長さは後前とも袖附を標準にして、それより一糎五分位上から初めます。

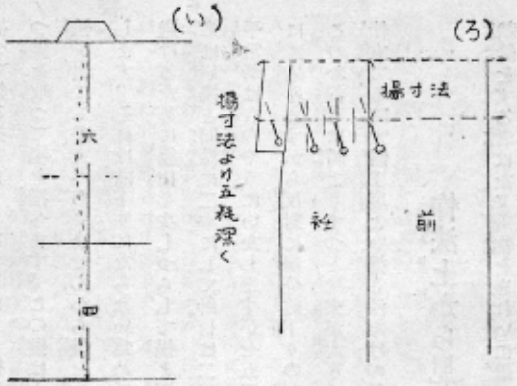


第十五圖

深さは全部同じ深さにしないで圖のやうに前は肩から下までの長さの三分の二位のところから深さの三分の一位を斜に淺くし、後は下の一針で三粍か四粍位を淺くします。そして糸は二本で針目は二目落しにして、はじめ終りとも糸を(ろ)圖のやうにゆるくしておきます。この糸をきちんとしめてしまひますと着てから引張られて揚が起きるやうなことがあり又布地をいためることにもなりますからそれを防ぐためであります。(は)圖はこれを表から見たところ、(に)圖は後から、(ほ)圖は前から見たところであります。着物も羽織も大體この要領でいたしますが、揚の非常に多い時は二重に摘むこともあり又大人になりかゝり位の人の揚は揚が少なくなり肩幅が餘り狭く見えるのは見苦しいものですから幾分加減いたします。

袖無は裄丈に關係ありませんから割合に深く摘んで、第十五圖(へ)のやうに揚の深さより脇の方が幾分少なめの方が可愛らしく見えます。

腰揚　仕立上身丈と着丈とによつて幾分加減したければなりませんが大體第十六圖(い)のやうに揚山から上下を六と四の割合にしますと餘り見苦しい恰好になりません、揚



第十六圖

山を定めてそれから揚寸法だけを摘んでろ(ママ)筒のやうに待針を打ちます。この時背、脇、衽附の縫目はきちんと揃へて針を打ちます、さうしますと衽のところで一方の幅が廣くなつて衿が出ますから筒のやうに衽に二つ三つ襞を取つて幅を揃へます。この襞は上前の方だけは衿を揃へる爲めに襞を餘計取りますが下前の方は少し位衿が出ても差支へありませんから襞を少なくいたします。そして深さは衽幅の間で端の方を五粍だけ深くいたします、それは前下りにならない爲めであります。かうしますと表に出る針目が五粍斜になりますからそれを避けるために揚山を少しづらして揚を深くする仕方にもいたします。

糸は肩揚と同様に二本にして針目は二日落にします。

平常着は右のやうにいたしますが七五三のお祝着などの時は胸に箱迫を入れたり又下着の揚があつたりして前に着込みますから反對に幾分前下りの氣味に揚をしませんと餘り前が上つて見苦しくなります。

このお祝着は體よりすつと身丈が大きく仕立てられてありますが餘り長い着物は揚の恰好が惡くなりますから仕立てる時大體丁度よい揚寸法だけの餘裕を見てその餘分は内揚に仕立てます。

作法上から見た着物の着方

裁縫をする者はたゞ着物をきれいに縫ひ上げるといふだけで完全だといふことほ出來ません、美しく縫ひ上げた着物を上手に又儀禮にかなつたやうに着る事の心得も一通りなくてはなりません。

和服は次の三樣に別けます。

1、平常着　平常着は衛生的である上に日常の仕事をするのに最も便利なものでなければなりません。然し衣服は自分の身に着けるものではありますが、人に對して不快の念を起させないやうにきちんとしなければなりません、殊に婦女子は着物によつて少しでも心を引締めその美しさを增すことにつとめ、家の中を明るくするやうに心掛けることも大切であります。地質はどんな物でも丈夫であつて經濟的な物を選び、色合柄合等は各人に相當する物を選ぶのが宜しい。

2、外出着　外出の時は多くの人の目に觸れるばかりでなく、いつ目上の知人に會ふやうのことがあるかも知れませんから、平常着よりも幾分心して着用しなければなりません、餘り時の流行に囚はれることはその人の品格を落すものでありますが、さりとて又餘りにも舊式を服裝はこれ又人目についてあまり見よいものではありませんから、それ〳〵の身分に相應した服裝をしなければなりません。

3、儀式用　我が國では儀式の時は昔から嚴格な服裝規定がありますが、たゞ今は宮中の諸儀式にだけ用はれて一般は大體略されて參りました。

男子　普通男子の儀式服は羽織袴であります。正式には着物と羽織は黑の五つ紋で、地質は縮緬羽二重で、袴は綿のものを使ふことになつてゐますが略式には着物は綿を用つて、羽織だけ黑の五つ紋を着ても宜しいのです。又袴を着用する時は角帶をつかふのが正式であります。

下着は白が正式でありますが、略して若い人々は淡ねずを、老人には茶色を用ひます。これに重ねる襦袢も地質は羽二重で色は同色か似寄のものを用ひ、衿は下着と同色の羽二重を掛けます、足袋や羽織の紐は白であり

ます。

女子　男子と違つて女子は正式には羽織を着ません。吉禮には裾模様のついた着物を用ひ、地質は矢張り男子と同様に羽二重が正式でありますが、只今では略してちりめんの黒五つ紋の裾模様を用ひます。色の紋附はなほ略式のもので、小紋とか紬交着などはこれにつきます。之等の時に用ひる帯は厚地織の模様のある丸帯を用ひます。

凶禮の場合は地方によつて多少の違ひがありますが、一般に近親者は白無垢を用ひ附屬品も白、その他は黒無地紋附を用ひ、その時の附屬品、帯上、帯〆、草履などは多く黒を用ひます。

汚點拔の仕方

汚點の新らしいものならば大抵水でとることが出來ますが、古くなつて然も何の汚點か判らない物はまづ最初に揮發油で拭いて見ます、それで取れません時はアルコールで拭いて見ます。脂肪類ならばこれで大方取れる筈ですが、それでもなほ取れない時は、アンモニア、次は石鹸、次は醋酸、蓚酸といふ順に試して拭いて見ます。それでもどうしても取れないやうな汚點はもう素人の手にかけると却つて生地をたいめるばかりですから專門家の手に任せます。そしてこれ等の汚點を取る時には、板の上にタオルなら二三枚、普通の木綿地なら四五枚位の厚さに折つて敷いたその上に、汚點のついた布をのせて、それ〴〵の藥品や液を脱脂綿かガーゼにしめして拭ひます、地質によつては歯ブラシなどを使ふこともあります。

汚點の性の判つた物は次の方法で試します。

脂肪、油類　ベンヂンで大抵取れますが、若し取れない時は一寸濕めてその上に白布をおいて上からアイロンをあてゝ吸ひ取らせます。油類はキハツかテレビン油で洗ひ、あとをベンヂンで洗ひます。

青インク　馬鈴薯を卸したものを度々とりかへては塗つて水洗します、又牛乳でも宜しいし、醋酸とアンモニヤとを交互に塗つても宜しい、白い物は漂白すればよく取れます。

赤インク　アルコールで洗ふか饂飩の煮汁で洗ひます。

醤油　醤油や食物の煮汁など大抵石鹸の薄い液で取れます、又大根卸の汁も宜しい。

酒、ビールの類　アンモニヤ水で拭くか石鹸水で洗へば大抵取れます。

乳　きづベンヂンで洗ひ、乾いてから硼砂の薄い液で洗ひます。

汗、尿　汗と尿は同じ性質ですから同じ方法でしきす、アンモニヤを薄めて液を作りこれで汗のしみの箇所を拭ひます。

墨　ご飯に粉石鹸を少しまぜて練つたものをぬりつけて揉むか、米糠七に重曹三の割合で混ぜて水でどろ〴〵に煉つた物を汚點の上に塗つて暫くそのまゝにおいてから、棒で徐かに叩いても宜しい。又小鳥の糞をどろどろに溶いて墨の部分の兩面から塗つて一時間位おいてから水洗して更に石鹸洗をします。

血　少しばかりの時は口に水を含んでそれで洗つても取れます、又大根おろしの汁をつけても宜しい、血は決してお湯につけてはなりません、必ず水でいたします。

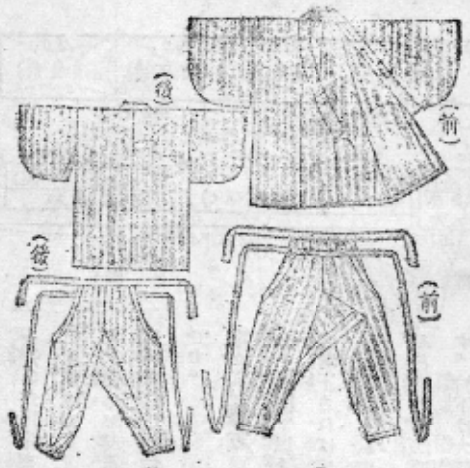
錆　金物の錆は蔴酸の液（五勺の湯に蔴酸茶匙一杯）で除れます。

泥はね　よく乾いてからビロードのやうな軟い布で擦つて、その後に汚點が殘つてゐましたらベンヂンで拭きます。

果物の汁　新らしくついた汚點ならば薄い鹽水で除れます。すべて汚點を脫きましたらあとをよく水濯ぎして、いろ〳〵な藥品の殘らぬやうにします。直接水につけられない物は濡れタオルで叩くやうにして取ります、さうしてアイロンをかけるか、小さい部分ならば手伸で仕上げます。

上着附モンペ

出來上り圖

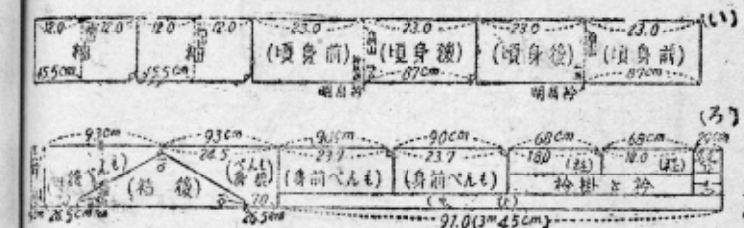


第一圖

モンペの作り方

和服の美しさは日本獨特のものですから、晴着、外出着等には、これ迄の和服の姿をどこまでも保存したいと存じます。しかし國民總動員して銃後の守に働く今日では、身も心も引緊まるやうなキチンとして便利な働きよい服裝が望ましいと存じまして、非常時平時兼用の家庭着として各家庭に普及致したいのが、この上着附モンペであります。これは裁方を工夫して、一反で上下が出來る經濟的なもので、しかも縞やその他の見場の惡くない程度に廉くしてありますから、全體がゆつくりしてゐて、少しも窮屈なところがありません。

裁ち方圖



第二圖

モンペの作り方

用布　用布は一反あれば、第一圖の出來上り圖で御覽のやうな上下一揃ひが出來ます。綿物ならどなたにも一番似合ふやうですが、柄物でも無地でもよく、着古した着物を解いて利用しても十分間に合ひます。澁んだ古着で仕立てる場合、もし揃布が足りないやうでしたら、上下共布でなくても、上着を柄物にして、モンペを綿物にしても結構です。

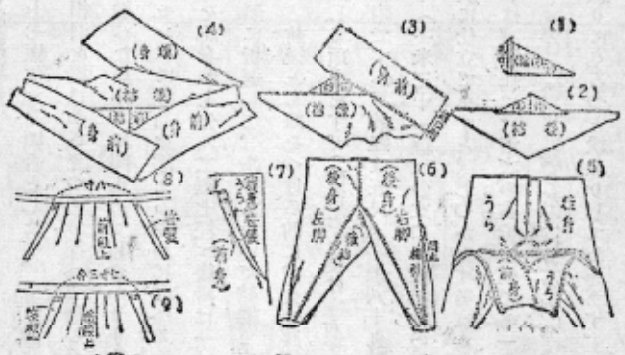
用布の裁方　第二圖の（い）（ろ）は鯨尺で二丈八尺五寸（十米七十九糎）以上ある一反物の裁方ですが、隔靴ですから、この圖を御參考下さればすぐに裁てませう。記入の寸法は鯨尺とメートルです。

上着の縫方　上着は第一圖の出來上りで御覽のやうに、單衣と殆んど同じ寸法で、御自分の寸法を標附してお縫ひになれば宜しいのです。衿下は大體八寸（三十糎強）ぐらゐに致します。

袖は下着を重ね着する時のことを考へ、袖口の寸法を詰め、キリツとした型に致しますが、更に防寒着などの袖口のやうに、紐かゴムテープを通して絞りますと、非常の場合に一層役立ちます。

モンペの縫方　モンペは第三圖のやうにお縫ひ下さい。

縫ひ方圖



第三圖

モンペの作り方

前後の裾　裾の部分から縫ひ始めます。先づ（1）の様に、前裾の五寸（十九糎）の所を中表に二枚合せて縫ひ、折は隠し鉄で押へておいて（縫代の幅の部分は、すべて隠し鉄で押へておく）この接目を（2）のやうに、後裾の一番長いところの眞ん中へ合せて縫つたら、折を前裾の方へ返します。

後前身の縫合せ　（3）のやうに後裾の一方の端を裾口に、前裾の三角の角が股上止りになるやうに、前身を裾口から合せて縫ひ上げ、後身は（4）のやうに後裾の斜線のところを、同じく裾口から合せて縫ひ上げます。縫代は前後とも身頃の方へ折ります。

前後の股上　前後とも股上の左右を縫ひ合せ、折を右脚の方へ倒しますが、後股上は特に一寸の縫代とし、更に縫代は上の一枚を開いて、着物の縫縫代のやうに忍で綴をし、（5）のやうに下方を三角に折り込んで、周圍をぐるつと芽新しますと、居數當りになつて丈夫であります。

相引と笹襲　相引は低いほど穿きよいのですが、あまり低すぎては恰好がよくないので、普通一尺四五寸（五十七糎位）を頃合とします。（非常時専用なら上まで縫ひつぶします）前後の相引を裾口からきつちり揃へて縫ひ合せ、（6）のやうに、折を前身の方へ片返しにしたら、上の縫止まりを綻びないやうに閂止めでしつかり止めておきます。

笹襲はモンペに氣品を添えるために整へるものです。寸法は（7）のやうに女袴の笹襲と同じ要領で、上端で幅を前身が七分（二糎七粍）後身は一寸（三糎八粍）位に引上げますが、簡單にする時はその分だけを裏側へ斜に折返して、衝けておいて結構です。

紐附　前後とも紐をつける前に、先づ腰幅を出來上り寸法に寄襲しますが、前襲は（8）を、後襲は（9）を參照して頂きます。（前後とも襲は左右二つづつ平均にとります）

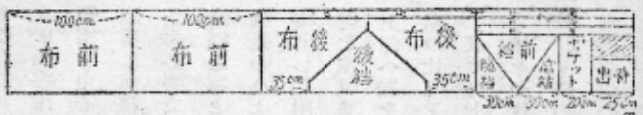
次は紐附ですが、前紐は五尺（一米八十九糎）から五尺五寸（二米八糎）、後紐は三尺（一米九四糎）から三尺五寸（一米三十一糎）の丈に、前掛けの紐をつける要領でつけます。この時後紐は、用布を二枚接ぎ合せて幅廣に仕立てますと、しつかりするばかりでなく、見た目もよいのです。

紐心布は、後紐には浴衣の古でも何でも一枚入れますが、前紐は好みで、入れなくても構ひません。

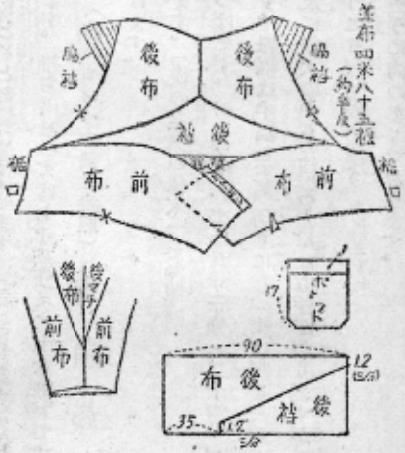
裾口　裾口は紐布の殘りがなければ別布（防寒用には天鵞絨が温くてよいです）で、三四分（一糎四粍位）の幅上りにぐるつと緣取りしておきます。

これですつかり仕立上りました。

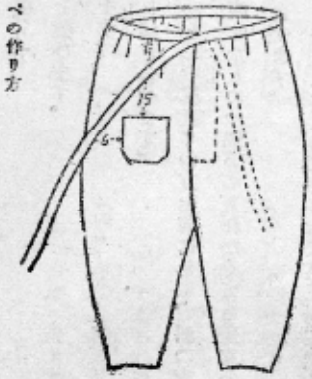
裁ち方圖



縫合せ方



出來上り圖



第一圖

モンペの作り方

改良モンペ

今一つ改良モンペを御紹介致しませう。

用布　用布は並布約半反（四米八十五糎）を第一圖のやうに裁ちます。然しこの寸法は標準寸法ですから、實際に當つては御自分の體に合せてお仕立下さい。なほ普通の女物としては後幅から紐を一本取つた殘り幅位が丁度よい幅になります。

縫方順序　細いところは、前のモンペの縫ひ方を御參考にして頂くこととして、縫方の順序だけを申上げます。

（一）先づ最初に後股上を縫ひます。

（二）次に後襠附を縫ひます。

（三）後襠を中心に前襠を接ぎ合せます。

（四）脇襠は前襠と同寸法とし、眞直ぐの方を前にして、斜の方を後幅につけます。脇襠は肥つた人の場合は是非必要ですが、痩せた人には強いて入れなくても差支ありません。

（五）前幅と襠とを縫ひ合せます。

（六）脇縫の△と△・×と×とを縫ひ合はせます。（第三圖「縫合せ方」參照）

（七）持出しを附けます。持ち出しの丈は七寸二分（二十七糎）です。

（八）襞を取ります。（前のモンペの襞を參照）

（九）上部へ裾をつけます。

（十）裾の仕末をします。（後の「裾の仕末」を參照）

（十一）ポケットをつけます。ポケットの丈は五寸三分（二十糎）程に致します。

（十二）紐をつけます。紐幅は半幅を三つ切りにし、丈は胴を三廻りして結ぶ位が適當です。

裾の仕末　紐の仕末には次のやうないろ〳〵な方法がありますから、適宜のものをお選び下さい。

（一）割素前掛のやうにゴムで縮めます。

（二）出來上り圖のやうに筒のまゝでおきます。

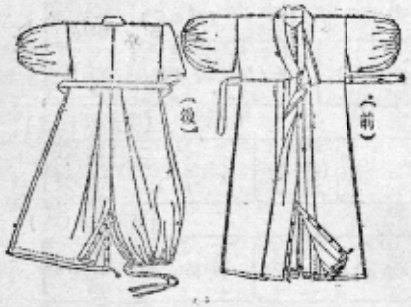
（三）男子のズボン下のやうに紐を踵にかけます。

第二圖

（四）細い紐をつけて前で結ぶやうにします。但しこの場合は餘り長い紐をつけぬこと。紐が長過ぎると踏んだりして危險なことがあります。紐で結ぶ場合には後の縫目を三寸五分（十三糎）ほど開けておくと結びよいです。

（五）スナップをつけて置いて必要に應じて裾口を細くつめます。

出來上り圖



第一圖

家庭改良服

この改良服の特徴と思はれる點は

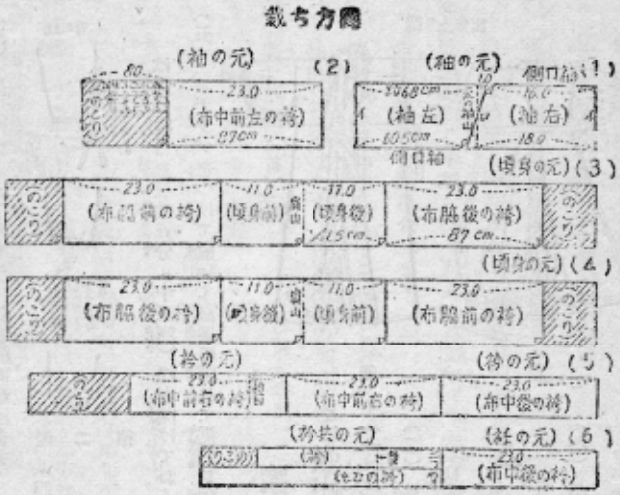
（一）一枚で春夏秋冬を通じて着られること。

（二）身幅がたつぷりしてゐるので、冬は相當厚着をしても見苦しくないこと。

（三）夏は肌襦袢と下穿の上に着ますから、普通の着物より涼しく着られること。

（四）帶は袴のやうに、いざといふ場合は、必要に應じてスナップをかけ替へ、ズボンのやうにすることの出來る

裁ち方圖



第二圖

こと。

(五) 帶が要らないので、活動に便利であり、衛生的であること。

(六) 袖口をゴムテープで絞つてあるので、身輕い動作が出來ること。

であります。(第一圖出來上り圖參照)

用布　夏冬通して着られるものとしては、銘仙が一番よろしいでせう。袴が大部分ですから、柄物より無地の方がしつくり致します。從つて柄の振手になつたものや、色の褪せた長着を染め替へて利用なさるとよいと思ひます。他に黒のスナップ十組、黒の丸打紐を六尺位が入用です。

裁方　裁方は第二圖の(1)から(6)までを御覽になつて、元の着物を夫々無駄なく裁ち合せます。身頃の丈、袴の丈は着る方の體格によつて一樣には參りませんが、お端折の分がそつくり殘ることになりますから、相當背の高い方のものでも、たつぷりした丈で裁てます。

縫方　縫方は次の順序でいたします。

(一) 袖は第二圖のやうに(イ)と(ロ)の袖下を合はせて縫ひますと、自然に紡底形の袖に出來ますから、袖口を三つ折紺にして、ゴムテープを通しておきます。

(二) 身頃は背縫をし、その他は普通の着物と同寸に、袖附、身八つ口を殘して脇縫ひをし、裾で前幅をいつぱいにして、下方を五分殘して衿をつけ(衿幅は着物と同寸)袖をつけます。次に後身頃の裾を、身から腰幅に合せて縫ひ縮めておきます。

(三) 袴は後前の脇布を夫々接ぎ合せて縫ひますが、前後とも中央は裾から八寸五分縫ひ殘し、前だけは右前布の半幅を二つ接ぎ合はせる時に、上方から八寸ほど縫ひ殘します。(着る時に無理をしないやうに)

こゝでは襠のとり易いやうに、前後とも別々に縫ひ、先に裾もくけておき、大略普通の袴のやうに前は六つ、後は四つ襞をとつて、脇をすつかり縫ひ合せます。そして前に縫ひ殘しておいた後中央の下方へ、右は二分(八粍)の持出し、左は二分五厘(一糎)の見返しをつけて、五組のスナップをつけます。

裾は丸打紐を通して先に結び瘤を作つておき、胴接ぎを縫ひ合せます。紐は心を入れて八分(三糎)の幅にくけ、兩脇に一分五厘(六粍)幅の紐通しを作つてくけ、身頃の衿をきちんと合せて見てから、衿先スナップをつけます。なほ袴の紐は、少し太目のものに致しますと、締めた時優美でもあり、又しつかり致します。

婦人標準服の型式

婦人標準服の型式は大きくは甲型、乙型の二種に定められて、その構成はどちらも上衣と下衣とから成る二部式として帶をつけますが上下つゞいてゐる式、つまり一部式とすることも出來ます。更にこれを甲型に於きましては一號型、二號型とにし、乙型に於いては下衣を輪式と捲き合せ式に別けます。

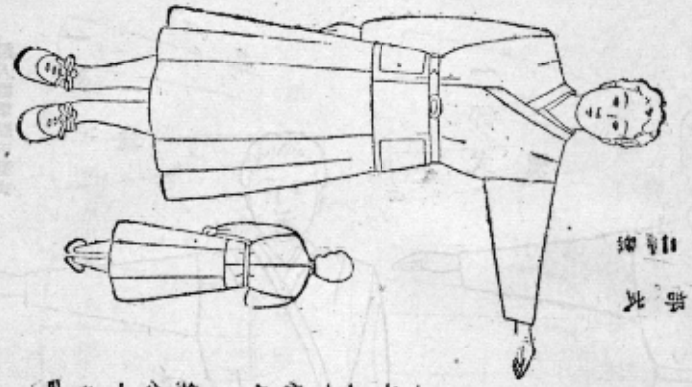
帶は型も用布も隨意といふ事になつてゐます。

この外下着として肌着、腹卷、下穿、中穿、胴着等は適當に用ひ、外套は右前合せとして從來の和服のやうに綿を入れてもよく、帽子は夏期又地方に依つては用ひる事になつてゐて履物は草履でも靴でも隨意であります

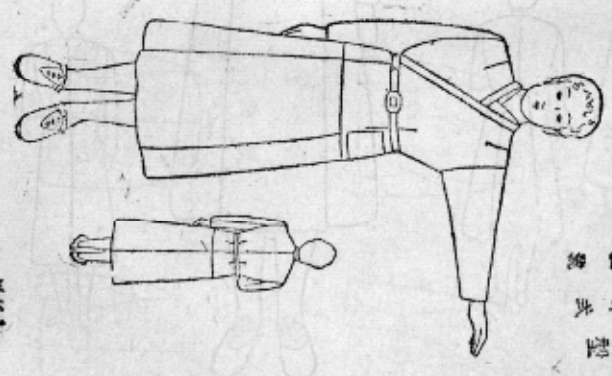
一、甲型

圖で見る通り甲型は洋服式ではありますが多分に和服式が取り入れられ、衿は日本衿をつけて右前合せとなつて居ります。この衿はつけなくてもよい事になつてゐます。其の他切替や襞、摘み、縫ひ縮め等をつけても良い事になつてゐます。袖は筒袖式長袖になつて居りますが、暑い時や地方によつては半袖にしてもよい事になつてゐます。袖附は山を低く前後の劔は略同じにして臨明を作ります。

下衣の丈は膝蓋を覆ふ程度又は少し長い目にし、裾廻りは一米八十糎程度で輪式、襞は隨意にします。



甲號　男子用



乙號　男子用

婦人標準服の型式

一部式 一號

一部式 二號

大人 上着 三分七厘 裏

上着 表

上着 裏

下衣 表

下衣 裏

小人 上着 表

上着 裏

下衣 表

下衣 裏

一部式

一覧

二部式

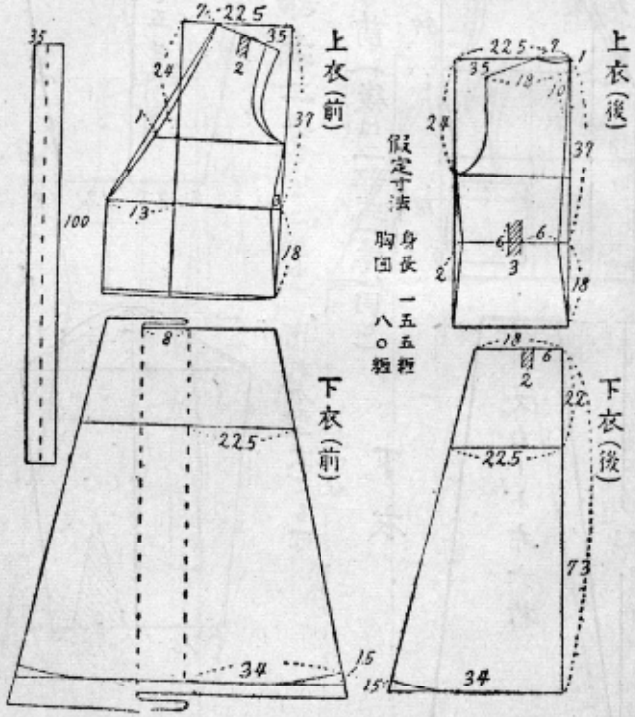
一覧

型紙の作り方及び裁ち方

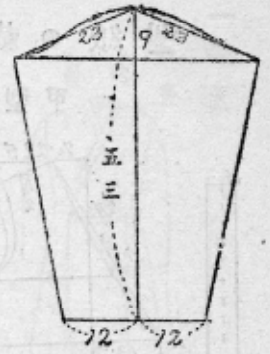
先づ左圖のやうに型紙を取りまして、それからこの型紙に合せて布を圖のやうに裁ちますが、何れも縫代は充分取つて置く方が後のためによろしうございます。

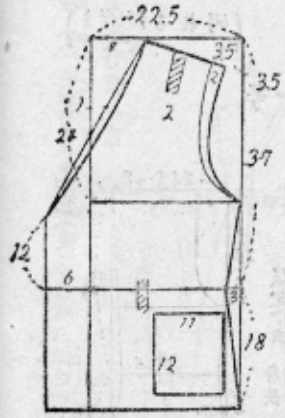
型紙の裁ち方　（何れも縫代を含ます）

甲型二部式一号

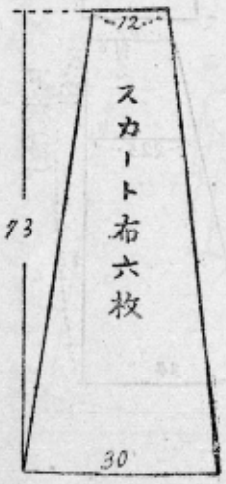


甲型　二部式二号

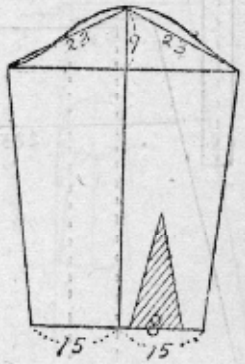




上衣前（後は二部式一号に同じ）

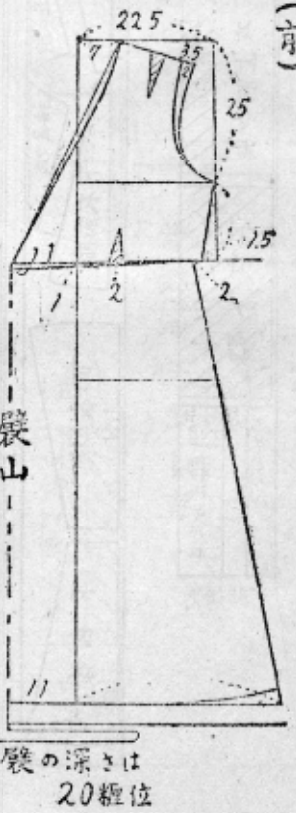


下衣

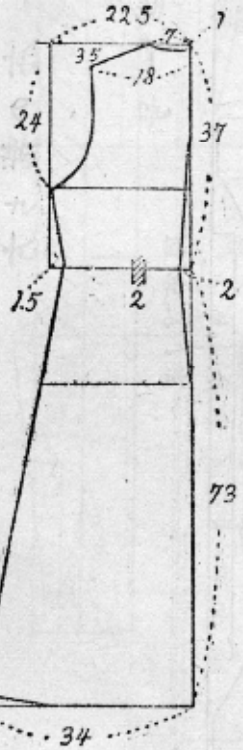


何れの型式でも可

一部式一号（前）



一部式一号（後）

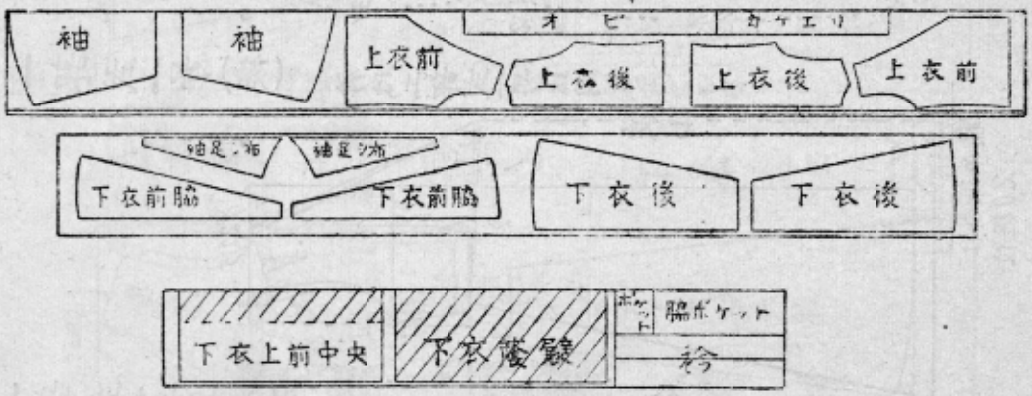


衿は二部式一号に同じ

布の裁ち方

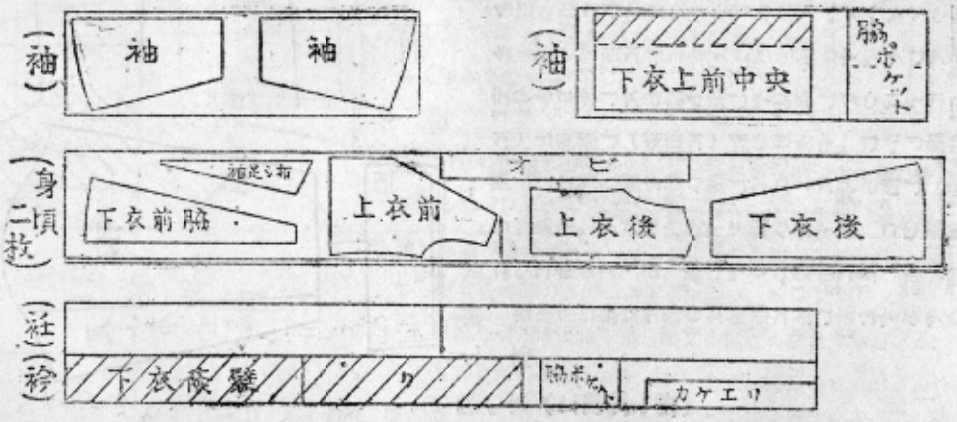
二部式一号

用布9.1米

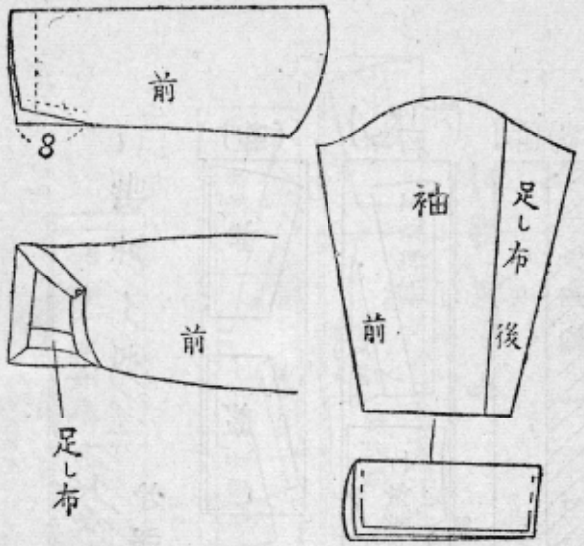


二部式一号

和服更生の一例



袖の縫ひ方



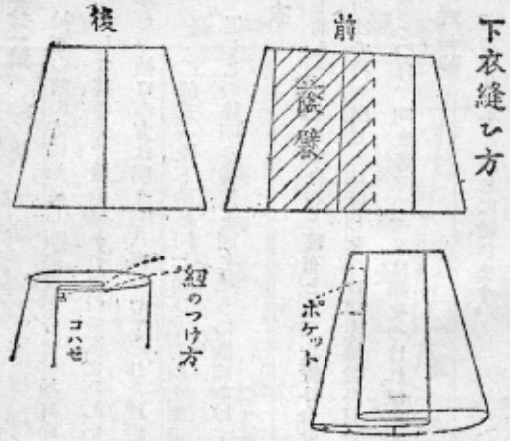
袖口の三つ打

縫ひ方（二部式一襟）

上衣

袖　並幅布で裁つた場合は袖布に足し布をするやうになつてゐますから、圖のやうに後布に足し布を接ぎ合せます。それから袖下を縫ひますが、この時袖口明として約八糎を縫ひ殘してこゝに持ち出し（前袖に）と見返し（後布に）をつけます。しかし縫代が充分ありましたら持ち出しや見返しをつけずに其のまゝ三つ折縫にしてもようございます。そして袖口を三つ折にしてまつりつけホックかコハゼをつけます。

身頃　先づ背を縫ひ、縫ひ目は割つて次に肩及び胴の摘みを縫ひ、ポケットをつけます。それから脇を縫ひ、つゞいて衿下と裾を三つ折縫にします。若し衿下の折り代が不足の時は見返し布をつけます。次に肩を接ぎ合せて折は前身に倒します。次に衿をつけて掛衿をかけ、それから袖をつけますが、この時袖口及び脇縫を中心に前後四糎づゝ附け殘し、こゝの始末をして裏側に當布をします。當布は袖明より二、三糎長くつけます。袖から裾まで位の布の幅を二つに折つてぐるりを縫つたものを袖明の縫ひ代の一方に綴ぢつけ、更に兩方の明き止りに一針づゝ綴ぢつけて置きます。次に内縫を上前裏身頃の袖附の下と下前衿先とにつけ、別に帶を縫つて、身頃に帶通しをつけ、最後に衿先にホックかコハゼをつけます。



下衣縫ひ方

下衣

後布二枚の眞直ぐな方を接ぎ合せ、次に前布四枚を圖のやうに接ぎ合せて縫ひ開きます。次に後布、前布を合せて兩脇を縫ひますが、この時右脇縫ひ目に内ポケットを附け、それから裾と胴廻りを三つ折縫にします。

次に後中心から兩脇十糎の邊に二糎深さ位の摘みを取り、前布に圖のやうな襞を取ります。最後に胴廻りに紐通しをつけ、別に紐を縫ひ、出來上り寸のやうに上部につけ、更に襞山際にコハゼをつけて出來上りとします。

二部式二號

袖　袖布の前の方に袖足し布を接ぎ合せ、袖口の摘みを縫ひます。但し袖布と袖足し布の接ぎ目を後袖にくるやうにして其の先で縦の摘みを取つてもよろしい。次に袖下を縫ひますがこの時脇明のため袖付の方を四糎縫ひ殘し、袖口の方は明きを八糎にしてそれだけ縫ひ殘して口明の始末をします。

身頃　二部式一號と殆ど同じ縫ひ方でありますが脇明を縦にあけるため脇縫の上部を四糎縫ひ殘して置きます。但しこの脇明は一號と同じやうに横にあけてもようございます。

下衣　後も前もそれぞれ中央布と脇布とを三枚縫ひ合せ、次に前後を合せて兩脇を縫ひます。この時右の上部を二十糎明けて持ち出しと見返しをつけ、左脇縫ひ目に内ポケットを附けます。それから裾のまつり絎をして胴廻りに裏帶をつけ、明きにコハゼ又は釦をつければ出來上ります。

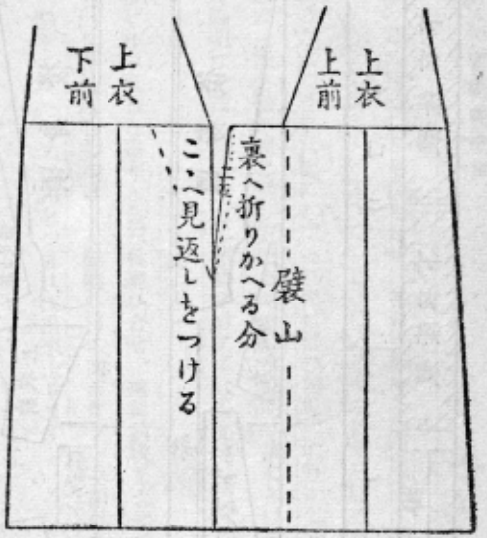
一部式一號

袖　二部式と全く同じに縫ひます。

身頃　後身頃は上下がつゞいて裁つてありますが前身頃は上下が別々になつてゐますから、先づ後身頃の背を縫ひ、次に肩と胴の摘みを縫ひます。それから下衣の前布を接ぎ合せますが、この時上部を圖のやうに二十五糎だけ縫ひ殘して下前の方には裏に見返しにつけ、上衣の前布と接ぎ合せます上前の方は。上衣より下衣の方が幅が廣くなつてゐますからこの廣い分だけは裏へ折りかへして、この折山を前の襞山にして襞を取ります。

（裁斷圖共ニ一圖）

方せ合き接の下上身前



上衣　殆んど二部式の上衣と同じでありますが、裾は下衣と縫ひ合せますから裾絎はしませんでそのまゝに置いて下衣を縫ひます。

下衣　下衣の縫ひ方も二部式と同じにいたしますが、上部に裏帯をつけることは省いて上衣の裾と縫ひ合せます。

脚接ぎ　上衣の裾と下衣の上部とを合せますと上衣の幅が少し廣く次に脇を縫ひます。この時右脇縫ひ目に内ポケットをつけ、裾を三つ折絎にします。それから肩を接ぎ合せて衿をつけ掛衿をかけます。以下脇明の始末内紐のつけ方、帯の縫ひ方、帯通しのつけ方など、二部式一號と同様です。

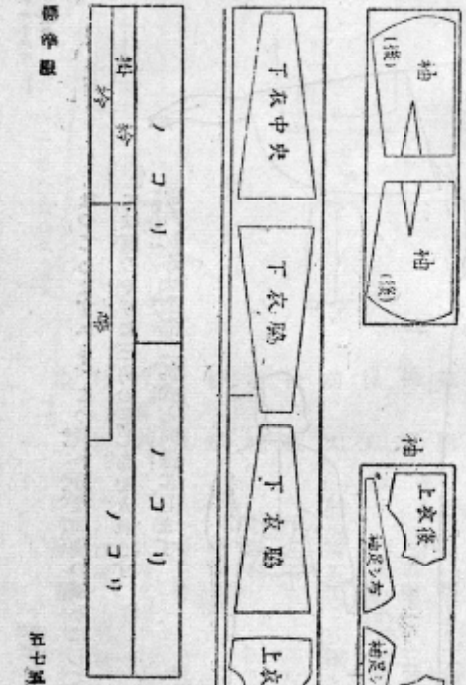
一部式二號

袖　一號と同様に縫ひます。

身頃

4　一部式二號（新しい和服生地使用の一例）　用布七・七米

5　一部式二號（和服更生二例）



二、乙型　乙形生

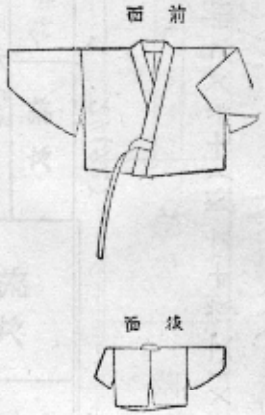
二部式

乙型標準服も矢張り上衣と下衣の二部から出來てゐて、これに半幅帶を締めることになつて居ります。上衣と下衣は一部式即ち上下つゞきの一枚の着物に仕立てる事も出來ますが、一部式より二部式の方が着た具合はよなつてゐますから、この廣い分は前後の摘みにして縫ひ合せ、下前には圖のやうに三角の足し布を入れます。

帶内紐等は全部二部式と同樣にします。

二部式

上衣



下衣

一號（裾含む）

二號（裾なし）

備考

色型上衣と下衣の股合は廣くとること

仕立は單又は給仕立とす

うございます。下衣は更に袴式と袴き合せ式の二種がありましてどちらを用ひてもようございます。

仕立上標準寸法

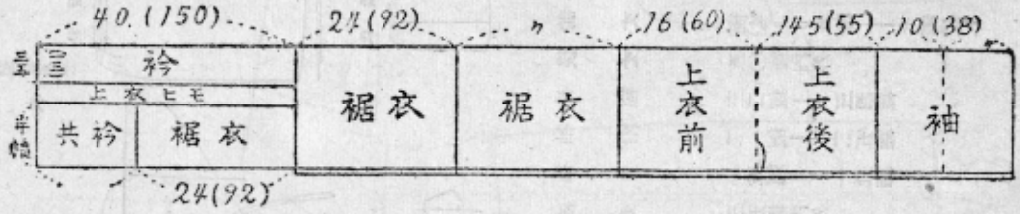
上衣

袖丈	三五糎內外
袖口	一五糎——一九糎
袖附	二一糎——二五糎
袖幅	三二糎——三四糎
後丈	五〇糎內外
前丈	後丈より五糎——七糎長し
後幅	一杯
前幅	一杯
繰越	二糎內外
身八ツ口	一三糎——一五糎
衿肩明	八糎五粍——九糎
衿幅	四糎——五糎
衿	六三糎——六五糎

裁ち方圖

乙型二部式

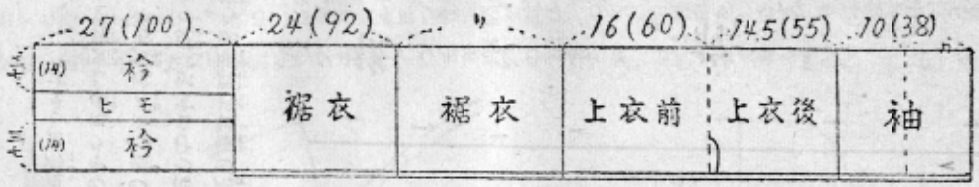
輪式



袖丈×4＋(後丈＋前丈)×2＋裾衣丈×4＋衿丈＝總用布

10	145	16	24	40	237
(38)	(55)	(60)	(92)	(150)	(900)

捲き合せ式

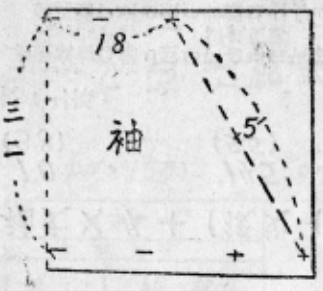


袖丈×4＋(後丈＋前丈)×2＋裾衣丈＋4＋衿丈＝總用布

10	145	16	24	27	＝ 224
(38)	(55)	(60)	(92)	(100)	(850)

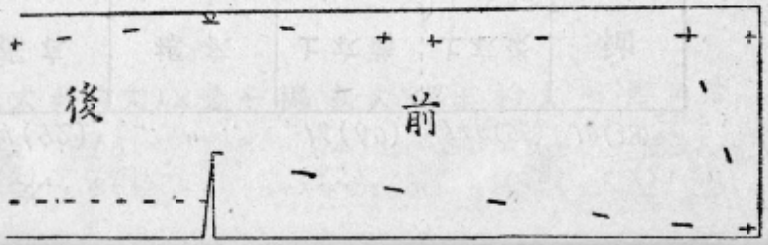
上衣標付圖

(1)



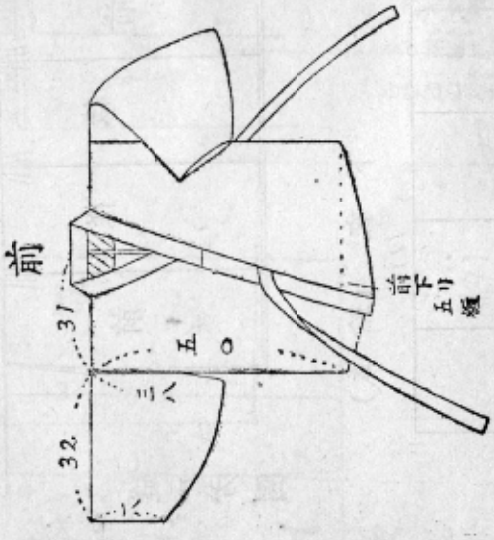
(2)

(3)

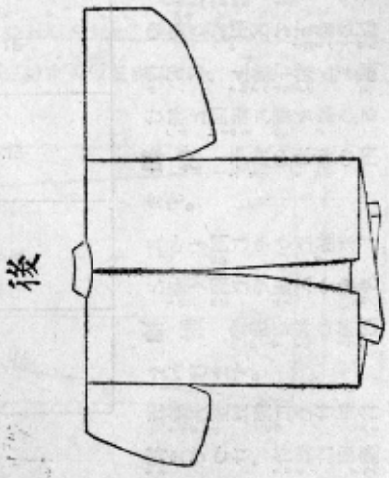


衿附の標は衿肩明から細迄斜めにつけますが、肥つた人、胸の張つた人は赤ちやんの着物のやうに少し丸味をもたせて衿附をします。

上衣　出来上り圖



乙型縮寸圖



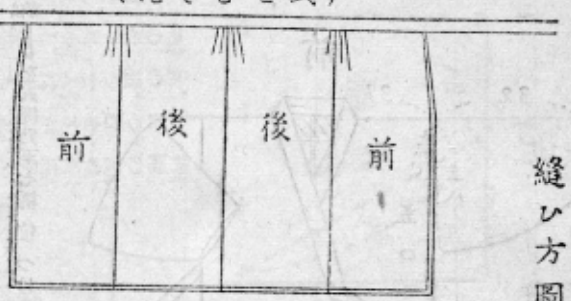
第八圖

身頃は前下りを五分乃至七分位つけます。つまり衿附の方がそれだけ丈が短くなります。

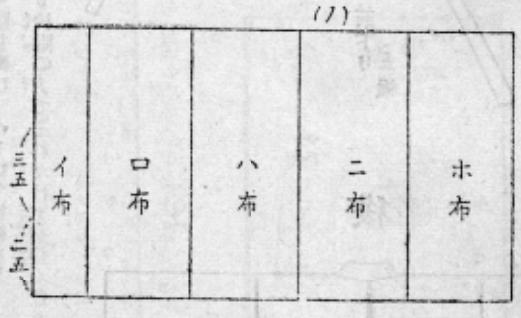
つくるますから嫌好がそうさせます。肥つた人はかうした上に更に脇の縫代も裾の方を細く取ると一層よくなります。次に胴廻りを普通につけて脇を縫ひ、つぎに裾廻りをします。裾は後身頃は平らに前

縫ひ方圖

下衣（捲き合せ式）



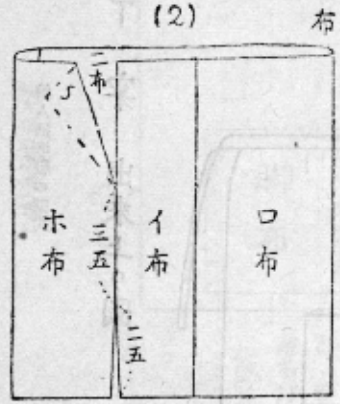
下衣（輪式）

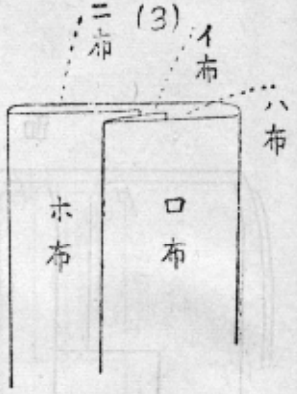


衿附　普通襦袢の要領で裾までつけ、衿幅は四糎五粍乃至五糎にくけ掛衿をかけます。

袖附　普通着物の袖附と全く同じで振八つも身八つも同にやうに始末します。

紐附　子供の着物の附け紐と同様に帯を締める位置に、上前下前とも圖のやうに附けて下前の紐を上前脇明に通して締めます。赤ちやんのある人は授乳に便利なやうに後紐にして胸を自由に開く



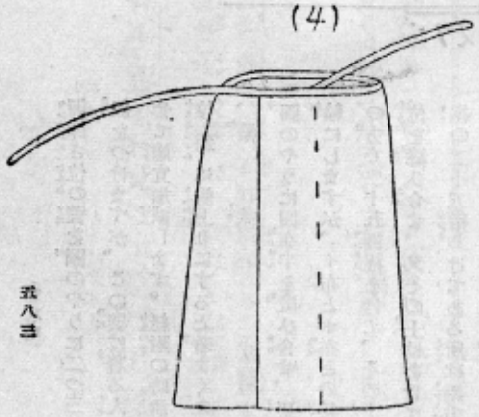


事の出來るやうにいたします。

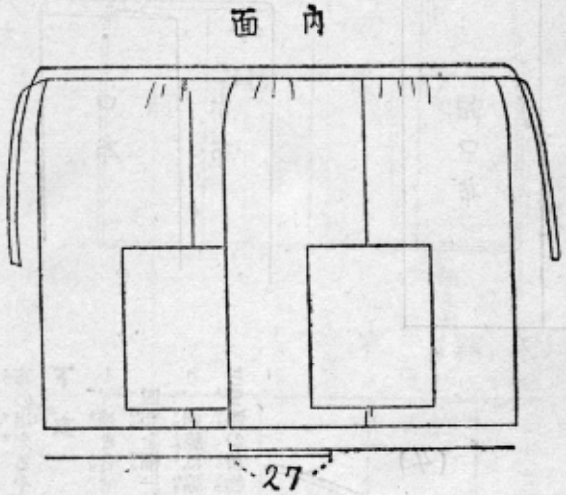
下衣

1、捲き合せ式

四布を幅一杯に縫ひ合せ、中央の縫ひ目は背縫のやうにかゞり、兩脇は脇縫のやうに折ります。四布が縫ひ合さりましたら普通の着物のやうに竪巾と裾縫をします。次に上の端に一



中宛　出来上り圖

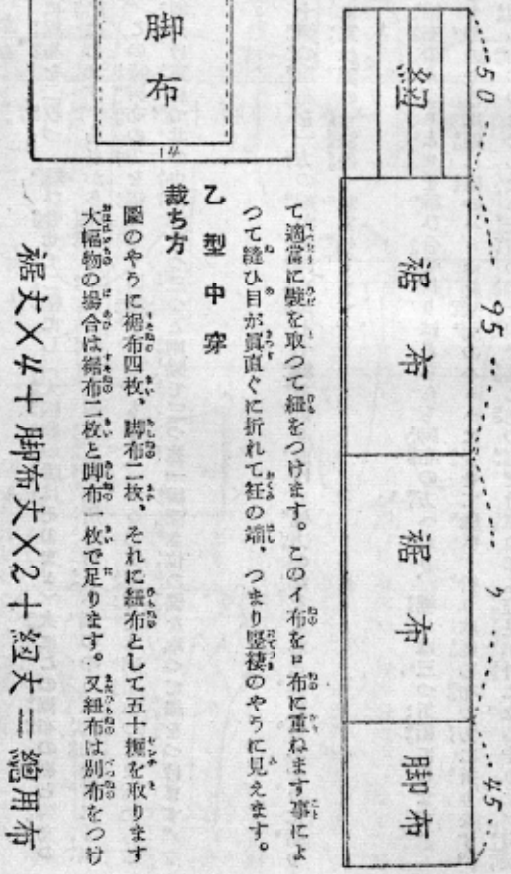


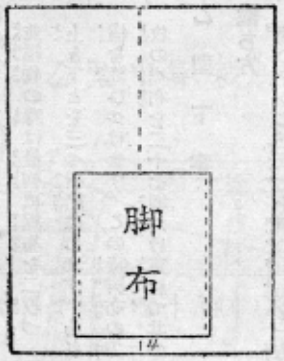
裡深さ位の袋を圖のやうに二つ三つ取つて紐をつけますが、この袋は着る人の體に合せて適宜加減します。紐附の時前幅で五糎位斜に前上りにすると着よくなります。

2、裁　式

圖のやうに四布半を縫ひ合せ、更にこれを輪にしますが、イ布とホ布との接ぎ目は裾の方で二十五糎程あけて、その上三十五糎位を縫ひ合せ、又その上はあけて置きます裾の二十五糎あけてある所は、兩方とも三つ折縫にし、縫縫は一糎の幅にくけます。紐をつける時は圖のやうにイ布を縫ひ目から裏側に折つてロ布に重ね二枚一緒に紐を附けます。ホ布の上の縫ひ殘してある分は、上で五、六糎幅狹くなるやうに斜に折り曲げ、それから揃き合せ式のやうに體に合せて適當に襞を取つて紐をつけます。このイ布をロ布に重ねます事によつて縫ひ目が眞直ぐに折れて紅の端、つまり竪褄のやうに見えます。

乙型中宛　裁ち方及縫ひ方





乙型中宛　裁ち方

圖のやうに裾布四枚、脚布二枚、それに紐布として五十糎を取ります大幅物の場合は裾布二枚と脚布一枚で足ります。又紐布は別布をつけ

裾丈×4＋脚布丈×2＋紐丈＝適用布

95　45　50

ても差支ありません。

縫ひ方

並幅物の時は最初に裾布を二枚づゝ縫ひ合せて二幅にし（大幅物の時はそのまゝ）次にこの裾布の裾と脚布の上と下とを三つ折縮にします。それから裾布の中央で裾から四糎上つた所から上へ圖のやうに脚布を當てゝ兩横を縫ひつけます。この時脚布の方を幅で三、四糎ゆるめてもよい。かうして兩方とも脚布がつきましたら二枚の裾布を二十七糎だけ重ねて其の中央で二つ三つと兩脇で三つ宛一糎深さ位の襞を取つて紐をつけます。

乙型下穿

裁ち方

圖のやうに三米七十糎の用布を一方の端から脚布丈七十糎を折り曲げ、他方の端をこれと突き合ふやうに折り曲げて全體を二枚に重ね圖の寸法通り裁ち切ります。

縫ひ方

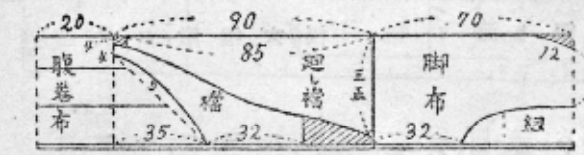
襠附　脚布のイと襠布のイ、ロとロを縫ひ合せ折りはどちらも脚布の方へ折り、裾口は三つ折縮にします。

廻し襠附　左右とも圖のやうに廻し襠のハニホを乘間のハニホに合せて縫ひ、折りは廻し布の方に折ります。かうして左右とも廻し布がつきましたら左右の脚を前で廻し布の幅だけ重ねて（左足が外になるやうに）假襞で押へ、後廻布で三つほど深さ一糎位の襞を取つて腹卷布をつけます。

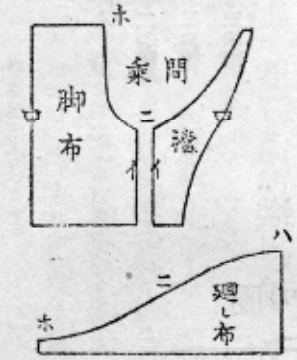
腹卷布附　腹卷布を表から附け、先端に紐を附け裏で結けます。腹卷布の中央から二十糎左の幅の中央に紐

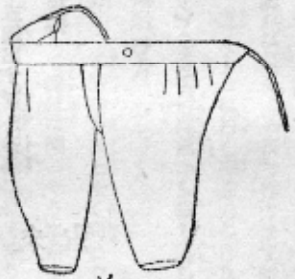
通しの穴を明けてかゝります

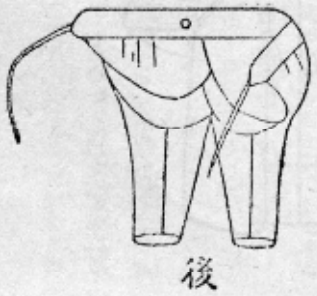
圖方ひ縫及方ち裁穿中型乙



布用總＝2×(布脚＋襠＋廻し＋布巻腹)
20　90　70







羽織

仕立上寸法

袖丈	三六糎内外	
袖口	一六糎——二〇糎	
袖附	二二糎——二六糎	
袖幅	三二糎——三四糎	
身丈	八五糎内外	
後幅	二九糎——三〇糎	（裾にて二・五糎出す）
繰越	二糎——三糎	
身八つ口	一〇糎	
前下り	四糎	
乳下り	三二糎（肩山より）	
衿幅	六・五糎	
衿肩	六三糎——六五糎	

裁ち方

圖のやうに袖丈の四倍と身丈の四倍、それに折りかへりの分とあれば足り、一反で作ります時は裏表無垢に出來ます。從來の羽織と違ふことは衿を裾までつけないこと、裾をつけない事、袖丈を短くする等で衿は前から裁ち落した布でヘチマ衿につけます。

標附け方

袖　乙型の上衣と全く同じであります。

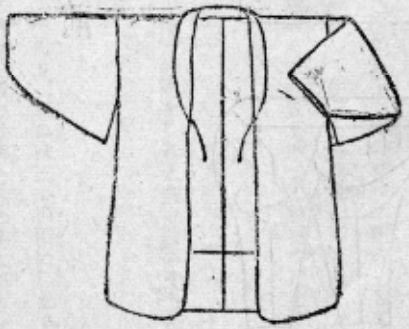
身頃　標付は圖のやうに前身頃裾先に十糎位の丸味をつけ、脇縫を裾で二糎五粍縫ひ出すやうに斜の標をするほか、普通の羽織と同じであります。一反で低廉仕立にする時は胴接を肩か胸でしますと裏返した時割合に目立ちません。衿の型は隨意でよろしいのです。

縫ひ方

袖　着物と全く同じ。

身頃　先づ前後共胴接をして、次に前下りからつゐて前裾先の丸味を縫ひ、なほ丸味から上五糎位までを縫ひつゐけて折き出は裏にかけます。それから脇を標通り裾で二糎五粍出るやうに斜めに縫ひ表にかへします。

羽織裁ち方



圖の上來出

羽織

袖口　手首につける。

診療及給餌口　前の合せ目をそのまま縫わずに、ここから診察や給餌に都合のよいだけ上まで縫つてあけておく。

三　活動衣

着用法で見るように上衣、下衣、それに帽子と手巾との四つで一組となつてゐます。下衣は甲型と乙型とがありますが上衣はどちらの洋服を用ひてもよいやうにしてあります。乙型上衣を用ひるときは圖のやうな變形式の乙型上衣を用ひるとよいでせう。

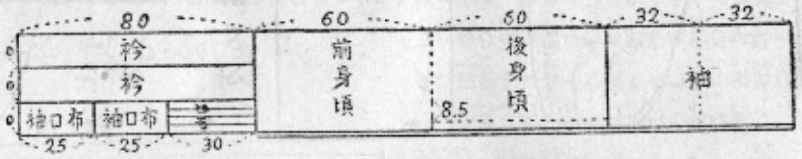
活動衣

乙型裁ち方

上衣　圖のやうに袖と身頃との分け方を11號布を横にして裁ち取り、次に身頃の11號布から袖の11號布を取り、次に袖の11號布から袖口布二枚を取り、殘りの11號布で八十糎四方の布を二枚分とつて衿に使ひ、殘りの1

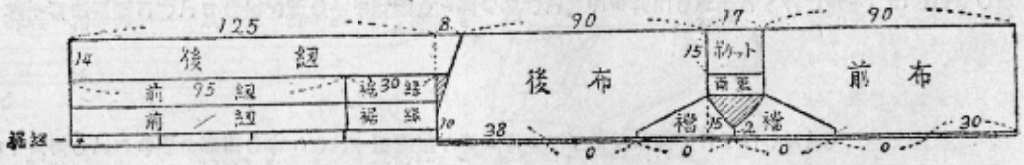
乙型活動衣裁ち方

上　衣



總用布--------#48糎

下　衣



總用布------535糎

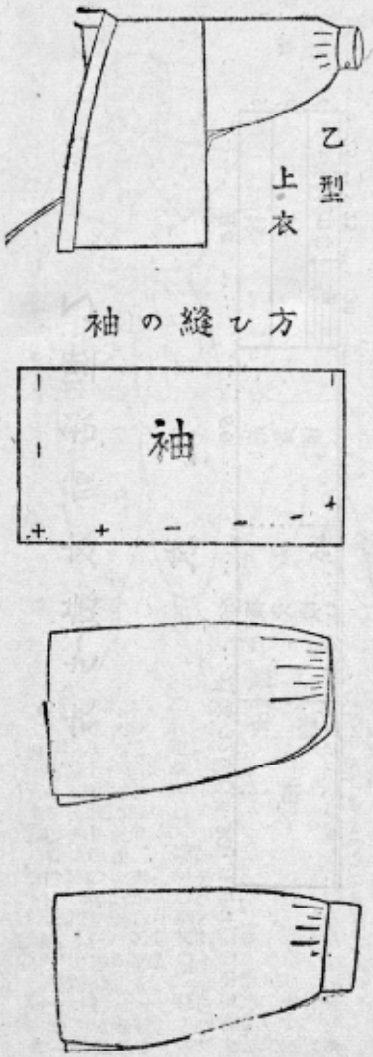
枚を袖口布と紐布にいたします。

下衣　下衣も身頃の分は布を二枚重ねて前布と後布それにポケット布を裁ち合せます。紐布の分は一米二十五糎を一枚取つてこれから後紐の分として十四糎幅を取り殘りを前紐据紐裾緣にいたします。

縫ひ方

上衣

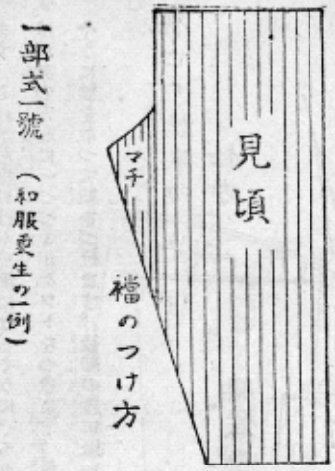
袖　袖下は舟底型にして口の方と附の方を五厘づゝ縫ひ殺して、そこは三つ折縫にいたします。そして口の方は袖口布の寸法に合せて口明を縫ひ縮め、袖口布を表につけて兩端を縫つて裏側で縫けつけます

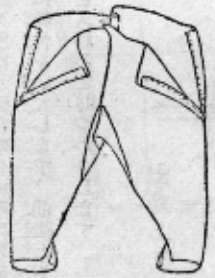


身頃　肩で縫ひ代を一杯にとつてそこから肩幅を計つて背の縫ひ代を決めて先づ背を縫ひます。縫代の澤山ある時は端を耳ぐけにして置きます。次に脇を縫ひますが身八つ口を五糎あけ、裾は普通に三つ折ぐけにして衿付をします。衿布は山で接ぎ合せて前幅は裾で一杯にして斜につけます。次に袖を普通につけ圖のやうに紐をつけて出來上りとします。

下衣　前布後布にそれ〳〵圖のやうに縞目を合せて褶をつけ、折は身頃にかへし、次に前後とも脇上からつゞいて褶の上を縫ひ合せ折は着物の背縫と同じやうに折ります。褶がつき脇上が縫へましたら左右の股下を縫ひますがこの時裾口明として六糎ほど縫ひ殘し折は前身にかへし裾口明は耳ぐけにして置きます。

下衣縫ひ合せ方





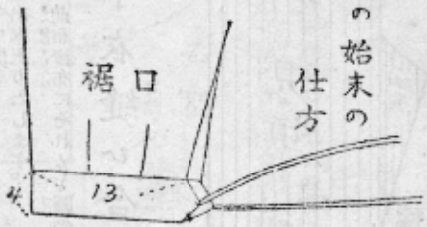
縫合はせ方

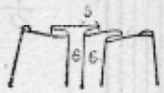
今度は左右の脇を縫ひ合せますが脇明として上で二十糎ほど明けて、折は前身にかへします、次に脇明は上の端で二糎五粍ほど裏へ折り曲げ斜に耳ぐけし

一部式一號　（和服更生の一例）

きます。それから裾口は十三糎になるやうにぐるりで四ケ所ほど襞を取つて裾口布を圖のやうにつけます。今度は前身の左右に一つづゝポケットをつけます。最後に紐付をいたします。前後とも腰幅を三十五糎にして圖のやうに襞を取つて紐をつけます。後紐の腰に堅い芯を入れるとしつかりします

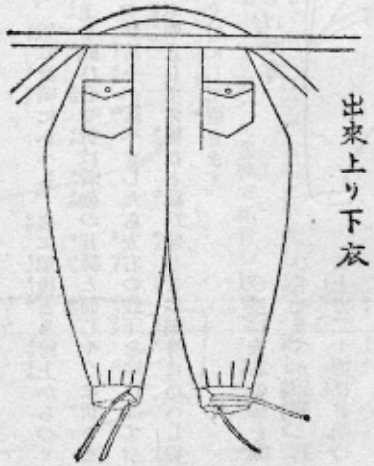
裾口の始末の仕方





腰襞の取り方

出來上り下衣



甲型下衣

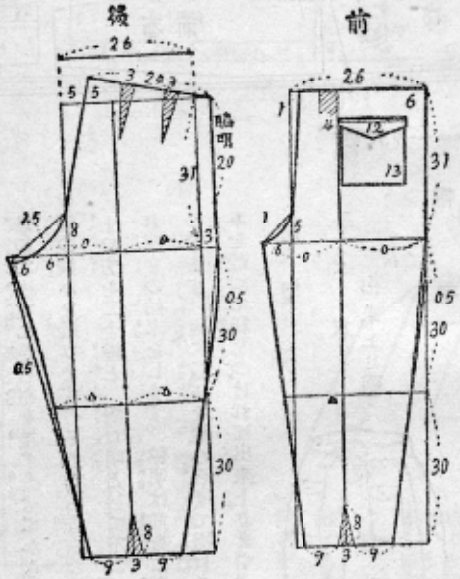
裁ち方

先づ圖のやうに型紙を作つてから布の裁ち方圖のやうに布を二枚重ねにしてそれ〳〵の部分を裁ち切ります。

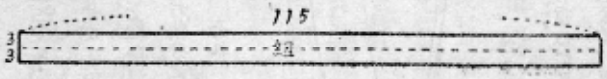
活動衣

甲型　下衣

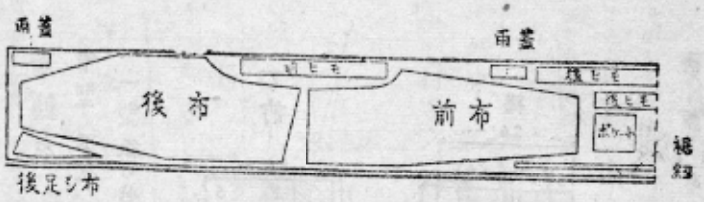
一型紙の裁方



假定寸法　身長	一五五糎
胸圍（ゆるめに）	七二糎
腰圍	九〇糎



方ち裁の布



總用布……432糎

縫ひ方

最初に後布に足し布を接ぎ合せてから前後の股上を縫ひ、次に裾と紐腰の摘みを縫ひます。それから左右の脇を縫ひ合せますが脇明として上の方を二十糎と、袖口明として下の端から十糎を縫ひ殘し、それぞれ明きの始末をします。脇明は前身に身返しをつけ後身に持ち出しをつけます。次に股下を縫ひ合せて裾口の始末をし、それから前身の摘みを縫つて紐をつければ出來上ります。

甲型

下衣

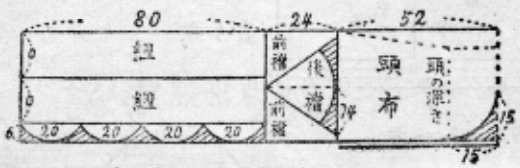
出來上り圖

帽子

裁ち方

二米八糎の布のうち頭布の分の五十二糎だけを二枚重ねにして取り、次から襠布を二十四糎とり殘りの八十糎を紐布にします。更に頭布の頭の丸味を圖の寸法に裁ち後襠と前襠も寸法通り裁合せ、紐布は帽から五糎だけひさし布を取つた殘りを二つに切ります。

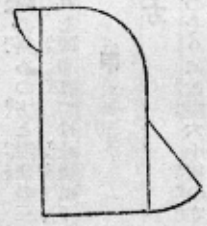
帽子裁ち方



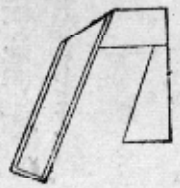
總用布……208糎

縫ひ方

(1) ひさし作り

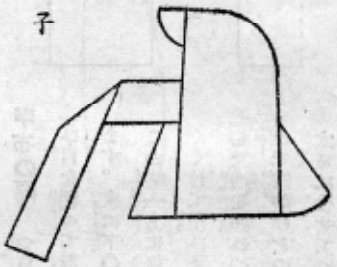


(2) 後襠附　ひさし附



(3) 前襠附

帽子出來上り圖



縫ひ方

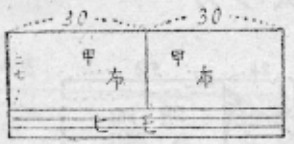
ひさし布の四枚の中二枚を芯布にして外廻りを縫ひ、表に返して圖のやうに丸く刺し縫をします。次は頭布の後に後襠をつけ、頭布の中央を縫ひ合せ縫代は押へ縫にします。それから頭布を被つて見て深さをきめて餘分は適當に內側に折つてひさしを縫ひつけます。次に圖のやうに

前掛の締めの方と附紐の三方とを附けて紐と前掛を附けて、これを頭布につけ最後に下の端を三つ折ぐけにします。

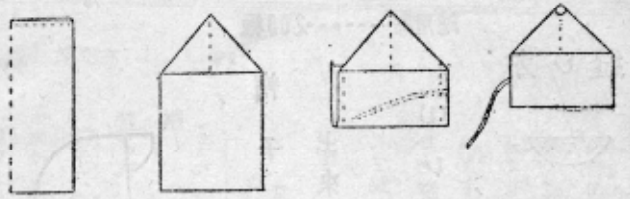
手甲

裁ち方

圖のやうに並幅六十糎の布から二十七糎だけを甲布として取り殘りを紐布にします。甲布は更に丈を二つに切つて三十糎丈、二十七糎幅の布二枚にします。



裁ち方

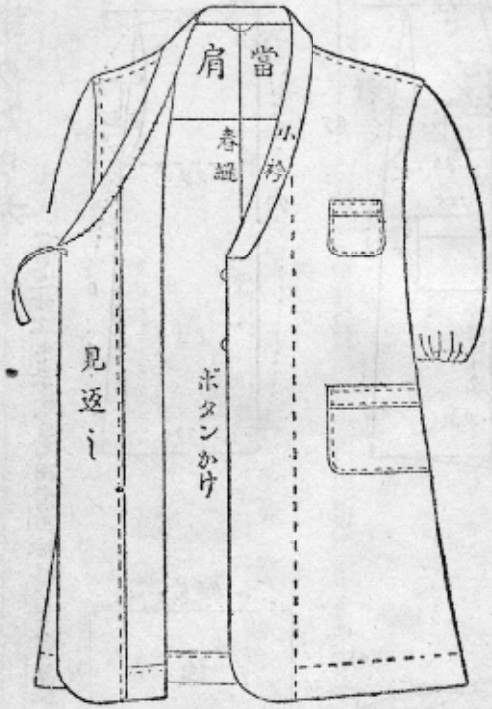


縫ひ方

縫ひ方

甲布の幅　つまり二十七糎を二つに折つて上の端を縫ひ、縫ひ目を割つて表に返し縫ひ目を中心に圖のやうに山形を作ります。次に下の方の布を二つ折りにして兩横を縫ひますが、この時一方に紐を入れて（この紐は袖から裁ち落した布を細くくけて用ひます）縫ひつけ表にかへして、山形の下に表返した端を縫ひつけます。最後に打紐か又は糸をより合せたもので指かけをつけます。位置は山から二糎下つた所で中指の太さに合せてつけます。

婦人會服

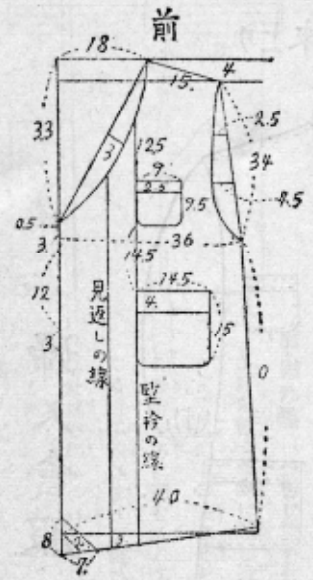


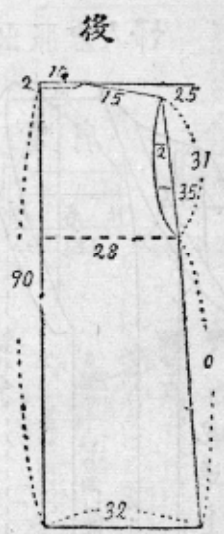
り上來出服會人婦

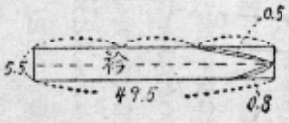
婦人標準服の型式

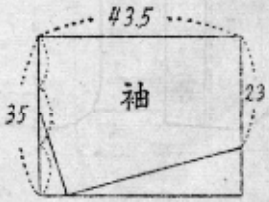
型紙のとり方

（普通寸法を示す、着用者の体格によって増減する）









六〇〇

婦人標準服

裁合せ方

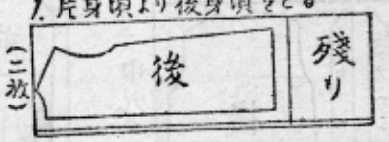
巾七四糎（鯨一尺九寸五分）長さ三〇六糎（鯨九尺六寸）

巾九〇糎（鯨二尺四寸）長さ三一五糎（鯨八尺四寸）

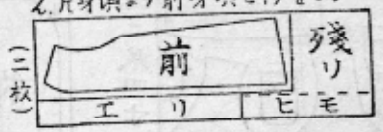
六〇一

長着の更生

1. 片身頃より後身頃をとる

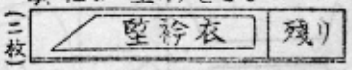


2. 片身頃より前身頃と衿をとる

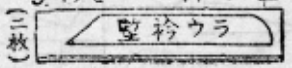


3. 袖より袖をとる

4. 衽より堅衿をとる



5. 衿をニツに折つて堅衿裏をとる



縫代のつけ方

1、身頃、背、脇、肩、袖ぐりは一糎五粍、裾は五糎位、他は一糎

2、袖、袖口は三糎、他は一糎五粍

3、衿、全部一糎、但し必要だけの布を長方形に裁ち、衿先、衿附の丸味は縫ひ乍ら裁ちます。衿芯は厚地やヤラコ或は洋服の芯地のやうなものを用ひます。

肩ぢり布を長く附ける場合は衿を身頃で挟み縫にします。

縫ひ方

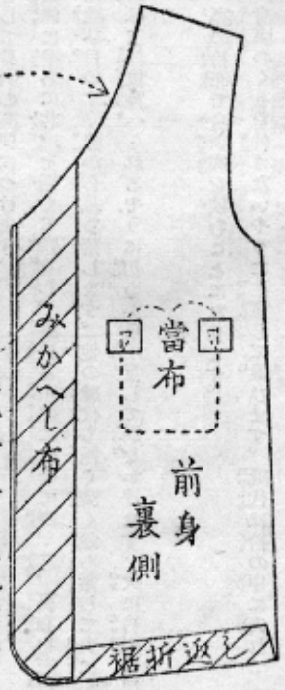
1、先づ物入の口布をつけて豫定の位置に附けます。この時身頃の裏側の物入の口にあたる所に當布をつけます。

2、見返し布と前身頃を中表に合せて、小衿下りの所から見返し布の裾端までを縫つて表に返し、見返し布の裏を衛けます。ミシンの場合は押へミシンにします。

但し更生品又は並幅の場合は先きに堅衿を附けてから身返し布をつけます。

上前の身返し布をつける時にボタン掛を忘れないやうに挟んで縫ひます。ボタン掛は丈七糎、幅一糎位の襷布を裏から縫つて表にかへします。

3、並幅の場合は後布二枚を中表に合せて背を綴ひます。折



は普通着物と同じに折つて表から押へミシンをかけて置きます。

4、前後布を中表に合せて肩を縫ひます。肩當のつく場合は縫つたまゝ前身頃の方に折つて表から押へミシンをかけます。

5、肩當布の肩を縫ひ裾の始末をして身頃の裏側につけます。

6、衿を縫ひます。まづ表衿の裏側に平らに芯地を据えて襞をし、裏衿と中表に合せて表、芯、裏布を三枚一緒に衿周りを縫ひます。芯地は縫ひ目のすぐ際から裁ち落します。他の縫代も狭く裁ち落して表にかへします。この時裏衿が一粍、又は二粍位控へられるやうに初めから注意して襞をかけます。次に衿附の準備をします。

7、衿附は肩當布の無い時は表、裏の衿布で身頃布を挟むことになります。衿の中心と背の中心を合せて、身頃のくりを伸さないやうに注意して縫ひます。縫代は衿の中に入れて、身頃の裏側に表衿の縫代を曲げてまつりつけます。

肩當布の長い場合は表、裏の衿を一緒に襞をして置いて、身頃の表と衿の裏側とを合せて縫ひ、縫ひ代は身頃の方に折つて肩當布をその縫ひ目の上にまつりつけます。

この時衿の中心のところに吊り紐をつけて置くと便利であります。

8、袖附をします。袖の方を身頃より一厘縫代を出して中表に合せて縫ひ、縫ひ代は身頃の方に折つて袖布で折り伏せて押へミシンをかけます。

9、袖口から脇にかけて裾までつゞけて脇縫をします。内袖及び前身頃の縫ひ代を浅く裁ち落して、縫ひ代は前に折り後身頃及び外袖で縫ひ代をくるんで押へミシンをかけます。

10、肩當布を袖附の縫ひ目にまつりつけます。

11、袖口の縫ひ代をまづ五粍ほど曲げてから出來上り寸法に折り曲げてミシンをかけます。この時ゴムテープを通す位置だけ二粍ほどミシンをはづしてかけます。

12、裾を出來上り寸法通りに折り曲げてまつるかミシンをかけます。

13、下前の小衿先の所の裏側と上前脇の裏側に幅一粍、長さ三十粍位の紐をつけます。

14、袖口にゴムテープを通し、下前に飾ボタンをつけると出來上ります。

附若き女性に送る

強く正しくにこやかに

いつも不足ばかり言つて、ものをねだるふくれ面の娘さんがございます。『笑つたら損』といつたやうな顔をして、客にものをつき出す無愛想なおかみさんもあります。御主人や、お友達に挨拶もせずに、いつも佛頂面をした事務員や女工さんもあります。

ふくれ面をした娘さんや、無愛想なおかみさんの居る店は、客足が遠くなります。別に愛想よく言つてくれたからといつて、得になるのではありませんが、人情は微妙なもので、石鹸一つ買ふにも、足は自然に愛想のよい店へ向ひます。

佛頂面をした事務員や、女工さんはお仲間はづれにされたり、御主人からも忘れられ勝ちとなりますから、何時も不愉快に勤めねばなりません。

いやな鳴聲を出す鳥はどこの村里へ行つても嫌はれますが、愛嬌のある美くしい聲の鶯は萬人に持て囃されます。いつもニコ〳〵した快活な娘さんは、顏容までもよく見えまして、近所の人にまで賞められます。愛想のよい何時もニコ〳〵顏のおかみさんの店は繁昌いたします。

かうして愛想のよい、ニコ〳〵顏の人達の周圍には、いつも明るい春のやうな世界が現はれます。家庭の幸福もおう繁昌も、近所や會社の圓滿な交際も皆この、ニコ〳〵顏から惠まれて來ることを痛切に感じます。

しかし愉快に、幸福に暮して行くには、ニコ〳〵顏だけでは、複雜な世の中に處して行かれません。そこには强く正しくといふことが必要であります。

『糠おかしい』何でもないことがおかしくて笑つて、時に老人から叱られることもございませう。いつもにこやかであることを希望いたしますが、といつて、底なしに笑つたり、時と場合をも考へないで、只ニコ〳〵ばかりしてゐたのでは誘惑の多い世の中でありますから、どんな不幸を見るかも知れません。甘い言葉で誘惑されて不幸のドン底に泣き暮して居る婦人の多くは、この底なしのニコ〳〵が祟つて居るのでございます。

ですから、にこやかの底にどことなくひき締つた强さがなければなりません。

敢て男子の向ふを張つて主張せよといふのではありませんが、自從したのでは肝腎の女の務が果されません。しかしたゞ强くと云ふても、徒らに强ければよいと云ふのではありません。それが正しくなければなりません。即ち正しいと信じたことはどんな迫害や誘惑があらうとも、眞實勝利が得られる迄、にこ〳〵と耐え忍んで行く心の强さが必要であります。

要するに背樣は、いつもにこやかでなければなりませんが、底なしのにこ〳〵はいけません、不斷の修養によつて判斷力を養ひ、事毎に判斷して正しいと信じたことの爲には、何處迄も耐え忍んで最後の勝利を得るといふ强さがなければならないのであります。

この强い意思と、正しい判斷と、にこやかな情緒とが昭和時代の婦人として、最も大切でございます。

焦るな休むな怠るな

「人の一生は重き荷を負ふて、遠き路を行くが如し。急ぐべからず。」とは徳川三百年の礎を築かれました家康公の遺訓でございます。無暗に成功を焦つた光秀が僅かに三日将軍で終りましたのに比べて、さすがに大成功をなさる人の心掛は始めから違つてをりました。

山間の渓流が岩を噛み泡をたてゝ、すさまじい勢で流れてをります様は、一寸見ますと快い感じを與へますが、平野を流れる大河の洋々としたのに比べますと、いかにもせつかちで小さく感じられます。其れと同様に焦り氣味の人はすることが早く、テキパキと萬事を片づけるやうですが、其れはほんの一時のことで、直ぐ疲れて飽きやすく昨日は甲のことに熱中してゐたかと思ふと、今日はもう乙のことに夢中になつてをります。一時の手なぐさめならば兎も角、自分の一生をかたちづくる職業や學習の方まで、こんなですと、終には何にも出來なくて終ります。先生にならふと思ひ、或は事務員になりたいと思ひ、さては美容師に等といつた鹽梅に、いつも成功を焦つて、將がフラ〳〵して居りますので自分ながらも方向が決りません。こんな人はいつも夢を見てゐるやうで一向現在の仕事に身が入りませんから、屢々失策をいたします。

これに反して十年間一つのことをみつしりやつて居れば、大抵のことはその道の專問家として、人も認め自からもその氣になるものであります。

焦らず、休まず、怠らずいつも同じ調子に不斷の努力をつゞけて行かねばならないのでございます。

小さい島國育ちの日本人は、よく焦る國民だといはれてをります。それに近頃はうち續く生活難、就職難に追ひ立てられて、のび〳〵とした氣持になつて、自然の裏を喜ぶ暇さへ持たぬ程、焦りに焦りつゝ過して行くことは、全に愛ふべき狀態でございます。こんなことでは、いつ迄經つても、明るい住み心地のよい世界を造り上げることは出來ません。お互に一つ落ちついて一つ一つ置實のものを築き上げて行きませう。

仲よく働け笑つて暮せ

不愉快に働く原因を取り除いて、仲よく働き笑つて暮すといふことは、誰しも望む所で充分解り切つたことでございますが、この解り切つたことが、どうもその通りに行かないで、とかく不愉快に働く人が多うございます。

震災、妹がせつせと働いたお金を親や兄が酒代に横取りしたり、親や兄が汗水を流して働いて居るのに、脊丈延びた壯健な妹がのらくらしてゐたりしたのでは、如何に仲よく働いて笑つて暮さうと願つても、それは無理なことでございます。こゝは一つ皆一本調子になつて共に働き、そして働いた者にはそれ相當に歡安や娯樂を與へて、「働いたつてつまらない」といふ感じを一家の内に持つ人のないやうにしたいと思ひます。

こゝに申して置きたいことは、外に出て働く人だけが一家の經濟を支持するのではなく、家に留つて小さい子供のお守りをするお婆さんも、炊事洗濯などをなさるお母樣も等しく重要な役目をつとめて、ゐらるゝといふことを考へて頂きたいのでございます。それは丁度第一線に立つて敵と戰ふ戰闘員も、後方にあつて、糧食、衞生等の事を掌る後方部隊も、どちらも戰爭に必要であつて、其の功績に優劣の差のあらふ筈がない如く、出でゝ戰ふ人も留

つて家を守る人も、共に生活戦にはなくてはならない人でございます。これを穿き違へて、外に出て働く者だけが威張つて、家に留る人はいつも涙ながら、椽の下の力持をしなければならないやうになりますと、一家揃つて仲よく働くわけには參りません。

働くは人生の意義を完ふする爲であります。多くの人は働くことを、單にお金を得る爲とばかり思つてをりますが働くといふことはそんな簡單なことではございません。人間は共存共榮と申しまして、決して一人では生活の出來るものではございません。私一人が、日本の國民として財産生命を保護せられ、且衣食住には不自由もなく其の上今日の進んだ文化を樂しんで行けると云ふことは、皇室、國家の御恩は勿論、父母祖先を始め一般社會の人々から、草木禽獸の恩惠までを數へなければなりません。ですから私は全く恩愛の海に浮んで生きて居るといつても敢て過言ではないと思ひます。

こゝに各人が仲よく勤一杯働かねばならぬ理由があるのでございます。裕福であるからといつて遊んで暮す人は、實は恩盜人でありまして、共存共榮の社會には全く不要の人でございます。で身體を健康にして、男女貴賤の別なく皆働かねばなりません。これはやがて笑つて暮せる基になるのであります。

お饒舌り

雀百まで踊りを忘れぬと申します。性來快活な人は得てお饒舌りで、はては自らも困ることのあるものです。お饒舌りし過ぎた後の不快を思つて何とかして沈默を守らう「今日こそは今日こそは、」と毎日出直しては見ますが、やはり無駄になつてしまひます。

こんな事はよく實生活にあることです、昨日きでよくお饒舌りをして居つた人が急に黙り込んで仕舞つては、周圍からは何か腹立つて居るのではないかと思はれることもあります。ですからこんな時には何も自己の天眞を壓へ付けてまでも、敢て默するものでもないと思ひます。

快活な人はその快活のありのまゝであればよいのです。たゞ人の感情を害するやうな言ひ方、人に迷惑になることは努めて避けねばなりません。

一度口に出したこと、云ひ過ぎたことは、取り戻すわけには參りません。まして人の惡口、罵言を喋々するやうなことは愼しみたいものです。

しかし物を云ひ過ぎないのがよいと申しましても、たゞ默して人に可否を問はれても、何の返事もしないで、たゞヤ〳〵してゐるやうなことは避けたいものであります。自分の云ふべきこと、答ふべきことは少しも躊躇することなく、はつきりと自己の意志を明瞭に表示するのがよいのであります。殊に自己の一生の大事業を取り定められやうとする場合に、心にもない答をしたり、「どうでも宜しいです、お委せします等」といつたやうな態度を取らないやうにしたいものであります。

人の惡口を聞くとき

人の惡口を聞かされる程不快なことはありません。平靜な心をかき亂されたやうな氣がいたします。それも自分よ

り年少者でもあれば、そんなことを仰言るものではありませんとか、聞くのはいやですとかいつて、警告することも出來ますが、自分より目上の人であれば、不快を忍んで神妙に聞いてゐなければなりません、ところが表面默つて居るだけに、內心は盛んに動きます。

そして、ついうつかり先方の言葉に引き込まれたり、又は反抗して見たい心が動きまして、言はでもがなのことを言つてしまつて悔を遺すこともあります。元々人の惡口をいふ人は又、自分の言つた事を他へ漏らす口輕な人でありますから、夢にも先方の惡口に相槌を打つたり、贊成してはなりません。こんな時には努めて沈默してゐるか、或は無邪氣な方向へ話題を轉ずるかに限ります。いつかはこちらの靜かな態度に、慚ぢ入つて惡口を告げなくなるものです。かういふ風に先方を反省させて上げるといつた態度で聞いて居れば惡口を聞かされる爲めに、私の心をかき亂さることもありません。

昭和廿六年十一月一日　印刷
昭和廿六年十一月十日　六十五版
昭和廿七年二月五日　六十六版
昭和廿九年五月五日　六十八版

現代和服裁縫全書
定價三百五十圓
送料三十五圓

著者　大妻コタカ　東京都千代田區西神田二ノ二
發行者　橋口喜佐子　東京都千代田區神田三崎町一ノ一
印刷者　米倉印刷株式會社

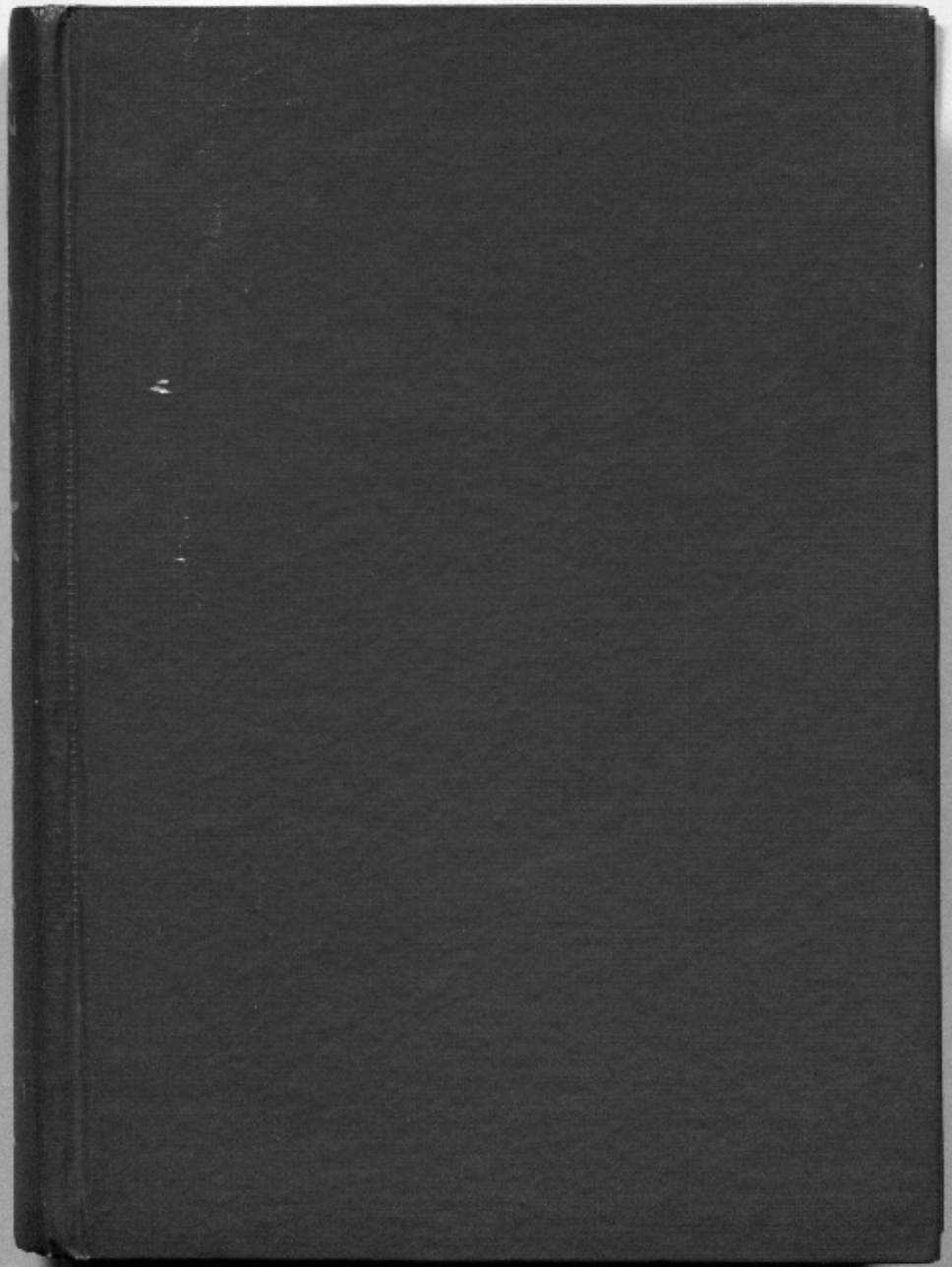
發行所　株式會社　東京書院
東京都千代田區西神田二ノ二
電話九段(33)九七一一番
振替東京二九一八九番

複製不許可

本製　所本製堂進善坂石

メートルを鯨尺に換算した表

一糎 0.8分	二糎 1.5分	三糎 2.3分	四糎 3.1分	五糎 3.9分	六糎 4.6分	七糎 5.4分	八糎 6.2分	九糎 6.9分	一〇糎 7.7分
一糎 2.5分	一二糎 9.2分	一三糎 10.0分	一四糎 10.8分	一五糎 11.5分	一六糎 12.3分	一七糎 13.1分	一八糎 13.8分	一九糎 14.6分	二〇糎 15.4分
二糎 5.9分	二二糎 16.7分	二三糎 17.4分	二四糎 18.2分	二五糎 19.0分	二六糎 19.7分	二七糎 20.5分	二八糎 21.3分	二九糎 22.0分	三〇糎 22.8分
三糎 8.6分	三二糎 23.4分	三三糎 24.2分	三四糎 24.9分	三五糎 25.7分	三六糎 26.4分	三七糎 27.2分	三八糎 28.0分	三九糎 28.7分	四〇糎 29.5分
四糎 11.3分	四二糎 30.1分	四三糎 30.9分	四四糎 31.6分	四五糎 32.4分	四六糎 33.1分	四七糎 33.9分	四八糎 34.7分	四九糎 35.4分	五〇糎 36.2分
五糎 13.1分	五二糎 36.9分	五三糎 37.6分	五四糎 38.4分	五五糎 39.1分	五六糎 39.9分	五七糎 40.6分	五八糎 41.4分	五九糎 42.1分	六〇糎 42.9分
六糎 15.8分	六二糎 43.6分	六三糎 44.4分	六四糎 45.1分	六五糎 45.9分	六六糎 46.6分	六七糎 47.4分	六八糎 48.1分	六九糎 48.9分	七〇糎 49.6分
七糎 18.5分	七二糎 50.4分	七三糎 51.1分	七四糎 51.9分	七五糎 52.6分	七六糎 53.4分	七七糎 54.1分	七八糎 54.9分	七九糎 55.6分	八〇糎 56.4分
八糎 21.2分	八二糎 57.1分	八三糎 57.9分	八四糎 58.6分	八五糎 59.4分	八六糎 60.1分	八七糎 60.9分	八八糎 61.6分	八九糎 62.4分	九〇糎 63.1分
九糎 23.8分	九二糎 63.9分	九三糎 64.6分	九四糎 65.4分	九五糎 66.1分	九六糎 66.9分	九七糎 67.6分	九八糎 68.4分	九九糎 69.1分	一〇〇糎 69.9分
一米 26.4分	二米 52.8分	三米 79.2分	四米 105.6分	五米 132.0分	六米 158.4分	七米 184.8分	八米 211.2分	九米 237.6分	一〇米 264.0分
一一米 290.4分	一二米 316.8分	一三米 343.2分	一四米 369.6分	一五米 396.0分	一六米 422.4分	一七米 448.8分	一八米 475.2分	一九米 501.6分	二〇米 528.0分

鯨尺をメートル尺に換算した表

一分 0.3糎	二分 0.5糎	三分 1.2糎	四分 1.5糎	五分 1.9糎	六分 2.3糎	七分 2.7糎	八分 3.糎	九分 3.4糎	一寸 3.8糎
一寸一分 4.2糎	一寸二分 4.5糎	一寸三分 4.9糎	一寸四分 5.3糎	一寸五分 5.7糎	一寸六分 6.1糎	一寸七分 6.4糎	一寸八分 6.8糎	一寸九分 7.2糎	二寸 7.6糎
二寸一分 8.糎	二寸二分 8.3糎	二寸三分 8.7糎	二寸四分 9.1糎	二寸五分 9.5糎	二寸六分 9.8糎	二寸七分 10.2糎	二寸八分 10.6糎	二寸九分 11.糎	三寸 11.4糎
三寸一分 11.7糎	三寸二分 12.1糎	三寸三分 12.5糎	三寸四分 12.9糎	三寸五分 13.3糎	三寸六分 13.6糎	三寸七分 14.糎	三寸八分 14.4糎	三寸九分 14.8糎	四寸 15.2糎
四寸一分 15.5糎	四寸二分 16.糎	四寸三分 15.3糎	四寸四分 16.7糎	四寸五分 17.糎	四寸六分 17.4糎	四寸七分 17.8糎	四寸八分 18.2糎	四寸九分 18.6糎	五寸 19.糎
五寸一分 19.3糎	五寸二分 19.7糎	五寸三分 20.糎	五寸四分 20.6糎	五寸五分 20.8糎	五寸六分 21.2糎	五寸七分 21.6糎	五寸八分 22.糎	五寸九分 22.3糎	六寸 22.7糎
六寸一分 23.1糎	六寸二分 23.5糎	六寸三分 23.9糎	六寸四分 24.2糎	六寸五分 24.6糎	六寸六分 25.糎	六寸七分 25.4糎	六寸八分 25.8糎	六寸九分 26.1糎	七寸 26.5糎
七寸一分 26.9糎	七寸二分 27.3糎	七寸三分 27.7糎	七寸四分 28.糎	七寸五分 28.4糎	七寸六分 28.8糎	七寸七分 29.3糎	七寸八分 29.6糎	七寸九分 29.9糎	八寸 30.3糎
八寸一分 30.7糎	八寸二分 31.糎	八寸三分 31.5糎	八寸四分 31.8糎	八寸五分 32.2糎	八寸六分 32.5糎	八寸七分 33.糎	八寸八分 33.3糎	八寸九分 33.7糎	九寸 34.糎
九寸一分 34.3糎	九寸二分 34.8糎	九寸三分 35.2糎	九寸四分 35.6糎	九寸五分 36.糎	九寸六分 36.4糎	九寸七分 36.7糎	九寸八分 37.1糎	九寸九分 37.5糎	一尺 38.糎
一尺 38.糎	二尺 76.糎	三尺 114.糎	四尺 151.糎	五尺 189.糎	六尺 227.糎	七尺 265.糎	八尺 303.糎	九尺 340.糎	一丈 379.糎
一丈一尺 417.糎	一丈二尺 455.糎	一丈三尺 515.糎	一丈四尺 530.糎	一丈五尺 568.糎	一丈六尺 606.糎	一丈七尺 644.糎	一丈八尺 682.糎	一丈九尺 719.糎	二丈 757.糎